

AppDNA 7.6

Oct 16, 2015

新機能

既知の問題

[AppDNA 7.xで解決された問題](#)

システム要件

[オプション機能の要件](#)

導入

[クイックスタートガイド](#)

[インポート、分析、およびレポート](#)

[アプリケーションへのカスタム情報の追加](#)

[XenAppまたはXenDesktop 7.xへのアップグレードの準備](#)

[XenAppまたはXenDesktop 7.xへの移行の準備](#)

インストールとセットアップ

計画

[インストールの準備](#)

[AppDNAのインストール](#)

[サーバーインストールの構成](#)

[クライアントインストールの構成](#)

[AppDNAの最適化](#)

[パフォーマンスのテスト](#)

[コマンドラインを使ったインストール](#)

アップグレード

[データベースのアップグレード](#)

[AppDNAツールのアップグレード](#)

アプリケーションのインポート

[直接インポート](#)

[Webアプリケーション](#)

アプリケーションの分析

レポートの決定

標準AppDNAレポート

ライセンスオプション

オペレーティングシステム

アプリケーションの依存関係

キュープロセッサ

レポートビュー

機能

RAGアイコンについて

アプリケーションレポート

Effort Calculator

Forward Path

組織レポート

エクスポート

レポート設定

レポートとライセンスの概要

アプリケーションの問題の解決

Webアプリケーションの修復

デジタル署名

アプリケーションの管理

アプリケーション一覧

アプリケーションの属性

グループ

ジャーナル

検索と参照

インポートの準備

アプリケーションの検出

Active DirectoryとConfiguration Managerのデータの統合

構成

ソリューションの構成

Install Capture

オペレーティングシステムのイメージ

モジュール、レポート、およびアルゴリズム :

カスタムレポート

Forward Path

外部データ

ライセンス

検査

アクティブ化

適用

移動

管理

ユーザー

役割

タスクロック

サイト

データベース

Webサイトの web.config ファイルを開きます。

フィンガープリント

AppDNA環境構成ウィザード

移行

Windows デスクトップおよびサーバーアプリケーションの移行

XenDesktop 7.0 への移行

Windows アプリケーションの App-V 5.0 への移行

Citrix ストリーム配信アプリケーションの App-V 5.0 への移行

インストールルーチンのないアプリケーションの移行

SDK

SDK を使用する開発

SDK で使用できるデータ

既知の問題

トラブルシューティング

システムチェックの問題

Active DirectoryとConfiguration Managerの問題

Install Captureの問題

用語集

AppDNA 7.6の新機能

Oct 16, 2015

注：AppDNAのドキュメント全体にわたって、「XenAppおよびXenDesktop 7」への言及はすべての7.xリリースに当てはまります。

AppDNA 7.6.5には以下の拡張機能が含まれます。

- 新しいWindows 10レポート。このレポートにより、Windows XP以降のアプリケーションがWindows 10で実行されるかどうかを理解することができます。
- Microsoft Edgeのサポート
- 一部のデスクトップおよびサーバーアルゴリズムの重大度レベルが低くなったため、アプリケーションポートフォリオで正常になる割合が少し増えました。

AppDNA 7.6には、以下の新機能と拡張機能が含まれます。

- **ビルド評価ソリューション** — 新しいビルド評価ソリューションにより、アプリケーションが同じオペレーティングシステムファミリの追加ビルドで機能するかどうかを確認できます。参照ビルドがWindows 8であり、そこで機能するアプリケーションがほかのWindows 8ビルド（コールセンターの従業員用にカスタマイズされたものなど）でも機能するかどうかを確認する必要があります。このソリューションでは、参照ビルドに対して標準のAppDNA分析が実行され、各ターゲットビルドの分析と比較されて、概要レポート、比較レポート、および修復レポートが生成されます。アプリケーションをテストした後で、AppDNAで参照ビルドおよびターゲットビルドでの潜在的な問題が無視されるように、ビルド評価ソリューション構成ウィザードでそれらのアプリケーションにフラグを設定することができます。

詳しくは、「[ビルドの評価](#)」を参照してください。

- **相互運用性ソリューション** — 以前は標準レポートに含まれていた相互運用性分析が、新しい相互運用性ソリューションから提供されるようになりました。この変更により、標準モジュールの分析とレポート作成の時間が短縮されました。また、分析するアプリケーションのグループを選択できるようになりました。すべてのアプリケーションを分析する必要はなくなりました。従来と同様に、相互運用性分析を使用することで、アップグレード、修復、またはアンインストールで発生する可能性がある競合について、Windowsインストーラーパッケージ (.MSI) を評価できます。

詳しくは、「[相互運用性の分析](#)」を参照してください。

- **アプリケーション依存関係マップ** — AppDNA 7.6レポートアルゴリズムにより、あるアプリケーションで必要となるアプリケーション、アプリケーションのフレームワーク、およびファイルが存在するかどうか分析されます。標準のアプリケーション修復レポートに、不足しているすべての依存関係が示されるようになりました。また、アプリケーションの問題レポートには、すべての依存アプリケーションのRAGがまとめられます。

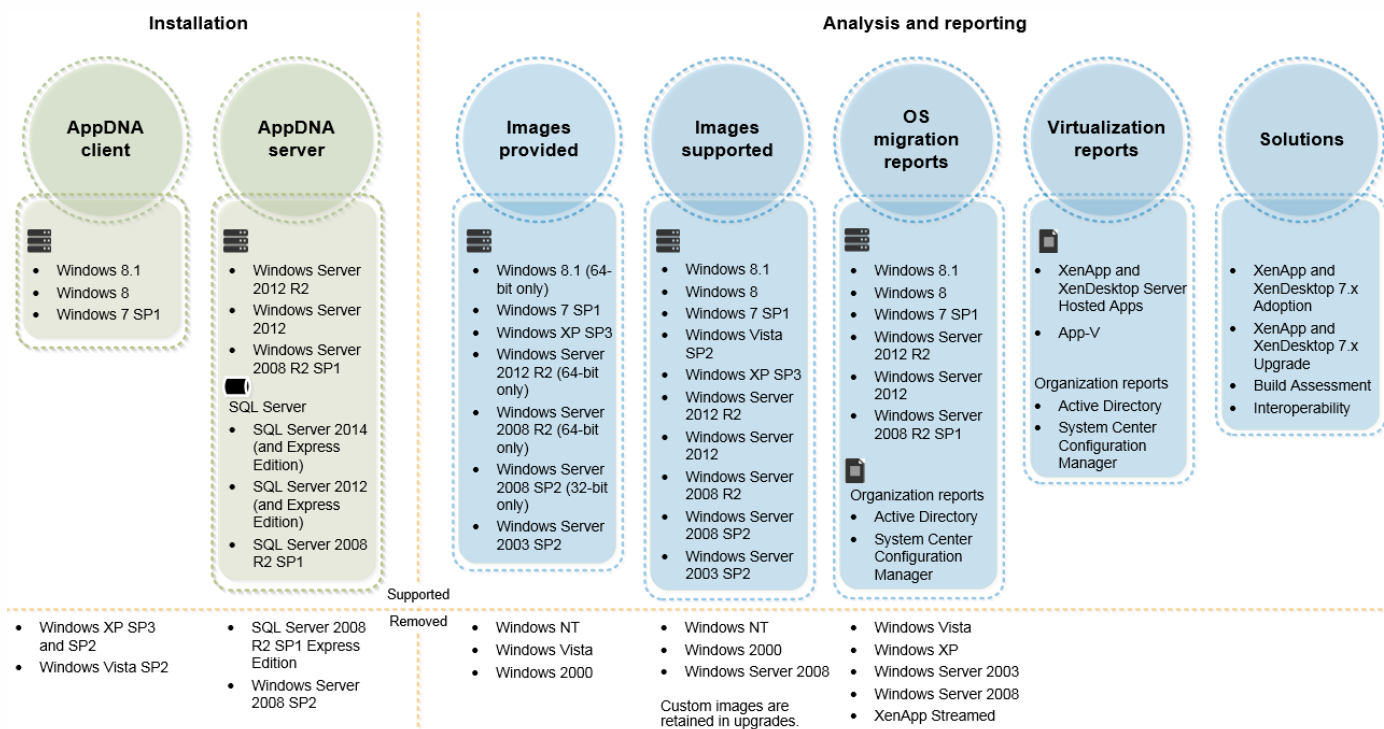
財務アプリケーションのスイートで、App1が、Microsoft Foundation Classesを必要とするApp2を呼び出すとします。AppDNAによってそれらのアプリケーションの依存関係が分析され、手動で依存関係を作成することも、不足しているファイルまたはAPI呼び出しと、それらを提供するランタイムとを照合することで得られた提案に基づいて依存関係を作成することもできるようになります。組み込みのアプリケーション依存関係マップには、Visual Studio C++やVisual Basicランタイムライブラリなどの一般的なライブラリとフレームワークが含まれます。

詳しくは、「[アプリケーションの依存関係](#)」を参照してください。

- **GPOアルゴリズム** — デスクトップおよびサーバー分析と新しいビルド評価ソリューションには、有効なグループポリシーオブジェクト（GPO）の結果として生じるアプリケーションの問題をテストするGPOアルゴリズムが含まれます。アプリケーションを別のオペレーティングシステムビルドに移動した後で、アプリケーションに障害が発生する主な原因の1つは、GPOとの互換性がないことです。AppDNAでは、16ビットアプリケーションへのアクセスを防止するポリシー、コントロールパネルアプレットの実行を防止するポリシー、インターネット通信を制限するポリシー、Windowsインストー

ラーを制限または無効にするポリシー、およびIISのインストールを防止するポリシーを含む、23個のGPOに関するチェックが実行されます。

- **64-Bitレポートの統合** — 64-Bitレポートは、64ビット版オペレーティングシステムをインポートするか、64ビットアプリケーションの対象を32ビット版オペレーティングシステムにすると、デスクトップとサーバーのレポートに統合されるようになりました。XenAppとXenDesktop 7.xのアップグレードソリューションおよび導入ソリューションでは、オペレーティングシステムが64ビットかどうか自動的に検出されます。
- **WorxWeb互換性分析** — Citrix XenMobileに付属のモバイルアプリケーションであるWorxWebとの互換性について、Webアプリケーションをテストできるようになりました。WorxWebレポートでは、Internet Explorerで機能するWebアプリケーションがAndroidおよびiOSのWebブラウザ上のWorxWebでも機能するかどうかを確認できます。詳しくは、「[Webアプリケーションのインポート](#)」を参照してください。
- **.NETアプリケーションに対するレポート作成機能の強化** — Windowsの32ビットアプリケーションに対してと同様に、ドライバーを.NETに書き込むことができない場合など、.NETアプリケーションの互換性の問題が検出され、レポートされるようになりました。
- **追加サポート**
 - 最新の7.xリリースのサポートが含まれるように、XenAppとXenDesktop 7.xのアップグレードソリューションおよび導入ソリューションが拡張されました。
 - AppDNAで、Expressバージョンを含むMicrosoft SQL Server 2014がサポートされるようになりました。
- **操作の効率化** — 一部の古くほとんど使用されないテクノロジーのサポートが削除または縮小されました。次の図は、AppDNA 7.6のサポートマトリックスの概要と、サポートが終了したバージョンを示しています。

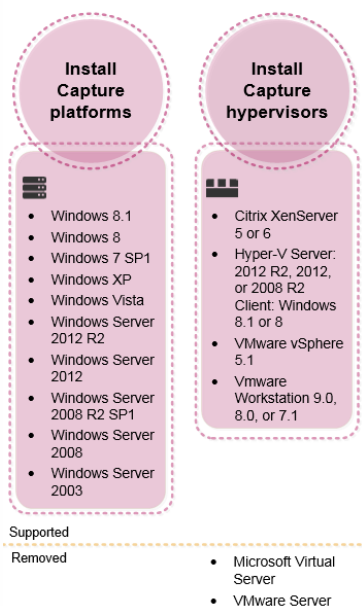


注：Windows VistaレポートとWindows Server 2008レポートは、カスタムイメージをインポートする場合にのみ実行されます。

詳しくは、「[AppDNA7.6のシステム要件](#)」を参照してください。

次の図に示すように、Install Captureのサポート要件が変更されました。

Install Capture configuration



次のようにAppDNAも簡素化されました。

- 1つのAppDNAインストーラーが、試用環境と実稼働環境の両方に対応します。ライセンスの種類に適切に対応して、インストールとデータベース作成が処理されます。
- AppDNAにXenApp 6 Profilerが含まれなくなりました。Snapshot実行プロファイルの機能がSnapshot Extendedプロファイルに組み込まれたため、Snapshot実行プロファイルも削除されました。
- Estate Viewレポートは試用インストールでのみ表示されるようになりました。完全インストールでは、By Errorレポートに、Estate Viewと同じようにデータが表示されます。エラー別レポートには、より詳細な情報も含まれます。
- グループを使用してアプリケーションを整理できるようになりました。ファミリーおよびスイートは提供されなくなりました。

重要：アップグレードを行うと既存のファミリーおよびスイートが削除され、アプリケーションの一覧が元の形にフラット化されます。ファミリーおよびスイートの削除によって問題が発生する場合は、AppDNAをアップグレードする前にCitrixサポートにお問い合わせください。

- AppDNAには、AdministratorsとUsersの2つの管理上の役割があります。ImporterとEditorの役割は削除されました。
- 製品版ライセンスでは、アプリケーションのインポート後すぐに分析が開始されます。試用版と評価版のライセンスでは、引き続き手動で分析を開始する必要があります。[Auto Analyze] チェックボックスの設定を変更するには、[Import and Analyze Settings] に移動します。
- 多数のアルゴリズムグループを含むレポートが、デフォルトの状態ですらに読みやすくなりました。レポート設定の [Show counts in PDF exports] チェックボックスが、デフォルトではオフになりました。
- デフォルトの移行元オペレーティングシステム (OS) イメージ —アプリケーションの移行の分析に使用されるデフォルトの移行元OSイメージが変更されました。Windows XPおよびWindows Server 2003の場合、デフォルトのイメージは32ビットです。Windows 8、Windows 7、Windows Server 2012、およびWindows Server 2008の場合、デフォルトのイメージは64ビットです。デフォルトの移行元OSイメージを変更するには、[Edit]、[Settings]、[OS Image Configuration] の順に選択します。
- **解決された問題**

展開を計画するときは、[システム要件](#)と[既知の問題](#)を慎重に確認してください。

既知の問題

Oct 16, 2015

Known issues in AppDNA 7.6.5

- Windows 7 x32 and Windows XP x32 snapshot images are not updated on upgrade from AppDNA 7.6 to AppDNA 7.6.5. Workaround: import the OS snapshot image as a custom image. [#26308]
- For some Web Apps, URL imports are being incorrectly marked as successfully imported after an error in web capture import. Workaround: reimport the Web App or use the Standalone Web Capture tool. [#26306]
- Re-editing a Xen solution after upgrade results in an error if the target platform was not opened for edit. Workaround: re-create solution. [#26311]
- Filtering out frameworks on the application list doesn't work. Workaround: restart the AppDNA client. [#26319]
- Custom OS images are not retaining their OS relationship dependencies after upgrade. Workaround: reassign OS relationship dependencies. [#26318]
- The Standalone Directed Spider fails to launch on Vista and XP. Workaround: use the AppDNA 7.6 Web Spider on XP and Vista to capture web pages in Internet Explorer 6 and 7. [#26314]
- When server side queuing is enabled, OS images with xml larger than 1 GB fail with this error: 'Too many retries waiting to get a lock to load the file details'. Workaround: turn off server side queuing and set SQL memory allotment. [#26295]
- Remote database installation occasionally fails. A retry will be successful. [#26267]

Known issues in AppDNA 7.6

- AppDNA 7.6.5で、リモートデータベースインストールが失敗することがあります。再試行は成功します。[#26267]
- .NET DNAのコレクションが原因で、OSイメージのスナップショットに予想以上の時間がかかることがあります。スナップショットの収集中はコマンドウィンドウが開いたままになり、スナップショットが完了したときに閉じます。[#26269]
- 最新のスナップショット機能でキャプチャしたサイズが1 GBより大きなOSスナップショットをロードすると、キュープロセッサ使用時メモリ不足例外が発生して失敗することがあります。この現象が発生した場合は、キュープロセッサを終了して再試行します。[#26298]
- カスタムレポートとそのアルゴリズムは、AppDNA 7.6へのアップグレード時に削除されますが、アップグレード後も [Custom Reports Manager] 画面には引き続き表示されます。この問題を解決するには、一覧からレポートを手動で削除します。[#15847]
- AppDNA 7.6へのアップグレードでは、カスタムの役割を持つユーザーにソリューションの権限は割り当てられません。これらのユーザーのログオン時に「There were errors retrieving solution templates (ソリューションテンプレートの取得時にエラーが発生しました)」というメッセージが表示されます。[#17553]
この問題を解決するには、管理者としてログオンし、[Administration]、[Roles]の順に選択して、カスタムの役割を選択し、次の権限を選択します。
 - SolutionTemplates: Administer
 - SolutionTemplates: Read
 - Solutions: Administer
 - Solutions: Read
- Windows 8およびWindows Server 2012のアプリケーションの一覧および概要には、未解析のアプリケーションは表示されません。[#13611]
- ビルド評価ソリューションに使用していたものと同じファミリーのオペレーティングシステムをインポートした後は、アプ

リケーションが「stale」状態となり、ビルド評価レポートに表示されません。この問題を解決するには、オペレーティングシステムが上書きされた後で、新しいオペレーティングシステムに対してビルド評価ソリューションを構成します。
[#17160]

- カスタムレポートの名前にスペースが含まれている場合、Forward Pathレポートから修復レポートへのリンクが機能しません。この問題を解決するには、カスタムレポートの名前を変更します。[#15869]

ローカル言語のサポートに関する制限事項

注：このトピックでは、文字という用語を、音節文字や表意文字を含む広い意味での表記システムとして使用しています。ローカル言語の使用に関する既知の問題の概要を次に示します。

- AppDNAサーバーをインストールする場合は（「完全」インストール）、パスに英字以外の文字が含まれない場所にサーバーファイルをインストールします。そうしないと、ライセンスのアクティブ化に失敗し、エラー「The Citrix license server is not running and could not be started」が表示される場合があります。
- AppDNAデータベース名には英字以外の文字が含まれないようにする必要があります。
- AppDNAをローカル言語版のWindowsで実行している場合、一部の画面、ウィンドウ、ダイアログボックスのテキストが完全に表示されない場合があります。たとえば、テキストが重なり合ったり、省略されたりする可能性があります。具体的な問題は、言語と使用できるフォントによって異なります。
- AppDNAでは、Webアプリケーションキャプチャに東アジア言語（日本語や簡体字中国語など）が含まれるURLは使用できません。これを解決するには、ユニコードURLを使用してURLを指定します。
- AppDNAを東アジア言語版のWindowsで実行すると、ログファイルやメッセージで（分析中にアルゴリズムが失敗した理由の説明などの）一部の文字が正しく表示されなかったり、読めなかったりする場合があります。
- AppDNAを東アジア言語版のWindowsで実行すると、Effort CalculatorデータをWordにエクスポートしたときに一部の文字が読み取れなくなります。これは、簡体字中国語のSimSun-ExtBなど、適切なフォントを選択することで修正できます。
- AppDNAを東アジア言語版のWindowsで実行すると、PDFにエクスポートしたときに一部の文字が正しく表示されないか、まったく表示されない場合があります。このほとんどの問題は、Arial Unicode MS RegularフォントをAppDNAサーバーマシンにインストールすると修正できます。このフォントはMicrosoft Office 2003以降に付属しています。
- [Search] および [Browse] 画面を使用してファイルを検索すると、東アジア言語の文字が含まれるアプリケーションが無視されます。
- アルゴリズムの新しいアクションまたはアクションの詳細を作成する場合は、名前に英字以外の文字を含めないでください。
- このリリースでは、オートクリッカーを英語のインストーラーでのみテストしています。ほかの言語のインストーラーで正常な動作は期待できません。

AppDNA 7.xで解決された問題

Oct 16, 2015

AppDNA 7.6.5

AppDNA 7.6.3との比較

AppDNA 7.6.5には、AppDNA 7、7.5、7.6、7.6.3に含まれていたすべての修正に加えて、以下の新しい修正が含まれていません。

- Blowfish 6.1.63からアップグレードするときに、レポートに古いRAGアイコンが表示されます。[#13514]
- 修復レポートのオペレーティングシステムイメージの詳細情報が、オペレーティングシステムの入力および出力について切り捨てられます。[#13894]
- 一部のシナリオのダッシュボードの円グラフで、カスタムレポートの分析詳細情報が更新されません。[#16519]
- [スタート]メニューにセルフプロビジョニングクライアントインストーラーのショートカットが作成されません。[#17022]
- 「Export is not done.Report is NOT exported as PDF (エクスポートは行われません。レポートはPDFとしてエクスポートされません)」というメッセージがInteropソリューションレポートに表示されます。[#17363]
- AppDNAにログオンし直さないと、XenAppのアップグレードおよび導入ソリューションを使用できません。[#17364]
- システムフレームワークで検索機能を使用できません。[#17548]
- 単一マシンのWebサーバーインストールで、リモートデータベースインストールが失敗します。[#17608]
- パスワードを変更し自動ログオンを設定すると、AppDNAにログオンできません。[#17689]
- Overview Summaryレポートをロード中に何かを編集しようとすると、設定画面に未処理エラーが表示されます。[#17690]
- ユーザーの保存済みの資格情報をクリアすると、編集設定画面で [Save] ボタンを使用できません。[#17691]
- 外部データの変更を適用または保存するときに「SQL Error: Incorrect syntax near }' (SQLエラー: }'の近くに不正な構文エラー)」というメッセージが表示されます。[#17807]

AppDNA 7.6.3

AppDNA 7.6との比較

AppDNA 7.6.3には、AppDNA 7、7.5、7.6に含まれていたすべての修正に加えて、以下の新しい修正が含まれています。

- XenAppおよびXenDesktop 7.xのアップグレードまたは導入用のソリューションウィザードで、すべてのソースプラットフォームを削除できてしまいます。[#13675]
- 問題レポートの円グラフに、上位のRAGステータスを持つアプリケーションに依存するアプリケーションのRAGステータスが誤って表示されます (両方のアプリケーションにジャーナルエントリがある場合)。[#17540]
- AppDNA 7.6へのアップグレードでは、カスタムの役割を持つユーザーにソリューションの権限は割り当てられません。これらのユーザーのログオン時に「There were errors retrieving solution templates (ソリューションテンプレートの取得時にエラーが発生しました)」というメッセージが表示されます。[#17553]
- インポートしたWebアプリケーションの修復アクションレポートが表示されません。[#17583]
- Active Directoryからインポートしたユーザーアカウントの統合ログインが失敗し、「Wrong username or password (ユーザー名またはパスワードが間違っています)」というエラーが表示されます。[#17609]
- Windows Server 2008 R2 (64ビット) ソースプラットフォームでAppDNA SDKを使用してXenDesktopアップグレードソ

リューションを構成すると、エラーとなり、OSがサポートされていないことが示されます。[#17672]

- [Load AD & ConfigMgr Data] 画面にスクロールバーが表示されず、どの組織単位も選択できません。[#17789]
- サーバー側のキューを有効にしているときに、ダッシュボードで [View Queued Events] をクリックすると、AppDNAがクラッシュします。[#17841]
- 前のバージョンのAppDNAでサーバー側のキューを有効にしていると、アップグレードに失敗します。[#18965]

AppDNA 7.6

AppDNA 7.5との比較

AppDNA 7.6には、AppDNA 7、7.5に含まれていたすべての修正に加えて、以下の新しい修正が含まれています。

- ソリューションプラットフォーム名としてSQLのキーワードを使用すると、ソリューションレポートの代わりにエラーが表示されます。[#14235]
- カスタムレポート名としてC#のキーワードを使用すると、レポートの構成中にエラーが発生します。[#15313]

AppDNA 7.5

AppDNA 7との比較

AppDNA 7.5には、AppDNA 7に含まれていたすべての修正に加えて、以下の新しい修正が含まれています。

- Citrix AppDNA Web Application Capture.msiがAppDNAのToolsフォルダーにありませんでした。
- AppDNA 6.3から7.0へのアップグレード中に、SQLスクリプトの実行エラーが発生しました。
- プラットフォームとカスタムレポートの名前がSQLの予約語と同じである場合に、エラーが発生しました。
- AppDNA 7にアップグレードした後は、管理者ではないユーザーにOverview Summaryレポートが表示されなくなりました。
- AppTitude 5.0からアップグレードしたシステムで、データベースにMiddlewareという名前の古いモジュールのレコードが含まれるために、分析エラーが発生しました。

AppDNA 7

AppDNA 6.3との比較

- グループの結果のグループ名がレポートに表示されませんでした。グループ名として「Not grouped」と表示されました。[#8179]
- ネストされたグループのレポートを [Manage Groups] 画面から開くと、ネストされたグループのグループ名がレポートに表示されませんでした。[#10689]
- Install Captureで複数のアプリケーションの製品名、製造元、およびバージョンが検出できない、またはインストールできない場合は、AppDNAでそれらのアプリケーションを区別できず、同じアプリケーションであるかのように制御されました。[#11186]
- エクスポートしたレポートの形式がMHTである場合、[Action Detail] の下のリンクが機能しませんでした。[#11188]
- 直接インポートを使用してApp-VのSFTファイルをインポートすると、「MsiViewExecute returned error 1627」というエ

ラーが発生しました。[#11587]

- サーバー側のキューが有効な場合にタスクをキャンセルするには、ユーザー自身のアカウントに必要なアクセス許可があっても、ユーザーはAppDNAユーザーアカウントの管理者としてログオンする必要がありました。[#11592]
- RVx64_002およびDRVx64_002アルゴリズムで、ドライバーファイルに埋め込まれた署名が検出されませんでした。[#11704]
- Install Captureの設定でデスクトップの高さと幅を変更しても、vSphereまたはHyper-Vの仮想マシンに対するリモートデスクトップ接続では、変更したサイズが適用されませんでした。[#11730]
- 直接インポートを使用したAPPVファイルのインポートが失敗しました。[#11800]
- **[Module Management]** 画面で無効にしたレポートが、ダッシュボードに引き続き表示されました。[#11825]
- AppDNA指向スパイダーを手動モードで実行すると、iFrame要素がキャプチャされませんでした。[#12347]
- 直接インポートを使用してibmwebsphere.msiをインポートすると、処理が完了しませんでした。[#13326]
- Windows 7でVMware Workstation 9またはWorkstation 7.4と共にInstall Captureを使用すると、VMwareコンソールが自動的に開きませんでした。[#13363]
- 一部のCLSIDレジストリキーが存在する場合は、アプリケーションDWGTrueView2014_fra_64bitのAfter snapshot段階でInstall Captureが失敗しました。[#13483]

システム要件

Oct 16, 2015

このトピックでは、AppDNAサーバーおよびクライアントでサポートされるシステムおよび前提条件について説明します。AppDNAをインストールする前に、「[インストールの準備](#)」もお読みください。

各トピックへのクイックリンク：

- [ハードウェア要件](#)
- [サポートされるオペレーティングシステム](#)
- [AppDNAサーバーの要件](#)
- [AppDNAクライアントの要件](#)
- [Citrixライセンスサーバーの要件](#)
- [レポートの要件](#)
- [オプション機能の要件](#)

ハードウェア要件

完全インストールの場合（サーバーおよびクライアント）

小規模な検証用の展開環境の場合：通常、4GB以上のRAMが搭載されたWindowsラップトップを使用できます。

実稼働環境の場合：

- 12GB以上のRAMが搭載されたサーバークラスの物理または仮想マシン
多数のアプリケーションを分析する場合、相互運用性ソリューションで追加のメモリが必要になる場合があります。追加のメモリ量はアプリケーション数とアプリケーションDNAのサイズに応じて異なります。テストでは、アプリケーション数が2,500のポートフォリオの場合、相互運用性分析で最適なパフォーマンスを実現するには、12GBのRAMが必要でした。
- 200個までのアプリケーションをサポートするには、次の要件を満たす必要があります。
 - デュアルコア2GHzプロセッサ
 - 最低80GBの空きディスクスペースを持つハードドライブ
- 200個を超えるアプリケーションをサポートするには、次の要件を満たす必要があります。
 - 2個のデュアルコア2GHzプロセッサ
 - 150GB以上の空きディスクスペース
 - データベース（.mdfファイル）は、オペレーティングシステムとは別の高性能な（10K/15K）物理ハードディスクにインストールする必要があります。データベースログファイル（.ldf）は別の物理ハードディスクに移動する必要があります。

クライアントのみのインストールの場合

- Pentium 4以降のプロセッサ
- 1GBが使用可能な2GB以上のメモリ（通常の条件で実行する場合）
Install CaptureにVMware® Workstationを使用する場合、2GBが使用可能な3GB以上のメモリ
- 5GB以上の空きディスクスペース
Install Captureを使用する場合、1つのハードドライブに80GB以上の空き領域

サポートされるオペレーティングシステム

AppDNAサーバーは、次のオペレーティングシステムプラットフォーム（64ビットのみ）でサポートされます。

- Microsoft Windows Server 2012 R2
- Microsoft Windows Server 2012
- Microsoft Windows Server 2008 R2 SP1

AppDNAクライアントは、次のデスクトッププラットフォーム（32ビットおよび64ビット）でサポートされます。

- Microsoft Windows 8.1
- Microsoft Windows 8
- Microsoft Windows 7 SP1

AppDNAサーバーの要件

重要：AppDNAサーバーは専用マシンにインストールする必要があります。

- **Microsoft .NET Framework** - 次のバージョンが必要です。

重要：より新しいバージョンがあっても、.NET Framework 3.5 SP1が必要です。新しいバージョンの.NET Frameworkには、AppDNAに必要な機能の一部が含まれていません。同じマシンに複数のバージョンの.NET Frameworkを共存させることができます。詳しくは、[MSDN](#)を参照してください。

- .NET Framework 4.5または4.0
- .NET Framework 3.5 SP1

- **Microsoft SQL Server** - 次のバージョンがサポートされます。

- SQL Server 2014
- SQL Server 2014 Express Edition（データベースサイズの上限は10GBです）
- SQL Server 2012
- SQL Server 2012 Express Edition（データベースサイズの上限は10GBです）
- SQL Server 2008 R2 SP1

AppDNAではSQL Server AlwaysOnはサポートされません。

- **Microsoft インターネット インフォメーション サービス (IIS)**

AppDNAでは使用するバージョンのWindowsと互換性のあるバージョンのIISがサポートされます。Windowsのインストール時に、デフォルトではIISは有効になっていません。

AppDNAサーバーをインストールするマシンの名前は、IISのドメイン名の要件に従う必要があります。a~z、A~Zの英字、0~9の数字、またはハイフン (-) のみで構成する必要があります。名前の先頭または末尾にハイフンを使用することはできず、アンダースコア (_) を含めることはできません。

AppDNAには、次のIISおよびASP.NET機能が必要です。

Web管理ツール

- IIS管理互換
 - IISメタベースおよびIIS 7構成との互換性
- IIS管理コンソール
- IIS管理スクリプトおよびツール
- IIS管理サービス

World Wide Webサービス

- アプリケーション開発機能
 - .NET拡張性
 - ASP

- ASP .NET (Windows Server 2012以外)
- ASP .NET 4.5または4.0 (Windows Server 2012)
- ASP .NET 3.5 (Windows Server 2012)
- ISAPI拡張
- ISAPIフィルター
- サーバー側インクルード
- HTTP基本機能
 - 既定のドキュメント
 - ディレクトリの参照
 - HTTPエラー
 - HTTPリダイレクト
 - 静的なコンテンツ
- 状態と診断
 - HTTPログ
 - 要求の監視
- パフォーマンス機能
 - 動的なコンテンツの圧縮
 - 静的なコンテンツの圧縮
- セキュリティ
 - 基本認証
 - 要求のフィルタリング
 - Windows認証
- **Internet Explorer 11、10、9、8、7、または 6、Microsoft Edge (AppDNA 7.6.5以降)**
 サーバマシンでレポートおよびヘルプシステムを表示するには、JavaScriptと暗号化されていないフォームを有効にします。

注：サポートされるバージョンのWindows Serverで、Internet Explorerのセキュリティ強化の構成はデフォルトで有効になっています。レポートおよびヘルプシステムの表示に必要なJavaScriptがセキュリティ強化の構成により無効になるため、それらのシステムで**セキュリティ強化の構成を無効にする**か、AppDNAクライアントをリモートマシンで使用して、レポートおよびヘルプを表示します。

AppDNAクライアントの要件

- **Microsoft .NET Framework** - 次のバージョンが必要です。
 - .NET Framework 4.5または4.0
 - .NET Framework 3.5 SP1
- **Internet Explorer 11、10、9、8、7、または 6、Microsoft Edge (AppDNA 7.6.5以降)**
 レポートおよびヘルプシステムを表示するには、JavaScriptと暗号化されていないフォームを有効にします。

Citrixライセンスサーバーの要件

XenAppまたはXenDesktopのPlatinumライセンスのみ：サポートされるCitrixライセンスサーバーの最小バージョンは11.10です。

レポートの要件

- レポートを生成するにはMicrosoft Officeが必要です。
- Wordドキュメントとしてエクスポートされたレポートを表示するにはMicrosoft Word 2007以降が必要です。
- PDFドキュメントとしてエクスポートされたレポートを表示するにはAdobe Readerが必要です。

オプション機能の要件

Nov 13, 2015

AppDNAの以下のオプション機能では、追加のソフトウェア要件が適用されます。

- [AppDNA Webクライアント](#)
- [Install Capture](#)
- [組織レポート](#)
- [アプリケーションの検出](#)

AppDNA Webクライアント

AppDNA WebクライアントにはInternet Explorer 6以降とJavaScriptが必要で、Internet Explorerで暗号化されていないフォームが有効になっている必要があります。

Install Capture

Install Captureを使用して、MSI、SFT、またはApp-Vファイルがないデスクトップアプリケーションをインポートします。Install Captureで仮想マシンにアプリケーションをインストールし、MSIファイルを作成します。このMSIファイルをAppDNAソフトウェアにインポートします。このためには、次のデスクトップ仮想化技術のいずれかに基づく仮想マシンが必要で

- Citrix XenServer 6または5
- Microsoft Hyper-V® Server 2012 R2/2012、Hyper-V Server 2008 R2、またはWindows 8.1/8 Hyper-Vクライアント
- VMware vSphere® 5.5または5.1
- VMware® Workstation™ 9.0、8.0、または7.1

キャプチャ処理によって、AppDNAソフトウェアへのインポートを目的とするMSIファイルの代わりに（またはそれと共に）App-Vシーケンスを作成できます。これには、AppDNAソフトウェアに付属していないApp-V Sequencerという追加のソフトウェアが必要です。詳しくは、「[Install Capture](#)」を参照してください。

Install Captureのサポートされるプラットフォームは次のとおりです。

- Windows 8.1
- Windows 8
- Windows 7 SP1
- Windows XP
- Windows Vista
- Windows Server 2012 R2
- Windows Server 2012
- Windows Server 2008 R2 SP1
- Windows Server 2008
- Windows Server 2003

組織レポート

組織レポートを使用して、Microsoft Active DirectoryおよびSystem Center Configuration Managerにより管理されるアプリケーションを把握して、これらのアプリケーションを新しいプラットフォームに展開できる状態にあるかどうかなどを判断します。このオプション機能を使用するには、Active DirectoryおよびConfiguration Managerデータへのアクセスが必要です。

Active Directoryの要件

AppDNAソフトウェアでは、次のバージョンのWindows ServerにインストールされたActive Directoryのデータを統合できません。

- Windows Server 2012 R2
- Windows Server 2012
- Windows Server 2008 R2
- Windows Server 2008
- Windows Server 2008 SP2
- Windows Server 2003

Active Directoryからデータを抽出するには、次の条件を満たすユーザーアカウントが必要です。

- Active Directoryドメインの「Authenticated Users」グループまたはさらに高い権限のグループに属している。
- 少なくとも次の権限を持っている。
 - 内容の一覧表示
 - すべてのプロパティの読み取り
 - アクセス許可の読み取り

Active Directoryの管理グループおよびアカウントについて詳しくは、[Securing Active Directory Administrative Groups and Accounts](#)を参照してください。

Configuration Managerの要件

AppDNAソフトウェアでは、次のバージョンのMicrosoft System Center Configuration Managerのデータを統合できます。

- System Center 2012 Configuration Manager R2
- System Center 2012 Configuration Manager SP1
- System Center 2012 Configuration Manager
- System Center Configuration Manager 2007
- System Center Configuration Manager 2003

Configuration Manager用のAppDNAコネクタでは、ポート135を使用するWMIインターフェイスが使用されます。

Configuration Managerからデータを抽出するには、次の条件を満たすユーザーアカウントが必要です。

- 次の権限を持つConfiguration Managerセキュリティロールが割り当てられている。
 - アプリケーション = 読み取り
 - コレクション = 読み取り
 - パッケージ = 読み取り
 - サイト = 読み取り

Configuration Managerにより、これらの権限が組み込みのリモートツールオペレーターのセキュリティロールに追加されたり、そのロールのコピーが作成されて権限が割り当てられたりする場合があります。

- 「アカウントの有効化」と「リモートの有効化」のWMI権限を持っている。
これらの権限を構成する方法については、「[WMIユーザーを承認してアクセス許可を設定する](#)」を参照してください。

アプリケーションの検出

検出機能を使用するには、Lakeside Software® SysTrack®データベースへの接続が必要です。詳しくは、「[アプリケーションの検出](#)」を参照してください。

導入

Oct 16, 2015

AppDNA 7.6にアップグレードする既存のAppDNAユーザー

この「はじめに」の各トピックは、この最新のバージョンにアップグレードする、経験のあるAppDNAユーザーを対象としています。

- [クイックスタートガイド](#)
- [AppDNA 7.6の新機能](#)
- [アプリケーションへのカスタム情報の追加](#)
- [XenAppまたはXenDesktop 7.xへのアップグレードの準備](#)
- [XenAppまたはXenDesktop 7.xへの移行の準備](#)

新しいAppDNAユーザー

この「はじめに」の各トピックは、新しいAppDNAユーザーを対象としています。

- [クイックスタートガイド](#)
- [インポート、分析、およびレポート](#)
- [XenAppまたはXenDesktop 7.xへのアップグレードの準備](#)
- [XenAppまたはXenDesktop 7.xへの移行の準備](#)

クイックスタートガイド

Oct 16, 2015

アプリケーションの移行ソフトウェアであるCitrix AppDNAを使用すると、エンタープライズにおけるアプリケーションの抽出、自動化、モデル化、および管理を自信を持って行い、よりすばやくアプリケーションを移行し、簡単にアプリケーションを仮想化し、アプリケーション管理を効率化することができます。

このクイックスタートガイドでは、初めてのインストールとアップグレードについて簡単に説明します。

ステップ1 - 前提条件となるコンポーネントのインストール

AppDNAをインストールする前に、前提条件となるコンポーネントを展開します。特にほかの指定がなければ、以下の項目が必要です。

- Microsoft SQL Server (32ビット、64ビット、またはExpress)
インストール済みでない場合は、無償で[Microsoft SQL Server Expressをダウンロードしてインストール](#)できます。

AppDNA7.6.5ではSQL Server Expressはサポートされません。

- Microsoft .NET Framework
AppDNAには以下のバージョンが必要です。
 - [.NET Framework 4.5のダウンロード](#)または[.NET Framework 4.0のダウンロード](#)
 - [.NET Framework 3.5 SP1のダウンロード](#)
- IIS (AppDNAサーバーでのみ必要)
IISの要件とインストールについて詳しくは、[「AppDNA7.6のシステム要件」](#)または「[Installing IIS 8.5 on Windows Server 2012 R2](#)」を参照してください。
- XenServer、Hyper-V、VMware Workstation、またはVMware vSphere (Install Captureにのみ必要)

ステップ2 - AppDNAのダウンロードとインストール

インストーラーCitrix AppDNA.msiをダウンロードして、仮想マシンで実行します。

すべての種類のライセンスで、インストーラーによって、初回インストールおよびアップグレードインストールが処理されます。試用版のライセンスの場合、Microsoft SQL Server Expressと連動するデータベースがインストーラーによって作成されます。

ステップ3 - AppDNAの構成

インストールが完了すると、AppDNA環境構成ウィザードが開きます。

1. データベースの詳細を入力するページで、SQL Serverの名前、データベース名、および管理者のユーザー名とパスワードを指定します。
2. サービスアカウントの構成方法を選択するページで、ほとんどの場合に適切なオプションは[Configure a local service account for me] です。
3. ライセンス情報を入力するページで：AppDNAが既にある場合は、ライセンスはこのリリースでも引き続き動作します。
4. AppDNA環境構成ウィザードが正常終了したら、Windowsの [スタート] 画面/メニューから [AppDNA] を選択してログオンします。
管理者アカウントのデフォルトのユーザー名はadministrator、パスワードはapps3cur3です。

5. 試用版のライセンスを使用している場合は、OSイメージのロードが完了したことを確認してから続行してください。インポートが完了すると、AppDNAに結果が表示されます。

これでインストールが完了しました。

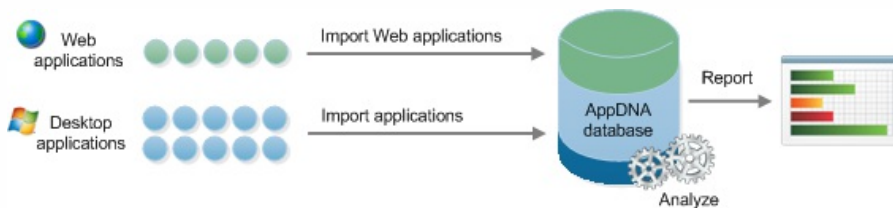
6. アプリケーションのインポートを開始するには：
 1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] を選択して [Applications] をクリックします。
 2. アプリケーションをインポートしたら [Analyze] をクリックして結果のレポートを表示します。
インポートと分析の段階でかかる時間は、選択するアプリケーションの数とコンピューターの速度に応じて、数分から数時間までさまざまです。

インポート、分析、およびレポート

Oct 16, 2015

AppDNAは、さまざまなプラットフォームとのアプリケーションの互換性を自動的に分析します。サポートされる各プラットフォームは、個別のレポートによって表されます。レポートには、特定の対象環境におけるアプリケーションの適合性およびパフォーマンスを検証する一連のアルゴリズムが含まれます。

AppDNAプロセスの概要



インポート - 分析 - レポートと、AppDNAのアプローチは単純です。

インポート - AppDNAにとってアプリケーションは原材料です。したがって、始める前にインポートする必要があります。このとき、各アプリケーションのファイル、レジストリエントリ、およびAPIの使用状況が調査されてアプリケーションの「DNA」が明らかにされ、これらの情報は、SQL Serverデータベースにロードされます。内部で開発されたものか、パッケージソフトウェア開発企業が供給するものかにかかわらず、あらゆる種類のデスクトップアプリケーションとWebアプリケーションをインポートできます。

詳しくは、「[アプリケーションのインポート](#)」を参照してください。

分析 - 分析プロセスを開始するときには、アプリケーションのテストの対象となるプラットフォームに対応するレポートを選択します。AppDNAは、アプリケーションポートフォリオについて持っているすべての情報を組み合わせ、アプリケーションDNAに対してレポートアルゴリズムを実行し、レポートデータを保存します。

詳しくは、「[アプリケーションの分析](#)」を参照してください。

レポート - インポートと分析のプロセスが完了したら、レポート結果を表示できます。AppDNAは、一連のレポートビューに分析結果を表示します。レポートビューは、アプリケーションポートフォリオの計画、修正、およびテストに必要な情報を提供します。AppDNAは、各レポートについて同じレポートビューのセットを提供します。これには次のレポートビューが含まれます。

- EstateViewには、対象の技術に対するアプリケーションポートフォリオ全体の状態についての統合された概要が表示されます。アプリケーション固有の情報は提供されません。このビューは個々のアプリケーションライセンスに依存しないため、AppDNAを評価する場合に特に役立ちます。Effort CalculatorはEstateViewに基づいており、同じくAppDNAを評価する場合に役立ちます。このレポートビューを使用すると、アプリケーションのポートフォリオを新しいプラットフォームに移行するために必要な時間、費用、および作業を見積もることができます。
- Application IssuesビューとApplication Actionsビューには、個々のアプリケーションの状態に関するハイレベルな管理の概要が表示されます。
- Remediation IssuesビューとRemediation Actionsビューには、個々のアプリケーションの修復方法に関する修復チーム向けの詳細情報が表示されます。

詳しくは、「[レポートビュー](#)」を参照してください。

アプリケーションへのカスタム情報の追加

Oct 16, 2015

AppDNAのアプリケーション属性には、アプリケーションに関する組織特有の情報を記録できます。アプリケーション属性には、資産ID、コストセンター、アプリケーションの状態、保有者のような情報を含められます。

次の属性が既に作成されています。

- **AppID** - は資産IDのようなアプリケーションの一意識別子です。AppIDはすべてのレポートに表示されるように構成されています。
AppIDは多くの組織でトラックされますが、社内の購買システムなどのアプリケーションに保持される、資産タグ番号などのトラック番号を割り当てることができます。社内システムからAppIDのデータを入手するのはAppDNA管理者の担当です。スクリプトを作成して手動で行うことも、Citrixのコンサルティングチームと協力して社内システムにAppDNAを統合することもできます。管理者がAppIDに値を割り当てない場合は、アプリケーションをAppDNAにインポートした順序に基づいて、1から始まる値が自動的に割り当てられます。
- **Analyzed Date** - アプリケーションを分析した日付は、修復レポートに表示されるように構成されています。

アプリケーションにカスタム情報を追加するには、次の作業を行います。

- **アプリケーション属性を数の制限なく作成する** -たとえば、アプリケーションの状態をトラックするため、「アプリケーションの状態」という名前の属性を作成し、そのリスト値として「インポート済み」、「分析済み」、「テスト中」、「不合格」、「合格」、および「稼働中」を定義します。
属性を作成するとき、AppDNA管理コンソールで次の作業を行います。
 - データの種類をテキストフィールド、数値、リスト、はい/いいえの選択、日付、またはRAGインジケータの中から選択します。
 - 属性のレポート方法を定義します。各レポートで属性が異なる値を持つかどうか、また属性を含めるレポートを指定します。
注：画面の解像度によっては、OverviewレポートおよびAssessmentレポートに一定数のアプリケーション属性を表示できる可能性があります。
- **アプリケーション属性の値を設定する** -アプリケーション情報をほかのITシステムで管理している場合は、CSVファイルをインポートするかAppDNA SDKを使用してアプリケーション属性値を設定できます。AppDNA管理コンソールで直接編集することで値を設定することもできます。
- **アプリケーション属性情報を表示する** -アプリケーション属性を含むレポートには、各属性の列が含まれます。

アプリケーション属性を作成するには

アプリケーション属性を作成するには、AppDNA管理コンソールを使用する必要があります。

注：管理者の役割を持つユーザーはアプリケーション属性の定義を管理（追加、削除、編集）できます。すべてのユーザーは属性値を変更できます。

1. AppDNAのメニューで、[Manage]、[Attributes]の順に選択します。
[Application attributes]画面が開きます。
2. [New]をクリックします。
3. [Attribute definition] ページで次の作業を行います。
 1. 属性名を [Name] ボックスに指定します。
これはレポート上で属性を識別するためのラベルです。

2. 属性値がレポートによって異なるのか、グローバルにレポートされる必要があるのかを指定します。

ここでの選択により、属性を含むレポートが決定されます。[Per-report attribute] チェックボックスをオンにすると、アプリケーションにグローバルに当てはまるデータのみが含まれる、[Application List] 画面または [Overview Summary] レポートに属性が表示されなくなります。

- さまざまなレポートで属性に対して異なる値をレポートするには、[Per-report attribute] チェックボックスをオンにします。
たとえば、「テスト済み」という属性を作成してアプリケーションをテストしたかどうかを示すとします。「テスト済み」の値がさまざまなオペレーティングシステムで異なる可能性がある場合は、このチェックボックスをオンにします。
- さまざまなレポートで属性に対して同じ値をレポートするには、[Per-report attribute] チェックボックスをオフにします。
たとえば、コストセンターの属性を作成するとします。組織内では、オペレーティングシステムにかかわらず、特定のアプリケーションには同じコストセンターが適用されます。この場合は、このチェックボックスをオフにします。

属性を作成した後で [Per-report attribute] チェックボックスの状態を変更することはできません。

3. [Data type] ボックスの一覧からデータの種類を選択します。

データの種類により、属性値が特定の入力形式に制限されます。

[List] を選択すると、[Select or create list] ページが開きます。

- 定義済みのリストを使用するには、[Use existing list] を選択してメニューからリスト名を選択します。
- リストを作成するには、[Create new list] を選択し、[New list name] ボックスにリスト名を指定し、[Current items in list] ボックスにリスト項目を入力します。

リスト項目を並べ替えたり変更したりするには、このセクションの後の
— 「一覧を編集するには」
を参照してください。

属性を作成した後で [Data type] 設定を変更することはできません。

4. [Next] をクリックします。

4. [Display options] ページで、属性を表示する場所を指定します。

- **Screen: Application List** - [Per-report attribute] チェックボックスがオンである場合を除いて、デフォルトで、AppIDを含め、すべてのレポートで同じ値の属性が [Application List] 画面に表示されます。
- **Report: Overview Summary** - [Per-report attribute] チェックボックスがオンである場合を除いて、デフォルトで、AppIDを含め、すべてのレポートで同じ値の属性が Overview Summary レポートに表示されます。
- **Reports: Application Issues and Application Actions** - これらのレポートに属性を含めるには、このチェックボックスをオンにします。
- **Reports: Remediation Issues and Remediation Actions** - [Per-report attribute] チェックボックスがオンであるかどうかにかかわらず、デフォルトで、AppIDを含め、すべてのレポートで同じ値の属性がこれらのアプリケーションレポートに表示されます。

レポートに表示する属性を決定するときは、追加列に必要なスペースを考慮してください。

5. [Finish] をクリックします。

属性が選択した場所に表示されます。

6. 変更が終わったら [Save] をクリックします。

属性値をインポートするには

注：管理者の役割を持つユーザーはアプリケーション属性の値をインポートできます。

複数のアプリケーションのアプリケーション属性の値を1回で設定するには、コンマ区切り値 (.csv) ファイルから値をインポートするか、AppDNA SDKを使用します。

「[一覧からのインポート](#)」に記載されているようにファイルからアプリケーションをインポートする場合は、同時にまたはその後で、属性をインポートできます。属性値をインポートする前に、アプリケーション属性を作成する必要があります。属性を作成すると、自動的にテンプレートインポートファイルに追加されます。

属性を追加、編集、または削除した後は、必ずテンプレートインポートファイルを再インポートしてください。

AppDNA管理コンソールでほかの方法を使用してアプリケーションをインポートする場合は、アプリケーションがAppDNA内で使用できるようになった後で属性をインポートできます。

属性値を変更するには

注：管理者またはユーザーの役割を持つユーザーは、アプリケーション属性の値を表示または変更できます。

1. [Application List] 画面：

1. [Application List] 画面で、変更するアプリケーションのチェックボックスをオンにして [Properties] をクリックします。
プロパティページが開きます。

2. 属性値を設定するには、属性のチェックボックスをオンにしてその値を入力し、[OK] をクリックします。

2. Application Remediationレポートの閲覧時：

1. [Application Remediation report] 画面で、[Properties] をクリックします。
プロパティページが開きます。

2. 属性値を設定するには、属性のチェックボックスをオンにしてその値を入力し、[OK] をクリックします。

アプリケーション属性の名前を変更する、またはアプリケーション属性を削除するには

注：管理者の役割を持つユーザーは、アプリケーション属性の名前を変更したりアプリケーション属性を削除したりできません。

1. AppDNAのメニューで、[Manage]、[Application Attributes] の順に選択します。

[Application Attributes Settings] 画面が開きます。

2. 属性を選択して [Edit] または [Delete] をクリックします。

3. 変更が終わったら [Save] をクリックします。

XenAppまたはXenDesktop 7.xへのアップグレードの準備

Oct 16, 2015

XenAppまたはXenDesktop 7.xにアップグレードした後でデスクトップとアプリケーションをどのように配信するか計画するとき、XenAppおよびXenDesktop 7.xのアップグレードソリューションを使用して必要な情報を入手します。このソリューションにより以下のような情報が提供されます。

- アプリケーションで使用できる配信方法。サーバーホステッドまたはデスクトップホステッドです。
サーバーホステッドは物理または仮想マシンのサーバーオペレーティングシステム上に存在する、アプリケーションおよびデスクトップを指します。このような展開では、ユーザーはStoreFront、ユーザーデバイスの [スタート] メニュー、管理者が提供するURLからアプリケーションにアクセスします。アプリケーションはユーザーデバイス上に仮想的に配信され、シームレスかつ高品位に表示されます。

デスクトップホステッドは仮想マシンのデスクトップオペレーティングシステム上に存在する、アプリケーションおよびデスクトップを指します。このような展開では、古いオペレーティングシステムおよびアーキテクチャで動作するアプリケーションをサポートしながら、ユーザーにはシームレスかつ高品位にアプリケーションを提供します。

- 移行先の展開環境でXenAppまたはXenDesktop 7.xと共に動作させるために、修復が必要なアプリケーション。
- 移行先の展開環境でXenAppまたはXenDesktop 7.xと共に動作しないアプリケーション。

注：XenAppまたはXenDesktop 7.xへのアップグレードについて詳しくは、eDocsの[XenAppおよびXenDesktop 7.xのドキュメント](#)の

— 「アップグレード」

のトピックを参照してください。

XenAppおよびXenDesktop 7.xのアップグレードソリューションを構成するには

開始する前に、次の情報を収集します。

- 現在のXenAppまたはXenDesktop展開環境について
 - アップグレードするXenAppまたはXenDesktopのバージョン
 - インストール先のオペレーティングシステムファミリー
 - App-Vを使用しているかどうか
- 配信するアプリケーション
- 移行後のXenAppまたはXenDesktop展開環境について
 - App-Vを使用するかどうか
XenDesktop 7.xでは、ユーザーデバイスへのアプリケーションのストリーム配信に、App-Vを推奨技術としてサポートします。XenAppのアプリケーションストリーム配信はサポートされません。
 - 使用するデスクトップオペレーティングシステム（仮想デスクトップを配信する場合）
AppDNAではWindowsデスクトップオペレーティングシステムのデフォルトイメージが提供されます。 [オペレーティングシステムのイメージ](#) の手順に従って、カスタムイメージをインポートできます。

1. AppDNAのサイドバーで、 [Solutions] をクリックし、 [Add solution] をクリックします。
2. [Solutions Templates] ページで [XenApp and XenDesktop 7.x Upgrade] を選択し、 [Next] をクリックします。ソリューションウィザードが開きます。
3. [Solution name] ページで、 [Solution name] ボックスと [Description] ボックスに、ソリューションのレポートで使用される名前と説明を入力して、ソリューションの識別情報を指定します。

4. 次の手順を実行して、現在の環境を指定します。

1. [Platform name] ページで、[Platform name] ボックスにプラットフォーム名を入力して現在のXenDesktop展開環境のプラットフォームを指定します。

「Windows 2008 64-bit」など、この名前にプラットフォームの特徴を含めることにより、後で使用可能なプラットフォーム一覧内でこのプラットフォームを見つけやすくなります。

2. オプションで [Description] ボックスにプラットフォームの説明を入力します。

3. プラットフォームのパラメーターを選択します。

5. [Applications] ページで、アップグレードに含めるアプリケーションを選択します。

6. 移行先のプラットフォームを確認または編集するには、[XenDesktop 7.x Upgrade target] をクリックして [Edit] をクリックします。

重要：ベストプラクティスとして、デフォルトの移行先である「Windows Server 2012, 64-bit」を使用することをお勧めします。必要がない限り、App-Vの選択以外は移行先の設定を変更しないでください。

[Desktop deployment] ページで、必要に応じて設定を変更します。

- デフォルトでは、選択されたオペレーティングシステムでサーバーホスティングに大きな問題が検出された場合は、デスクトップホスティングが使用されます。デスクトップホスティングを禁止する場合は、[Host applications on desktop] チェックボックスをオフにします。
- 特定のデスクトップオペレーティングシステムを分析から除外するには、そのチェックボックスをオフにします。
- デスクトップオペレーティングシステムの別のイメージを選択するには、メニューから選択します。AppDNAで提供されるデフォルトイメージと、「**オペレーティングシステムのイメージ**」に記載されているように管理者がインポートしたカスタムオペレーティングシステムイメージが、メニューに一覧表示されます。

7. ソリューションを実行するには、次の手順に従います。

1. 現在および移行先のプラットフォームを定義したら、[Build] をクリックします。

2. [Progress] ページで [Analyze] をクリックします。分析が完了したら、表示するレポートを選択して [Finish] をクリックします。

レポートを表示するには、AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックして、ソリューションの名前をクリックします。レポートはいつでも表示できます。

XenDesktopアップグレードレポートを解釈するには

XenDesktopアップグレードレポートには、選択したアプリケーションが以下の分類に分けて一覧表示されます。

- **Applications that can run...** - これらのアプリケーションを移行先プラットフォームのXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作させるために、特別なアクションは不要です。これらのアプリケーションの展開方法はサーバーホステッドです。
- **Applications that require remediation to run...** - これらのアプリケーションは、修復すれば移行先のプラットフォーム上のXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作します。詳細情報を表示するには、レポート内の [Remediation] リンクをクリックします。
- **Applications that must be deployed using desktop hosting (pooled or dedicated)...** - これらのアプリケーションは、プールされたまたは専用のデスクトップを使用して展開すれば、移行先のプラットフォーム上のXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作します。
- **Applications that cannot be deployed with XenDesktop 7.x** - これらのアプリケーションは、再開発しなければサーバーまたはデスクトップオペレーティングシステムマシンを使用して展開できません。詳細情報を表示するには、[Reason] リンクをクリックします。

サーバーまたはデスクトップオペレーティングシステムマシンについて詳しくは、eDocsのXenAppおよびXenDesktop 7.xのドキュメントの

— 「デスクトップおよびアプリケーションのホスト計画」

を参照してください。

既存のプラットフォームをソリューションに追加するには

1. AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックします。
2. [Solutions] ペインで、ソリューションのカテゴリを選択し、ソリューション名の向かい側にある[Edit] をクリックします。
3. [Existing platforms] の上の+アイコンをクリックしてウィザードを完了します。
レポートに今追加したプラットフォームが反映されます。

異なるプラットフォームのレポートを作成するには

1. AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックします。
2. [Solutions] ペインで、ソリューションのカテゴリを選択し、ソリューション名の向かい側にある[Edit] をクリックします。
3. [Next] をクリックし、プラットフォームをクリックし、[Build] をクリックします。

XenAppまたはXenDesktop 7.xへの移行の準備

Oct 16, 2015

ほかのシステムからXenAppまたはXenDesktop環境に移行した後でデスクトップとアプリケーションをどのように配信するか計画するとき、XenAppおよびXenDesktop 7.xの導入ソリューションを使用して必要な情報を入手します。このソリューションにより以下のような情報が提供されます。

- アプリケーションで使用できる配信方法。サーバーホステッドまたはデスクトップホステッドです。
サーバーホステッドは物理または仮想マシンのサーバーオペレーティングシステム上に存在する、アプリケーションおよびデスクトップを指します。このような展開では、ユーザーはStoreFront、ユーザーデバイスの [スタート] メニュー、管理者が提供するURLからアプリケーションにアクセスします。アプリケーションはユーザーデバイス上に仮想的に配信され、シームレスかつ高品位に表示されます。

デスクトップホステッドは仮想マシンのデスクトップオペレーティングシステム上に存在する、アプリケーションおよびデスクトップを指します。このような展開では、古いオペレーティングシステムおよびアーキテクチャで動作するアプリケーションをサポートしながら、ユーザーにはシームレスかつ高品位にアプリケーションを提供します。

- 移行先の展開環境でXenAppまたはXenDesktop 7.xと共に動作させるために、修復が必要なアプリケーション。
- 移行先の展開環境でXenAppまたはXenDesktop 7.xと共に動作しないアプリケーション。

XenAppおよびXenDesktop 7.xの導入ソリューションを構成するには

開始する前に、次の情報を収集します。

- 現在の環境について
 - オペレーティングシステムファミリー
 - App-Vを使用しているかどうか
- 配信するアプリケーション
- 移行後のXenAppまたはXenDesktop展開環境について
 - App-Vを使用するかどうか
XenAppおよびXenDesktop 7.xでは、ユーザーデバイスへのアプリケーションのストリーム配信に、App-Vを推奨技術としてサポートします。XenAppのアプリケーションストリーム配信はサポートされません。
 - 使用するデスクトップオペレーティングシステム（仮想デスクトップを配信する場合）
AppDNAではWindowsデスクトップオペレーティングシステムのデフォルトイメージが提供されます。 [オペレーティングシステムのイメージ](#) の手順に従って、カスタムイメージをインポートできます。

1. AppDNAのサイドバーで、 [Solutions] をクリックし、 [Add solution] をクリックします。
2. [Solutions Templates] ページで [XenApp and XenDesktop 7.x Adoption] を選択し、 [Next] をクリックします。
ソリューションウィザードが開きます。
3. [Solution name] ページで、 [Solution name] ボックスと [Description] ボックスに、ソリューションのレポートで使用される名前と説明を入力して、ソリューションの識別情報を指定します。
4. 次の手順を実行して、現在の環境を指定します。
 1. [Platform name] ページで、 [Platform name] ボックスにプラットフォーム名を入力して現在の環境のプラットフォームを指定します。
「Windows 8.1 32-bit」など、この名前にプラットフォームの特徴を含めることにより、後で使用可能なプラットフォーム一覧内でこのプラットフォームを見つけやすくなります。
 2. オプションで [Description] ボックスにプラットフォームの説明を入力します。

3. プラットフォームのパラメーターを選択します。
5. [Applications] ページで、XenDesktopへの移行後に配信するアプリケーションを選択します。
既存のプラットフォームが [Solutions platforms] ページに表示されます。
6. 移行先のプラットフォームを確認または編集するには、[XenDesktop 7.x Adoption target] をクリックして [Edit] をクリックします。
[Desktop adoption] ページで、必要に応じて設定を変更します。
 - デフォルトでは、選択されたオペレーティングシステムでサーバーホスティングに大きな問題が検出された場合は、デスクトップホスティングが使用されます。デスクトップホスティングを禁止する場合は、[Host applications on desktop] チェックボックスをオフにします。
 - 特定のデスクトップオペレーティングシステムを分析から除外するには、そのチェックボックスをオフにします。
 - デスクトップオペレーティングシステムの別のイメージを選択するには、メニューから選択します。
AppDNAで提供されるデフォルトイメージと、「オペレーティングシステムのイメージ」に記載されているように管理者がインポートしたカスタムオペレーティングシステムイメージが、メニューに一覧表示されます。
7. ソリューションを実行するには、次の手順に従います。
 1. 現在および移行先のプラットフォームを定義したら、[Build] をクリックします。
 2. [Progress] ページで [Analyze] をクリックします。分析が完了したら、表示するレポートを選択して [Finish] をクリックします。
レポートを表示するには、AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックして、ソリューションの名前をクリックします。レポートはいつでも表示できます。

XenDesktop導入レポートを解釈するには

XenDesktop導入レポートには、選択したアプリケーションが以下の分類に分けて一覧表示されます。

- **Applications that can run...** - これらのアプリケーションを移行先プラットフォームのXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作させるために、特別なアクションは不要です。これらのアプリケーションの展開方法はサーバーホステッドです。
- **Applications that require remediation to run...** - これらのアプリケーションは、修復すれば移行先のプラットフォーム上のXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作します。詳細情報を表示するには、レポート内の [Remediation] リンクをクリックします。
- **Applications that must be deployed using desktop hosting (pooled or dedicated)...** - これらのアプリケーションは、プールされたまたは専用のデスクトップを使用して展開すれば、移行先のプラットフォーム上のXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作します。
- **Applications that cannot be deployed with XenDesktop 7.x** - これらのアプリケーションは、再開発しなければサーバーまたはデスクトップオペレーティングシステムマシンを使用して展開できません。詳細情報を表示するには、[Reason] リンクをクリックします。

既存のプラットフォームをソリューションに追加するには

1. AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックします。
2. [Solutions] ペインで、ソリューションのカテゴリを選択し、ソリューション名の向かい側にある [Edit] をクリックします。
3. [Existing platforms] の上の **+** アイコンをクリックしてウィザードを完了します。
レポートに今追加したプラットフォームが反映されます。

異なるプラットフォームのレポートを作成するには

1. AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックします。
2. [Solutions] ペインで、ソリューションのカテゴリを選択し、ソリューション名の向かい側にある [Edit] をクリックし

ます。

3. [Next] をクリックし、プラットフォームをクリックし、[Build] をクリックします。

インストール

Oct 16, 2015

新しいAppDNA環境を作成するには

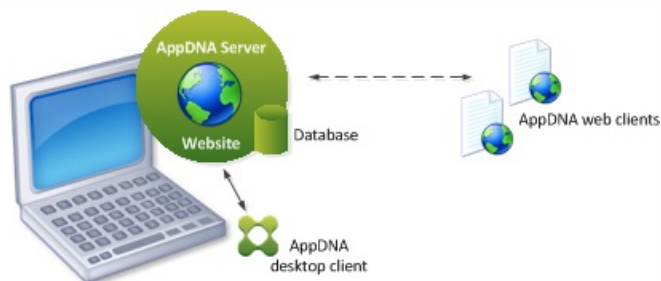
1. 展開の種類（概念検証または実稼働）に従って、サーバーのニーズを計画し、データに対して必要なSQL Serverのアーキテクチャを決定します。
2. インストールに備えて環境を準備します。
3. AppDNAをインストールしてから、サーバーのインストールとクライアントのインストールを構成します。
4. AppDNAを可能な限り効率的に実行するには、SQL ServerやIISなどの関連するコンポーネントを最適化します。
5. 構成のパフォーマンスをテストします。

重要：AppDNAを以前のリリースからアップグレードする場合は、「[AppDNA 7.6へのアップグレード](#)」を参照してください。

計画

Oct 16, 2015

AppDNAのサーバー、デスクトップクライアント、およびデータベースは、同じマシンにインストールできます。小規模な検証用の展開環境では、1台のマシンで十分です。

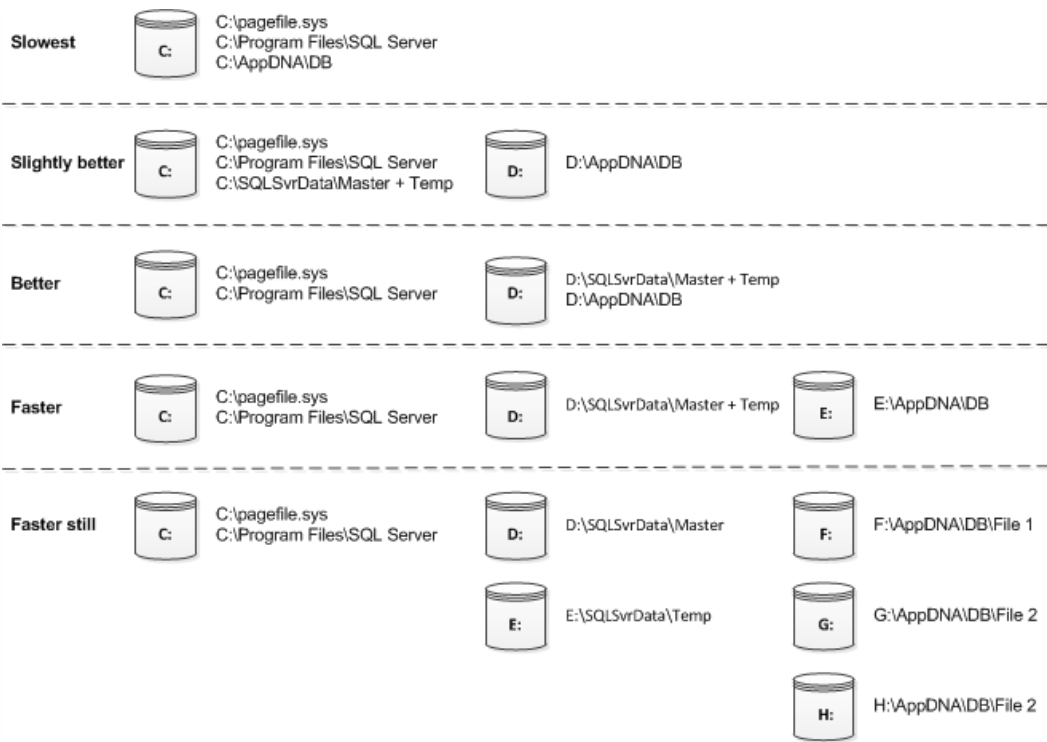


複数のユーザーが関与する実稼働環境では、ユーザーデスクトップにもAppDNAデスクトップクライアントをインストールする必要があります。



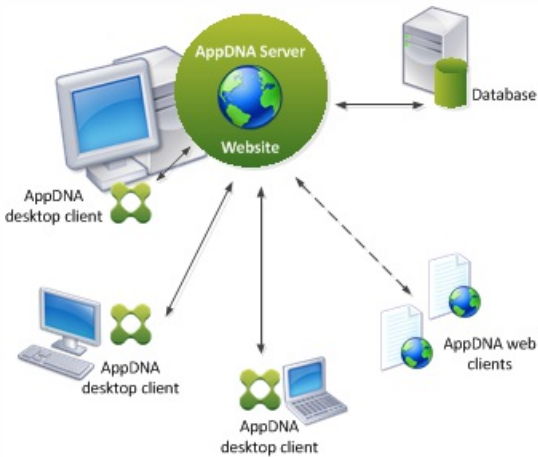
AppDNAデータベース

AppDNAではMicrosoft SQL Serverを使用して、アプリケーションとオペレーティングシステムイメージのDNAを格納し操作します。アプリケーションポートフォリオのサイズが大きくなるにつれて、SQL Serverに対する要求も高くなります。データを処理するSQL Serverのアーキテクチャを検討します。次の図は、SQL ServerのさまざまなアーキテクチャとAppDNAのパフォーマンスの対応関係を示しています。



SQL Serverの最適化については、「[SQL Serverの最適化](#)」を参照してください。

オプションで、AppDNAサーバーを実行するマシンではなく、専用のSQL ServerマシンにAppDNAデータベースをインストールできます。SQL Serverマシンがローカルネットワーク外にある場合は、通信がAppDNAのパフォーマンスに影響を与えないように、マシン間に優れた接続性が必要です。



仮想マシンへのAppDNAのインストール

評価版以外では、仮想マシンにAppDNAをインストールできます。ただし、VMware Workstationと共にInstall Captureを使用する場合は、仮想マシンのホストマシンにAppDNAをインストールする必要があります。AppDNA自体が仮想マシンにインストールされている場合は、これは不可能です。仮想マシンにAppDNAをインストールする必要がある場合は、Install Captureの代わりにAppDNAのセルフプロビジョニング機能を使用して、この制限を回避できます。

完全なりモート制御を提供する仮想化技術（Citrix XenServer、VMware vSphere、Microsoft Hyper-Vなど）と共にInstall Captureを使用する場合は、仮想マシンにAppDNAをインストールできます。

インストールの準備

Oct 16, 2015

AppDNAをインストールする前に、以下の準備作業を行ってください。

<p>説明</p>	<p>•</p>									
	<ul style="list-style-type: none"> 「既知の問題」を参照して、インストールに関する既知の問題について確認してください。 									
	<p>各コンポーネントをどこにインストールするか決定し、次にマシンおよびオペレーティングシステムを準備します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 展開シナリオについては、技術的な概要を参照してください。 AppDNAとそのコンポーネントでサポートされるオペレーティングシステムのバージョンについては、AppDNA 7.6のシステム要件を確認してください。 各オペレーティングシステムを最新の状態にアップデートしておく必要があります。 									
	<p>次のように、AppDNAデータベースのインストールを準備します。</p> <ul style="list-style-type: none"> SQL Serverインスタンスおよびデータベースの照合順序がLatin1_General_CI_ASに構成されていることを確認します。 AppDNAデータベースのインストールに使用するユーザーアカウントを決定します。アカウントにはsysadminサーバーロールが必要です。 データベースへの接続用にAppDNA Webサイトで使用するユーザーアカウントを決定します。このアカウントは、bulkadminサーバーロールとdb_ownerデータベースロールを持っている必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> 実稼働環境の場合は、パスワードが失効しない汎用のサービスアカウントを使用することをお勧めします。そうしない場合は、パスワードが変更されるたびにAppDNA Webサイトを更新する必要があります。検証用の展開環境では、一般的にログイン済みのユーザーアカウントをそのまま使用できます。 Windows認証を使用する場合、このユーザーアカウントはAppDNAサーバーを実行しているマシンに対する管理者特権を持っている必要があります。管理者特権を持つことが不可能な場合、AppDNA Webサイトのフォルダーの権限を緩和し、ユーザーアカウントに読み取り/書き込み権限を付与します。デフォルトでは、AppDNA Webサイトのフォルダーは、C:\Program Files[(x86)]\Citrix\AppDNA\Serverです。 データベースファイルの場所を決定します。AppDNA環境構成ウィザードでは、SQL Serverに設定されているデフォルトのデータベースファイルの場所に新しいデータベースを作成します。別の場所にデータベースファイルを格納するには、SQL Serverでデフォルトの場所を変更してからウィザードを実行します。詳しくは、「データファイルとログファイルの既定の場所の表示または変更」を参照してください。 									
	<p>以下のポートが開放されていることを確認します。</p>									
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>ポート</th> <th>プロトコル</th> <th>接続先</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>53</td> <td>TCP/UDP</td> <td>DNS</td> </tr> <tr> <td>80/443</td> <td>HTTP/HTTPS</td> <td>AppDNAサーバーまたはクライアントからAppDNA Webサイト</td> </tr> </tbody> </table>	ポート	プロトコル	接続先	53	TCP/UDP	DNS	80/443	HTTP/HTTPS	AppDNAサーバーまたはクライアントからAppDNA Webサイト
ポート	プロトコル	接続先								
53	TCP/UDP	DNS								
80/443	HTTP/HTTPS	AppDNAサーバーまたはクライアントからAppDNA Webサイト								

説明	ポート	プロトコル	接続先
135		DCOM	オプションのコンポーネント (Active Directory、System Center Configuration Manager、Hyper-Vホスト、または仮想マシン)
445		TCP/UDP	ネットワーク共有
1433、1746、1748、1750		TCP	SQL Server
7279、27000		TCP	Citrixライセンスサーバー
8079		TCP	AppDNAライセンスサーバー (構成可能)
8199		HTTP	IIS (構成可能)
54593		TCP	Remote Adminエージェント (構成可能)

ヒント : Citrix製品で使用されるポートについては、[CTX101810](#)を参照してください。

グループポリシーが次の要件を満たしていることを確認します。

- 暗号化されていないフォームデータおよびアクティブスクリプティングがグループポリシーで制限されていない。
- ソフトウェアのインストールおよびIISの構成がグループポリシーで制限されていない。
- AppDNA WebサイトのURLを信頼済みサイトに設定している。
- クライアントとサーバーURLの間のHTTP (S) トラフィックに認証プロキシを設定していない (AppDNAクライアントのみ)。プロキシの迂回/例外設定を使用してこの要件を満たすことができます。

AppDNAのインストール

Oct 16, 2015

すべての種類のライセンスで、インストーラーCitrix AppDNA.msiによって、初回インストールおよびアップグレードインストールが処理されます。試用版のライセンスの場合、Microsoft SQL Server Expressと連動するデータベースがインストーラーによって作成されます。

重要：アップグレードする場合、AppDNAをアンインストールせずにインストールしてください。アップグレードについては、「[AppDNA 7.6へのアップグレード](#)」を参照してください。

1. AppDNAインストーラーを実行し、画面に表示される指示に従って処理を進めます。
2. [Installation Type] ページで、次のいずれかを選択します。
 - **Client only** – AppDNAクライアントのみがインストールされます。これにより、ほかのマシンに配置されているAppDNA Webサイトとデータベースに接続するAppDNAアプリケーションがインストールされます（データベースはAppDNA Webサイトと別のマシンに配置されることがあります）。インストールの最後にAppDNA環境構成ウィザードを使用して、AppDNA Webサイトとデータベースへのクライアント接続を構成します。
 - **Complete (server + client)** – AppDNAサーバーとクライアントが同じマシンにインストールされます。インストールの最後にAppDNA環境構成ウィザードを使用して、SQL Serverデータベースの作成またはアップグレードとAppDNA Webサイトの構成を行います。データベースは、ローカルマシンまたはネットワーク上の別のマシンにインストールして構成できます。
3. まだインストールしていない前提条件のコンポーネントのインストールを促すメッセージが表示されたら、[Cancel] をクリックしてインストーラーを終了します。「[AppDNA 7.6のシステム要件](#)」に一覧表示されている前提条件のコンポーネントをインストールして、AppDNAインストーラーを再起動し、続行します。
4. インストールが完了すると、[Installation Wizard Completed] ページが開きます。
 - 今すぐAppDNAを構成する場合は、[Finish] をクリックします。AppDNA環境構成ウィザードが起動します。
 - 後でAppDNAを構成する場合は、[Launch the Configuration Wizard] チェックボックスをオフにして、[Finish] をクリックします。後で、Windowsの[スタート]画面/メニューからAppDNA環境構成ウィザードを起動できます（[すべてのプログラム] > [Citrix AppDNA] > [Management Tools] > [Configure AppDNA]）。

AppDNAを使用するには、事前にAppDNA環境構成ウィザードの手順を完了する必要があります。このウィザードの手順は、インストールまたはアップグレードの種類によって異なります。

実行する内容	参照
完全インストール	サーバーインストールの構成
クライアントのインストールまたはアップグレード	クライアントインストールの構成
サーバーの完全インストールまたはアップグレード	データベースのアップグレード

仮想マシンへのAppDNAのインストール

実稼働環境のみで、仮想マシンにAppDNAをインストールできます。試用モードのインストールは、仮想マシンではサポートされていません。

VMware Workstationと共にInstall Captureを使用する場合は、仮想マシンのホストマシンにAppDNAをインストールする必要があります。AppDNA自体が仮想マシンにインストールされている場合は、これは不可能です。仮想マシンにAppDNAをイン

ストールする必要がある場合は、Install Captureの代わりにAppDNAのセルフプロビジョニング機能を使用して、この制限を回避できます。

完全なリモート制御を提供する仮想化技術（Citrix XenServer、VMware vSphere、Microsoft Hyper-Vなど）と共にInstall Captureを使用する場合は、仮想マシンにAppDNAをインストールできます。

サーバーインストールの構成

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードを使用して、試用システムまたは実稼働環境用システムに新しいAppDNAインストールを構成します。これには、新しいSQL Serverデータベースの作成も含まれます。

重要： AppDNAがインストール済みの場合は、構成ウィザードを実行する前にAppDNAクライアントを停止してください。構成ウィザードを実行すると、IISがリセットされます。これにより、AppDNA WebサイトとデータベースをホストするWebサーバーに接続している、実行中のAppDNAクライアント上のインポートおよび分析セッションが終了します。デフォルトでは、AppDNAのインストールが完了すると、ウィザードが自動的に開きます。

- AppDNA環境構成ウィザードが開いていない場合は、Windowsの [スタート] 画面/メニューから [すべてのプログラム]、[Citrix AppDNA]、[Management Tools]、[Configure AppDNA] の順に選択します。
- [Configure new installation] を選択し、[Next] をクリックして、[Database creation] ページで次のように詳細情報を指定します。
 - **Server name** – Machine\Instanceの形式で入力します。ここで、MachineはSQL Serverのインストールをホストするマシンの名前です。Instanceは名前付きのSQL Serverインスタンスを使用する場合のインスタンスの名前です。名前付きのインスタンスを使用しない場合には、バックスラッシュ (\) を省略します。
 - **Database name** – デフォルトはAppDNADBです。AppDNAで使用するための空のデータベースをデータベース管理者が作成した場合は、その名前をここに入力します。それ以外の場合は、SQL Serverインスタンスに存在しない名前を入力します。
 - **Database authentication** – データベースを作成するときにSQL Serverに接続するための資格情報を入力します。使用する認証方法にかかわらず、ユーザーアカウントにはsysadminサーバーの役割が必要です。
 - **Windows authentication** – この種の認証では、ログオンに使用するWindowsユーザーアカウントをデータベース接続に使用します。ユーザーアカウントにはパスワードが必要です。
 - **SQL Server authentication** – この種類の認証では、SQL Serverユーザーアカウントを使用します。このオプションを選択すると、[User name] ボックスと [Password] ボックスがアクティブになります。アカウントのユーザー名とパスワードを入力します。
- [Next] をクリックしてから、[AppDNA web site credentials] ページで、作成されたデータベースに接続するときにAppDNA Webサイトが使用する資格情報を指定します。使用できるオプションは、次のとおりです。
 - **Configure a local service account for me** – このオプションでは、AppDNASvcAccountと呼ばれるWindowsユーザーアカウントがローカルマシンに構成されます。このアカウントが既存でない場合は、このウィザードによって作成され、期限切れにならないランダムなパスワードが生成されます。このオプションは、ローカルマシンにSQL Serverがインストールされていて、ログオンするユーザーにWindowsユーザーアカウントを作成する権限がある場合のみ使用できます。
 - **Use these credentials** – 使用する資格情報を指定します。実稼働環境用システムでは、データベースの作成に使用したアカウントではなく、パスワードの有効期限がないAppDNA固有のサービスアカウントをお勧めします。詳しくは、「[Webサイトの資格情報](#)」を参照してください。
- [Next] をクリック後、[License database] ページでは、ライセンスをアクティブ化するか、AppDNAを試用モードで最大30日間実行することを選択します。
 - **Activate now** – AppDNAの試用版または製品版ライセンスをアクティブ化するには、このオプションをクリックします。<http://www.citrix.com>にログオンし、ライセンスファイルを割り当ててダウンロードする必要があります (手順について詳しくは、<http://support.citrix.com/article/CTX134678>を参照してください)。これを行うときには、AppDNAライセンスサーバーをホストするマシンの名前を入力する必要があります。
 - **License server machine** – AppDNAライセンスサーバーマシンの名前が表示されます。これは、AppDNAサーバーと同じマシンです。[Copy] をクリックしてこの名前をクリップボードにコピーし、www.citrix.comに貼り付けられる

ようにします。

- **License file** – ライセンスファイルをダウンロードした後、ライセンスファイルの名前と場所をここに入力します。これは、www.citrix.comから発行されたライセンスである必要があります。必要に応じて、www.citrix.comにログインし、既存の使用権と一致する新しいCitrixライセンスをダウンロードできます。

重要：AppDNAはほかのCitrix製品とライセンスの制御方法が異なります。したがって、複数のCitrix製品を購入した場合は、AppDNAライセンスをほかの製品のライセンスとは別にダウンロードする必要があります。

- **Run in trial mode** – AppDNAを試用モードで最大30日間実行するには、このオプションを選択します。この場合、インポートしてEstateViewレポートビューおよびEffort Calculatorレポートビューを表示できるアプリケーションの数に制限はありません。ただし、そのほかのレポートビューの結果は、最大で5つのアプリケーションについてのみ表示できません。
- **Activate a XenDesktop or XenApp Platinum license** – XenDesktopまたはXenAppのPlatinumライセンスでAppDNAをアクティブ化するには、このオプションをクリックします。
 - **Platinum license server machine** - XenDesktopまたはXenAppのライセンスサーバーがインストールされているマシンのホスト名またはIPアドレスを入力します。
 - **Port** – ライセンスサーバーのポートを入力します。デフォルトでは27000です。ただし、異なるポートが使用されることがあります。不明な場合は、XenDesktopまたはXenAppの管理者にお問い合わせください。

5. [Next] をクリックして [System check] ページに進みます。

いずれかのチェックが失敗する場合は、「[システムチェックの問題](#)」を参照してください。

6. [Configure] をクリックして、AppDNAの構成とデータベースの作成を開始します。

これには時間がかかります。

構成ウィザードによってIISのリセットも行われます。リセットが行われると、このサーバー上のIISでホストされているほかのすべてのWebサイトがしばらくの間利用できなくなります。

処理が完了すると、概要ページが開きます。

これでAppDNAを使用する準備ができました。開始するには、Windowsの[スタート]画面/メニューから、[すべてのプログラム]、[Citrix AppDNA]、[AppDNA]の順に選択します。デフォルトの管理者アカウントの資格情報は次のとおりです。

- Username : administrator
- パスワード : apps3cur3

重要：初回ログオン時にパスワードを変更することをお勧めします。

AppDNAに初めてログオンした場合は、[モジュール構成ウィザード](#)が起動します。

クライアントインストールの構成

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードを使用して、AppDNAクライアントインストールを構成します。デフォルトでは、AppDNAのインストールが完了すると、ウィザードが自動的に開きます。

1. AppDNA環境構成ウィザードが開いていない場合は、Windowsの [スタート] 画面/メニューから [すべてのプログラム]、[Citrix AppDNA]、[Management Tools]、[Configure AppDNA] の順に選択します。
2. たとえば、`http://<server>:<8199>/<AppDNA>`の形式でAppDNA WebサイトのURLを入力します。ここで、<server>はAppDNAサーバーマシンの名前、<8199>はポート番号、<AppDNA>はAppDNA Webサイトの名前です。
3. [Next] をクリックして [System check] ページに進みます。いずれかのチェックが失敗する場合は、[システムチェックの問題](#)を参照してください。
4. [Configure] をクリックして、AppDNAクライアントの構成を開始します。

AppDNAの最適化

Oct 16, 2015

ここでは、AppDNAを可能な限り効率的に実行するために行うことができる手順について説明します。アプリケーションのポートフォリオが大きい場合は特に、これらの実稼働環境用システムの最適化をすべて実行することをお勧めします。

SQL Serverの最適化

SQL Serverのパフォーマンスを向上させるには、まずサーバーのRAMを増設します。RAMを追加すると、低速なハードディスクのパフォーマンスを補うことができます。

サーバーメモリの上限とクエリあたりの最小メモリ

デフォルトでは、SQL Serverは使用できるメモリを消費します。このことは、メモリ使用量が多いAppDNAのインポートや分析のタスクと同時に実行しているほかのプロセスに悪影響を与える可能性があります。

SQL Serverでアクセスできるメモリ量に上限を定義して、約3~5GBのRAMをオペレーティングシステム用に確保することをお勧めします。SQL Serverでは、クエリに割り当てるメモリ量も定義されます。クエリの処理速度が上がるように、この値を大きくして、SQL Serverでより多くのRAMを複雑なクエリに利用できるようにすることをお勧めします。

1. SQL Server Management Studioを開きます。
2. SQL Serverインスタンスを右クリックし、[プロパティ] を選択します。
3. [サーバーのプロパティ] ダイアログボックスで [メモリ] をクリックします。
4. [最大サーバーメモリ (MB)] を環境に適切な値に設定します。
5. [クエリごとに使用する最小メモリ (KB単位)] を2048に設定します。

並列処理の最大限度

分析中にデータベースのデッドロックが発生する可能性を下げるには、SQL Serverインスタンス上の並列処理の最大限度を1に設定します。

1. SQL Server Management Studioを開きます。
2. SQL Serverインスタンスを右クリックし、[プロパティ] を選択します。
3. [サーバーのプロパティ] ダイアログボックスで [詳細設定] をクリックします。
4. [詳細設定] ページで [並列処理の最大限度] を1に設定します。

Windowsのスワップファイルの管理

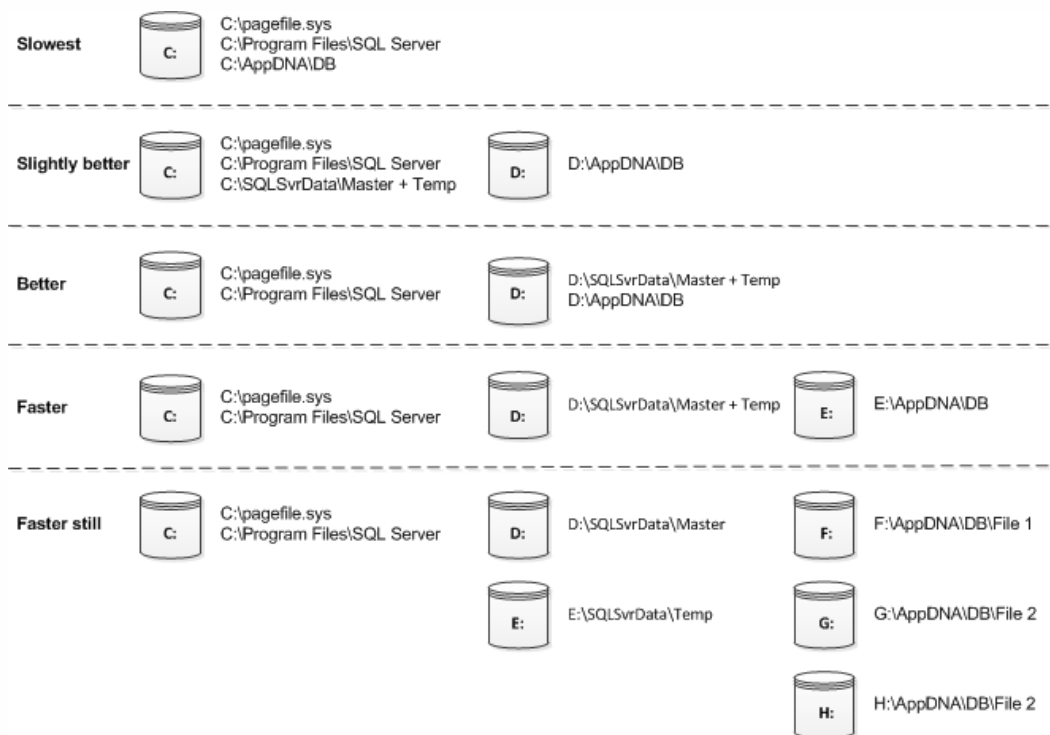
デフォルトでは、Windowsがページングファイルを管理するように構成されています。デフォルトの設定を維持することをお勧めします。次のようにして、設定を確認または変更します。

1. Windowsで、[システムの詳細設定の表示] に移動します。
2. [システムのプロパティ] ダイアログボックスで、[詳細設定] タブをクリックします。
3. [パフォーマンス] の [設定] をクリックします。
4. [パフォーマンスオプション] ダイアログボックスで、[詳細設定] タブをクリックします。
5. [仮想メモリ] の [変更] をクリックします。
6. [仮想メモリ] ダイアログボックスで、[すべてのドライブのページングファイルのサイズを自動的に管理する] チェックボックスをオンにするか、各ドライブで [システム管理] をクリックします。

ハードディスクの最適化

- データベースを構成するファイルグループ内にできるだけ多くのファイルを配置します。
- ファイルのコレクションをシステムドライブではない別の物理ドライブに配置します。
- 大きく低速なディスクよりも、小さく高速なハードディスクを使用します。
- 可能であれば、masterおよびtempデータベースのファイルを別の専用の物理ディスクに移動します。
- tempdbデータベースのあるディスクに少なくとも30GBの空き領域を確保します。

次の図は、SQL ServerのさまざまなアーキテクチャとAppDNAのパフォーマンスの対応関係を示しています。



基本的に、より多くのディスクヘッドにSQL Serverが負荷を分散できるほど、処理速度が速くなります。

SQL ServerでRAWパーティションを使用できるようにした場合も、ディスク内の使用できるヘッドの使用状況が最適化されます。ただし、これを使用できるようにすると、ディスクはSQL Server専用になり、Windowsの通常の用途に使用できなくなります。また、ドライブ上の既存データが失われる可能性があります。

AppDNAデータベースの復旧モデル

AppDNAでアプリケーションポートフォリオを分析すると、多くのSQLクエリが実行されます。すべてのトランザクションを「完全」復旧モデルでログに記録する場合は、データベースがバックアップされるまでSQLログファイルが拡張し続けるため、大きなデータベースでは非常に多くのハードディスクスペースが消費されます。

重要：「完全」復旧モデルを使用する場合にディスクスペースの問題を避けるには、SQL Serverの保守計画を立て、定期的にAppDNAデータベースのバックアップを取ります。

tempdbおよびAppDNAデータベースに対して「単純」復旧モデルを使用することをお勧めします。「単純」復旧モデルでは、処理および分析中のデータベースサイズが大幅に縮小されます。

1. SQL Server Management Studioを開きます。
2. [データベース] > [システムデータベース] の順に展開します。
3. データベースを右クリックし、[プロパティ] を選択します。
4. [プロパティ] ダイアログボックスで [オプション] をクリックします。
5. [復旧モデル] から、[単純] を選択します。

詳しくは、「[復旧モデル \(SQL Server\)](#)」を参照してください。

フルテキストインデックス

AppDNAではSQL Serverのフルテキストインデックス機能を使用しません。一部のバージョンのSQL Serverでは、この機能をAppDNAデータベースで無効にして、パフォーマンスを向上させることができます。

1. SQL Server Management Studioを開きます。
2. AppDNAデータベースを右クリックし、[プロパティ] を選択します。
3. [データベースのプロパティ] ダイアログボックスで [ファイル] をクリックします。
4. [ファイル] ページで、[フルテキストインデックスを使用する] チェックボックスをオフにします。

IISの最適化

AppDNAのインストーラーおよびAppDNA環境構成ウィザードでIISの最適化を試行しても、最適化できない場合や、後で設定が変更される場合があります。このセクションで説明するようにIISを最適化することをお勧めします。

許可されるコンテンツ最大長

許可されるコンテンツ最大長の設定を低くしすぎると、大きなアプリケーションとオペレーティングシステムイメージをイポートできなくなる可能性があります。制限値を高く設定するには、次の手順に従います。

1. AppDNAおよびすべてのAppDNAクライアントを閉じます。
2. インターネットインフォメーションサービス (IIS) マネージャーを開きます。
3. IISの下のツリーを展開してAppDNAサイトをクリックします。
4. 中央のペインで [要求のフィルタリング] をダブルクリックします。
5. [操作] で、[機能設定の編集] をクリックします。
6. [要求フィルター設定の編集] ダイアログボックスで、[許可されたコンテンツ最大長] を2147483648に設定して、[OK] をクリックします。
7. ツリーでAppDNAサイトを選択し、[再起動] をクリックしてIISをリセットします。

IISのタイムアウトおよびリサイクルの設定

デフォルトでIISに構成されているタイムアウト値は、AppDNAと共に使用するには概して低すぎます。特に、AppDNAのタスクは実行に時間がかかるため、リサイクル設定が原因で、タスクが完了する前に終了する結果になる可能性があります。この問題は特に、アプリケーションポートフォリオが大きい場合に発生します。設定を構成するには、以下の手順に従います。

1. インターネットインフォメーションサービス (IIS) マネージャーを開きます。
2. ツリーを展開し、[アプリケーションプール] をクリックします。
3. アプリケーションプールの一覧で、[AppDNAAppPool] をクリックします。
4. [操作] で、[詳細設定] をクリックします。
5. [詳細設定] ダイアログボックスで、次のオプションを設定し、[OK] をクリックします。

オプション	設定

名前	デフォルト値
アイドル状態のタイムアウト (分)	0
Pingの有効化	False
定期的な間隔 (分)	0

- AppDNAAppPoolを選択したままの状態、[操作] の [リサイクルの設定] をクリックします。
- [定期的な間隔 (分)] チェックボックスをオフにして、[次へ] をクリックし、[完了] をクリックします。
- ツリーでAppDNAサイトを選択し、[再起動] をクリックしてIISをリセットします。

アンチウイルス設定の最適化

アクセスしたときにスキャンを実行するアンチウイルスは、AppDNA、SQL Server、およびIISのパフォーマンスに悪影響を与えます。AppDNAを可能な限り効率的に実行するため、アクセスしたときにアンチウイルスで実行するスキャンから次のフォルダーを除外することをお勧めします。

- AppDNAのプログラムとデータのフォルダー
- アプリケーションインストールパッケージフォルダー (ローカルにある場合)
- IIS Webサイトフォルダー
- SQL Serverデータベースフォルダー
- 一時ファイルの場所
- Windows\WoWx64

アプリケーションのインポートの最適化

アプリケーションをAppDNAにインポートするには、アプリケーションインストールパッケージを使用します。インポートのパフォーマンスに影響を与える変数には、アプリケーションのサイズ、外部ファイル、ネットワーク帯域幅、物理ネットワーク接続と性能などがあります。

AppDNAへのアプリケーションのインポートを最も迅速かつ効率的に実行するには、アプリケーションのインストールファイルをAppDNAのインポートクライアントのローカルに格納します。AppDNAおよび一時データベースとは別の物理ディスクに配置することが理想的です。

ローカルエリアネットワーク経由でアプリケーションのインストールファイルをインポートすることもできますが、その場合、インポート処理に遅延が発生してインポートが失敗したり、警告が生成されたりする可能性があります。

パフォーマンスのテスト

Oct 16, 2015

大規模なインポートと分析を行う前に、構成のパフォーマンスをテストすることをお勧めします。

パフォーマンスモニターの構成

1. Windowsのパフォーマンスモニターを開いて、[データコレクターセット] を展開します。
2. [ユーザー定義] を右クリックして、[新規作成]、[データコレクターセット] の順に選択します。
3. 次の手順を実行して、新しいデータコレクターセットの作成ウィザードを完了します。
 - 「AppDNAパフォーマンス」などの名前を入力します。
 - [テンプレートから作成する] をクリックします。
 - テンプレートに [System Performance] を選択します。[パフォーマンスモニター] ウィンドウに新しいデータコレクターセットの名前が表示されます。
4. 新しいデータコレクターセットを右クリックして、[プロパティ] を選択し、[停止条件] タブをクリックして、[全体の期間] チェックボックスをオフにします。

AppDNAのインポートおよび分析のテスト

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze]、[Applications] の順に選択します。
2. [Import Applications] 画面で、いくつかのアプリケーションを追加して選択します (最大5つ、少なくとも1つはサイズが大きく複雑なアプリケーションを選択します)。
3. Windowsのパフォーマンスモニターで、[AppDNAパフォーマンス] データコレクターセットを右クリックして、[開始] を選択します。
4. AppDNAの [Import Applications] 画面で、[Import] をクリックします。
5. アプリケーションがインポートされた後、分析が自動的に開始されない場合は、[Analyze] をクリックします。
6. アプリケーションが分析されたら、Windowsのパフォーマンスモニターを開き、[AppDNAパフォーマンス] データコレクターセットを停止します。
7. パフォーマンスモニターで、AppDNAパフォーマンスのレポートを確認します。
 - Current Disk Queue Length Maximumが2より大きい場合は、AppDNAデータベースを別のディスクに移動することを検討してください。詳しくは、「[SQL Serverの最適化](#)」を参照してください。
 - Processor Utilizationが70-80%より大きい場合は、プロセッサのアップグレードをお勧めします。

コマンドラインを使ったインストール

Oct 16, 2015

オプションで、コマンドプロンプトからAppDNAのインストーラーを実行できます。ここではその構文について説明します。

構文

角かっこ ([]) で囲んだ項目はオプションです。これらのオプションを含める場合は、角かっこを除いて入力します。

```
msiexec /i "package" /qn [INSTALLDIR="installdir"] [SERVER="serverdir"] [SETUP="type"]
```

注：AppDNAをコマンドプロンプトからインストールするには管理者特権が必要です。

オプション

package

必須です。MSIインストーラーの名前と場所です。

/qn

サイレントインストールを意味します。

installdir

オプションです。インストールフォルダーの場所です。デフォルトでは、32ビットシステムの場合は%ProgramFiles%\Citrix\AppDNA、64ビットシステムの場合は%ProgramFiles(x86)%\Citrix\AppDNAです。

serverdir

オプションです。サーバーコンポーネントのインストールフォルダーです。デフォルトでは、<installdir>\Serverです。

type

オプションです。インストールの種類です。Complete (デフォルト) またはClientです。

例

デフォルトオプションを使用して完全インストールをサイレントに実行します。

```
msiexec /i "C:\Users\fishan\Downloads\Citrix AppDNA.msi" /qn
```

デフォルトオプションを使用してクライアントインストールをサイレントに実行します。

```
msiexec /i "C:\Users\fishan\Downloads\Citrix AppDNA.msi" /qn SETUP="Client"
```


アップグレード

Oct 16, 2015

重要： AppDNA 7.6には主要なオペレーティングシステムのイメージがすべて含まれており、インストールやアップグレード時にこれらのイメージがロードされます。このため、リモート構成のSQLサーバーでAppDNAをインストールしたりアップグレードしたりするときに2、3時間かかる場合があります（ハードウェアの構成によってはさらに時間がかかることもあります）。ただし、Webサーバー上のローカルのデータベースを使用する場合は、以前のバージョンと同じ程度の時間でインストールできます。

AppDNA 7または7.5からAppDNA 7.6へのアップグレード

1. 「[AppDNAのインストール](#)」の説明に従ってインストーラーを実行します。
2. 「[データベースのアップグレード](#)」の説明に従って、AppDNA環境構成ウィザードを使用してデータベースをアップグレードします。

AppDNAと共にXenAppまたはXenDesktopのPlatinumライセンスを既に使用している場合は、アップグレードによりAppDNAのすべての機能が使用できるようになります。

注：AppDNA 7.5からAppDNA 7.6へのアップグレード時にSubscription Advantageの有効期限が切れている場合は、1回だけ手動でライセンスを再アクティブ化する必要があります。

3. 「[AppDNAツールのアップグレード](#)」の説明に従ってAppDNAツールをアップグレードします。
4. リモートのAppDNAクライアントをアップグレードします。「[AppDNAのインストール](#)」の説明に従ってインストーラーを実行します。
5. Windows XP、Windows Vista、Windows Server 2003 SP3、Windows Server 2008 SP2、およびXenApp Streamedを参照するForward Pathスクリプトがある場合は、それらの参照をスクリプトから削除するかスクリプト自体を削除します。それらのレポートは廃止されました。

AppDNA 6.3以前からAppDNA 7.6へのアップグレード

AppTitude 5.1、AppDNA 6.0、AppDNA 6.1、AppDNA 6.1 SP1、AppDNA 6.2、およびAppDNA 6.3からもAppDNA 7.6に直接アップグレードできます。AppDNA 7.6をインストールする前に以前のバージョンをアンインストールしないでください。インストーラーによって不要な古いファイルがすべて削除され、それと同時に設定と構成オプションが保存されます。

アップグレードの前に

アップグレードする前に、次の情報を確認してください。

- システム要件

環境が[AppDNA 7.6のシステム要件](#)を満たしていることを確認してください。

- ディスクスペースの要件

AppDNA 6.0以降では、アプリケーションDNAの分析結果はレポート生成に最適な形式でデータベースに格納されます。AppTitude 5.1からのアップグレードでは、データベースのサイズが約15%増加します。このため、十分なディスクスペースが使用可能であることを確認してからアップグレードしてください。

対象となるすべてのバージョンのWindowsのデフォルトイメージがデータベースにインストールされます。このため、AppDNA 6.0以前のバージョンからアップグレードするときに、以前に使用可能なオペレーティングシステムイメージのサブセットのみをインストールしていた場合は、かなりの大きさのディスクスペース（2~3GB）が追加で必要になります。

- ファミリとスイート

AppDNA 7.6にアップグレードすると既存のファミリおよびスイートが削除され、アプリケーションの一覧が元の形にフ

ラット化されます。ファミリーおよびスイートの削除によって問題が発生する場合は、AppDNAをアップグレードする前にCitrixサポートにお問い合わせください。

- **アップグレードの所要時間**

AppTitude 5.1からデータベースをアップグレードするとき、特にアプリケーションポートフォリオが大きい場合は長時間かかる可能性があります。すべてのレポートが有効な場合は、推奨されるソフトウェアおよびハードウェア構成でのアップグレードには、500アプリケーションにつきおよそ1時間かかります。AppDNA 6.0以降のバージョンからのアップグレードにはそれほど長い時間はかかりません。

アップグレードによる変更は次のとおりです。

- **AppDNA 6.1 SP1 (6.1.610) からアップグレードする場合の外部データの制御**

AppDNA 6.1 SP1 (6.1.610) にはWindows 8およびWindows Server 2012用のテクニカルプレビュー版サポートが含まれています。それらのプラットフォームの外部データはテクニカルプレビュー版に含まれていませんでした。AppDNA 7.6にアップグレードしても、Windows 8およびWindows Server 2012の外部データは以前に生成した分析結果に適用されません。アプリケーションを再分析して、外部データを伴うレポートを更新する必要があります。

- **インストール先フォルダー**

AppDNAファイルはデフォルトで、Program Files\Citrix\AppDNAにインストールされます（64ビットシステムの場合はProgram Files (x86)\Citrix\AppDNA）。この場所はAppDNA 6.0以前の場所とは異なります。

- **Webサイト名**

AppDNA 6.0以前のバージョンからアップグレードする場合は、アップグレードプロセスによってAppTitude Webサイトの名前がAppDNAに変更されます。構成ファイルは保持され、新しい場所に移動されます。

- **ライセンス管理**

ライセンスシステムはCitrixライセンスサーバーシステムに統合されています。新しいAppDNAライセンスはすべて<http://www.citrix.com>で発行されます。ただし、AppDNA 6.0以前のバージョンからアップグレードする場合は、データベースをアップグレードするときに有効な古いライセンスが新しいライセンススキームに自動的にアップグレードされません。

重要： AppDNAライセンスサーバーがAppDNA Webサーバーとは別のマシンに配置されている場合は、AppDNAデータベースをアップグレードする前にAppDNAライセンスサーバーをアップグレードする必要があります。これを行うには、Citrix AppDNA License Server.msiをダウンロードし、AppDNAライセンスサーバーをホストするマシンで実行する必要があります。

単一マシンまたはサーバーインストールをアップグレードするには

この手順は、AppDNA 6.3以前からのアップグレードに当てはまります。

1. AppDNAをインストールする予定のサーバーが**AppDNA 7.6のシステム要件**を満たさない場合は、そのサーバーをアップグレードします。
2. 「**AppDNAのインストール**」の説明に従ってインストーラーを実行します。
3. 「**データベースのアップグレード**」の説明に従って、AppDNA環境構成ウィザードを使用してデータベースをアップグレードします。
4. 「**AppDNAツールのアップグレード**」の説明に従ってAppDNAツールをアップグレードします。
5. リモートのAppDNAクライアントがある場合は、次の説明に従って各クライアントをアップグレードします。

アップグレードの後は、新しい向上したアルゴリズムにより提供されるデータを活用するため、アプリケーションを再分析することをお勧めします。

クライアントインストールをアップグレードするには

この手順は、AppDNA 6.3以前からのアップグレードに当てはまります。

1. AppDNAをインストールする予定のクライアントがAppDNA 7.6のシステム要件を満たさない場合は、そのクライアントをアップグレードします。
2. 「AppDNAのインストール」の説明に従ってインストーラーを実行します。
3. 「クライアントインストールの構成」の説明に従ってクライアントをサーバーに接続するように構成します。
4. 「AppDNAツールのアップグレード」の説明に従ってAppDNAツールをアップグレードします。

アップグレードの後は、新しい向上したアルゴリズムにより提供されるデータを活用するため、アプリケーションを再分析することを勧めます。

データベースのアップグレード

Oct 16, 2015

注：複数のデータベースを使用する環境では、各データベース上でこの構成手順に従って作業します。

1. データベースソフトウェアが [AppDNA 7.6 のシステム要件](#) を満たさない場合は、アップグレードします。
2. 構成ウィザードを実行する前に AppDNA クライアントを停止します。
必要な場合は、アップグレードによって IIS がリセットされます。IIS がリセットされると、AppDNA Web サイトとデータベースの両方をホストする Web サーバーに接続している、実行中の AppDNA クライアント上のインポートおよび分析セッションが終了します。
3. AppDNA 環境構成ウィザードが開く準備ができていない場合は、Windows の [スタート] メニューから [Citrix AppDNA]、[Management Tools]、[Configure AppDNA] の順に選択します。
4. [Upgrade installation] を選択します。
5. [Choose Database] ページでアップグレードするデータベースを選択し、必要に応じて [Backup] を選択して [Next] をクリックします。
ライセンスを検証するため、Platinum ライセンスの有効期限と Subscription Advantage のメンテナンス契約がチェックされます。Subscription Advantage の有効期限が切れている場合は、AppDNA のアクティブ化時に使用された Citrix ライセンスサーバーと通信してライセンスが更新されます。
6. [Next] をクリックしてシステムチェックを開始します。システムチェックが失敗する場合は、「[システムチェックの問題](#)」を参照してください。
7. [Upgrade] をクリックしてデータベースのアップグレードを開始します。これには時間がかかります。

AppDNAツールのアップグレード

Oct 16, 2015

AppDNAをアップグレードする場合は、使用するInstall Capture、Self-Provisioning、Web Application Captureなどのツールもアップグレードする必要があります。

AppDNAをインストールすると、以下のインストーラーが提供されます。

- Citrix AppDNA Self-Provisioning Client.msi
- Citrix AppDNA VM Configuration.msi
- Citrix AppDNA Web Application Capture.msi

デフォルトでは、これらは次のフォルダーにインストールされます。

プラットフォーム	インストーラーの場所
32ビット	C:\Program Files\Citrix\AppDNA\Tools
64ビット	C:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Tools

Install Capture

Install Captureを使用する場合は、新しいバージョンのCitrix AppDNA仮想マシン構成ツールのMSIをインストールした新しい仮想マシンスナップショットを作成し、それに応じて仮想マシンの構成を更新する必要があります。これを行うには、次の操作を行います。

1. 仮想マシンにログオンします。
2. Windowsタスクマネージャーを起動します。
3. Windowsタスクマネージャーの [アプリケーション] タブで、[Remote Admin] をクリックし、[タスクの終了] をクリックします。
4. [コントロールパネル] > [プログラムと機能] を使用して、既存のCitrix AppDNA VM構成ツールをアンインストールします。
5. 新しいバージョンのCitrix AppDNA VM Configuration.msiをインストールします。
6. 仮想マシンの新しいスナップショットを作成します。
7. [仮想マシン構成ウィザード](#)を実行して、新しいスナップショットを使用する仮想マシン構成を更新します。

Install Capture用の仮想マシンの構成については、「[Install Capture](#)」を参照してください。

セルフプロビジョニング

セルフプロビジョニング機能を使用する場合は、セルフプロビジョニングクライアントマシンに新しいバージョンのCitrix AppDNAセルフプロビジョニングクライアントとCitrix AppDNA VM構成ツールのMSIをインストールする必要があります。新しいバージョンをインストールする前に古いバージョンをアンインストールします。詳しくは、「[セルフプロビジョニングクライアントのインストール](#)」を参照してください。

Web Application Capture

スタンドアロンのWeb Application Captureツールを使用する場合は、古いバージョンをアンインストールしてから、新しいバージョンのCitrix AppDNA Web Application Capture MSIをインストールする必要があります。これらのツールについて詳しく

くは、「[スタンドアロンのWebアプリケーションキャプチャツールのインストール](#)」を参照してください。

インポート

Apr 15, 2016

AppDNAでは、AppDNAへのインポート方法によってアプリケーションがWebアプリケーションなのかデスクトップアプリケーションなのかを判断します。 [Import Web Applications] 画面でインポートされたアプリケーションは、Webアプリケーションとみなされます。 それ以外のすべてのアプリケーションは、デスクトップアプリケーションとみなされます。

デスクトップアプリケーション

Windowsデスクトップアプリケーションはそのインストールパッケージを使用してインポートします。 .msiまたはそのほかの種類のパッケージを使用できます。 または、App-V (.sftまたは.appv) パッケージを使用することもできます。 アプリケーションインストールパッケージを見つけたら、 [Import Applications] 画面に移動してそれらをインポートします。

以下のいずれかの方法でデスクトップアプリケーションをインポートします。

- **直接インポート** - Windowsインストーラー (.msi) またはApp-V (.sftまたは.appv) パッケージでアプリケーションをインポートするために使用します。 これは、アプリケーションDNAをデータベースにインポートする、最も時間がかからない方法です。
- **Install Capture** - Windowsインストーラー (.msi) またはApp-V (.sftまたは.appv) パッケージがないアプリケーションをインポートするために使用します。 Install Captureは、仮想マシンを使用してアプリケーションのインストールと構成の詳細をMSI内にキャプチャし、そのMSIをAppDNAにインポートします。
- **Self-Provisioning** - セルフプロビジョニングの管理に使用します。 セルフプロビジョニングは、AppDNAにインポートするためにデスクトップアプリケーションをキャプチャするための代替メカニズムです。 キャプチャは、AppDNAとは別のマシンで行います。 マシンの種類は、仮想、物理、またはVDIのどれでも構いません。 セルフプロビジョニングを使用して、エンドユーザーにアプリケーションのキャプチャとパッケージ化を委任できます。

管理対象アプリケーション - Active DirectoryまたはMicrosoft System Center Configuration Manager (Configuration Manager) を使用してアプリケーションを展開する場合は、展開済みのインストールを使用してアプリケーションをインポートできます。 まず、Active DirectoryおよびConfiguration ManagerのデータをAppDNAデータベースにロードします。 Active DirectoryおよびConfiguration Managerのデータには、展開済みのアプリケーションの組織単位、グループ、コレクション、ユーザー、コンピューター、およびインストール操作が含まれます。

Active DirectoryおよびConfiguration ManagerのデータをAppDNAデータベースにロードした後、 [Managed Applications] 画面にActive DirectoryとConfiguration Managerで展開されたすべてのアプリケーションが一覧表示されます。 この画面でインポートするアプリケーションを選択すると、それらが [Import Applications] 画面に転送され、通常の方法でAppDNAにインポートすることができます。

Active DirectoryおよびConfiguration Managerのデータをこの方法で操作すると、AppDNAで組織レポートが作成されます。 これらのレポートでは、Active DirectoryまたはConfiguration Managerで定義されているグループや組織単位のユーザーとコンピューターに展開されている管理対象アプリケーションの状態の概要が提供されます。

詳しくは、「[Active DirectoryとConfiguration Managerのデータの統合](#)」を参照してください。

検出と合理化 - エンタープライズで使用されているWindowsアプリケーションを確認するには、 [Discover Applications] 画面を使用します。 これはLakeside SysTrackに依存する機能であり、このソフトウェアを統合することで使用できます。 SysTrackは、エンタープライズ内のアプリケーションの実際の使用状況を監査しトラックするソフトウェアです。 [Discover Applications] 画面には、SysTrackデータベースからアプリケーションの監査情報が取り込まれ、組織で使用されているアプリケーションが一覧表示されます。 この情報に基づいてアプリケーションを合理化し、たとえば新しいプラットフォームに

アプリケーションを移行するかどうかを判断できます。それからそれらのアプリケーションをAppDNAにインポートできます。

詳しくは、「[アプリケーションの検出](#)」を参照してください。

Webアプリケーション

Webアプリケーションは、2つの異なるアプローチまたはその両方を組み合わせてAppDNAにインポートできます。

1. AppDNAの指向スパイダーで実行時のHTMLページをクロールし、それらをキャプチャしてAppDNAにインポートします。
2. Webアプリケーションのソースファイルをインポートします。
3. 指向スパイダーの出力とWebアプリケーションのソースファイルを組み合わせます。

どちらのアプローチも、AppDNA内で実行するか、スタンドアロンのAppDNA Web Application Captureツールを使用して実行できます。

詳しくは、「[Webアプリケーションのインポート](#)」を参照してください。

直接インポート

Oct 16, 2015

.msi、.appv、または.sftファイルを使用できるデスクトップアプリケーションを直接インポートできます。

標準のWindowsインストーラー (.msi) ファイルとApp-V (.sftまたは.appv) パッケージファイルの両方がある場合は、通常、.msiファイルをインポートすることをお勧めします。これは、App-Vパッケージが仮想環境用に用意されているために、ネイティブWindows環境用のアプリケーションDNAの一部が含まれていないためです。たとえば、ドライバーおよびレジストリ設定に関する情報が省略される場合があります。このため、.msiファイルを使用できる場合は、.msiファイルをインポートすることをお勧めします。

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Applications] の順に選択します。
2. [Direct Import] タブをクリックします。
3. インポートする.msi、.appv、または.sftファイルを指定するには、[Browse] 、 [Search] 、または [Import from List] をクリックします。
選択したアプリケーションの一覧が表示されます。
4. インポートするアプリケーションを選択します。
5. AppDNAデータベースへのアプリケーションDNAのロードを開始するには、[Import] をクリックします。
インポートの進行状況を示すメッセージが表示されます。
6. インポート処理のログを表示するには、アプリケーションの進行状況を示すメッセージの右側の[Log] アイコンをクリックします。

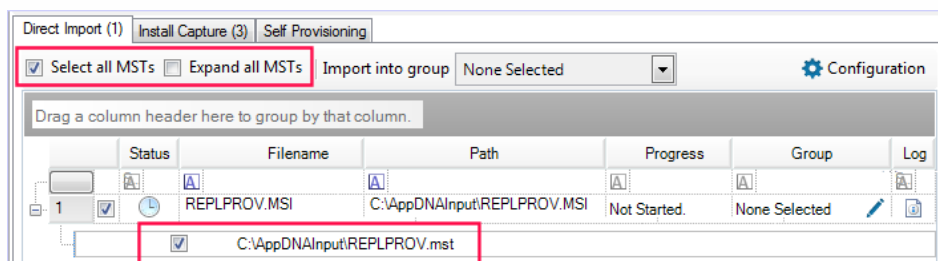
注意

If the **Auto Analyze** is disabled through **Edit > Settings > Import and Analyze**, **Import** and **Analyze** will be two separate options. **Auto Analyze** enabled is the default setting.

インポート時のMSTファイルの適用

.mstファイルを.msiファイルと共に使用して、インストールパッケージを変換、つまり操作することができます。

.msiファイルと同じ場所に.mstファイルがあれば、インポート時に.mstファイルを適用できます。.mstファイルを使用できるすべてのアプリケーションについてこれを行うには、[Select All MSTs] チェックボックスをオンにします。



または、特定のアプリケーションについて.mstファイルを選択できます。これを行うには、アプリケーションの左の[+] をクリックして、適用する.mstファイルを選択します。

インポート中のグループへのアプリケーションの追加

1. [Import Applications] 画面で、グループに追加するアプリケーションを選択します。
2. ツールバーの [Import into group] ボックスの一覧から、グループを選択します。

または、[Group] 列をクリックして、個々のアプリケーションのグループを選択することもできます。

アプリケーションの再インポート

AppDNAにデスクトップアプリケーションを初めてインポートすると、そのフィンガープリントが格納されます。フィンガープリントとは、アプリケーションの製品名、製造元名、バージョン番号、およびファイルとレジストリエントリを組み合わせたものです。AppDNAにそのアプリケーションを再インポートするとき、フィンガープリントが同じか変化が10%以下である場合は、同じアプリケーションであるとデフォルトでみなされます。これは、修復処理の一環としてアプリケーションを変更して再インポートしたときに、通常は同じアプリケーションであるとみなされることを意味します。同様に、アプリケーションの新しいバージョンも、通常は同じアプリケーションであるとみなされます。

ただしこの動作を変更して、フィンガープリントに変更がなくても、常に異なるアプリケーションであるとみなされるようにすることもできます。これを行うには、[\[Import and Analyze Settings\]](#) で [Finger print override] チェックボックスをオンにします。ただし、レポートを表示できるアプリケーションの数はAppDNAのライセンスで制御されるため、ライセンスに影響があることに注意してください。

同じ場所からアプリケーションを再インポートすると、テキストが[Path] 列に太字で表示され、そのアプリケーションが同じ場所から既にインポート済みであることが示されます。

直接インポート

Oct 16, 2015

.msi、.appv、または.sftファイルを使用できるデスクトップアプリケーションを直接インポートできます。

標準のWindowsインストーラー (.msi) ファイルとApp-V (.sftまたは.appv) パッケージファイルの両方がある場合は、通常、.msiファイルをインポートすることをお勧めします。これは、App-Vパッケージが仮想環境用に用意されているために、ネイティブWindows環境用のアプリケーションDNAの一部が含まれていないためです。たとえば、ドライバーおよびレジストリ設定に関する情報が省略される場合があります。このため、.msiファイルを使用できる場合は、.msiファイルをインポートすることをお勧めします。

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Applications] の順に選択します。
2. [Direct Import] タブをクリックします。
3. インポートする.msi、.appv、または.sftファイルを指定するには、[Browse] 、 [Search] 、または [Import from List] をクリックします。
選択したアプリケーションの一覧が表示されます。
4. インポートするアプリケーションを選択します。
5. AppDNAデータベースへのアプリケーションDNAのロードを開始するには、[Import] をクリックします。
インポートの進行状況を示すメッセージが表示されます。
6. インポート処理のログを表示するには、アプリケーションの進行状況を示すメッセージの右側の[Log] アイコンをクリックします。

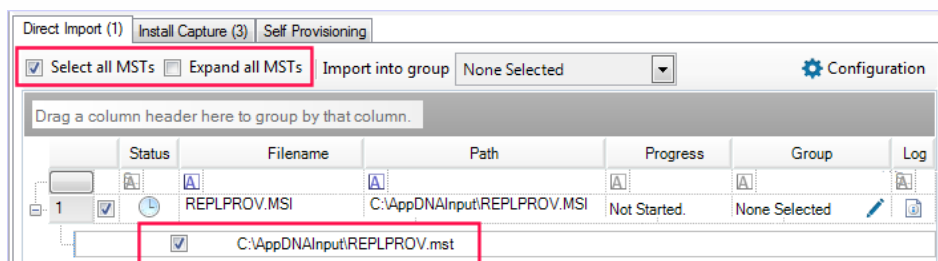
注意

If the **Auto Analyze** is disabled through **Edit > Settings > Import and Analyze**, **Import** and **Analyze** will be two separate options. **Auto Analyze** enabled is the default setting.

インポート時のMSTファイルの適用

.mstファイルを.msiファイルと共に使用して、インストールパッケージを変換、つまり操作することができます。

.msiファイルと同じ場所に.mstファイルがあれば、インポート時に.mstファイルを適用できます。.mstファイルを使用できるすべてのアプリケーションについてこれを行うには、[Select All MSTs] チェックボックスをオンにします。



または、特定のアプリケーションについて.mstファイルを選択できます。これを行うには、アプリケーションの左の[+] をクリックして、適用する.mstファイルを選択します。

インポート中のグループへのアプリケーションの追加

1. [Import Applications] 画面で、グループに追加するアプリケーションを選択します。
2. ツールバーの [Import into group] ボックスの一覧から、グループを選択します。

または、[Group] 列をクリックして、個々のアプリケーションのグループを選択することもできます。

アプリケーションの再インポート

AppDNAにデスクトップアプリケーションを初めてインポートすると、そのフィンガープリントが格納されます。フィンガープリントとは、アプリケーションの製品名、製造元名、バージョン番号、およびファイルとレジストリエントリ数を組み合わせたものです。AppDNAにそのアプリケーションを再インポートするとき、フィンガープリントが同じか変化が10%以下である場合は、同じアプリケーションであるとデフォルトでみなされます。これは、修復処理の一環としてアプリケーションを変更して再インポートしたときに、通常は同じアプリケーションであるとみなされることを意味します。同様に、アプリケーションの新しいバージョンも、通常は同じアプリケーションであるとみなされます。

ただしこの動作を変更して、フィンガープリントに変更がなくても、常に異なるアプリケーションであるとみなされるようにすることもできます。これを行うには、[\[Import and Analyze Settings\]](#) で [Finger print override] チェックボックスをオンにします。ただし、レポートを表示できるアプリケーションの数はAppDNAのライセンスで制御されるため、ライセンスに影響があることに注意してください。

同じ場所からアプリケーションを再インポートすると、テキストが[Path] 列に太字で表示され、そのアプリケーションが同じ場所から既にインポート済みであることが示されます。

Install Captureを使用したアプリケーションのインポート

Oct 16, 2015

Install Captureを使用すると、.msi、.sft、または.appvファイルを持たないデスクトップアプリケーションをインポートできます。Install Captureで仮想マシンにアプリケーションをインストールし、.msiファイルを作成します。このファイルをAppDNAにインポートします。

通常、作成される.msiファイルはAppDNAにインポートするためにアプリケーションDNAを単にキャプチャしたものであり、アプリケーションの実際のインストールには不適切です。ただし、必要な追加ソフトウェアがある場合は、キャプチャ処理によって、App-VシーケンスまたはXenAppプロファイルに加えて、AppDNAへのインポートを目的とする.msiファイルを作成できます。

Install Captureを使用したアプリケーションのインポート

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Applications] の順に選択します。
2. [Install Capture] タブをクリックします。
3. [Install Capture] タブで、インポートする.exeファイルまたはそのほかのインストールファイルを選択します。
重要：Install Captureでインポートするアプリケーションを選択するときは、以下のようなUNCパスを使用す**必要があります**。 \\MyServer\MyApplications\MyApplication.exe 指定するパスに、仮想マシンからアクセスできる必要があります。アクセスできなければインポートは失敗します。
4. アプリケーションの一覧から、インポートするアプリケーションを選択します。
5. 使用する仮想マシン構成を選択します。
6. 必要に応じて、アプリケーションのグループを選択します。
7. ツールバー右側の [Import] をクリックして、AppDNAデータベースにロードするためのアプリケーションDNAのキャプチャを開始します。

デフォルトでは、仮想マシン構成の一連のチェックが実行されます。いずれかのチェックが失敗する場合は、[トラブルシューティング](#)」を参照してください。

チェックが正常に完了すると、進行状況バーが表示され、Install Captureの処理が発生している仮想マシンが開きます

vSphereまたはHyper-Vの仮想マシンを使用している場合は、[リモートデスクトップ接続] ウィンドウでその仮想マシンが開きます。警告ウィンドウが開いたら、[このコンピューターへの接続について今後確認しない] チェックボックスをオンにして [接続] をクリックします。[Windowsセキュリティ] ダイアログボックスが開いたら、仮想マシン用のユーザー名とパスワードを入力します。ドメインユーザーアカウントを使用してください。次に [資格情報を記憶する] チェックボックスをオンにし、[OK] をクリックします。

Install Captureの処理の一般的な情報については、次の「Install Captureの処理」を参照してください。

重要：インストール時にコンピューターの再起動が必要な場合は、[コンピューターを後で再起動します] などのオプションを選択してください。Install Capture処理の実行時に仮想マシンを再起動するとInstall Captureが失敗します。

Install Captureの処理

[Install Capture] タブで [Import] をクリックし、仮想マシン構成のチェックが完了すると、[AppDNA Virtual Machine Remote Controls] ウィンドウが開きます。

- [Automatic] チェックボックスをオンにした場合は、オペレーティングシステム上でBefore snapshotの処理が自動的に

実行されます。

- 手動モードを選択した（[Automatic] チェックボックスをオフにした）場合は、実行するアクションを手動で選択して [Perform] をクリックする必要があります。ドロップダウンリストに表示される順序にアクションを選択します。

発生する処理は**実行プロファイル**によって制御されます。Snapshot実行プロファイルを使用する場合は、Before snapshotが仮想マシンで実行される最初のアクションです。Before snapshotが完了すると、インストールが実行されます。手動インストールが必要な場合は、必要に応じてアプリケーションをインストールして構成します。

重要：インストール時にコンピューターの再起動が必要な場合は、[コンピューターを後で再起動します]などのオプションを選択してください。Install Capture処理の実行時に仮想マシンを再起動するとInstall Captureが失敗します。アプリケーションのインストールが完了すると、After snapshotが開始されます（ここでも、Snapshot実行プロファイルの使用を前提としています）。これが完了すると、作成されたMSIのロードが開始されます。インポートが完了すると、[AppDNA Virtual Machine Remote Controls] ウィンドウが閉じ、[Install Capture] タブの進行状況が「Loading Completed Successfully」に変わります。

オプション

Oct 16, 2015

ここでは、[Import Applications] 画面の [Install Capture] タブのツールバーと、Install Capture処理の実行中にアプリケーションに適用できるそのほかのオプションについて説明します。Install Captureを使用して、.msi、.appv、または.sftファイルがないアプリケーションをインポートします。

[Install Capture] タブのツールバー

[Import Applications] 画面の [Install Capture] タブのツールバーには、次のオプションがあります。

Use Auto Click - 選択したアプリケーションのキャプチャでオートクリッカーを使用する場合は、このチェックボックスをオンにします（選択した実行プロファイルがオートクリッカーをサポートする場合にのみ適用されます）。選択したアプリケーションにオートクリッカーを使用しない場合はこのチェックボックスをオフにします。詳しくは、[Auto-Clicker](#)を参照してください。

注：[Use Auto Click] チェックボックスが無効な場合、その理由はアプリケーションが一覧に含まれるかどうかによって異なります。一覧が空であるとき、デフォルトの実行プロファイルがオートクリッカーをサポートしないか、デフォルトの実行プロファイルにUseAutoClick置き換え可能パラメーターが含まれない場合に、チェックボックスが無効になります。一覧にアプリケーションが含まれるとき、個別のアプリケーションごとに、アプリケーションに対して選択した実行プロファイルがオートクリッカーをサポートしないか、その実行プロファイルにUseAutoClick置き換え可能パラメーターが含まれない場合に、チェックボックスが無効になります。実行プロファイルについて、後でさらに説明します。

Extract embedded MSIs - MSIではないインストーラーの中には、.msiファイルが埋め込まれているものがあります。.msiファイルを抽出するにはこのボタンをクリックします。抽出された.msiファイルがアプリケーションと共に一覧表示されません。

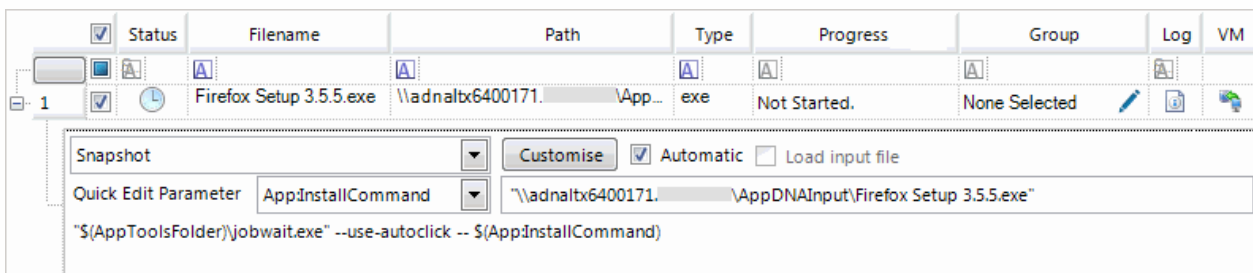
VM Configuration (ボックスの一覧) - 使用する仮想マシン構成を選択します。このボックスには、[\[Install Capture Settings\]](#) ダイアログボックスでセットアップした仮想マシン構成が一覧表示されます。

Import into Group - 作成済みのグループを一覧表示します。選択したアプリケーションをインポートするときに自動的に追加するグループを選択します。

Configuration - [\[Install Capture Settings\]](#) を開きます。

アプリケーションごとのオプション

[Import Applications] 画面の [Install Capture] タブの次のオプションは、アプリケーションごとに個別に設定できます。オプションが表示されていない場合は、アプリケーション名の左側の [+] をクリックして、アプリケーションのオプションパネルを開きます。



Execution profile (最初のドロップダウンボックス) - キャプチャ処理中に仮想マシンで実行されるタスクとリソースを制御します。一覧から実行プロファイルを選択するとき、現在のアプリケーションに対する実行プロファイルのコピーが自動

に作成されます。このコピーの名前は、元の名前にアスタリスク (*) を付けたものになります。これは、このアプリケーションのみについて実行プロファイルのカスタマイズできるということを意味します (後の [Customize] を参照してください)。変更をデフォルトに戻すには、(アスタリスクが付かない) 対応する基本実行プロファイルをこのボックスの一覧から選択します。これにより、現在のアプリケーションに対して実行プロファイルのデフォルト設定のコピーが作成されます。

AppDNAを新規にインストールしたときのデフォルトの実行プロファイルは snapshot と呼ばれます。これは主に次の3つの段階から構成されます。

1. **Before snapshot** - 仮想マシンの状態を分析します。ファイルシステムとレジストリエントリのすべてが分析されます。
2. **Launch command** - MSIではないアプリケーションインストーラーを実行します。
3. **After snapshot** - 仮想マシンの状態を再度分析します。ファイルシステムとレジストリエントリのすべてが分析されます。

Before snapshot と After snapshot における仮想マシンの状態の違いは、アプリケーションのインストールにより加えられた変更を表します。キャプチャ処理でこの情報を使用して、AppDNAにインポートする.msiファイルを作成します。その後で仮想マシンをインストール前の状態にリセットします。

ほかの実行プロファイルを使用することができ、異なる実行プロファイルをデフォルトとして設定できます。(AppDNAに付属の実行プロファイルの一覧と、それをアクティブ化する方法については、「[実行プロファイル](#)」を参照してください)。

Customize - クリックすると [\[Edit Execution Profile\]](#) ダイアログボックスが開き、現在のアプリケーションに対して実行プロファイルを編集できます。たとえば、置き換え可能パラメーター (プレースホルダー) を設定したりオプションを編集したりできます。その後でデフォルト設定に戻す必要が出てきた場合は、(アスタリスクが付かない) 元の実行プロファイルをボックスの一覧で選択します。

Automatic - このチェックボックスはデフォルトでオンになっています。キャプチャ処理は自動的に行われ、成功の場合は、必要な手動インストールオプションの選択以外のユーザー操作が不要です。アプリケーションの前提要件となるコンポーネントをインストールする必要がある場合は、このチェックボックスをオフにします。その場合は、Install Captureは手動モードで実行され、ユーザーが各段階を制御できます。

Load input file - インポートするのがMSIではないインストーラーから抽出する.msiファイルなのか、Install Captureで作成される.msiファイルなのかを制御します。インストーラーから抽出する.msiをロードする場合は、このチェックボックスをオンにします。ただし、一般に、生成される.msiを使用の方が安全です。一部のインストーラーには複数の.msiファイルが含まれており、AppDNAにロードできるのは1つだけだからです。

Quick Edit Parameters - ドロップダウンリストとテキストボックスから構成されます。ドロップダウンリストの値は、実行プロファイルで使用する置き換え可能パラメーター (プレースホルダー) です。これらの置き換え可能パラメーターの値は自動的に入力されるので、通常はユーザーが編集する必要はありません。ただし、たとえばサイレントインストールを実行するために、インストールコマンドにスイッチを追加する必要がある場合があります。置き換え可能パラメーターとしてこのボックスに入力する値により、実行プロファイルまたは仮想マシン構成の置き換え可能パラメーターに保存されている対応する値が上書きされます。

ドロップダウンリストに表示される置き換え可能パラメーターは実行プロファイルによって異なりますが、通常は次のもの含まれます。

- App:InstallCommand - アプリケーションのインストールを開始するコマンドです。Active DirectoryまたはConfigMgrを通じてアプリケーションを管理している場合は、テキストボックスの値はActive DirectoryまたはConfigMgrから取得されます。それ以外の場合は、AppDNAによってmsiexec /i "input_file" (.msiファイルの場合) と "input_file" (ほかの種類のインストールファイルの場合) の形式のコマンドが作成されます。インストーラーで受け入れられる、任意のコマンドラインオプションを指定できます。たとえば、サイレントスイッチを追加するとよいでしょう。.msiファイルについては、変換や

グオプションを指定できます。

- App:InstallDriveLetter - Active DirectoryまたはConfigMgrを通じて管理しているアプリケーションをインポートする場合にのみ当てはまります。インストールディレクトリの\\server\share部分をマップするときに使用されるドライブ文字を表します。
- App:InstallWrkDir - Active DirectoryまたはConfigMgrを通じて管理しているアプリケーションをインポートする場合にのみ当てはまります。インストールコマンドにより使用される作業フォルダーを表します。
- UseAutoClick - オートクリッカーを有効にしてキャプチャを実行する場合は、これを--use-autoclickに設定します（実行プロファイルがオートクリッカーをサポートしている必要があります）。オートクリッカーをオフにする場合は、この値を空にします。詳しくは、[Auto-Clicker](#)を参照してください。前のボックスの一覧で実行プロファイルを変更すると、この値に加えた変更は失われます。

オートクリッカー

Oct 16, 2015

概要

オートクリッカーは、Install Capture処理を呼び出すInstall CaptureおよびForward Pathタスクスクリプトのオプション機能です。オートクリッカーは、手動のインストール画面のデフォルトのオプションをできる限り自動的にクリックして受け入れることにより、Install Capture処理の自動化を向上させます。これは、サイレントスイッチオプションのないインストーラーでも、キャプチャをまとめて無人で実行できるということを意味します。

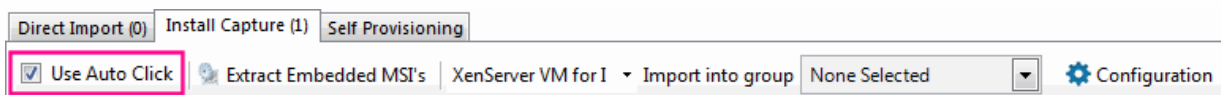
オートクリッカーによる処理では、すべてのインストール画面を完了できないことがあります。たとえば、ライセンスコードなどの情報を入力する必要がある場合です。その場合は、オートクリッカーは情報が手動で入力されるまで待機します。（まとめて夜間に実行するキャプチャなどで）情報が入力されない場合は、Install Captureは構成可能なタイムアウト期間の間待機してからキャプチャを破棄して、（あれば）次のキャプチャへと進みます。[Import Applications] 画面の [Install Capture] タブに、インストール状態が「failed」と表示されます。この場合は、オートクリッカーを使用せずにキャプチャを再実行する必要があります。

オートクリッカーでは、自動的にクリックされた各インストール画面のスクリーンショットが自動的に作成され、1つのHTMLページに追加されます。このページには、各画面がキャプチャされた時間が表示されます。このページはキャプチャ出力の場所に保存されます。これにより、インストールおよび選択された各オプションの記録を確認できます。

注：オートクリッカーはセルフプロビジョニングではデフォルトで無効になっています。セルフプロビジョニングは主に、インストールを手動で実行する上級ユーザー向けであるためです。ただし必要な場合は、以下の手順に従って [Quick Edit Parameter] ボックスでUseAutoClick置き換え可能パラメーターを有効にすることにより、オートクリッカーを有効にできます。

オートクリッカーの有効化

Install Capture処理中に実行される手順は実行プロファイルに定義されます。オートクリッカーを機能させるには、実行プロファイルがオートクリッカーをサポートしていて、プロファイルにUseAutoClickという名前の置き換え可能パラメーターが含まれている必要があります。使用する実行プロファイルがこの条件に当てはまる場合は、[Import Application] 画面の現在選択されているアプリケーションについて、オートクリッカーを有効または無効にすることができます。[Install Capture] タブのツールバーの [Use Auto Click] チェックボックスをオンまたはオフにするだけです。



たとえばForward Pathタスクスクリプトでオートクリッカーを制御するためなど、置き換え可能パラメーターの構成について詳しくは、後の「オートクリッカーの置き換え可能パラメーターの構成」を参照してください。

重要：最近アップグレードした場合は、「AppDNAツールのアップグレード」の説明に従って忘れずに仮想マシンのAppDNA VM構成ツールもアップグレードしてください。以前のバージョンのツールではオートクリッカーは動作しません。

オートクリッカーをサポートする実行プロファイル

以下の表は、AppDNAに付属する実行プロファイルと、それらがオートクリッカーをサポートするかどうか、そしてAppDNAをアップグレードすると自動的に更新されるかどうかを示します。

実行プロファイル	オートクリッカーをサポートする	アップグレード時に自動的に更新される
Snapshot Extended	はい	既にアクティブ化してある場合のみ

実行プロファイル App-V 5.0 Sequencer	はい オートクリッカーをサポートする	既にアップグレード時に自動的に更新される 場合のみ
App-V 4.6 SP1 Sequencer	はい	既にアクティブ化してある場合のみ

実行プロファイルのインポートおよびアクティブ化の手順については、[実行プロファイル](#)の「実行プロファイルをアクティブ化するには」を参照してください。

注：アップグレード時に実行プロファイルが更新される前に、元のプロファイルのコピーがoldというサフィックス付きで保存されます。これは、以前に実行プロファイルをカスタマイズしていた場合は、その変更がこのコピーに保存されるということを示します。

タイムアウト期間の構成

前に説明したように、オートクリッカーによる処理では、すべてのインストール画面を完了できないことがあります。たとえば、ライセンスコードなどの情報を入力する必要がある場合です。その場合は、Install Captureは情報つまりオプションが手動で入力されるまで待機します。情報が入力されない場合は、Install Captureは構成可能なタイムアウト期間の間待機してからキャプチャを破棄して、（あれば）次のキャプチャへと進みます。

このタイムアウト期間は、仮想マシン構成の ["Abort Installation" Timeout] オプションにより制御されます。デフォルトでは、このタイムアウト期間は40分に設定されています。この期間によってインストールが完了するまでの待機時間も制御されるためです。サイズの大きなアプリケーションでは、インストールにかなりの時間がかかることがあります。このタイムアウト期間は短縮できます。ただし、それによりサイズの大きなアプリケーションのキャプチャが失敗する可能性があることに注意してください。

["Abort Installation" Timeout] 値は、[\[Virtual Machine Configuration\]](#) ダイアログボックスで変更します。

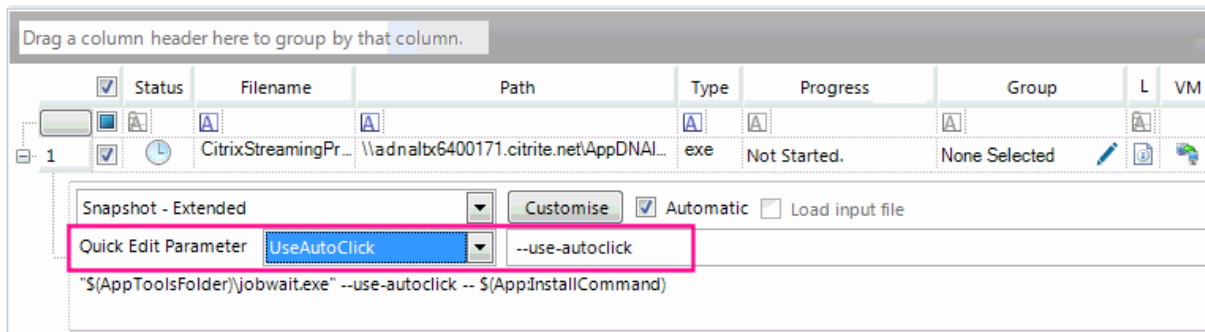
オートクリッカーの置き換え可能パラメーターの構成

実行プロファイルのUseAutoClick置き換え可能パラメーターは、その実行プロファイルでオートクリッカーをデフォルトで有効にするかどうかを制御します。

- デフォルトでオートクリッカーを有効にするには、UseAutoClick置き換え可能パラメーターの値を-use-autoclickに設定します。
- デフォルトでオートクリッカーを無効にするには、UseAutoClick置き換え可能パラメーターの値を空の文字列 ("") に設定します。

以下の場所でこの置き換え可能パラメーターを設定できます。

1. [Import Applications] 画面の [Install Capture] タブまたは [Self-Provisioning] タブの、アプリケーションの下に [Quick Edit Parameter] ボックス。ここでの設定は、選択したアプリケーションについてほかのすべてのオプション上書きし、置き換え可能パラメーターを変更します（これはセルフプロビジョニングでオートクリッカーを有効にする唯一の方法です）。



2. [Edit an execution profile] の [Replaceables] タブ。
3. [Virtual Machine Configuration] ダイアログボックスの [Replaceables] タブ。

該当する項目が複数ある場合は、一覧の上にある項目が常に優先されます。たとえば、置き換え可能パラメーターを[Quick Edit Parameter] ボックスに設定した場合は、これが常に優先されます。

無人バッチ処理の注意事項

オートクリッカーの利点の1つは、たとえば夜間にキャプチャをまとめて無人で実行できるという点です。仮想マシン構成に問題があると、バッチ処理が失敗する可能性があることに注意してください。たとえば、IPアドレスを動的に割り当てる環境の仮想マシンをIPアドレスで識別する場合、バッチ処理の途中でIPアドレスが変更されるとバッチ処理は失敗します。同様に、仮想マシンに自動ログオンが構成されていないとバッチ処理は失敗します。したがって、仮想マシンをセットアップするときは「[仮想マシンのセットアップ](#)」の推奨事項に従うことをお勧めします。

次の「制限事項」で詳しく説明するとおり、オートクリッカーはどのアプリケーションでも成功するとは期待できません。したがって、バッチ処理が完了した後は各キャプチャの状態を確認する必要があります。バッチ処理の実行方法に応じて、状態を [Import Applications] 画面の [Install Capture] タブまたは [Forward Path Task Sequencing] 画面で確認できます。オートクリッカーで処理した画面を記録したスクリーンショットを表示することもできます。これらはキャプチャの出力ディレクトリに格納されます。スクリーンショットをそれぞれが作成された時刻と共に順番に表示するには、Webブラウザでoutput.htmを開きます。

失敗したキャプチャを注意深く記録し、失敗の原因がオートクリッカーの制限によるものである場合は、手動で（オートクリッカーを使用せずに）キャプチャを再実行します。

注：キャプチャが失敗した場合に必ずスクリーンショットを利用できるように、仮想マシン構成を作成するときに[Capture Output Location] ページで、結果をストリーム配信ではなくコピーするオプションを選択する必要があります。

制限事項

インストーラーの種類は多様であり、さまざまな異なる技術が使用されています。Citrixでは、オートクリッカーを広範囲にわたるインストーラーでテストしてきました。ここでは、オートクリッカーの既知の制限事項について説明します。

- **デフォルト以外のオプション** - 前に述べたように、オートクリッカーはインストーラーのデフォルトのオプションを受け入れます。オートクリッカーでほかのオプションを選択するには、インストールコマンドを入力して、ほかの必要なオプションを選択するサイレントスイッチおよびパラメーターを指定する必要があります。
デフォルトのインストールコマンドは、前に説明した [Quick Edit Parameter] ボックスのApp:InstallCommandオプションを使用して変更できます。
- **ユーザー入力が必要** - インストーラーの中には、ユーザーに何らかの入力（ライセンスコードなど）やオプションの明示的な選択を要求するものがあります。この種の状況では、オートクリッカーはユーザーが情報を入力するか必要な操作を実行するまで待機します。ユーザーが一定期間内にこれを行わない場合は、キャプチャが失敗します。その場合は、必要なユーザー入力に注意しながら手動でキャプチャを再実行します。

- **インストーラーによりマシンが再起動される**– インストーラーの中には、インストールの完了後にマシンの再起動が必要な場合があります。多くの場合、これらのインストーラーではマシンを自動的に再起動するオプションが提供されます。インストールを手動で実行する場合は、このオプションを使用しないよう指示されます。キャプチャが完了する前にマシンを再起動すると、キャプチャが失敗するからです。
したがって、オートクリッカーはマシンを再起動するオプションを拒否しようとします。ときどき、オートクリッカーでこの動作が失敗し、再起動の試行が開始されます。Remote Adminにより再起動が禁止され、このことを説明するWindowsメッセージが表示されます。その後で、ユーザーによるメッセージへの応答がWindowsによって待機されます。インストールが完了しているためオートクリッカーは応答できず、ユーザーが介入しなければタイムアウト期間が経過してキャプチャが失敗します。この場合は手動でキャプチャを再実行して、マシンを再起動するオプションを拒否する必要があります。
- **言語サポート**– このリリースでは、オートクリッカーを英語のインストーラーでのみテストしています。ほかの言語のインストーラーでの正常な動作は期待できません。

セルフプロビジョニング

Oct 16, 2015

セルフプロビジョニングは、AppDNAにインポートするためにデスクトップアプリケーションをキャプチャする、そして、たとえばApp-VまたはXenApp用にアプリケーションをパッケージ化するための代替メカニズムを提供します。キャプチャとパッケージ化は、AppDNAとは別のマシンで行います。このマシンをセルフプロビジョニングクライアントマシンと呼び、マシンの種類は仮想、物理、またはVDIのどれでも構いません。

セルフプロビジョニングにより、AppDNAへのアクセス権を持たないアプリケーションの専門家がキャプチャ処理を実行できます。アプリケーションの専門家がAppDNAに依存せず都合の良いときにインストールできるように、AppDNA管理者が制御情報を準備して公開します。

セルフプロビジョニング機能は、デスクトップアプリケーションのすべての種類のインストールパッケージ（MSIおよび非MSI）およびApp-V（.sftおよび.appv）に使用できます。

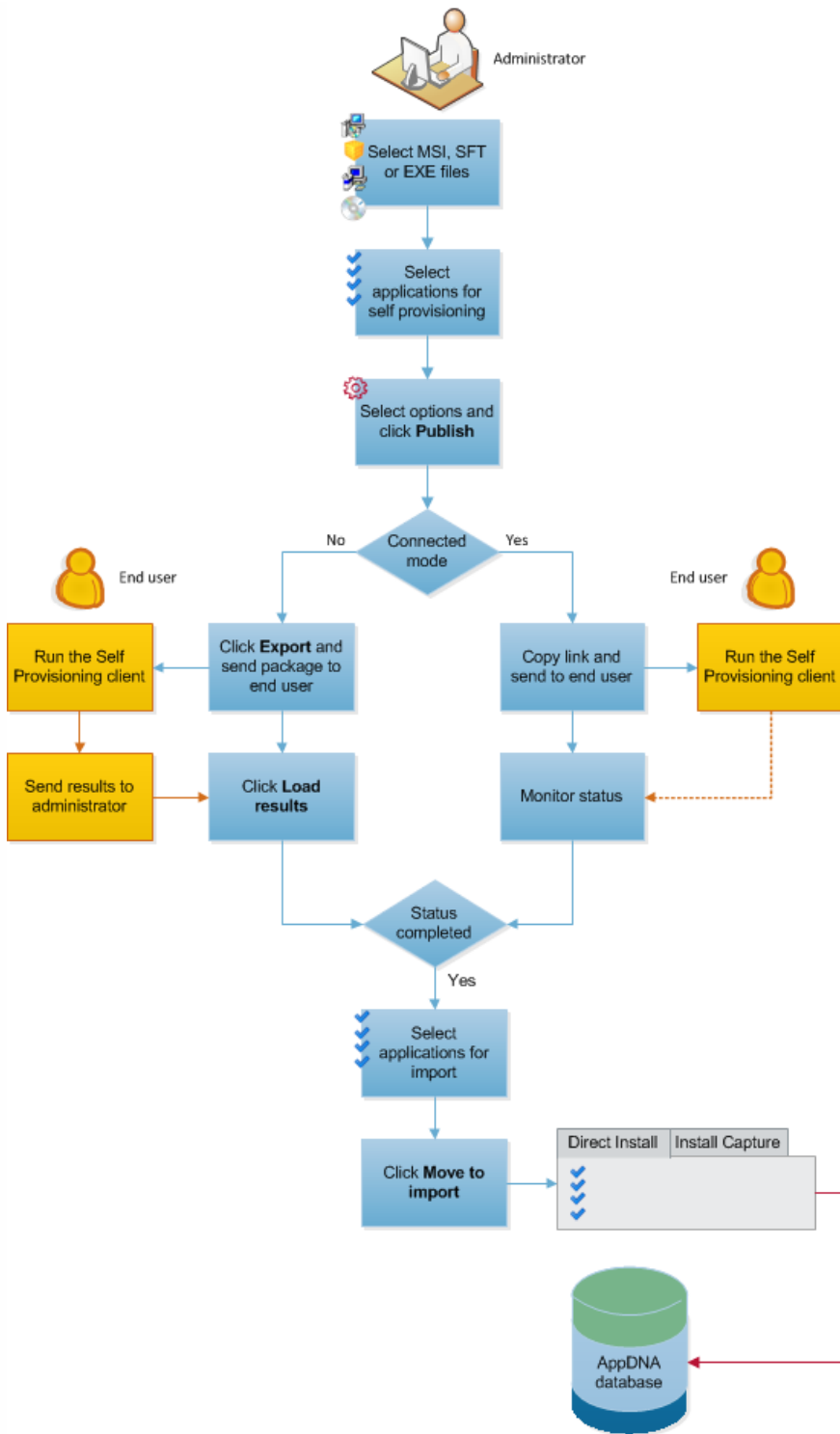
セルフプロビジョニングクライアントでは、[Install Capture](#)と似たアプローチがとられ、[実行プロファイル](#)によって制御されます。セルフプロビジョニングで使用できる実行プロファイルは、Install Captureで使用できる実行プロファイルをミラー化しています。デフォルトで、Snapshot実行プロファイルが使用されます。このプロファイルでは、セルフプロビジョニングマシンのスナップショットを作成し、アプリケーションをインストールし、マシンのスナップショットを再度作成します。Before snapshotとAfter snapshotにおけるマシンの状態の違いは、アプリケーションのインストールにより加えられた変更を表します。セルフプロビジョニングクライアントでこの情報を使用して、AppDNAにインポートするMSIファイルを作成します。

マシンを元の状態にリセットしないという点で、セルフプロビジョニング機能はInstall Captureと異なります。したがって、各キャプチャは新しいマシンで実行することをお勧めします。この違いにどう対処するかは管理者次第です。専用の物理マシンをセットアップすることも、マシンの状態を簡単にリセットできるVDIのような仮想化技術を使用することもできます。

セルフプロビジョニング機能は次の2つのモードで使用できます。

- **接続** - このモードでは、AppDNAクライアントとセルフプロビジョニングクライアントの両方がネットワークファイル共有にアクセスできます。
- **切断** - このモードでは、セルフプロビジョニングクライアントとAppDNAクライアントは異なるネットワーク上にあり、同じネットワークファイル共有にアクセスできません。このモードでは、AppDNAによりクライアント指示ファイルと実行プロファイルがパッケージ化され、管理者がこのパッケージを、たとえばFTPでエンドユーザーに渡します。次にエンドユーザーがセルフプロビジョニングクライアントの出力を、たとえばFTPで管理者に渡します。

次の図は、セルフプロビジョニング処理の概要を示しています。



注：クライアント指示ファイルは、セルフプロビジョニングクライアントがキャプチャまたはパッケージ化タスクを実行するために使用する制御ファイルです。クライアント指示ファイルは、エンドユーザーが対象の人間が読める指示ではありません。

管理

Oct 16, 2015

[Import Applications] 画面の [Self-Provisioning] タブを使用して、セルフプロビジョニング処理を管理します。接続モードを使用しているか、切断モードを使用しているかに応じて、手順が異なります。

[Self-Provisioning] タブを開くには、AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] > [Applications] の順に選択し、[Self-Provisioning] タブをクリックします。

重要：セルフプロビジョニング機能を使用するには、セルフプロビジョニング設定で出力パスを構成する必要があります。これにより、セルフプロビジョニングの指示ファイルの格納場所が定義されます。接続モードの場合は、セルフプロビジョニングクライアントが出力を格納する場所も定義されます。[Self-Provisioning] タブのツールバーの [Configuration] をクリックし、[Self-Provisioning] ページを開きます。

セルフプロビジョニングのためのアプリケーションの準備

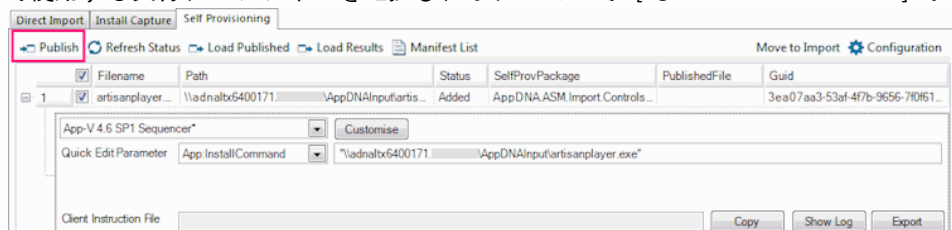
1. キャプチャするインストールファイルを選択します。Specify the location of the files using a UNC path, such as \\192.168.50.20\Source\win32-setup.exeのように、UNCパスでファイルの場所を指定します。接続モードでセルフプロビジョニングクライアントを使用する場合は、指定する場所にセルフプロビジョニングクライアントをホストするマシンからもアクセスする必要があります。

[Browse] をクリックして個別のファイルを選択したり、[Search] をクリックしてディレクトリ階層内で再帰的にファイルを検索したり、[Import from List] を使用したりすることができます。

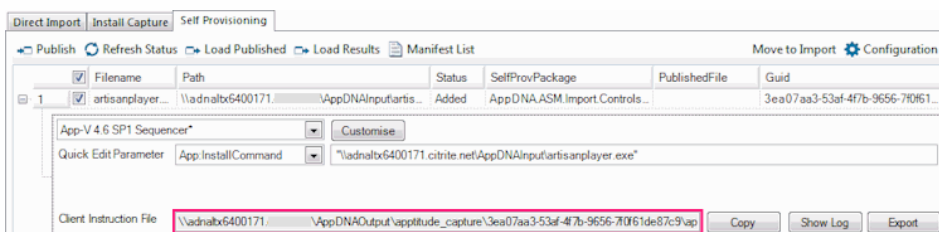
ファイルを選択すると、それらのファイルが表示されます。

2. 各アプリケーションについて、[Filename] 列左側の [+] をクリックしてアプリケーションのオプションを表示します。最初のドロップダウンリストで使用する実行プロファイルを選択し、オプションで [Quick Edit Parameters] ボックスに

パラメーターを入力します。



3. 含めるアプリケーションを選択して [Publish] をクリックします。選択したアプリケーションの既存の状態が上書きされるという警告が表示されます。
4. [Yes] をクリックして続行します。選択した各アプリケーションのクライアント指示ファイルの詳細が画面に表示されます。



5. 接続モードを使用している場合は、次の手順を実行して、セルフプロビジョニングを実行するユーザーにクライアント指示ファイルを送信します。

1. クライアント指示ファイルの右側の [Copy] をクリックして、ファイルの名前と場所をクリップボードにコピーします。

2. セルフプロビジョニングを実行するユーザーに、コピーした情報を送信します。ユーザーは、クライアント指示ファイルの名前と場所をセルフプロビジョニングクライアントに貼り付ける必要があります。
6. 切断モードを使用している場合は、クライアント指示ファイルの右側の [Export] をクリックして、セルフプロビジョニングクライアントを実行するエンドユーザーに送信するパッケージを作成します。 [Export Self-Provisioning Package] ダイアログボックスが開きます。

- **Input file from client perspective** – アプリケーションのインストールパッケージの名前と場所をセルフプロビジョニングクライアントマシンに対して相対的に指定します。
- **Folder where the capture results are to be stored** – セルフプロビジョニングクライアントがアプリケーションキャプチャの出力を書き込むデフォルトの場所を指定します。エンドユーザーは、アプリケーションのキャプチャ中に別の場所を指定できます。これをセルフプロビジョニングクライアントマシンに対して相対的に指定したことを確認します。
- **Exported package path** – セルフプロビジョニングクライアントを実行するエンドユーザーに送信するパッケージの名前と場所を指定します。

次に、スタンドアロンのセルフプロビジョニングクライアントでセルフプロビジョニングを実行するユーザーに、パッケージとインストールファイルを送信する必要があります。

状態の監視

接続モードのセルフプロビジョニングクライアントでの操作状態を表示するには、次の手順に従います。

1. ツールバーで [Refresh status] をクリックします。接続モードであれば、[Status] 列が更新されてセルフプロビジョニングクライアントでの操作結果が表示されます。
2. [Status] が [Completed] になったら、アプリケーションをAppDNAにインポートできます。手順については、次の「完了したアプリケーションのインポート」を参照してください。
3. 操作が失敗した場合は、[File name] 列左側の [+] をクリックしてアプリケーションのオプションを表示します。次に、[Show Log] をクリックして処理ログを確認します。

切断モードにおけるAppDNAへの結果のロード

切断モードの場合は、セルフプロビジョニングクライアントにより installer.exe\ppcapture_pkg.result という形式の名前の出力ファイルが作成されます。ここで、installer.exe はインストールファイルの名前です。

1. エンドユーザーがAppDNA管理者に、たとえばFTPでファイルを送信します。
2. 結果ファイルを適切な場所に保存します。
3. 必要であれば、AppDNAを起動します。
4. サイドバーから [Import & Analyze]、[Applications] の順に選択します。
5. [Self-Provisioning] タブをクリックします。
6. [Self Provisioning] タブのツールバーで [Load Results] をクリックします。
7. [Search for applications] で、出力ファイルの場所を指定して [Search] をクリックします。
出力ファイルが見つかったアプリケーションの状態が [Published] から [Completed] に変わります。
8. これで、次の手順に従って [Completed] 状態のアプリケーションをAppDNAにインポートできるようになりました。

完了したアプリケーションのインポート

1. AppDNAにインポートするアプリケーションを選択します。アプリケーションの状態が [Completed] である必要があります。
2. [Move to Import] をクリックします。アプリケーションが [Direct Import] タブに移動し、[Self Provisioning] タブから削除されます。通常の方法で、[Direct Import] タブでアプリケーションをインポートできます。

[Self-Provisioning] ツールバー







Oct 16, 2015

[Import Applications] 画面の [Self-Provisioning] タブを使用して、セルフプロビジョニング処理を管理します。接続と切断のどちらのモードを使用するかに応じて、手順が異なります。

[Self-Provisioning] タブを開くには：

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Applications] の順に選択します。
2. [Self-Provisioning] タブをクリックします。

[Import Applications] 画面の [Self-Provisioning] タブのツールバーには、次のオプションがあります。

-  **Publish** - 選択したアプリケーションについて、セルフプロビジョニングクライアントの指示ファイル (appcapture.descと呼びます) を作成します。セルフプロビジョニングクライアントで指示ファイルを使用して、AppDNAにインポートするアプリケーションをキャプチャします。
-  **Refresh status** - 画面上のアプリケーションの状態を更新します。これにより、接続モードで実行されたセルフプロビジョニングキャプチャの結果で画面が自動的に更新されます。
-  **Load published** - 前に公開されたアプリケーションをロードします。検索オプションを指定して [Search] をクリックします。公開された指示ファイルがある一致するアプリケーションが検索され、 [Self-Provisioning] タブに一覧表示されます。アプリケーションは、その状態およびAppDNAにインポート済みかどうかにかかわらず一覧表示されます。
-  **Load results** - 切断モードの場合は、エンドユーザーから送信される結果でアプリケーションの状態を更新します。エンドユーザーから送信されるセルフプロビジョニングの出力ファイルの場所を指定して、 [Search] をクリックします。
-  **Manifest list** - すべての公開済みクライアント指示ファイルと、対応するアプリケーションの一覧が含まれるCSV形式のテキストファイルを作成します。この一覧を使用して、アプリケーションの専門家のユーザーに送信する電子メールを作成したりすることができます。
- Move to Import** - 状態が [Completed] の選択したアプリケーションを、通常の方法でAppDNAにインポートするために [Direct Import] タブに移動します。アプリケーションは [Self-Provisioning] タブから削除されます。
-  **Configuration** - [Settings] ダイアログボックスの [Self Provisioning] ページを開きます。詳しくは、「[セルフプロビジョニングの設定](#)」を参照してください。

セルフプロビジョニングクライアント

Oct 16, 2015

AppDNAにインポートするアプリケーションをキャプチャーするには、セルフプロビジョニングクライアントを使用します。セルフプロビジョニングクライアントは、AppDNAがインストールされているマシンとは別のマシンで実行します。このクライアントソフトウェアは、仮想、物理、またはVDIなど、任意の種類のマシンにインストールできます。

セルフプロビジョニングクライアントは2つのモードで実行できます。

- **接続** - このモードでは、セルフプロビジョニングクライアントはAppDNAによってクライアント指示ファイルが格納されている場所にアクセスできます。このモードの場合は、次のような形式のクライアント指示ファイルのリンクを管理者から受け取ります。

```
\\server name\share\25d00eda-8203-4472-9ebf-0fb25107485a\appcapture.desc
```

ここで、server name\shareは指示ファイルのパスの最初の部分です。

- **切断** - このモードでは、セルフプロビジョニングクライアントはAppDNAによってクライアント指示ファイルが格納されている場所にアクセスできません。このモードの場合は、次のような名前のパッケージファイルを（おそらくFTPで）管理者から受け取ります。

```
installation file name.appcapture_pkg
```

ここで、installation file nameはアプリケーションインストーラーの名前です。このインストーラーも提供されます。

セルフプロビジョニングクライアントのインストール

Oct 16, 2015

AppDNAセルフプロビジョニングクライアントは、仮想、物理、またはVDIのどの種類のマシンにもインストールできます。

サポートされるオペレーティングシステム

- Microsoft Windows 8.1 (32ビット版および64ビット版)
- Microsoft Windows 8 (32ビット版および64ビット版)
- Microsoft Windows 7 SP1 (32ビット版および64ビット版)
- Microsoft Windows Vista SP2 (32ビット版および64ビット版)
- Microsoft Windows XP SP3 (32ビット版)
- Microsoft Windows XP SP2 (64ビット版)
- Microsoft Windows Server 2012 R2
- Microsoft Windows Server 2012
- Microsoft Windows Server 2008 R2 SP1
- Microsoft Windows Server 2008 SP2 (32ビット版および64ビット版)
- Microsoft Windows Server 2003 SP2 (32ビット版および64ビット版)

Windowsの互換性をテストするためにWindowsアプリケーションをキャプチャするときは、セルフプロビジョニングクライアントマシンのオペレーティングシステムが、アプリケーションが現在動作しているオペレーティングシステムと同じである必要があります。たとえば、Windows XPからWindows 8.1への移行を準備する場合は、オペレーティングシステムがWindows XPである必要があります。ただし、セルフプロビジョニングを使用してApp-VシーケンスまたはXenAppパッケージを作成する場合は、オペレーティングシステムは通常、シーケンスまたはパッケージの対象オペレーティングシステムである必要があります。

前提条件

- Microsoft .NET Framework 4.0および.NET Framework 3.5
- AppDNAで提供される以下のインストーラー：
 - Citrix AppDNA Self-Provisioning Client.msi
 - Citrix AppDNA VM Configuration.msi

32ビット版のインストーラーは、C:\Program Files\Citrix\AppDNA\Toolsにインストールされます。64ビット版のインストーラーは、C:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Toolsにインストールされます。

注：一部の実行プロファイルでは、セルフプロビジョニングクライアントマシンに追加のソフトウェアをインストールする必要があります。たとえば、App-Vシーケンスを作成するにはApp-V Sequencerをインストールする必要があります。同様に、XenAppプロファイルを作成するにはXenApp Profilerをインストールする必要があります。このソフトウェアは、AppDNAとは別に提供されます。

セルフプロビジョニングクライアントのインストール

セルフプロビジョニングクライアントマシン上に、上記の2つのMSIをインストールします。デフォルトの設定をそのまま適用してください。

セルフプロビジョニングクライアントのアップグレード

AppDNAを新しいバージョンにアップグレードするときは、セルフプロビジョニングクライアントマシンも新しいバージョンのAppDNAツールでアップグレードする必要があります。

1. Windowsタスクマネージャーを起動します。

2. Windowsタスクマネージャーの [アプリケーション] タブで [Remote Admin] をクリックし、 [タスクの終了] をクリックします。
3. [コントロールパネル] > [プログラムと機能] を使用して、既存のセルフプロビジョニングクライアントとVM構成ツールをアンインストールします。
4. 新しいバージョンのツールをインストールします。

アプリケーションのキャプチャ

Oct 16, 2015

このトピックでは、セルフプロビジョニングクライアントを使用して、アプリケーションをキャプチャする方法について説明します。

1. セルフプロビジョニングクライアントを起動するには、Windowsの[スタート]画面/メニューから、[Citrix AppDNA]、[AppCapture]の順に選択します。
2. 管理者が指定したファイルを入力するか、参照します。ファイルはappcapture.descという名前のファイルか、ファイル拡張子がappcapture_pkgであるパッケージの可能性があります。
3. アプリケーションのキャプチャ処理を開始するには、緑の矢印をクリックします。
Before Snapshotの段階では、コマンドプロンプトのウィンドウが開き、進行状況のメッセージが表示されます。
4. インストールコマンドを編集することもできます。ここで、緑の矢印をクリックして、インストールを開始します。
5. 通常は、アプリケーションのインストールと構成を手動で行う必要があります。
6. キャプチャの構成（具体的には、どの実行プロファイルを使用するか）によっては、ScrnCapという画面キャプチャユーティリティが開始される可能性があります。これは、画面右下隅に表示されます。このユーティリティにより、ユーザーがクリックする、インストールと構成のすべてのウィンドウのスクリーンショットが取得されます。インストールまたは構成の段階についてコメントを追加するには、[Snap]をクリックします。
インストール時にコンピューターの再起動が必要な場合は、[コンピューターを後で再起動します]などのオプションを選択します。キャプチャ処理中にマシンを再起動した場合、キャプチャが失敗する可能性があります。

インストールが完了すると、AppDNAにインポートするためのMSIファイルが生成されます。また、出力ファイルの場所を指定を促すメッセージが表示される場合があります。

出力

アプリケーションキャプチャの出力内容は、使用する実行プロファイルによって異なります。通常は、次のものが含まれます。

- 生成されたMSIファイル
- 外部ソースファイル
- ログファイル
進行状況ログの表示について詳しくは、「[Self-Provisioningの監視](#)」を参照してください。
- ScrnCapを使用した場合は、インストールと構成のスクリーンショット

出力が格納される場所は、次のようにファイルの命名規則によって異なります。

- ファイル名がappcapture.descの場合、セルフプロビジョニングクライアントはこのファイルと同じ場所に出力を格納します。
- ファイル拡張子がappcapture_pkgのパッケージである場合、最後の手順で指定した場所に出力ファイルが作成されます。この出力ファイルの名前は、installer.exe.appcapture_pkg.resultという形式です。ここで、installer.exeはインストールファイルの名前です。AppDNAにインポートするため、出力ファイルをAppDNA管理者に提供する必要があります。

Self-Provisioningの監視

Oct 16, 2015

セルフプロビジョニングクライアントを使用してアプリケーションをキャプチャする場合、いつでも処理のログを表示できます。[Progress and Logs] のログを開くには、ウィンドウ右側の緑の矢印をクリックします。ログを閉じる場合は、ログの上の緑の矢印をクリックします。

Error : The directory name is invalid

第1段階でこのエラーが発生する場合は、通常、セルフプロビジョニングクライアントでAppDNA VM構成ツールのいずれかが見つからないことを意味します。

AppToolsFolder置き換え可能パラメーターで適切なフォルダーを参照する必要があります。これを行うには、[Replaceables] タブを使用します（「[セルフプロビジョニングの設定](#)」を参照）。その後で、アプリケーションを再公開または再エクスポートしてください（「[セルフプロビジョニングの管理](#)」を参照）。

[Import Applications] ツールバー

Oct 16, 2015

このトピックでは、[Import Applications] 画面のツールバーについて説明します。この画面を使用して、AppDNAにデスクトップアプリケーションをインポートします。

[Import Applications] 画面を開くには：

- サイドバーから [Import & Analyze]、[Applications] の順に選択します。

メインツールバー

Browse - 個々のインストールファイルを選択するために使用します。[Direct Import] タブで.msi、.sft、または.appv以外のファイルを選択すると、そのファイルは自動的に [Install Capture] タブに追加されます。同様に、[Install Capture] タブで.msi、.sft、または.appvファイルを選択すると、そのファイルは自動的に [Direct Import] タブに追加されます。

Search - ディレクトリ構造内で、さまざまな種類のファイルを再帰的に検索するために使用します。オプションで、.mst 変換ファイルも検索したり、アプリケーションを追加するグループを指定したりできます。[Direct Import] タブまたは [Install Capture] タブでこのボタンをクリックすると、.msi、.sft、および.appvファイルは自動的に [Direct Import] タブに追加され、それ以外のファイルは自動的に [Install Capture] タブに追加されます。詳しくは、「[アプリケーションの検索](#)」を参照してください。

Import from List - インポートするアプリケーションの一覧を定義する.csvファイルを選択します。詳しくは、「[一覧からのインポート](#)」を参照してください。

Select - 失敗したインポート、警告付きのインポート、成功したインポートを選択できます。

Backup - 後で元の状態に戻せるように、[Direct Import] タブおよび [Install Capture] タブのアプリケーションの一覧のバックアップを作成します。

Restore - 前にバックアップを作成したアプリケーション一覧を復元します。

Delete - 現在のタブから選択したアプリケーションを削除します。

Cancel - 現在実行中の処理をキャンセルします。

Import - 選択したアプリケーションをAppDNAにインポートします。このボタンをクリックすると、[Direct Import] タブと [Install Capture] タブで選択したすべてのアプリケーションがインポートされます。[Install Capture] タブでアプリケーションを選択した場合は、仮想マシン構成の一連のチェックがデフォルトで実行されます。これらのチェックは、必要に応じて、[\[Install Capture Settings\]](#) で無効にすることができます。

Analyze - インポート後にデータを分析します。または、後でアプリケーションを分析できます。詳しくは、「[アプリケーションの分析](#)」を参照してください。

[Direct Import] のツールバー

[Direct Import] ツールバーには次のオプションがあります。

Select All MSTs - インポート時に.msiファイルに.mstファイルを自動的に適用するには、このチェックボックスをオンにします。.mstファイルと.msiファイルは同じ場所に保存されている必要があります。.mstファイルは、.msiファイルを変換つまり

操作するために使用します。

Expand All MSTs - インポートする.msiファイルを選択したときに同じディレクトリに.mstファイルがある場合は、アプリケーション名の左側に [+] が表示されます。 [+] をクリックすると、関連する.mstファイルが表示され、個別に選択することができます。 [+] をクリックしなくても自動的にすべての.mstファイルが表示されるようにするには、このオプションをオンにします。

Import into Group - 作成済みのグループを一覧表示します。選択したアプリケーションをインポートするときに自動的に追加するグループを選択します。詳しくは、「[グループ](#)」を参照してください。

Configuration - クリックすると [\[Import and Analyze Settings\]](#) が開きます。

一覧からのインポート

Oct 16, 2015

AppDNAにインポートするアプリケーションの一覧をコンマ区切り値 (.csv) ファイルを使用して定義することができます。このファイルには、次の列を含める必要があります。

- **Filename** - インポートするファイルの名前とパスです。Install CaptureとセルフプロビジョニングについてはUNCパスで指定する必要があります。
- **Silent switch** - この列を使用して、「/s」でサイレントスイッチを指定します。
- **Execution profile** - Install Captureとセルフプロビジョニングについては、使用する実行プロファイル指定します。
- **Group** - この列を使用して、アプリケーションのインポート先グループを指定します。グループが入れ子になっている場合は、RootGroup\ChildGroup\ChildGroupの形式でグループを指定します。
- **AppID** - この列を使用してアプリケーションIDを指定します。
- **<アプリケーション属性>** - アプリケーション属性を作成すると、テンプレートインポートファイルに追加されます。これらの列を使用して属性データを提供します。
 - インポートする日付は、日付の国際標準表記法 (YYYY-MM-DD) に従っている必要があります。Microsoft Excelの日付形式のデフォルト設定は、ロケールによって異なります。必ずE付列の書式を確認して、必要に応じて変更してください。
 - インポートするリスト値は、属性に対して定義されているリスト項目と一致しない場合は無視されます。
 - リストの種類がRAGであれば、許容値はRed、Amber、およびGreenです。これらの値で大文字と小文字の区別はありません。

ヒント： [Import an Application List] ダイアログボックスからテンプレートインポートファイルをダウンロードできます。このダイアログボックスを開くには、[Import Applications] 画面のツールバーの [Import from List] をクリックします。

英語以外の文字

ファイルに標準の印刷可能なASCII文字以外の文字が含まれている場合は、UTF-8エンコードを使用してファイルを保存する必要があります。

例

以下の.csvファイルの例では、最初の行でアプリケーション属性の一種であるAppIDを含む列を定義しています。2番目の行には、Generalアプリケーショングループにインポートする.msiファイルが指定されています。3番目の行には、サイレントスイッチとSnapshot実行プロファイルを使用して、Generalアプリケーショングループにインポートする.exeファイルが指定されています。

Filename,Silent Switch,Execution Profile,Group,AppID \\machine01\25appTest\Dreamweaver_MX_6.0_P1.1.msi,,,General \\machine171\AppDNAInput\burn4free_setup.exe,/s,Snapshot,General
ファイルに指定したアプリケーションのインポート

1. [Import Applications] 画面のツールバーで、 [Import from List] をクリックします。
2. ファイルを指定します。
3. アプリケーション属性をインポートする場合は [Ignore attribute errors] 設定を確認します。
エラーとは、間違ったデータ、不足したデータ、または一致しない列のことです。今回のインポートでエラーを無視するかどうかを選択します。
4. [Import] をクリックします。 [Self-Provisioning] タブを開いていた場合は、すべての種類のファイルが [Self-Provisioning] タブに一覧表示されます。 [Direct Import] タブまたは [Install Capture] タブを開いていた場合は、.msi、.sft、および.appvファイルは [Direct Import] タブに、そのほかのすべての種類のファイルは [Install Capture] タブに一覧表示されます。
5. 通常の方法でアプリケーションを選択し、ツールバーの [Import] をクリックします。

注： Webアプリケーションは、 [Import Web Applications] 画面のインポート一覧を使用してインポートすることもできます。

アプリケーションの検索

Oct 16, 2015

[Search for Applications] ダイアログボックスを使用して、ディレクトリ構造内で、AppDNAにインポートするアプリケーションを検索します。指定された場所に存在する、入力した条件に一致するファイルが検索され、[Import Applications] 画面の適切なタブに一覧表示されます。

このダイアログボックスを開くときに [Self-Provisioning] タブを開いていた場合は、すべての種類のファイルが [Self-Provisioning] タブに一覧表示されます。このダイアログボックスを開くときに [Direct Import] タブまたは [Install Capture] タブを開いていた場合は、.msi、.sft、.appvファイルは [Direct Import] タブに、そのほかのすべての種類のファイルは [Install Capture] タブに一覧表示されます。

[Search for Applications] ダイアログボックスを開くには、[Import Applications] 画面のツールバーの [Search] をクリックします。

Folder to search - 検索するフォルダーを指定します。[Browse] をクリックしてフォルダーを参照します。

Recursive - 上に指定するフォルダーのサブフォルダーを検索する場合は、このチェックボックスをオンにします。

File name - wildcard * - このテキストボックスを使用して、検索するファイル名のすべてまたは一部を指定します。ワイルドカード文字としてアスタリスク (*) を使用できます。たとえば、ABC*は「ABC」で名前が始まり、ほかの文字が続かない、または任意の数の文字が続くファイルと一致します。*ABC*はファイル名のいずれかの部分に「ABC」が含まれるファイルと一致します。検索では大文字と小文字が区別されません。デフォルト値は「*」で、すべてのファイル名と一致します。

MSI - .msiパッケージを見つけるには、このチェックボックスをオンにします。

NON-MSI - そのほかの種類のインストールパッケージを見つけるには、このチェックボックスをオンにします。検索対象のインストールファイルの種類を指定するには、ドロップダウンリストを使用します。.exe、.sft、.appv、.bat、またはこれらの種類の任意の組み合わせを指定できます。

Options - 追加オプションを表示する場合にクリックします。これらは2つのタブに整理されています。

- **Import options** - このタブには、アプリケーションに適用されるオプションがあります。
 - **Search for associated MSI transforms (.MST files)** - .mstファイルを検索する場合は、このチェックボックスをオンにします。.mstファイルは新しい順に列挙されます。
 - **Import into group** - 作成済みのグループを一覧表示します。アプリケーションをインポート時に自動的に追加するグループを選択します。グループの作成について詳しくは、「[グループの管理](#)」を参照してください。
- **Batch import** - このタブには、バッチでインポートするアプリケーションを選択するオプションがあります。これは、フォルダー（およびそのサブフォルダー）に非常に多数のアプリケーションが含まれる場合に便利です。
 - **Import in batches** - バッチ処理に含めるアプリケーションを選択するにはこのチェックボックスをオンにします。
 - **Applications in a batch** - 1つのバッチで処理するアプリケーション数をここに指定します。その後はこのダイアログボックスを使用して、一度に1つのバッチでインポートするアプリケーションを選択できます。すべてのアプリケーションがインポートされるまで、[Batch number] ボックスの数をインポートのたびに1つずつ増やします。
 - **Batch number** - バッチ処理でアプリケーションをインポートする場合は、インポートのために選択するバッチ番号をここに指定します。

設定

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスには、AppDNAの全般的なオプションが含まれます。設定はページにグループ化されています。左側のサイドバーを使用して、ページを切り替えます。[Save] をクリックして変更を保存します。

画面右上のヘルプアイコンをクリックすると、開いているページのヘルプが開きます。

[Settings] ダイアログボックスを開くには、次の手順に従います。

- メニューから [Edit] 、 [Settings] の順に選択します。

AppDNAの設定

- [Reporting](#)
- [検出](#)
- [Active Directory](#)
- [Configuration Manager](#)
- [ファイル](#)
- [インポートと分析](#)
- [Webインポート](#)
- [セルフプロビジョニング](#)
- [Install Capture](#)
- [Login](#)
- [オペレーティングシステムイメージの構成](#)

インポートと分析の設定

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスの [Import and Analyze] ページを使用して、[Import Applications] 画面の [Direct Import] タブから実行されるインポート処理をカスタマイズします。[Settings] ダイアログボックスを開くには、[Edit]、[Settings] の順に選択します。

オプション：

Auto analyze - 製品版ライセンスでは、このチェックボックスをオフにしない限り、アプリケーションをインポートしたらすぐにアプリケーションの分析が開始されます。評価版のライセンスでは、分析を手作業で開始する必要があります。複数ユーザーが同時にインポートを実行する場合は、データベースロックを防ぐためにこのチェックボックスをオフにすることをお勧めします。

Finger print override - デスクトップアプリケーションを再インポートするたびに、インポート済みのアプリケーションとは別個のアプリケーションとみなすには、このチェックボックスをオンにします。ただし、レポートを表示できるアプリケーションの数はAppDNAのライセンスで制限されるため、ライセンスに影響があります。デスクトップアプリケーションのフィンガープリントの変化が10%以下である場合に、アプリケーションを再インポートするときにインポート済みのアプリケーションと同じアプリケーションとみなすには、このチェックボックスをオフにします。これはデフォルトの動作であり、修復処理の一環としてデスクトップアプリケーションを変更して再インポートすると、通常は同じアプリケーションであるとみなされることを意味します。

Server side queuing - サーバー上のキューの処理を有効にするには、このチェックボックスをオンにします。サーバー上の先入れ先出し法のキューにタスクが追加され、同時に複数のインポートと分析を実行する場合の成功率が上がる可能性があります。データベースのデッドロックとリソースの競合の可能性が下がり、AppDNAの応答性を高めます。

Simultaneous imports (1-3) - 同時に発生するインポートの数を制御します。最適な値はハードウェア構成によって異なります。この設定の値を大きくした後でデッドロックエラーによるインポートの失敗が発生した場合は、値を小さくしてください。デフォルトおよび推奨される設定は3です。

Select all MSTs - インポート時、MSIファイルにMSTファイルを自動的に適用するには、このチェックボックスをオンにします。この設定は、MSTファイルとMSIファイルが同じ場所に格納されている場合にのみ適用されます。MSTファイルは、MSIファイルを変換つまり操作するために使用します。MSTファイルは、MSIではないインストールファイルには無関係です。

Expand all MSTs - インポートするMSIファイルを選択したときに同じディレクトリにMSTファイルがある場合は、[Import Applications] 画面のアプリケーション名の左側に [+] が表示されます。 [+] をクリックすると、関連するMSTファイルが表示されます。 [+] をクリックしなくても自動的にすべてのMSTファイルが表示されるようにするには、このオプションをオンにします。

Preserve log files - ログファイルを保存するには、このチェックボックスをオンにします。問題の診断のため、このオプションが役立つことがあります。たとえばディスクスペースを節約するためにログファイルを保存しない場合は、このチェックボックスをオフにします。

SFT intermediate folder - .sftまたは.appvファイルをインポートするときは、中間フォルダーにファイルが展開されます。抽出されたファイルを保持するには、中間フォルダーの場所をここに指定します。場所を指定しない場合は一時フォルダーが使用され、.sftと.appvがインポートされるたびにクリアされます。

AppDNAでは、.sftおよび.appvファイルを展開するときには、その内部ディレクトリ構造が保持されます。これにより、フ

イルパスの文字数がWindowsで許容される最大文字数を超過し、その結果、インポートが失敗する場合があります。ここで、できる限り短いファイルパスを設定することによって、この問題が発生する可能性を減らすことができます。

Validation profile (*.cub) - インポート時にMSIファイルのICE検証を実行するには、CUBファイルの場所をここに指定します。CUBファイルにはICE検証規則が格納されます。

Validation engine - インポート時にMSIファイルのICE検証を実行するには、Msival2.exeのようなパッケージ検証ツールの場所をここに指定します。

Additional parameters - ICE検証エンジンのコマンドラインパラメーターをここに指定します。Msival2.exeのパラメーターについて詳しくは、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/windows/desktop/aa370504\(v=vs.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/windows/desktop/aa370504(v=vs.85).aspx)を参照してください。

Perform ICE validation - インポート処理中にICE (Internal Consistency Evaluator) 検証を実行して、MSIファイルで発生する可能性のある問題を検出するには、このチェックボックスをオンにします。

ファイルの設定

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスには、AppDNAの全般的なオプションが含まれます。このダイアログボックスを開くには、メニューから [Edit] 、 [Settings] の順に選択します。

[Settings] ダイアログボックスの [Files] ページのオプションは次のとおりです。

Log File Location - ログファイルの格納先を設定します。

Temporary File Location - 一時ファイルの格納先を設定します。

[Save] をクリックして変更を保存します。

Install Captureの設定

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスには、AppDNAの全般的なオプションが含まれます。[Settings] ダイアログボックスを開くには、メニューから [Edit]、[Settings] の順に選択します。

このダイアログボックスで変更を加えたら、[Save] をクリックして変更を保存します。

[Virtual Machines] タブ

[Settings] ダイアログボックスの [Install Capture] ページの [Virtual Machines] タブを使用して、Install Captureおよび Forward Pathのタスクで使用する仮想マシン構成を表示、追加、編集、および削除します。各構成には、[Import Applications] 画面の [Install Capture] タブの [Select VM Configuration] ボックスの一覧に表示される一意の名前がありません。異なる要件を満たすため、複数の構成を作成できます。

[Virtual Machines] タブのツールバーには次のオプションがあります。

- **New** - 新しい仮想マシン構成を追加します。[仮想マシン構成](#)ウィザードが開きます。
- **Edit** - 仮想マシン構成ウィザードを開きます。ここで、選択した構成に必要な修正を加えられます。仮想マシン構成はこの方法で編集することをお勧めします。このボタンをクリックする前に、一覧から構成を選択します。
- **Advanced** - 既存の構成の設定を表示し編集するための、[Virtual Machine Configuration] ダイアログボックスが開きます。このボタンをクリックする前に、一覧から構成を選択します。詳しくは、「[\[Virtual Machine Configuration\] ダイアログボックス](#)」を参照してください。
- **Delete** - 選択した構成を削除します。
- **Set as default** - 仮想マシン構成が複数ある場合、このボタンを使用してデフォルトの構成を設定します。この構成は、[Import Applications] 画面の [Install Capture] タブのドロップダウンリストでデフォルトで選択されます。

注：仮想マシン構成はユーザー単位で格納されます。これは、このダイアログボックスおよび [Import Applications] 画面の [Install Capture] タブのボックスの一覧には、現在ログオンしているAppDNAユーザーアカウントで作成した仮想マシン構成のみが表示されるということを意味します。

[Execution Profiles] タブ

実行プロファイルは、Install Capture処理の実行中に仮想マシンで実行されるタスクとリソースを制御します。上級ユーザーは、[Execution Profiles] タブで実行プロファイルを作成および編集できます。

[Execution Profiles] タブには次のオプションがあります。

- **New** - 新しい実行プロファイルを追加します。[\[Edit an execution profile\]](#) ダイアログボックスが開きます。
- **Edit** - [Edit Execution Profile] ダイアログボックスを開きます。ここで、選択した実行プロファイルに必要な変更を加えられます。
- **Delete** - 選択した実行プロファイルを削除します。
- **Set as Default** - 選択した実行プロファイルをデフォルトの実行プロファイルに設定します。これは、たとえば [Import Applications] 画面の [Install Capture] タブの実行プロファイルのドロップダウンボックスで、デフォルトで選択されるということを意味します。
- **Import** - XMLファイルから実行プロファイルをインポートします。前に保存したXMLファイルでも、Citrixが提供するXMLファイルでも構いません。
- **Export** - XMLファイルに実行プロファイルをエクスポートします。この機能を使用して、実行プロファイルを変更する前にバックアップを作成することをお勧めします。

[Settings] タブ

[Install Capture Settings] の [Settings] タブには次の設定があります。

Skip virtual machine system check – [Install Capture] タブでアプリケーションをインポートする際、[Import Applications] 画面で [Import] をクリックしたときにAppDNAによる仮想マシン構成の確認を行わない場合は、このチェックボックスをオンにします。確認を有効にする場合はこのチェックボックスをオフにします。

Self-Provisioningの設定による

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスには、AppDNAの全般的なオプションが含まれます。[Settings] ダイアログボックスを開くには、メニューから [Edit]、[Settings] の順に選択します。

[Settings] ダイアログボックスの [Self-Provisioning] ページを使用して、セルフプロビジョニングを構成し、スタンドアロンのセルフプロビジョニングクライアントをユーザーに表示する方法をカスタマイズします。たとえば、ようこそ、完了、およびエラーのテキストや、会社のロゴも追加できます。

このダイアログボックスで変更を加えた後、[Save] をクリックして変更を保存します。

[全般] タブ

Output Path -デフォルトの値 (\\\\appdna_capture) を出力を共有する場所のパスに置き換えます。これにより、セルフプロビジョニングクライアントの指示ファイルの格納場所が定義されます。接続モードの場合は、セルフプロビジョニングクライアントが出力を格納する場所も定義されます。

Logo -ユーザーがスタンドアロンのセルフプロビジョニングツールを実行するときに表示する、会社のロゴを追加します。

[Execution Profiles] タブ

実行プロファイルにより、セルフプロビジョニングクライアントマシンで実行されるタスクとリソースが制御されます。

[Execution Profiles] タブには、既に存在する実行プロファイルが一覧表示されます。各実行プロファイルには、プロファイルの識別に使用する一意の名前があります。この名前は、たとえば、[Import Applications] 画面の [Self-Provisioning] タブの実行プロファイルのボックスの一覧に表示されます。

[Execution Profiles] タブには次のボタンがあります。

New -新しい実行プロファイルを追加します。[Edit an execution profile] ダイアログボックスが開きます。

Edit - 選択した実行プロファイルを編集します。[Edit an execution profile] が開き、ここで、選択した実行プロファイルに必要な修正を加えられます。

Delete - 選択した実行プロファイルを削除します。

Set as Default - 選択した実行プロファイルをデフォルトの実行プロファイルに設定します。これは、[Import Applications] 画面の [Self-Provisioning] タブの実行プロファイルのボックスの一覧で、デフォルトで選択されるということの意味します。

Import -XMLファイルから実行プロファイルをインポートします。前に保存したXMLファイルでも、Citrixが提供するXMLファイルでも構いません。

Export -XMLファイルに実行プロファイルをエクスポートします。この機能を使用して、実行プロファイルを変更する前にバックアップを作成することをお勧めします。

[Replaceables] タブ

[Self-Provisioning Settings] の [Replaceables] タブを使用して、セルフプロビジョニングツールで使用する実行プロファイルの置き換え可能パラメーターの値を定義します。ただし、ここで定義する置き換え可能パラメーターの値は、実行プロファイル自体または [Import Applications] 画面の [Quick Edit Parameter] ボックスで明示的に定義される置き換え可能パラメーターの値によって上書きされます。

置き換え可能パラメーターは、実行時に提供される値で置き換えられるプレースホルダーです。実行プロファイルに置き換え可能パラメーターを含めるときの構文は\$(replaceable_name)です。ここで、replaceable_nameは置き換え可能パラメーターの名前です。

AppToolsFolder置き換え可能パラメーターは、Citrix AppDNA VM構成ツールのMSIによりセルフプロビジョニングクライアントマシンにインストールされるツールの場所を指定するために使用します。デフォルトでは、これらはC:\Program Files\Citrix\AppDNA\VM Configuration (64ビットマシンの場合はC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\VM Configuration)にインストールされます。AppToolsFolder置き換え可能パラメーターのデフォルト値は、%APPDNAVMCONFIG%環境変数を使用します。これは、ツールが実際にインストールされた場所を格納します。ツールがインストールされたときにAppDNA VM構成ツールのMSIによって作成されます。

セルフプロビジョニングのために置き換え可能パラメーターの値を定義するには、次のいずれかの手順に従います。

- 一覧に値を変更する置き換え可能パラメーターがある場合は、それを選択して[Edit] をクリックします。[Edit Text] ダイアログボックスが開きます。ここで、新しい値を入力したり貼り付けたりできます。
- 一覧に値を変更する置き換え可能パラメーターがない場合は、[New] をクリックします。[Edit Replaceable] ダイアログボックスが開きます。ここで、新しい置き換え可能パラメーターと値を入力できます。

内部的に使用される置き換え可能パラメーターを、次の一覧に示します。これらの置き換え可能パラメーターの値は自動的に設定されるため、手動設定は不要です。

- App:InstallCommand
- App:InstallDriveLetter
- App:InstallWrkDir
- App:Manufacturer (Forward Pathのタスクスクリプトでのみ使用されます)
- App Name (Forward Pathのタスクスクリプトでのみ使用されます)
- App:Version (Forward Pathのタスクスクリプトでのみ使用されます)
- Capture:ImportInputFile
- Capture:InputFile
- Capture:Mode
- Capture:OutputFile
- Capture:OutputDirectory

注：置き換え可能パラメーター名にコロン (:) が含まれることに注意してください。これは、これがCitrixにより定義されている内部の置き換え可能パラメーターであることを示します。独自の置き換え可能パラメーターを作成する場合は、名前にコロンを含めないように注意してください。これにより、その名前が将来Citrixで提供される内部置き換え可能パラメーターと重複する可能性がなくなります。名前のうちコロンの前の部分は、置き換え可能パラメーターの用途を示します。たとえば、Appはその置き換え可能パラメーターが処理中のアプリケーションの情報を提供すること、Captureはその置き換え可能パラメーターが現在のキャプチャ状態と関連することを示します。

[Text] タブ

[Text] タブを使用して、スタンドアロンのセルフプロビジョニングツールのユーザーに表示されるテキストを定義します。

Error Text - エラーが発生したときに表示されます。

Completion Text - アプリケーションのキャプチャが完了したときにユーザーに表示されます。

Welcome Text - ツールを起動したときにユーザーに表示されます。

[詳細] タブ

Restore Defaults - セルフプロビジョニング設定のすべてをデフォルト値に復元します。たとえば、作成されたすべての置き

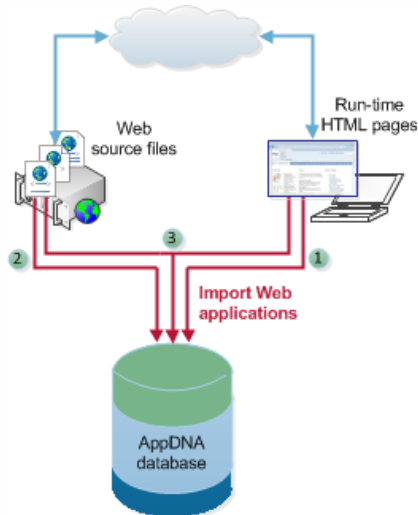
換え可能パラメーターと、デフォルトの実行プロファイルに加えた変更が削除されます。

[Save] をクリックして変更を保存します。

Webアプリケーション

Oct 16, 2015

WebアプリケーションとWorxWeb、Internet Explorer、またはFirefoxの互換性をテストするには、まずアプリケーションをAppDNAにインポートする必要があります。



Webアプリケーションは、2つの異なるアプローチまたはその両方を組み合わせてインポートできます。

1. AppDNAの指向スパイダーで実行時のHTMLページをクロールして、AppDNAにインポートするMSIにキャプチャします。
2. Webソースファイルを、AppDNAにインポートするMSIにキャプチャします。
3. これらのアプローチの両方を組み合わせて使用します。

これらの機能はすべて、AppDNAの [Import Web Applications] 画面で実行できます。または、スタンドアロンのWebアプリケーションキャプチャツールを使用してこれらの機能を実行し、生成されたMSIをAppDNAにインポートできます。

[Import Web Applications] 画面を開くには：

- AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Web Applications] の順に選択します。

[Import Web Applications] 画面には次の2つのタブがあります。

- **Web Capture Import** - このタブを使用して、WebアプリケーションのMSIへのキャプチャとインポートを1回の操作で行います。Webアプリケーションの実行時のHTMLファイルまたはソースファイルをキャプチャするか、より総合的な分析のために両方をキャプチャできます。実行時のHTMLページをキャプチャする場合は、AppDNAの指向スパイダーが起動されます。
- **[Web Direct Import] タブ** - このタブを使用して、スタンドアロンのWebアプリケーションキャプチャツールでMSIファイルにキャプチャしたWebアプリケーションをインポートします。AppDNAにはスタンドアロンの2つのWebアプリケーションキャプチャツールが用意されています。これらのツールはAppDNAがインストールされていないマシンで実行できます。

注：スパイダーは、Webページをクロールし、リンク先にアクセスし、アクセスしたすべてのページのコピーを作成するプログラムを指す汎用的な用語です。

Webアプリケーションのキャプチャのインポート

Oct 16, 2015

[Import Web Applications] 画面の [Web Capture Import] タブを使用すると、1回の操作でWebアプリケーションをMSIにキャプチャし、そのMSIをAppDNAにインポートできます。

Webアプリケーションをキャプチャするには：

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] [Web Applications] の順に選択します。
2. [Web Capture Import] タブをクリックします。
3. インポートオプションを変更するには、[Configuration] をクリックして[Webインポート設定](#)を行います。
4. ツールバーで、[Add] をクリックします。
5. [Select Web Application] ダイアログボックスで、詳細情報を入力します。
 - Name - AppDNA内のWebアプリケーションの名前です。
 - URL - 実行時のHTMLページをクロールするAppDNAの指向スパイダーを使用してWebアプリケーションをキャプチャするには、このテキストボックスにWebアプリケーションのURLを入力するか貼り付けます。
 - Source folder - Webアプリケーションのソースファイルをキャプチャするには、その場所を指定します。URLとソースフォルダーの両方を指定すると、最も包括的な分析が行われます。
6. [OK] をクリックします。
Webアプリケーションの一覧が表示されます。
7. ほかのWebアプリケーションを追加する場合は、上記の3つの手順を繰り返します。
8. スパイダーを手動モードで実行する場合は、[Use Manual Browser Navigation] チェックボックスをオンにします。このチェックボックスをオフにすると、スパイダーが自動モードで実行されます。
 - **Manual mode** - Webアプリケーション上で適切なリンクを手作業でクリックしながらキャプチャする場合はこのオプションを使用します。このモードは、JavaScriptおよび関連技術 (AJAXなど) を頻繁に使用するWebアプリケーションで、ページのロード後、または複雑なSSO (Single Sign-On : シングルサインオン) シナリオがある場合に、ページを変更するために使用します。必要に応じて、SSOやAJAXページなどをキャプチャした後に自動モードに切り替えることができます。
 - **Automatic mode** - (デフォルト) スパイダーにWebアプリケーションを自動で操作させて、構成オプションに基づいて入力フォームやダイアログボックスが表示されたときのみ停止する場合は、このオプションを使用します。
9. インポートするWebアプリケーションを一覧から選択します。
10. ツールバーの右側にある [Import] をクリックします。

WebアプリケーションのURLを指定した場合は、AppDNAの指向スパイダーが起動し、Internet Explorerのウィンドウが開きます。詳しくは、「[Webアプリケーションのキャプチャ処理](#)」を参照してください。

[Import] をクリックすると、インポートの進行状況を示すメッセージが [Import Web Applications] 画面に表示されます。インポート処理のログを表示するには、進行状況を示すメッセージの右側の [Log] アイコンをクリックします。ポップアップウィンドウにログ情報が表示されます。

注：Webアプリケーションでは、Windowsアプリケーションに使用されるフィンガープリントのメカニズムは使用されません。Webアプリケーションは同じアプリケーションを以前にインポートしたことがあっても、それぞれ別のアプリケーションと認識されます。

分析とレポート

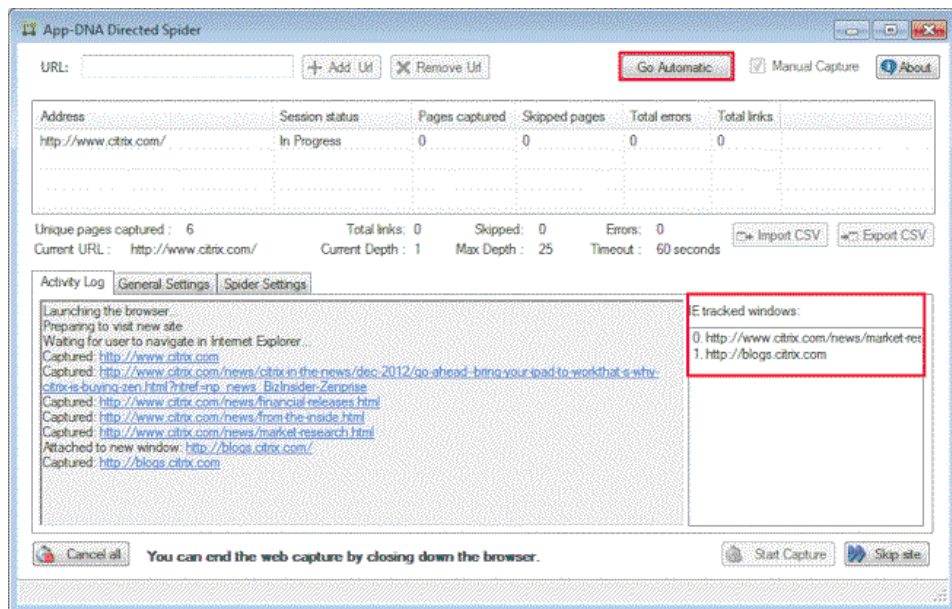
製品版ライセンスがインストールされている場合、アプリケーションをインポートするとデフォルトですぐにAppDNAによる分析が行われます。試用インストールの場合、デフォルトでは管理者が分析を実行する必要があります。

注：複数のユーザーが同時にインポートを実行する場合は、データベースロックを防ぐために [Auto Analyze] チェックボックスをオフにすることをお勧めします。 [Auto Analyze] チェックボックスの設定を変更するには、 [\[Import and Analyze Settings\]](#) に移動します。

処理

Oct 16, 2015

このトピックでは、AppDNAの指向スパイダーを使用したWebアプリケーションのキャプチャについて説明します。このトピックは、「Webアプリケーションのキャプチャのインポート」または「スタンドアロンスパイダーによるWebアプリケーションのキャプチャ」の説明に従って、指向スパイダーを既に開始していることを前提としています。



AppDNAの指向スパイダーは、指定されたURLをInternet Explorer (IE) のブラウザーウィンドウで開きます。その次の処理は、手動モードまたは自動モードのどちらを使用しているかによって異なります。

1つのWebアプリケーションのキャプチャ処理が完了したとき、一覧にほかのものがあれば、スパイダーはそのアプリケーションに移動します。

手動モード

手動モードでは、Webアプリケーションを手動で操作して、キャプチャするすべてのページにアクセスする必要があります。重複するページをキャプチャするためにこのオプションを選択した場合は、変更部分が構成可能なしきい値を超えた場合に、スパイダーがそのページを自動的にキャプチャします（ただし、指定されたキャプチャ回数を超えていないことが条件となります）。

必要に応じて、リンクを右クリックして [Open in new tab] を選択することができます。その場合、スパイダーはそのリンクを新しいウィンドウで開きます。スパイダーは、追跡している各ウィンドウに一意的なインデックス番号を付与し、すべてのアクティブなウィンドウの一覧をスパイダーウィンドウの右側に表示します。ページを強制的にキャプチャするには、この一覧で目的のウィンドウを右クリックして [Capture Page] を選択します。

必要に応じて、スパイダーウィンドウの [Go Automatic] をクリックすると、自動モードに切り換わります。その場合、スパイダーは2番目以降のウィンドウを閉じ、1番目のウィンドウ（インデックス0）を使用して自動モードを続行します。

完了したらWebブラウザーのウィンドウを閉じます。これで、Webアプリケーションのキャプチャは終了します。

自動モード

自動モードでは、選択した構成オプションに従って、スパイダーが自動でWebアプリケーションのページをクロールし、リ

リンク先にアクセスします。

[Form User Interaction] 設定をオンにした場合は、Webページにフォームが検出されると、[Form Encountered] ダイアログボックスが開きます。可能な場合は、入力ボックスが黄色で強調表示されます。ただし、入力ボックスがグラデーションでカスタマイズされているなどの理由で、これが不可能なときもあります。

その後、スパイダーはユーザーが次のボタンのいずれかをクリックするのを20秒間待機します。

- **Continue** - ダイアログボックスを閉じてWebアプリケーションのキャプチャ処理を続行するにはこれをクリックします。
- **Ignore** - このページの入力フィールド、およびWebアプリケーションのほかの各ページの同じ入力フィールドをスキップする場合はこれをクリックします。これは、たとえば各ページに無視したい検索フォームがある場合に役に立ちます。このページの入力フィールドのみをスキップする場合は、[Continue] をクリックします。
- **Ignore all** - このページのフォーム、およびWebアプリケーション内でこれ以降スパイダーが検出する、各ページのすべてのフォームをスキップする場合は、これをクリックします。
- **Wait** - フォームに入力して送信する場合はこれをクリックします。スパイダーはユーザーが[Continue] をクリックするまで待機します。

20秒以内に応答しない場合は、フォームがスキップされ処理が続行されます。

Webからの直接インポート

Oct 16, 2015

スタンドアロンのWebキャプチャツールを使用して生成されたMSIをインポートするには、[Import Web Applications] 画面の [Web Direct Import] タブを使用します。

スタンドアロンのWebキャプチャツールを使用してキャプチャされたWebアプリケーションをインポートするには：

1. AppDNAを起動します。
2. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Web Applications] の順に選択します。
3. [Import Web Applications] 画面で、 [Web Direct Import] タブをクリックします。
4. インポートするMSIファイルを選択します。
ツールバーの [Browse] をクリックすると、個別のファイルを選択できます。 [Search] をクリックすると、ディレクトリ階層内で再帰的にファイルを検索できます。または、 [Import List] をクリックします。これらのオプションについては、「[Webアプリケーションのインポート](#)」を参照してください。

ファイルを選択すると、それらのファイルが画面に表示されます。

5. インポートするWebアプリケーションを選択します。
6. ツールバーの [Import] をクリックすると、AppDNAデータベースへのWebアプリケーションDNAのロードが開始されます。

[Import] をクリックすると、インポートの進行状況を示すメッセージが表示されます。インポート処理のログを表示するには、進行状況を示すメッセージの右側の [Log] アイコンをクリックします。ポップアップウィンドウにログ情報が表示されます。

重要： WebアプリケーションのMSIを [Import Applications] 画面でインポートすることはできませんが、WebアプリケーションがAppDNAにデスクトップアプリケーションと認識されてしまうため、 [Import Applications] 画面ではインポートしないでください。同様に、デスクトップアプリケーションを [Import Web Applications] 画面でインポートしないでください。

Webアプリケーションのインポート

Oct 16, 2015

このトピックでは、 [Import Web Applications] 画面のツールバーについて説明します。

ツールバー

+ Add - ([Web Capture Import] タブでのみ使用できます) [Select Web Application] ダイアログボックスを開きます。ここで、Webアプリケーションの実行時のHTMLファイルのURL、ソースファイルの場所、またはその両方を指定できます。

■ URLs - ([Web Capture Import] タブでのみ使用できます) ブックマークからWebアプリケーションのURLを選択します。

■ Browse - ([Web Direct Import] タブでのみ使用できます) スタンドアロンのWebアプリケーションキャプチャツールでMSIファイルにキャプチャした、個々のWebアプリケーションを選択します。

🔍 Search - ([Web Direct Import] タブでのみ使用できます) スタンドアロンのWebアプリケーションキャプチャツールでMSIファイルにキャプチャしたWebアプリケーションのディレクトリ構造を、再帰的に検索します。これをクリックすると [Search for Applications] ダイアログボックスが開きます。

Select - 失敗したインポート、警告付きのインポート、成功したインポートを選択できます。

📁 Import List - ([Web Direct Import] タブでのみ使用できます) スタンドアロンのWebアプリケーションキャプチャツールでMSIファイルにキャプチャしたWebアプリケーションの、あらかじめ定義された一覧をインポートします。 [Import an Application List] ダイアログボックスが開きます。

✖ Delete - 選択したアプリケーションをアプリケーションの一覧から削除します。

⊗ Cancel - 現在実行中の処理をキャンセルします。

📁 Import - 選択したWebアプリケーションをAppDNAにインポートします。

➡ Analyze - インポート後にデータを分析します。 [Application List] 画面を使用して、後でアプリケーションを分析することもできます。

⚙ Configuration - [Web import settings] でオプションを設定します。

[Select Web Application] ダイアログボックス

[Select Web Application] ダイアログボックスを使用して、Webアプリケーションの名前、その実行時のHTMLファイルのURLまたはそのソースファイルの場所、またはその両方を指定します。このダイアログボックスを開くには、 [Import Web Applications] 画面でツールバーの [Add] をクリックします。

Name - AppDNA内でのWebアプリケーションの名前です。

URL - 実行時のHTMLページをクロールするスパイダーを使用してWebアプリケーションをキャプチャする場合は、ここにURLを指定します。

Source folder - Webアプリケーションのソースファイルをキャプチャする場合は、そのフォルダーの場所を指定します。

注：URLまたはソースフォルダーを指定する必要があります。ただし、最も総合的な分析を行うために両方を指定することもできます。

Webインポート設定

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスには、AppDNAの全般的なオプションが含まれます。このダイアログボックスを開くには、メニューから [Edit]、[Settings] の順に選択します。

[Import Web Applications] 画面でのWebアプリケーションのインポートをカスタマイズするには、[Settings] ダイアログボックスの [Web Import] ページを使用します。

このダイアログボックスで変更を加えた後、[Save] をクリックして変更を保存します。

注：このWebインポート設定は、いくつかの例外を除いて、スタンドアロンのスパイダーの [General Settings] タブおよび [Spider Settings] タブでできる設定に対応しています。

[Direct Import] タブ

これらのオプションは、[Import Web Applications] 画面の [Web Direct Import] タブに関係します。

Simultaneous Imports (1-20) - 同時に発生するインポートの数を制御します。最適な値はハードウェア構成によって異なります。この設定の値を大きくした後でデッドロックエラーによるインポートの失敗が発生した場合は、値を小さくしてください。デフォルトおよび推奨される設定は3です。

Preserve Log Files - ログファイルを保存するには、このチェックボックスをオンにします。問題の診断のため、このオプションが役立つことがあります。たとえばディスクスペースを節約するためにログファイルを保存しない場合は、このチェックボックスをオフにします。

[Web Spider] タブ

これらのオプションは、[Import Web Applications] 画面の [Web Capture Import] タブに関係します。

Browser timeout - (スパイダーを自動モードで実行している場合に) スパイダーがページを無視して次のページに移動するまでにページのロードを待機する期間 (秒単位) です。スパイダーを手動モードで実行する場合、この設定は最初のページにのみ使用されます。デフォルトは15秒です。

Site traversal depth - スパイダーでアクセスするリンクの深さを指定します。たとえば、深さを1に指定すると、スパイダーはサイトのインデックスページから処理を開始し、このページに含まれるリンクの数を調べ、それらの各リンク先にアクセスします。これらのリンク先にさらにリンクが含まれる場合は、深さが2以上に設定されていれば、スパイダーはそれらのリンク先にもアクセスします。デフォルトは25です。

Automatically close dialog boxes and popups - 自動モードで実行しているときに開いたダイアログボックスを自動的に閉じるには、このチェックボックスをオンにします。たとえば、無人モードのインポートを実行したままにする場合などに、このオプションが役に立ちます。ダイアログボックスを手動で閉じるまでスパイダーを待機させる場合は、このチェックボックスをオフにします。

Restrict web app to its virtual directory - Webアプリケーションの仮想ディレクトリの外部へのリンク

(<http://myserver/myWebApp>など) を無視するには、このチェックボックスをオンにします。複数のWebアプリケーションが同じサーバーに存在し、部分的に異なるURLでそれぞれがアクセスされる場合に、このオプションが役に立ちます。仮想ディレクトリ外部のリンクにスパイダーをアクセスさせる場合は、このチェックボックスをオフにします。

Include sub-domains - メインドメインのサブドメインに対するリンク (たとえば<http://staging.dev.myserver/myWebApp>) にスパイダーをアクセスさせるには、このチェックボックスをオンにします。Webアプリケーションがメインドメインのサブドメインにリダイレクトする場合は、必ずこのチェックボックスをオンにしてください。サブドメインに対するリンクを

視するには、このチェックボックスをオフにします。

Form User Interaction - (スパイダーを自動モードで実行している場合に) フォームがあり入力を求められるページでスパイダーを停止するには、このチェックボックスをオンにします。このオプションは、Webアプリケーションにログインページがある場合に特に役に立ちます。このチェックボックスがオンの場合は、Webページにフォームが検出されるとダイアログボックスが開き、フォームの入力ボックスが黄色で強調表示されます。詳しくは、「[Webアプリケーションのキャプチャ処理](#)」を参照してください。

Allow Proxy Authentication Prompt - LANがプロキシサーバーを使用する構成であり、[Automatically close dialog boxes] チェックボックスをオンにした場合は、このチェックボックスをオンにします。これは、認証ダイアログボックスにログイン情報を入力するまでスパイダーが待機するということを意味します。LANがプロキシサーバーを使用する構成ではない場合は、このチェックボックスをオフにします。

Allow capture duplicates - この設定は、手動モードで実行されているスパイダーにのみ影響します。ページが変更された場合に同じページを複数回キャプチャするには、このチェックボックスをオンにします。このオプションは、ロード済みのページをJavaScriptやAJAXのような関連技術によって変更するWebアプリケーションをキャプチャする場合に役立ちます。このチェックボックスをオンにした後、次のオプションを構成します。

- **Duplicates count for URL** - スパイダーにページをキャプチャさせる最大回数を入力します。
- **Duplicates diff ratio** - ページを再キャプチャするための必要条件とするページの変更比率を入力します。

Capture results output directory - キャプチャ結果の場所を指定します。ここに、生成されたMSIファイルとキャプチャされたWebページが格納されます。通常は、スタンドアロンのWebアプリケーションキャプチャツールを使用する場合のみ、これらのファイルを使用する必要があります。

Allowed external domains - スパイダーをリンク先にアクセスさせる外部ドメインの一覧です。

Domain - Webアプリケーションのドメインをここに指定して [Add] をクリックし、許可する外部ドメインの一覧に追加します。Webアプリケーションが別のドメインにリダイレクトする場合は、ここにドメインを入力します。同様に、別のドメインにある外部の認証サーバーを使用する場合は、ここにそのドメインを入力します。

スタンドアロンのツール

Oct 16, 2015

AppDNAにはスタンドアロンの2つのWebアプリケーションキャプチャツールが用意されています。これらのツールはAppDNAがインストールされていないマシンで実行できます。

- **スタンドアロンのWebアプリケーションキャプチャツール** スタンドアロンバージョンのAppDNA指向スパイダーです。構成オプションは組み込みバージョンと同じですが、MSIを生成する追加オプションがあります（AppDNAの内部からキャプチャを実行する場合は常にMSIが生成され、自動的にインポートされます）。
- **スタンドアロンのWebアプリケーションソースMSI変換ツール** ソースファイルのセットからMSIファイルを生成できます。このツールを使用して、WebアプリケーションのソースファイルからMSIファイルを生成できます。このツールはAppDNAの外部で実行できるため、たとえばWebアプリケーションの管理者に送付して、Webサーバーで実行するように依頼できます。その後でMSIファイルを送信してもらい、[Import Web Applications] 画面の [Web Direct Import] タブでAppDNAにインポートします。これは、サーバー上のWebアプリケーションの、ソースファイルへのアクセス権を要求する必要がないということを意味します。

両方のスタンドアロンツールを使用してスパイダー出力とWebアプリケーションのソースファイルを組み合わせる場合は、MSIを作成するオプションを選択せずにスパイダーを実行し、スパイダーからの出力とソースファイルを組み合わせたファイルセットに対してMSI生成ツールを実行します。

インストール

Oct 16, 2015

サポートされるオペレーティングシステム

- Microsoft Windows 8.1 (32ビット版および64ビット版)
- Microsoft Windows 8 (32ビット版および64ビット版)
- Microsoft Windows 7 SP1 (32ビット版および64ビット版)
- Microsoft Windows Server 2012 R2
- Microsoft Windows Server 2012
- Microsoft Windows Server 2008 R2 SP1
- Microsoft Windows Server 2008 SP2 (32ビット版および64ビット版)
- Microsoft Windows XP SP3 (32ビット版)
- Microsoft Windows XP SP2 (64ビット版)
- Microsoft Windows Vista SP2 (32ビット版および64ビット版)

前提要件

- Microsoft .NET Framework 4.0。
- Microsoft .NET Framework 3.5。

追加要件

- Internet Explorer 11、10、9、8、7、または6

インストーラー

AppDNAスタンドアロンWebキャプチャツールをインストールするには、インストーラー (Citrix AppDNA Web Application Capture.msi) が必要です。インストーラーは<http://support.citrix.com/article/CTX139494>からダウンロードできます。

AppDNAスタンドアロンWebキャプチャツールをインストールするには:

1. Windows Explorerで、インストーラー (Citrix AppDNA Web Application Capture.msi) をダブルクリックしてインストールを開始します。
2. [Welcome] ページで [Next] をクリックします。
3. [License Agreement] ページで、 [I accept the terms in the license agreement] をクリックし、 [Next] をクリックします。
4. [Destination Folder] ページでインストールフォルダーを選択するかデフォルトの場所を受け入れて、 [Next] をクリックします。
5. [Ready to Install the Program] ページで、 [Install] をクリックしてインストールを開始します。
6. インストールが完了したら、 [Finish] をクリックします。

スパイダー

Oct 16, 2015

スタンドアロンの指向スパイダーをAppDNAの外部で使用して、Webアプリケーションの実行時のHTMLページをキャプチャし、AppDNAにインポートできます。

スタンドアロンの指向スパイダーを起動するには、次の手順に従います。

- Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、 [Citrix AppDNA] 、 [Web Application Capture] の順に選択します。

注：このオプションを選択できない場合は、スタンドアロンのWebアプリケーションキャプチャツールをインストール済みであることを確認してください。詳しくは、「[スタンドアロンのWebアプリケーションキャプチャツールのインストール](#)」を参照してください。

概要

画面上部に、キャプチャするWebアプリケーションのURLを入力します。URL一覧の下に3つのタブがあります。最初のタブにはスパイダーの動作状況のログが表示されます。ほかの2つのタブには設定とオプションを入力します。次に、これらのオプションについてタブごとに分けて説明します。

画面の主要部分のオプションは次のとおりです。

URL - WebアプリケーションのURLをここに指定して [Add URL] をクリックし、一覧に追加します。これは有効なURLで、スタンドアロンツールを実行するコンピューターからアクセスできる必要があります。複数のURLを追加できます。たとえば、複数のWebアプリケーションを連続してキャプチャする場合などに便利です。

Remove URL - 一覧からURLを削除します。削除するURLを選択してからこのボタンをクリックします。

Go automatic - [Manual capture] チェックボックスをオンにした場合は、このボタンをクリックして自動モードに変更できます。すると、選択する設定に応じて、スパイダーがリンク先に自動的にアクセスし、入力フォームまたはダイアログボックスが表示されたときのみ停止するようになります。

Manual capture - 手動モードを使用するには、このチェックボックスをオンにします。このモードでは、Webアプリケーションを手動で操作して関連するリンク先にアクセスします。JavaScriptおよび関連技術 (AJAXなど) を頻繁に使用するWebアプリケーションに手動モードを使用して、それらがロードされた後、または複雑なSSO (Single Sign-On : シングルサインオン) シナリオがある場合にページを変更します。必要に応じて、SSOやAJAXページなどをキャプチャした後に自動モードに切り替えることができます。スパイダーを自動モードで実行し、選択する構成オプションに応じて入力フォームまたはダイアログボックスが表示されたときのみ停止する場合は、このチェックボックスをオフにします (オフがデフォルトです)。

Import CSV - キャプチャが必要なURLを一覧にしたCSVファイルをインポートします。

Export CSV - キャプチャしたURLを一覧にしたCSVファイルをエクスポートします。

Start capture - 一覧の上から順にURLのキャプチャを開始します。

Cancel all - スパイダーを停止します。

Skip site - 現在のWebサイトをスキップします。

[General Settings] タブ

[General Settings] タブには、指向スパイダーの動作を制御するオプションがあります。

Generate MSI - AppDNAにインポートするMSIを生成する場合は、このチェックボックスをオンにします。通常、スパイダーのみを使用してWebアプリケーションをキャプチャする場合は、このチェックボックスをオンにします。より総合的な分析のために、キャプチャしたページとソースファイルを組み合わせる場合は、このチェックボックスをオフにします。その場合は、スパイダー出力とWebアプリケーションのソースファイルを組み合わせ、それらに対して[スタンドアロンのWebアプリケーションソースMSI変換ツール](#)を実行する必要があります。

Capture results output directory - 出力ファイルを格納する場所を設定します。ここに、生成されたMSIファイルとキャプチャされたWebページが格納されます。

Site traversal depth - スパイダーでアクセスするリンクの深さを指定します。たとえば、深さを1に指定すると、スパイダーはサイトのインデックスページから処理を開始し、このページに含まれるリンクの数を調べ、それらの各リンク先にアクセスします。これらのリンク先にさらにリンクが含まれる場合は、深さが2以上に設定されていれば、スパイダーはそれらのリンク先にもアクセスします。デフォルトは25です。

Form user interaction - フォームがあり入力が必要なページごとにスパイダーを停止するには（自動モードで実行時）、このチェックボックスをオンにします。このオプションは、Webアプリケーションにログオンページがある場合に特に役に立ちます。このチェックボックスがオンの場合は、Webページにフォームが検出されるとダイアログボックスが開き、フォームの入力ボックスが黄色で強調表示されます。詳しくは、「[Webアプリケーションのキャプチャ処理](#)」を参照してください。

Browser timeout (sec) - スパイダーがページを無視して次のページに移動する前にページのロードを待機する期間を、秒単位で指定します（スパイダーを自動モードで実行している場合）。スパイダーを手動モードで実行する場合、この設定は最後のページにのみ使用されます。デフォルトは15秒です。

Delay timeout start by (sec) - 古いバージョンのInternet Explorerを使用する場合に、前の [Browser timeout] に指定するタイムアウト期間に入る前に待機する、追加のタイムアウト期間を秒単位で指定します。古いバージョンのInternet Explorerを、特に、古いバージョンのWindowsで実行する場合は、次のURLへの移動にある程度時間がかかることがあるため、このオプションが必要です。デフォルト値は1秒です。

Delay between capturing (msec) - スパイダーがあるページをキャプチャしてから次のページをキャプチャするまでの間、指定した時間だけスパイダーを待機させるには、このチェックボックスをオンにします。このオプションは、そうしないと社のファイアウォールによってスパイダーの自動モードでの実行がブロックされる場合に役立ちます。この設定は、スパイダーを手動モードで実行する場合には使用されません。時間をミリ秒単位で入力します。

[Spider Settings] タブ

[Spider Settings] タブには、指向スパイダーを制御する詳細なオプションがあります。

URL inclusions - デフォルトでは、AppDNAのスパイダーは外部ドメインへのリンクにアクセスしません。ただし、外部ドメインの一覧を作成して、スパイダーをリンク先にアクセスさせることができます。

Domain - 外部ドメインをここに指定して [Add] をクリックし、許可する外部ドメインの一覧に追加します。Webアプリケーションが別のドメインにリダイレクトする場合は、ここにドメインを入力します。同様に、別のドメインにある外部の認証サーバーを使用する場合は、ここにそのドメインを入力します。

Include sub-domains - Webアプリケーションのメインドメインのサブドメインに対するリンク

(<http://staging.dev.myserver/myWebApp>など) にスパイダーをアクセスさせるには、このチェックボックスをオンにします。Webアプリケーションがメインドメインのサブドメインにリダイレクトする場合は、必ずこのチェックボックスをオンにしてください。サブドメインに対するリンクを無視するには、このチェックボックスをオフにします。

Restrict web app to its virtual directory - Webアプリケーションの仮想ディレクトリの外部へのリンク

(http://myserver/myWebAppなど) を無視するには、このチェックボックスをオンにします。複数のWebアプリケーションが同じサーバーに存在し、部分的に異なるURLでそれぞれがアクセスされる場合に、このオプションが役に立ちます。仮想ディレクトリ外部のリンクにスパイダーをアクセスさせる場合は、このチェックボックスをオフにします。

Automatically close dialog boxes and popups - 自動モードで実行しているときに開いたダイアログボックスを自動的に閉じるには、このチェックボックスをオンにします。たとえば、無人モードのインポートを実行したままにする場合などに、このオプションが役に立ちます。ただし、JavaScriptで開くポップアップを閉じることはできません。ダイアログボックスを手動で閉じるまでスパイダーを待機させる場合は、このチェックボックスをオフにします。

Allow Proxy Authentication Prompt - LANがプロキシサーバーを使用する構成であり、[Automatically close dialog boxes and popups] チェックボックスをオンにした場合は、このチェックボックスをオンにします。これは、認証ダイアログボックスにログオン情報を入力するまでスパイダーが待機するということを意味します。LANがプロキシサーバーを使用する構成ではない場合は、このチェックボックスをオフにします。

Duplicates - この設定は、手動モードで実行されているスパイダーにのみ影響します。ページが変更された場合に同じページを複数回キャプチャするには、このチェックボックスをオンにします。このオプションは、ロード済みのページをJavaScriptやAJAXのような関連技術によって変更するWebアプリケーションをキャプチャする場合に役立ちます。このチェックボックスをオンにした後、次のオプションを構成します。

- **Maximum number of duplicates for URL** - ページをキャプチャする最大回数を入力します。
- **Page content difference value to capture** - ページを再キャプチャするために必要なページの変更比率を入力します。

Webアプリケーションのキャプチャ

Oct 16, 2015

1. Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、[Citrix AppDNA]、[Web Application Capture] の順に選択します。
2. [General Settings] タブと [Spider Settings] タブを使用して、使用するオプションを設定します。詳しくは、「[スタンドアロンの指向スパイダー](#)」を参照してください。
3. キャプチャするWebアプリケーションのURLを [URL] ボックスに入力するか貼り付けます。
4. [Add URL] をクリックして、キャプチャするURLの一覧にURLを追加します。
5. 複数のWebアプリケーションをキャプチャする場合は、手順3および4を繰り返します。
6. スパイダーを手動モードで実行する場合には、[Manual Capture] チェックボックスを選択します。スパイダーを自動モードで実行する場合は、このチェックボックスをオフにします。
 - **Manual mode** – Webアプリケーションを手動で操作して関連するリンク先にアクセスする場合は、このオプションを使用します。JavaScriptおよび関連技術 (AJAXなど) を頻繁に使用するWebアプリケーションにこのモードを使用して、それらがロードされた後、または複雑なSSO (Single Sign-On : シングルサインオン) シナリオがある場合にページを3回変更します。必要に応じて、SSOやAJAXページなどをキャプチャした後に自動モードに切り替えることができます。
 - **Automatic mode** – スパイダーにWebアプリケーションを自動で操作させ、選択する構成オプションに応じて、入力フォームまたはダイアログボックスが開いたときのみ停止する場合は、このオプション (デフォルト) を使用します。
7. [Start Capture] をクリックします。AppDNAの指向スパイダーにより、一覧の最初のURLがInternet Explorerのウィンドウに開かれます。処理について詳しくは、「[Webアプリケーションのキャプチャ処理](#)」を参照してください。
8. すべてのキャプチャが完了したら、画面右上の [X] をクリックしてウィンドウを閉じます。

出力

出力はスタンドアロンスパイダーウィンドウの [General Settings] タブで指定されたフォルダーに置かれます。各アプリケーションの出力は、URL、日付、およびタイムスタンプに由来する名前の個別のフォルダーに格納されます。

MSIを生成しないことを選択した場合は、キャプチャされたすべてのデータを含むRenderedという名前のサブフォルダーがWebアプリケーションのフォルダーに作成されます。[スタンドアロンのMSI変換ツール](#)を使用して、これをAppDNAにインポートするMSIに変換できます。

MSIを生成した場合は、出力フォルダーに格納されます。このMSIは、[Import Web Applications] 画面の [Web Direct Import] タブで直接AppDNAにインポートできます。詳しくは、「[Webからの直接インポート](#)」を参照してください。

注 : AppDNA内部からAppDNAの指向スパイダーを実行すると、MSIファイルが常に生成され、AppDNAに自動的にインポートされます。

MSI変換ツール

Oct 16, 2015

スタンドアロンのWebアプリケーションソースMSI変換ツールを使用して、WebアプリケーションのソースファイルのセットからMSIファイルを生成します。このツールはAppDNAの外部で実行できるため、たとえばWebアプリケーションの管理者に送付して、Webサーバーで実行するように依頼できます。その後でMSIファイルを送信してもらい、[Import Web Applications] 画面の [Web Direct Import] タブでAppDNAにインポートします。

これは、サーバー上のWebアプリケーションの、ソースファイルへのアクセス権を要求する必要がないということを意味します。

注：スタンドアロンのMSI変換ツールを使用して、既存のファイルシステム上のソースファイルからアプリケーションのMSIファイルを生成することもできます。このツールは、xcopyを使用してインストールできるアプリケーションやソースメディアがないアプリケーションに適しています。MSI変換ツールではほかのフォルダー内の追加コンポーネントや特別なレジストリキーをキャプチャしませんが、分析のための開始点を提供します。

スタンドアロンのMSI変換ツールを起動するには、次の手順に従います。

- Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、[Citrix AppDNA] 、 [Web Application Source to MSI Converter] の順に選択します。
このオプションが表示されない場合は、スタンドアロンWebキャプチャツールをインストールする必要があります（[スタンドアロンのWebアプリケーションキャプチャツールのインストール](#)を参照）。

このツールについて

WebアプリケーションソースMSI変換ツールのウィンドウには、MSIファイルとしてキャプチャするWebアプリケーションのソースファイルフォルダーが一覧表示されます。

[Product Name] 、 [Product Version] 、 および [Manufacturer Name] 列をダブルクリックすると、詳細を編集できます。WebアプリケーションをAppDNAにインポートするときに、これらの詳細項目を使用してアプリケーションを識別するため、この機能が役に立ちます（ただし、これらの項目はAppDNA内で変更できます）。

フォルダー一覧の下には処理のログが表示されます。画面のこの部分を最新の詳細情報で更新するには、[Refresh] をクリックします。

ツールバーには、以下のオプションが表示されます。

Select - AppDNAにインポートする、MSIファイルに変換するファイルを含むフォルダーを選択します。フォルダーが一覧に追加されます。

Search for folders - [Search for Folders] ダイアログボックスを開きます。これを使用して、詳細なフォルダー検索オプションを入力できます。使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Path** - AppDNAにインポートするMSIを生成する、ソースファイルが存在するサブフォルダーを含むフォルダーを指定します。
- **Pattern** - 1つまたは複数の特定のフォルダーに検索範囲を制限するために、ここに名前を入力します。ワイルドカード文字としてアスタリスク (*) を使用できます。
- **Recurse** - [Path] ボックスに指定するフォルダーの、直接の子フォルダー内のフォルダーを検索する場合は、このチェックボックスをオンにします。[Path] ボックスに指定するフォルダーの1つ下の階層のみを検索する場合は、このチェックボックスをオフにします。
- **Details mapping** - [Product Name] 、 [Product Version] 、 および [Manufacturer Name] 列の初期値の取得方法を制

御します。これらの値は、列をダブルクリックして後で編集できます。

オプション	説明
	デフォルト値を使用します。製品名はUnknown Product、製品バージョンは1.0.0.0、製造元名はUnknown Manufacturerです。
...\Product	パス内の最後のフォルダー名を製品名として使用し、バージョンと製造元名にはデフォルト値を使用します。
...\Manufacturer\Product\Version	ツリー内の最後の3つのフォルダー名を、それぞれ、製造元名、製品名、およびバージョンとして使用します。
...\Manufacturer\Product	ツリー内の最後の2つのフォルダー名を、それぞれ、製造元名および製品名として使用し、バージョンにはデフォルト値を使用します。
...\Product\Version	ツリー内の最後の2つのフォルダー名を、それぞれ、製品名およびバージョンとして使用し、製造元名にはデフォルト値を使用します。

Import list - [Import List] ダイアログボックスを開きます。ここで、インポートするフォルダーの一覧を含んでいるCSVファイルを指定します。使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Path** - インポートするフォルダーを一覧にしたCSVファイルの名前とパスです。次の形式で、製品名、バージョン、および製造元名を指定することもできます。

Directory,ProductName,Version,Manufacturer c:\test,TestApp,1.0.0.0,TestCompany

- **Override CSV details using path regex** - [Product Name]、[Product Version]、および [Manufacturer Name] 列の初期値の取得方法を制御します。これらの値は、列をダブルクリックして後で編集できます。

ボックスの一覧から、あらかじめ定義されたオプションを選択できます。使用できるオプションは[Search for Folders] ダイアログボックスのものと同じですが、オプションでCSVファイルから値が取得される点のみが異なります。独自の正規表現を入力することもできます。

注：正規表現は、幅広く使用されているテキストパターンマッチング言語です。構文についてインターネット上に多くの資料が存在します。たとえば、<http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/az24scfc.aspx>です。

Configure - [Configuration] ダイアログボックスを開きます。ここで、生成されたMSIファイルとログファイルの場所を入力して、オプションを指定します。

- **Generated MSI location** - 出力されるMSIファイルの格納先を指定します。これは、ツールを実行するとMSIファイルが生成される場所です。
- **Log file location** - ログファイルの格納先を指定します。
- **Heat options (blank = default)** - Heatは、MSIを生成するためにMSI生成ツールの内部で使用されるツールです。このボックスを使用して構成オプションを入力できます。[?] をクリックすると、さまざまなオプションと構文の概要が表示されます。これは高度な機能です。デフォルトオプションを使用する場合は、このボックスを空白のままにします。詳しくは、<http://wix.sourceforge.net/manual-wix3/heat.htm>を参照してください。

Start - 選択したフォルダーの変換を開始します。

Cancel - 選択したフォルダーの変換をキャンセルします。

Select all - 一覧のすべてのフォルダーを選択します。

Invert - 未選択のフォルダーを選択し、選択されているフォルダーの選択を解除します。

Remove - 選択したフォルダーを削除します。

MSIの生成

Oct 16, 2015

ここでは、スタンドアロンのWebアプリケーションソースMSI変換ツールを使用して、Webアプリケーションのソースファイルを含むフォルダーからMSIを生成する手順について説明します。

注：スタンドアロンの指向スパイダーの出力とWebアプリケーションのソースファイルを組み合わせたMSIを作成する場合は、2種類のファイルを1つのフォルダーにまとめてから、次の手順に従って作業する必要があります。

1. Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、 [Citrix AppDNA] 、 [Web Application Source to MSI Converter] の順に選択します。
2. 必要であれば、ツールバーの [Configure] をクリックして、使用するオプションを設定します。
それらのオプションと次の手順のオプションについては、 [「スタンドアロンのMSI変換ツール」](#) を参照してください。
3. [Select] 、 [Search for Folders] 、または [Import List] をクリックして、変換するWebアプリケーションのソースファイルを含むフォルダーを選択します。
選択したフォルダーがウィンドウに一覧表示されます。
4. MSIを作成するフォルダーを選択します。
5. [Start] をクリックして処理を開始します。

MSI生成ツールの [Status] 列に、処理が成功したかどうかが表示されます。「Completed」は処理が正常終了したことを意味します。処理が失敗した場合は、 [Refresh] をクリックしてログを表示します。ログには、問題の原因を理解する助けになる情報が含まれています。

出力

スタンドアロンのWebアプリケーションソースMSI変換ツールの出力は、 [Configuration] ダイアログボックスで指定したフォルダーに配置されます。各アプリケーションの出力は、フォルダー名、日付、およびタイムスタンプに由来する名前の個別のフォルダーに格納されます。

[Import Web Applications] 画面の [Web Direct Import] タブでMSIをAppDNAにインポートします。詳しくは、 [「Webからの直接インポート」](#) を参照してください。

制限事項

Oct 16, 2015

AppDNAの指向スパイダーに関する制限事項

AppDNAの指向スパイダーは、自動と手動の2つのモードで実行できます。自動モードでは、AppDNAの指向スパイダーは、HTMLページが完全にロードされるか、[Browser timeout] 設定に定義した期間が経過すると、実行時のHTMLページをキャプチャします。自動モードでは、AppDNAの指向スパイダーはこの時点より後の変更はキャプチャしません。

したがって自動モードは、ロード済みのページをJavaScriptやAJAXのような関連技術によって変更するWebアプリケーションのキャプチャには適しません。たとえばWebアプリケーションの中には、ページがロードされた後でJavaScriptでデータベースから結果を取得して、ページに表示するものがあります。これはページのロード後に行われるため、自動モードでは、スパイダーはこれをキャプチャしません。

このため、ロード済みのページをJavaScriptや関連技術 (AJAXなど) によって変更するWebアプリケーションをキャプチャする場合は、手動モードを使用することをお勧めします。最良の結果を得るためには、[Capture duplicates] 設定を選択すると、手動モードを使用しており、指定したしきい値を超える変更がページに加えられたときに同じページを複数回キャプチャできます。

また、AppDNAの指向スパイダーでは、[Automatically close dialogs] オプションが選択されているかどうかにかかわらず、JavaScriptで開くポップアップが閉じられません。

設定については、「[Webインポート設定](#)」を参照してください。

260文字のファイルパス制限

MSIを生成するときの完全修飾ファイルパスの長さには、260文字の制限があります。これは [Import Web Applications] 画面の [Web Capture Import] タブとスタンドアロンのWebアプリケーションソースMSI変換ツールでのインポートに影響します。

たとえば、インポートしたいWebアプリケーションのソースファイルがいくつかあり、そのうちの1つまたは複数のファイルの完全修飾ファイルパスが260文字以上であるとします。このインポートは失敗します。この問題は、パスが短い別の場所にファイルを移動またはコピーするか、マップされたドライブを使用してパスを短くすることによって解決できます。

サポートされるWebソースファイルの種類

AppDNAでは次の種類のWebソースファイルをインポートできます。

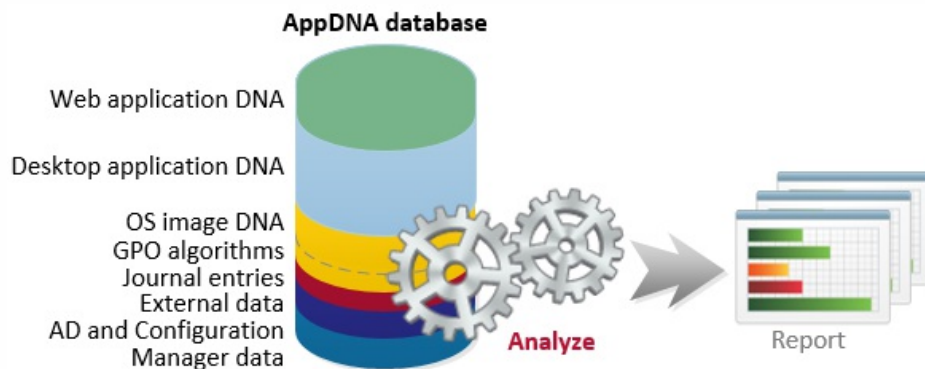
.ahmt	lchtml	.htmls	.msie	.swf
.ahtml	.cls	.ie3	.mspx	.swf2
.alx	.config	.ihtm	.php	.swfl
.api	.css	.ihtml	.php4	.thtml
.aqf	.css1	.inc	.php5	.ttml
.as	.dbm	.iqy	.phps	.uri
.ascx	.dhtml	.jhtm	.phtml	.url
.ashx	.dtd	.jhtml	.phtml	.vb
.asmx	.dwp	.js	.pl	.vbs
.asp	.dwt	.jsb	.pm	.webloc
.aspx	.ent	.jsc	.py	.wsdl
.asr	.epx	.jsf	.sdl	.xht

.atom	.fhtml	.json	.sht	.xhtm
.axd	.fl	.jsp	.shtm	.xhtml
.cdf	.ht	.jsp	.shtml	.xml
.cfc	.hta	.jspx	.sitemap	.xsc
.cfm	.htc	.jst	.ssi	.xsd
.cfml	.htd	.mht	.stm	.xsd
.cgi	.htm	.mhtml	.stml	.xsl
.chl	.html	.mhtml	.svc	.xslt
.chtm				

分析

Oct 16, 2015

アプリケーション分析は専用のSQL Serverデータベースプロセスで、AppDNAがアプリケーションについて持つすべての情報を組み合わせ、選択した対象の各技術に対して分析し、レポートデータを作成します。



通常、アプリケーションの分析は1回だけ必要です。ただし、レポートをカスタマイズしたり追加のオペレーティングシステム (OS) イメージをインポートしたりする場合は、アプリケーションを再分析する必要がある可能性があります。同様に、ほかの技術に対してアプリケーションを評価すると決定した場合は、関連レポートのためにアプリケーションを分析する必要があります。

製品版ライセンスのデフォルト設定では、アプリケーションがインポートされると自動的に分析が開始されます。試用版ライセンスのデフォルト設定では、分析を手動で実行する必要があります。[Auto Analyze] チェックボックスの設定を変更するには、[\[Import and Analyze Settings\]](#) に移動します。

分析するアプリケーションを選択するには、次の手順に従います。

- サイドバーから [Import & Analyze]、[Analyze] の順に選択し、[Analyze applications] 画面を開きます。次に、分析するアプリケーションを選択します。
- [Import Applications] または [Import Web Applications] 画面で、アプリケーションが正常にロードされた後で分析します。
- [Application List] 画面で、分析するアプリケーションを選択します。
- [Manage Groups] 画面で、分析するグループおよび/またはアプリケーションを選択します。

分析を開始するには、ツールバーの [Analyze] をクリックして、分析で使用するレポートとライセンスのオプションを選択します。画面上部に各レポートのアルゴリズムの処理状況が表示されます。画面下部に詳細なログが表示されます。

レポートを表示するには、レポートを選択して [Finish] をクリックします。または、サイドバーの [Application List] セクションまたは [Reports : Applications] セクションから、後でレポートを表示できます。

レポートの決定

Oct 16, 2015

レポートは、選択したアプリケーションに実行した分析結果を制御します。レポートはモジュールにグループ化されていません。各モジュールは、特定の状況に合わせたレポートのコレクションです。たとえば、Desktop Compatibilityモジュールには、Windows 7とWindows 8のレポートが含まれています。各レポートは、アプリケーションDNAの評価対象の技術に関連するアルゴリズム群から構成されています。アルゴリズムにより、対象の環境におけるアプリケーションの適合性、相互運用性、競合、およびパフォーマンスが検証されます。各アルゴリズムにより、対象プラットフォームで特定の問題を引き起こす可能性のあるアプリケーションが特定されます。この問題を持つと特定されるアプリケーションは、アルゴリズムをトリガーするといわれます。

アプリケーションを分析するときに選択できるオプションとして用意されているレポートの種類は、ライセンス、アクティブなレポートの種類、選択したアプリケーションがデスクトップアプリケーション、Webアプリケーション、またはその両方であるかどうかによって異なります。

- デスクトップアプリケーションを選択した場合は、Webアプリケーションの互換性レポートは表示されません。
- Webアプリケーションを選択した場合は、デスクトップアプリケーションの互換性レポートは表示されません。
- デスクトップアプリケーションとWebアプリケーションの両方を選択した場合は、すべてのアクティブなレポートが表示されます。
- デスクトップアプリケーションとWebアプリケーションのどちらを選択したかにかかわらず、アクティブなカスタムレポートはすべて表示されます。

Firefox、Internet Explorer、およびWorxWebのレポートで分析されるのはWebアプリケーションのみで、デスクトップアプリケーションを選択した場合でも無視されます。ほかのすべてのレポート（カスタムレポートを除く）では、デスクトップアプリケーションのみが分析され、Webアプリケーションは無視されます。カスタムレポートではデスクトップアプリケーションとWebアプリケーションの両方が分析されます。したがって、分析のためにカスタムレポートを選択する前に、適切なアプリケーションを選択したことを確認する必要があります。カスタムレポートを作成するときは、分析対象がWebアプリケーションなのかデスクトップアプリケーションなのかわかる名前を付けることをお勧めします。

AppDNAでは、AppDNAへのインポート方法によってアプリケーションがWebアプリケーションなのかデスクトップアプリケーションなのかを判断します。[Import Web Applications] 画面でインポートされたアプリケーションは、Webアプリケーションとみなされます。それ以外のすべてのアプリケーションは、デスクトップアプリケーションとみなされます。

AppDNAレポートの完全な一覧については、「[標準AppDNAレポート](#)」を参照してください。

標準AppDNAレポート

Oct 16, 2015

レポートは、選択したアプリケーションに実行した分析結果を制御します。各レポートは、アプリケーションDNAの評価対象の技術に関連するアルゴリズム群から構成されています。アルゴリズムにより、対象の環境におけるアプリケーションの適合性、相互運用性、競合、およびパフォーマンスが検証されます。各アルゴリズムにより、対象プラットフォームで特定の問題を引き起こす可能性のあるアプリケーションが特定されます。この問題を持つと特定されるアプリケーションは、アルゴリズムをトリガーするといわれます。

ここでは、標準的なAppDNAレポートの概要について説明します。[カスタムレポート](#)を作成して独自のレポートを定義することもできます。

説明	<p>x86およびx64アーキテクチャーのWindows 10のエディションに関する互換性について、デスクトップアプリケーションをテストします。</p> <p>Windows 10移行レポートでfalseと判定される数を減らすために、特定の従来（移行前）および対象（移行先）のOSで中断が発生したときにのみアルゴリズムがトリガーされます。たとえば、Windows 7でコンポーネントが削除されたことが原因でWindows XPとWindows 7の間でトリガーされるアルゴリズムは、Windows XPとWindows 10の間でもトリガーされますが、Windows 7とWindows 10の間を分析するときにはトリガーされません。アプリケーションを既にWindows 7で実行している場合は、実質的な問題にはならないと想定しています。</p>
制限事項	<p>AppDNAは、Windowsストアアプリのインポートまたはテスト、Windows RT向けの互換性テストのいずれもサポートしません。Windows 10レポートでは、Windows API (Win32 API) に基づくアプリケーションなど、従来のWindowsデスクトップアプリケーションの互換性がテストされます。</p>
OSイメージ	<p>従来（移行前）および対象（移行先）のOSイメージについて分析します。</p>

説明	<p>x86およびx86-64アーキテクチャーのWindows 8/8.1のエディションに関する互換性について、デスクトップアプリケーションをテストします。</p>
制限事項	<p>Windows 8では、Windows Runtime (WinRT) と呼ばれる新しいアプリケーションランタイム環境が導入されました。この環境用に作成されたアプリケーションはWindowsストアアプリと呼ばれ、x86/64エディションのWindows 8/8.1、およびタブレットやARMチップをベースとするその他のデバイス向けのエディションのWindows 8/8.1 (Windows RTなど) で動作します。AppDNAは、Windowsストアアプリのインポートまたはテスト、Windows RT向けの互換性テストのいずれもサポートしません。Windows 8/8.1レポートでは、Windows API (Win32 API) に基づくアプリケーションなど、従来のWindowsデスクトップアプリケーションの互換性がテストされます。</p>
OSイメージ	<p>従来（移行前）および対象（移行先）のOSイメージについて分析します。</p>

説明	Windows 7 SP1との互換性についてデスクトップアプリケーションをテストします。
OSイメージ	従来（移行前）および対象（移行先）のOSイメージについて分析します。

説明	Windows Server 2012/2012 R2との互換性についてデスクトップアプリケーションをテストします。
制限事項	Windows 2012/2012 R2レポートでは、Windows API (Win32 API) に基づくアプリケーションなど、従来のWindowsデスクトップアプリケーションの互換性がテストされます。このレポートでは、Windowsストアアプリの互換性はテストされません。
OSイメージ	従来（移行前）および対象（移行先）のOSイメージについて分析します。

説明	Windows Server 2008 R2 SP1との互換性についてデスクトップアプリケーションをテストします。
OSイメージ	従来（移行前）および対象（移行先）のOSイメージについて分析します。

説明	デスクトップアプリケーションの、Microsoft Application Virtualization (App-V) 4.5、4.6 SP1、5.0との適合性をテストします。
OSイメージ	OSイメージについては分析しません。

説明	<p>デスクトップアプリケーションの、XenApp 6以降、XenDesktop 7、またはリモートデスクトップサービス（以前のターミナルサービス）などの、サーバーでホストされる共有環境への展開との適合性をテストします。この方法で展開されるアプリケーションは、ユーザーにはユーザーデバイスで動作しているように見えますが、キー入力やマウス操作などのユーザー操作のすべてが、サーバー上でホストされるアプリケーションに送り返されます。潜在的に、多数のユーザーが各アプリケーションを同時に使用できます。これにより、特定の課題が生じます。</p> <p>重要：ほかのシステムからXenDesktop環境に移行する場合は、XenApp HostedレポートではなくXenDesktop導入ソリューションを使用することをお勧めします。XenDesktop導入ソリューションでは、現在の環境に基づくXenDesktopとアプリケーションの互換性について、より完全な全体像が提供されます。XenApp Hostedレポートでは、あるサーバープラットフォーム上で既に動作しているアプリケーションがXenAppでも動作するかどうかのみが示されます。</p>
----	---

OSイメージ	OSイメージについては分析しません。
--------	--------------------

説明	Webアプリケーションの、Internet Explorer 7.0、8.0、9.0、10.0、11の32ビットまたは64ビットバージョンとの互換性をテストします。
制限事項	Internet Explorer 11および10のアルゴリズムは、デスクトップブラウザとの互換性のみをテストし、タッチデバイス用に最適化されたWindowsストアアプリスタイルのユーザーインターフェイスについてはテストしません。
OSイメージ	対象（移行先）のOSイメージについて分析します。

説明	Webアプリケーションの、Firefox 5からFirefox 9までのすべてのバージョンとの互換性をテストします。Internet Explorerレポートとは異なり、Firefoxレポートは特定のバージョンで構成する必要がありません。Firefoxは標準に基づくWebブラウザであり、バージョン間の変化が小さい傾向にあるためです。
OSイメージ	対象（移行先）のOSイメージについて分析します。

説明	Internet Explorerで動作し、Citrix WorxWebでは動作しない機能について、Webアプリケーションをテストします。
OSイメージ	対象（移行先）のOSイメージについて分析します。

ライセンスオプション

Oct 16, 2015

評価版または試用版のライセンスを所有している場合には、分析を開始するときにAppDNAで自動的にアプリケーションにライセンスを適用するか、後で手動でライセンスを適用するかを選択できます。アプリケーションにライセンスを適用するとそのアプリケーションのレポートビューを表示できるようになります。適用前は、これらのアプリケーションのレポートビューは使用できないか、ロックされています。そのため、アプリケーションへのライセンスの適用は、アプリケーションのロック解除と呼ばれます。

製品版ライセンスを購入した場合、AppDNAは、ユーザーのライセンスが上限に達するまで、常に自動的にアプリケーションのロックを解除します。そのため、ライセンスオプションは分析画面に表示されません。

AppDNAを評価する場合、通常、ライセンスを所有しているアプリケーションよりも多くのアプリケーションをインポートして、EstateViewおよびEffort Calculatorを使用してアプリケーションポートフォリオの状態の概要を取得します（これらのツールには、アプリケーションのロックが解除されているかどうかに関係なく、そのレポートについて分析されたすべてのアプリケーションの状態の統合されたビューが表示されます）。その後、数個のアプリケーションのロックを解除すると、AppDNAが提供できる個々のアプリケーションについての詳細情報の豊富さを確認できます。

評価版のライセンスを所有している場合、分析画面には次のライセンスオプションが表示されます。

- **Auto-unlock now** – 分析中にAppDNAで自動的にアプリケーションのロックを解除する場合は、このオプションを選択します。その後AppDNAは、ライセンスの上限に達するまで、インポートされた順序でアプリケーションのロックを解除します。
- **I will unlock the applications later** – ロックを解除するアプリケーションを慎重に選択したいなどの理由で、後で自分でアプリケーションのロックを解除する場合は、このオプションを選択します。これは [\[Apply Licenses\]](#) 画面で行います。

注：ライセンスの上限に達すると、評価版ライセンスと製品版ライセンスのどちらを所有しているか、またはここでどのオプションを選択するかに関係なく、分析中にアプリケーションのロックが解除されなくなります。ただし、[\[Apply Licenses\]](#) 画面では、さらに数個のアプリケーション（購入済みの上限の10%まで）のロックを手動で解除できます。このような追加の割り当てのことを予備ライセンスと呼びます。

オペレーティングシステム

Oct 16, 2015

一部のAppDNAアルゴリズムでは、オペレーティングシステムイメージに対してアプリケーションDNAが分析されます。これらのアルゴリズムでは、次の処理が実行されます。

- オペレーティングシステムが提供する機能への依存関係についてアプリケーションをテストします。
当てはまる場合は、AppDNAデータベースにロードされたオペレーティングシステムイメージDNAが、これらのアルゴリズムによって調査されます。たとえば、Internet Explorerレポートでは、関連するActiveXコンポーネントが登録されているかどうかを確認するために、Windowsのオペレーティングシステムイメージのレジストリエントリがチェックされます。
- 移行元および移行先のオペレーティングシステムファミリのイメージに対してアプリケーションDNAを分析します。
この分析では、プラットフォーム間でアプリケーションを移行したときの変更の効果が示されます。AppDNAには、関連する各オペレーティングシステムファミリの、デフォルトのオペレーティングシステムイメージのセットが用意されています。独自のカスタムオペレーティングシステムイメージをインポートすることもできます。

ベストプラクティス

- 移行元のプラットフォームに展開した、そして移行先のプラットフォームに展開する予定の、実際のオペレーティングシステムイメージをAppDNAにロードします。詳しくは、「[オペレーティングシステムのイメージ](#)」を参照してください。
- 各オペレーティングシステムファミリについて、そのファミリの主要オペレーティングシステムイメージをデフォルトのオペレーティングシステムイメージとして設定します。詳しくは、「[OSイメージの設定](#)」を参照してください。
- デフォルトの移行元オペレーティングシステムが対象のオペレーティングシステムであることを確認します。Windows XP およびWindows Server 2003の場合、デフォルトのイメージは32ビットです。Windows 8、Windows 7、Windows Server 2012、およびWindows Server 2008の場合、デフォルトのイメージは64ビットです。デフォルトのイメージを変更するには、[Edit]、[Settings]、[OS Image Configuration] の順に選択します。

オペレーティングシステムが提供する機能への依存関係についてアプリケーションをテストするアルゴリズムは、OSイメージ依存アルゴリズムと呼ばれます。これらのアルゴリズムでは、オペレーティングシステムイメージについて以下のようなさまざまな情報をチェックします。

- API
- 証明書ストア
- 各固定ドライブパーティションのファイル管理システム
- グループポリシーオブジェクト (GPO)

注：アプリケーションを別のオペレーティングシステムビルドに移動した後で、アプリケーションに障害が発生する主な原因の1つは、有効なGPOとの互換性がないことです。AppDNAのGPOチェックには、16ビットアプリケーションへのアクセスを防止するポリシー、コントロールパネルアプレットの実行を防止するポリシー、インターネット通信を制限するポリシー、Windowsインストーラーを制限または無効にするポリシー、およびIISのインストールを防止するポリシーが含まれます。

- レジストリ情報
- 権限の互換性設定の一部

OSイメージ依存アルゴリズムのほとんどは、移行先のオペレーティングシステムファミリのオペレーティングシステムイメージを単にチェックするアルゴリズムです。OSイメージ依存アルゴリズムを含むレポートのためにアプリケーションを解析するとき、当てはまるオペレーティングシステムファミリの内、AppDNAにインポート済みの各オペレーティングシステムイメージの情報がチェックされます。

アルゴリズムの結果は、オペレーティングシステムイメージによって異なる可能性があります。したがってレポートビューで結果を表示するとき、アルゴリズムの結果とアプリケーションの全体的なRAG状態は、選択するオペレーティングシステムイメージに応じて異なる可能性があります。

オペレーティングシステムイメージをAppDNAにインポートするときは、そのイメージが移行元と移行先のどちらか、またAppDNAにロード済みのほかのオペレーティングシステムイメージとそのイメージの関係を指定します。たとえば、Windows XPからWindows 8への移行作業をしているとします。組織ではWindows XPとWindows 8について、ラップトップの標準イメージを用意しています。これらをAppDNAにインポートするとき、以下のように定義します。

- Windows XPのラップトップイメージをWindows 8のラップトップイメージの移行元として
- Windows 8のラップトップイメージをWindows XPのラップトップイメージの移行先として

次に、移行元イメージには存在するが移行先イメージに存在しない、API、機能、GPO、およびその他のほかの設定の情報がAppDNAにより計算および保存されます。この情報を、OSイメージ差分と呼びます。

OSイメージ差分アルゴリズムにより、オペレーティングシステムイメージの差分に含まれる機能に依存し、移行先のプラットフォームで動作しないと推定されるアプリケーションが検出されます。OSイメージ差分アルゴリズムを含むレポートのためにアプリケーションを解析するとき、移行元および移行先として構成されているオペレーティングシステムイメージの組み合わせ（この例ではWindows XPとWindows 8）のそれぞれについて、オペレーティングシステムイメージの差分がチェックされます。したがってレポートビューで結果を表示するとき、選択する移行元および移行先のオペレーティングシステムイメージに応じて、結果が異なる可能性があります。通常は、1つのオペレーティングシステムファミリの主要（基準または「ゴールド」）イメージを、そのオペレーティングシステムファミリのデフォルトのオペレーティングシステムイメージとしてセットアップします。

OSイメージ差分アルゴリズムの一部では、不足機能を提供するアプリケーションがあるかどうか、アプリケーションポートフォリオのチェックも実行されます。このような状況では、アルゴリズムポートフォリオとは解析の実行時にAppDNAにインポート済みのすべてのアプリケーションのことです。たとえば、Windows 8ではデフォルトで提供されない特定のDLLが、Windows XPでは提供されるとします。これは、そのDLLに依存するアプリケーションがデフォルトではWindows 8で動作しないということを意味します。ただし、そのDLLがほかのアプリケーションにより自動的にインストールされる場合があります。

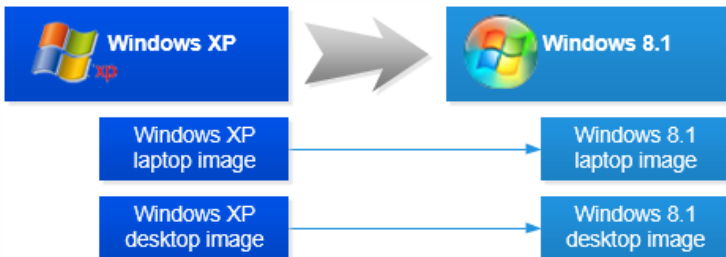
通常は、OSイメージ差分アルゴリズムは対で機能します。

- 一方のアルゴリズムで、移行元オペレーティングシステムイメージで提供されていたが、移行先オペレーティングシステムイメージまたはポートフォリオ内のほかのアプリケーションで提供されない機能に依存するアプリケーションを識別します。
- もう一方のアルゴリズムで、ポートフォリオ内のほかのアプリケーションで提供される、オペレーティングシステムイメージの差分に含まれる機能に依存するアプリケーションを識別します。修復レポートビューに、必要な機能とそれを提供するアプリケーションが表示されます。

対になっている2つのアルゴリズムの結果はインポート済みのほかのアプリケーションに依存するため、アプリケーションをさらにインポートした後でアプリケーションを再解析すると、結果が変化する可能性があります。

独自のイメージをインポートすることにより、AppDNAで、デフォルトのイメージではなく、環境で実際に使用するイメージに基づいて分析を行うことができます。オプションで、各オペレーティングシステムファミリについて複数のイメージをインポートできます。たとえばラップトップ用に1つ、デスクトップ用に1つなど、オペレーティングシステムに2つ以上の社内用ビルドがある場合に便利です。

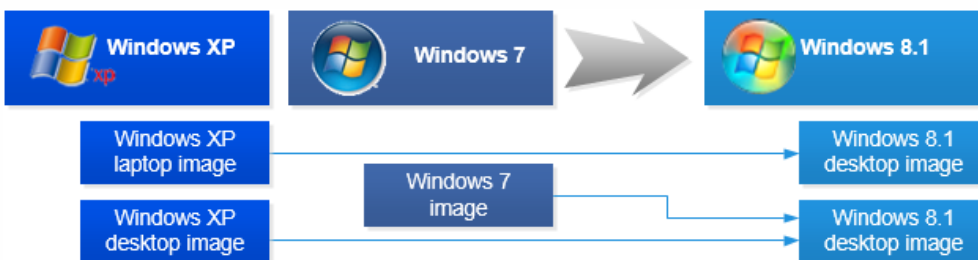
独自のオペレーティングシステムイメージを1つインポートした後で、既にインポート済みのほかのイメージとの関係を指定します。たとえば、Windows XPからWindows 8.1への移行作業をしているとします。組織ではこれらの両方のオペレーティングシステムについて、ラップトップとデスクトップの標準イメージを用意しています。4つのイメージをインポートし、Windows XPのラップトップイメージをWindows 8.1のラップトップイメージの移行元イメージとして、そしてWindows XPのデスクトップイメージをWindows 8.1のデスクトップイメージの移行元イメージとして定義します。次の図はこの関係を表しています。



次に、Windows 8.1レポートのためにアプリケーションを分析するとき、ラップトップイメージとデスクトップイメージのそれぞれについて、Windows XPとWindows 8.1の違いが比較されます。レポートを表示するには、ラップトップイメージとデスクトップイメージのどちらのレポートを表示するかを選択します。

オペレーティングシステムイメージの分析を実行する各レポートについて、デフォルトのオペレーティングシステムイメージまたはオペレーティングシステムのペアも定義します。これは、[\[OS Image Configuration Settings\]](#) ページで行います。

複数の移行元OSを定義できます。移行元オペレーティングシステムは、[モジュール構成ウィザード](#)で指定します。




アプリケーションの依存関係

Oct 16, 2015

ユーザーにアプリケーションを展開する場合、XenApp、XenDesktop、またはそのほかの方法のいずれを使用するかにかかわらず、アプリケーションの適切な配信に必要な条件を把握することがロールアウトを成功させるために不可欠です。AppDNAレポートアルゴリズムにより、あるアプリケーションで必要となるアプリケーション、アプリケーションのフレームワーク、およびファイルが存在するかどうか分析されます。標準のアプリケーション修復レポートには、不足しているすべての依存関係が示されます。また、アプリケーションの問題レポートには、すべての依存アプリケーションのRAGがまとめられます。

財務アプリケーションのスイートで、App1がApp2を呼び出すとします。ここで、App2はMicrosoft Foundation Classes (MFC) を必要とし、App3を呼び出します。AppDNAによってそれらのアプリケーションの依存関係が分析され、手動で依存関係を作成することも、不足しているファイルまたはAPI呼び出しとそれらを提供するランタイムとを照合することで得られた依存関係の提案に基づいて、依存関係を作成することもできるようになります。組み込みのアプリケーション依存関係マップには、Visual Studio C++やVisual Basicランタイムライブラリなどの一般的なライブラリとフレームワークに加えて、Webブラウザー、SQL Server、Webサービス接続などのアプリケーションが含まれます。（おそらくSystem Center Configuration Managerからの情報により）ほかのアプリケーションの依存関係を認識している場合、それらの関係の管理にAppDNA SDKを使用できます。

1. アプリケーションの一覧で、アプリケーションをクリックして選択し、右クリックして[Properties] を選択します。
2. [Dependencies] タブをクリックしてから、アイコンをクリックします。
このアイコンを使用して、選択したアプリケーションを必要とするアプリケーションの一覧と、選択したアプリケーションが必要とするアプリケーションの一覧を切り替えることができます。

1. アプリケーションの一覧で、アプリケーションをクリックして選択し、右クリックして[Properties] を選択します。
2. [Dependencies] タブをクリックし、[Suggestions] をクリックします。
3. 項目を選択して [Link Applications] をクリックします。

1. アプリケーションの一覧で、アプリケーションをクリックして選択し、右クリックして[Properties] を選択します。
2. [Dependencies] タブをクリックし、[New] をクリックします。
[Applications] タブと [System Frameworks] タブに、AppDNAデータベース内の項目が一覧表示されます。
3. アプリケーションまたはシステムフレームワークの依存関係を指定するには、対応するタブを選択し、項目を選択して、[OK] をクリックします。

キュープロセッサ

Oct 16, 2015

AppDNAキュープロセッサは、AppDNAサーバーでの処理キューを管理します。これにより、複数のインポート処理および分析処理が同時に行われているときに、デッドロックおよびリソース競合の発生する可能性が低下します。

AppDNAキュープロセッサを有効にするには、 [Import and Analyze] ページで [Server Side Queuing] チェックボックスをオンにします。

レポートビュー

Oct 16, 2015

分析結果はレポートビューとして表示されます。レポートビューには、Overview Summary、Application Issues、Issue View などがあります。次の図は、これらのレポートで実行できる管理タスクを示しています。

The screenshot shows the AppDNA Report interface for Windows 8/8.1. It features a navigation bar with tabs for 'Estate View', 'Application Issues', 'Application Actions', 'Issue View', and 'Action View'. The main content area displays a 'Standard Summary' and a 'Custom Summary' table, each with a corresponding pie chart. Below these are two detailed application remediation reports. Callouts point to various interactive elements:

- Quickly swap between report views on different tabs
- Change the application or organizational entity selection
- Swap between different report views
- Change the OS image selection
- Print and export to a variety of formats
- Click to view the application's detailed remediation report views
- Click to filter the applications included in the report
- Click a column header to sort by the data in that column

Standard Summary			
RAG	Count	% of Total	Standard Summary Chart
R	2	20%	
A	3	30%	
G	5	50%	
U	0	0%	
⊞	0	0%	
Total	10	100.0%	

Custom Summary			
RAG	Count	% of Total	Custom Summary Chart
R	2	20%	
A	3	30%	
G	5	50%	
U	0	0%	
⊞	0	0%	
Total	10	100%	

#	App	Status	Name	Manufacturer	Version	Path	Source	Standard	Flow	Flow A	ANCM	BEST	DEPLO	DRY	ENV	HARD	OS	OFFICE	OS	S0	UMC	WPP	
1	6		J2SE Runtime Environ	Sun Microsystems, In	1.5.0.120	\\ADnaNA02\MSISource\QA_	msi	G	G		0	5	2	0	0	0	0	0	0	1	0	5	0
2	2		Microsoft Conferencin	Microsoft Corporation	8.0.6362.1	\\ADnaNA02\MSISource\QA_	msi	G	G		0	0	8	13	0	3	0	0	0	46	0	3	0

各トピックへのクイックリンク：

- [Overview Summary](#)
- [Application Issues](#)
- [Application Actions](#)
- [Issue View](#)
- [Action View](#)
- [Estate View](#)
- [レポートの表示](#)

[Overview Summary] は、アプリケーションポートフォリオの状態の概要を一覧できるダッシュボードです。選択した各アプリケーションについて、アクティブなレポートごとに全体的なRAG (赤、黄、緑) 状態が表示されます。RAGアイコンをクリックしてそのアプリケーションの修復レポートビューに移動することができます。ここでは、必要な修復の詳細がMST修正と共に (該当する場合) 表示されます。下位の修復レポートビューについては「[アプリケーションの問題の修復](#)」を参照してください。

RAGアイコンについて詳しくは、「[RAGアイコンについて](#)」を参照してください。

Application Issuesでは、選択したアプリケーションで見つかった問題の概要が提供されます。円グラフにより、レポート対象のアプリケーションについての標準およびカスタムのRAG状態が示されます。

アプリケーションの一覧では標準およびカスタムのRAG状態がアプリケーションごとに示され、AppDNAによる自動修正が可能かどうかを示されます。[Source] 列および [Source Category] 列にはインストールの種類が表示され、[Status] 列にはアプリケーションの分析が最新であるかどうかが表示されます。

[Show counts] チェックボックスをオンにすると、レポートの各アルゴリズムグループでアプリケーションがアルゴリズムをトリガーした回数が表示されます。アプリケーション内部の複数のコンポーネントが同じアルゴリズムをトリガーできるため、アプリケーションは1つのアルゴリズムを複数回トリガーできます。アプリケーション名はリンクになっており、クリックすると修復レポートビューを参照できます。

Application Actionsの円グラフでは、選択したアプリケーションの修復アクション前後のRAG状態が示されます。

選択したアプリケーションの一覧では、それぞれのアプリケーションについて修復アクション前後のRAG状態とアプリケーションの複雑度やアクション難易度が示されます。アクション難易度は、容易、中度、困難、修復不要に分類されます。アクション難易度は修復アクションに関連付けられており、カスタマイズすることもできます（「[アルゴリズムの構成](#)」を参照）。

Application Actionsの情報を使用して、ユーザー承認テスト（UAT）の準備ができているアプリケーションをすばやく確認できます。これらのアプリケーションのアクション前RAGおよびアクション後RAGが緑色だからです。移行に不適切なアプリケーションのアクション後RAGは赤色で、移行前に何らかの修復措置が必要なアプリケーションでは、アクション前RAGが黄色または赤色、アクション後RAGが緑色または黄色です。修復が必要な場合は、アプリケーションの複雑度とアクション難易度によって必要な作業のおよその量がわかります。

[Show counts] チェックボックスをオンにしたかどうかに応じて、修復が必要な問題の数も、修復アクションの種類もこのレポートビューに表示されます。アプリケーション名はリンクになっており、クリックすると修復レポートビューを参照できます。

Issue Viewでは、レポートに含まれる各アルゴリズムをトリガーしたアプリケーション数の内訳が提供されます。円グラフでは、レポートに含まれるアプリケーションの標準、カスタム、およびアクション後のRAG状態が示されます。レポートのすべてのアルゴリズムでカスタムRAGと標準RAGが同じである場合、カスタムRAGの円グラフは表示されません。

棒グラフでは、各アルゴリズムグループのアルゴリズムをトリガーしたアプリケーションの数が示されます。

アルゴリズムの一覧には標準、カスタム、およびアクション後のRAG状態、修復が可能かどうか、および影響を受けるアプリケーションの数が示されます。各アルゴリズムを展開して、影響を受けるアプリケーションの一覧と、アルゴリズムおよび修復アクションの説明を表示できます。アプリケーション名はリンクになっており、クリックすると修復レポートビューを参照できます。

Action Viewでは、ポートフォリオ内のアプリケーションを修復するために必要なアクション内容の内訳が提供されます。円グラフでは、レポートに含まれるアプリケーションの標準、カスタム、およびアクション後のRAG状態が示されます。レポートのすべてのアルゴリズムでカスタムRAGと標準RAGが同じである場合、カスタムRAGの円グラフは表示されません。

棒グラフでは、修復が必要なアプリケーションの数が修復の種類別に示されます。

また、修復アクションの種類およびその下位区分（アクションおよびアクション詳細とも呼ばれます）の一覧と、アクション後RAGとその種類の修復が必要なアプリケーションの数が示されます。各アクションとアクション詳細の組み合わせを展開して、関連するアプリケーションの一覧を表示できます。アプリケーション名はリンクになっており、クリックすると修復レポートビューを参照できます。

EstateViewは試用版ライセンスでのみ表示され、対象の技術に対するアプリケーションポートフォリオの状態の概要を提供します。このレポートは個々のアプリケーションライセンスに依存しないため、AppDNAを評価する場合に有効です。

EstateViewでは、ポートフォリオに含まれるアプリケーションの標準、カスタム、およびアクション後のRAG状態が円グラフで示されます。レポートのすべてのアルゴリズムでカスタムRAGと標準RAGが同じである場合、カスタムRAGの円グラフは表示されません。

棒グラフでは、各アルゴリズムグループのアルゴリズムをトリガーしたアプリケーションの数が示されます。

アルゴリズムの一覧には標準、およびカスタムのRAG状態、AppDNAによる自動修復が可能かどうか、および影響を受けるアプリケーションの数が示されます。各アルゴリズムを展開して、アルゴリズムおよびその修復アクションの説明を表示できます。

1. AppDNAのサイドバーで [Reports: Applications] をクリックします。
2. [Application List] 画面で、レポートに含めるアプリケーションを選択します。
3. 次のいずれかを行います。
 - [Application List] の上のツールバーのドロップダウンリストから表示するレポートを選択して、[View Report] をクリックします。
 - または、AppDNAのサイドバーから [Reports: Applications] 、 [Module] 、 [Report] 、 [Report view] の順に選択します。ここで、[Module] 、 [Report] 、 および [Report view] によって、表示するレポートビューが特定されます。レポートビューを開いた後は、画面の右上隅にあるリンクを使用して、同じレポートの異なるレポートビューに移動できます。

AppDNA内の複数のタブでレポートを表示できます。そのため、異なるレポートとレポートビューを簡単にすばやく切り替えられます。ブラウザーウィンドウでレポートを開くこともできます。

- レポートビューを新しいタブで開くには、サイドバーでレポートビューを右クリックして[新しいタブで開く] を選択します。
- レポートビューを新しいウィンドウで開くには、サイドバーでレポートビューを右クリックして[新しいウィンドウで開く] を選択します。

機能

Oct 16, 2015

The screenshot shows the AppDNA Report interface for Windows 8/8.1. It includes a navigation bar with tabs like 'Estate View', 'Application Issues', 'Application Actions', 'Issue View', and 'Action View'. A toolbar contains links for 'Change Selection', 'Change images', and 'Export'. The main content area displays a 'Standard Summary' and a 'Custom Summary', both with tables and pie charts. The 'Standard Summary' table is as follows:

RAG	Count	% of Total
R	2	20%
A	3	30%
G	5	50%
U	0	0%
⊞	0	0%
Total	10	100.0%

The 'Custom Summary' table is identical. Below the summaries is a table with columns for application details and various metrics. Callouts point to specific features: 'Quickly swap between report views on different tabs' (navigation bar), 'Change the application or organizational entity selection' (Change Selection link), 'Swap between different report views' (Application Issues tab), 'Change the OS image selection' (Change images link), 'Print and export to a variety of formats' (Export link), 'Click to view the application's detailed remediation report views' (application name link), 'Click to filter the applications included in the report' (filter icon), and 'Click a column header to sort by the data in that column' (column header).

注：評価用または試用のインストールでのみ利用できる [Estate View] リンクでは、選択したアプリケーションにかかわらず、ポートフォリオ内のすべての関連アプリケーションの概要データが提供されます。メインツールバーのオプションを使用して、異なるレポートビューを切り替えます。

修復レポートビューを開くには、Application Issuesビューのようなほかのレポートビュー内のアプリケーション名をドリルダウンします。

選択されているオペレーティングシステムイメージを変更するには、[Export] ツールバーの[Change images] リンクを使用します（このリンクは、オペレーティングシステムイメージが関係しないレポートには表示されません）。レポートのデフォルトのオペレーティングシステムイメージを定義するには、「OSイメージの設定」を使用します。

[Export] リンクを使用して、レポートを印刷したりさまざまな形式にエクスポートしたりします。使用できる形式はレポートビューの種類によって異なります。オプションには、MHT（ブラウザーで表示でき、簡単にほかのユーザーに送信できる単一ファイルのWebページ）、HTML（関連イメージとそのほかのファイルを含む別個のフォルダーを伴う単一のWebページ）、Word、Excel、およびPDF（Application Issuesレポートビューのみ）があります。一括エクスポートを実行するにはレポートエクスポートウィザードを使用します。

列見出しをクリックして、その列のデータで並べ替えます。昇順と降順を切り替えるには、ヘッダーをもう一度クリックします。列のサイズを変更するには、列見出しの間の縦棒をドラッグします。デフォルトの並べ替え順序および列サイズに戻すには、[Reset] をクリックします。

Application IssuesおよびApplication Actionsレポートビューの [Show counts] チェックボックスを使用して、アプリケーションが各アルゴリズムグループのアルゴリズムをトリガーした回数、および各種の修復アクションが必要なアプリケーションの数が表示される追加列の表示/非表示を設定します。

特定列のデータでフィルターするには、フィルター (🔍) アイコン (列見出しのすぐ下) をクリックします。たとえば、Application ActionsレポートビューでAdobeアプリケーションのみを表示するとします。これを行うには [Manufacturer] 列見出しの下のフィルターアイコンをクリックし、ボックスの一覧で [Contains] を選択してテキストボックスに「Adobe」と入力します。同様に、結果の表示対象を再開発が必要なアプリケーションのみに制限するには、[REDEV] 列で「0より大きい」フィルターを作成します (この列を表示するには、[Show counts] チェックボックスをオンにする必要があります)。

アプリケーションレポートビューはブラウザウィンドウで表示できます。これを行うには、サイドバーで表示するレポートビューを右クリックして、[Open in New Windows] を選択します。

アプリケーションレポートビューに含まれるアプリケーションはユーザーが前に選択したアプリケーションに基づいて決まります。たとえば、[Application List] 画面または [Import Applications] 画面で選択したアプリケーションや、[Manage Groups] 画面で選択したグループです。[Application List] 画面で、またはレポートビューアーツールバーの [Change Selection] をクリックして、選択したアプリケーションを変更できます。

関連のあるレポートビューの先頭には、選択されているアプリケーションの数が表示されます。グループが選択された場合は、その名前も表示されます。グループ名の隣のアスタリスク (*) は、選択された後でグループが変更されたことを意味します (たとえば、アプリケーションが追加された場合など)。

注：これは**組織レポート**には当てはまりません。これらのレポートにはActive DirectoryまたはSystem Center Configuration Managerによって管理されているアプリケーションの状態が表示されます。

RAGアイコンについて

Oct 16, 2015

AppDNAでは、赤、黄色、および緑のアイコン（RAGアイコン）を使用してアプリケーションの互換性状態が示されます。たとえば、以下のOverview Summaryレポートビューの抜粋には、アプリケーションの一覧と、アクティブなレポートそれぞれの全体的な互換性状態を示すRAGアイコンが表示されています。

#	AppID	Name	Manufacturer	Version	Complexity RAG	Overall RAG	Server 2008 R2 SP1	Server 2012/2012 R2	Server Compatibility Manager	Windows 7 SP1	Windows 8/8.1	Desktop Compatibility Manager	64 Bit 64bit Manager
1	1	Microsoft Office Live	Microsoft Corporation	8.0.6362.143									
2	10	Citrix XenCenter	Citrix Systems, Inc.	6.0.2									
3	2	Microsoft Conferenci	Microsoft Corporation	8.0.6362.143									
4	3	Microsoft SQL Serve	Microsoft Corporation	10.51.2500.0									

このトピックでは、さまざまなRAGアイコンとその意味の概要と、RAGの種類について説明します。また、一部のエクスポートや、Application IssuesレポートビューなどでマウスでRAGアイコンをポイントすると表示されるヒントで、RAGアイコンなどのようにテキストに変換されるのかについても説明します。

G AppDNAの分析によると、アプリケーションは対象のプラットフォームで現状のまま機能すると予想され、ユーザー承認テストの準備ができています。


A AppDNAの分析によると、修復できる可能性があります、アプリケーションは機能しない、または一部の機能が動作しない可能性があります。


R AppDNAの分析によると、アプリケーションは機能しないことが予想される、または機能しないことが確実で、再開発が必要な可能性があります。


GA アイコンの右下の部分がAppDNAのRAG状態を示し、左上のオーバーレイがAppDNAの外部（「medium trust」（デフォルト）として構成された外部データソース）に由来する別の互換性状態を示しています。ここに示されているアイコンは、黄色の標準RAGと緑のオーバーレイの組み合わせです。これは、AppDNAの分析ではアプリケーションが対象の技術で問題を引き起こす可能性があるとして示されたが、外部データソースでは（おそらく、実行時に自動的にshimが適用されるために）アプリケーションに互換性があると示していることを表します。このほかにも、AppDNAのRAG状態と外部データの状態のすべての組み合わせが可能です（緑のRAGに赤のオーバーレイ、緑のRAGに黄色のオーバーレイ、赤のRAGに赤のオーバーレイなど）。


GA 外部データが「low trust」として構成されている以外は前のアイコンと同じです。


G 外部データソースが「high trust」として構成されているためにその互換性情報（ここでは緑の状態）によってAppDNAの結果が自動的に上書きされています。「high trust」の外部データに由来する黄色と赤の状態を表す同様のアイコンもありません。

 AppDNAのジャーナルを使用して互換性状態が手動で緑に設定されています（テストの結果、対象の技術上でアプリケーションが動作するとわかった場合など）。

 AppDNAのジャーナルを使用して互換性状態が手動で黄色に設定されています（テストの結果、対象のプラットフォーム上でアプリケーションに問題が発生するとわかった場合など）。

 AppDNAのジャーナルを使用して互換性状態が手動で赤に設定されています（テストの結果、対象のプラットフォーム上でアプリケーションが動作しないとわかった場合など）。


 - データ不足のため状態が不明です。通常これは、アプリケーションがレポートのためにまだ分析されていないためです。デスクトップアプリケーションはWebアプリケーションレポートに対してこの状態になり、WebアプリケーションはWindowsアプリケーションレポートに対してこの状態になります。


 アプリケーションのレポートライセンスが有効になっていません（ロック）。アプリケーションのロック解除について詳しくは、「[ライセンスの適用](#)」を参照してください。


各レポートに対するアプリケーションのRAG状態には3つの種類があります。それらを次の表に示します。

RAG Type	説明
標準設定	特定のレポートに対するアプリケーションの全体的な互換性状態を示します。レポートに組み込まれているアルゴリズムに基づいています。アプリケーションによってトリガーされたすべてのアルゴリズムの中で最も高いRAG状態がそのレポートに対するアプリケーションの全体的なRAG状態になります。上で説明したように、外部データエントリやジャーナルエントリによってRAGアイコンを変更できます。
カスタム	デフォルトでは標準RAGと同じですが、組織のニーズに合わせて カスタマイズ することができます（黄色状態を赤に上げたり、緑に下げたりするなど）。カスタムRAGのアイコンも、標準RAGと同様に、外部データエントリやジャーナルエントリによって変更できます。
アクション後	修復アクションを実行した後で予期される状態を示します。たとえば、標準RAGが黄色で修復オプションがある場合は、通常、アクション後RAGは緑になります。ただし、標準RAGが赤で修復オプションがアプリケーションの再開発のみである場合は、アクション後RAGも赤になり、複雑な開発および/または置き換えが必要であることを示します。

一部のアプリケーションレポートビューには、アプリケーションの複雑度RAGも表示されます。これは、アプリケーションの複雑度を示します。複雑度は、アプリケーションの持つファイルとレジストリエントリの数に基づきます。3つの複雑度レベルのしきい値を [\[Reporting settings\]](#) で設定できます。

 比較的単純なアプリケーションです。

 一般的なアプリケーションです。

 複雑なアプリケーションです。

Application IssuesレポートビューやApplication ActionsレポートビューでマウスでRAGアイコンをポイントすると、テキスト

バージョンのRAGアイコンがヒントとして表示されます。一部のレポートエクスポートでRAGアイコンを表現するためにも同じテキストが使用されます。たとえば、RAGアイコンが「low trust」または「medium trust」の外部データエントリによって変更されている場合は、次のように、外部データ由来の状態と信頼レベルがカッコで囲んで示されます。

Red (Green external: medium trust)

手動のジャーナルエントリまたは「high trust」の外部データエントリが適用されている場合は、それらがテキストの先頭に示されます (AppDNAのRAGが上書きされるため)。AppDNAのRAGはその後にかっこで囲んで示されます。次に例を示します。

Green journal (Amber RAG) Green external: high trust (Amber RAG)

アプリケーションレポート

Oct 16, 2015

このトピックでは、最上位のアプリケーションレポートビューの概要について説明します。

このセクションのトピックへのクイックリンク：

- [Overview Summary](#)
- [EstateView](#)
- [Application Issues](#)
- [Application Actions](#)
- [Issue View](#)
- [Action View](#)

下位の修復レポートビューについては「[アプリケーションの問題の修復](#)」を参照してください。



Overview Summaryレポートビューは、アプリケーションポートフォリオの状態のハイレベルな概要を一覧できるダッシュボードです。選択した各アプリケーションについて、アクティブなレポートごとに全体的なRAG（赤、黄、緑）状態が表示されます。RAGアイコンをクリックしてそのアプリケーションの修復レポートビューに移動することができます。ここでは、必要な修復の詳細がMST修正と共に（該当する場合）表示されます。

RAGアイコンについて詳しくは、「[RAGアイコンについて](#)」を参照してください。



評価用または試用のインストールでのみ利用できるEstateViewでは、対象の技術に対するアプリケーションポートフォリオ全体の統合された状態の概要が提供されます。このレポートは個々のアプリケーションライセンスに依存しないため、AppDNAを評価する場合に有効です。

EstateViewの始めには、ポートフォリオに含まれるアプリケーションの、標準、カスタム、およびアクション後のRAG状態の概要円グラフがあります。すべてのレポートのアルゴリズムでカスタムRAGと標準RAGが同じである場合は、カスタムRAの円グラフは表示されません。

円グラフの下には、各アルゴリズムグループ内のアルゴリズムをトリガーしたアプリケーション数を示す棒グラフがあります。アプリケーション数が件数およびアプリケーションポートフォリオの割合で表示されます。棒グラフの後にはアルゴリズム一覧が続きます。アルゴリズムのID、名前、およびアルゴリズムグループが、標準およびカスタムのRAG、AppDNAが自動修正を提供するかどうか、および影響を受けるアプリケーションの数と共に表示されます。各アルゴリズムを展開して、アルゴリズムおよびその修復アクションの説明を表示できます。




Application Issuesレポートビューでは、選択したアプリケーションで見つかった問題の概要が提供されます。ビューの始めには、レポートに含まれる項目の、標準およびカスタムのRAG状態の概要円グラフがあります。

円グラフの後には、レポートに含まれるアプリケーションの一覧が続きます。このレポートには、各アプリケーションについて、標準およびカスタムのRAG状態と、AppDNAにより自動修正が提供されるかどうかが表示されます。[Source] 列および [Source Category] 列にはインストールの種類が、[Status] 列には、このレポートに関するアプリケーションの分析が最新であるかどうかを示すアイコンが表示されます。

[Show counts] チェックボックスをオンにすると、レポートの各アルゴリズムグループでアプリケーションがアルゴリズムをトリガーした回数が表示されます。（アプリケーション内部の複数のコンポーネントが同じアルゴリズムをトリガーするため、アプリケーションは1つのアルゴリズムを2回以上トリガーできます）。

アプリケーション名はリンクになっており、クリックするとそのアプリケーションの詳細な修復レポートビューを参照できます。アプリケーション一覧の下に、アルゴリズムグループの一覧と、アイコンを説明する凡例があります。


 Application Actionsレポートビューの最初には、選択したアプリケーションについての修復アクション前後のRAG状態を示す概要円グラフがあります。

円グラフの後には、選択したアプリケーションの一覧が続きます。各項目について、アクション前後のRAGと、アプリケーションの複雑度やアクション難易度のインジケータがレポートに表示されます。アクション難易度は、容易、中度、困難、修復不要に分類されます。アクション難易度は修復アクションに関連し、[Algorithm Groups] 画面でカスタマイズできます。詳しくは、「[アルゴリズムの構成](#)」を参照してください。

この情報を使用して、ユーザー承認テスト（UAT）の準備ができていないアプリケーションをすばやく確認できます。これらのアプリケーションのアクション前RAGおよびアクション後RAGが緑色だからです。移行に不適切なアプリケーションのアクション後RAGは赤色で、移行前に何らかの修復措置が必要なアプリケーションでは、アクション前RAGが黄色または赤色、アクション後RAGが緑色または黄色です。修復が必要な場合は、アプリケーションの複雑度とアクション難易度によって必要な作業のおよその量がわかります。


[Show counts] チェックボックスをオンにしたかどうかに応じて、修復が必要な問題の数も、修復アクションの種類ごとにこのレポートビューに表示されます。

アプリケーション名はリンクになっており、クリックすると修復レポートビューを参照できます。

 Issue Viewでは、レポートに含まれる各アルゴリズムをトリガーしたアプリケーション数の内訳が提供されます。このビューの最初には、レポートに含まれるアプリケーションの、標準、カスタム、およびアクション後のRAG状態の概要円グラフがあります。（すべてのレポートのアルゴリズムでカスタムRAGと標準RAGが同じである場合は、カスタムRAGの円グラフは表示されません）。円グラフの下には、各アルゴリズムグループ内のアルゴリズムをトリガーしたアプリケーション数示す棒グラフがあります。アプリケーション数が件数およびポートフォリオ（レポートに含まれるアプリケーション）に対する割合として表示されます。

棒グラフの後にはアルゴリズム一覧が続きます。アルゴリズムのID、名前、およびアルゴリズムグループが、標準、カスタム、およびアクション後のRAG、修正策があるかどうか、および影響を受けるアプリケーションの数と共に表示されます。アプリケーション数が件数およびレポートに含まれるアプリケーションに対する割合の両方で表示されます。

各アルゴリズムを展開して、影響を受けるアプリケーションの一覧と、アルゴリズムおよびその修復アクションの説明を表示できます。アプリケーション名はリンクになっており、クリックすると修復レポートビューを参照できます。

 Action Viewでは、ポートフォリオ内のアプリケーションを修復するために必要なアクション内容の内訳が提供されます。このビューの最初には、レポートに含まれるアプリケーションの、標準、カスタム、およびアクション後のRAG状態の概要円グラフがあります。（すべてのレポートのアルゴリズムでカスタムRAGと標準RAGが同じである場合は、カスタムRAGの円グラフは表示されません）。円グラフの下には、修復が必要なアプリケーションの数を修復の種類別に示す棒グラフがあります。アプリケーション数が件数およびポートフォリオ（レポートに含まれるアプリケーション）に対する割合として表示さ

れます。

棒グラフの後には、修復アクションの種類およびその下位区分（アクションおよびアクション詳細ともいいます）の一覧と共に、アクション後RAGとこの種類の修復が必要なアプリケーションの数が続きます。アプリケーション数が件数およびレポートに含まれるアプリケーションに対する割合の両方で表示されます。

各アクションとアクション詳細の組み合わせを展開して、関連するアプリケーションの一覧を表示できます。アプリケーション名はリンクになっており、クリックすると修復レポートビューを参照できます。

Effort Calculator

Oct 16, 2015

AppDNA Effort Calculatorを使用して、ポートフォリオを新しいプラットフォームに移行するために必要な時間、費用、および作業を見積もります。たとえば、5人が6か月間、50万ドルかけて作業する必要がある、ということがわかります。Effort Calculatorでは多くの変数を使用します。たとえば、テスト担当者1日あたりの費用、1日の作業時間、所与の複雑度のアプリケーションのテストにかかる時間を変数に定義します。組織の特性を反映するように変数を構成できます。費用とアプリケーションの修復にかかる時間、そしてAppDNAで提供できる省力の見込みの詳細な内訳が作成されます。

Before Remediation

RAG	Apps	% Total	RAG Summary Chart
R	11	42.3%	
A	5	19.2%	
G	10	38.5%	
	26		

After Remediation

RAG	Apps	% Total	RAG Summary Chart
R	2	7.7%	
A	3	11.5%	
G	21	80.8%	
	26		

		Without AppDNA	With AppDNA	Savings		
application sample	32	Months	0.62	0.17	0.45	USD
		Cost	21,580	5,592	15,988	
application portfolio	1,500	Months	35.63	9.8	25.83	USD
		Cost	1,245,000	322,348	922,652	

AppDNA License Cost included in calculation: 0 USD

Using AppDNA could deliver:

- A cost saving of 922,652 USD
- A reduction in the project time of 25.83 months

Effort Calculatorを開くには、サイドバーで [Reports: Applications] 、 [Effort Calculator] の順に選択します。

Effort Calculatorは、次の手順で使用します。

1. レポートの選択
2. 変数の構成と結果の表示
3. 結果のエクスポート

Effort Calculatorの最初の手順では、作業を見積もるプロジェクトを表すレポートを選択します。たとえば、Windows 7の移行プロジェクトに必要な作業を見積もる場合は、Windows 7レポートを選択します。使用できるレポートが画面の左側に一覧表示されます。

レポートを選択すると、そのレポートに対して分析済みの、現在選択されているアプリケーションの全体的な状態の概要が画面右側に表示されます。

選択されているアプリケーションを変更するには、ツールバー右側の [Change Selection] をクリックします。 [Application List] でアプリケーションを選択し、 [Select] をクリックして適用します。

注：

- Effort Calculatorでは、未分析または古い（再分析が必要な）アプリケーションは無視されます。これにより、選択したアプリケーションの数と表示されるアプリケーションの数に明確な差異が生じる可能性があります。たとえば、10個のアプリケーションを選択しても、選択したレポートに対してそのうちの8つしか分析されていない場合、Effort Calculatorにはアプリケーションの合計数が8と表示されます。

- グループを選択し、そのグループに未分析または古いアプリケーションが含まれている場合、グループ名がアスタリスク (*) 付きで表示されます。

[Next] をクリックして次の手順に移ります。

Effort Calculatorのメイン画面に、ポートフォリオ内の、修復内容が判明しているアプリケーションの修復に必要な作業の見積もりと、追加のテストが必要なアプリケーション、または例外として扱う必要があるアプリケーションが強調して表示されます。修復できない場合は、アプリケーションは例外とみなされます。これは、アプリケーションの再開発か使用停止が必要な可能性があるということを意味します。

概要には次の2つの円グラフが表示されます。

- **Before remediation** – 左側の円グラフはアプリケーションの現在の状態を示します。
- **After remediation** – 右側の円グラフは修復手順の完了後のアプリケーションの想定される状態を示します。たとえば、アプリケーションの現在の状態が黄色で修復オプションがある場合は、通常、修復後RAGは緑です。これは、アプリケーションはユーザー承認テストの準備ができていることを示します。ただし、標準RAGが赤で修復オプションがアプリケーションの再開発のみである場合は、修復後RAGも赤になり、複雑な開発および/または置き換えが必要であることを示します。Effort Calculatorでは、これらのアプリケーションは簡単に解決できる問題の範囲にないため、例外とみなされます。黄色の修復後RAGは、そのアプリケーションが緑色のアクション後RAGを持つアプリケーションよりも多くのテストを必要とすることを示します。

概要の下に4つのタブがあります。

- **Variables** – 計算に使用されるさまざまな変数が表示されます。これらの変数は組織のニーズに合わせて構成することができます。いくつかの変数については、次の表を参照してください。

変数	説明
Number of applications in the full portfolio	デフォルトではインポート済みのアプリケーションの数が適用されます。この数を増やして、実際のアプリケーションポートフォリオの規模を反映させることができます。AppDNAでは、このサンプル結果に基づいてポートフォリオ全体の移行に必要なアクションが推定されます。
Currency	国際通貨コードの一覧については、 http://www.xe.com/iso4217.php を参照してください。
Smoke testing time	最初のインストールおよびテストの実行に必要な時間（1時間単位）で、一般的に「スモークテスト」と呼ばれます。通常、これは綿密なテストではありません。 <ul style="list-style-type: none"> ● デフォルト値：8 - 外部のグループまたはプロセスに依存関係がない、初めのテスト段階を完了するまでの平均時間です。 ● 代替値A：24 - エンタープライズ特有のプロセスを考慮に入れた値です。たとえば、スモークテストにアプリケーション認証のプロセスの一部が含まれ、インストール、文書化、および初めのテストについて、アプリケーション所有者から情報を収集するための時間を割り当てる場合です。 ● 代替値B：4 - インストールを自動化し、実行スクリプトでごく基本的な機能のみをテストする、軽いスモークテストを行う場合の値です。
Applications that are expected to	問題が生じることが予想されるアプリケーションの数で、ポートフォリオ全体に対する割合で示されます。デフォルト値は、専門家の試算から技術関与を通じたフィードバックまで、さまざまな市場のデータから導き出されたものです。この値は、エンタープライズ環境固有のプロセスやアプリ

have issues 変数	<p>説明 ションの準備状態により異なります。</p>
Applications that are expected to be exceptions	<p>修復不能なアプリケーション（または修復しないことが決定されたアプリケーション）の割合です。アプリケーションポートフォリオの経過年数に応じて、この変数は大いに変化する可能性があります。通常、古いポートフォリオでは非互換アプリケーションの割合が大きくなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● デフォルト値：10% - アプリケーションの経験的な合理化データに基づき、エンタープライズの発揮する主導権に応じて、使用を停止するアプリケーションの割合は10%から30%の間になります。多くの場合、アプリケーションの非互換性は使用停止を判断する基本要因になります。ポートフォリオの経過年数のような変数が不明な場合は、デフォルト値を使用してください。 ● 代替値A：35% - アプリケーションの製品寿命に関するエンタープライズ固有の規則により、デスクトップの移行と更新に伴い、アプリケーションの使用停止が積極的に求められる場合があります。 ● 代替値B：5% - エンタープライズ固有の規則により、サポートに必要なプラットフォームの混在状況にかかわらず、すべてのアプリケーションを移行する保証が求められる場合もあります。
Time to identify the cause of a failure and resolve it	<p>AppDNAを使用せずに問題を特定してそれを解決するためにかかる時間（1時間単位）で、アプリケーションごとに見積もられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● デフォルト値：24 - 外部との依存関係がない、アプリケーションのテストと修復の典型的な手動プロセスにかかる平均時間です。テストと修復を1か所から行います。 ● 代替値：60 - エンタープライズ固有の追加のプロセスを考慮に入れる場合の平均時間です。追加のプロセスには、インストールに関するアプリケーション所有者からの情報収集、アプリケーションを組み合わせた綿密なテスト、ベースラインからゴールドイメージまで各バージョンをすべて確認する、アプリケーション対OSイメージのテストなどが考えられます。
Staging time	<p>移行先の環境にアプリケーションをインストールして動作していることを検証するまでの平均時間（1時間単位）です。</p>
Size of remediation team	<p>これはアプリケーションポートフォリオのサイズによって左右されます。典型的な場合では、250個のアプリケーションに対して1人の修復スペシャリストを配置します。</p>
Size of testing/staging team	<p>これはアプリケーションポートフォリオのサイズによって左右されます。典型的な場合では、100個のアプリケーションに対して1人のテスト/セットアップ要員を配置します。</p>
Remediation time	<p>行はアプリケーションの複雑度を表します。アプリケーションの複雑度は、ファイルとレジストリエントリの数によって計測されます。構成可能なしきい値によって、アプリケーションの複雑度を単純、標準、または複雑に定義します。しきい値は [Reporting Settings] で構成できます。詳しくは、「レポート設定」を参照してください。</p> <p>列は修復の難易度を表します。AppDNAでは、分析処理中に発見的アルゴリズムを実行することにより、アプリケーション内の問題を特定します。各アルゴリズムにより特有の問題が特定され、その問題を軽減するために推奨される修復アクションが提示されます。これらのアクションに関連する作業の難易度は、容易、中度、困難に分類されます。1つのアプリケーションの全体的な修復作業は、アプリケーションがトリガーするアルゴリズムに関連付けられている、最も高度な作業に基づいて決定されます。[Algorithm Groups] 画面で修復アクションを構成することもできます。詳しくは、「アルゴリズムの構成」を参照してください。</p>

- **Results worksheet** – 修復の種類（容易、中度、および困難）およびアプリケーションの複雑度別のアプリケーションの内訳と、それらの修復とテストにかかる時間が表示されます。
- **Effort estimation with AppDNA** – AppDNAを使用する場合のプロジェクトの総費用の見積もりが表示されます。
- **Effort estimation without AppDNA** – AppDNAを使用しない場合のプロジェクトの総費用の見積もりが表示されます。

Effort Calculatorのすべての実行結果（説明の情報も含む）をWord文書にエクスポートできます。これを行うにはAppDNAクライアントがインストールされているコンピューターにMicrosoft Wordをインストールする必要があります。

このレポートをエクスポートするには、メインツールバーの[Export] をクリックします。しばらくするとMicrosoft Wordが開き、エクスポートされたレポートが表示されます。

Effort Calculatorの変数は、後でインポートするためにXMLファイルとしてエクスポートできます。これにより、異なるシナリオを簡単に比較できます。

Effort Calculatorの設定をエクスポートするには：

1. AppDNAのメニューで、[Administration] 、 [Action Administration] の順に選択します。
2. [Action Administration] 画面のツールバーで、 [Export Action Settings] をクリックします。
3. [Save As] ダイアログボックスで、ファイルに適切な名前を付けて、適切な場所に保存します。

設定をインポートするには：

1. AppDNAのメニューで、 [Administration] 、 [Action Administration] の順に選択します。
2. [Action Administration] 画面のツールバーで、 [Import Action Settings] をクリックします。
3. [Open] ダイアログボックスで、前にエクスポートしたファイルに移動します。
4. [OK] をクリックします。

変数

Oct 16, 2015

このトピックでは、[Effort Calculator](#)の変数について説明します。これらの変数は組織のニーズに合わせて構成することができます。作業が完了したら、画面上部のツールバーの [Save] をクリックして変更を保存します。

これらの変数により、プロジェクト固有の基本情報を定義してレポートをカスタマイズすることができます。

Customer name - レポートのエクスポートで使用する会社名です。

Number of applications in the full portfolio - 新しいプラットフォームに移行するアプリケーションの数です。この値はデフォルトでAppDNAにインポート済みのアプリケーションの数になります。この数を増やして、実際のアプリケーションポートフォリオの規模を反映させることができます。サンプル結果から、ポートフォリオ全体を移行する作業量が推定されます。

Currency - レポートで使用する通貨です。通常、3文字の通貨コードで表わします。国際通貨コードの一覧については、<http://www.xe.com/iso4217.php>を参照してください。

Working hours per day - 通常の稼働日の稼働時間です。時間に関係するすべての計算に影響し、時間的見積もりの正確さの向上に役立ちます。

Average working days in a month - 稼働月の平均稼働日数です。これにより、時間的見積もりをさらに精密にすることができます。

これらの変数は、AppDNAを使用しない場合のプロジェクト見積もりの正確さの向上に役立ちます。ここでは、デフォルト値といくつかの代替値をそれらが適した状況の説明と共に示します。

Smoke testing time - 初めのインストールと、「スモークテスト」として一般に知られるテストの実行にかかる時間を、時間単位で入力します。通常、これは綿密なテストではありません。

- デフォルト値：8 - 外部のグループまたはプロセスに依存関係がない、初めのテスト段階を完了するまでの平均時間です。
- 代替値A：24 - エンタープライズ特有のプロセスを考慮に入れた値です。たとえば、スモークテストにアプリケーション認証のプロセスの一部が含まれ、インストール、文書化、および初めのテストについて、アプリケーション所有者から情報を収集するための時間を割り当てる場合です。
- 代替値B：4 - インストールを自動化し、実行スクリプトでごく基本的な機能のみをテストする、軽いスモークテストを行う場合の値です。

Applications that are expected to have issues - 問題があると予想されるアプリケーション数を、ポートフォリオに対する割合で指定します。デフォルト値は30%です。この値は、専門家の試算から技術関与を通じたフィードバックまで、さまざまな市場のデータから導き出されたものです。これは、エンタープライズ固有のプロセスとアプリケーションの準備態勢に基づくもので、組織によって異なります。

Applications that are expected to be exceptions - 修復できない、または修復しないと決定したアプリケーションの割合を定義します。アプリケーションポートフォリオの経過年数に応じて、この変数は大いに変化する可能性があります。通常、古いポートフォリオは新しいポートフォリオより、互換性のないアプリケーションの割合が高くなります。

- デフォルト値：10% - アプリケーションの経験的な合理化データに基づき、エンタープライズの発揮する主導権に応じて、

使用を停止するアプリケーションの割合は10%から30%の間になります。多くの場合、アプリケーションの非互換性は使用停止を判断する基本要因になります。ポートフォリオの経過年数のような変数が不明な場合は、デフォルト値を使用してください。

- **代替値A**：35% - アプリケーションの製品寿命に関するエンタープライズ固有の規則により、デスクトップの移行と更新に伴い、アプリケーションの使用停止が積極的に求められる場合があります。
- **代替値B**：5% - エンタープライズ固有の規則により、サポートに必要なプラットフォームの混在状況にかかわらず、すべてのアプリケーションを移行する保証が求められる場合もあります。

Time to identify the cause of a failure and resolve it - これは、AppDNAを使用しない場合の障害特定と修整に概して必要な、アプリケーションごとの時間の見積もりです。

- **デフォルト値**：24 - 外部との依存関係がない、アプリケーションのテストと修復の典型的な手動プロセスにかかる平均時間です。テストと修復を1か所から行います。
- **代替値**：60 - エンタープライズ固有の追加のプロセスを考慮に入れる場合の平均時間です。追加のプロセスには、インストールに関するアプリケーション所有者からの情報収集、アプリケーションを組み合わせた綿密なテスト、ベースラインからゴールドイメージまで各バージョンをすべて確認する、アプリケーション対OSイメージのテストなどが考えられます。

これらの変数は、AppDNAを使用する場合のポートフォリオを制御する時間と費用を見積もる際に使用されます。

Applications that have MSI installation package - ポートフォリオ全体に対する割合で入力します。Windowsアプリケーションはそのインストールパッケージを使用してAppDNAにインポートします。MSIインストールパッケージ、App-V.sftまたは.appvファイル、またはそのほかの種類のインストールファイルを使用できます。ほかの種類のインストールパッケージより、MSIと.sftおよび.appvファイルの方が簡単にインポートできます。Effort Calculatorでは、AppDNAでのアプリケーションの処理にかかる時間を見積もるときに、ここに入力する数字が考慮されます。

AppDNA license cost - この変数は、投資利益データにおける費用の詳細をより正確にするためにオプションで使用します。

これらの変数は、AppDNAを使用しても使用しなくても計算に影響を与えます。

Staging time - アプリケーションを対象の環境にインストールして動作させるためにかかる平均時間を、時間単位で指定します。デフォルト値は2時間です。

Size of remediation team - プロジェクトの修復チームの要員数です。これはアプリケーションポートフォリオのサイズによって左右されます。典型的な場合では、250個のアプリケーションに対して1人の修復スペシャリストを配置します。デフォルト値は3です。

Size of testing/staging team - プロジェクトのテストおよび/またはセットアップチームの要員数です。これはアプリケーションポートフォリオのサイズによって左右されます。典型的な場合では、100個のアプリケーションに対して1人のテスト/セットアップ要員を配置します。デフォルト値は5です。

Remediator cost per day - 修復要員の1日あたりの平均費用です。

Tester/stager cost per day - テスト/セットアップ要員の1日あたりの平均費用です。

Project manager cost per day - プロジェクトマネージャーの1日あたりの平均費用です。

テストと修復の変数のセクションでは、異なる複雑度のアプリケーションの修復とテストにかかる時間を入力するグリッドが提供されます。時間単位で時間を入力します。

Remediation time - 異なる複雑度のアプリケーションの修復にかかる平均時間を入力します。

Application complexity	Remediation time			Testing time	
	Easy	Medium	Hard		
Simple	1	2	4	1	hours
Normal	2	6	8	2	hours
Complex	4	8	24	4	hours

行はアプリケーションの複雑度を表します。アプリケーションの複雑度は、ファイルとレジストリエントリの数によって計測されます。構成可能なしきい値によって、アプリケーションの複雑度を単純、標準、または複雑に定義します。しきい値は [Reporting Settings] で構成できます。詳しくは、「[レポート設定](#)」を参照してください。

列は修復の難易度を表します。AppDNAでは、分析処理中に発見的アルゴリズムを実行することにより、アプリケーション内の問題を特定します。各アルゴリズムにより特有の問題が特定され、その問題を軽減するために推奨される修復アクションが提示されます。これらのアクションに関連する作業の難易度は、容易、中度、困難に分類されます。1つのアプリケーションの全体的な修復作業は、アプリケーションがトリガーするアルゴリズムに関連付けられている、最も高度な作業に基づいて決定されます。[Algorithm Groups] 画面で修復アクションを構成することもできます。詳しくは、「[アルゴリズムの構成](#)」を参照してください。

Testing time - 異なる複雑度のアプリケーションのテストにかかる平均時間を入力します。

変数の入力を完了したら画面上部のツールバーの [Save] をクリックし、変更を保存します。

Effort Calculatorのワークシート

Oct 16, 2015

[Results worksheet] タブには次の情報が表示されます。

- 容易、中度、および困難な修復が必要なアプリケーションの数。アプリケーションの複雑度別に表示されます。
- 修復が不要なアプリケーションの数。問題が未検出 (No Issues)、要テスト (To test)、および例外 (Exceptions) に分けて表示されます。
- 修復が必要なアプリケーションの修復とテストにかかる時間の詳細。
- 修復が不要なアプリケーションのテストにかかる時間の詳細。
- 修復とテストにかかる時間の合計。

結果ワークシートの確認

		Remediation					
Application complexity		Easy		Medium		Hard	
Simple	●	4	13 %	0	0 %	0	0 %
Normal	●●	5	17 %	1	3 %	0	0 %
Complex	●●●	1	3 %	1	3 %	1	3 %
Total		10	33 %	2	7 %	1	3 %

↓ ↓ ↓

		Remediation time		
Application complexity		Easy	Medium	Hard
Simple	●	4	0	0
Normal	●●	10	6	0
Complex	●●●	4	8	24
Total		18	14	24

Total remediation time	56
-------------------------------	-----------

上に示す結果ワークシートの抜粋で、容易な修復作業が必要な問題を持つアプリケーションを確認します。単純なアプリケーションが4個、標準のアプリケーションが5個、そして複雑なアプリケーションが1個あります。

次に、テストおよび修復の変数を確認します。これらの変数に、3つの修復難易度（容易、中度、および困難）別に、異なる複雑度のアプリケーションの修復にかかる時間を入力します。同様に、3つの複雑度のアプリケーションのテストにかかる時間を入力します。

容易な修復作業のデフォルト値は、単純なアプリケーションでは1時間、標準のアプリケーションでは2時間、複雑なアプリケーションでは4時間です。次の値を使用して、[Remediation] テーブルの [Easy] 列の結果が導かれます。

6 simple applications x 1 hour = 6 hours
4 normal complexity applications x 2 hours = 8 hours
3 complex applications x 4 hours = 12 hours
ワークシート内のほかの値も、同様の計算で導き出されます。

[Effort estimation with AppDNA] タブには、AppDNAを使用するプロジェクトの総費用、アプリケーションごとの費用の詳細、および修復とテストの時間が表示されます。レポートには、選択したアプリケーションの結果とポートフォリオ内のすべてのアプリケーションの推定結果が表示されます。

このタブでは、アプリケーションを、修復前から緑（修復不要）、修復後に黄色（テストが必要な問題）、および修復後に緑（修復対象の問題を伴うアプリケーション）の区分に分けて表示します。赤のアプリケーションは再開発または置き換えが必要であり、簡単に解決できる問題の範囲にないため、例外とみなされて除外されます。

次に、表の列について説明します。

列	説明
アプリケーション	縦軸に表示される各修復カテゴリ（ [Green before] 、 [Green after] 、 および [Amber after] ）に当てはまるアプリケーション数です。
Staging	テストのためのアプリケーションのセットアップにかかる時間です（時間単位）。
テスト	アプリケーションのテストにかかる時間です（時間単位）。
修復	問題の修復にかかる時間です（時間単位）。

[Green before] 行と [Amber after] 行には修復時間が表示されないことに注意してください。 [Green before] 行のアプリケーションにはテストまたは修復が不要で、 [Amber after] 行のアプリケーションにはテストのみが必要なためです。

合計時間と日数が、費用およびプロジェクト実施の経過日数と共に表示されます。これは、 [Variables] タブの [Staffing variables] のセクションで [Size of remediation team] 変数および [Size of staging/testing team] 変数に入力する数によって左右されます。

[Effort estimation without AppDNA] タブには、AppDNAを使用しないプロジェクトの総費用、費用の詳細、および修復とテストの時間が表示されます。レポートには、選択したアプリケーションとポートフォリオ内のすべてのアプリケーションの結果が表示されません。

次に、表の列について説明します。

列	説明
%	セットアップ、テスト、および問題の特定と修復が必要なアプリケーションの割合です。
Apps	選択したアプリケーションの数です。
hr	時間です（時間単位）。

2番目のテーブルには、セットアップ、テスト、および問題の特定と修復にかかる日数の見積もりと、各段階の費用が表示されます。これらの計算では、 [Without AppDNA] の変数のセクションで入力した値が使用されます。たとえば、 [Fix and identify] の割合は [Applications that are expected to have issues] 変数の値から計算されます。また、時間の計算には [Time to identify the cause of a failure and resolve it] 変数の値が使用されます。

プロジェクトの実施時間は経過日数で計算されます。これは、 [Variables] タブの [Staffing variables] のセクションで [Size of remediation team] 変数および [Size of staging/testing team] 変数に入力する数によって左右されます。

Forward Path

Oct 16, 2015

Forward PathはAppDNAの強力なビジネス決定エンジンで、さまざまな展開シナリオとその影響を簡単にモデル化できます。Forward Pathは、Forward Pathロジックエディターで作成するシナリオとタスクスクリプトで制御します。詳しくは、「[Forward Path](#)」を参照してください。

Forward Pathによって、組織の決定を反映するシナリオを作成し、結果に基づいてタスクスクリプトを実行できます。たとえば、Windows 7への移行準備中にForward Pathシナリオを作成して、App-Vパッケージとして展開するのに適しているアプリケーション、デスクトップに展開する必要があるアプリケーション、再開発が必要なアプリケーションを判断できます。タスクスクリプトをシナリオに関連付けて、たとえばApp-Vシーケンスの処理を自動化できます。

Sample App-V and Windows 7

Forward Path

Applications: 30 Options: [Change scenario](#) Export: [Excel](#) . [HTML](#) . [MHT](#) . [Print](#)

Decides which applications should be deployed on either Windows 7, and which applications should be sequenced as an App-V package.

Detailed Report

Standard Summary

RAG	Apps	% of Total	Standard Summary Chart
R	16	53.3%	
A	2	6.7%	
G	12	40%	
U	0	0%	
🔒	0	0%	
Total	30	100.0%	

[Evaluate Tasks](#) [Reset](#)

#	Application	Manufacturer	Version	Source Path	Outcome	RAG	Cost	Description
1	Ixos	IXOS Software AG	5.0.0	\\adnanas02\MSISource	Deploy on Windows 7	A	¥200.00	This is the best option.
2	Microsoft Firewall Clie	Microsoft Corporation	4.0.2161	\\adnanas02\MSISource	Deploy on Windows 7	A	¥200.00	This is the best option.
3	BBC Ticker	BBC	1.0.1.7	\\adnanas02\MSISource	Deploy on Windows 7	G	¥20.00	This is the best option.

Forward Pathを開くには、サイドバーから [Reports: Applications] 、 [Forward Path] の順に選択します。

シナリオを変更するには、 [Options] ツールバーで [Change scenario] をクリックし、ドロップダウンリストから使用するシナリオを選択します。

Forward Pathに特有のそのほかのオプションは次のとおりです。

- **Detailed Report** - 詳細なレポートを表示するにはこのチェックボックスをオンにします。縮約レポートを表示するには、このチェックボックスをオフにします。
- **Evaluate Tasks** - [Forward Path Task Sequencing] 画面を開きます。ここで、選択したForward Pathシナリオに関連付けられたタスクスクリプトを実行できます。

Forward Pathのタスクの実行

Oct 16, 2015

通常Forward Pathのタスクは、Forward Pathレポート内のロジックに基づき、実稼働環境で使用できるApp-VパッケージおよびXenAppパッケージの作成を自動化するために使用します。ただしForward Pathのタスクは、ファイルのコピーやメールの送信など、そのほかの多くのタスクを実行するように構成できます。Forward Pathのタスクは、Forward Pathレポートの [Outcome] 列の値に基づいて動作するように構成する、Forward Pathのタスクスクリプトによって制御されます。Forward Pathのレポートはシナリオによって制御されます。

Forward Pathシナリオおよびタスクスクリプトを作成または編集した後、タスクを実行し、その状態を監視することができません。

1. サイドバーから [Select]、[All Applications] の順に選択します。
2. [Application List] 画面で、Forward Pathを実行するアプリケーションを選択します。
3. サイドバーから [Reports: Applications]、[Forward Path] の順に選択します。
4. Forward Pathレポートビューアーで、使用するForward Pathシナリオを選択します。
デフォルトのアクティブなシナリオを変更するには、Forward Pathロジックエディターを使用します。
5. [Evaluate Tasks] をクリックします。
6. [Forward Path Task Sequencing] 画面でツールバーの [Refresh] をクリックして、確実に最新結果を表示します。
 - [Outcome] 列。最新の結果が表示され、各アプリケーションについて、この列の値に関連付けられているタスクスクリプトがあるかどうかが表示されます。
 - [MapUNCPathDriveLetter] 列。マップされたドライブ文字が入力されます (タスクスクリプトでApplicationDetails.MapUNCPathプロパティを使用しインストールディレクトリの<\\server\share>部分をドライブ文字にマップしている場合)。
 - [Install Command] 列。アプリケーションのインストールを起動するコマンドが表示されます。タスクスクリプトで上書きされなければ、アプリケーションがActive DirectoryまたはConfiguration Managerの管理対象アプリケーションにリンクされている場合は、この列にはActive DirectoryまたはConfiguration Managerのインストールコマンドが表示されます。そうでない場合は、AppDNAにアプリケーションをインポートするときに使用された場所と方法に基づいて、コマンドが表示されます。
 - [InstallWrkDir] 列。インストールコマンドにより使用される作業ディレクトリが表示されます。この列が空白の場合は、デフォルトの作業ディレクトリが使用されます。
7. タスクを実行するアプリケーションを選択します。
8. ツールバーの [Start] をクリックします。
画面下部に進行状況とエラーログが表示されます。一部のタスクスクリプトは、Install Captureと仮想マシンが正しく構成されていない場合は機能しません。詳しくは、「[Install Capture](#)」を参照してください。

Forward Pathのタスクの実行

Oct 16, 2015

1. サイドバーから [Select] 、 [All Applications] の順に選択します。
2. [Application List] 画面で、Forward Pathを実行するアプリケーションを選択します。
3. サイドバーから [Reports: Applications] 、 [Forward Path] の順に選択します。
4. Forward Pathレポートビューアーで、使用するForward Pathシナリオを選択します。
5. [Evaluate Tasks] をクリックします。
6. [Forward Path Task Sequencing] 画面でツールバーの [Refresh] をクリックして、確実に最新結果を表示します。
7. タスクを実行するアプリケーションを選択します。
8. ツールバーの [Start] をクリックします。

組織レポート

Oct 16, 2015

組織レポートでは、Active DirectoryまたはSystem Center Configuration Managerに定義されたエンティティ内のユーザーおよびコンピューターに展開されている、管理対象アプリケーションの状態の概要が提供されます。この文脈では、管理対象アプリケーションはActive DirectoryまたはConfiguration Managerで展開されたアプリケーションを指します。

重要：組織レポートに意味のあるデータを表示するには、先にActive DirectoryまたはConfiguration Manager（またはその両方）からデータをロードする必要があります。その後、管理対象アプリケーションをAppDNAにインポートするか、または既にAppDNAにインポートされているアプリケーションとリンクする必要があります。詳しくは、「[Active DirectoryとConfiguration Managerのデータの統合](#)」を参照してください。

組織レポートを開くには、次の2つの方法があります。

[Users and Computers] 画面から：

1. AppDNAのサイドバーから、[Select] [Devices]、[Users]、[Groups]、または[Organizational Units]の順に選択します。
2. [Users and Computers] 画面で、レポートを表示するエンティティを選択します。
3. ツールバーのドロップダウンリストから表示するレポートを選択し、[View Report] をクリックします。


サイドバーから直接：

- AppDNAのサイドバーから、[Reports: Your Organization]、[Devices]、[Users]、[Groups]、または[Organizational Units]の順に選択します。

レポートビューアーでは、選択したエンティティに展開されている管理対象アプリケーションの、選択したレポート技術についてのRAG状態を示す概要が提供されます。これらのアプリケーションについて、標準のAppDNAアプリケーションレポートをドリルダウンできます。

ツールバーの[Change Selection] をクリックして、選択したエンティティとレポートをいつでも変更できます。[Users and Computers] 画面が別のウィンドウに開きます。項目を選択し、[Select] をクリックして適用します。


注：組織レポートには、AppDNAにインポート済み、またはAppDNAにインポート済みのアプリケーションにリンクされた管理対象アプリケーションの状態が表示されます。これらのレポートには、Active DirectoryまたはConfiguration Managerで管理されていないアプリケーションの状態は表示されません。組織内で使用されているほかのアプリケーションについて情報を得るには、「[アプリケーションの検出](#)」で説明しているように、[Discover Applications] 画面を使用します。

 Organizational Unitレポートビューでは、選択した組織単位およびその直接の子組織単位内のユーザーとコンピューターに展開されている、管理対象アプリケーションの状態の概要が提供されます。

概要には、各組織単位内のコンピューターとユーザーの数と、それらに展開されている管理対象アプリケーションのRAG状態の概要が表示されます。子組織単位を持つ組織単位の名前はリンクになっており、クリックすると子組織単位の同様のレポートを表示できます。


- 親組織単位に戻るには、[Up to parent] をクリックします。
- コンピューターとユーザーの概要レポートを表示するには、[Computers] および [Users] 列に表示される件数をクリックします。

- アプリケーションのApplication Issuesレポートビューを表示するには、[Applications] 列に表示される件数をクリックします。


 Active Directory GroupおよびConfigMgr Collectionレポートビューでは、選択したActive DirectoryグループまたはConfigMgrコレクション内のユーザーとコンピューターに展開されている、管理対象アプリケーションの状態の概要が提供されます。

- コンピューターとユーザーの概要レポートを表示するには、[Computers] および [Users] 列に表示される件数をクリックします。
- アプリケーションのApplication Issuesレポートビューを表示するには、[Applications] 列に表示される件数をクリックします。

注：アプリケーション数には、グループに割り当てられているアプリケーションだけでなく、グループメンバーに展開済みのすべての管理対象アプリケーションが含まれます。これは、[AD & ConfigMgr Collections] 画面に表示される件数とは異なります。

 Computersレポートビューでは、選択したコンピューターに展開されている、管理対象アプリケーションの状態の概要が提供されます。

アプリケーションのApplication Issuesレポートビューを表示するには、[Applications] 列に表示される件数をクリックします。

 Usersレポートビューでは、選択したユーザーに展開されている、管理対象アプリケーションの状態の概要が提供されます。

アプリケーションのApplication Issuesレポートビューを表示するには、[Applications] 列に表示される件数をクリックします。

エクスポート

Apr 15, 2016

レポートエクスポートウィザードを使用して、任意のアプリケーションセットのレポートの一括エクスポートを実行できます。形式は、MHT（ブラウザで表示でき、簡単にほかのユーザーに送信できる単一ファイルのWebページ）、Excel、またはPDF（Application Issuesレポートビューのみ）から選択できます。

注：大きなアプリケーションポートフォリオのレポートを、特に、複雑な処理が必要な修復レポートビューをエクスポートする場合は、レポートのエクスポートに何時間もかかる可能性があります。

レポートエクスポートウィザードを開くには、メニューから [Tools] [Report Export] の順に選択します。

[Welcome] ページで、[Next] をクリックして開始します。AppDNAレポートエクスポートウィザードに従って、次の手順を実行します。

1. アプリケーションを選択します。

この段階では、ポートフォリオ内のアプリケーションの一覧が表示されます。[Application List] 画面でのように、一覧の並べ替えとフィルターにはどの列のデータも使用できます。列見出しをドラッグして、特定列の値でアプリケーションをグループ化することもできます。

レポートをエクスポートするアプリケーションを選択し、[Next] をクリックして続行します。

2. エクスポートするレポートを選択します。

レポートエクスポートウィザードでは、使用するオペレーティングシステムイメージを選択するオプションは提供されません。これは、エクスポートでは [OS Image Configuration] ページの [Edit] > [Settings] でレポートに設定されているデフォルトのオペレーティングシステムイメージが常に使用されるためです。

3. エクスポートするレポートビューと形式を選択します。

PDF形式はApplication Issuesレポートビューにのみ選択できます。

4. 出力フォルダーを選択してエクスポートします。

レポートのエクスポートが完了すると、ログを表示するかどうかのオプションが表示されます。AppDNAレポートエクスポートウィザードを閉じるには [Finish] をクリックします。

レポート設定

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスには、AppDNAの全般的なオプションが含まれます。このダイアログボックスを開くには、メニューから [Edit]、[Settings] の順に選択します。

[Reporting] ページのオプションは次のとおりです。

Records per page - レポートビューに表示する1ページあたりのアプリケーション数を指定します。値が非常に大きい場合（500以上など）、パフォーマンスが低下することがあります。たとえば、スクロールが滑らかではなくなったり、ページの表示に時間がかかったりします。デフォルトは100です。

この設定は、レポートビューアーでページのレコード数を変更すると自動的に更新されます。ただし、意図せず非常に大きい値に設定しまったためにページが極端に遅くなった場合は、ここで値を変更できるため便利です。

この設定はAppDNA Webクライアントには適用されません。AppDNA Webクライアントでの1ページあたりのレコード数の変更について詳しくは、「[レポートの問題](#)」を参照してください。

Show counts in PDF exports - このチェックボックスをオンにすると、PDFエクスポートの [Report Data] セクションに、レポートの全アルゴリズムグループの列が表示されます。これらの列には、アプリケーションによりグループ内のアルゴリズムがトリガーされた回数が表示されます（同じ問題が複数のコンポーネントで検出された場合など、1つのアプリケーションにより同じアルゴリズムが複数回トリガーされる可能性があります）。デフォルトでは、多くのアルゴリズムグループを持つレポートを表示可能な領域に収めるために、これらの列はPDFエクスポートには表示されません。

Application complexity thresholds - アプリケーションの持つファイルとレジストリエントリの数が大きいほど、修復とテストは複雑になります。したがって、アプリケーションの複雑度は、アプリケーション内のファイルとレジストリエントリ数によって計測されます。AppDNAでは、アプリケーションの複雑度を単純、標準、および複雑の3つのレベルに定義します。しきい値により、複雑度が標準のアプリケーションの下限と上限が定義されます。



	Simple	Normal	Complex
Files	0 to 100	100 to 400	400 to Max
Registry entries	0 to 200	200 to 5000	5000 to Max

デフォルトのしきい値は広範なテストに基づきますが、必要に応じて調整できます。デフォルトのしきい値は次のとおりです。

	下限のしきい値	上限のしきい値
ファイルの数	100	400
レジストリエントリ数	200	5,000

次の表に、アプリケーションの各複雑度のアイコンとデフォルトのしきい値に基づく例を示します。

アイコン	説明	例
	単純 - ファイル数とレジストリエントリ数が、下限のしき	90ファイルおよび150レジストリエントリ

アイコン	説明	例
	標準 - ファイル数とレジストリエントリ数が、それぞれ下限のしきい値以上、上限のしきい値未満のアプリケーションです。	132ファイルおよび195レジストリエントリ
	複雑 - ファイル数とレジストリエントリ数が、上限のしきい値以上のアプリケーションです。	832ファイルおよび5,175レジストリエントリ

Effort Calculatorでは、移行プロジェクトに必要な時間と作業の見積りにアプリケーションの複雑度を使用します。さらに、レポートビューの一部、たとえばOverview Summaryにはアプリケーションの複雑度のアイコンが表示されます。

レポートとライセンスの概要

Oct 16, 2015

AppDNAダッシュボードには、インポートされているデスクトップアプリケーションとWebアプリケーションの総数が表示されます。各レポートのアプリケーションポートフォリオの状態とライセンスの状態の概要も表示されます。

ダッシュボードを開くには、画面右上の [Dashboard] リンクをクリックします。

[Report summary] には、アクティブな各レポートについて、アプリケーションポートフォリオの全体的な状態が表示されます。

円グラフには、そのレポートの全体的なRAG（赤、黄、緑）状態が割り当てられた関連アプリケーションと未分析の関連アプリケーションの割合が示されます。関連アプリケーションは、レポートに応じて、すべてデスクトップ（Windows）アプリケーションの場合とすべてWebアプリケーションの場合があります。RAG状態のアプリケーションには、レポートに対してロックされている（ライセンスがない）かロックが解除されている（ライセンスがある）かに関係なく、そのレポート用に分析されたすべてのアプリケーションが含まれます。

水平のバーには、レポート用に分析されたアプリケーションの数とStale状態のアプリケーションの数が示されます。アプリケーションの状態は、レポートに対して追加のアルゴリズムをアクティブ化した場合など、保存されているデータが変更されて最新でなくなると、Analyzed状態からStale状態に変わります。

[Module license summary] には、ライセンスに含まれるモジュールの一覧が表示されます。それぞれのモジュールについて、次の情報が表示されます。

- モジュールの名前。
- ライセンスの有効期限。この日付を過ぎると、関連するレポートが表示されなくなります。
- 既に使用しているアプリケーションライセンスの数。
- 使用可能なアプリケーションライセンスの数。アプリケーションにまだ適用されていないライセンスです。

使用可能なライセンスをすべて使用している場合は、[\[Apply Licenses\] 画面](#)で、いくつかの追加のアプリケーション（ライセンス数の制限の10%まで）のロックを手動で解除することができます。このような追加の割り当てのことを予備ライセンスと呼びます。

非アクティブなライセンスとは、アプリケーションに適用されたライセンスのうち、現在は削除されているものを指します。このライセンスはほかのアプリケーションには使用できません。デフォルトでは、ライセンスを再インポートすると自動的にアプリケーションに再適用されます（デスクトップアプリケーションのみ）。詳しくは、[フィンガープリント](#)を参照してください。

解決

Oct 16, 2015

AppDNAでは、アプリケーションで検出された互換性の問題に関する情報が提供されます。AppDNAでは、アプリケーションが対象のプラットフォームで動作するようにアプリケーションまたは環境を変更してこれらの問題を解決するプロセスのことを、修復 (Remediation) と呼びます。

修復レポートでは、特定のアプリケーションの詳細な修復情報が提供されます。複数の代替手段が提供される場合があります。修復レポートでは、各問題によって影響を受けるアプリケーションコンポーネントの詳細も示されます。

このセクションのトピックへのクイックリンク：

- [修復レポート](#)
- [標準の修復アクション](#)
- [緑のアルゴリズムが示す情報](#)

デスクトップアプリケーション用には2つ、Webアプリケーション用には3つの修復レポートビューがあります。

- **Remediation Issues** - アルゴリズムによって特定された問題の内訳と、影響を受けるコンポーネントの情報を提供します。
- **Remediation Actions** - アプリケーションの修復に必要なアクションの数と種類の内訳を提供します。
- **Site Map** - (Webアプリケーションのみ) AppDNAの指向スパイダーがキャプチャに成功した、キャプチャをスキップした、またはキャプチャに失敗したページ、オブジェクト、スクリプト、およびスタイルシートの概要が提供されます。

修復レポートを開くには、次の手順に従います。

1. [Reports: Applications] をクリックして、レポートの名前 ([Windows 8/8.1] など) をクリックしてレポートビューの一覧を開きます。
2. 修復の問題を表示するには、[Application Issues] をクリックして、レポート内のアプリケーションのリンクをクリックします。
修復アクションを表示するには、[Application Actions] をクリックして、レポート内のアプリケーションのリンクをクリックします。

これらのビューを切り替えるには、レポート上部の [Switch to] リンクをクリックします。

AppDNAが自動修正を提供するデスクトップアプリケーションの場合、変更を含む.mstファイル形式の修正をダウンロードし、インストールの間にアプリケーションの.msiファイルに適用して、問題を修正できます。修正をダウンロードするには、[Get MST fixes] ボタンをクリックします。

必要に応じて、複数の標準レポートの修復レポートビューをマージできます (カスタムレポートでは不可能)。たとえば、Windows 8レポートとApp-Vレポートの結果をマージできます。これを行うには、次の操作を行います。

1. [Export] ツールバーの [Merge report] をクリックします。
2. 現在のレポートとマージするほかのレポート (1つまたは複数) を選択し、[View merged report] をクリックします。

レポートに関係する場合、現在選択されているOSイメージが画面の上部に表示されます。選択を変更するには、[Export] ツールバーの [Change images] をクリックします。

Detail - アプリケーションの名前、製造元、バージョン、インストールファイル、パッケージの種類、標準RAG状態、修復

レポートビューの生成日が表示されます。

Journal – アプリケーションに**外部データ**または**手動ジャーナルエントリ**がある場合、このセクションに表示されます。このアプリケーションがPCA (shim) データベース外部データソースの1つに存在するエントリとマッチされている場合、このセクションには、一致している実行可能 (.exe) ファイルと、関連する場合はshimの名前が表示されます。[Accept] をクリックすると、外部データエントリを標準のジャーナルエントリに変換できます。これは、アプリケーションのRAG状態が、対応する互換性 (ジャーナル) 状態によって上書きされることを意味します。

残りの詳細部分は、IssueビューとActionビューで異なります。

Issueビューには、アプリケーションによってトリガーされたアルゴリズムの一覧が表示されます。各アルゴリズムについて、モジュールおよびレポート名と共に、アルゴリズム、アルゴリズムグループ、標準RAG、およびアプリケーションによってアルゴリズムがトリガーされた回数が表示されます。アルゴリズム名はリンクになっており、クリックすると次のようにアルゴリズムの詳細情報を参照できます。

各アルゴリズムに関する詳細な情報には、グループの説明、アルゴリズムにより特定された問題の発現、修復方法の説明、およびアルゴリズムをトリガーしたアプリケーションコンポーネントの一覧が表示されます。これらの詳細はアルゴリズムによって異なります。

Actionビューには、アルゴリズムによって発見された問題を修正するために実行する必要があるアクションの一覧が表示されます。アクションとその詳細の組み合わせごとに、修復難易度、アクション後RAG、および対処する必要がある問題の数が表示されます。アクションの詳細はリンクになっており、クリックすると次のようにその詳細情報を参照できます。ここには、アルゴリズムグループの説明、アルゴリズムにより特定された問題の発現、修復方法の説明、およびアルゴリズムをトリガーしたアプリケーションコンポーネントの一覧など、アクションが適用される各アルゴリズムについての詳細が表示されます。これらの詳細はアルゴリズムによって異なります。

ヒント：レポートエクスポートウィザードを使用して、複数のアプリケーションの修復レポートをエクスポートします。

修復レポートには、各アプリケーションについての修復アクションおよびその詳細が一覧表示されます。以下は、レポートに表示される修復アクションの例です。

- 追加のテストが必要です。
 - アプリケーションに機能テストが必要です。
 - アプリケーションのセキュリティリスクを評価します。
 - ドライバーの互換性テストが必要です。
 - アプリケーションの発行者が信頼できることを検証します。
- 追加のXenAppテストが必要です。
- shimを適用します。
- グループポリシーを変更します。
- ハードウェアを変更します。
- オペレーティングシステムビルドを変更します。
 - 信頼された一覧の証明書を追加します。
 - オペレーティングシステムにサポートされないコンポーネントを追加します。
 - オペレーティングシステムに再頒布可能パッケージを追加します。
 - 64ビット版オペレーティングシステムでアプリケーションを実行します。
- ソフトウェアを変更します。
- デスクトップ仮想化技術を使用して展開します。
- アプリケーション仮想化技術を使用して展開します。
- OSDファイルを編集します。

- App-V管理コンソールでの変更が必要です。
 - グローバルFTAを作成します。
 - FTAプロバイダーにするアプリケーションを選択し、ほかのアプリケーションの動詞を変更します。
- Redevelopment required
- アプリケーションを再パッケージします。
 - 共有リソースのマージモジュールを作成します。
 - MSIによって呼び出されるスクリプトファイルを編集します。
 - 不足しているリソースを提供するか、再配布可能なソフトウェアをインストールします。
 - セットアップファイルの名前をSetup.EXEに変更します。
- シーケンス処理の手順に従う必要があります。
 - INIファイルにプレースホルダーを追加します。
 - 環境変数の変更を構成します。
 - シーケンスに不足しているファイルを含めます。
 - [スタート]メニューのスタートアップフォルダーにショートカットを公開します。
 - 必須サービスと共にアプリケーションをシーケンス処理します。
- App-V 5.0を使用します。

レポートで使用可能な各アルゴリズムのアクションを表示するには、[Configure]、[Modules]、[Module]、[Report Name]の順に選択します。

AppDNAレポートに組み込まれているアルゴリズムの中には、緑のRAG状態を表示するものがあります。通常、緑のRAG状態は、アプリケーションが対象のプラットフォームでのユーザー承認テストの準備ができていたことを意味します。ただし、これらのアルゴリズムはいくつかのグループに分類できます。

- 一部のアルゴリズムでは、通常は特定の状況でのみ問題になる問題が検出されたことを理由に、RAG状態が緑になります。対象の環境がその特定の状況に当てはまる場合は、カスタムRAG状態を黄色に構成するとよいでしょう。たとえばWindows 7のW7_VDEPNX_001アルゴリズムでは、データ実行防止機能（DEP：Data Execution Prevention）が有効な場合にのみ発生する問題を検出します。通常のアプリケーションに対してデフォルトではDEPは無効であるため、このアルゴリズムのRAG状態は緑になります。したがって、対象の環境でDEPが有効である場合は、このアルゴリズムのカスタムRAG状態およびデフォルトのアクションを変更するとよいでしょう。手順については、「[アルゴリズムの構成](#)」を参照してください。
- 一部のアルゴリズムでは、概して受け入れられているベストプラクティスと相反しているが、通常は互換性に影響を与えない状況を検出します。したがって、これらのアルゴリズムのRAG状態は緑になります。ただし、たとえば廃棄するアプリケーションを検討するときに役立つ情報が提供されます。同様に、ほかの問題を解決するためにアプリケーションを再開発する必要がある場合は、ベストプラクティスの問題に同時に対処するとよいでしょう。
- めったに問題にならない問題が検出されたことを理由に、RAG状態が緑になるアルゴリズムもあります。これらのアルゴリズムは、状態が黄色または赤のアルゴリズムによって識別されたすべての問題に対処した後で、それでもアプリケーションに問題がある場合に役立つ情報を提供します。

Webアプリケーションの修復

Oct 16, 2015

Webアプリケーションの互換性修復レポートビューでは、Webアプリケーションのコードを修正して検出された問題を解決する方法についての詳細な情報が提供されます。このトピックでは、ソースコードにアクセスできない場合などに使用できないほかの修復オプションについて説明します。ただし、これらのオプションは、通常、Webアプリケーションを開発し直すことができるようになるまでの、短期的な解決策と考える必要があります。

Internet Explorer 8以降には複数の互換性モードがあります。これらの互換性モードにより、Webページが解釈および表示される方法が決まります。WebアプリケーションがInternet Explorerの対象のバージョンと互換性がない場合、必要に応じて、適切な互換性モードを使用するようにWebアプリケーションを設定できます。互換性モードを設定するには複数の方法があります。

- **グループポリシーオブジェクト (GPO) の使用**– 次のいずれかのグループポリシーにWebアプリケーションを追加し、それぞれIE7の標準またはQuirksドキュメントモードで表示されるようにできます。この方法は、Webアプリケーションが外部でホストされていて、ソースコードにアクセスできない場合に有効です。

ソフトウェア\ポリシー\Microsoft\Internet Explorer\互換表示\Internet Explorer 7 サイトのポリシー一覧を使用
ソフトウェア\ポリシー\Microsoft\Internet Explorer\互換表示\Quirks モード サイトのポリシー リストを使用する

詳しくは、<http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc985351.aspx>を参照してください。

- **ページヘッダーでのメタタグの使用**– Webアプリケーションのソースコードにアクセスできる場合は、次のように、ページヘッダーでメタタグを使用して、ページを特定のモードで実行するように指定できます。

Value">

Valueは、次の表のいずれかの値です。

値	説明
5	Internet ExplorerがQuirksドキュメントモードで実行されているものとしてページを表示します。これは、Internet Explorer 5でのコンテンツの表示方法と似ています。
7	Ignore theDocTypeがある場合はそれを無視し、Internet Explorer 7がIE7標準ドキュメントモードで実行されているものとしてページを表示します。
8	Ignore theDocTypeがある場合はそれを無視し、Internet Explorer 8がIE8標準ドキュメントモードで実行されているものとしてページを表示します。
9	Ignore theDocTypeがある場合はそれを無視し、Internet Explorer 9がIE9標準ドキュメントモードで実行されているものとしてページを表示します。
EmulateIE7	Respect theDocTypeを優先し、Internet Explorer 7がIE7標準またはQuirksドキュメントモードで実行されているものとしてページを表示します。
EmulateIE8	Respect theDocTypeを優先し、Internet Explorer 8がIE8標準またはQuirksドキュメントモードで実行されているものとしてページを表示します。
EmulateIE9	Respect theDocTypeを優先し、Internet Explorer 9がIE9標準またはQuirksドキュメントモードで実行さ

値	れているものとしてページを表示します。 説明
Edge	使用可能な最高のモードを使用します。実稼働環境用では推奨されません。

詳しくは、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/jj676915\(v=vs.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/jj676915(v=vs.85).aspx)を参照してください。

- **Webサーバーでのカスタムヘッダーの使用**– Webアプリケーションが内部でホストされている場合は、Webサーバー上のHTTPヘッダーでメタタグを使用して、サイト全体を特定のモードで実行するように指定できます。詳細な実行方法は、Webサーバーの種類によって異なります（IIS、Apacheなど）。ただし、ページヘッダーでのメタタグの使用に関するオプションは前の説明と同じです。
たとえば、IISサーバーの場合、次のように、web.configファイルにセクションを追加して、HTTPヘッダーのメタタグを指定できます。

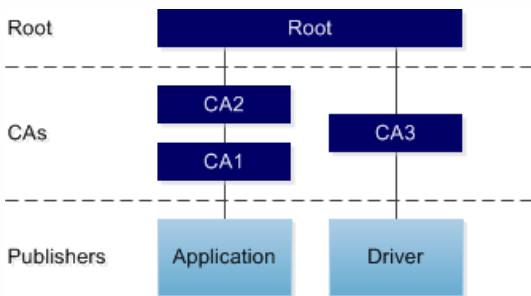
詳しくは、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/jj676913\(v=vs.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/jj676913(v=vs.85).aspx)を参照してください。

ほかのオプションで問題を解決できないときは、Med-VやCitrix Terminal Serverなどの仮想化技術を使用して提供されるブラウザのサポートされるバージョンで、ネイティブにWebアプリケーションを実行することを検討してください。

デジタル署名

Oct 16, 2015

デジタル署名は、デジタルファイルが特定可能な送信元から送信されていて不正に変更されていないという保証をユーザーに提供するメカニズムです。多くの場合、デジタル署名には証明書のチェーンが含まれます。デジタルファイルの発行者は、CA (Certificate Authority : 証明機関) が発行した証明書を使用してデジタル署名を生成します。CAは発行者のIDの検証に責任を持ちます。CAの証明書が別のCAによって発行される場合があります。別のCAの証明書はさらに別のCAによって発行され、最終的にルートCAに至ります (ルートは複数ある場合があります)。このようにして、次の図に示すように証明書のチェーンが形成されます。



Windowsオペレーティングシステム (OS) には、証明書、信頼される発行者と信頼されない発行者の一覧、およびマシン単位とユーザー単位ベースのCAが保存されます。Microsoft管理コンソールの証明書スナップインを使用して、オペレーティングシステムに保存されている証明書を表示および管理できます。

AppDNAにアプリケーションをインポートするときに、インポート処理によって、アプリケーションファイルにあるデジタル署名に関する情報がキャプチャされます。デジタル署名が存在する場合は、通常はアプリケーションのPE (Portable Executable) ファイル (実行ファイルやDLLファイルなど) にあります。ただし、ドライバーの場合、デジタル署名が関連付けられているカタログファイルにある可能性があります。

インポート処理では、署名の基本的な詳細と証明書チェーンの各証明書に関する情報が抽出されて保存されます。インポート処理により、AppDNAインポートマシンの証明書チェーンのコンテキストで署名が有効かどうかの判定が試みられます。ただし、保存されている証明書情報が異なる場合は、別のマシンまたはオペレーティングシステム、あるいは異なるユーザーに対して、結果が異なる場合があります。このため、アルゴリズムによっては、選択したオペレーティングシステムイメージに対して追加チェックが実行されます。

インポート処理では、インポートの速度が許容できないレベルにまで低下するため、証明書失効一覧はチェックされません。

Windows 8およびWindows Server 2012では、信頼されない発行者が署名したファイルの実行が禁止されます。この機能が実質的に及ぼす影響は、影響を受けるファイルによって異なります。メインアプリケーションの実行可能ファイルが影響を受ける場合は、アプリケーションが実行されません。Windowsにより、アプリケーションが署名要件を満たしていないことを示すメッセージがユーザーに表示されます。ただし、影響を受けるファイルが補助的なDLLファイルの場合は、アプリケーションは動作する可能性があります。DLLファイルに依存する機能が呼び出されたときは実行に失敗します。影響を受けるファイルがカーネルモードのドライバーの場合は、ドライバーをインストールまたは実行できない可能性があります。

カーネルモードのドライバーは「スーパーバイザーモード」で実行されるデバイスドライバーです。このモードでは、低レベル機能への特権アクセスが付与され、標準の「ユーザーモード」で実行されるドライバーよりもパフォーマンスが高くなります。スーパーバイザーモードで実行されているプログラムの実行が失敗した場合は、システム全体が停止する可能性があります。

す。したがって、Windows Server 2012およびWindows 8 64ビット版では、信頼されない発行者が署名したカーネルモードドライバのインストールと実行が禁止されます。

注：アプリケーションに複数の発行者の複数のデジタル署名が含まれる場合があります。たとえば、アプリケーションに署名されたサードパーティ製コンポーネントが含まれる場合です。

以下のアルゴリズムは信頼されないデジタル署名を含むファイルを検出します。「信頼されない」とは、その発行者またはチェーンのCAの1つが、対象のオペレーティングシステムイメージに保存されている信頼されない発行者とCAの一覧に含まれているということを意味します。したがって、これらのアルゴリズムの結果は、選択した対象のオペレーティングシステムイメージによって異なります。

- Windows 8およびWindows 8.1 : WIN8_UNTRUSTED_001
- Windows Server 2012およびWindows Server 2012 R2 : W2K12_UNTRUSTED_001

修復レポートビューには、アプリケーション内の影響を受けるファイル、このファイルがドライバーであるかどうか、および信頼されない証明書の詳細に関する情報が表示されます。

外部のアプリケーションについては、製造元に問い合わせ、信頼されている発行者が署名したアプリケーションまたはドライバーの更新バージョンを取得してください。

更新バージョンが取得できない場合は、発行者またはCAが信頼されない発行者とCAの一覧にある理由を調査してください。Microsoft管理コンソールの証明書スナップインを使用して、オペレーティングシステムイメージの信頼されない発行者の一覧から発行者を削除できます。ただし、発行者が実際に信頼できて、アプリケーションが安全でセキュリティポリシーに準拠していることを確認してから、発行者を削除してください。

証明書スナップインを開く手順については、Microsoft社のWebサイト [「証明書を表示または管理する」](#)を参照してください。証明書の表示と管理について詳しくは、証明書スナップインを開いた後、オンラインヘルプを参照してください。

管理

Oct 16, 2015

ここでは、アプリケーションの管理に使用できるAppDNAのさまざまな機能のドキュメントを提供します。

各トピックへのクイックリンク：

- [アプリケーション一覧](#)
- [グループ](#)
- [ジャーナル](#)
- [検索と参照](#)

アプリケーション一覧

Oct 16, 2015

AppDNAでは、アプリケーションポートフォリオを管理するためのアプリケーション一覧が提供されます。たとえば、アプリケーションの一覧を表示したり、[アプリケーションの属性](#)を表示したり、選択したレポートに対してアプリケーションDNAを分析したり、レポートビューアーを使用したりすることができます。ポートフォリオからアプリケーションを削除したり、アプリケーション名、製造元、およびバージョン番号を編集したりすることもできます。

さらに、分析とレポートのために、アプリケーションの一覧を並べ替え、グループ化、およびフィルターできます。これらの機能は、ポートフォリオが大きい場合に特に役立ちます。

[Applications List] 画面を開くには、AppDNAのサイドバーで [Applications] をクリックします。

目的：	方法：
一覧のすべての項目の選択	Ctrl+Aキーを押します（または、メニューから [Edit] [Select All] の順に選択します）。
一覧のすべての項目の選択解除	Ctrl+Dキーを押します（または、メニューから [Edit] 、 [Deselect All] の順に選択します）。
選択の取り消し	Ctrl+Iキーを押します（または、メニューから [Edit] 、 [Invert Selection] の順に選択します）。
隣接した複数の項目の選択	選択する最初の項目をクリックし、Shiftキーを押しながら、選択する最後の項目をクリックします。次にCtrl+Mキーを押します（または、メニューから [Edit] 、 [Select Marked] の順に選択します）。
隣接していない複数の項目の選択	Ctrlキーを押しながら選択する項目をクリックし、次にCtrl+Mキーを押します（またはメニューから [Edit] 、 [Select Marked] の順に選択します）。
隣接した複数の項目の選択解除	選択する最初の項目をクリックし、Shiftキーを押しながら、選択する最後の項目をクリックします。次にCtrl+Uキーを押します（または、メニューから [Edit] 、 [Deselect Marked] の順に選択します）。
隣接していない複数の項目の選択解除	Ctrlキーを押しながら選択する項目をクリックし、次にCtrl+Uキーを押します（またはメニューから [Edit] 、 [Deselect Marked] の順に選択します）。
複数のチェックボックスの選択状態の変更	行を選択してSpaceキーを押します。
グループ内のアプリケーションの選択	ツールバーの [Group] ボックスの一覧から、アプリケーションを選択するグループを選択します。

➡ **Export Filter** - 再利用のため、フィルターをXMLファイルに保存します。フィルターのセットアップ、クリア、保存、およびインポートについて詳しくは、「[アプリケーションのフィルター](#)」を参照してください。

➡ **Import filter** - 前に保存したフィルターをインポートして、そのフィルターの条件に基づいて、すぐにアプリケーション一覧をフィルターします。

✖ **Delete** - 選択したアプリケーションをAppDNAアプリケーションポートフォリオから削除します。デスクトップアプリケーションのフィンガープリントは削除されません。つまり、ライセンス済みのデスクトップアプリケーションを削除した場合、それをもう一度インポートすると同じライセンスを再利用することになります。

Report type - 表示するレポートを選択するにはこのドロップダウンリストを使用します。

📄 **View report** - クリックすると、選択した項目について選択したレポートを表示します（アプリケーションを分析しなければ、レポートに意味のあるデータが表示されません）。

🔍 **Analyze** - クリックすると、選択したアプリケーションを分析します。詳しくは、「[アプリケーションの分析](#)」を参照してください。

Group - 特定のグループ内のアプリケーションまたは一覧内のすべてのアプリケーションを選択する、または一覧内のすべてのアプリケーションの選択を解除するにはこのドロップダウンリストを使用します。

[Application List] のアプリケーションを特定の列のデータに基づいてグループ化するには、その列の見出しを[Drag a column header here to group by that column] バーにドラッグします。アプリケーションのグループ化をやめるには、列見出しを見出しバーにドラッグして戻します。

一覧の項目を分析やレポートの対象として設定するには、そのチェックボックスをオンにします。

アプリケーションの状態は、以下のいずれかで示されます。

- **Ready** - アプリケーションが正常にインポートされ、分析の準備が整っています。
- **Analyzed** - アプリケーションが（1つまたは複数のレポートのために）分析されています。
- **Stale** - アプリケーションに再分析が必要になった場合は、状態が [Analyzed] から [stale] に変わります。この変更は、モジュール、アルゴリズム、またはアルゴリズムグループに変更があると起こります。たとえば、アルゴリズムまたはアルゴリズムグループがオンまたはオフになった場合です。

アプリケーションのフィルター

Oct 16, 2015

大規模なアプリケーションポートフォリオでは、アプリケーション一覧にフィルターを適用して目的のアプリケーションを簡単に参照できます。フィルターはファイルに保存でき、そのファイルを後でインポートすることで、フィルターに保存されている条件に基づいてアプリケーションの一覧をすぐにフィルターできます。

1. [Application List] で、アプリケーションのフィルターに使用する値を含む列の見出しの下にあるボックスをクリックします。
2. フィルター条件の値を選択または入力します。

ID	<input checked="" type="checkbox"/>	AppID	State	Name	Path	Manufacturer	Version
=		<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>
1	<input checked="" type="checkbox"/>	10		Citrix XenCenter	\\ADnaN	Citrix Systems, Inc.	6.0.2
2	<input checked="" type="checkbox"/>	5		EA	\\ADnaN	Fortel	6.40
3	<input checked="" type="checkbox"/>	7		ISScript	\\ADnaN	InstallShield Software Corp.	3.00.185
4	<input checked="" type="checkbox"/>	8		WorkSmart_Csmart_8.1.1...	\\ADnaN	L&G	8.1.10.1
5	<input checked="" type="checkbox"/>	9		WinRunner	\\ADnaN	Mercury Interactive	8.2
6	<input checked="" type="checkbox"/>	4		Microsoft_SystemCenter...	\\ADnaN	Microsoft Corporation	6.1.7221.0
7	<input checked="" type="checkbox"/>	1		Microsoft Office Live Mee...	\\ADnaN	Sun Microsystems, Inc.	8.0.6362.143

複数のフィルターを適用して、アプリケーション一覧に表示される項目をさらに絞り込むことができます。

3. フィルターの値にマッチしないアプリケーションのみを表示するには、値を入力または選択し、テキストボックス左側のアイコンをクリックしてオプションを選択します。

ID	<input checked="" type="checkbox"/>	AppID	State	Name	Path	Manufacturer	Version
=		<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="Microsoft"/>	<input type="text" value="A"/>
1	<input checked="" type="checkbox"/>	4		Microsoft_SystemCenter...		Microsoft	6.1.7221.0
2	<input checked="" type="checkbox"/>	1		Microsoft Office		Microsoft Corporation	8.0.6362.143
3	<input checked="" type="checkbox"/>	2		Microsoft Conf...		Microsoft Corporation	8.0.6362.143
4	<input checked="" type="checkbox"/>	3		Microsoft SQL Se...		Microsoft Corporation	10.51.2500.0

- Starts with
- Contains
- Ends with
- Does not start with
- Does not contain
- Does not end with
- Does not match
- Not Like

4. フィルターをクリアするには、そのフィルターのクリアアイコンをクリックします。

ID	<input checked="" type="checkbox"/>	AppID	State	Name	Path	Manufacturer	Version
=		<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>	<input type="text" value="A"/>
1	<input checked="" type="checkbox"/>	10		Citrix XenCenter	\\ADnaN\AS02\MS...	Citrix Systems, Inc.	6.0.2

フィルターをXMLファイルに保存して、後で再利用できます。

1. フィルターを作成します。
2. ツールバーの [Export Filter] をクリックします。
3. [Save As] ダイアログボックスで、フィルターにわかりやすい名前を付けて保存先を選択、[Save] をクリックします。

1. ツールバーの [Import Filter] をクリックします。
2. [Open] ダイアログボックスでフィルターのXMLファイルを選択し、[Open] をクリックします。

インポートしたフィルターファイルの条件に基づいて、アプリケーション一覧が更新されます。

アプリケーションの属性

Oct 16, 2015

AppDNAのアプリケーション属性には、アプリケーションに関する組織特有の情報を記録できます。アプリケーション属性には、資産ID、コストセンター、アプリケーションの状態、保有者のような情報を含められます。

次の属性が既に作成されています。

- **AppID** - は資産IDのようなアプリケーションの一意識別子です。AppIDはすべてのレポートに表示されるように構成されています。
AppIDは多くの組織でトラックされますが、社内の購買システムなどのアプリケーションに保持される、資産タグ番号などのトラック番号を割り当てることができます。社内システムからAppIDのデータを入手するのはAppDNA管理者の担当です。スクリプトを作成して手動で行うことも、Citrixのコンサルティングチームと協力して社内システムにAppDNAを統合することもできます。管理者がAppIDに値を割り当てない場合は、アプリケーションをAppDNAにインポートした順序に基づいて、1から始まる値が自動的に割り当てられます。
- **Analyzed Date** - アプリケーションを分析した日付は、修復レポートに表示されるように構成されています。

アプリケーションにカスタム情報を追加するには、次の作業を行います。

- **アプリケーション属性を数の制限なく作成する** -たとえば、アプリケーションの状態をトラックするため、「アプリケーションの状態」という名前の属性を作成し、そのリスト値として「インポート済み」、「分析済み」、「テスト中」、「不合格」、「合格」、および「稼働中」を定義します。
属性を作成するとき、AppDNA管理コンソールで次の作業を行います。
 - データの種類をテキストフィールド、数値、リスト、はい/いいえの選択、日付、またはRAGインジケータの中から選択します。
 - 属性のレポート方法を定義します。各レポートで属性が異なる値を持つかどうか、また属性を含めるレポートを指定します。
注：画面の解像度によっては、OverviewレポートおよびAssessmentレポートに一定数のアプリケーション属性を表示できる可能性があります。
- **アプリケーション属性の値を設定する** -アプリケーション情報をほかのITシステムで管理している場合は、CSVファイルをインポートするかAppDNA SDKを使用してアプリケーション属性値を設定できます。AppDNA管理コンソールで直接編集することで値を設定することもできます。
- **アプリケーション属性情報を表示する** -アプリケーション属性を含むレポートには、各属性の列が含まれます。

アプリケーション属性を作成するには、AppDNA管理コンソールを使用する必要があります。

注：管理者の役割を持つユーザーはアプリケーション属性の定義を管理（追加、削除、編集）できます。すべてのユーザーは属性値を変更できます。

1. AppDNAのメニューで、[Manage]、[Attributes]の順に選択します。
[Application attributes]画面が開きます。
2. [New]をクリックします。
3. [Attribute definition] ページで次の作業を行います。
 1. 属性名を [Name] ボックスに指定します。
これはレポート上で属性を識別するためのラベルです。

2. 属性値がレポートによって異なるのか、グローバルにレポートされる必要があるのかを指定します。

ここでの選択により、属性を含むレポートが決定されます。[Per-report attribute] チェックボックスをオンにすると、アプリケーションにグローバルに当てはまるデータのみが含まれる、[Application List] 画面または [Overview Summary] レポートに属性が表示されなくなります。

- さまざまなレポートで属性に対して異なる値をレポートするには、[Per-report attribute] チェックボックスをオンにします。
たとえば、「テスト済み」という属性を作成してアプリケーションをテストしたかどうかを示すとします。「テスト済み」の値がさまざまなオペレーティングシステムで異なる可能性がある場合は、このチェックボックスをオンにします。
- さまざまなレポートで属性に対して同じ値をレポートするには、[Per-report attribute] チェックボックスをオフにします。
たとえば、コストセンターの属性を作成するとします。組織内では、オペレーティングシステムにかかわらず、特定のアプリケーションには同じコストセンターが適用されます。この場合は、このチェックボックスをオフにします。

属性を作成した後で [Per-report attribute] チェックボックスの状態を変更することはできません。

3. [Data type] ボックスの一覧からデータの種類を選択します。

データの種類により、属性値が特定の入力形式に制限されます。

[List] を選択すると、[Select or create list] ページが開きます。

- 定義済みのリストを使用するには、[Use existing list] を選択してメニューからリスト名を選択します。
- リストを作成するには、[Create new list] を選択し、[New list name] ボックスにリスト名を指定し、[Current items in list] ボックスにリスト項目を入力します。

リスト項目を並べ替えたり変更したりするには、このセクションの後の
— 「一覧を編集するには」
を参照してください。

属性を作成した後で [Data type] 設定を変更することはできません。

4. [次へ] をクリックします。

4. [Display options] ページで、属性を表示する場所を指定します。

- **Screen: Application List** - [Per-report attribute] チェックボックスがオンである場合を除いて、デフォルトで、AppIDを含め、すべてのレポートで同じ値の属性が [Application List] 画面に表示されます。
- **Report: Overview Summary** - [Per-report attribute] チェックボックスがオンである場合を除いて、デフォルトで、AppIDを含め、すべてのレポートで同じ値の属性が Overview Summary レポートに表示されます。
- **Reports: Application Issues and Application Actions** - これらのレポートに属性を含めるには、このチェックボックスをオンにします。
- **Reports: Remediation Issues and Remediation Actions** - [Per-report attribute] チェックボックスがオンであるかどうかにかかわらず、デフォルトで、AppIDを含め、すべてのレポートで同じ値の属性がこれらのアプリケーションレポートに表示されます。

レポートに表示する属性を決定するときは、追加列に必要なスペースを考慮してください。

5. [Finish] をクリックします。

属性が選択した場所に表示されます。

6. 変更が終わったら [Save] をクリックします。

注：管理者の役割を持つユーザーはアプリケーション属性の値をインポートできます。

複数のアプリケーションのアプリケーション属性の値を1回で設定するには、コンマ区切り値 (.csv) ファイルから値をインポートするか、AppDNA SDKを使用します。

「[一覧からのインポート](#)」に記載されているようにファイルからアプリケーションをインポートする場合は、同時にまたはその後で、属性をインポートできます。属性値をインポートする前に、アプリケーション属性を作成する必要があります。属性を作成すると、自動的にテンプレートインポートファイルに追加されます。

属性を追加、編集、または削除した後は、必ずテンプレートインポートファイルを再インポートしてください。

AppDNA管理コンソールでほかの方法を使用してアプリケーションをインポートする場合は、アプリケーションがAppDNA内で使用できるようになった後で属性をインポートできます。

注：管理者またはユーザーの役割を持つユーザーは、アプリケーション属性の値を表示または変更できます。

1. [Application List] 画面：

1. [Application List] 画面で、変更するアプリケーションのチェックボックスをオンにして [Properties] をクリックします。
プロパティページが開きます。

2. 属性値を設定するには、属性のチェックボックスをオンにしてその値を入力し、[OK] をクリックします。

2. Application Remediationレポートの閲覧時：

1. [Application Remediation report] 画面で、[Properties] をクリックします。
プロパティページが開きます。

2. 属性値を設定するには、属性のチェックボックスをオンにしてその値を入力し、[OK] をクリックします。

リストを作成および編集するにはAppDNAインターフェイスを使用する必要があります。

1. AppDNAのメニューで、[Manage]、[Application Attributes] の順に選択します。

[Application Attributes Settings] 画面が開きます。

2. [Lists] タブをクリックし、リスト名をクリックします。

3. [Edit values] をクリックし、変更を加えます。

- 項目を移動するには、その項目をクリックして矢印ボタンを使用します。
- 項目名を変更するには、その項目をクリックして新しい名前を入力します。
- 項目を削除するには、その項目をクリックして [Delete] をクリックします。

4. 変更を完了したら [OK] をクリックし、[Save] をクリックします。

注：管理者の役割を持つユーザーは、アプリケーション属性の名前を変更したりアプリケーション属性を削除したりできません。

1. AppDNAのメニューで、[Manage]、[Application Attributes] の順に選択します。

[Application Attributes Settings] 画面が開きます。

2. 属性を選択して [Edit] または [Delete] をクリックします。

3. 変更が終わったら [Save] をクリックします。

グループ

Oct 16, 2015

グループを使用すると、たとえばユーザーグループ、場所、またはアプリケーションの種類別にアプリケーションを整理できます。ポートフォリオ内の残りのアプリケーションとは別に、グループ内のアプリケーションを簡単に確認したりレポートを作成したりできます。グループはグループ内に入れ子にできます。

[Manage Groups] 画面を使用して、アプリケーショングループの作成と管理、選択したグループ内のアプリケーションの分析、および選択したグループ内のアプリケーションのレポートの表示を行います。グループに全体的な1つのRAG状態は割り当てられず、アプリケーション一覧またはレポートビューに個別の項目としては表示されません。

1. AppDNAのメニューで、[Manage]、[Groups] の順に選択します。
2. 新しいグループを別のグループに入れ子にするには、[Manage Groups] 画面左側のツリー表示でそのグループを選択します。
3. ツールバーで、[Create] をクリックします。
4. [Create Group] ダイアログボックスで、[Name] と [Description] を入力します。
5. ダイアログボックス下部にある [Add] をクリックします。

新しいグループが作成され、画面左側のツリービューに表示されます。次に説明する手順に従って、グループにアプリケーションを追加できます。

注：Active DirectoryまたはConfiguration Managerで管理されるアプリケーションをサポートするAppDNAエディションでは、そのグループ構造に基づいたグループを作成することもできます。

1. AppDNAのメニューで、[Manage]、[Groups] の順に選択します。
2. [Manage Groups] 画面左側のツリー表示で、アプリケーションを追加するグループを選択します。
3. ツールバーで、[Add to] をクリックします。[Add Applications] ダイアログボックスが開きます。
4. 必要に応じて、[Application List] 画面と同様に、列でアプリケーションを並べ替え、フィルター、およびグループ化できます。
5. グループに追加するアプリケーションを選択して [Add] をクリックします。
注：WebアプリケーションをサポートするAppDNAエディションを使用する場合でも、デスクトップアプリケーションとWebアプリケーションを同一グループ内に混在させることはできません。

注：[Import Applications] 画面でもアプリケーションをグループに追加できます。

1. AppDNAのメニューで、[Manage]、[Groups] の順に選択します。
2. [Manage Groups] 画面で、分析するグループを選択します。
3. ツールバーの [Analyze] をクリックします。
4. 分析に含めるレポートを選択します。
5. ツールバーの [Next] をクリックします。分析が開始され、進行状況が表示される [Processing Tasks] ページが開きます（分析をキャンセルするには、ツールバーの [Cancel] をクリックします）。
6. 処理が完了すると、結果の詳細が表示されます。レポートをすぐに表示するには、表示するレポートを選択し、[Finish] をクリックします。レポートは後で表示することもできます。

1. AppDNAのメニューで、 [Manage] 、 [Groups] の順に選択します。
2. [Manage Groups] 画面で、グループを選択します。
3. ツールバーで、表示するレポートを選択します。
4. ツールバーで、 [View Report] をクリックします。

1. AppDNAのメニューで、 [Manage] 、 [Groups] の順に選択します。
2. [Manage Groups] 画面左側で、詳細情報を編集するグループを選択します。
3. ツールバーの [Properties] をクリックします。
4. [Group Properties] ダイアログボックスで、必要に応じて詳細情報を入力します。
5. [Save] をクリックします。

ジャーナル

Oct 16, 2015

[Journal] 画面を使用して、既知のテスト結果に基づくアプリケーションの互換性状態を手動で設定し、アプリケーションのテストと修復について記録します。たとえば、テストにより特定のプラットフォームで問題が発生するアプリケーションが判明した場合は、対応するレポートにおける互換性設定を [Known Issues] に変更し、問題の内容を入力できます。関連するレポートで、標準およびカスタムRAG記号が黄色の [Known issues] アイコンで置き換えられます。ジャーナル機能により、個々のアプリケーションのRAG状態を手動で変更する方法が提供されます。

[Journal] 画面上部に、ポートフォリオ内のすべてのアプリケーションが一覧表示されます。この一覧では、[Application List] 画面と同様に、列でアプリケーションを並べ替え、フィルター、およびグループ化できます。

画面下部には、上の一覧で選択されているアプリケーションの詳細が表示されます。ここには、アプリケーションについて入力した最新のメモ、アプリケーションの詳細（名前、製造元、バージョン、およびソースファイルの場所）、およびアプリケーションに関連する、既存の手動のジャーナルエントリまたは外部データのジャーナルエントリの一覧が表示されます。手動のジャーナルエントリと外部データのジャーナルエントリは、同じジャーナルメカニズムで制御されます。これは、この画面で個々の外部データのジャーナルエントリを削除できることを意味します。

[Report] ボックスの一覧を使用して、作業対象の技術またはプラットフォームを選択します。画面下部にそのレポートのアプリケーションのRAG状態が表示され、そのレポートの新しいジャーナルエントリを作成できます。ジャーナルエントリは変更できませんが、削除して新しいエントリを追加できます。ただし、メカニズムはエントリの履歴を提供するように設計されています。

最新のジャーナルエントリのアイコンのみがレポートに表示されます。これは、最新のジャーナルエントリが外部データに由来するものである場合は関連レポートにこれが表示され、前に手動で入力したジャーナルエントリのアイコンは表示されないことを意味します。ただし、このような状況は一般的に手動でジャーナルエントリを入力した後で外部データを構成する際にのみ発生します。必要であれば、手動のジャーナルエントリを再追加できます。

? Unknown - これがデフォルト設定で、アイコンはレポートに表示されません。このオプションを使用して、レポートでのRAG状態を変更せずに、アプリケーションのテストと修復に関するメモを格納できます。

✓ Compatible - テストの結果、対象の技術上でアプリケーションが動作するとわかっていることを示します。最新のジャーナルエントリの状態がこれである場合は、関連するレポートで標準、カスタム、およびアクションRAGアイコンが [Compatible] アイコンで置き換えられ、RAGが緑になります。

! Known issues - テストの結果、対象のプラットフォーム上でアプリケーションに問題が発生するとわかっていることを示します。最新のジャーナルエントリの状態がこれである場合は、関連するレポートで標準、カスタム、およびアクションRAGアイコンが [Known issues] アイコンで置き換えられ、RAGが黄色になります。

✗ Incompatible - テストの結果、対象のプラットフォーム上でアプリケーションが動作しないとわかっていることを示します。最新のジャーナルエントリの状態がこれである場合は、関連するレポートで標準、カスタム、およびアクションRAGアイコンが [Incompatible] アイコンで置き換えられ、RAGが赤になります。

1. AppDNAのメニューで、[Manage]、[Journals] の順に選択します。
2. [Journal] 画面上部の一覧で、ジャーナルエントリを追加するアプリケーションを選択します。
3. [Report] ボックスの一覧で、エントリが関連するレポートを選択します。

4. 適切な互換性状態オプションをクリックします。
5. 互換性状態の根拠を説明するメモを入力し、そのほかの関連情報を記録します。
6. ツールバーの [Save] をクリックしてエントリを保存します。

1. AppDNAのメニューで、 [Manage] 、 [Journals] の順に選択します。
2. [Journal] 画面上部の一覧で、ジャーナルエントリを削除するアプリケーションを選択します。
3. 画面下部のジャーナルエントリの一覧で、削除するジャーナルエントリを見つけます。手動入力したジャーナルエントリでも、外部データのジャーナルエントリでも構いません。
4. [Delete] 列のアイコンをクリックします。
5. ツールバーの [Save] をクリックして変更を保存します。

検索と参照

Oct 16, 2015

データベースに保存されているアプリケーションおよびオペレーティングシステムDNA内の特定のファイルを検索したり、個別のアプリケーションのMSIテーブルを参照したりするには、[Search and Browse] 画面を使用します。

[Search and Browse] 画面を使用すると、特定のファイルに依存しているアプリケーション、特定のファイルを再配布するアプリケーション、特定のファイルを提供するオペレーティングシステムイメージを検索できます。たとえば、ファイルを更新するパッチがあり、使用しているアプリケーションがそのパッチに影響を受けるかどうか知る必要があるとします。ファイル名を入力してポートフォリオ内の各アプリケーションのすべてのファイルを検索し、パッチにより影響を受けるアプリケーションを確認できます。

1. AppDNAメニューから [Tools] 、 [Search and Browse] の順に選択します。
2. [Search and Browse] 画面で、[Search Files] ボックスにファイルの名前を入力します。
パーセント記号 (%) を、0個以上の文字を表すワイルドカード文字として使用できます。
3. [Submit] をクリックします。

MSIテーブルには、アプリケーションインストーラーが行う変更についての情報が保存されています。たとえば、どのファイルがどこにインストールされるか、どのレジストリエントリが作成されるか、などの情報です。.msiファイルを使用してインポートされるかどうかにかかわらず、AppDNAはMSIテーブルをすべてのアプリケーションに対して自動的に作成します。

- AppDNAメニューから [Tools] 、 [Search and Browse] の順に選択します。
- [Search and Browse] 画面で、データベースに格納されているMSIテーブルを参照するアプリケーションの名前をクリックします。

インポートの準備

Oct 16, 2015

AppDNAの分析機能をActive DirectoryやMicrosoft System Center Configuration Managerで提供されるインフラストラクチャ情報に統合できます。この統合により、たとえばユーザーのグループに関連付けられている管理対象アプリケーションや、それらのアプリケーションを新しいプラットフォームに展開する準備ができていかどうかを把握することができます。

AppDNAはLakeside SysTrackとも統合できます。SysTrackは、エンタープライズ内のアプリケーションの実際の使用状況を監査しトラックするソフトウェアです。アプリケーションの検出と呼ばれるこの機能により、エンタープライズ内で何人のユーザーが、何台のマシンで、どのアプリケーションを使用しているかについて、AppDNAから情報を得られます。

AppDNAとこれらの製品のいずれかを統合する場合は、アプリケーションをインポートする前にいくつかのタスクを完了する必要があります。

このセクションのトピックへのクイックリンク：

- [Active DirectoryとConfiguration Managerのデータの統合](#)
- [アプリケーションの検出](#)

アプリケーションの検出

Oct 16, 2015

ここでは、エンタープライズ環境で使用されているアプリケーションをLakeside SysTrackを使用して検出する方法について説明します。SysTrackでは、AppDNAを統合します。ほかにも、アプリケーションの使用状況を追跡するサードパーティ製のアプリケーションがあります。

アプリケーションを手作業で検出するには時間と手間がかかるため、自動ツールを使用することをお勧めします。通常、アプリケーションをAppDNAにインポートする前にアプリケーションインベントリを作成します。これにより、エンタープライズ環境で使用されているアプリケーションを把握でき、実際に使用されているものだけをインポートできます。これにより、業務に重大な影響を与える未管理のアプリケーションが特定されるだけでなく、依然として使用されているアプリケーションや、重複する機能を持つ類似したアプリケーションがないかどうか確認できます。

AppDNAのアプリケーション検出機能はLakeside SysTrackに依存する機能であり、このソフトウェアを統合することで使用できます。SysTrackは、エンタープライズ内のアプリケーションの実際の使用状況を監査し追跡するソフトウェアです。[Discover Applications] 画面を使用するには、SysTrackデータベースとの接続を構成する必要があります。これは [Discovery Settings] で行います。この画面を開くには、メニューから [Edit]、[Settings] の順に選択します。

SysTrackデータベースとの接続を構成すると、SysTrackで追跡されたアプリケーションが [Discover Applications] 画面に一覧表示されます。これにより、エンタープライズ内で何人のユーザーが、何台のマシンで、どのアプリケーションを使用しているかわかります。

[Discover Applications] 画面を開くには、次の手順に従います。

- サイドバーから [Import & Analyze]、[Discover Applications] の順に選択します。

注：このセクションで、検出されたアプリケーションはSysTrackで追跡されたアプリケーションを指し、管理されたアプリケーションはActive DirectoryまたはConfiguration Managerで展開されたアプリケーションを指します。

クイックリンク：

- [アプリケーションの合理化](#)
- [検出されたアプリケーションのフィルター](#)
- [検出されたアプリケーションと管理対象アプリケーションとの関連付け](#)
- [検出されたアプリケーションのインポート](#)

アプリケーションの合理化

Oct 16, 2015

このトピックでは、[Discover Applications] 画面のアプリケーションの合理化の概要について説明します。この文脈において、合理化には、アプリケーションのインベントリの調査、維持するアプリケーション（およびAppDNAへインポートすべきかどうか）および破棄するアプリケーションの決定が含まれます。[Discover Applications] 画面には、SysTrackで追跡しているWindowsアプリケーションの未処理のインベントリが表示されます。

[Discover Applications] 画面でアプリケーションを処理したら、合理化の状態を初期のReview（検討）状態からMigrate（移行）またはRetire（廃棄）に変更します。[Rationalize] 列のドロップダウンリストを使用すると、個々のアプリケーションでこれを行うことができます。検出された複数のアプリケーションで合理化の状態を変更するには、[Rationalize] 列でCtrlキーまたはShiftキーを押したままアプリケーションを選択して右クリックし、[Review]、[Migrate]、または[Retire]を選択します。

重複項目の処理 - 通常、アプリケーション（特に、管理されていないアプリケーション）は一部重複しています。たとえば、アプリケーションが5、6回も表示され、それらの違いがmajor.minor.build.revisionという形式のバージョン番号の、ビルドまたはリビジョン部分のみであることがあります。通常、これらのうちの1つか2つ（一般に最新のバージョン）のみを維持または移行します（重複項目が同一であるように見ることがあります。それらの違いはGUIDと呼ばれるパッケージまたはインストールに一意的識別子で、メインの一覧には表示されません。

[Duplicates]（[検出されたアプリケーションのフィルター](#)）を使用して、アプリケーションの一覧を重複のあるアプリケーションのみに絞り込みます。名前、製造元、およびバージョンに基づいてアプリケーションの並べ替えも行われます。これにより、重複するアプリケーションが一覧で並んで表示されます。ほかの方法で（たとえば、アクティブなユーザーの数で）一覧をフィルターしている場合、これによって重複項目の一部が除外されていることがあるので注意してください。[Rationalize] 状態を、維持するアプリケーションの場合は[Migrate]に、破棄するアプリケーションの場合は[Retire]に設定します。

インストールと使用状況の統計情報 - [Discover Applications] 画面には、各アプリケーションがインストールおよび使用されているマシンの数および割合を示す列があります。列にはさまざまな使用状況の統計情報も表示されます。これにより、アプリケーションを合理化するときに役立つ情報が提供されます。

アプリケーションの一覧は、任意の列のデータで並べ替えることができます（列見出しをクリックするだけで並べ替えられます。再度クリックすると並べ替え順序が逆になります）。これらの列のデータでアプリケーションの一覧をフィルターすることもできます。これを簡単に実行できるクイックフィルターも多数あります。

注：これらの統計情報は個々のアプリケーションについて提供されるものであり、重複するアプリケーションのグループで集計された統計情報は表示されません。これらの列でフィルターすると、重複項目のグループでアプリケーションの一部が除外され、一部が含まれる場合があります。

管理対象アプリケーション - Active DirectoryまたはConfiguration Managerでアプリケーションを管理する場合、検出されたアプリケーションを対応する管理対象アプリケーションに関連付けることができます。この場合、検出されたアプリケーションの[Managed]列にはチェックマークが付きます。

検討のための合理化判断のエクスポート - ツールバーの[Export] [Current View] オプションを使用すると、検討のために合理化の判断をエクスポートできます。

検出されたアプリケーションのAppDNAへのインポート - 維持するアプリケーションと移行する可能性があるアプリケーションを決定した場合、AppDNAにインポートする必要があります。これを実行するには、アプリケーションのインストールパッケージまたはApp-V（.sftまたは.appv）ファイルが必要です。インストールパッケージは、Windowsインストーラーパッケージ（.msiファイル）でもほかの種類のインストールパッケージでも構いません。検出されたアプリケーションがActive

DirectoryまたはConfiguration Managerで管理されている場合は、検出されたアプリケーションと管理対象アプリケーションの展開情報をマッチさせた後でインポートできます。ほかのアプリケーションの場合、一覧をエクスポートし、インストーリパッケージの名前と場所を入力してから、一覧を使用してアプリケーションをAppDNAにインポートできます。



検出されたアプリケーションのフィルター

Oct 16, 2015


検出されたアプリケーションの一覧にクイックフィルターを適用して、特定の条件（合理化状況や、アプリケーションがインストールされているマシンの数や割合など）に応じて表示項目を絞り込むことができます。[Discover Applications] 画面の [Filter] ツールバーにいくつかのフィルターが用意されています。


複数のクイックフィルターを適用することもできます。たとえば、検出されたアプリケーションのうち、[Review] クイックフィルターを使用して検討対象としてマークされているものを表示し、[Migrate] および [Retire] クイックフィルターを使用して移行対象および廃棄対象としてマークされているものをそれぞれ除外し、[Usage] クイックフィルターを使用して過去1か月の間に実際に使用されたものだけを表示することができます。すべてのクイックフィルターを解除するには、ツールバーの一番右側の [Clear Filters] アイコンをクリックします。

「アプリケーションのフィルター」の [Application List] 画面の場合と同様に、任意の列のデータに基づいてフィルターを作成することもできます。作成したフィルターについては、[Clear Filters] をクリックしても解除されません。ただし、個別解除することは可能です。


最初のクイックフィルターのセットに含まれるフィルターは、単純にオンかオフのどちらかの状態になり、その状態が  アイコンと  アイコンで示されます。これらのクイックフィルターを次に示します。


● Duplicates

 検出されたアプリケーションのうち重複しているものだけを表示します。名前、製造元、およびバージョンに基づいてアプリケーションの並べ替えも行われます。これにより、重複するアプリケーションが一覧で並んで表示されます。アプリケーションは、名前と製造元が同じ場合に重複とみなされます。


 検出されたアプリケーションの一覧を重複するものだけに絞り込みません。つまり、検出されたアプリケーションが重複しないものも含めてすべて表示されます。


● Review

 検出されたアプリケーションのうち、検討対象としてマークされているものを表示します。


 検出されたアプリケーションのうち、検討対象としてマークされているものを除外します。


● 移行

 検出されたアプリケーションのうち、移行対象としてマークされているものを表示します。

 検出されたアプリケーションのうち、移行対象としてマークされているものを除外します。

● Retire

 検出されたアプリケーションのうち、廃棄対象としてマークされているものを表示します。

 検出されたアプリケーションのうち、廃棄対象としてマークされているものを除外します。

もう1つのクイックフィルターセットを利用すると、アプリケーションがインストールされているマシンの割合、アプリケーションを実際に使用しているアクティブなマシンやユーザーの割合、およびアプリケーションの使用頻度に基づいて、検出されたアプリケーションの一覧をすばやくフィルターできます。

● **Installed machines** – アプリケーションがインストールされているマシンの割合に基づいて、検出されたアプリケーションを絞り込みます。たとえば、[Most] オプションを選択すると、SysTrackで識別された全マシンのうちの76~100%のマシンにインストールされているアプリケーションが表示されます。フィルターのボックスの一覧には、フィルターがほかにもある場合はそれらも適用されたうえで、それぞれの条件を満たすアプリケーションの数が表示されます。

- **Active machines** – [Installed Machines] クイックフィルターに似ていますが、このフィルターでは、検出されたアプリケーションが実際に使用されているかどうかに基づいて絞り込みます。この場合のアクティブなマシンとは、SysTrack データベースの対応する期間に実際に使用されたマシンを指します。
- **Active users** – アプリケーションを実際に使用しているユーザーの割合に基づいて、検出されたアプリケーションを絞り込みます。たとえば、[Many] オプションを選択すると、検出されたアプリケーションのうち、26~75%のユーザーに使用されているものが表示されます。フィルターのドロップダウンリストには、アクティブなフィルターがほかにもある場合はそれらも適用されたうえで、それぞれの条件を満たす検出されたアプリケーションの数が表示されます。
- **Usage** – アプリケーションの最終使用日に基づいて、検出されたアプリケーションを絞り込みます。このグループの他のクイックフィルターと同様に、フィルターのドロップダウンリストには、アクティブなフィルターがほかにもある場合はそれらも適用されたうえで、それぞれの条件を満たす検出されたアプリケーションの数が表示されます。

検出されたアプリケーションと管理対象アプリケーションとの関連付け

Oct 16, 2015

Active DirectoryまたはConfiguration ManagerからのデータをAppDNAにインポートした場合は、検出されたアプリケーションと管理対象アプリケーションを関連付けることができます。

注 : Active DirectoryおよびConfiguration Managerのデータをインポートまたは変更したら、ツールバーの[Refresh] をクリックし、その変更をこの画面に表示します。

検出されたアプリケーションと管理対象アプリケーションをリンクするには

1. サイドバーから [Import & Analyze] 、 [Discover Applications] の順に選択します。
2. オプションで、 [Discover Applications] 画面で [Best Suggestion] 列を使用し、管理対象アプリケーションとのマッチがない検出されたアプリケーションを除外します。
 1. [Best Suggestion] 列見出しのすぐ下の行でドロップダウンリストから [None] を選択します。
 2. ドロップダウンリストの左側にある [A] アイコンをクリックします。
 3. [Does not equal] を選択します。これにより、検出されたアプリケーションの一覧は、管理対象アプリケーションとのマッチがあると考えられるアプリケーションのみに絞り込まれます。
3. 検出されたアプリケーションの一覧で、管理対象アプリケーションとリンクするアプリケーションをクリックします。管理対象アプリケーションのマッチが見つかった場合は、マッチしたアプリケーションのインストールがすべて一覧表示されます。同じアプリケーションが複数のインストール（たとえば、Per-system attended、Per-system unattended、Per-user attended、Per-user unattended、Per-system uninstall、およびPer-user uninstall）を持つ可能性があります。
4. マッチを受け入れるには、インストールを選択します。アンインストールまたは修復コマンドではなく、適切な種類のインストールであることを確認してください。マッチを作成するインストールのいずれかをインポート済みである場合は、それを選択します（項目がインポート済みであれば [Imported] 列にチェックマークが表示されます）。ウィンドウ上部の [Managed] 列にチェックマークが表示されます。
5. ツールバーの [Save] をクリックします。

検出されたアプリケーションのインポート

Oct 16, 2015

AppDNAデスクトップアプリケーションをインポートするには、そのインストールパッケージまたはApp-Vパッケージファイル (.sftまたは.appvファイル) が必要です。インストールパッケージは、Windowsインストーラーパッケージ (.msiファイル) でもほかの種類のインストールパッケージでも構いません。Active DirectoryまたはConfiguration Managerで管理されるアプリケーションについては、それらのアプリケーションと検出されたアプリケーションを照合し、Active DirectoryまたはConfiguration Managerの展開情報を使用してインポートするだけです。管理対象外のアプリケーションについては、インストールパッケージの場所を [Import Applications] 画面で指定する必要があります。ここでは、その最も簡単な方法を説明しています。

注：現在、次の手順でインポートできるのは、MSIパッケージを使用してインストールされた管理対象アプリケーションだけです。それ以外の種類のインストーラーの場合は、 [\[Managed Applications\]](#) 画面を使用してAppDNAにインポートしてください。

1. サイドバーから [Import & Analyze] 、 [Discover Applications] の順に選択します。
2. 「[検出されたアプリケーションと管理対象アプリケーションとの関連付け](#)」の説明に従って、検出されたアプリケーションと管理対象アプリケーションをリンクします。
3. [Discover Applications] 画面のツールバーで、 [Add to import list] をクリックします。
これをクリックすると、 [Import Applications] 画面が開き、 [Direct Import] タブにまだインポートされていない選択済みのアプリケーションの一覧が表示されます。詳しくは、「[直接インポート](#)」を参照してください。
4. [Import Applications] 画面のツールバーで、 [Import] をクリックします。

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Discover Applications] の順に選択します。
2. 検出されたアプリケーションの一覧をフィルターして、インポートするアプリケーションだけになるように絞り込みます。フィルターの一覧については、「[検出されたアプリケーションのフィルター](#)」を参照してください。
3. [Discover Applications] 画面のツールバーで、 [Export] 、 [Application Import List] の順に選択します。
4. [Save As] ダイアログボックスで、エクスポートファイルの適切な名前と場所を指定し、 [Save] をクリックします。
アプリケーションの一覧がCSVファイルに保存されます。このファイルは、 [Import Applications] 画面でインポート一覧として使用できます。インポート一覧の使用について詳しくは、「[一覧からのインポート](#)」を参照してください。
5. ファイルをExcelで開きます。
6. [Filename] 列に各アプリケーションのインストールパッケージの名前と場所を入力します。たとえば、「\\server\folder\filename.msi」です。 .msi、 .sft、 または .appvファイルの場合、 [Execution Profile] 列は空欄のままにします。それ以外の形式のインストールパッケージの場合は、使用する実行プロファイルの名前を入力します。
7. オプションで、 [Silent Switch] 列に「/s」と入力し、 [Group] 列にアプリケーションをインポートするグループの名前を入力します。
8. 詳細情報の追加が完了したら、ファイルをCSV形式で保存します。
9. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Import Applications] の順に選択します。
10. [Import Applications] 画面のツールバーで [Import from List] をクリックし、手順8で保存したファイルを選択して [Import] をクリックします。
画面にアプリケーションが一覧表示されます。あとは通常の方法でアプリケーションをインポートできます。

検出の設定

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスには、AppDNAの全般的なオプションが含まれます。[Settings] ダイアログボックスを開くには、メニューから [Edit]、[Settings] の順に選択します。

[Settings] ダイアログボックスの [Discovery] ページを使用して、Lakeside SysTrackデータベースの接続の詳細情報を入力します。AppDNAではSysTrackデータベースを使用して、エンタープライズ内で使用されているアプリケーションの情報を提供します。詳しくは、「[アプリケーションの検出](#)」を参照してください。

使用できるオプションは、次のとおりです。

Server name - SysTrackデータベースをホストするサーバーです。「<Machine>\<Instance>」形式で入力します。ここで、<Machine>はSQL Serverをホストするマシンの名前で、<Instance>は名前付きのSQL Serverインスタンスを使用する場合のインスタンス名です。名前付きのインスタンスを使用しない場合には、バックスラッシュ (\) を省略します。

Database name - SQL ServerのSysTrackデータベースの名前です。

Authentication - SysTrackデータベースへの接続に使用する認証の種類を選択します。使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Windows Authentication** - この種の認証では、ログオンに使用するWindowsユーザーアカウントをデータベース接続に使用します。
- **SQL Server Authentication** - この種の認証では、適切なユーザー名とパスワードを提供する必要があります。

User name - 上で [SQL Server Authentication] を選択した場合は、AppDNAがSysTrackデータベースに接続するときに使用するユーザー名を入力します。[Windows Authentication] を選択した場合は、空白のままにします。

Password - 上で [SQL Server Authentication] を選択した場合は、AppDNAがSysTrackデータベースに接続するときに使用するパスワードを入力します。[Windows Authentication] を選択した場合は、空白のままにします。

Test - 接続をテストします。成功すると「Success」と表示され、そうでなければエラーメッセージが表示されます。必要であればエラーメッセージの情報を使用して問題を修正し、接続を再テストします。

[Save] をクリックして変更を保存します。

列

Oct 16, 2015

このトピックでは、[Discover Applications] 画面の列について説明します。「[アプリケーション一覧](#)」で説明しているように、列をドラッグすることによって、その列のデータに基づいて検出済みのアプリケーションをグループ化できます。

[Discover Applications] 画面の列は次のとおりです。

Rationalize - 検出されたアプリケーションの合理化状況です。Review、Migrate、Retireのいずれかになります。検出されたアプリケーションは、最初はReview状態になります。状態を変更するときは、この列のドロップダウンリストを使用して手動で行います。検出された複数のアプリケーションの状態を変更するには、この列でCtrlキーまたはShiftキーを押しながらアプリケーションを選択して右クリックし、[Review]、[Migrate]、または[Retire]を選択します。

Name - アプリケーションの名前です。[Application Details] ダイアログボックスを開きます。このダイアログボックスには、アプリケーションを実行したユーザーとマシンの名前を含む、アプリケーションの詳細情報が表示されます。たとえば、アプリケーションのインストーラが見つからず、実際にアプリケーションを使用するユーザーに問い合わせる場合に便利です。詳しくは、「[検出されたアプリケーションの詳細](#)」を参照してください。

Manufacturer - アプリケーションの製造元です。

Version - アプリケーションのバージョン番号です。

Installed machines - アプリケーションがインストールされているコンピューターの数です。

% Installed machines - SysTrackで追跡された全コンピューターのうちのアプリケーションがインストールされているコンピューターの割合です。この値は整数に丸められます。そのため、たとえば、0%でも該当するマシンがないとは限らず、100%でもすべてのマシンが該当するとは限りません。

Active machines - SysTrackデータベースの対応する期間にアプリケーションが実際に使用されたコンピューターの数です。

% Active machines - アプリケーションがインストールされている全コンピューターのうちのアクティブなコンピューターの割合です。

Active users - SysTrackデータベースの対応する期間にアプリケーションを実際に使用したユーザーの数です。

% Active users - アプリケーションの全ユーザーのうちのアクティブなユーザーの割合です。

Usage count - SysTrackデータベースの対応する期間にアプリケーションが使用された合計回数です。

Usage per year - SysTrackデータベースの対応する年数で使用回数を割った値です。

Usage per month - SysTrackデータベースの対応する月数で使用回数を割った値です。

Usage per day - SysTrackデータベースの対応する日数で使用回数を割った値です。

First usage - SysTrackで検出されたアプリケーションの最初の使用日です。

Last usage - SysTrackで検出されたアプリケーションの最後の使用日です。

Managed - アプリケーションがActive DirectoryまたはConfigMgrの管理対象アプリケーションとマッチ済みかどうかを示します。

Imported - 検出されたアプリケーションがマッチされている管理対象アプリケーションがAppDNAにインポート済みかどうかを示します。

Best Suggestion - アプリケーションとマッチする管理対象アプリケーションが存在するかどうか、および存在する場合はその信頼度を示します。可能な値には、[Perfect]、[Excellent]、[Good]、[Average]、[Poor]、[None] があります。マッチ処理について詳しくは、「[マッチ処理のアルゴリズム](#)」を参照してください。

検出されたアプリケーションの詳細

Oct 16, 2015

[Application Details] ダイアログボックスでは、選択した、検出されたアプリケーションについての詳細情報が提供されます。[Application Details] ダイアログボックスを開くには、[\[Discover Applications\]](#) 画面で、詳細を表示する、検出されたアプリケーションを見つけてその名前をクリックします。

[Application Details] ダイアログボックスには次の3つのタブがあります。

Application – アプリケーションの名前、製造元、バージョン、インストールID、およびパッケージID (GUID) が表示されます。GUID以外の詳細が同じである場合は、GUIDの違いにより、検出されたアプリケーションの一覧に同一のアプリケーションが重複して表示されているように見えることがあります。このように見えるのは、GUIDは一覧に表示されないためです。

Users – 最終使用日と共に、最近アプリケーションを使用したすべてのユーザーのドメイン修飾ユーザー名が一覧表示されます。たとえば、アプリケーションのインストーラーが見つからず、実際にアプリケーションを使用するユーザーに問い合わせる場合に便利です。

Devices – 最終使用日と共に、最近アプリケーションを実行したコンピューターの名前が一覧表示されます。

[OK] をクリックしてダイアログボックスを閉じます。

マッチ処理のアルゴリズム

Oct 16, 2015

検出されたアプリケーションと管理対象アプリケーションの関連付け（マッチ）を検索するときに、AppDNAではアプリケーション名、製造元、バージョン、およびここで説明するアワードポイントが比較されます。[Discover Applications] 画面には、関連付けが可能な管理対象アプリケーションを示す以下のBest Suggestion値が表示されます。

次の表は、アワードポイントを説明しています。

詳細	完全マッチ	部分マッチ
名前	50ポイント	25 + 1単語につき1ポイント
製造元	10ポイント	1単語につき1ポイント
バージョン	10ポイント	1単語につき1ポイント

次のとおり、マッチにポイントが追加され、信頼度が割り当てられます。

Best Suggestion値	合計ポイント
Perfect	70
Excellent	51以上
良好	46以上（名前の部分マッチ、製造元とバージョンの完全マッチ）
Average	36以上（名前の部分マッチ、製造元またはバージョンの完全マッチ）
Poor	26以上
No Match	25以下

Active Directoryと Configuration Managerのデータの統合

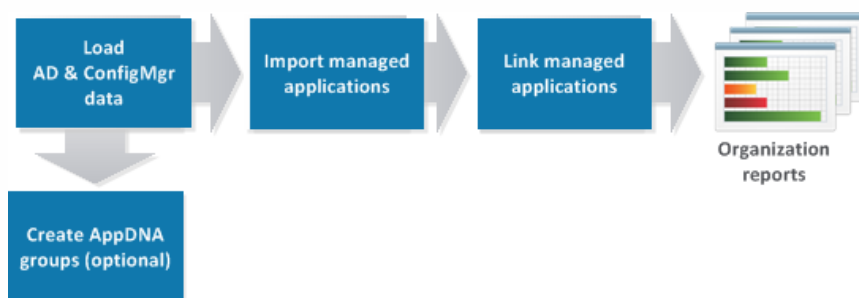
Oct 16, 2015

Active DirectoryとSystem Center Configuration Managerは、Microsoftの広く普及した2つのシステム管理ツールです。これらのツールは、組織のインフラストラクチャと、展開されるアプリケーションに関する豊富な情報の源です。このドキュメントでは、Active DirectoryまたはConfiguration Managerによって展開されるアプリケーションを管理対象アプリケーションと呼びます。

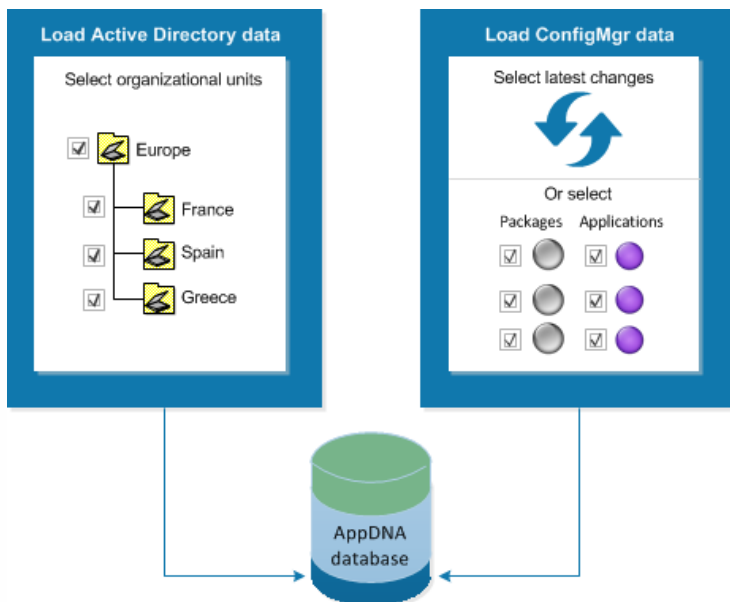
Active DirectoryおよびConfiguration ManagerからAppDNAに情報をロードできます。これには複数の利点があります。

- この展開情報を使用して、管理対象アプリケーションをAppDNAにインポートできます。
- AppDNAの組織レポートを使用して、ユーザーおよびコンピューターのグループ、それらに関連付けられている管理対象アプリケーションの概要、そしてたとえばそれらのアプリケーションを新しいプラットフォームに展開する準備ができていのかどうかについての情報を取得できます。
- Forward Pathは、豊富な展開データを利用して、App-V用アプリケーションのシーケンス処理などの自動化されたタスクを実行できます。

次の図は、Active DirectoryおよびConfiguration ManagerのデータをAppDNAに統合する手順を示しています。組織レポートで意味のあるデータを提供するには、3つの手順に従って作業する必要があります。これらの手順およびオプションのAppDNAグループの作成手順については、見出しごとに分けて次に説明します。詳細なドキュメントへのリンクも示します。



最初の手順は、Active DirectoryおよびConfiguration Managerのデータのロードです。Active Directoryからデータをロードするときは、ロードする組織単位（OU）を選択すると、関連付けられているActive Directoryグループ、ユーザー、コンピューター、およびこれらのエンティティに展開されているアプリケーションの展開情報と共に、AppDNAのデータベースに自動的にロードされます。Configuration Managerからデータをロードするときは、最後にデータをロードしてからのすべての変更を自動的にロードするか、またはロードするパッケージとアプリケーションを手動で選択するか（個別またはバッチ）を選択できます。どちらのオプションを選択しても、AppDNAは、パッケージとアプリケーション、展開情報、および関連付けられているコレクション、ユーザー、コンピューターの詳細を抽出してロードします。



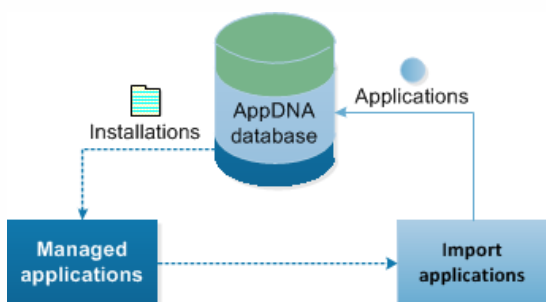
データはAppDNAから直接ロードできます。または、スタンドアロンの抽出ツールと同期データを含む.zipファイルをダウンロードすることもできます。管理者はこれを使用してサーバー上のデータを抽出できます。その後、結果をAppDNAにロードします。スタンドアロンツールは、AppDNAとは別にActive DirectoryドメインコントローラーまたはConfiguration Managerサーバーで実行できるため便利です。

AppDNAにロードされた管理対象アプリケーションは、ほかのアプリケーションと同様に処理されます。一部の画面では、Configuration Managerを使用して展開される場合でも、管理対象アプリケーションはパッケージと呼ばれます。

詳しくは、「[Active DirectoryおよびConfiguration Managerのデータのロード](#)」を参照してください。

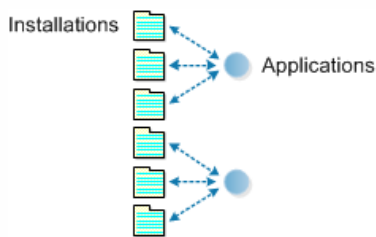
Active DirectoryおよびConfiguration Managerのデータをロードした後は、これらのツールを使用して展開されているアプリケーションをインポートできます。この操作は [Managed Applications] 画面で行います。ここには、Active DirectoryおよびConfiguration Managerによって管理されていて、展開情報がAppDNAデータベースに格納されている、すべてのアプリケーションが一覧表示されます。インポートするアプリケーションを選択すると、 [Import Applications] 画面に転送されます。ここで、Active DirectoryまたはConfiguration Managerの展開情報（AppDNAではインストールと呼ばれます）を使用して、アプリケーションをインポートできます。

従来のConfiguration Managerパッケージまたはプログラムメカニズムを使用して展開するアプリケーションでは、インストールはConfiguration Managerプログラムを表します。一般に、このように展開されたアプリケーションには複数のインストールがあります。新しいConfiguration Manager 2012アプリケーションメカニズムを使用して展開されたアプリケーションでは、1つのインストールは展開の1つの種類に対応します。

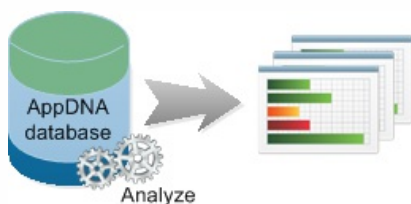


詳しくは、「[管理対象アプリケーションのインポート](#)」を参照してください。

管理対象アプリケーションを、AppDNAに既にインポートされているアプリケーションとリンクできます。Configuration Managerでのデータの構成方法により、1つの管理対象アプリケーションに複数のインストールが存在する場合があります。たとえば、Configuration Managerパッケージモデルを使用して展開されている1つの管理対象アプリケーションに対して、「Per-system attended」、「Per-system unattended」、「Per-user attended」、「Per-user unattended」と呼ばれるインストールが存在する可能性があります。これらのインストールはすべて同じインストールパッケージを参照します。このような場合、同じ管理対象アプリケーションに関連しているすべてのインストールを、AppDNA内の同じアプリケーションにリンクできます。



詳しくは、「[管理対象アプリケーションのリンク](#)」を参照してください。

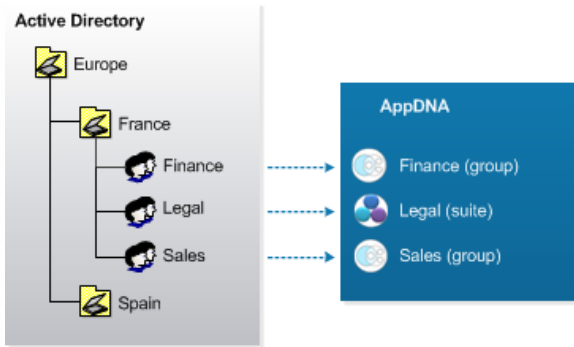


上で説明した手順を完了し、AppDNAの標準分析手順を実行した後は、組織データを調査できます。[Users and Computers] 画面を使用して、組織単位、Active Directoryグループ、Configuration Managerコレクション、ユーザー、コンピューターなど、Active DirectoryおよびConfiguration Managerのエンティティを調査できます。ここからは、たとえばユーザーのグループを選択し、それらに対して展開されている管理対象アプリケーションの状態を表示する概要レポートを閲覧できます。これらのアプリケーションの標準AppDNAレポートビューにドリルダウンできます。

これにより、たとえば、主要部門のユーザーに展開されている管理対象アプリケーションの互換性状態を表示できます。

詳しくは、「[\[Users and Computers\] 画面の組織データ](#)」を参照してください。

オプションで、Active DirectoryおよびConfiguration Managerのグループ構造に基づいて、AppDNAグループを作成できます。AppDNAグループはActive DirectoryおよびConfiguration Managerのグループ構造とは別の、異なるグループです。AppDNAでは、グループを使用してアプリケーションを編成します。たとえば財務部門で使用する特殊なアプリケーションに関するレポートを、すばやく簡単に作成できます。



管理対象アプリケーションはActive DirectoryおよびConfiguration Managerのグループ構造に対して展開されるため、グループ構造に基づいてAppDNAグループを作成すると便利ながよくあります。これを行うと、それらの構造に関連付けられたアプリケーションが、新しいAppDNAグループに自動的に追加されます。たとえば、Active DirectoryのFinanceグループに基づいてAppDNAグループを作成すると、そのグループに展開された管理対象アプリケーションが新しいAppDNAのFinanceグループに自動的に追加されます。

このようにしてAppDNAグループを作成すると、AppDNAでこれらのアプリケーションについて簡単にレポートできます。Active Directoryグループ内のユーザーおよびコンピューターに展開されているすべてのアプリケーションの状態を示す組織レポートとは異なるビューを得られます。

たとえば、Active Directoryグループ「Finance」のユーザーが、Configuration Managerコレクション「All Users」にも含まれており、それに対してMicrosoft Officeアプリケーションが展開されているとします。Financeグループの組織レポートを表示すると、Financeグループに展開されている特別な財務アプリケーションだけでなく、All Usersコレクションに展開されているMicrosoft Officeアプリケーションの状態もわかります。一方、AppDNAのFinanceグループについての標準AppDNAレポートを表示すると、Active DirectoryのFinanceグループに展開された特別なアプリケーションだけが表示されます。

注：この後で新しいアプリケーションがActive DirectoryのFinanceグループに展開された場合、手動で更新しない限り、AppDNAグループには反映されません。

詳しくは、「[Active DirectoryおよびConfiguration Managerコレクションによるグループの作成](#)」を参照してください。

重要な用語

Oct 16, 2015

このトピックでは、Active Directory (AD) と Microsoft System Center Configuration Manager に関連して AppDNA のトピックで使用される、いくつかの重要な用語について簡単に説明します。用語 (グループなど) が AD および Configuration Manager と AppDNA とで異なる意味を持つ場合、AppDNA の用語と区別するために、AD および Configuration Manager の用語には冒頭に AD または Configuration Manager が付いています。

管理対象アプリケーション

Active Directory または Configuration Manager で展開されるアプリケーションです。AppDNA にロードされると、すべての管理対象アプリケーションは展開方法にかかわらず標準の方法で処理されます。一部の画面では、Configuration Manager を使用して展開される場合でも、管理対象アプリケーションはパッケージと呼ばれます。

インストール

Active Directory または Configuration Manager を通じてアプリケーションを展開するために使用するインストールメカニズムを表します。従来の Configuration Manager パッケージまたはプログラムメカニズムを使用して展開するアプリケーションでは、インストールは Configuration Manager プログラムを表します。一般に、このように展開されたアプリケーションには複数のインストールがあります。新しい Configuration Manager 2012 アプリケーションメカニズムを使用して展開されたアプリケーションでは、1つのインストールは展開の1つの種類に対応します。

Active Directory

Microsoft のディレクトリサービスで、ネットワーク管理、ネットワーク上のリソースに対するユーザーアクセスのセキュリティとシングルサインオン、アプリケーションデータに対するアクセスの標準化、アプリケーションの展開と更新、およびサーバー間のディレクトリ更新の同期を集中管理できます。すべての情報と展開設定が中央データベースに格納されます。

組織単位 (OU)

Active Directory 内のユーザー、コンピューター、およびグループのコンテナです。各ユーザー、コンピューター、およびグループは、1つの特定の組織単位に含まれます。Active Directory は組織単位の階層ツリーに形成されます。組織単位ツリーは柔軟に構造化できます。たとえば、機能や地理的な場所で分けて構造化できます。

グループポリシーオブジェクト (GPO)

選択した Active Directory のユーザーまたはコンピューターに適用するポリシーのコレクションです。GPO は組織単位にリンクされ、ユーザーとコンピューターを対象にします。GPO を特定のユーザーまたはコンピューターに適用するには、2つの条件を満たす必要があります。第一に、ユーザーまたはコンピューターが、GPO がリンクされている組織単位またはその下位組織単位に属している必要があります。第二に、ユーザーまたはコンピューターが直接対象になっているか、GPO が対象とするグループに属している必要があります。

AD パッケージ

ソフトウェアの展開に使用される特定の種類の GPO ポリシーです。MSI の展開をネイティブにサポートします。

AD グループ

AD ユーザーとコンピューターのコレクションを表します。グループメンバーシップは静的です。メンバーはグループに明示的に追加します。グループは入れ子にでき、メンバーは複数のグループに属せます。

AD コンピューター

Windows ドメインに属しているコンピューターのドメインアカウントを表します。これは、物理マシン、仮想マシン、または認証に使用されるダミーアカウントである可能性があります。

AD ユーザー

Windowsドメインにログオンできるユーザーのログオンアカウントを表します。ユーザーは実際の人物を表すことも、サーブアカウントや電子メールの受信者を表すこともあります。

System Center Configuration Manager

大きなグループのWindowsベースのコンピューターシステムを管理するための、Microsoftのシステム管理ツールです。Configuration Managerにより、リモート制御、パッチ管理、ソフトウェアの配布、オペレーティングシステムの展開、ネットワークアクセス保護、およびハードウェアとソフトウェアのインベントリが提供されます。Active Directoryのように、すべての情報と展開設定が中央データベースに格納されます。

Configuration Managerコレクション

Configuration ManagerコンピューターとConfiguration Managerユーザーのコレクションを表します。Configuration Manager 2007以前では、コレクションは入れ子にできます。ただし、Configuration Manager 2012では入れ子にできません。Configuration Managerコレクションのメンバーシップは仮動的です。メンバーはグループに明示的に追加できます。ただし、規則を定義して、コレクションに含めるユーザーとコンピューターを決定することもできます。コレクションは定期的に更新されますが、コレクションがクエリされるたびに更新されるわけではありません。

Configuration Managerコンピューター

Windowsドメインに属しているコンピューターのドメインアカウントを表します。これは、物理マシン、仮想マシン、または認証に使用されるダミーアカウントである可能性があります。

展開の種類

Configuration Managerアプリケーションに含まれており、アプリケーションのインストールに必要な情報と、展開の時期および方法を指定する規則を格納します。Configuration Managerアプリケーションには1つ以上の展開の種類が必要です。AppDNAでは、展開の種類はインストールと呼ばれます。

Configuration Managerパッケージ

ファイルを含むフォルダーを表します。Configuration Managerではサイト間でのパッケージの複製が追跡されます。

Configuration Managerプログラム

インストールやアンインストールなど、Configuration Managerパッケージに含まれるファイルに対する、またはファイルを用いる操作を表します。AppDNAでは、Configuration Managerプログラムはインストールと呼ばれます。

Configuration Managerアプリケーション

Configuration Manager 2012アプリケーションモデルにより展開され、管理されるアプリケーションを表します。

Configuration Managerユーザー

エンタープライズ内のユーザーを表します。通常、Configuration ManagerではActive Directoryへの問い合わせを通じてユーザーを検出します。

SysTrack

Lakeside SoftwareのITビジネスインテリジェンス製品群です。SysTrackには、エンタープライズ内のアプリケーションの使用状況を監査し追跡する機能が搭載されています。AppDNAではこの追跡結果を [Discover Applications] 画面で使用します。

検出済みのアプリケーション

組織全体で、SysTrackによって使用状況を追跡しているアプリケーションです。検出済みのアプリケーションは、 [Discover Applications] 画面に一覧表示されます。

グループ

AppDNA内のアプリケーションの論理的なコンテナです。グループはWindowsエクスプローラーのフォルダーと似ています。たとえばユーザーグループ、場所、またはアプリケーションの種類別に、アプリケーションポートフォリオを組み立てられます。ポートフォリオ内の残りのアプリケーションとは別に、グループ内のアプリケーションを簡単に確認したりレポートを作成したりできます。グループに全体的な1つのRAG状態は割り当てられず、レポートに個別の項目としては表示されません。

AppDNAの用語のさらに詳しい用語集については、「[AppDNA用語集](#)」を参照してください。

データのロード

Oct 16, 2015

管理対象アプリケーションの状態を事業部や部門別などで表示する組織レポート機能を使用するには、最初にActive Directory (AD) およびSystem Center Configuration ManagerのデータをAppDNAにロードする必要があります。

AppDNAのADおよびConfigMgrデータのロードウィザードを使用すると、ADおよびConfiguration Managerからデータを直接または間接にロードできます。間接オプションには、AppDNAから独立して実行できるツールのダウンロードが含まれます。たとえば、Configuration Manager管理者はConfiguration Managerサーバーでそのツールを実行できます。これは、AppDNAマシンからこの操作を行うために必要な資格情報がない場合に便利です。

ADおよびConfiguration Managerのデータは読み取り専用のAPIを使用して抽出されます。つまり、ADまたはConfiguration Managerのデータは変更されません。

Active Directoryからデータを抽出するときは、AppDNAにロードする組織単位を選択します。関連付けられているすべてのADグループ、ユーザー、コンピューター、およびADからこれらのエンティティに展開されているアプリケーションの展開情報が、自動的に抽出された後でAppDNAデータベースにロードされます。複数のドメイン（たとえば、フォレストに属しているすべてのドメイン）からデータを抽出する場合は、各ドメインに対してウィザードを実行する必要があります。

Configuration Managerからデータを抽出するときは、前回の抽出以降の関連する変更をすべて自動的に抽出するか、ロードするパッケージとアプリケーションを（個別にまたはまとめて）選択するかを選択できます。この操作により、選択したパッケージとアプリケーションおよび関連するすべてのConfiguration Managerコレクション、ユーザー、およびコンピューターが、展開情報と共に抽出されてロードされます。削除されたパッケージまたはアプリケーションが含まれる場合、対応するConfiguration ManagerデータがAppDNAデータベースから削除されます。ただし、関連付けられているアプリケーションがAppDNAにインポート済みの場合は、削除されたConfiguration Managerエンティティへのリンクは削除されますが、そのアプリケーションはAppDNAに保持されます。

注：

- 最良の結果を得るために、Active DirectoryとConfiguration Managerの両方のデータをAppDNAにロードしてください。通常、Active Directoryは組織構造に関する豊富なデータを提供し、Configuration Managerは集中管理されているアプリケーションのデータを提供します。
- 大きなConfiguration Managerサイトからデータを抽出するときにはかなりの時間がかかります。ユーザーやデバイスの数が多いほど、処理にかかる時間が長くなります。大きなConfiguration Managerサイトからデータを抽出するときには、アプリケーションまたはパッケージ（またはその両方）のデータを2,000個ずつのバッチで抽出して、抽出を夜間に行うことをお勧めします（この場合、大きなConfiguration Managerサイトとは、パッケージとアプリケーションの合計数が5,000を超えているか、ユーザーまたはコンピューターの合計数が50,000を超えている、またはその両方に当てはまるサイトです）。

Configuration Managerデータのロード

Oct 16, 2015

ここでは、1つの操作でSystem Center Configuration ManagerデータをAppDNAにロードする手順について説明します。

1. AppDNAのメニューで、 [Configure] 、 [AD & ConfigMgr] 、 [Load Data] の順に選択します。

ADおよびConfigMgrデータのロードウィザードが開きます。デフォルトではウィザードの[Load Type] ページが開きますが、前回AppDNAにログオンしてから既にこのウィザードを開いたことがある場合は、そのとき開いていたページが再び開きます。必要に応じて、 [Previous] をクリックして [Load Type] ページに戻ります。

2. [Load Type] ページで、 [System Center Configuration Manager (ConfigMgr)] を選択し、 [Next] をクリックします。
3. [ConfigMgr Connection Details] ページが開く場合は、次のように詳細を入力して、 [Next] をクリックします。

オプション	説明
サーバー	Configuration Managerサーバーのホスト名またはIPアドレスを入力します。
サイト	Configuration Managerのサイトコードを入力します。複数のサイトからデータを抽出する場合は、各サイトに対してウィザードを実行する必要があります。
ユーザー名	このツールをConfiguration Managerサーバーで実行する場合は空白のままにします。それ以外の場合は、Configuration Managerサーバーへの接続に使用するユーザー名を指定します。空白のままにすると、ログオンしているWindowsユーザーの資格情報が使用されます。ユーザー名を指定する場合、通常は、ドメインで修飾されたユーザー名 (domain\username) を使用します。
Password	ユーザー名を入力した場合はここでパスワードを指定します。

このページは、初めてこのウィザードを使用してConfiguration Managerデータの直接ロードを実行するときのみ開きます。後で詳細を変更する必要がある場合は、 [Previous] をクリックして [Load Type] ページに戻ります。その後、メニューから [Edit] 、 [Settings] の順に選択し、「[Configuration Managerの設定](#)」で説明されている詳細を変更してから続行します。

4. [Extraction Mode] ページで、次のいずれかのオプションを選択します。

オプション	説明
標準設定	前回データを抽出してからConfiguration Managerで行われた関連する変更をすべて自動的に抽出するにはこのオプションを選択します。
詳細設定	抽出するConfiguration Managerのパッケージとアプリケーションを手動で選択するにはこのオプションを選択します。大きなConfiguration Managerサイト (パッケージとアプリケーションの合計数が5,000を超えているか、ユーザーまたはコンピューターの合計数が50,000を超えている (またはその両方に当てはまる) サイト) から初めてデータを抽出するときには、このオプションを使用して、アプリケーション、パッケージ、またはその両方をバッチで抽出します (アプリケーションとパッケージをそれぞれ1,000個ずつ抽出するなど)。

5. [Next] をクリックします。
6. [Advanced] を選択した場合は、[Advanced Selection] ページで、AppDNAにロードするために抽出するパッケージ、アプリケーション、またはその両方を選択します（このページについて詳しくは、「[ConfigMgr用の詳細な選択](#)」を参照してください）。選択するアプリケーションとパッケージは、合計2,000個以内に抑えることをお勧めします。次に [Next] をクリックします。
(このページは、[Extraction Mode] ページで [Standard] を選択した場合には開きません。)
7. [Summary] ページで詳細を確認し、[Next] をクリックして操作を開始します。
進行状況を示す情報が表示されます。含まれるデータの量によってはかなりの時間がかかります（数時間かかる場合もあります）。その間にAppDNAでほかのタスクを実行するのは構いませんが、操作が完了するまでAppDNAを終了したり、ご使用のコンピューターやAppDNAサーバーコンピューターの電源を切ったりしないでください。
8. [Progress] ページに操作の完了が示されたら、[Finish] をクリックします。

別のConfiguration Managerサイトからデータをロードする場合は、次のサイトに対して前記の手順を繰り返します。

Active Directoryデータのロード

Oct 16, 2015

ここでは、1つの操作でActive Directory (AD) データをAppDNAにロードする手順について説明します。

1. AppDNAのメニューで、[Configure]、[AD & ConfigMgr]、[Load Data] の順に選択します。
ADおよびConfigMgrデータのロードウィザードが開きます。デフォルトではウィザードの[Load Type] ページが開きますが、前回AppDNAにログオンしてから既にこのウィザードを開いたことがある場合は、そのとき開いていたページが再開します。必要に応じて、[Previous] をクリックして [Load Type] ページに戻ります。
2. [Load Type] ページで、[Active Directory (AD)] を選択し、[Next] をクリックします。
3. [Active Directory Connection Details] ページが開く場合は、次のように詳細を入力して、[Next] をクリックします。

オプション	説明
Domain controller	Active Directoryドメインの名前を入力します。空白のままにすると、現在のマシンが接続されているドメインが自動的に使用されます。複数のドメイン（たとえば、フォレストに属しているすべてのドメイン）からデータを抽出する場合は、各ドメインに対してウィザードを実行する必要があります。
ユーザー名	Active Directoryへの接続に使用するユーザー名を指定します。空白のままにすると、ログオンしているWindowsユーザーの資格情報が使用されます。
Password	ユーザー名を入力した場合はここでパスワードを指定します。

このページは、初めてこのウィザードを使用してActive Directoryデータの直接ロードを実行するときのみ開きます。後で詳細を変更する必要がある場合は、[Previous] をクリックして [Load Type] ページに戻ります。その後、メニューから [Edit]、[Settings] の順に選択し、「[Active Directoryの設定](#)」で説明されている詳細を変更してから続行します。

4. [Organizational Units (OUs)] ページで、AppDNAにロードするために抽出するOUを選択します。通常は、ADを使用してアプリケーションが展開されているOUか、Configuration Managerを使用してアプリケーションが展開されているユーザーおよびデバイスを含むOUを選択します。
デフォルトでは、OUを選択すると自動的に下位OUも選択されます。この動作を変更するには、[Automatically select nested OUs] チェックボックスをオフにします。
5. [Next] をクリックします。
6. [Summary] ページで詳細を確認し、[Next] をクリックして操作を開始します。
進行状況を示す情報が表示されます。含まれるデータの量によってはかなりの時間がかかります（数時間かかる場合もあります）。その間にAppDNAでほかのタスクを実行するのは構いませんが、操作が完了するまでAppDNAを終了したり、お使いのコンピューターやAppDNAサーバーコンピューターの電源を切ったりしないでください。
7. [Progress] ページに操作の完了が示されたら、[Finish] をクリックします。

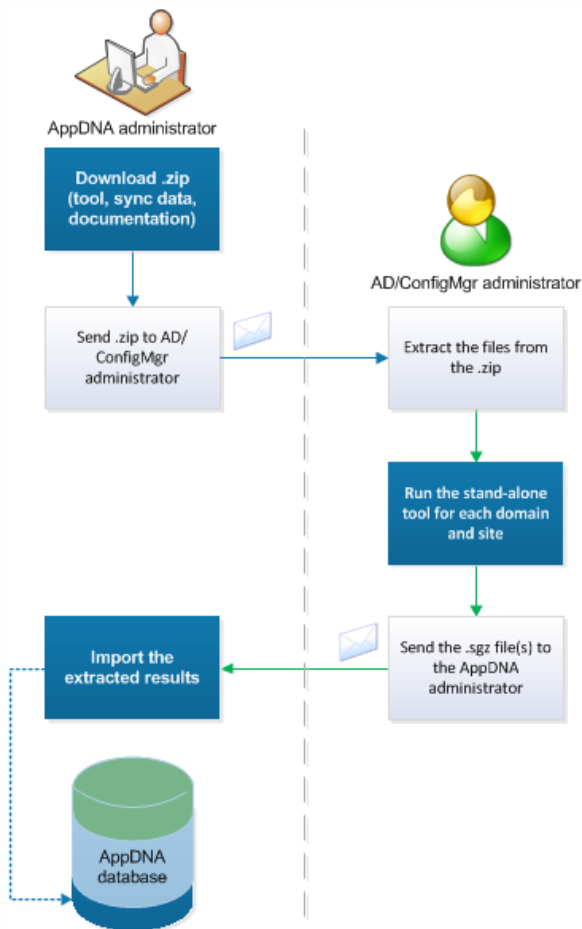
別のドメインからデータをロードする場合は、次のドメインに対して前記の手順を繰り返します。

Active DirectoryおよびConfiguration Managerのデータの の間接ロード

Oct 16, 2015

Active DirectoryおよびConfiguration Managerのデータを間接的にロードする場合は、AppDNAを使用せずにActive Directoryドメインコントローラー上またはConfiguration Managerサーバー上でデータを抽出できます。つまり、AppDNAユーザーにActive DirectoryやConfiguration Managerデータへのアクセス権を付与したり、Active DirectoryやConfiguration Managerの管理者がAppDNAをインストールしたりする必要はありません。

次の図は、手順の概要を示しています。



1. AppDNAのメニューで、[Configure]、[AD & ConfigMgr]、[Load Data]の順に選択します。
ADおよびConfigMgrデータのロードウィザードが開きます。デフォルトではウィザードの[Load Type]ページが開きますが、前回AppDNAにログオンしてから既にこのウィザードを開いたことがある場合は、そのとき開いていたページが再び開きます。必要に応じて、[Previous]をクリックして[Load Type]ページに戻ります。
2. [Load Type]ページで[Indirect Load]を選択し、[Next]をクリックします。
3. [Indirect Load]ページで、[Download]をクリックして.zipファイルを適切な場所に保存します。
この.zipファイルには、スタンドアロンの抽出ツール、同期データ、ツールの実行に関するドキュメント(.pdfファイル)が含まれています。
4. スタンドアロン抽出ツールを実行するユーザーに、このツールの.zipファイルを送ります。通常、Active Directoryまたは

Configuration Managerの管理者がこのツールを実行します。 .zipファイルの送信には、メール、FTP、共有ネットワークドライブ経由など、任意の方法を使用できます。

5. 管理者は、この抽出ツールを実行してデータを抽出します。
ツールの実行方法については、「[AppDNA ADおよびConfigMgrデータ抽出ツール](#)」またはダウンロードした.zipファイルに含まれるPDFファイルを参照してください。
6. ツールを実行した後、管理者は生成された.sgzファイルをAppDNAユーザーに送ります。
7. [Indirect Load] ページに戻り、 [Import the extracted data] の [Browse] をクリックします。
8. [Open] ダイアログボックスで、AppDNAにロードする抽出されたデータを含む.sgzファイルを選択して、 [Open] をクリックします。
9. [Next] をクリックします。
10. [Summary] ページで詳細を確認し、 [Next] をクリックして操作を開始します。
進行状況を示す情報が表示されます。含まれるデータの量によってはかなりの時間がかかります（数時間かかる場合もあります）。その間にAppDNAでほかのタスクを実行するのは構いませんが、操作が完了するまでAppDNAを終了したり、ご使用のコンピューターやAppDNAサーバーコンピューターの電源を切ったりしないでください。
11. [Progress] ページに操作の完了が示されたら、 [Finish] をクリックします。
12. Active DirectoryまたはConfiguration Managerの管理者が抽出した.sgzファイルが複数ある場合は、各ファイルについて手順7.~11.を繰り返します。

リファレンス

Oct 16, 2015

このセクションでは、ADおよびConfigMgrデータのロードウィザード、スタンドアロンツール、Active DirectoryおよびConfigMgrの設定用ダイアログボックスの詳しい参考ドキュメントを参照できます。

- [ADおよびConfigMgrデータのロードウィザード](#)
- [AD and ConfigMgr Data Extraction Tool](#)
- [Active Directoryの設定](#)
- [Configuration Managerの設定](#)

ADおよびConfigMgrデータのロードウィザード

Oct 16, 2015

ADおよびConfigMgrデータのロードウィザードを使用すると、Active Directory (AD) とSystem Center Configuration ManagerのデータをAppDNAにインポートすることができます。このウィザードは多数のページで構成されています。次に、各ページのオプションについて見出しごとに分けて説明します。

ADおよびConfigMgrデータのロードウィザードを開くには：

- メニューで、 [Configure] 、 [AD & ConfigMgr] 、 [Load Data] の順に選択します。

[Load Type] ページは、このウィザードの最初のページです（ウィザードを途中で中断した後に再開した場合は、中断したときのページが開きます。その場合、このページに戻るには [Previous] をクリックします）。

このページでは、実行するロードの種類を選択します。使用できるオプションは、次のとおりです。

Active Directory (AD) – Active Directoryデータの直接ロードを実行するにはこのオプションを選択します。この場合、データの抽出とAppDNAへのロードが1回の操作で行われます。

System Center Configuration Manager (ConfigMgr) – Configuration Managerデータの直接ロードを実行するには、このオプションを選択します。この場合、Configuration Managerからのデータの抽出とAppDNAへのロードが1回の操作で行われます。

Indirect – Configuration ManagerまたはActive Directory（またはその両方）からのデータの抽出を別のマシン（Configuration Managerサーバー、Active Directoryドメインコントローラーなど）で行うには、このオプションを選択します。適切な資格情報がないために自分で抽出を実行できない場合に便利です。このオプションを使用する場合は、まず、抽出ツール、同期データ、およびドキュメントを含む.zipファイルをダウンロードして、Configuration Managerの管理者などに送信します。その後、ファイルを送信した相手からツールの実行結果が送られてきたら、再びこのオプションを使用してその結果をAppDNAにロードします。

[Next] をクリックして次のページに進みます。

[AD Connection Details] ページでは、Active Directoryドメインコントローラーと、そのドメインコントローラーへの接続に使用する資格情報を指定します。このページは、初めてこのウィザードを使用してActive Directoryデータの直接ロードを実行するときのみ開きます。その後このウィザードを使用するときの詳細を変更するには、「[Active Directoryの設定](#)」を参照してください。

使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Domain controller** – Active Directoryドメインの名前を入力します。空白のままにすると、AppDNAマシンが接続されているドメインが自動的に使用されます。
- **Username** – Active Directoryドメインへの接続に使用するユーザー名を指定します。空白のままにすると、ログオンしているWindowsユーザーアカウントの資格情報が使用されます。いずれの場合も、そのドメインの有効なユーザーである必要があります。
- **Password** – ユーザー名を指定した場合はここでパスワードを入力します。

[Next] をクリックして次のページに進みます。

[Organizational Units (OUs)] ページには、選択したドメインのOUが表示されます（ウィザードで [AD Connection Details] ページが開かなかった場合にドメインを変更するには、続行する前に、[Previous] をクリックして[Active Director の設定](#)で新しいドメイン名を入力します）。

AppDNAにロードするために抽出するOUを選択します。通常は、ADを使用してアプリケーションが展開されているOUか、Configuration Managerを使用してアプリケーションが展開されているユーザーおよびデバイスを含むOUを選択します。

デフォルトでは、OUを選択すると自動的に下位OUも選択されます。同様に、OUのチェックボックスをオフにするとデフォルトで下位OUのチェックボックスも自動的にオフになります。この動作を変更するには、[Automatically select nested OUs] チェックボックスをオフにします。

[Next] をクリックして次のページに進みます。

[ConfigMgr Connection Details] ページでは、Configuration Managerサーバーおよびサイトと、それらへの接続に使用する資格情報を指定します。このページは、初めてこのウィザードを使用してConfiguration Managerデータの直接ロードを実行するときのみ開きます。その後このウィザードを使用するときには詳細を変更するには、「[ConfigMgrの設定](#)」を参照してください。

使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Server** – Configuration Managerサーバーのホスト名またはIPアドレスを入力します。
- **Site** – Configuration Managerのサイトコードを入力します。
- **Username** – Configuration Managerサーバーへの接続に使用するユーザー名を指定します。空白のままにすると、ログオンしているWindowsユーザーアカウントの資格情報が使用されます。ユーザー名を指定する場合、通常は、ドメインで修飾されたユーザー名 (<domain>\<username>) を使用します。
Configuration Managerサーバーで抽出を実行する場合は [Username] ボックスと [Password] ボックスを空白のままにする必要があります。
- **Password** – ユーザー名を指定した場合はここでパスワードを入力します。

[Next] をクリックして次のページに進みます。

[Extraction Mode] ページは、Configuration Managerデータの抽出にのみ適用されます。使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Standard** – 前回Configuration Managerデータをロードしてから行われた関連する変更をすべて自動的に抽出するにはこのオプションを選択します。
- **Advanced** – AppDNAにロードするアプリケーションとパッケージを手動で選択するにはこのオプションを選択します。

重要：大きなConfiguration Managerサイトから初めてデータを抽出するときには、[Advanced] オプションを使用して、アプリケーション、パッケージ、またはその両方をバッチで抽出する（アプリケーションとパッケージをそれぞれ1,000個ずつ抽出するなど）ことをお勧めします（この場合、大きなConfiguration Managerサイトとは、パッケージとアプリケーションの合計数が5,000を超えているか、ユーザーまたはコンピューターの合計数が50,000を超えている、またはその両方に当てはまるサイトです）。

[Next] をクリックして次のページに進みます。

[Advanced] 抽出モードを選択した場合は、[Advanced Selection] ページを使用して、選択したConfiguration Managerサイトから抽出してAppDNAにロードするアプリケーションやパッケージを選択します（ウィザードで [ConfigMgr Connection Details] ページが開かなかった場合にサーバーとサイトの組み合わせを変更するには、続行する前に、[Previous] をクリックして [Load Type] ページに戻り、[\[Configuration Manager settings\]](#) で新しいドメイン名を入力します）。

注：同時に抽出することを目的として選択するアプリケーションとパッケージの数は、合計2,000個以内に抑えることをお勧めします。

このページの機能について詳しくは、「[ConfigMgr用の詳細な選択](#)」を参照してください。

[Next] をクリックして次のページに進みます。

[Indirect Load] ページには、間接ロードのアプローチの手順の概要が表示されます。次の3つの手順があります。

手順1. [Download] をクリックして、抽出ツール、同期データ、およびドキュメントを含む.zipファイルをダウンロードします。

手順2. 手順1でダウンロードした.zipファイルをActive DirectoryまたはConfiguration Managerの管理者に送信します。ファイルを受け取った管理者は、ツールを実行して、Configuration ManagerまたはActive Directory（またはその両方）からデータを抽出します。ツールの実行に関するドキュメントが.zipファイルに含まれています。抽出が完了すると、ツールによって.sgzファイルが生成されます。管理者はそのファイルを送り返します。

手順3. [Browse] をクリックして手順2の.sgzファイルを選択し、[Next] をクリックして結果をAppDNAにロードします。

[Summary] ページには、AppDNAにロードするように選択した項目の概要が表示されます。詳細を確認し、[Next] をクリックして抽出処理を開始します。抽出するデータの量によってはかなりの時間がかかります（数時間かかる場合もあります）。

[Progress] ページには、選択した項目の抽出およびAppDNAへのロードの状態に関する情報が表示されます。

ConfigMgr用の詳細な選択

Oct 16, 2015

[Advanced] 抽出モードを使用する場合は、[Advanced Selection] ページを使用して、選択したConfigMgrサイトから抽出してAppDNAにロードするアプリケーションやパッケージを選択します。

注：ConfigMgrサイトに含まれているパッケージやアプリケーションの数が非常に多い場合は、それらがすべて表示されるまでに時間がかかりますが、このページは、すべての項目の表示が完了する前に使用できます。目的のパッケージやアプリケーションが表示されたら、[Cancel] をクリックしてそれ以上の項目の表示処理を中止します。

このページの上部には、AppDNAにロードするパッケージとアプリケーションを選択しやすくする機能が用意されています。以下にその詳細を示します。

- **Selection** – このオプションを選択すると、このセクションのチェックボックスを使用して、追加、変更、または削除されたすべてのパッケージやアプリケーションや、前回データを抽出してから変更されていないすべてのパッケージやアプリケーションを、選択したり選択解除したりすることができます。デフォルトでは、[Not loaded/New] チェックボックスと [Modified] チェックボックスがオンになっています。
- **Batching** – このオプションを選択すると、現在のタブに表示されている上位の項目が自動的に選択されて、そのほかの項目の選択が解除されます。ConfigMgrの展開規模が非常に大きい場合にデータをバッチで抽出するのに便利です（ウィザードをバッチごとに1回ずつ、複数回実行する必要があります）。デフォルトでは100項目が選択されていますが、変更できます。
- **Searching & filtering** – 指定した列で検索するテキストを入力できます。たとえば、「Adobe」と入力して [Manufacturer] 列を選択すると、製造元がAdobeであるアプリケーションがすべて抽出されます。日付の範囲を選択して、特定の期間に追加、変更、または削除された項目のみに一覧を絞り込むこともできます。
- **Group by** – このドロップダウンリストを使用すると、一覧の項目をいずれかの列の値でグループ化することができます。たとえば、[Manufacturer] を選択すると、同じ製造元のすべての項目がグループ化されます。

このページの下部には、パッケージとアプリケーションの一覧が表示されるタブがあります。これらのタブには、一覧の並べ替えやフィルターを簡単に行うことができる追加機能が用意されています。以下にそれらの機能の詳細を示します。

- **Packages** : (パッケージがない場合は表示されません) このタブには、ConfigMgrのパッケージおよびプログラム展開メカニズムを使用して展開できる管理対象アプリケーションが表示されます。このメカニズムは、AppDNAでサポートされているすべてのバージョンのConfigMgrで使用できます。
- **Applications** : (アプリケーションがない場合は表示されません) このタブには、ConfigMgrのアプリケーションモデルを使用して展開できる管理対象アプリケーションが表示されます。このメカニズムは、ConfigMgr 2012の新機能です。

AppDNAへロード、AppDNAで更新、または（事業部別や部門別に）レポートで状態を確認する必要がある管理対象アプリケーションに対応する、アプリケーションとパッケージを選択します。同時に抽出することを目的として選択するアプリケーションとパッケージの数は、合計2,000個以内に抑えることをお勧めします。

抽出するパッケージまたはアプリケーション（またはその両方）を選択したら、[Next] をクリックします。表示されて選択されているすべての項目が抽出されます。フィルターによって一覧から除外されている項目は無視されます。

注：

- [Packages] と [Applications] の両方のタブが表示されている場合は、両方のタブで表示されて選択されているすべての項目が抽出されます。
- 削除されたアプリケーションまたはパッケージを選択すると、抽出データをAppDNAにロードするときに対応するConfigMgrデータがAppDNAデータベースから削除されますが、関連するアプリケーションがAppDNAにインポート済みの場合、そのアプリケーションは保持されます。

1つまたは複数の列の値を指定して一覧の項目を絞り込むことができます。一覧を絞り込むことで管理しやすいサイズになるため、この機能はConfigMgrの展開規模が大きい場合に特に便利です。フィルターによって一覧から除外されている項目は、[Next] をクリックしたときに無視されます。

- 一覧のフィルターに使用する値を含む列の見出しの下にあるボックスをクリックします。ドロップダウンリストから、フィルターに使用する値を選択します。または、フィルターに使用する値をボックスに入力します。たとえば、名前が「A」で始まる項目のみに一覧を絞り込むことができます。
- 一覧をフィルター値と一致しない項目（または、フィルター値で始まらない項目など）に絞り込むには、ボックスの左側の [A] アイコンをクリックします。その後、ドロップダウンリストから、使用するオプションを選択します ([Starts with]、[Does not contain] など)。
- フィルターを解除するには、ボックスの右側のアイコンをクリックします。
- フィルターは、複数の列で設定できます。

一覧の並べ替えには、どの列のデータも使用できます。

1. 列見出しをクリックすると、その列の値の昇順で並べ替えが行われます。
2. 降順で並べ替えるには、列見出しを再クリックします。

任意の列のデータで、一覧内の項目をグループ化できます。たとえば、製造元、状態、最終更新日時で項目をグループ化できます。

- 列の見出し（[Status] など）を [Drag a column header here to group by that column] バーにドラッグします（または、[Group by] ボックスの一覧から見出しを選択します）。
- その列の値で項目がグループ化されます。たとえば、[Status] 列でグループ化すると、その列の値が [New] であるすべての項目がグループ化されます。
- 中の項目を表示するにはグループを展開します。
- 並べ替え順序を逆にするには、項目のグループ化に使用している列の見出しをクリックします。
- 項目のグループ化をやめるには、列見出しを見出しバーにドラッグして戻します。ほかの列見出しの前または後に列見出しを配置する必要があります。または、[Group by] ボックスの一覧から [None] を選択します。

注：列見出しをドラッグして、列の順序を変更することもできます。

AD and ConfigMgr Data Extraction Tool

Oct 16, 2015

AppDNAのAD and ConfigMgr Data Extraction Tool (ADおよびConfigMgrデータ抽出ツール) はスタンドアロンのウィザードで、このウィザードを使用すると、AppDNAにロードするデータをActive Directory (AD) およびSystem Center Configuration Managerから抽出できます。このツールでは、読み取り専用APIを使用してADおよびConfiguration Managerからデータを抽出します。抽出ツールを使用しても、サーバー上のADまたはConfiguration Managerデータが変更されることはありません。

このツールは、AppDNAにロードするADおよびConfiguration Managerデータのサブセットを抽出します。AppDNAへのロードが完了すると、アプリケーション展開情報を使用して、管理対象アプリケーションをAppDNAにインポートできます。AppDNA内部でアプリケーションを分析した後、管理対象アプリケーションの互換性状態を、たとえば事業部または部署ごとに表示できます。

注：

- 最良の結果を得るために、Active DirectoryとConfiguration Managerの両方のデータをAppDNAにロードしてください。通常、Active Directoryは組織構造に関する豊富なデータを提供し、Configuration Managerは集中管理されているアプリケーションのデータを提供します。
- 大きなConfiguration Managerサイトからデータを抽出するときにはかなりの時間がかかります。ユーザーやデバイスの数が多いほど、処理にかかる時間が長くなります。大きなConfiguration Managerサイトからデータを抽出するときには、アプリケーションまたはパッケージ (またはその両方) のデータを2,000個ずつのバッチで抽出して、抽出を夜間に行うことをお勧めします (この場合、大きなConfiguration Managerサイトとは、パッケージとアプリケーションの合計数が5,000を超えているか、ユーザーまたはコンピューターの合計数が50,000を超えている、またはその両方に当てはまるサイトです)。

Active Directoryからのデータの抽出

Oct 16, 2015

このトピックでは、スタンドアロンのAppDNA ADおよびConfigMgrデータ抽出ツールを使用して、AppDNAにロードするためのデータをActive Directory (AD) から抽出する方法について説明します。

このトピックは、AppDNAの管理者からADConfigMgrExportTool.zipパッケージを受け取ってファイルシステムの適切な場所に保存したことを前提としています。

1. エクスプローラーで、ADConfigMgrExportTool.zipパッケージを見つけます。
2. ADConfigMgrExportTool.zipパッケージを右クリックして、[すべて展開] を選択します。
3. [圧縮 (ZIP形式) フォルダの展開] ダイアログボックスで、適切な場所を選択して [展開] をクリックします。
4. 展開が完了したら、エクスプローラーで、展開されたファイルを含むフォルダーに移動します。
5. ADSCCMExportTool.exeファイルをダブルクリックします。
ウィザードが起動します。
6. ウィザードの [Source Selection] ページで、 [Active Directory (AD)] を選択し、 [Next] をクリックします。
7. [Active Directory Connection Details] ページで、次のように詳細を入力します。

オプション	説明
Domain controller	Active Directoryドメインの名前を入力します。空白のままにすると、現在のマシンが接続されているドメインが自動的に使用されます。複数のドメイン (たとえば、フォレストに属しているすべてのドメイン) からデータを抽出する場合は、各ドメインに対してウィザードを実行する必要があります。
ユーザー名	Active Directoryへの接続に使用するユーザー名を指定します。空白のままにすると、ログオンしているWindowsユーザーの資格情報が使用されます。
Password	ユーザー名を入力した場合はここでパスワードを指定します。

8. [次へ] をクリックします。
9. [Organizational Units (OUs)] ページで、AppDNAにロードするために抽出するOUを選択します。通常は、ADを使用してアプリケーションが展開されているOUか、Configuration Managerを使用してアプリケーションが展開されているユーザーおよびデバイスを含むOUを選択します。
デフォルトでは、OUを選択すると自動的に下位OUも選択されます。この動作を変更するには、[Automatically select nested OUs] チェックボックスをオフにします。
10. [次へ] をクリックします。
11. [Summary] ページで詳細を確認し、 [Next] をクリックします。
12. [Save As] ダイアログボックスで、抽出データの適切な名前と場所を入力し、 [Save] をクリックします。
注：ファイルの拡張子が.sgzであることを確認してください。
データの抽出が開始されて、進行状況を示す情報が表示されます。抽出するデータの量によってはかなりの時間がかかります (数時間かかる場合もあります)。
13. [Progress] ページに操作の完了が示されたら、 [Finish] をクリックします。
14. 別のドメインからデータを抽出する場合は、次のドメインに対して手順5.~13.を繰り返します。

抽出したデータが含まれる.sgzファイルを、AppDNAへロードするためにAppDNA管理者に送ります。

ConfigMgrからのデータの抽出

Oct 16, 2015

このトピックでは、スタンドアロンのAppDNA ADおよびConfigMgrデータ抽出ツールを使用して、AppDNAにロードするためのデータをConfiguration Managerから抽出する手順について説明します。

このトピックは、AppDNAの管理者からADConfigMgrExportTool.zipパッケージを受け取ってファイルシステムの適切な場所に保存したことを前提としています。

重要：パッケージには、Configuration Managerデータに対する最新の変更を特定するために使用される同期データも含まれます。したがって、サイトからConfiguration Managerデータを抽出するたびに新しいパッケージが必要です。必要な場合は、AppDNA管理者に新しいパッケージを要求してください。

1. エクスプローラーで、ADConfigMgrExportTool.zipパッケージを見つけます。
2. ADConfigMgrExportTool.zipパッケージを右クリックして、[すべて展開]を選択します。
3. [圧縮 (ZIP形式) フォルダーの展開] ダイアログボックスで、適切な場所を選択して[展開]をクリックします。
4. 展開が完了したら、エクスプローラーで、展開されたファイルを含むフォルダーに移動します。
5. ADSCCMExportTool.exeファイルをダブルクリックします。
ウィザードが起動します。

6. ウィザードの [Source Selection] ページで、[System Center Configuration Manager (ConfigMgr)] を選択し、[Next] をクリックします。
7. [ConfigMgr Connection Details] ページで、次のように詳細情報を入力します。

オプション	説明
サーバー	Configuration Managerサーバーのホスト名またはIPアドレスを入力します。
サイト	Configuration Managerのサイトコードを入力します。複数のサイトからデータを抽出する場合は、各サイトに対してウィザードを実行する必要があります。
ユーザー名	このツールをConfiguration Managerサーバーで実行する場合は空白のままにします。それ以外の場合は、Configuration Managerサーバーへの接続に使用するユーザー名を指定します。空白のままにすると、ログオンしているWindowsユーザーの資格情報が使用されます。ユーザー名を指定する場合、通常は、ドメインで修飾されたユーザー名 (domain\username) を使用します。
Password	ユーザー名を入力した場合はここでパスワードを指定します。

8. [Next] をクリックします。
9. [Extraction Mode] ページで、次のいずれかのオプションを選択します。

オプション	説明
標準設定	前回データを抽出してからConfiguration Managerで行われた関連する変更をすべて自動的に抽出するにはこのオプションを選択します。

詳細設定オプション	抽出するConfiguration Managerのパッケージとアプリケーションを手動で選択するにはこのオプションを選択します。大きなConfiguration Managerサイト（パッケージとアプリケーションの合計数が5,000を超えているユーザーまたはコンピューターの合計数が50,000を超えている（またはその両方に当てはまる）サイト）から初めてデータを抽出するときには、このオプションを使用して、アプリケーション、パッケージ、またはその両方をバッチで抽出します（アプリケーションとパッケージをそれぞれ1,000個ずつ抽出するなど）。
-----------	---

10. [Next] をクリックします。
11. [Advanced] を選択した場合は、[Advanced Selection] ページで、AppDNAにロードするために抽出するパッケージ、アプリケーション、またはその両方を選択します（このページについて詳しくは、「[ConfigMgr用の詳細な選択](#)」を参照してください）。選択するアプリケーションとパッケージは、合計2,000個以内に抑えることをお勧めします。次に [Next] をクリックします。
(このページは、[Extraction Mode] ページで [Standard] を選択した場合には開きません。)
12. [Summary] ページで詳細を確認し、[Next] をクリックします。
13. [Save As] ダイアログボックスで、抽出データの適切な名前と場所を入力し、[Save] をクリックします。
注：ファイルの拡張子が.sgzであることを確認してください。
データの抽出が開始されて、進行状況を示す情報が表示されます。抽出するデータの量によってはかなりの時間がかかります（数時間かかる場合もあります）。
14. [Progress] ページに操作の完了が示されたら、[Finish] をクリックします。
15. 別のデータバッチを抽出する場合、または別のConfiguration Managerサイトのデータを抽出する場合は、次のサイトに遷して手順5.~14.を繰り返します。

抽出したデータが含まれる.sgzファイルを、AppDNAへロードするためにAppDNA管理者に送ります。

Active Directoryの設定

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスには、AppDNAの全般的なオプションが含まれます。 [Settings] ダイアログボックスを開くには、メニューから [Edit]、 [Settings] の順に選択します。

Active Directory (AD) からデータを抽出するための接続の詳細を入力するには、 [Settings] ダイアログボックスの [Active Directory] ページを使用します。

使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Domain controller** – Active Directoryドメインの名前を入力します。空白のままにすると、AppDNAマシンが接続されているドメインが自動的に使用されます。
- **Username** – Active Directoryドメインへの接続に使用するユーザー名を指定します。空白のままにすると、ログオンしているWindowsユーザーアカウントの資格情報が使用されます。いずれの場合も、そのドメインの有効なユーザーである必要があります。
- **Password** – ユーザー名を指定した場合はここでパスワードを入力します。

接続の詳細を確認するには、 [Test] をクリックします。

[Save] をクリックして変更を保存します。

Configuration Managerの設定

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスには、AppDNAの全般的なオプションが含まれます。 [Settings] ダイアログボックスを開くには、メニューから [Edit] 、 [Settings] の順に選択します。

[Settings] ダイアログボックスの [ConfigMgr] ページを使用して、System Center Configuration Managerからデータを抽出するための接続の詳細を入力します。

使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Server** – Configuration Managerサーバーのホスト名またはIPアドレスを入力します。
- **Site** – Configuration Managerのサイトコードを入力します。
- **Username** – Configuration Managerサーバーへの接続に使用するユーザー名を指定します。空白のままにすると、ログオンしているWindowsユーザーアカウントの資格情報が使用されます。ユーザー名を指定する場合、通常は、ドメインで修飾されたユーザー名 (domain\username) を使用します。
Configuration Managerサーバーで抽出を実行する場合は [Username] ボックスと [Password] ボックスを空白のままにする必要があります。
- **Password** – ユーザー名を指定した場合はここでパスワードを入力します。

接続の詳細を確認するには、 [Test] をクリックします。

[Save] をクリックして変更を保存します。

管理対象アプリケーションのインポート

Oct 16, 2015

Active DirectoryまたはConfiguration Managerを通じて展開したときに使用したインストールメディアを使用して、管理対象アプリケーションをAppDNAにインポートします。

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Managed Applications] の順に選択します。
2. [Managed Applications] 画面の一覧で、インポートするアプリケーションを選択します。
適切なインストールを選択したこと、修復またはアンインストールのインストールを選択していないことを確認します。
一つのパッケージに複数のインストールがある場合は、そのうちの1つのみ、なるべくなら展開済みのもの（ [Users] 列または [Computers] 列の件数が0より大きいインストール）を選択したことを確認します。
3. 必要に応じてツールバーのオプションを選択します。
実行プロファイルは、Install Captureによるインポートでのみ使用されます。MSIパッケージの場合は、そのMSIを直接インポートした方がInstall Captureを使用するよりも短時間で簡単にインポートできます。MSIではないパッケージは、常にInstall Captureを使用してインポートします。
4. ツールバーの [Add to import list] をクリックします。
[Import Applications] 画面が開きます。インポートのために選択したMSIパッケージは [Direct Import] タブに一覧表示されます。インポートのために選択したMSIではないパッケージは [Install Capture] タブに一覧表示されます。
5. アプリケーションをインポートする準備ができたなら、 [Import] をクリックします

インストールが標準の名前（「Per-system attended」など）を持つ場合は、一覧をインストールごとにグループ化すると便利な場合があります。これを行うには、一覧の上にある [Drag a column header here to group by that column] 領域に [Installation] 列をドラッグします。これにより、一覧がインストール名ごとにグループ化されます。

インストールのパッケージを表示するには、グループを開きます。次に、使用するインストールの種類を選択します。Per-system unattendedやPer-user unattendedのような複数のインストールを使用して展開されているパッケージが存在する可能性があることに注意してください。

アプリケーションをインストールの種類に基づいてグループ化して選択したら、[Package] 列でグループ化して複数のインストールが選択されていないことを確認できます。直接インポートでインポートされるアプリケーションは、選択したインストールの数にかかわらず1回のみインポートされます。ただし、Install Captureでインポートされるアプリケーションは、各インストールが個別にインストールされます

管理対象アプリケーションのインポート

Oct 16, 2015

ここでは、Active DirectoryまたはConfigMgrの管理対象アプリケーションをインポートする手順について説明します。

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Managed Applications] の順に選択します。
2. [Managed Applications] 画面で、インポートする管理対象アプリケーションを選択します。
適切なインストールを選択したこと、修復またはアンインストールのインストールを選択していないことを確認します。
一つのパッケージに複数のインストールがある場合は、そのうちの1つのみ、なるべくなら展開済みのもの（ [Users] 列または [Computers] 列の件数が0より大きいインストール）を選択したことを確認します。
3. ツールバーで必要なオプションを選択します。
 - **Execution Profile** - 実行プロファイルはInstall Captureのインポートにのみ使用します。デフォルトの実行プロファイルはSnapshotと呼ばれます。詳しくは、「[Install Captureのオプション](#)」を参照してください。
 - **Use direct MSI Import** - MSIパッケージを直接インポートする場合は、このチェックボックスをオンにします。この設定は有効にすることをお勧めします。MSIパッケージを直接インポートする代わりにInstall Captureを使用する場合は、このチェックボックスをオフにします。Install CaptureよりMSIの直接インポートのほうが高速で単純なため、これはお勧めのオプションではありません。MSIではないパッケージは、常にInstall Captureを使用してインポートします。Install Capture用システムの構成については、「[Install Capture](#)」を参照してください。
4. ツールバーの [Add to import list] をクリックします。
[Import Applications] ページが開きます。インポートのために選択したMSIパッケージは[Direct Import] タブに一覧表示されます。インポートのために選択したMSIではないパッケージは [Install Capture] タブに一覧表示されます。
5. アプリケーションをインポートする準備ができたなら、ツールバーの[Import] をクリックします。
インポート処理について詳しくは、「[直接インポート](#)」を参照してください。

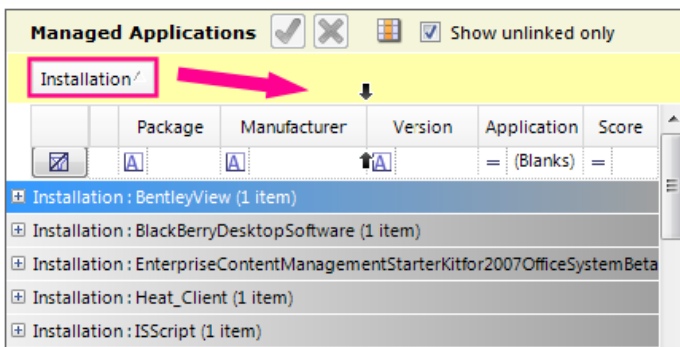
管理対象アプリケーションのリンク

Oct 16, 2015

Active DirectoryやConfiguration Managerで管理されるアプリケーションとAppDNAにインポート済みのアプリケーションとの関連付け（リンク）は、Active DirectoryおよびConfiguration Managerのデータの構成において重要です。これにより、Active DirectoryおよびConfiguration Managerのユーザー、コンピューター、グループ、および組織単位に対して展開されているアプリケーションの、RAG状態のレポートをAppDNAで作成できるようになります。 [Managed Applications] 画面および [Discover Applications] 画面でインポートした管理対象アプリケーションは、自動的にリンクされます。

管理対象アプリケーションをリンクするには、 [Configure] 、 [AD & ConfigMgr] 、 [Link Managed Applications] の順に選択します。

デフォルトでは、 [Link Managed Applications] 画面の左側に管理対象アプリケーションが表示され、右側にAppDNAにインポート済みのアプリケーションが表示されます。さらに、左側は [Installation] 列によってデフォルトでグループ化されます。一覧のグループ化を解除して、管理対象アプリケーションをフラットリストで表示した方がわかりやすい場合があります。これを行うには、 [Installation] ボックスを [Package] 列見出しと [Manufacturer] 列見出しの間にドラッグします。



後で [Installation] 列の値で再グループ化する場合は、 [Installation] 列見出しをドラッグして黄色のバーに戻します。

重要： 複数のインストールがある管理対象アプリケーションをリンクするときは、修復およびアンインストールのインストールを無視し、ほかのすべてのインストールを同じインポート済みアプリケーションにリンクします。

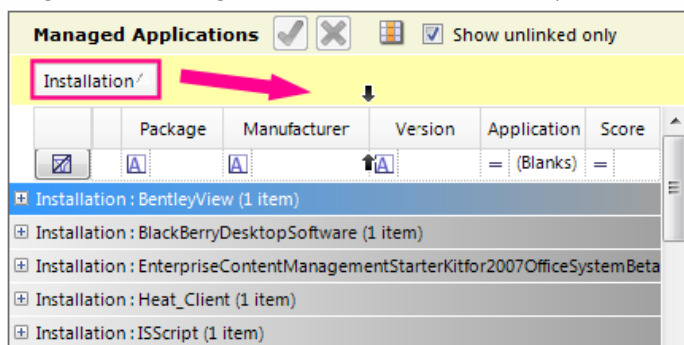
項目をクリックすると、画面下部にその項目の詳細情報が表示されます。

管理対象アプリケーションとインポート済みアプリケーションの自動マッチ

Oct 16, 2015

自動マッチ機能を使用すると、AppDNAにインポート済みのアプリケーションと管理対象アプリケーションを自動的に関連付けることができます。

1. AppDNAのメニューで、[Configure]、[AD & ConfigMgr]、[Link Managed Applications] の順に選択します。
2. [Link Managed Applications] 画面の左側中央に向かって [Installation] ボックスをドラッグし、[Package] 列と [Manufacturer] 列の見出しの間に配置します。



ここには、管理対象アプリケーションの一覧がフラットリストとして表示されます。

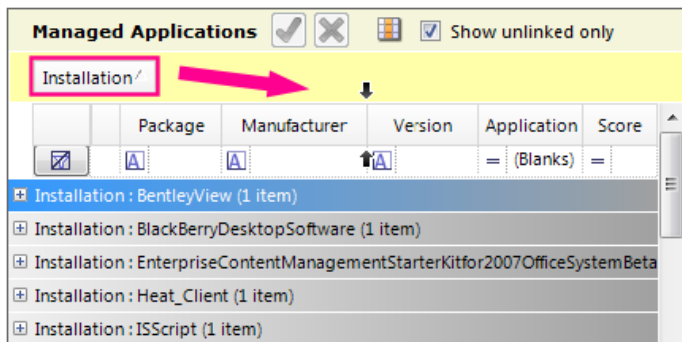
3. 上部の [Matching] セクションで、[Mode] ボックスの一覧から [Match: Managed to Imported] を選択します。
4. 使用する値を [Score threshold] に入力します。または、デフォルト値の20のままにします。
AppDNAでは、管理対象アプリケーションとインポート済みアプリケーションをマッチさせるための基準としてこの値が使用されます。各マッチフィールド（名前、製造元、バージョン、およびパス）に10ポイントを割り当てることによって、スコアが計算されます。右側のチェックボックスを使用して、マッチするフィールドを選択できます。
5. 左側の管理対象アプリケーションの一覧の上にある [Show unlinked only] チェックボックスをオフにします。
6. 右側のインポート済みアプリケーションの一覧の上にある [Show unlinked only] チェックボックスをオフにします。
7. [Find Matches] をクリックし、管理対象アプリケーションとインポート済みアプリケーションのマッチを開始します。マッチしたアプリケーションの名前が [Application] 列に、マッチスコアが [Score] 列に表示され、マッチスコアが [Score threshold] 以上の管理対象アプリケーションが選択されます。
 - スコアしきい値以上のスコアを持つマッチした管理対象アプリケーションがすべて自動的に選択されますが、必要であれば選択内容を手動で変更できます。
 - しきい値未満のマッチは選択されません。この場合、スコアを調査してマッチするかどうかを決定し、マッチする項目を手動で選択します。
8. マッチを確認し、必要に応じて選択を変更します。
9. 画面上部の [Save Associations] をクリックすると、選択したマッチが保存されます。

管理対象アプリケーションとインポート済みアプリケーションの手動マッチ

Oct 16, 2015

AppDNAにインポート済みのアプリケーションと管理対象アプリケーションを手作業で関連付けることもできます。

1. AppDNAのメニューで、 [Configure] 、 [AD & ConfigMgr] 、 [Link Managed Applications] の順に選択します。
2. [Link Managed Applications] 画面の左側中央に向かって [Installation] ボックスをドラッグし、 [Package] 列と [Manufacturer] 列の見出しの間に配置します。



ここには、管理対象アプリケーションの一覧がフラットリストとして表示されます。

3. 上部にある [Matching] セクションで、 [Mode] ボックスの一覧から [Match: Managed to Imported] を選択します。
4. 管理対象アプリケーションの一覧で、マッチさせる管理対象アプリケーションの隣のチェックボックスをオンにします。アプリケーションに複数のインストールがある場合、すべてのチェックボックスをオンにします。
5. インポートされたアプリケーションの一覧で、選択した管理対象アプリケーションとマッチさせるアプリケーションをクリックします。
6. 関連付けるには、画面の [Managed Applications] 側のツールバーにある緑のチェックマーク をクリックします。
[Show unlinked only] チェックボックスがオンの場合は、マッチした管理対象アプリケーションとインポート済みアプリケーションの両方が一覧に表示されなくなります。
7. 再び表示されるようにするには、画面の両側で [Show unlinked only] チェックボックスをオフにします。

Link Managed Applications

Save Associations Refresh Application Lists

Matching

Mode: Match: Managed to imported

Score threshold 20

Find Matches

Match name
 Match manufacturer
 Match version
 Match path

Managed Applications Show unlinked only

Drag a column header here to group by that column.

	Package	Manufacture	Installation	Version	Applicati
22	avast!...	Alwil	Per-user atte...	4.7	avast! A...
23	avast!...	Alwil	Per-user una...	4.7	avast! A...
24	avast!...	Alwil	Per-user uni...	4.7	avast! A...
25	BBC Tic...	BBC	Per-system a...	1.0.1.7	BBC Tic...
26	<input checked="" type="checkbox"/> BBC Tic...	BBC	Per-system u...	1.0.1.7	BBC Tic...
27	BBC Tic...	BBC	Per-system u...	1.0.1.7	BBC Tic...
28	BBC Tic...	BBC	Per-user atte...	1.0.1.7	BBC Tic...

Imported Applications Show unlinked only

Drag a column header here to group by that column.

	Application	Manufacturer	Version
4	<input checked="" type="checkbox"/> BBC Ticker	BBC	1.0.1.7
5	Corel PHOTO-PA...	Corel	6.0
6	Hardcopy Pro	Desksoft	2.21
7	Citrix ICA Client	Citrix Systems, Inc.	9.00
8	iPassConnect	Sirocom	3.10
9	IT2_(FSG)	SimCorp	5.204
10	Ixos	IXOS Software AG	5.0.0

マッチさせた管理対象アプリケーションとインポート済みアプリケーションが表示されるようになります。管理対象アプリケーションの [Application] 列にマッチしたアプリケーションの名前が表示されることに注意してください。

8. 関連付けを削除するには、管理対象アプリケーションを選択し、上のツールバーの赤い×印~~X~~をクリックします。これにより、リンクが削除され、マッチしたアプリケーションの名前が[Application] 列に表示されなくなります。
9. 変更を保存するには、画面上部の [Save Associations] をクリックします。

Active DirectoryおよびConfiguration Managerコレクションによるグループの作成

Oct 16, 2015

Active DirectoryおよびConfiguration Managerで検出されたグループ構造に基づいて、アプリケーションのグループを作成できます。

ただし、Active DirectoryやConfiguration Managerのグループ構造がAppDNAのグループに直接関連付けされるわけではないことに注意してください。AppDNAのグループは、ポートフォリオ内のアプリケーションを構造化し整理するのに便利な、異なるアプリケーションのセットです。グループ内のアプリケーションは、ポートフォリオ内の残りのアプリケーションとは別に、簡単に確認したりレポートを作成したりできます。Active DirectoryおよびConfiguration Managerにおいて、グループ構造はユーザーとコンピューターのセットを表します。このユーザーとコンピューターの一部は、実際のユーザーとコンピューターを表すことも、たとえば認証に使用するダミーアカウントを表すこともあります。

Active DirectoryおよびConfiguration Managerのグループ構造の中には、（事業部、部門、および地理的な場所のような）組織構造や、ハードウェアまたはソフトウェアシナリオを反映するものがあります。たとえば、ロンドンの財務部門の事務所を表すActive Directoryグループや、フランスのデザイナーを表すグループを構成できます。同様に、モバイルデバイスを管理するConfiguration Managerコレクションや、Windows Server 2012が動作するサーバーを管理するコレクションを構成できます。

管理対象アプリケーションはActive DirectoryグループおよびConfiguration Managerコレクションに対して展開されるので、これらのグループおよびコレクションからAppDNAの運用上の見通しを立てられます。フランスのデザイナーを表すActive Directoryグループには、デザイナーが使用する特別なアプリケーションが関連付けられている可能性があります。このActive Directoryグループに基づいてAppDNAグループを作成する場合は、Active Directoryグループに展開された管理対象アプリケーションはAppDNAグループに自動的に追加されます（これらの管理対象アプリケーションがインポートされている場合、または既にAppDNAに含まれるアプリケーションにリンクされている場合）。その後で、AppDNAでこのアプリケーショングループの分析とレポート作成を簡便に実行できます。

注：表示される管理対象アプリケーションの数には、Active DirectoryグループまたはConfiguration Managerコレクションに展開されているもののみが含まれます。これは、Active DirectoryグループまたはConfiguration Managerコレクションのメンバー（ユーザーおよびコンピューター）に展開されている管理対象アプリケーションの数と必ずしも同じではありません。

1. AppDNAのメニューで、[Configure]、[AD & ConfigMgr]、[Manage Groups]の順に選択します。
 - 画面左側には、AppDNAで作成済みのグループが表示されます。
 - 画面の右側にActive Directoryの組織単位（OU）とグループ、およびConfiguration Managerコレクションがツリー形式または一覧で表示されます。
 - 画面下部には、[Deployments]または[Applications]のどちらを選択するかに応じて、画面右側で選択した項目に対して展開されている管理対象アプリケーションか、その管理対象アプリケーションに対してリンクされているAppDNAのアプリケーションが表示されます。
2. 画面右側で、新しいAppDNAグループの基になる項目をクリックします。
3. 画面左側のツリー内の項目を配置したい位置に、画面右側から項目をドラッグします。または、左側のツリー内の新しいグループを表示する位置の上にある項目をクリックし、[Create]をクリックします。

Active DirectoryまたはConfiguration Managerの項目に子項目がある場合は、入れ子になったグループに対応するセットが作成されます。Active DirectoryグループまたはConfiguration Managerコレクションに関連付けられているアプリケーションが、新しく作成されるアプリケーショングループにAppDNAにより自動的に追加されます。Active DirectoryグループまたはConfiguration Managerコレクションに20を超えるアプリケーションが関連付けられている場合は、続行するか

うかを確認する警告メッセージがAppDNAにより表示されます。

[AD & ConfigMgr Collections] 画面で作成したグループは、[Manage]、[Groups] で表示および編集できます。

Active DirectoryグループまたはConfiguration Managerコレクションに関連付けられているアプリケーションをAppDNAグループに追加するには、次の手順を実行します。

1. AppDNAのメニューで、[Configure]、[AD & ConfigMgr]、[Manage Groups] の順に選択します。
2. アプリケーションを追加するグループをクリックします。
3. 画面右側で、グループまたはスイートに追加するアプリケーションが関連付けられている項目をクリックし、[Add] をクリックします。

Active DirectoryグループまたはConfiguration Managerコレクションに展開したアプリケーションがその後変更された場合、その変更を反映するようにAppDNAグループを更新する必要があります。

グループの作成

Oct 16, 2015

1. AppDNAのメニューで、 [Configure] 、 [AD & ConfigMgr] 、 [Manage Groups] の順に選択します。
2. 画面右側で、新しいAppDNAグループの基になる項目をクリックします。
3. 画面左側のツリー内の項目を配置したい位置に、画面右側から項目をドラッグします。または、左側のツリー内の新しいグループを表示する位置の上にある項目をクリックし、 [Create] をクリックします。
ADまたはConfiguration Managerの項目に子項目がある場合は、入れ子になったグループに対応するセットが作成されません。ADグループまたはConfiguration Managerコレクションに関連付けられているアプリケーションが、新しく作成されるアプリケーショングループにAppDNAにより自動的に追加されます。ADグループまたはConfiguration Managerコレクションに20を超えるアプリケーションが関連付けられている場合は、続行するかどうかを確認する警告メッセージがAppDNAにより表示されます。

[AD & ConfigMgr Collections] 画面で作成したグループは、 [Groups] 画面で確認し、編集することができます。

ADグループまたはConfiguration Managerコレクションに関連付けられているアプリケーションをAppDNAグループに追加するには、次の手順を実行します。

1. AppDNAのメニューで、 [Configure] 、 [AD & ConfigMgr] 、 [Manage Groups] の順に選択します。
2. アプリケーションを追加するグループをクリックします。
3. 画面右側で、グループに追加するアプリケーションが関連付けられている項目をクリックします。
4. [Add] をクリックします。

ADグループまたはConfigMgrコレクションに展開したアプリケーションがその後変更された場合、その変更を反映するようにAppDNAグループを更新する必要があります。

1. AppDNAのメニューで、 [Configure] 、 [AD & ConfigMgr] 、 [Manage Groups] の順に選択します。
2. 左側のツリーで、削除するアプリケーションを選択します。
3. ツールバーの [Remove] をクリックします。

[Users and Computers] 画面の組織データ

Oct 16, 2015

[Users and Computers] 画面を使用して、Active DirectoryおよびConfiguration Managerから取得したユーザー、コンピューター、グループ、および組織単位 (OU) を表示し、それらに対して展開されている管理対象アプリケーションの状態を表示する概要レポートを閲覧できます。この文脈では、管理対象アプリケーションはActive DirectoryまたはConfiguration Managerで展開されたアプリケーションを指します。

この機能により、Active DirectoryおよびConfiguration Managerに由来するエントリポイントからアプリケーションDNAを調査できます。たとえば、重要な事業部門を表すActive Directoryグループのレポートを実行できます。このレポートには、部門に展開されている管理対象アプリケーションの全体的なRAG情報が表示されます。レポートをドリルダウンして、事業部門の各ユーザーに展開されている管理対象アプリケーションのRAG状態の概要や、それらのアプリケーションのAppDNA標準アプリケーションレポートを表示できます。これは、たとえば対象の環境で問題が生じる基幹業務アプリケーションを特定するのに役立ちます。この情報を使用して、修復作業の対象アプリケーションや修復作業の優先度を能動的に決定できます。

[Users and Computers] 画面を開くには：

- AppDNAのサイドバーから、[Select] [Devices]、または [Users]、または [Groups]、または [Organizational Units] の順に選択します。

[Users and Computers] 画面には多くの異なるビューがあります。異なるビューを切り替えるには、ツールバーの [Organizational Units]、[ConfigMgr Collections]、[AD Groups]、[Users]、および [Computers] のラジオボタンを使用します。この画面の機能を使用して、Active DirectoryおよびConfiguration Managerのデータを調査します。

Organizational Units、ConfigMgr Collections、およびAD Groupsビューは分割されています。左側のエンティティを確認していずれかをクリックすると、そのメンバーが右側に表示されます。OUとConfiguration Managerコレクションはツリー表示されます。ツリー内の項目に展開されている管理対象アプリケーションがある場合は、管理対象アプリケーションの数と、インポートまたはリンク済みのアプリケーションの数が次のようにかっこ内に表示されます。

- **Packages** – Active DirectoryまたはConfiguration Managerで項目に対して展開されている管理対象アプリケーションの数を表します。
- **Applications** – AppDNAにインポート済み、またはAppDNAにインポート済みのアプリケーションにリンクされている管理対象アプリケーションの数を表します。

たとえば、次の例では、All Windows XP Systemsコレクションに12個の管理対象アプリケーションが展開されており、それらの管理対象アプリケーションはAppDNAポートフォリオ内の10個のアプリケーションにリンクされています。

All Windows XP Systems [12 Packages, 10 Applications]

通常、1つの管理対象アプリケーションはAppDNA内の1つのアプリケーションにリンクします (例外もあります)。管理対象アプリケーションをAppDNA内のアプリケーションとリンクするには、管理対象アプリケーションをインポートするか、AppDNAにインポート済みのアプリケーションとリンクします。

Active Directoryグループ、ユーザー、およびコンピューターは、グリッドビューに表示されます。ここには、管理対象アプリケーションの数とインポート済みアプリケーションの数が、[Packages] 列と [Applications] 列に別々に表示されます。

注：この画面とレポートでOU、Configuration Managerコレクション、またはADグループを表示するとき、アプリケーション数には、そのグループに割り当てられているアプリケーションだけでなく、グループメンバーに展開済みの管理対象アプリケーションにリンクされているすべてのアプリケーションが含まれます。これは、[AD & ConfigMgr Collections] 画面に表示される件数とは異なります。

列見出しをクリックして、その列のデータで並べ替えます。昇順と降順を切り替えるには、ヘッダーをもう一度クリックします。表示するデータにフィルターを適用することもできます。グリッドの一番左の [Clear Filter] アイコンをクリックして、すべてのフィルターを解除します。

レポートについて詳しくは、「[組織レポート](#)」を参照してください。

構成

Oct 16, 2015

ここでは、AppDNAのさまざまな機能を構成する方法について説明します。

このセクションのトピックへのクイックリンク：

- [ソリューションの構成](#)
- [Install Capture](#)
- [オペレーティングシステムのイメージ](#)
- [モジュール、レポート、およびアルゴリズム](#)
- [カスタムレポート](#)
- [Forward Path](#)
- [外部データ](#)

ソリューションの構成

Oct 16, 2015

AppDNAソリューションにより、コンサルタントの支援がなくても、アプリケーション環境に変更を加えるために必要な情報が入手できます。現在および変更後の展開環境の基本情報をソリューションウィザードに入力します。簡単に解釈できるレポートを表示し、変更なしで、または修復後に、どのアプリケーションが新しい環境で動作するか確認します。

使用するソリューション：	目的：
ビルド評価	ビルド評価 を行い、アプリケーションが同じオペレーティングシステムファミリーのビルドで機能するかどうかを判断する
Interoperability	相互運用性の分析 を行い、アプリケーション間の潜在的な競合を検出する
XenAppおよびXenDesktop 7.xの導入	Citrix以外の配信ソリューションからの XenApp または XenDesktop 7.x への移行の準備
XenAppおよびXenDesktop 7.xのアップグレード	XenAppまたはXenDesktopからの XenApp または XenDesktop 7.x へのアップグレードの準備

XenAppまたはXenDesktop 7.xへのアップグレードの準備

Oct 16, 2015

アップグレード後にアプリケーションをどのように配信するか計画するとき、XenAppおよびXenDesktop 7.xのアップグレードソリューションを使用して必要な情報を入手します。このソリューションにより以下のような情報が提供されます。

- アプリケーションで使用できる配信方法。サーバーホステッドまたはデスクトップホステッドです。
サーバーホステッドは物理または仮想マシンのサーバーオペレーティングシステム上に存在する、アプリケーションおよびデスクトップを指します。このような展開では、ユーザーはStoreFront、ユーザーデバイスの [スタート] メニュー、管理者が提供するURLからアプリケーションにアクセスします。アプリケーションはユーザーデバイス上に仮想的に配信され、シームレスかつ高品位に表示されます。

デスクトップホステッドは仮想マシンのデスクトップオペレーティングシステム上に存在する、アプリケーションおよびデスクトップを指します。このような展開では、古いオペレーティングシステムおよびアーキテクチャで動作するアプリケーションをサポートしながら、ユーザーにはシームレスかつ高品位にアプリケーションを提供します。

- 移行先の展開環境でXenAppまたはXenDesktop 7.xと共に動作させるために、修復が必要なアプリケーション。
- 移行先の展開環境でXenAppまたはXenDesktop 7.xと共に動作しないアプリケーション。

注：XenAppまたはXenDesktop 7.xへのアップグレードについて詳しくは、eDocsのXenAppおよびXenDesktop 7.xのドキュメントの

— 「アップグレード」

のトピックを参照してください。

XenAppおよびXenDesktop 7.xのアップグレードソリューションを構成するには

開始する前に、次の情報を収集します。

- 現在のXenAppまたはXenDesktop展開環境について
 - アップグレードするXenAppまたはXenDesktopのバージョン
 - インストール先のオペレーティングシステムファミリー
 - App-Vを使用しているかどうか
- 配信するアプリケーション
- 移行後のXenAppまたはXenDesktop展開環境について
 - App-Vを使用するかどうか
XenDesktop 7.xでは、ユーザーデバイスへのアプリケーションのストリーム配信に、App-Vを推奨技術としてサポートします。XenAppのアプリケーションストリーム配信はサポートされません。
 - 使用するデスクトップオペレーティングシステム（仮想デスクトップを配信する場合）
AppDNAではWindowsデスクトップオペレーティングシステムのデフォルトイメージが提供されます。 [オペレーティングシステムのイメージ](#) の手順に従って、カスタムイメージをインポートできます。

1. AppDNAのサイドバーで、 [Solutions] をクリックし、 [Add solution] をクリックします。
2. [Solutions Templates] ページで [XenApp and XenDesktop 7.x Upgrade] を選択し、 [Next] をクリックします。
ソリューションウィザードが開きます。
3. [Solution name] ページで、 [Solution name] ボックスと [Description] ボックスに、ソリューションのレポートで使用される名前と説明を入力して、ソリューションの識別情報を指定します。
4. 次の手順を実行して、現在の環境を指定します。

1. [Platform name] ページで、[Platform name] ボックスにプラットフォーム名を入力して現在のXenDesktop展開環境のプラットフォームを指定します。
「Windows 2008 64-bit」など、この名前にプラットフォームの特徴を含めることにより、後で使用可能なプラットフォーム一覧内でこのプラットフォームを見つけやすくなります。
2. オプションで [Description] ボックスにプラットフォームの説明を入力します。
3. プラットフォームのパラメーターを選択します。
5. [Applications] ページで、アップグレードに含めるアプリケーションを選択します。
6. 移行先のプラットフォームを確認または編集するには、[XenDesktop 7.x Upgrade target] をクリックして [Edit] をクリックします。
重要：ベストプラクティスとして、デフォルトの移行先である「Windows Server 2012, 64-bit」を使用することをお勧めします。必要がない限り、App-Vの選択以外は移行先の設定を変更しないでください。
[Desktop deployment] ページで、必要に応じて設定を変更します。
 - デフォルトでは、選択されたオペレーティングシステムでサーバーホスティングに大きな問題が検出された場合は、デスクトップホスティングが使用されます。デスクトップホスティングを禁止する場合は、[Host applications on desktop] チェックボックスをオフにします。
 - 特定のデスクトップオペレーティングシステムを分析から除外するには、そのチェックボックスをオフにします。
 - デスクトップオペレーティングシステムの別のイメージを選択するには、メニューから選択します。
AppDNAで提供されるデフォルトイメージと、「[オペレーティングシステムのイメージ](#)」に記載されているように管理者がインポートしたカスタムオペレーティングシステムイメージが、メニューに一覧表示されます。
7. ソリューションを実行するには、次の手順に従います。
 1. 現在および移行先のプラットフォームを定義したら、[Build] をクリックします。
 2. [Progress] ページで [Analyze] をクリックします。分析が完了したら、表示するレポートを選択して [Finish] をクリックします。
レポートを表示するには、AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックして、ソリューションの名前をクリックします。レポートはいつでも表示できます。

XenDesktopアップグレードレポートを解釈するには

XenDesktopアップグレードレポートには、選択したアプリケーションが以下の分類に分けて一覧表示されます。

- **Applications that can run...** - これらのアプリケーションを移行先プラットフォームのXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作させるために、特別なアクションは不要です。これらのアプリケーションの展開方法はサーバーホステッドです。
- **Applications that require remediation to run...** - これらのアプリケーションは、修復すれば移行先のプラットフォーム上のXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作します。詳細情報を表示するには、レポート内の [Remediation] リンクをクリックします。
- **Applications that must be deployed using desktop hosting (pooled or dedicated)...** - これらのアプリケーションは、プールされたまたは専用のデスクトップを使用して展開すれば、移行先のプラットフォーム上のXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作します。
- **Applications that cannot be deployed with XenDesktop 7.x** - これらのアプリケーションは、再開発しなければサーバーまたはデスクトップオペレーティングシステムマシンを使用して展開できません。詳細情報を表示するには、[Reason] リンクをクリックします。

サーバーまたはデスクトップオペレーティングシステムマシンについては、eDocsのXenAppおよびXenDesktop 7.xのドキュメントの

— 「デスクトップおよびアプリケーションのホスト計画」
を参照してください。

既存のプラットフォームをソリューションに追加するには

1. AppDNAのサイドバーで、 [Solutions] をクリックします。
2. [Solutions] ペインで、ソリューションのカテゴリを選択し、ソリューション名の向かい側にある [Edit] をクリックします。
3. [Existing platforms] の上の+アイコンをクリックしてウィザードを完了します。
レポートに今追加したプラットフォームが反映されます。

異なるプラットフォームのレポートを作成するには

1. AppDNAのサイドバーで、 [Solutions] をクリックします。
2. [Solutions] ペインで、ソリューションのカテゴリを選択し、ソリューション名の向かい側にある [Edit] をクリックします。
3. [Next] をクリックし、プラットフォームをクリックし、 [Build] をクリックします。

XenAppまたはXenDesktop 7.xへの移行の準備

Oct 16, 2015

ほかのシステムからXenAppまたはXenDesktopに移行した後でアプリケーションをどのように配信するか計画するとき、XenAppおよびXenDesktop 7.xの導入ソリューションを使用して必要な情報を入手します。このソリューションにより以下のような情報が提供されます。

- アプリケーションで使用できる配信方法。サーバーホステッドまたはデスクトップホステッドです。
サーバーホステッドは物理または仮想マシンのサーバーオペレーティングシステム上に存在する、アプリケーションおよびデスクトップを指します。このような展開では、ユーザーはStoreFront、ユーザーデバイスの [スタート] メニュー、管理者が提供するURLからアプリケーションにアクセスします。アプリケーションはユーザーデバイス上に仮想的に配信され、シームレスかつ高品位に表示されます。

デスクトップホステッドは仮想マシンのデスクトップオペレーティングシステム上に存在する、アプリケーションおよびデスクトップを指します。このような展開では、古いオペレーティングシステムおよびアーキテクチャで動作するアプリケーションをサポートしながら、ユーザーにはシームレスかつ高品位にアプリケーションを提供します。

- 移行先の展開環境でXenAppまたはXenDesktop 7.xと共に動作させるために、修復が必要なアプリケーション。
- 移行先の展開環境でXenAppまたはXenDesktop 7.xと共に動作しないアプリケーション。

XenAppおよびXenDesktop 7.xの導入ソリューションを構成するには

開始する前に、次の情報を収集します。

- 現在の環境について
 - オペレーティングシステムファミリー
 - App-Vを使用しているかどうか
- 配信するアプリケーション
- 移行後のXenAppまたはXenDesktop展開環境について
 - App-Vを使用するかどうか
XenAppおよびXenDesktop 7.xでは、ユーザーデバイスへのアプリケーションのストリーム配信に、App-Vを推奨技術としてサポートします。XenAppのアプリケーションストリーム配信はサポートされません。
 - 使用するデスクトップオペレーティングシステム（仮想デスクトップを配信する場合）
AppDNAではWindowsデスクトップオペレーティングシステムのデフォルトイメージが提供されます。 [オペレーティングシステムのイメージ](#) の手順に従って、カスタムイメージをインポートできます。

1. AppDNAのサイドバーで、 [Solutions] をクリックし、 [Add solution] をクリックします。
2. [Solutions Templates] ページで [XenApp and XenDesktop 7.x Adoption] を選択し、 [Next] をクリックします。
ソリューションウィザードが開きます。
3. [Solution name] ページで、 [Solution name] ボックスと [Description] ボックスに、ソリューションのレポートで使用される名前と説明を入力して、ソリューションの識別情報を指定します。
4. 次の手順を実行して、現在の環境を指定します。
 1. [Platform name] ページで、 [Platform name] ボックスにプラットフォーム名を入力して現在の環境のプラットフォームを指定します。
「Windows 8.1 32-bit」など、この名前にプラットフォームの特徴を含めることにより、後で使用可能なプラットフォーム一覧内でこのプラットフォームを見つけやすくなります。
 2. オプションで [Description] ボックスにプラットフォームの説明を入力します。

3. プラットフォームのパラメーターを選択します。
5. [Applications] ページで、XenDesktopへの移行後に配信するアプリケーションを選択します。
既存のプラットフォームが [Solutions platforms] ページに表示されます。
6. 移行先のプラットフォームを確認または編集するには、[XenDesktop 7.x Adoption target] をクリックして [Edit] をクリックします。
[Desktop adoption] ページで、必要に応じて設定を変更します。
 - デフォルトでは、選択されたオペレーティングシステムでサーバーホスティングに大きな問題が検出された場合は、デスクトップホスティングが使用されます。デスクトップホスティングを禁止する場合は、[Host applications on desktop] チェックボックスをオフにします。
 - 特定のデスクトップオペレーティングシステムを分析から除外するには、そのチェックボックスをオフにします。
 - デスクトップオペレーティングシステムの別のイメージを選択するには、メニューから選択します。
AppDNAで提供されるデフォルトイメージと、「**オペレーティングシステムのイメージ**」に記載されているように管理者がインポートしたカスタムオペレーティングシステムイメージが、メニューに一覧表示されます。
7. ソリューションを実行するには、次の手順に従います。
 1. 現在および移行先のプラットフォームを定義したら、[Build] をクリックします。
 2. [Progress] ページで [Analyze] をクリックします。分析が完了したら、表示するレポートを選択して [Finish] をクリックします。
レポートを表示するには、AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックして、ソリューションの名前をクリックします。レポートはいつでも表示できます。

XenDesktop導入レポートを解釈するには

XenDesktop導入レポートには、選択したアプリケーションが以下の分類に分けて一覧表示されます。

- **Applications that can run...** - これらのアプリケーションを移行先プラットフォームのXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作させるために、特別なアクションは不要です。これらのアプリケーションの展開方法はサーバーホステッドです。
- **Applications that require remediation to run...** - これらのアプリケーションは、修復すれば移行先のプラットフォーム上のXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作します。詳細情報を表示するには、レポート内の [Remediation] リンクをクリックします。
- **Applications that must be deployed using desktop hosting (pooled or dedicated)...** - これらのアプリケーションは、プールされたまたは専用のデスクトップを使用して展開すれば、移行先のプラットフォーム上のXenAppまたはXenDesktop 7.x環境で動作します。
- **Applications that cannot be deployed with XenDesktop 7.x** - これらのアプリケーションは、再開発しなければサーバーまたはデスクトップオペレーティングシステムマシンを使用して展開できません。詳細情報を表示するには、[Reason] リンクをクリックします。

既存のプラットフォームをソリューションに追加するには

1. AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックします。
2. [Solutions] ペインで、ソリューションのカテゴリを選択し、ソリューション名の向かい側にある [Edit] をクリックします。
3. [Existing platforms] の上の **+** アイコンをクリックしてウィザードを完了します。
レポートに今追加したプラットフォームが反映されます。

異なるプラットフォームのレポートを作成するには

1. AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックします。
2. [Solutions] ペインで、ソリューションのカテゴリを選択し、ソリューション名の向かい側にある [Edit] をクリックし

ます。

3. [Next] をクリックし、プラットフォームをクリックし、[Build] をクリックします。

ビルドの評価

Oct 16, 2015

ビルド評価ソリューションにより、アプリケーションが同じオペレーティングシステムファミリーの追加ビルドで機能するかどうかを示されます。参照ビルドがWindows 8であり、そこで機能するアプリケーションがほかのWindows 8ビルド（コープセンターの従業員用にカスタマイズされたものなど）でも機能するかどうかを確認する必要があります。ビルド評価ソリューションでは、参照ビルドに対して標準のAppDNA分析が実行され、各ターゲットビルドの分析と比較されます。

AppDNAでは、次のビルド評価レポートが作成されます。

- **ビルド評価概要レポート** — このレポートでは、参照ビルドおよびターゲットビルドの、修正が必要な問題または修正できない問題を含むアプリケーションの数が示されます。
- **ビルド評価比較レポート** — 参照ビルドと比較される各ターゲットビルドについて、このレポートでは、各ビルドのRAGの概要、アルゴリズムグループ別のRAGの概要、および各アプリケーションのRAGの概要が示されます。
- **ビルド評価問題レポート** — アプリケーション修復レポートの内容に加えて、このレポートには、イメージに依存する互換性の問題と、GPO、セキュリティおよびマシンのロックダウンのポリシー、およびレジストリキーやファイルシステムエントリに対する権限の結果として生じる互換性の問題の詳細情報が含まれます。

AppDNAで参照ビルドおよびターゲットビルドでのすべての潜在的な問題が無視されるように、ビルド評価ソリューション構成ウィザードでテスト済みのアプリケーションをマークすることができます。参照ビルドに対してアプリケーションがテスト済みであることをマークすると、それらの問題は環境内のアプリケーションに影響を与えないものとして、参照ビルドおよびターゲットビルドに対するイメージに依存しないアルゴリズムのすべての赤または黄色のRAGがAppDNAで無視されます。

ビルド評価ソリューションを構成するには

ビルド評価ソリューション構成ウィザードを実行する前に、以下の情報を収集します。

- 参照ビルドのオペレーティングシステムファミリーとイメージ名
 - 各ターゲットビルドのイメージ名
ヒント：最も簡単に作業するには、ウィザードを開始する前にターゲットビルドのイメージをインポートします。
 - 各ターゲットビルドに対して評価するアプリケーション
すべてのアプリケーションを評価することも、いずれかを選択して評価することもできます。
 - 参照ビルドで機能するアプリケーション
1. AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックし、[Add solution] をクリックします。
 2. [Solutions Templates] ページで [Build Assessment] を選択し、[Next] をクリックします。
ソリューションウィザードが開きます。
 3. [Solution name] ページで、[Solution name] ボックスと [Description] ボックスに、ソリューションのレポートで使用される名前と説明を入力して、ソリューションの識別情報を指定します。
 4. [Reference build] ページで、評価の参照ポイントとなるオペレーティングシステムファミリーとイメージを選択して、参照ビルドを選択します。
 5. 次の手順に従い、ターゲットビルドとアプリケーションを選択します。
 1. [Target builds] ページで、[New] をクリックして、イメージを選択します。
ターゲットビルドが一覧に表示されない場合は、[Import images] をクリックします。ここで、イメージをインポートする前にウィザードをキャンセルする必要があります。画面に表示される指示に従って、手順1に戻り、ビルド評価ソリューションを構成します。

2. ターゲットイメージを選択したら、 [Applications] ページで、ターゲットビルドに対して評価するアプリケーションを選択します。
3. [Configure Builds] ページで構成を完了したら、 [Next] をクリックします。
6. [Validated Applications] ページでオプションを選択し、参照ビルドで機能するアプリケーションを指定します。
7. ソリューションを実行するには、次の手順に従います。
 1. [Summary] ページで、 [Build] をクリックして、ソリューションを保存します。
 2. [Progress] ページで [Analyze] をクリックします。分析が完了したら、表示するレポートを選択して [Finish] をクリックします。レポートを表示するには、AppDNAのサイドバーで、 [Solutions] をクリックして、ソリューションの名前をクリックします。レポートはいつでも表示できます。

ソリューションにターゲットビルドを追加するには

1. AppDNAのサイドバーで、 [Solutions] をクリックし、 [Solutions] ペインで [Build Assessment] をクリックします。
2. [Build Assessment] ペインでソリューションを選択し、 [Target Builds] の [Add build] をクリックして、ウィザードを完了します。

アプリケーションの一覧を変更するには

次の手順で実行できる内容は以下のとおりです。

- 評価で使用するターゲットビルドのアプリケーションの一覧の変更
 - 検証の対象となる参照ビルドのアプリケーションの一覧の変更
1. AppDNAのサイドバーで、 [Solutions] をクリックし、 [Solutions] ペインで [Build Assessment] をクリックします。
 2. [Build Assessment] ペインで、ソリューション名の隣の [Edit] をクリックします。
 3. 変更するページが開くまで、クリックしてウィザードを進めます。
 4. 変更を完了したら [Build] をクリックし、 [Analyze] をクリックします。

相互運用性の分析

Oct 16, 2015

相互運用性ソリューションでは、同じイメージに含める予定のMSIアプリケーションを評価できます。同じコンポーネント（または同じコンポーネントの異なるバージョン）をインストールするアプリケーション間で、Windowsインストーラーを使用してそのようなアプリケーションをアップグレード、アンインストール、または修復するときに、競合が発生する可能性があります。このような問題は、MSIパッケージでのコンポーネントのコンポーネントIDが異なるために発生します。このソリューションは、Windowsインストーラー（MSI）パッケージのみを使用してインストールされるデスクトップアプリケーションのテストに適しています。

相互運用性ソリューションではアプリケーションのインストールによって競合が発生する可能性はテストされません。多くの場合、そのような問題はWindowsインストーラーにより自動的に防止されるためです。

次の操作を行った後で、相互運用性ソリューションを実行する必要があります。

- 新しいアプリケーションのインポート
すべての潜在的な競合を確認できるように、すべてのアプリケーションを再分析するようにしてください。新しいアプリケーションだけを分析する場合、レポートビューには、その新しいアプリケーションでほかのアプリケーションに対して発生する潜在的な競合が表示されます。しかし、ポートフォリオ全体を分析し直さない限り、既存のアプリケーションで新しいアプリケーションに対して発生する潜在的な競合は表示されません。
- アプリケーションの削除

相互運用性ソリューションでは、標準のAppDNAレポートで示されるものと同じレポートビューが生成されます。

相互運用性ソリューションを構成するには

1. AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックし、[Add solution] をクリックします。
2. [Solutions Templates] ページで [Interoperability] を選択し、[Next] をクリックします。ソリューションウィザードが開きます。
3. [Solution name] ページで、[Solution name] ボックスと [Description] ボックスに、ソリューションのレポートで使用される名前と説明を入力して、ソリューションの識別情報を指定します。
4. [Applications] ページで分析するアプリケーションを選択します。
5. ソリューションを実行するには、次の手順に従います。
 1. [Summary] ページで、[Build] をクリックして、ソリューションを保存します。
 2. [Progress] ページで [Analyze] をクリックします。分析が完了したら、表示するレポートを選択して [Finish] をクリックします。レポートを表示するには、AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックして、ソリューションの名前をクリックします。レポートはいつでも表示できます。

アプリケーションの一覧を変更するには

1. AppDNAのサイドバーで、[Solutions] をクリックし、[Solutions] ペインで [Interoperability] をクリックします。
2. [Interoperability] ペインで、ソリューション名の隣の [Edit] をクリックします。
3. [Next] をクリックして、アプリケーションの一覧を更新します。
4. 変更を完了したら [Build] をクリックし、[Analyze] をクリックします。

Install Capture

Oct 16, 2015

Install Captureを使用して、MSI、SFT、またはAPPVファイルがないWindowsアプリケーションをインポートします。Install Captureで仮想マシンにアプリケーションをインストールし、MSIファイルを作成します。このMSIファイルをAppDNAにインポートします。通常、作成されるMSIはAppDNAにインポートするためにアプリケーションDNAを単にキャプチャしたものであり、アプリケーションの実際のインストールには適切ではありません。必要な追加ソフトウェアがあれば、インストールに適したMSIとApp-Vシーケンスをキャプチャ処理で作成できます。

Install Captureを使用するには次のデスクトップ仮想化技術のいずれかに基づく仮想マシンが必要です。

- **Hyper-V** - この技術を使用する場合は、Install Capture専用の仮想マシンと管理者権限を提供するHyper-Vユーザーアカウントが必要です。ゲストオペレーティングシステムがリモートデスクトップ接続を許可するように構成されている必要があります。一部の構成では、仮想マシンにHyper-V統合サービスをインストールする必要があります（Windows XP SP2以降でサポートされます）。Windows 8 Hyper-Vクライアントを使用する場合は、AppDNAクライアントをHyper-Vクライアントと同じマシンにインストールする必要があります。
- **VMware vSphere** - この技術を使用する場合は、完全にライセンスされたvSphereのインストール、Install Capture専用の仮想マシン、Webサービスを通じて（仮想マシンの電源のオン/オフ、仮想マシンのリセットと一時停止、およびスナップショットの作成と元に戻す権限を含む）高度な仮想マシンの操作を行う権限を持つvSphereユーザーアカウントが必要です。使用する仮想マシンは、リモートデスクトップ接続を許可するように構成し、VMware Toolsをインストールしておく必要があります。vSphereホストサーバーでWebサービスが有効になっている必要があります。
- **Citrix XenServer** - この技術を使用する場合は、XenServerホストサーバーに対するアクセス権、Install Capture専用の仮想マシン、および仮想マシンスナップショットを作成および元に戻すためのXenServerの権限が必要です。
- **VMware Workstation** - <https://www.vmware.com/tryvmware/?p=vmware-workstation&lp=1>からダウンロードできます。

仮想化技術は、仮想マシンをホストするマシン（ホストマシンと呼びます）とAppDNAが通信できる方法でインストールし構成する必要があります。使用する技術とその構成方法によっては、AppDNAと同じマシンにインストールする場合があります。たとえば、VMware Workstationの場合はAppDNAをホストマシンにインストールする必要がありますが、XenServerおよびvSphereの場合は、常にAppDNAとは別のマシンにインストールします。

AppDNAは仮想マシンのオペレーティングシステム（ゲストオペレーティングシステムと呼びます）と通信できる必要があります。これはゲストオペレーティングシステムがネットワークに接続している必要があることを意味します。結果をストリーム配信するのではなくコピーする場合は、AppDNAとゲストオペレーティングシステムの両方から、ホストマシンがネットワーク共有上の指定の出力フォルダーに対して読み取りと書き込みを実行できる必要があります。

Install Captureを実行するAppDNAクライアントでは、専用の仮想マシンを使用する必要があります。

AppDNA内で仮想マシン構成ウィザードを使用して、Install Captureのために使用する仮想マシン構成を作成します。この構成には、仮想マシンを管理するためにInstall Captureに必要なすべての情報が格納されます。

ここでは、まず、ウィザードの実行前に満たしておく必要があるセットアップ要件の概要について説明します。要件は多く一般的な手順に分けられます。これらの手順を実行するにはさまざまな方法があります。全般的な要件について説明した後、仮想化技術ごとに1つの可能なアプローチとウィザードの使用手順について詳しく説明します。

仮想マシンのセットアップ

Oct 16, 2015

ここでは、Install Capture仮想マシンの全般的なセットアップ要件の概要を示します。これらの手順を実行するために可能なアプローチはたくさんあります。

通常、これらの手順は、AppDNAで**仮想マシン構成ウィザード**を使用する前に実行します。ただし、このウィザードにはコンソールで仮想マシンを開くオプションがあり、ウィザードに従ってコンソールで仮想マシンのセットアップ手順を実行することができます（ウィザードを実行するには仮想マシンが既に存在している必要があるため、最初の2つの手順は含まれません）。

1. 「**Install Capture**」の一覧に含まれる技術の1つに基づく仮想マシンを作成します（または、仮想マシンファイルを取得します）。

デスクトップまたはサーバーのWindowsプラットフォームとの互換性をテストするためにWindowsアプリケーションをキャプチャするときは、ゲストオペレーティングシステムが、アプリケーションが現在動作しているオペレーティングシステムと同じである必要があります。たとえば、Windows XPからWindows 8.1への移行を準備する場合は、仮想マシンはWindows XPに基づく必要があります。ただし、仮想マシンを使用して実稼働環境用のMSI、App-Vシーケンス、またはXenAppプロファイルを作成する場合は、ゲストオペレーティングシステムは通常、それらの対象オペレーティングシステムである必要があります。

Install Captureの処理を妨げる可能性があるため、仮想マシンではアンチウイルスソフトウェアを実行しないでください。

仮想マシンと通信するには、ゲストオペレーティングシステムのIPアドレスか、そのマシン名またはDNS名が必要です。マシン名またはDNS名を使用する場合は、ネットワークで適切な名前解決メカニズム（DNSなど）を構成する必要があります。IPアドレスを使用する場合は、静的IPアドレスで仮想マシンを構成することをお勧めします。IPアドレスが変更された場合、仮想マシン構成に格納されているゲストオペレーティングシステムのIPアドレスを更新する必要があります。

2. 仮想マシンを起動し停止します。
これは、仮想マシンが正しく動作することを確認するためです。
3. Install Captureを使用して仮想アプリケーションパッケージを作成する場合は、App-V SequencerまたはXenApp Profilerのような追加のソフトウェアを仮想マシンにインストールする必要があります。この追加のソフトウェアはAppDNAには付いていません。
追加のソフトウェアによっては、**実行プロファイル**を適宜に編集する必要がある可能性があります。

4. Install Captureを実行するために仮想マシンへのログオンに使用するユーザーアカウントに管理者特権があることを確認します。
このユーザーアカウントは、仮想マシンのローカル管理者アカウントでも、仮想マシンのAdministratorsグループに追加されている別のユーザーアカウントでも構いません。

この管理ユーザーアカウントを使用して自動でログオンするように仮想マシンを構成し、ログオン時に表示されるすべての法的通知を抑制することをお勧めします。このように構成すると、Install Capture処理の実行時に手で仮想マシンにログオンする必要がなくなります。

注：ポリシーにより自動的にログオン（または法的通知を抑制）できない場合は、ゲストオペレーティングシステムにログオンした状態で仮想マシンのスナップショットを作成します。これにより、Install Captureの開始時に仮想マシンが元の状態に戻され、ユーザーが何らかの操作を行う必要がなくなります。

5. AppDNAマシンまたはネットワーク共有に、Install Captureの出力ファイル（AppDNAにインポートするMSIなど）を格納するフォルダーを作成します。このフォルダーは、必要に応じて入力ファイルに使用することもできます。

Install Captureでは、2種類の方法で出力ファイルを処理できます。

- **結果をストリーム配信する** – この方法では、Install Captureの出力ファイルが最初に仮想マシンのステージングフォルダーに格納されます。その後、キャプチャが完了すると、AppDNAマシンまたはネットワーク共有のフォルダーに出力ファイルがストリーム配信されます。AppDNAにはこのフォルダーに対する読み取り/書き込みアクセス権限が必要ですが、仮想マシンからアクセスする必要はありません。
- **結果をコピーする** – この方法では、Install Captureの出力ファイルがAppDNAマシンまたはネットワーク共有のフォルダーに直接格納されます。AppDNAと仮想マシンの両方に、このフォルダーに対する読み取り/書き込みアクセス権限が必要です。この方法の方がストリーム配信よりも処理が高速になります。**オートクリッカー**を使用するなどしてキャプチャをまとめて無人で実行する場合は、このオプションを使用することをお勧めします。

どちらの方法を使用するかは、AppDNAで仮想マシン構成を作成するときに選択します。

仮想マシンから入力ファイルの場所にもアクセスできる必要があります。入力ファイルは出力ファイルと同じフォルダーに格納することも、入力ファイル用に別の共有フォルダーを作成することもできます。どちらの場合も、仮想マシンから入力ファイルを読み取ることができる必要があります。Active DirectoryまたはConfigMgrからインストールパッケージをインポートする場合は、仮想マシンからActive DirectoryまたはConfigMgrのドメインおよびインストールパッケージの場所へアクセスできる必要もあります。

6. 結果をコピーする場合は、前の手順で作成したフォルダーに対する読み取り/書き込みアクセス権限が仮想マシンにあることを確認します。結果をストリーム配信する場合は、入力ファイルが格納されたフォルダーに対する読み取りアクセス権限だけで構いません。

仮想マシンからフォルダーへのアクセスは、さまざまな方法でセットアップできます。

- 仮想マシンにドメインユーザーとしてログオンする場合、共有フォルダーがあるマシンが同じドメインまたは信頼済みのドメインに属していれば、そのユーザーに共有へのアクセスを許可できます。
- AppDNAマシンと仮想マシンの両方で、同じ名前と資格情報を使用してユーザーを作成します。AppDNAマシンで共有フォルダーを作成し、その共有フォルダーに対する読み取り/書き込みアクセス権限をそのユーザーに許可します。Install Captureの実行に使用する同じ資格情報を使用して仮想マシンにログオンすることで、仮想マシンから共有フォルダーにアクセスできるようにする必要があります。
- 適切な資格情報を使用して、仮想マシンから共有への永続的な接続を確立します。共有フォルダーがホストマシンにある場合は、ホストマシンへのログオンに使用する同じユーザーの資格情報を使用できます。共有フォルダーがドメインにある場合は、ドメインの資格情報を使用します。

7. 仮想マシンにCitrix AppDNA VM構成ツールのMSIをインストールし、仮想マシンを再起動します。

これを行うには、Citrix AppDNA VM Configuration.msiという名前のインストーラーが必要です。これはAppDNAに付属しており、AppDNAのインストール時にAppDNAインストールフォルダーのToolsサブフォルダーにコピーされます。デフォルトの場所はC:\Program Files\Citrix\AppDNA\Tools (64ビットマシンの場合はC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Tools) です。

仮想マシン構成ツールのMSIのバージョンは、実行しているAppDNAのバージョンと一致する必要があります。これは、AppDNAをアップグレードしたら仮想マシン上のVM構成ツールもアップグレードする必要があるということの意味します。

8. この手順は、ゲストオペレーティングシステムがユーザーアカウント制御 (UAC) をサポートする場合にのみ適用されません。

Citrix AppDNA VM構成ツールのMSIにより、Remote Adminがインストールされます。Remote Adminは、仮想マシン内で動作してAppDNAが仮想マシンと通信できるようにするAppDNAエージェントです。ゲストオペレーティングシステムでユーザーアカウント制御が有効になっている場合、Remote Adminが起動されるたびに、Windowsでユーザーアカウント制御のダイアログボックスが開き、コンピューターを変更する権限が確認されます。Install Captureの実行時に毎回これが発生すると、そのたびにユーザーの操作が必要になり、キャプチャのバッチ処理を無人で実行できないため、問題になるこ

とがあります。

解決策として、仮想マシンではユーザーアカウント制御を無効にすることをお勧めします（方法については、<http://support.microsoft.com/kb/975787>などを参照してください）。ただし、Windows 8またはWindows Server 2012については、オペレーティングシステム上でVM構成ツールのMSIで自動的にユーザーアカウント制御が無効にされるため、通常はこの処理を行う必要はありません。

ユーザーアカウント制御を無効にできない場合は、次の手順に従って、Remote Adminを実行した状態でスナップショットを作成します。

9. 前の手順に従って作業した後、仮想化技術の機能を使用して仮想マシンの状態のスナップショットを作成します。Install Captureではこのスナップショットを使用して、各キャプチャの開始時に仮想マシンを既知の状態に戻します。ユーザーアカウント制御をサポートするゲストオペレーティングシステムで、セキュリティポリシーによりユーザーアカウント制御を無効にできない場合は、Remote Adminを実行した状態で仮想マシンのスナップショットを作成します。これにより、Install Captureを実行するときにRemote Adminが既に行われた状態になるため、Install Capture処理の実行時にユーザーアカウント制御のダイアログボックスが表示されなくなります。仮想マシンの電源をオフにした状態で仮想マシンのスナップショットを作成した場合は、Install Captureを実行するたびにユーザーアカウント制御のプロンプトが表示され、キャプチャのバッチ処理を無人で実行できない場合があります。
10. アンチウイルスソフトウェアを、Install Captureの出力および入力フォルダーに対するアクセス時のスキャンが無効になるように構成します。

Hyper-V

Oct 16, 2015

このトピックでは、Windows XPからWindows 8.1に移行するときに、Install Captureで使用するHyper-V仮想マシンを（AppDNAを実行するマシンと共に）セットアップする方法の例について説明します。この例で取り上げるのは実行可能なアプローチの1つであり、これが唯一の方法であるとは限りません。全般的なセットアップ要件について詳しくは、「[仮想マシンのセットアップ](#)」を参照してください。

前提条件

- AppDNAが動作するマシンとは別のマシンにHyper-Vサーバーが構成されていること、またはWindows 8のHyper-VクライアントとAppDNAクライアントが同じWindows 8マシンにインストールされていること。
- Install Captureで使用するための、Microsoft Windows XP SP2またはSP3のクリーンなビルドを含むHyper-V仮想マシンが既に存在していること。Hyper-V仮想マシンの作成について詳しくは、Hyper-Vのドキュメントを参照してください。
- 仮想マシンが、AppDNAを実行しているマシン（AppDNAマシンと呼びます）と同じドメインに接続されていること。
- Hyper-Vサーバーを使用する場合は、Hyper-VホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名がわかっていて、Hyper-Vにアクセスし仮想マシンを制御する権限を持つ管理ユーザーアカウントのユーザー名とパスワードを持っていること。または、Hyper-Vクライアントを使用する場合は、ログオンに使用するWindowsアカウントにHyper-Vにアクセスし仮想マシンを制御する管理権限があること。
このユーザーアカウントは、Hyper-Vマシン上のAdministratorsまたはHyper-V Administratorsグループに追加されている必要があります。または、[MSDNの記事](#)に記載されているように、仮想マシンを制御する明示的なHyper-V権限をユーザーアカウントに付与することができます。
- ゲストオペレーティングシステムの管理用ユーザーアカウントのユーザー名とパスワードがわかっていること。

この例では、仮想マシンがAppDNAマシン上の共有フォルダーにアクセスできるように、仮想マシンへの自動ログオンを、ユーザーがAppDNAマシン上のWindowsにログオンするときに使用するドメインユーザーアカウントと同じアカウントで構築します（以降では、これをユーザーのドメインアカウントと呼びます）。

注：この手順では、Hyper-Vマネージャーでコンソールに仮想マシンを開いた後のセットアップについて説明します。これにアクセスできない場合は、Hyper-Vの管理者に依頼して、仮想マシンにHyper-V統合サービスをインストールし、リモートデスクトップ接続を許可する構成にしてもらう必要があります。そのほかのセットアップ手順はすべて、次のトピックで説明するAppDNA仮想マシン構成ウィザードで実行することができます（このウィザードは仮想マシンをコンソールで開きます）。

Hyper-Vマネージャーでの仮想マシンへのアクセス

ここでは、仮想マシンをセットアップするためにHyper-Vマネージャーのコンソールで仮想マシンを開く手順について説明します。

1. [スタート] ボタンをクリックし、[管理ツール]、[Hyper-Vマネージャー] の順に選択します。
2. 左ペインのツリーで、仮想マシンがホストされているHyper-Vサーバーを選択します。Hyper-Vホスト上でホストされている仮想マシンが一覧に表示されます。
3. Install Captureで使用する仮想マシンを右クリックして、[接続] を選択します。
4. 仮想マシンが実行中でない場合は、[操作]、[起動] の順に選択します。
5. ログオン画面が開いたら、管理ユーザーアカウントで仮想マシンにログオンします。

これで、後述の仮想マシンのセットアップタスクを実行できます。

仮想マシンへのHyper-V統合サービスのインストール

Install CaptureでHyper-V Windows XP仮想マシンを使用するには、仮想マシンにHyper-V統合サービスがインストールされている必要があります。Hyper-Vマネージャーにアクセスできない場合は、次の手順を実行するようHyper-Vの管理者に依頼してください。

注：ゲストオペレーティングシステムがWindows XPであるか、Windows 8のHyper-Vクライアントを使用する場合は、Hyper-V統合サービスが必ず必要です。ほかの構成でも必要である可能性があります。

1. Hyper-Vマネージャーで仮想マシンを開き、管理ユーザーアカウントでログオンします。
2. コンソールウィンドウのメニューから [操作]、[統合サービスセットアップディスクの挿入] の順に選択します。
3. [自動再生] ウィンドウで [Hyper-V統合サービスのインストール] を選択します。Hyper-V統合サービスのインストールが開始されます。
4. インストールが完了したら、仮想マシンを再起動します。

仮想マシンへのリモートデスクトップ接続の許可

Install CaptureでHyper-V仮想マシンを使用するには、仮想マシンがリモートデスクトップ接続を許可するように構成されている必要があります。Hyper-Vマネージャーにアクセスできない場合は、次の手順を実行するようHyper-Vの管理者に依頼してください。

1. 仮想マシンにログオンします。
2. [コントロールパネル]、[システム] の順に開きます（必要であれば最初にクラシック表示に切り替えます）。
3. [システムのプロパティ] ダイアログボックスで、[リモート] タブをクリックします。
4. [リモートデスクトップ] で、[このコンピュータにユーザーがリモートで接続することを許可する] チェックボックスをオンにします。
5. [OK] をクリックして変更を保存します。

仮想マシンでのDCOMの有効化

Hyper-Vホストと仮想マシンの間で通信するには、仮想マシンでDCOMを有効にする必要があります。DCOMを有効にするには、「[DCOMの有効/無効を切り替える](#)」を参照してください。また、DCOMのためにポート135が開放されていることを確認してください。

AppDNAマシン上の共有フォルダーの作成

ここでは、AppDNAマシン上にフォルダーを作成し、そのフォルダーを共有して仮想マシンが読み書きを行えるようにする方法について説明します。

1. AppDNAマシン上にInstall Captureの出力を格納するフォルダー（C:\AppDNAOutputなど）を作成します。
2. 作成したフォルダーを共有し、すべてのユーザーに読み取りおよび書き込みのアクセス許可を与えます。次に例を示します。
 1. Windowsエクスプローラーを開き、共有するフォルダーを検索します。
 2. フォルダーを右クリックして、[共有]、[詳細な共有] の順に選択します。
 3. [詳細な共有] をクリックし、[詳細な共有] ダイアログボックスで[このフォルダーを共有する] チェックボックスをオンにします。
 4. [アクセス許可] をクリックします。
 5. [アクセス許可] ダイアログボックスで、[Everyone] をクリックし、[フルコントロール]、[変更]、および[読み取り] について [許可] チェックボックスをオンにします。
 6. [OK] を2回クリックします。

注：仮想マシンから入力ファイルの場所にもアクセスできる必要があります。組織内で展開されたアプリケーションを含む既存の共有フォルダーを使用するには、そのフォルダーに仮想マシン内からアクセスできるようにします。それ以外の場合は、これらの入力ファイルを出力ファイルと同じフォルダーに格納するか、入力ファイル用に別の共有フォルダーを作成しま

す。どちらの場合も、仮想マシンから入力ファイルを読み取ることができる必要があります。

仮想マシンへのユーザーのドメインアカウントの管理者としての追加

注：仮想マシンでユーザーのドメインアカウントが既に管理者ユーザーとしてセットアップされている場合は、この手順を再実行する必要はありません。

1. 仮想マシンにログオンします。
2. [コントロールパネル]、[管理ツール]、[コンピューターの管理]の順に開きます（必要であれば最初にクラシック表示に切り替えます）。
3. 左ペインのツリーで、[システムツール]、[ローカルユーザーとグループ]、[グループ]の順にクリックします。
4. 右ペインで [Administrators] をダブルクリックします。
5. [Administratorsのプロパティ] ダイアログボックスで [追加] をクリックします。
6. [ユーザーの選択]、[コンピューター]、または [グループ] ダイアログボックスで、[選択するオブジェクト名を入力してください] ボックスにドメイン修飾されたユーザー名（例：<Domain>\<User>）を入力します。
7. [OK] をクリックして [ユーザーの選択] ダイアログボックスを閉じます。
8. [OK] をクリックして [Administratorsのプロパティ] ダイアログボックスを閉じます。

仮想マシンの自動ログオンの構成

これはInstall Captureを高速化するオプションの手順です。この手順を実行しない場合は、仮想マシンを起動するたびに、ユーザーのドメインアカウントを使用して手動でログオンする必要があります。

仮想マシンで、<http://support.microsoft.com/kb/315231>の手順に従って、ユーザーのドメインアカウントを使用した自動ログオンをセットアップします。

AppDNAマシンおよび仮想マシンにおける簡易ファイルの共有の無効化

AppDNAマシンと仮想マシンの両方で次の手順を実行します。

1. Windowsエクスプローラーで、[ツール]、[フォルダーオプション]の順に選択します（Windows 8.1では、Windowsエクスプローラーの[整理]メニューから[フォルダーと検索のオプション]を選択します）。
2. [フォルダーオプション] ダイアログボックスで、[表示] タブをクリックします。
3. [簡易ファイルの共有を使用する（推奨）] チェックボックスをオフにします（Windows 8.1では、[共有ウィザードを使用する（推奨）] チェックボックスをオフにします）。
4. [OK] をクリックします。

AppDNAマシンでのアンチウイルス構成

AppDNAマシン上のアンチウイルスソフトウェアを、Install Captureの出力フォルダーおよび入力フォルダーに対するアクセス時のスキャンが無効になるように構成する必要があります。たとえば、Norton Anti-Virusの場合は、AppDNAの出力フォルダーと入力フォルダーに対するオートプロテクトオプションを無効にします。

共有フォルダーへのアクセスの確認

AppDNAマシン上に作成した共有フォルダーに仮想マシンからアクセスできることを確認する必要があります。

仮想マシンで、Windowsの[スタート] ボタン、[ファイル名を指定して実行] ボックスに次のように入力します。

```
\\AppDNAOutput
```

ここで、はAppDNAマシンの名前です。

AppDNAマシン上の共有フォルダーが開いたら、仮想マシンからアクセスできると確認できたことになります。トラブルシューティングのヒントについては、「[仮想マシンから共有フォルダーへのアクセスのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

仮想マシンへのAppDNA VM構成ツールのMSIのインストール

これを行うには、Citrix AppDNA VM Configuration.msiという名前のインストーラーが必要です。これはAppDNAに付属しており、AppDNAのインストール時にAppDNAインストールフォルダーのToolsサブフォルダーにコピーされます。デフォルトの場所はC:\Program Files\Citrix\AppDNA\Tools (64ビットマシンの場合はC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Tools) です。

1. デフォルトのファイルの場所をそのまま使用して、仮想マシン内にCitrix AppDNA VM構成ツールのMSIをインストールします。
2. 仮想マシンを再起動します。

重要： AppDNA VM構成ツールのMSIのバージョンが、お使いのAppDNAのバージョンと同じであることを確認してください。これは、AppDNAをアップグレードしたら仮想マシン上のVM構成もアップグレードする必要があるということを意味します。

AppDNAの管理者特権での実行の構成

注：この手順は、Windows 8のHyper-Vクライアントを使用する場合にのみ必要です。

Windows 8のHyper-Vクライアントを使用する場合は、仮想マシンと通信するとき、たとえば、仮想マシン構成ウィザードやInstall Captureを実行するときに、AppDNAを管理者として実行する必要があります。

次の手順に従って、AppDNAを常に管理者として実行するように構成することができます。

1. 必要であれば、AppDNAを閉じます。
2. WindowsエクスプローラーでAppDNAの主要実行可能ファイル (appTitude.exe) を見つけます。以下の表は、このファイルのデフォルトの場所を示します。

マシンの種類	デフォルトの場所
32ビット	C:\Program Files\Citrix\AppDNA\Client
64ビット	C:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Client

3. ファイルを右クリックして、[プロパティ] を選択します。
4. [互換性] タブをクリックします。
5. [特権レベルの] [管理者としてこのプログラムを実行する] チェックボックスをオンにします。
6. [OK] をクリックして変更を保存します。

仮想マシンのスナップショットの作成

1. Hyper-Vマネージャーで仮想マシンに接続します。
2. コンソールウィンドウのメニューから[操作]、[スナップショット]の順に選択します。[スナップショット名] ダイアログボックスにスナップショットの名前を入力して、[はい] をクリックします。

これで、AppDNA仮想マシン構成ウィザードを使用して、Install Captureで使用する仮想マシン構成をセットアップする準備ができました。手順については「[Hyper-V仮想マシンの構成](#)」を参照してください。

Hyper-V仮想マシンの構成

Oct 16, 2015

このトピックでは、仮想マシン構成ウィザードを使用してHyper-Vの仮想マシン構成をセットアップする手順について説明します。

この例では、「[Install Capture用のHyper-V仮想マシンのセットアップ](#)」の説明に従ってHyper-Vマネージャーを使用して仮想マシンをセットアップしているか、次のすべての条件に当てはまることを前提としています。

- 「[Install Capture用のHyper-V仮想マシンのセットアップ](#)」で説明している前提条件を満たしている。
- Windows 8のHyper-Vクライアントを使用する場合は、「[Install Capture用のHyper-V仮想マシンのセットアップ](#)」の説明に従ってAppDNAを管理者特権で実行するように構成している。
- Hyper-Vの管理者が仮想マシンにHyper-V統合サービスをインストールしていて、リモートデスクトップ接続を許可するように構成している。
- 「[Install Capture用のHyper-V仮想マシンのセットアップ](#)」で説明しているAppDNAマシンのセットアップタスクを実行している。

1. AppDNAを起動します。
2. AppDNAのメニューで、[Edit]、[Settings]の順に選択します。
3. [Virtual Machines] タブで、[New]、[Next]の順にクリックします。
4. [Virtual Machine Configuration Details] ページで仮想マシン構成の名前および説明を入力し、[Hyper-V]、[Next]の順にクリックします。
5. [Hyper-V Host Details] ページでは、Hyper-VサーバーまたはHyper-Vクライアントについて以下の項目を指定します。
 - **Hyper-Vサーバー** - Hyper-VホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名を指定します。次に、Hyper-Vへの接続に使用するアカウントのユーザー名とパスワードを入力します。ユーザー名にはマシン名を含める必要があります。形式は「machinename\user」です。これがドメインアカウントである場合は、ドメインで修飾されたユーザー名（domain\userやuser@domain.comなど）を入力します。
標準のドメインアカウントではなく、パスワードが期限切れにならないように設定されている専用のHyper-Vユーザーアカウントを使用することをお勧めします。

重要：将来パスワードを変更した場合は、このウィザードをもう一度実行して新しいパスワードを入力する必要があります。

- **Hyper-V client** - 「localhost」と [Hostname / IP Address] ボックスに入力し、[Username] ボックスと [Password] ボックスは空白のままにします（この構成では、AppDNAをHyper-Vクライアントと同じマシンで実行する必要があります）。
6. [Hyper-V Virtual Machine] ページで、使用する仮想マシンを選択します。
これはこのAppDNAクライアントから実行されるInstall Capture専用の仮想マシンである必要があります。
 7. [Hyper-V Snapshot Selection] ページで、使用する仮想マシンのスナップショットを選択します。「[Install Capture用のHyper-V仮想マシンのセットアップ](#)」の説明に従って仮想マシンをセットアップした場合、これは最後の手順で取得したスナップショットです。一覧にスナップショットがない場合は、[Create] をクリックして仮想マシンのスナップショットを作成します。
ウィザードにより、一連のチェックが実行されます。いずれかのチェックが失敗した場合は、トラブルシューティングについて「[Hyper-Vスナップショットの選択](#)」を参照してください。次に、コンソールで仮想マシンが起動します。特にゲストオペレーティングシステムを起動する必要がある場合などに、数分かかる可能性があります。仮想マシンのセットアップ手順を実行していない場合は、コンソールに仮想マシンが表示されたときにその仮想マシンでこの手順を実行します。ウィザードの最後に別のスナップショットを取得することもできます。

8. [Virtual Machine Connection] ページでは、通常、デフォルトの値をそのまま使用できます。これは、ウィザードによりゲストオペレーティングシステムのマシン名の取得が試行され、通常は [Remote Admin TCP port] ボックスの値を変更する必要がないためです。
この手順の詳細、および仮想マシンのIPアドレスの確認方法については、[仮想マシンの接続](#) を参照してください。
9. [Capture Output Location] ページで [Copy results to network share (faster)] を選択し、前にAppDNAマシンで作成した出力フォルダーを指定します。UNCパスを使用し、ホスト名またはIPアドレスでクライアントまたはサーバーマシンを特定してください。たとえば、\\AppDNAMachine\AppDNAOutputとします。
10. [Virtual Machine State] ページで [Power off the VM and take a snapshot (Recommended)] を選択して、[Next]、[Finish] の順にクリックします。
ウィザードが終了し、[Settings] ダイアログボックスの [Install Capture] ページに戻ります。このページに仮想マシン構成が表示されます。
11. [保存] をクリックします。

[Import Applications] 画面の [Install Capture] タブの仮想マシン構成の一覧に、仮想マシン構成が表示されます。

vSphere

Oct 16, 2015

このトピックでは、Windows XPからWindows 7に移行するときに、Install Captureで使用するVMware vSphere仮想マシンを（AppDNAを実行するマシンと共に）セットアップする方法の例について説明します。この例では、実行可能なアプローチの1つについて説明します。全般的なセットアップ要件について詳しくは、「[仮想マシンのセットアップ](#)」を参照してください。

前提条件

- AppDNAを実行しているマシンとは別のマシンにVMware vSphereが既にインストールされ構成されていること。
- Install Captureで使用するための、Windows XPのクリーンなビルドを含むvSphere仮想マシンが既に存在していること。vSphere仮想マシンの作成について詳しくは、VMware vSphereのドキュメントを参照してください。
- 仮想マシンが、AppDNAを実行しているマシン（AppDNAマシンと呼びます）と同じドメインに接続されていること。
- vSphereホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名がわかっており、vSphereに接続して高度な仮想マシンの操作を実行できるアカウントのユーザー名とパスワードがわかっていること。少なくとも、ユーザーアカウントに、仮想マシンの電源のオン/オフ、仮想マシンのリセットと一時停止、およびスナップショットの作成と元に戻す権限が必要です。
- ゲストオペレーティングシステムの管理用ユーザーアカウントのユーザー名とパスワードがわかっていること。

この例では、仮想マシンがAppDNAマシン上の共有フォルダーにアクセスできるように、仮想マシンへの自動ログオンを、ユーザーがAppDNAマシン上のWindowsにログオンするときに使用するドメインユーザーアカウントと同じアカウントで構築します（以降では、これをユーザーのドメインアカウントと呼びます）。

注：次の手順では、VMware vSphere Clientで仮想マシンをセットアップします。VMware vSphere Clientにアクセスできない場合は、vSphereの管理者に依頼して、仮想マシンにVMware Toolsをインストールし、リモートデスクトップ接続を許可する構成にもらう必要があります。そのほかのすべてのセットアップ手順は、AppDNA仮想マシン構成ウィザードで仮想マシンを起動して行います。

VMware vSphere Clientで仮想マシンを開く

ここでは、仮想マシンをセットアップするためにVMware vSphere Clientのコンソールで仮想マシンにログオンする手順について説明します。

VMware vSphere Clientのコンソールで仮想マシンを開くには：

1. Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、[すべてのプログラム]、[VMware]、[VMware vSphere Client] の順に選択します。画面の指示に従って接続の詳細を入力します。
2. 左ペインのツリーで、目的の仮想マシンを見つけます。
3. 仮想マシンを右クリックして、[Open Console] を選択します。
4. 必要に応じて、緑の矢印ボタンをクリックして仮想マシンの電源をオンにし、仮想マシンにログオンします。

これで、後述の仮想マシンのセットアップタスクを実行できます。

仮想マシンへのVMware Toolsのインストール

Install CaptureでvSphere仮想マシンを使用するには、vSphere仮想マシンにVMware Toolsがインストールされている必要があります。VMware vSphere Clientにアクセスできない場合は、次の手順を実行するようvSphereの管理者に依頼することができます。

1. VMware vSphere Clientで仮想マシンにログオンします。
2. VMware vSphere Clientのメニューで、[Inventory]、[Virtual Machine]、[Guest]、[Install/Upgrade VMware

Tools] の順に選択します。

3. [Install VMware Tools] ダイアログボックスで、[OK] をクリックします。VMware Toolsのインストーラーが起動します。
4. [Setup Type] ページで、[Typical] または [Complete] を選択してVMware Toolsをインストールします。
5. インストールが完了したら、仮想マシンを再起動します。

仮想マシンへのリモートデスクトップ接続の許可

Install CaptureでvSphere仮想マシンを使用するには、vSphere仮想マシンがリモートデスクトップ接続を許可するように構成されている必要があります。VMware vSphere Clientにアクセスできない場合は、次の手順を実行するようvSphereの管理者に依頼することができます。

1. VMware vSphere Clientで仮想マシンにログオンします。
2. [コントロールパネル]、[システム] の順に開きます（必要であれば最初にクラシック表示に切り替えます）。
3. [システムのプロパティ] ダイアログボックスで、[リモート] タブをクリックします。
4. [リモートデスクトップ] で、[このコンピュータにユーザーがリモートで接続することを許可する]チェックボックスをオンにします。
5. [OK] をクリックして変更を保存します。

AppDNAマシン上の共有フォルダーの作成

ここでは、AppDNAマシン上にフォルダーを作成し、そのフォルダーを共有して仮想マシンが読み書きを行えるようにする方法について説明します。

1. AppDNAマシン上にInstall Captureの出力を格納するフォルダー（C:\AppDNAOutputなど）を作成します。
2. 作成したフォルダーを共有し、すべてのユーザーに読み取りおよび書き込みのアクセス許可を与えます。次に例を示します。
 1. Windowsエクスプローラーを開き、共有するフォルダーを検索します。
 2. フォルダーを右クリックして、[共有]、[詳細な共有] の順に選択します。
 3. [詳細な共有] をクリックし、[詳細な共有] ダイアログボックスで[このフォルダーを共有する]チェックボックスをオンにします。
 4. [アクセス許可] をクリックします。
 5. [アクセス許可] ダイアログボックスで、[Everyone] をクリックし、[フルコントロール]、[変更]、および [読み取り] について [許可] チェックボックスをオンにします。
 6. [OK] を2回クリックします。

注：仮想マシンから入力ファイルの場所にもアクセスできる必要があります。組織内で展開されたアプリケーションを含む既存の共有フォルダーを使用するには、そのフォルダーに仮想マシン内からアクセスできるようにします。それ以外の場合は、これらの入力ファイルを出力ファイルと同じフォルダーに格納するか、入力ファイル用に別の共有フォルダーを作成します。どちらの場合も、仮想マシンから入力ファイルを読み取ることができる必要があります。

仮想マシンへのユーザーのドメインアカウントの管理者としての追加

注：仮想マシンでユーザーのドメインアカウントが既に管理者ユーザーとしてセットアップされている場合は、この手順を実行する必要はありません。

1. VMware vSphere Clientで管理者ユーザーアカウントを使用して仮想マシンにログオンします。
2. [コントロールパネル]、[管理ツール]、[コンピューターの管理] の順に開きます（必要であれば最初にクラシック表示に切り替えます）。
3. 左ペインのツリーで、[システムツール]、[ローカルユーザーとグループ]、[グループ] の順にクリックします。
4. 右ペインで [Administrators] をダブルクリックします。
5. [Administratorsのプロパティ] ダイアログボックスで [追加] をクリックします。

6. [ユーザーの選択]、[コンピューター]、または[グループ] ダイアログボックスで、[選択するオブジェクト名を入力してください] ボックスにドメイン修飾されたユーザー名 (例: Domain\Userを入力します)。
7. [OK] をクリックして [ユーザーの選択] ダイアログボックスを閉じます。
8. [OK] をクリックして [Administratorsのプロパティ] ダイアログボックスを閉じます。

仮想マシンの自動ログオンの構成

これはInstall Captureを高速化するオプションの手順です。この手順を実行しない場合は、仮想マシンを起動するたびに、ユーザーのドメインアカウントを使用して手動でログオンする必要があります。

仮想マシンで、<http://support.microsoft.com/kb/315231>の手順に従って、ユーザーのドメインアカウントを使用した自動ログオンをセットアップします。

AppDNAマシンおよび仮想マシンにおける簡易ファイルの共有の無効化

AppDNAマシンと仮想マシンの両方で次の手順を実行します。

1. Windowsエクスプローラーで、[ツール]、[フォルダーオプション] の順に選択します (Windows 8.1では、Windows エクスプローラーの [整理] メニューから [フォルダーと検索のオプション] を選択します)。
2. [フォルダーオプション] ダイアログボックスで、[表示] タブをクリックします。
3. [簡易ファイルの共有を使用する (推奨)] チェックボックスをオフにします (Windows 8.1では、[共有ウィザードを使用する (推奨)] チェックボックスをオフにします)。
4. [OK] をクリックします。

AppDNAマシンでのアンチウイルス構成

AppDNAマシン上のアンチウイルスソフトウェアを、Install Captureの出力フォルダーおよび入力フォルダーに対するアクセス時のスキャンが無効になるように構成する必要があります。たとえば、Norton Anti-Virusの場合は、AppDNAの出力フォルダーと入力フォルダーに対するオートプロテクトオプションを無効にします。

共有フォルダーへのアクセスの確認

AppDNAマシン上に作成した共有フォルダーに仮想マシンからアクセスできることを確認する必要があります。

仮想マシンで、Windowsの [スタート] ボタン、[ファイル名を指定して実行] ボックスに次のように入力します。

```
\\AppDNAOutput
```

ここで、はAppDNAマシンの名前です。

AppDNAマシン上の共有フォルダーが開いたら、仮想マシンからアクセスできると確認できたことになります。トラブルシューティングのヒントについては、「[仮想マシンから共有フォルダーへのアクセスのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

仮想マシンへのAppDNA VM構成ツールのMSIのインストール

これを行うには、Citrix AppDNA VM Configuration.msiという名前のインストーラーが必要です。これはAppDNAに付属しており、AppDNAのインストール時にAppDNAインストールフォルダーのToolsサブフォルダーにコピーされます。デフォルトの場所はC:\Program Files\Citrix\AppDNA\Tools (64ビットマシンの場合はC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Tools) です。

1. デフォルトのファイルの場所をそのまま使用して、仮想マシン内にCitrix AppDNA VM構成ツールのMSIをインストールします。
2. 仮想マシンを再起動します。

重要: AppDNA VM構成ツールのMSIのバージョンが、お使いのAppDNAのバージョンと同じであることを確認してください。これは、AppDNAをアップグレードしたら仮想マシン上のVM構成もアップグレードする必要があるということを意味し

ます。

仮想マシンのスナップショットの作成

1. VMware vSphere Clientで仮想マシンにログオンします。
2. VMware vSphere Clientのメニューで、 [Inventory] 、 [Virtual Machine] 、 [Snapshot] 、 [Take Snapshot] の順に選択します。
3. [Take Virtual Machine Snapshot] ダイアログボックスで、スナップショットの [Name] と [Description] を入力し、 [Snapshot the virtual machine's memory] チェックボックスをオンにします。
4. [OK] をクリックします。

これで、AppDNA仮想マシン構成ウィザードを使用して、Install Captureで使用する仮想マシン構成をセットアップする準備ができました。手順については、「[vSphere仮想マシンの構成](#)」を参照してください。

vSphere仮想マシンの構成

Nov 13, 2015

このトピックでは、仮想マシン構成ウィザードを使用してvSphereの仮想マシン構成をセットアップする手順について説明します。

この例では、「[Install Capture用のvSphere仮想マシンのセットアップ](#)」の説明に従ってVMware vSphere Clientを使用して仮想マシンをセットアップしているか、次のすべての条件に当てはまることを前提としています。

- 「[Install Capture用のvSphere仮想マシンのセットアップ](#)」で説明している前提条件を満たしている。
- vSphereの管理者が仮想マシンにVMware Toolsをインストールしていて、リモートデスクトップ接続を許可するように構成している。
- 「[Install Capture用のvSphere仮想マシンのセットアップ](#)」で説明しているAppDNAマシンのセットアップタスクを実行している。

1. AppDNAを起動します。
2. AppDNAのメニューで、[Edit]、[Settings]の順に選択します。
3. [Virtual Machines] タブで、[New]、[Next]の順にクリックします。
4. [Virtual Machine Configuration Details] ページで仮想マシン構成の名前および説明を入力し、[vSphere]、[Next]の順にクリックします。
5. [vSphere host details] ページで、vSphereホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名を指定します。ハイパーバイザーに直接接続している場合は、SSO (シングルサインオン) サーバーフィールドを空のままにします。これ以外の場合は、シングルサインオンサーバーのIPアドレスまたはDNS名も指定します。次に、ユーザー名とパスワードを入力します。標準のドメインアカウントではなく、パスワードが期限切れにならないように設定されている専用のvSphereユーザーアカウントを使用することをお勧めします。これがドメインアカウントである場合は、ドメインで修飾されたユーザー名 (例、「domain\user」または「user@domain.com」) を入力します。

重要: 将来パスワードを変更した場合は、このウィザードをもう一度実行して新しいパスワードを入力する必要があります。

6. [vSphere Virtual Machine] ページで、使用する仮想マシンを選択します。
これはこのAppDNAクライアントから実行されるInstall Capture専用の仮想マシンである必要があります。
7. [Snapshot selection] ページで、使用する仮想マシンのスナップショットを選択します。「[Install Capture用のvSphere仮想マシンのセットアップ](#)」の説明に従って仮想マシンをセットアップした場合、これは最後の手順で取得したスナップショットです。一覧にスナップショットがない場合は、[Create] をクリックして仮想マシンのスナップショットを作成します。
ウィザードにより一連のチェックが実行され、コンソールで仮想マシンが起動します。特にゲストオペレーティングシステムを起動する必要がある場合などに、数分かかる可能性があります。仮想マシンのセットアップ手順を実行していない場合は、コンソールに仮想マシンが表示されたときにその仮想マシンでこの手順を実行します。ウィザードの最後に別のスナップショットを取得することもできます。
8. [Virtual machine connection] ページでは、通常、デフォルトの値をそのまま使用できます。これは、ウィザードによりゲストオペレーティングシステムのマシン名の取得が試行され、通常は [Remote Admin TCP port] ボックスの値を変更する必要がないためです。
この手順の詳細、および仮想マシンのIPアドレスの確認方法については、「[仮想マシンの接続](#)」を参照してください。
9. [Capture output location] ページで [Copy results to network share (faster)] を選択し、前にAppDNAマシンで作成した出力フォルダーを指定します。UNCパスを使用し、ホスト名またはIPアドレスでクライアントまたはサーバーマシンを特

定してください。たとえば、\\AppDNAMachine\AppDNAOutput。

10. [Virtual Machine State] ページで、[Power off the VM and take a snapshot (Recommended)] を選択して [Next]、[Finish] の順にクリックします。

ウィザードが終了し、[Settings] ダイアログボックスの [Install Capture] ページに戻ります。このページに仮想マシン構成が表示されます。

11. [Save] をクリックします。

[Import Applications] 画面の [Install Capture] タブの仮想マシン構成の一覧に、仮想マシン構成が表示されます。

XenServer

Oct 16, 2015

このトピックでは、Windows XPからWindows 8.1に移行するときに、Install Captureで使用するCitrix XenServer仮想マシンを（AppDNAを実行するマシンと共に）セットアップする方法の例について説明します。この例では、実行可能なアプローチの1つについて説明します。一般的なセットアップ要件について詳しくは、「[仮想マシンのセットアップ](#)」を参照してください。

前提条件

1. AppDNAを実行しているマシンとは別のマシンにXenServerが既にインストールされ構成されていること。
2. Install Captureで使用するための、Windows XPのクリーンなビルドを含むXenServer仮想マシンが既に存在していること。XenServer仮想マシンの作成について詳しくは、Citrix XenCenterのドキュメントを参照してください（XenCenterは、XenServer環境の管理や、Windowsデスクトップマシンからの仮想マシンの展開、管理、監視に使用できるデスクトップツールです）。
3. 仮想マシンが、AppDNAを実行しているマシン（AppDNAマシンと呼びます）と同じネットワークに接続されていること。
4. 仮想マシンがドメインに接続されていないこと。ドメインから仮想マシンを削除する手順については、「[ドメインからの仮想マシンの削除](#)」を参照してください。
5. XenServerホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名がわかっており、XenServerに接続して高度な仮想マシンの操作（スナップショットの作成とロールバックなど）を実行できるアカウントのユーザー名とパスワードがわかっていること。
6. ゲストオペレーティングシステムの管理用ユーザーアカウントのユーザー名とパスワードがわかっていること。
7. ユーザーアカウントに高度な操作の権限が付与されていること。通常、これはユーザーアカウントが「VMパワー管理者」の役割を持つ必要があることを意味します。

XenCenterでの仮想マシンの起動

ここでは、仮想マシンをセットアップするためにXenCenterのコンソールで仮想マシンにログオンする手順について説明します。XenCenterにアクセスできない場合は、AppDNA仮想マシン構成ウィザードに従ってセットアップ手順を実行できます（このウィザードは仮想マシンをコンソールで開きません）。

XenCenterのコンソールで仮想マシンを開くには

1. Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、[すべてのプログラム]、[Citrix]、[Citrix XenCenter] の順に選択します。メッセージに従って接続の詳細を入力します。
2. 左側の [Resources] ペインで、仮想マシンを右クリックし、[Start] を選択します。
3. [Console] タブをクリックし、管理者ユーザーとして仮想マシンにログオンします。

これで、後述の仮想マシンのセットアップタスクを実行できます。

AppDNAマシンおよび仮想マシンでのユーザーの作成

1. AppDNA マシンでappdnaなどの管理者ユーザーアカウントを作成し、無期限のパスワードを指定します。次に例を示します。
 1. [コントロールパネル] を開きます。必要に応じて、クラシック表示に切り替えます。
 2. [管理ツール] グループで、[コンピューターの管理] をダブルクリックします。
 3. 左ペインのツリーで、[システムツール]、[ローカルユーザーとグループ]、[ユーザー] の順に展開します。
 4. [ユーザー] をクリックし、[操作] メニューから [新しいユーザー] を選択します。
 5. ダイアログボックスに適切な情報を入力します。
 6. [作成] をクリックしてから、[閉じる] をクリックします。

7. ユーザーを右クリックして、[プロパティ] を選択します。
 8. [所属するグループ] タブをクリックします。
 9. [追加] をクリックしてから、[選択するオブジェクト名を入力してください] ボックスに「管理者」と入力します。
 10. [名前の確認] をクリックし、[OK] をクリックします。
2. 必要に応じて、仮想マシンの電源を入れ、同じ手順に従って仮想マシンで同一の管理者ユーザーアカウントを作成し、同様に失効しないパスワードを設定します。

仮想マシンの自動ログオンの構成

これはオプションの手順です。仮想マシンを起動するたびに手動でログオンする必要がなくなるので、Install Captureを高速化できます。

1. 仮想マシンでWindowsのコマンドウィンドウを開きます。
2. ウィンドウに「control userpasswords2」と入力します。
3. [ユーザーアカウント] ダイアログボックスで、[ユーザーがこのコンピューターを使うには、ユーザー名とパスワードの入力が必要] チェックボックスをオフにし、[OK] をクリックします。
4. [自動ログオン] ダイアログボックスで、Install Captureユーザーの名前とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。
5. ユーザーアカウント制御をサポートするオペレーティングシステムを使用している場合は、ユーザーアカウント制御を無効にします。 <http://support.microsoft.com/kb/975787>を参照してください。

注：自動ログオンをセットアップする代替手段については、<http://support.microsoft.com/kb/315231>を参照してください。ドメインユーザーアカウントを使用している場合は、このメカニズムを使用する必要があります。

AppDNAマシンおよび仮想マシンにおける簡易ファイルの共有の無効化

AppDNAマシンと仮想マシンの両方で次の手順を実行します。

1. Windowsエクスプローラーで、[ツール]、[フォルダーオプション] の順に選択します（Windows 8.1では、Windowsエクスプローラーの[整理]メニューから[フォルダーと検索のオプション]を選択します）。
2. [フォルダーオプション] ダイアログボックスで、[表示] タブをクリックします。
3. [簡易ファイルの共有を使用する（推奨）] チェックボックスをオフにします（Windows 8.1では、[共有ウィザードを使用する（推奨）] チェックボックスをオフにします）。
4. [OK] をクリックします。

AppDNAマシン上の共有フォルダーの作成

ここでは、AppDNAマシン上にフォルダーを作成し、そのフォルダーを共有して仮想マシンが読み書きを行えるようにする方法について説明します。

1. AppDNAマシン上にInstall Captureの出力を格納するフォルダー（C:\AppDNAOutputなど）を作成します。
2. 作成したフォルダーを共有し、すべてのユーザーに読み取りおよび書き込みのアクセス許可を与えます。次に例を示します。
 1. Windowsエクスプローラーを開き、共有するフォルダーを検索します。
 2. フォルダーを右クリックして、[共有]、[詳細な共有] の順に選択します。
 3. [詳細な共有] をクリックし、[詳細な共有] ダイアログボックスで[このフォルダーを共有する] チェックボックスをオンにします。
 4. [アクセス許可] をクリックします。
 5. [アクセス許可] ダイアログボックスで、[Everyone] をクリックし、[フルコントロール]、[変更]、および[読み取り] について [許可] チェックボックスをオンにします。
 6. [OK] を2回クリックします。

注：仮想マシンから入力ファイルの場所にもアクセスできる必要があります。組織内で展開されたアプリケーションを含む既存の共有フォルダーを使用するには、そのフォルダーに仮想マシン内からアクセスできるようにします。それ以外の場合は、これらの入力ファイルを出力ファイルと同じフォルダーに格納するか、入力ファイル用に別の共有フォルダーを作成します。どちらの場合も、仮想マシンから入力ファイルを読み取ることができる必要があります。

AppDNAマシンでのアンチウイルス構成

AppDNAマシン上のアンチウイルスソフトウェアを、Install Captureの出力フォルダーおよび入力フォルダーに対するアクセス時のスキャンが無効になるように構成する必要があります。たとえば、Norton Anti-Virusの場合は、AppDNAの出力フォルダーと入力フォルダーに対するオートプロテクトオプションを無効にします。

共有フォルダーへのアクセスの確認

AppDNAマシン上に作成した共有フォルダーに仮想マシンからアクセスできることを確認する必要があります。

仮想マシンで、Windowsの [スタート] ボタン、 [ファイル名を指定して実行] ボックスに次のように入力します。

```
\\AppDNAOutput
```

ここで、はAppDNAマシンの名前です。

AppDNAマシン上の共有フォルダーが開いたら、仮想マシンからアクセスできると確認できたことになります。トラブルシューティングのヒントについては、「[仮想マシンから共有フォルダーへのアクセスのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

仮想マシンへのAppDNA VM構成ツールのMSIのインストール

これを行うには、Citrix AppDNA VM Configuration.msiという名前のインストーラーが必要です。これはAppDNAに付属しており、AppDNAのインストール時にAppDNAインストールフォルダーのToolsサブフォルダーにコピーされます。デフォルトの場所はC:\Program Files\Citrix\AppDNA\Tools (64ビットマシンの場合はC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Tools) です。

1. デフォルトのファイルの場所をそのまま使用して、仮想マシン内にCitrix AppDNA VM構成ツールのMSIをインストールします。
2. 仮想マシンを再起動します。

重要： AppDNA VM構成ツールのMSIのバージョンが、お使いのAppDNAのバージョンと同じであることを確認してください。これは、AppDNAをアップグレードしたら仮想マシン上のVM構成もアップグレードする必要があるということを意味します。

仮想マシンのスナップショットの作成

この手順では、XenCenterへのアクセスが必要になります。XenCenterにアクセスできない場合は、AppDNA仮想マシン構成ウィザードに、スナップショットを作成するオプションが用意されています。

1. XenCenterウィンドウの左側にある [Resources] ペインで仮想マシンを選択します。
2. [Snapshots] タブをクリックします。
3. ツールバーの [Take Snapshot] をクリックします。
4. [Take Snapshot] ダイアログボックスで、新しいスナップショットの [Name] と (任意で) [Description] を入力します。
5. [Snapshot mode] の下にある [Snapshot the virtual machine's disks and memory] オプションが選択可能な場合は、選択します。選択可能でない場合は、[Snapshot the virtual machine's disks] オプションを選択します。[Snapshot mode] のオプションは、XenServerのライセンスによって異なります。
6. [Take Snapshot] をクリックします。

これで、AppDNA仮想マシン構成ウィザードを使用して、Install Captureで使用する仮想マシン構成をセットアップする準備ができました。手順については「[XenServer仮想マシンの構成](#)」を参照してください。

ドメインからの仮想マシンの削除

Oct 16, 2015

一部の環境では、Install Captureに干渉する可能性があるファイアウォールとそのほかの設定はドメインポリシーによって設定されます。このため、Install Captureの仮想マシンはドメインに接続しないことをお勧めします。

通常、XenServer仮想マシンはドメインに接続されています。次の手順を使用して、XenServer仮想マシンをドメインから削除します。

1. XenServerコンソールで、管理者ユーザーとして仮想マシンにログオンします。
2. Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、 [マイコンピュータ] を右クリックして、 [プロパティ] を選択します。
3. [システムのプロパティ] ダイアログボックスで、 [コンピューター名] タブをクリックして、 [変更] をクリックします。
4. [コンピューター名の変更] ダイアログボックスの [所属するグループ] で、 [ワークグループ] をクリックします。
5. ワークグループ名 (例: WORKGROUP) を入力します。
6. [OK] をクリックします。
7. 仮想マシンを再起動します。

XenServer仮想マシンの構成

Oct 16, 2015

このトピックでは、仮想マシン構成ウィザードを使用してXenServerの仮想マシン構成をセットアップする手順について説明します。

この例では、次の状況を前提としています。

- 「[Install Capture用のXenServer仮想マシンのセットアップ](#)」の説明に従って仮想マシンのセットアップを済ませている。この場合は、Citrix XenCenterが必要です。
- または、前述のトピックで説明されている前提要件のインストールと、AppDNAマシンのセットアップを済ませていて、適切な仮想マシンがあるが、仮想マシンのセットアップタスクをまだ済ませていないこの場合はXenCenterは不要です。

1. AppDNAを起動します。
2. AppDNAのメニューで、[Edit]、[Settings]の順に選択します。
3. [Settings] ダイアログボックスのサイドバーで、[Install Capture] をクリックします。
4. [Virtual Machines] タブで、[New]、[Next]の順にクリックします。
5. [Virtual Machine Configuration Details] ページで仮想マシン構成の名前および説明を入力し、[XenServer]、[Next]の順にクリックします。
6. [XenServer host details] ページで、XenServerホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名を指定します。次に、XenServerへの接続に使用するアカウントのユーザー名とパスワードを入力します。これがドメインアカウントである場合は、ドメインで修飾されたユーザー名（「domain\user」または「user@mydomain.com」など）を入力します。標準のドメインアカウントではなく、パスワードが期限切れにならないように設定されている専用のXenServerユーザーアカウントを使用することをお勧めします。

注：将来パスワードを変更した場合は、このウィザードをもう一度実行して新しいパスワードを入力する必要があります。

7. [XenServer virtual machine] ページで、使用する仮想マシンを選択して[Next]をクリックします。これはこのAppDNAクライアントから実行されるInstall Capture専用の仮想マシンである必要があります。
8. [Snapshot selection] ページで、使用する仮想マシンのスナップショットを選択します。「[Install Capture用のXenServer仮想マシンのセットアップ](#)」の説明に従って仮想マシンをセットアップした場合、これは最後の手順で取得したスナップショットです。一覧にスナップショットがない場合は、[Create] をクリックして仮想マシンのスナップショットを作成します。
9. [Next] をクリックすると、コンソールで仮想マシンが起動します。ウィザードにより、一連のチェックが実行されます。何らかの問題が発生した場合は、「[トラブルシューティング](#)」を参照してください。

「[Install Capture用のXenServer仮想マシンのセットアップ](#)」で説明されている仮想マシンのセットアップ手順を実行していない場合は、コンソールに仮想マシンが表示されたときにその仮想マシンでこの手順を実行します。ウィザードの操作最後に別のスナップショットを取得することもできます。

10. [Virtual machine connection] ページで、仮想マシンのIPアドレスを入力します。通常、[Remote Admin TCP port] を変更する必要はありません。
11. [Capture Output Location] ページで [Copy results to network share (faster)] を選択し、前にAppDNAマシンで作成した出力フォルダーを指定します。UNCパスを使用し、ホスト名またはIPアドレスでクライアントまたはサーバーマシンを特定してください。たとえば、\\<AppDNAMachine\>AppDNAOutput<>とします。
12. [Virtual Machine State] ページで、[Power off the VM and take a snapshot (Recommended)] を選択して [Next]、[Finish] の順にクリックします。

[Settings] ダイアログボックスの [Install Capture] ページに仮想マシン構成が表示されます。

13. [Save] をクリックします。

[Import Applications] 画面の [Install Capture] タブの仮想マシン構成の一覧に、仮想マシン構成が表示されます。

VMware Workstation

Oct 16, 2015

この例では、Windows XPからWindows 8.1に移行するときに、Install Captureで使用するVMware Workstationの仮想マシンとホストマシンをセットアップする手順について説明します。この例では、実行可能なアプローチの1つについて説明します。

全般的なセットアップ要件については、「[仮想マシンのセットアップ](#)」を参照してください。

注：この例は、Windows XPの適切な仮想マシンが既に使用できることを前提としています。

仮想マシンのインストールと構成

1. ホストマシンにVMware Workstationをインストールします。
2. Windowsで [スタート]、 [すべてのプログラム] からVMware Workstationを起動します。
3. VMware Workstationのコンソールで [既存の仮想マシンまたはチームを開く] をクリックします。
4. [開く] ダイアログボックスで、Windows XP仮想マシンに相当するVMXファイルを選択して[OK] をクリックします。
5. VMware Workstationのコンソールの仮想マシンのタブで、[仮想マシン設定の編集] をクリックします。
[仮想マシン設定] ダイアログボックスが開きます。
6. [ハードウェア] タブで [ネットワークアダプタ] をクリックし、 [ネットワーク接続] セクションで [ブリッジ：物理ネットワークに直接接続] を選択します。
7. [OK] をクリックして変更を保存します。
8. VMware Workstationのコンソールの仮想マシンのタブで、 [この仮想マシンをパワーオン] をクリックします。
仮想マシンが起動します。
9. 仮想マシンでWebブラウザを開き、ブリッジ接続が機能しているかどうかを確認するためにインターネット上のWebページを開きます。
10. VMware Workstationのコンソールのツールバーの赤い四角をクリックし、仮想マシンをパワーオフします。

AppDNAマシンおよび仮想マシンにおける簡易ファイルの共有の無効化

AppDNAマシンと仮想マシンの両方で次の手順を実行します。

1. Windowsエクスプローラーで、 [ツール]、 [フォルダーオプション] の順に選択します (Windows 8.1では、Windowsエクスプローラーの [整理] メニューから [フォルダーと検索のオプション] を選択します)。
2. [フォルダーオプション] ダイアログボックスで、 [表示] タブをクリックします。
3. [簡易ファイルの共有を使用する (推奨)] チェックボックスをオフにします (Windows 8.1では、 [共有ウィザードを使用する (推奨)] チェックボックスをオフにします)。
4. [OK] をクリックします。

AppDNAマシン上の共有フォルダーの作成

ここでは、AppDNAマシン上にフォルダーを作成し、そのフォルダーを共有して仮想マシンが読み書きを行えるようにする方法について説明します。

1. AppDNAマシン上にInstall Captureの出力を格納するフォルダー (C:\AppDNAOutputなど) を作成します。
2. 作成したフォルダーを共有し、すべてのユーザーに読み取りおよび書き込みのアクセス許可を与えます。次に例を示します。
 1. Windowsエクスプローラーを開き、共有するフォルダーを検索します。
 2. フォルダーを右クリックして、 [共有]、 [詳細な共有] の順に選択します。

3. [詳細な共有] をクリックし、[詳細な共有] ダイアログボックスで[このフォルダーを共有する] チェックボックスをオンにします。
4. [アクセス許可] をクリックします。
5. [アクセス許可] ダイアログボックスで、[Everyone] をクリックし、[フルコントロール]、[変更]、および[読み取り] について [許可] チェックボックスをオンにします。
6. [OK] を2回クリックします。

注：仮想マシンから入力ファイルの場所にもアクセスできる必要があります。組織内で展開されたアプリケーションを含む既存の共有フォルダーを使用するには、そのフォルダーに仮想マシン内からアクセスできるようにします。それ以外の場合は、これらの入力ファイルを出力ファイルと同じフォルダーに格納するか、入力ファイル用に別の共有フォルダーを作成します。どちらの場合も、仮想マシンから入力ファイルを読み取ることができる必要があります。

AppDNAマシンおよび仮想マシンでのユーザーの作成

1. AppDNA マシンでappdnaなどの管理者ユーザーアカウントを作成し、無期限のパスワードを指定します。次に例を示します。
 1. [コントロールパネル] を開きます。必要に応じて、クラシック表示に切り替えます。
 2. [管理ツール] グループで、[コンピューターの管理] をダブルクリックします。
 3. 左ペインのツリーで、[システムツール]、[ローカルユーザーとグループ]、[ユーザー] の順に展開します。
 4. [ユーザー] をクリックし、[操作] メニューから [新しいユーザー] を選択します。
 5. ダイアログボックスに適切な情報を入力します。
 6. [作成] をクリックしてから、[閉じる] をクリックします。
 7. ユーザーを右クリックして、[プロパティ] を選択します。
 8. [所属するグループ] タブをクリックします。
 9. [追加] をクリックしてから、[選択するオブジェクト名を入力してください] ボックスに「管理者」と入力します。
 10. [名前を確認] をクリックし、[OK] をクリックします。
2. 必要に応じて、仮想マシンの電源を入れ、同じ手順に従って仮想マシンで同一の管理者ユーザーアカウントを作成し、同様に失効しないパスワードを設定します。

仮想マシンの自動ログオンの構成

これはオプションの手順です。仮想マシンを起動するたびに手動でログオンする必要がなくなるので、Install Captureを高速化できます。

1. 仮想マシンでWindowsのコマンドウィンドウを開きます。
2. ウィンドウに「control userpasswords2」と入力します。
3. [ユーザーアカウント] ダイアログボックスで、[ユーザーがこのコンピューターを使うには、ユーザー名とパスワードの入力が必要] チェックボックスをオフにし、[OK] をクリックします。
4. [自動ログオン] ダイアログボックスで、Install Captureユーザーの名前とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。
5. ユーザーアカウント制御をサポートするオペレーティングシステムを使用している場合は、ユーザーアカウント制御を無効にします。 <http://support.microsoft.com/kb/975787>を参照してください。

注：自動ログオンをセットアップする代替手段については、<http://support.microsoft.com/kb/315231>を参照してください。ドメインユーザーアカウントを使用している場合は、このメカニズムを使用する必要があります。

共有フォルダーへのアクセスの確認

AppDNAマシン上に作成した共有フォルダーに仮想マシンからアクセスできることを確認する必要があります。

仮想マシンで、Windowsの [スタート] ボタン [ファイル名を指定して実行] ボックスに次のように入力します。

```
\\AppDNAOutput
```

ここで、はAppDNAマシンの名前です。

AppDNAマシン上の共有フォルダーが開いたら、仮想マシンからアクセスできると確認できたことになります。トラブルシューティングのヒントについては、「[仮想マシンから共有フォルダーへのアクセスのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

仮想マシンへのAppDNA VM構成ツールのMSIのインストール

これを行うには、Citrix AppDNA VM Configuration.msiという名前のインストーラーが必要です。これはAppDNAに付属しており、AppDNAのインストール時にAppDNAインストールフォルダーのToolsサブフォルダーにコピーされます。デフォルトの場所はC:\Program Files\Citrix\AppDNA\Tools (64ビットマシンの場合はC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Tools) です。

1. デフォルトのファイルの場所をそのまま使用して、仮想マシン内にCitrix AppDNA VM構成ツールのMSIをインストールします。
2. 仮想マシンを再起動します。

重要： AppDNA VM構成ツールのMSIのバージョンが、お使いのAppDNAのバージョンと同じであることを確認してください。これは、AppDNAをアップグレードしたら仮想マシン上のVM構成もアップグレードする必要があるということを意味します。

AppDNAマシンでのアンチウイルス構成

AppDNAマシン上のアンチウイルスソフトウェアを、Install Captureの出力フォルダーおよび入力フォルダーに対するアクセス時のスキャンが無効になるように構成する必要があります。たとえば、Norton Anti-Virusの場合は、AppDNAの出力フォルダーと入力フォルダーに対するオートプロテクトオプションを無効にします。

仮想マシンのスナップショットの作成

1. 赤い [停止] ボタンをクリックして、仮想マシン内のゲストオペレーティングシステムをシャットダウンします。
2. VMware Workstationのコンソールで、[VM] メニューから [スナップショット]、[スナップショットの作成] の順に選択して、仮想マシンの状態のスナップショットを作成します。

これで、AppDNA仮想マシン構成ウィザードを使用して、Install Captureで使用する仮想マシン構成をセットアップする準備ができました。手順については、「[VMware Workstation仮想マシンの構成](#)」を参照してください。

VMware Workstation仮想マシンの構成

Oct 16, 2015

このトピックでは、仮想マシン構成ウィザードを使用してVMware Workstationの仮想マシン構成をセットアップする手順について説明します。この例は、「[Install Capture用のVMware Workstation仮想マシンのセットアップ](#)」の説明に従って仮想マシンとホストマシンを既にセットアップしていることを前提としています。

1. AppDNAを起動します。
2. メニューから [Edit] 、 [Settings] の順に選択します。
3. [Settings] ダイアログボックスの左側で、 [Install Capture] をクリックします。
4. [Virtual Machines] タブで、 [New] 、 [Next] の順にクリックします。
5. [Virtual Machine Configuration Details] ページで仮想マシン構成の名前および説明を入力し、 [VMware Workstation] をクリックします。
6. [VMware Workstation virtual machine] ページで、仮想マシンのVMXファイルのパスを指定します。
7. [Virtual machine snapshot] ページで、仮想マシンをセットアップしたときに作成したスナップショットを選択し、 [Next] をクリックします。コンソールで仮想マシンが起動し、ウィザードにより一連のチェックが実行されます。
8. [Virtual machine connection] ページで、仮想マシンのIPアドレスを入力します。通常、 [Remote Admin TCP port] を変更する必要はありません。
9. [Capture Output Location] ページで [Copy results to network share (faster)] を選択し、前にAppDNAマシンで作成した出力フォルダーを指定します。UNCパスを使用し、ホスト名またはIPアドレスでクライアントまたはサーバーマシンを特定してください。たとえば、 \\<AppDNAMachine>\AppDNAOutput とします。
10. [Virtual Machine State] ページで、 [Power off the VM and take a snapshot (Recommended)] を選択して [Next] 、 [Finish] の順にクリックします。
[Settings] ダイアログボックスの [Install Capture] ページに仮想マシン構成が表示されます。
11. [保存] をクリックします。

[Import Applications] 画面の [Install Capture] タブの仮想マシン構成の一覧に、仮想マシン構成が表示されます。

実行プロファイル

Oct 16, 2015

実行プロファイルは、Install Captureまたはセルフプロビジョニングによるアプリケーションのキャプチャ中にキャプチャマシンで実行されるタスクとリソースを定義します。

一部の実行プロファイルによって、パッケージ化などのより高度なタスクが実行されます。実行プロファイルをForward Pathタスクスクリプトで使用して、分析結果に基づいてアプリケーションにアクション（シーケンス処理やテストレジームの実行など）を実行することもできます。

このトピックでは、AppDNAと共にインストールされる実行プロファイルの一覧を示し、それらをアクティブ化する方法およびデフォルトを変更する方法について説明します。次に、実行プロファイルを実行する手順を示し、拡張実行プロファイルと [Edit Execution Profile] ダイアログボックスに関する情報を提供します。

注：Install Captureは常に仮想マシン上で実行しますが、セルフプロビジョニングのキャプチャは任意の種類のマシン（物理または仮想）で実行できます。このセクションでは、便宜上、キャプチャマシンという用語を、Install Capture仮想マシンとセルフプロビジョニングクライアントマシンの両方を表すために使用します。

標準実行プロファイル

AppDNAに標準で付属する実行プロファイルは次のとおりです。

- **Snapshot Extended** - AppDNAデータベースにアプリケーションのDNAをインポートするためのMSIを作成します。このプロファイルによって、すべてのインストールと構成の画面がキャプチャされ、インストール指示が生成されます。
- **App-V 5.0 Sequencer** - App-V 5.0シーケンスと、AppDNAデータベースにアプリケーションDNAをインポートするためのMSIを作成します。このMSIはインストーラーとしては使用できません。この実行プロファイルを使用するには、仮想マシンにApp-V Sequencer 5.0をインストールする必要があります。これはAppDNAには付属していません。詳しくは、「[App-V 5.0 Sequencer実行プロファイル](#)」を参照してください。
- **App-V 4.6 SP1 Sequencer** - App-V 4.6 SP1シーケンスと、AppDNAデータベースにアプリケーションDNAをインポートするためのMSIを作成します。このMSIはインストーラーとしては使用できません。この実行プロファイルを使用するには、仮想マシンにApp-V Sequencer 4.6 SP1をインストールする必要があります。これはAppDNAには付属していません。詳しくは、「[App-V 4.6 SP1 Sequencer実行プロファイル](#)」を参照してください。

注：AppDNA 6.3より前のバージョンからアップグレードした場合は、インポート済みの実行プロファイルが更新されます。これらの実行プロファイルは、[オートクリッカー](#)をサポートするために自動的に更新されます。古い実行プロファイルは、AppDNAにより_oldというサフィックスを付けて保存されます。したがって、カスタマイズした内容は保持されます。

実行プロファイルをアクティブ化するには

AppDNAを初めてインストールしたときには、Snapshot Extended実行プロファイルのみがアクティブ化されます。AppDNAと共にインストールされるその他の実行プロファイルをアクティブ化するには：

1. AppDNAのメニューで、[Edit]、[Settings]の順に選択します。
2. [Settings] ダイアログボックスのサイドバーで、実行プロファイルを使用する場所に応じて[Install Capture]または[Self Provisioning]をクリックします。
3. [Execution Profile] タブをクリックします。
4. ダイアログボックスの下部にある[Import]をクリックします。
5. [Load Profiles] ダイアログボックスで、実行プロファイルファイルの場所を指定します。デフォルトでは、AppDNAに付属する実行プロファイルは、C:\Program Files\Citrix\AppDNA\Client\Execution Profiles（64ビットマシンの場合はC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Client\Execution Profiles）にインストールされます。
6. アクティブ化する実行プロファイルを選択して、[Open]をクリックします。

7. [Save] をクリックして変更を保存し、[Settings] ダイアログボックスを閉じます。

デフォルトの実行プロファイルを変更するには

1. AppDNAのメニューで、[Edit] 、 [Settings] の順に選択します。
2. [Settings] ダイアログボックスのサイドバーで、実行プロファイルを使用する場所に応じて[Install Capture] または [Self Provisioning] をクリックします。
3. [Execution Profile] タブをクリックします。
4. デフォルトに設定する実行プロファイルをクリックし、[Set as default] をクリックします。
5. [Save] をクリックして変更を保存し、[Settings] ダイアログボックスを閉じます。

実行プロファイルの実行

Oct 16, 2015

実行プロファイルを実行する方法は、Install Capture、セルフプロビジョニング、Forward Pathのいずれを使用しているかによって異なります。このトピックではこれらすべてについて説明します。

Install Captureを使用して実行プロファイルを実行するには

注：Install Captureは、仮想マシン構成を使用して、仮想マシンに接続して管理するためにAppDNAが必要とするすべての情報を保存します。

1. [Import Applications] 画面の [Install Capture] タブで、ツールバーの [Browse]、[Search]、または [Import from List] をクリックして、インポートする.exeファイルまたはほかのインストールファイルを選択します。
ファイルをUNCパス (\\192.168.50.20\Source\application.exe) または 「\\MachineName\Source\application.exeなど) を使用して指定していることを確認します。
2. [Install Capture] タブで、実行プロファイルを実行するアプリケーションの左側にあるチェックボックスをオンにします。
3. [Install Capture] タブのツールバーで、使用する仮想マシン構成を選択します。
仮想マシン構成では、実行プロファイルを実行する仮想マシンの詳細を指定します。この仮想マシンは、実行プロファイル用に適切に設定されている必要があります。たとえばApp-V 4.6 SP1 Sequencer実行プロファイルの場合は、Microsoft Application Virtualization 4.6 Service Pack 1がインストールされている必要があります。
4. [Install Capture] タブのアプリケーションの一覧で、アプリケーション名の左側の [+] をクリックして、アプリケーションのオプションパネルを開きます。その後、最初のドロップダウンリストで、実行する実行プロファイルを選択します。
5. [Install Capture] タブのツールバーで、[Import] をクリックします。選択した実行プロファイルでの定義に従って、仮想マシン構成で指定されている仮想マシンでInstall Captureの処理が開始されます。キャプチャが終了すると、アプリケーションがAppDNAに自動的にインポートされます。

セルフプロビジョニングを使用して実行プロファイルを実行するには

セルフプロビジョニングは、AppDNAへのアクセス権を持たない上級エンドユーザーがアプリケーションキャプチャを実行するためのメカニズムを提供します。手順の概要は、次のとおりです。

1. 管理者は、AppDNAの [Import Applications] 画面の [Self-Provisioning] タブを使用して、キャプチャの指示を設定します。
この手順の間に、管理者はInstall Captureで実行プロファイルを選択すると同様の方法で、使用する実行プロファイルを選択します。
2. 管理者は、セルフプロビジョニングクライアントマシンが特定の実行プロファイル用に設定されるように手配します。
たとえば、App-V 4.6 SP1 Sequencer実行プロファイルの場合は、Microsoft Application Virtualization 4.6 Service Pack 1がインストールされている必要があります。
3. 管理者は指示をエンドユーザーに送信し、エンドユーザーはセルフプロビジョニングクライアントマシンでキャプチャを実行します。
詳しくは、「[セルフプロビジョニング](#)」を参照してください。

Forward Pathを使用して実行プロファイルを実行するには

Forward Pathはシナリオおよびタスクスクリプトによって制御されます。Forward Pathタスクスクリプトでは、実行プロファイルを実行できます。これを実行するには、タスクスクリプトでProductionManager.RunExecutionProfile関数を呼び出します。この関数の構文は次のとおりです。

```
Public Shared Sub RunExecutionProfile ( _ controller As IActionController, _ profile As ExecutionProfileBuilder, _ profile_replaceable_values As Dictionary(Of String, String), _ vm_config_name
```

パラメーター	説明
controller	このオブジェクトは実行時にスクリプトに自動的に渡され、たとえば現在のアプリケーションに関する情報にアクセスできるようにします。
profile	実行プロファイルの名前を渡すために使用します。
profile_replaceable_values	置き換え可能な名前と値のペアの一覧を渡すために使用します。
vm_config_name	使用する仮想マシン構成の名前を渡すために使用します。

次に例を示します。

```
Dim replaceables As New Dictionary(Of String, String) ' Set the SequenceName replaceable replaceables.Add("SequenceName", controller.Application.Name) ' Activate auto-clicker replaceables.Add("U  
詳しくは、「Forward Path」を参照してください。
```

App-V 5.0 Sequencer実行プロファイル

Oct 16, 2015

Install Capture、セルフプロビジョニング、またはForward PathでApp-V 5.0 Sequencer実行プロファイルを使用して、App-V Client 5.0で展開するためにアプリケーションをパッケージ化できます。

この実行プロファイルでは、通常、アプリケーションがデフォルトで2回キャプチャマシンにインストールされます。1回はシーケンス処理のため、もう1回はSequencerの外部でアプリケーションをキャプチャして、AppDNAにインポートするMSIを生成するためにインストールされます。2回目のインストールが行われないように指定することもできます。Install Captureから実行プロファイルを実行しているときにこれを行った場合、生成された.appvパッケージは自動的にインポートされます。.appvファイルは仮想環境用に用意されているため、ネイティブのWindows環境用のアプリケーションDNAの一部は含まれません。たとえば、ドライバーおよびレジストリ設定に関する情報が省略される場合があります。そのため、ネイティブWindows環境に対してアプリケーションを分析する場合はデフォルトの動作を使用することをお勧めします。

App-V 5.0 Sequencer実行プロファイルを実行するには、キャプチャマシン上で以下の追加手順を行う必要があります。

- キャプチャマシンのオペレーティングシステムと構成が、App-Vアプリケーションを実行するクライアントマシンと同じであることを確認します。
- キャプチャマシンでWindows DefenderとWindowsサーチを無効にします。
- キャプチャマシンにMicrosoft App-V Sequencer 5.0をインストールします。
- Windows PowerShellが次のように構成されていることを確認します。

一般的な手順については、以下を参照してください。

- Install Capture用またはForward Path用の仮想マシンのセットアップについては、「[Install Capture](#)」を参照してください。
- セルフプロビジョニングキャプチャマシンをセットアップするには、「[セルフプロビジョニングクライアントのインストール](#)」を参照してください。

この実行プロファイルでは、Microsoft App-V Sequencer 5.0の前提要件であるWindows PowerShellが使用されます。この実行プロファイルでは、PowerShellが特定の設定で構成されている必要があります。PowerShellをインストールした後にAppDNA VM構成ツールのMSIをインストールする場合は、インストーラーがユーザーに代わって自動的にPowerShellを構成しようとします。インストーラーで自動的に構成できない場合、またはAppDNA VM構成ツールのMSIをインストールした後にPowerShellをインストールする場合は、次の手順を実行してPowerShellを構成する必要があります。

1. PowerShellコマンドウィンドウを開きます。
2. 次の情報を入力してEnterキーを押します。
Set-ExecutionPolicy Unrestricted
3. 「Yes」と入力して、Enterキーを押します。

Install CaptureまたはForward Path用の仮想マシンをセットアップする場合は、仮想マシンのスナップショットを作成する前にこの作業を行う必要があります。

既に述べたように、この実行プロファイルでは通常、アプリケーションがデフォルトで2回キャプチャマシンにインストール

されます。Sequencerの外部でのインストールが行われなくするには、ImportAppv置き換え可能パラメーターの値を1に設定します。true。

この実行プロファイルでは、次の場合にのみ、アプリケーションがデフォルトで1回だけインストールされます。

- 実行プロファイルをInstall Captureから実行し、入力ファイルがMSIで、[Load input file] チェックボックスをオンにする場合。
- 実行プロファイルをForward Pathから実行し、SequenceNameまたはApp:Name置き換え可能パラメーターが指定されているか、入力ファイルがMSIである場合。

この実行プロファイルの出力は、仮想マシン構成（Install CaptureおよびForward Path）またはセルフプロビジョニングクライアントで定義したメイン出力フォルダーのサブフォルダーに格納されます。サブフォルダーの名前は、実行プロファイルの実行方法によって異なります。Install CaptureまたはForward Pathから実行した場合は、入力ファイルの名前と日時からサブフォルダーの名前が生成されます。セルフプロビジョニングから実行した場合は、指示ファイルのIDに基づく名前が使用されます。

この実行プロファイルによって生成される出力は次のとおりです。

- AppDNAにインポートするMSI（アプリケーションがキャプチャマシンに2回インストールされた場合）。
- インストールの各手順の画像を参照するHTMLページ形式のインストール手順。
- Sequencerの出力を格納する_AppVSequenceサブフォルダー。出力ファイルの命名を制御できます。

この実行プロファイルでは、Sequencerによって生成されるファイルの名前が次のように決定されます。該当する項目が複数ある場合は、一覧の上にある項目が常に優先されます。

1. SequenceName置き換え可能パラメーターが指定されている場合は、これが常に使用されます。
2. 入力ファイルがActive DirectoryまたはConfigMgrから取得される場合は、App:Name置き換え可能パラメーター（アプリケーションの名前が自動的に格納されます）が使用されます。
3. 入力ファイルがMSIである場合は、MSIの製品名が使用されます。
4. 入力ファイルがMSIでない場合、実行プロファイルはアプリケーション名を取得しようとします。取得できない場合は、インストールファイルの名前が使用されます。

次の表は、App-V 5.0 Sequencer実行プロファイルの構成に使用できる置き換え可能パラメーターの詳細を示しています。

名前	説明
ImportAppv	AppDNAにインポートするために別途MSIをキャプチャする代わりに、生成された.appvパッケージをAppDNAにロードする場合は、この値をtrueに設定します。この値をtrueに設定すると、キャプチャマシンでのアプリケーションの2回目のインストールが行われなくなります。アプリケーションが既にAppDNAで分析されていて、シーケンス処理のみを行う場合に適しています。
MsiSilentSwitch	この置き換え可能パラメーターを使用すると、msiexecにMSIインストールの追加オプションを渡すことができます（サイレントインストールのための-qbなど）。msiexecのコマンドラインオプションについては詳しくは、 http://technet.microsoft.com/library/cc759262(v=ws.10).aspx を参照してください。
SequenceName	Sequencerによって生成される.appvパッケージの名前を指定するために使用します。

名前	説明
LaunchEditor	生成される.appvパッケージをシーケンス処理の完了後に編集するために、.appvパッケージを自動的にApp-V Sequencerで起動するようにする場合は、これをtrueに設定します。
PromptForPrerequisites	Sequencerの実行前に前提条件のソフトウェアをインストールするようにユーザーに求めるには、この値をtrueに設定します。
AppMonitoringPath	Sequencerが監視するパスを指定するために使用します。これが指定されていない場合、Sequencerはインストールされているディスク全体を監視するように構成されます。
WaitForSmbIdle	タスクが完了する前にネットワーク共有アクセスを停止するまで何秒間待機するかを指定します。後続のタスクでステータスフルなファイアウォールによってネットワーク共有アクセスがブロックされ、問題が発生するのを回避するのに役立ちます。
UseAutoClick	実行プロファイルの実行時にオートクリッカーをデフォルトで使用する場合は、この値を--use-autoclickに設定します。オートクリッカーをデフォルトでオフにする場合は、この値を空にします。

- <http://technet.microsoft.com/en-us/library/jj713438.aspx>

App-V 4.6 SP1 Sequencer実行プロファイル

Oct 16, 2015

Install Capture、セルフプロビジョニング、またはForward PathでApp-V 4.6 SP1 Sequencer実行プロファイルを使用して、App-V Client 4.6 SP1で展開するためにアプリケーションをパッケージ化できます。

この実行プロファイルでは、通常、アプリケーションがデフォルトで2回キャプチャマシンにインストールされます。1回はシーケンス処理のため、もう1回はSequencerの外部でアプリケーションをキャプチャして、AppDNAにインポートするMSIを生成するためにインストールされます。2回目のインストールが行われないように指定することもできます。Install Captureから実行プロファイルを実行しているときにこれを行った場合、.stfファイルは自動的にインポートされます。.stfファイルは仮想環境用に用意されているため、ネイティブのWindows環境用のアプリケーションDNAの一部は含まれません。たとえば、ドライバーおよびレジストリ設定に関する情報が省略される場合があります。そのため、ネイティブWindows環境に対してアプリケーションを分析する場合はデフォルトの動作を使用することをお勧めします。

App-V 4.6 SP1 Sequencer実行プロファイルを実行するには、キャプチャマシン上で以下の追加手順を行う必要があります。

- キャプチャマシンのオペレーティングシステムと構成が、App-Vアプリケーションを実行するクライアントマシンと同じであることを確認します。
- キャプチャマシンでWindows DefenderとWindowsサーチを無効にします。
- キャプチャマシンにMicrosoft Application Virtualization 4.6 Service Pack 1をインストールします。これは<http://www.microsoft.com/ja-jp/download/details.aspx?id=14552>からダウンロードできます。
- キャプチャマシンのQ:ドライブを適切な場所にマップします。
- 必要に応じて、監視オプションや展開などの設定を格納するプロジェクトテンプレートを作成し、新しいパッケージを作成するときにそのテンプレートを自動的に適用するようにSequencerを構成します。詳しくは、[The Microsoft Application Virtualization Blog](#)を参照してください。

一般的な手順については、以下を参照してください。

- Install Capture用またはForward Path用の仮想マシンのセットアップについては、「[Install Capture](#)」を参照してください。
- セルフプロビジョニングキャプチャマシンのセットアップについては、「[セルフプロビジョニングクライアントのインストール](#)」を参照してください。

既に述べたように、この実行プロファイルでは通常、アプリケーションがデフォルトで2回キャプチャマシンにインストールされます。Sequencerの外部でのインストールが行われないようにするには、ImportSft置き換え可能パラメーターの値を1に設定します。

この実行プロファイルでは、次の場合にのみ、アプリケーションがデフォルトで1回だけインストールされます。

- 実行プロファイルをInstall Captureから実行し、入力ファイルがMSIで、[Load input file] チェックボックスをオンにする場合。
- 実行プロファイルをForward Pathから実行し、SequenceNameまたはApp:Name置き換え可能パラメーターが指定されているか、入力ファイルがMSIである場合。

この実行プロファイルの出力は、仮想マシン構成 (Install CaptureおよびForward Path) またはセルフプロビジョニングクライアントで定義したメイン出力フォルダーのサブフォルダーに格納されます。サブフォルダーの名前は、実行プロファイルの実行方法によって異なります。Install CaptureまたはForward Pathから実行した場合は、入力ファイルの名前と日時からサブフォルダーの名前が生成されます。セルフプロビジョニングから実行した場合は、指示ファイルのIDに基づく名前が使用されます。

この実行プロファイルによって生成される出力は次のとおりです。

- AppDNAにインポートするMSI (アプリケーションがキャプチャマシンに2回インストールされた場合)。
- インストールの各手順の画像を参照するHTMLページ形式のインストール手順。
- Sequencerの出力を格納する_appvsequenceサブフォルダー。このフォルダーに生成される.sprjファイル、.sftファイル、および.msiファイルの名前は、次に説明する方法で制御できます。

この実行プロファイルでは、Sequencerによって生成されるファイルの名前が次のように決定されます。該当する項目が複数ある場合は、一覧の上にある項目が常に優先されます。

1. SequenceName置き換え可能パラメーターが指定されている場合は、これが常に使用されます。
2. 入力ファイルがActive DirectoryまたはConfigMgrから取得される場合は、App:Name置き換え可能パラメーター (アプリケーションの名前が自動的に格納されます) が使用されます。
3. 入力ファイルがMSIである場合は、MSIの製品名が使用されます。
4. 入力ファイルがMSIではない場合は、デフォルトの名前 (application) が使用されます。2回インストールするオプションが使用されていて、SftRenameLevel置き換え可能パラメーターの値が0より大きい場合は、生成されるMSIの名前に置き換えられます。

次の表は、App-V 4.6 SP1 Sequencer実行プロファイルの構成に使用できる置き換え可能パラメーターの詳細を示しています。

名前	説明
ImportSft	AppDNAにインポートするために別途MSIをキャプチャする代わりに、生成された.sftファイルをAppDNAにロードする場合は、この値を1に設定します。この値を1に設定すると、キャプチャマシンでのアプリケーションの2回目のインストールが行われなくなります。アプリケーションが既にAppDNAで分析されていて、シーケンス処理のみを行う場合に適しています。
MsiSilentSwitch	この置き換え可能パラメーターを使用すると、msiexecにMSIインストールの追加オプションを渡すことができます (サイレントインストールのための-qbなど)。msiexecのコマンドラインオプションについて詳しくは、 http://technet.microsoft.com/library/cc759262(v=ws.10).aspx を参照してください。
SequenceName	オプションであるこの置き換え可能パラメーターを使用すると、Sequencerによって生成されるファイル (.sft、.sprj、マニフェスト.xml、および.msiパッケージ) の名前を指定できます。この置き換え可能パラメーターを指定した場合は、ほかのすべての名前付けオプションより優先されます。
SftRenameLevel	Sequencerによって生成されるファイルのうち、どのファイルの名前を変更するかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • 0 (未設定) - ファイルの名前を変更しない • 1- .sprjファイルの名前のみを変更する

名前	<p>● 2- .sprjファイルと.msiファイルの名前を変更する</p> <p>● 3- .sprj、.msi、および.sftの各ファイルの名前を変更する</p>
	<p>注：このオプションは、SequenceName置き換え可能パラメーターが指定されている場合、インストールパッケージがActive DirectoryまたはConfigMgrから取得される場合、または入力ファイルが.msiである場合には適用されません。</p>
VirtualRootPath	シーケンス仮想パスを指定します。指定しない場合、パスはQ:\でランダムに生成されます。
WaitForSmbIdle	タスクが完了する前にネットワーク共有アクセスを停止するまで何秒間待機するかを指定します。後続のタスクでステータスフルなファイアウォールによってネットワーク共有アクセスがブロックされ、問題が発生するのを回避するのに役立ちます。
LaunchEditor	シーケンス処理の完了後に自動的にApplication Virtualization Editorを起動するには、この値をtrueに設定します。
PromptForPrerequisites	Sequencerの実行前に前提条件のソフトウェアをインストールするようにユーザーに求めるには、この値をtrueに設定します。
UseAutoClick	実行プロファイルの実行時にオートクリッカーをデフォルトで使用する場合は、この値を--use-autoclickに設定します。オートクリッカーをデフォルトでオフにする場合は、この値を空にします。

- [Microsoft App-V 4.6 SP1 Sequencing Guide](#)

実行プロファイルの編集

Oct 16, 2015

セルフプロビジョニングとInstall Captureの実行プロファイルは、セルフプロビジョニングの実行プロファイルには上級ユーザー向けの追加の表示テキストが含まれる点で異なります。そのほかのすべての点において、2つの実行プロファイルは同じです。

注：実行プロファイルを編集する前に、バックアップを作成することをお勧めします。これを行うには、[Install Capture Settings] または [Self-Provisioning Settings] の [Execution Profiles] タブで [Export] をクリックします。Install Capture、Forward Path、またはセルフプロビジョニングで使用する実行プロファイルを構成するには、以下の操作を行います。

- [Install Capture Settings] ページまたは [Self-Provisioning Settings] ページの [Execution Profiles] タブで [New] または [Edit] をクリックします。
- [Import Applications] 画面の [Install Capture] タブおよび [Self-Provisioning] タブの [Execution Profile] ボックスの一覧の隣の [Customize] をクリックします。この操作で編集できるのは現在のアプリケーションの実行プロファイルのみです。

[Edit Execution Profile] ダイアログボックスでは、以下の編集を行います。

Name – 実行プロファイルの名前です。名前にコロン (:) を含めないようにしてくださいこれにより、その名前が将来Citrixが定義する内部の置き換え可能パラメーターと競合する可能性がなくなります。

Manually execute the commands – ユーザーがコマンドを手動で実行する必要があるかどうかを制御するチェックボックスです。

[Commands] タブおよび [Replaceables] タブ – 次のセクションを参照してください。

[Edit Execution Profile] ダイアログボックスの [Commands] タブを使用して、実行プロファイルのコマンドを表示し、編集します。[Commands] タブの上部には、実行プロファイルのコマンドが実行順に一覧表示されます。右側のボタンを使用して、新しいコマンドを追加し、コマンドを削除し、コマンドの順序を変更します。

[Commands] タブの下部には、上部で選択したコマンドの詳細情報が表示されます。情報は、[Command] タブと [User Interface] タブに次のように分けて表示されます。

[Commands] タブ

[Commands] タブにはそのコマンドの一般情報が表示され、これにはコマンドの種類 (Command LineまたはWrite Unicode File) が含まれます。

Command Lineのオプションは以下のとおりです。

- **Command** - 実行可能ファイルおよび引数で構成する必要があります。置き換え可能パラメーターと呼ばれる、実行時に提供される値で置き換えられるプレースホルダーを含められます。置き換え可能パラメーターを含めるときの構文は\$(replaceable_name)です。ここで、replaceable_nameは置き換え可能パラメーターの名前です (例: \$(AppToolsFolder))。\$(AppToolsFolder))。
- **Wait type** - コマンドの待機動作を定義します。オプションは、待機せずに続行、コマンドにより起動したプロセスの完了を待機、またはプロセスツリーの完了を待機のいずれかです。通常、インストールを起動するコマンドではインストール完了を待機するのに対して、画面キャプチャユーティリティを起動するコマンドでは待機しません。

- **Show window** - コマンドにより起動したウィンドウの表示方法を制御します。指定できる値について詳しくは、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/windows/desktop/ms633548\(v=vs.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/windows/desktop/ms633548(v=vs.85).aspx)を参照してください。
- **Fail on unexpected exit code** - 終了コードが予期しないコードであった場合に、コマンドを失敗とするかどうかを示します。インストーラーを起動するコマンドについて、0以外の終了コードはAppDNAではデフォルトで失敗とみなされません。インストーラーは成功時に0を戻し失敗時に0以外を戻すという、非公式な規約があります。ただし、この規約にすべてのインストーラーが従っているというわけではありません。終了コードが成功または失敗を示さない場合は、このチェックボックスをオフにします。異なる終了コードを設定するには、このチェックボックスをオンにしてから [Expected exit code] ボックスに成功を示すコードを入力します。
- **Expected exit code** - [Fail on unexpected exit code] チェックボックスがオフの場合は、このパラメーターは無視されます。この値は成功を示す終了コードです。デフォルトでは0です。
失敗があったとき、ときどきインストーラーが0以外の終了コードを戻さないことがあります。この問題が発生すると、AppDNAではキャプチャが成功したとみなされ、キャプチャされたDNAがインポートされ、インポートが成功したと記録されます。ただし、実際には本当のアプリケーションDNAはまったくキャプチャされていません。この状況では、キャプチャされたDNAに含まれるのは、失敗したアプリケーションのインストール試行によって基礎となるオペレーティングシステムに加えられた軽微な変更です。成功時にゼロ終了コードを戻す規約にインストーラーが従わないことがわかっている場合は、このオプションを使用して、そのアプリケーションの実行プロファイルに成功時の終了コードを指定します。
- **Capture output** - コマンドにより、標準出力 (stdout) および標準エラー (stderr) のストリームをInstall CaptureまたはForward Pathのログに書き出すかどうかを示します。これは、エラー文字列を書き出すコマンドラインの実行可能ファイルのトラブルシューティングに役立ちます。

Write Unicode Fileのオプションは以下のとおりです。

- **Target file path** - コマンドによりファイルが作成される場所です。
- **Expand replaceables in contents** - 置き換え可能パラメーターがファイルに書き込まれる前に、コマンドにより展開されるかどうかを指定します。このオプションを選択すると、\$(XXX)の形式のすべてのものが、ファイルに書き込まれる前に適切な実行時値に置き換えられます。たとえば、\$(AppToolsFolder)は、C:\Program Files\Citrix\AppDNA\VM Configurationのような実行時値で置き換えられます。このチェックボックスをオフにすると、置き換え可能パラメーターはそのまま、たとえば\$(AppToolsFolder)のままで、ファイルに書き込まれます。

[User Interface] タブ

[User Interface] タブのオプションでは、スタンドアロンのセルフプロビジョニングツールでコマンドを実行したときの、ユーザーに対するコマンドの表示方法を制御します。

- **Show as step** - ユーザーにコマンドをステップとして表示するかどうかを示します。
- **Allow the user to edit the command before execution** - コマンドを実行する前にユーザーがコマンドを編集できるかどうかを示します。

[Edit Execution Profile] ダイアログボックスの [Replaceables] タブを使用して、実行プロファイルの実行時に使用する置き換え可能パラメーターの値を定義します。 [Settings] ダイアログボックスの [Self-Provisioning] ページ、または [Configure Virtual Machine] ダイアログボックスに入力する値は、ここに入力する値で上書きされます。

注：単一のアプリケーションについて、このタブで入力した置き換え可能パラメーターの値を上書きする必要が生じる場合があります。最もよく使用される置き換え可能パラメーターについては、 [Import Applications] 画面の [Quick Edit Parameter] ボックスで上書きすることができます。

置き換え可能パラメーターの値を指定するには：

- 一覧に値を変更する置き換え可能パラメーターがある場合は、それを選択して [Edit] をクリックします。 [Edit

Replaceable] ダイアログボックスが開きます。ここで、新しい値を入力したり貼り付けたりできます。

- 一覧に値を変更する置き換え可能パラメーターがない場合は、[New] をクリックします。[Edit Replaceable] ダイアログボックスが開きます。ここで、新しい置き換え可能パラメーターと値を入力できます。

内部的に使用される置き換え可能パラメーターを、次の一覧に示します。これらの置き換え可能パラメーターの値は自動的に設定されるため、手動設定は不要です。

- App:InstallCommand
- App:InstallDriveLetter
- App:InstallWrkDir
- App:Manufacturer (Forward Pathのタスクスクリプトでのみ使用されます)
- App:Name (Forward Pathのタスクスクリプトでのみ使用されます)
- App:Version (Forward Pathのタスクスクリプトでのみ使用されます)
- Capture:ImportInputFile
- Capture:InputFile
- Capture:Mode
- Capture:OutputFile
- Capture:OutputDirectory

注：置き換え可能パラメーター名にコロン (:) が含まれることに注意してください。これは、これがCitrixにより定義されている内部の置き換え可能パラメーターであることを示します。独自の置き換え可能パラメーターを作成する場合は、名前にコロンを含めないように注意してください。これにより、その名前が将来Citrixで提供される内部置き換え可能パラメーターと重複する可能性がなくなります。名前のうちコロンの前の部分は、置き換え可能パラメーターの用途を示します。たとえば、Appはその置き換え可能パラメーターが処理中のアプリケーションの情報を提供すること、Captureはその置き換え可能パラメーターが現在のキャプチャ状態と関連することを示します。

Install Captureの構成のリファレンス

Oct 16, 2015

ここでは、仮想マシン構成の管理について詳しく説明します。

クイックリンク：

- [仮想マシン構成ウィザード](#)
- [\[Virtual Machine Configuration\] ダイアログボックス](#)
- [Remote Adminポートの変更](#)

仮想マシン構成ウィザード

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードを使用して、次の作業に使用する仮想マシン構成を作成します。

- **Install Capture** – Install Captureを使用して、.msi、.sft、または.appvファイルがないデスクトップアプリケーションをインポートします。Install Captureで仮想マシンにアプリケーションをインストールし、.msiファイルを作成します。この.msiファイルをAppDNAにインポートします。通常、作成される.msiファイルはAppDNAにインポートするためにアプリケーションDNAを単にキャプチャしたものであり、アプリケーションの実際のインストールには不適切です。インストールに適したMSIやApp-Vシーケンスをキャプチャ処理で作成できますが、このオプションを使用するには、App-V Sequencer (AppDNAに付属しません) を仮想マシン上にインストールしておく必要があります。
- **Forward Path**のタスク – Forward Pathのタスクを使用すると、Install Captureによる処理 (通常はアプリケーションのシーケンス処理とパッケージ化) を自動化できます。

注：単純化のため、このドキュメントではInstall Captureについてのみ説明します。ただし、ここでの説明は、Install Captureによる処理を自動化するForward Pathのタスクにも同じく当てはまります。

ウィザードは基盤になる仮想化技術に接続し、たとえば、使用できる仮想マシンの一覧を取得します。また、仮想マシンを起動し、必要に応じてコンソール内に表示しようとしています。これは、ウィザードから仮想マシンを制御し、必要なセットアップを実行できるということを意味します。ウィザードを正常に完了できれば、仮想マシン構成は完全に機能するはずです。

このウィザードを使用して仮想マシン構成を追加するには、事前に適切な仮想化技術をインストールし、仮想マシンとAppDNAマシンのセットアップと構成を済ませておく必要があります。詳しくは、「[Install Captureの構成](#)」を参照してください。

1. AppDNAのメニューで、[Edit]、[Settings]の順に選択します。
2. [Settings] ダイアログボックスの左側で、[Install Capture] をクリックします。
3. [Virtual Machines] タブをクリックします。
4. 新しい仮想マシンを作成する場合は、[New] をクリックします。
5. 既存の仮想マシン構成を表示または編集するには、一覧から構成を選択して[Edit] をクリックします。

仮想マシン構成の詳細

Oct 16, 2015

[Virtual Machine Configuration Details] ページは、仮想マシン構成ウィザードの2番目の手順です。

Configuration name – 仮想マシン構成を特定する一意の名前を入力します。

Description – (オプション) 仮想マシン構成の目的を特定するのに役立つ追加情報を入力します。

Virtual machine provider – 使用する仮想マシン技術を選択します。太字で表示されるプロバイダー名は、マシンにインストール済みであることが検出されています。現在サポートされているプロバイダーの一覧については、「[Install Capture](#)」を参照してください。

注：特定の状況では、一部のプロバイダー（特にHyper-V、vSphere、およびXenServer）が一覧に表示されないことがあります。この問題を解決するには、ウィザードをキャンセルして終了し、AppDNAを再起動します。

VMware Workstationの仮想マシン

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [VMware Workstation Virtual Machine] ページでは、Install Captureのために使用する VMware Workstation仮想マシンに相当する.vmxファイルを指定します。

Path to VMware Workstation .vmx file – VMware Workstationの.vmxファイルの名前と場所を指定します。 [Browse] をクリックし、ファイルのある場所へ移動してファイルを選択することもできます。仮想マシンに、少なくとも1つのスナップショットが必要です。仮想マシンにスナップショットがない場合は、このページで.vmxファイルを選択する前に、VMware Workstationを使用してスナップショットを作成する必要があります。詳しくは、「[仮想マシンのセットアップ](#)」を参照してください。

Test – クリックすると、AppDNAがVMware Workstationに接続して指定された.vmxファイルを開けることを確認できます。このボタンをクリックしない場合は、 [Next] をクリックしたときにウィザードでこのチェックが実行されます。

VMware Workstationの仮想マシンスナップショット

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [VMware Workstation VM Snapshot] ページでは、Install Captureのために使用する仮想マシンスナップショットを指定します。AppDNAではこのスナップショットを使用して、キャプチャの実行前に仮想マシンをクリーンな状態に戻します。

Virtual machine snapshot – Install Captureの実行中に仮想マシンの基本状態として使用するスナップショットを選択します。必要に応じて、このウィザードの使用中に仮想マシンに変更を加えることができます。このウィザードの後のページで、必要に応じて、仮想マシンに加えた変更を保存できるように新しいスナップショットを作成することができます。この新しいスナップショットを作成すると、ここで選択した、Install Captureの実行中に仮想マシンの基本状態として使用するスナップショットが置き換えられます。

Do not display the VM console – このウィザードの使用中に仮想マシンに変更を加えることができるようにAppDNAでVMware Workstation仮想マシンコンソールを表示する場合は、このチェックボックスをオフ（デフォルト）にします。ウィザードでVMware Workstationのコンソールを表示しない場合は、このチェックボックスをオンにしてください。

Test – クリックすると、AppDNAで仮想マシンを制御できることを確認できます。テストが成功すると、AppDNAは、仮想マシンを選択されたスナップショットに戻して起動します。このボタンをクリックしない場合は、[Next] をクリックしたときにこれらの手順が実行されます。

Hyper-Vホストの詳細

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [Hyper-V Host Details] ページでは、Install Captureのために使用する仮想マシンをホストするHyper-Vサーバーへの接続に必要な詳細情報を入力します。

Hostname/IP Address – Hyper-VホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名（「182.31.32.28」または「server.domain.com」など）を入力します。AppDNAと同じマシンにHyper-Vがインストールされている場合は、「localhost」と入力できます。localhost.

Username – AppDNAと異なるマシンにHyper-Vがインストールされている場合は、Hyper-Vのユーザー名を入力します。ユーザー名にはマシン名を含める必要があります。形式は「machinename\user」です。これがドメインアカウントである場合は、ドメインで修飾されたユーザー名（「domain\user」または「user@mydomain.com」など）を入力します。ただし、標準のドメインアカウントではなく、パスワードが期限切れにならないように設定されている専用のHyper-Vユーザーアカウントを使用することをお勧めします。AppDNAと同じマシンにHyper-Vがインストールされている場合は、ユーザー名を空白のままにします。現在のWindowsユーザーアカウントが使用されます。

このユーザーアカウントは（明示的に指定するしないにかかわらず）、Hyper-Vサーバー上のAdministratorsまたはHyper-V Administratorsグループに追加されている必要があります。または、このユーザーアカウントは仮想マシンを制御するためのHyper-Vのアクセス許可を明示的に付与されている必要があります。この方法について詳しくは、[MSDN](#)を参照してください。

Password – ユーザー名を入力した場合は、アカウントのパスワードを入力します。

重要：将来このパスワードを変更した場合は、このウィザードをもう一度実行して新しいパスワードを入力する必要があります。

Test – クリックすると、AppDNAが指定されたHyper-Vホストサーバーに接続できることを確認できます。このボタンをクリックしない場合は、[Next] をクリックしたときにウィザードでこのチェックが実行されます。

Hyper-Vの仮想マシン

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [Hyper-V Virtual Machine] ページでは、Install Captureのために使用するHyper-Vの仮想マシンを選択します。

Virtual machine – 前のページで指定されたHyper-Vホストサーバーで使用できる仮想マシンが一覧表示されます。使用する仮想マシンを選択します。これはこのAppDNAクライアントから実行されるInstall Capture専用の仮想マシンである必要があります。AppDNAを管理者として実行します。

1. 必要であれば、AppDNAを閉じます。
2. WindowsエクスプローラーでAppDNAの主要実行可能ファイル (appTitude.exe) を見つけます。以下の表は、このファイルのデフォルトの場所を示します。

マシンの種類	デフォルトの場所
32ビット	C:\Program Files\Citrix\AppDNA\Client
64ビット	C:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Client

3. ファイルを右クリックして、[プロパティ] を選択します。
4. [互換性] タブをクリックします。
5. [特権レベルの] [管理者としてこのプログラムを実行する] チェックボックスをオンにします。
6. [OK] をクリックして変更を保存します。

Hyper-Vスナップショットの選択

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [Hyper-V Snapshot Selection] ページでは、使用するHyper-Vの仮想マシンスナップショットを選択します。

Snapshot – Install Captureのための基本スナップショットとして使用する仮想マシンスナップショットを選択します。必要に応じて、このウィザードの使用中に仮想マシンに変更を加えることができます。このウィザードの後のページで、必要に応じて、仮想マシンに加えた変更を保存できるように新しいスナップショットを作成することができます。この新しいスナップショットを作成すると、ここで選択した、Install Captureの実行中に仮想マシンの基本状態として使用するスナップショットが置き換えられます。

Create – 仮想マシンにスナップショットがない場合は、このボタンをクリックして、仮想マシンの現在の状態に基づくスナップショットを作成します。

Do not display the VM console – このウィザードの使用中に仮想マシンに変更を加えることができるようにAppDNAで仮想マシンをコンソールに表示する場合は、このチェックボックスをオフ（デフォルト）にします。ウィザードで仮想マシンをコンソールに表示しない場合は、このチェックボックスをオンにしてください。

Test – クリックすると、AppDNAで仮想マシンを制御できることを確認できます。テストが成功すると、AppDNAは、仮想マシンを選択されたスナップショットに戻して起動し、選択されているオプションに応じて、その仮想マシンをコンソールに表示します。このボタンをクリックしない場合は、[Next] をクリックしたときにこれらの手順が実行されます。

このコンソールに仮想マシンが表示されます。コンソールウィンドウの上部にあるオプションは、次のように使用します。

- **Always on top** – ほかのすべてのウィンドウの前面にコンソールウィンドウを開いたままにするには、このチェックボックスをオン（デフォルト）にします。コンソールウィンドウの前面にほかのウィンドウを表示する場合は、このチェックボックスをオフにしてください。このオプションは、画面が狭い場合に便利です。
- **Reconnect** – 仮想マシンの再起動後に仮想マシンに接続するには、このボタンをクリックします。

Ctrl + Alt + Delキーの組み合わせを仮想マシンに送信するには、Ctrl + Alt + Endキーを押します。

vSphereホストの詳細

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [vSphere Host Details] ページでは、Install Captureのために使用するvSphereホストサーバーへの接続に必要な詳細情報を入力します。

Hostname / IP Address – vSphereホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名を入力します。たとえば、「182.31.32.28」または「server.domain.com」です。これは、VMware vCenterサーバーではなくvSphere ESXi Hypervisorサーバーです。

Username – ESXiのローカルユーザーアカウントのユーザー名を入力します。標準のドメインアカウントではなく、パスワードが期限切れにならないように設定されている専用のvSphereユーザーアカウントを使用することをお勧めします。アカウントの作成方法については、後述の「ホスト (ハイパーバイザー) 上でのローカルユーザーアカウントの作成」を参照してください。

少なくとも、ユーザーアカウントに、仮想マシンの電源のオン/オフ、仮想マシンのリセットと一時停止、およびスナップショットの作成と元に戻す権限が必要です。これらの特権をvSphereユーザーアカウントに割り当てる手順については、後述の「vSphereユーザーアカウントへの特権の割り当て」を参照してください。

Password – アカウントのパスワードを入力します。

重要：将来パスワードを変更した場合は、このウィザードをもう一度実行して新しいパスワードを入力する必要があります。

Test – クリックすると、AppDNAが指定されたvSphereホストサーバーに接続できることを確認できます。このボタンをクリックしない場合は、[Next] をクリックしたときにウィザードでこのチェックが実行されます。

1. 管理者ユーザーアカウントを使用してVMware vSphere Clientにログオンし、(vCenterサーバーではなく)ハイパーバイザーホストのIPアドレスを入力します。
2. [Home]、[Inventory] の順に選択します。
3. ホストを選択して [Local Users And Groups] タブをクリックします。
4. ウィンドウ内で右クリックして [Add] を選択します。
5. 必要な詳細情報を入力し、[OK] をクリックします。

管理者は以下の手順に従って、vSphereユーザーアカウントに特権を割り当てることができます。

1. 管理者ユーザーアカウントを使用して、VMware vSphere Clientにログオンします。
2. [Home]、[Administration]、[Roles] の順に選択します。
3. ウィンドウ内で右クリックして [Add] を選択します。
4. 役割の名前（「Install Capture user」など）を入力し、以下の特権を選択します。
 - [Virtual machine] > [Interaction] > [Power Off]
 - [Virtual machine] > [Interaction] > [Power On]
 - [Virtual machine] > [Interaction] > [Reset]
 - [Virtual machine] > [Interaction] > [Suspend]
 - [Virtual machine] > [State] > [Create snapshot]
 - [Virtual machine] > [State] > [Revert to snapshot]
5. [OK] をクリックします。

6. [Home] > [Inventory] の順に選択します。
7. [Permissions] タブで右クリックし、[Add Permission] を選択します。
8. [Assign Permissions] ダイアログボックスで [Add] をクリックします。
9. [Select Users and Groups] ダイアログボックスで特権を割り当てるユーザーを選択して [Add] をクリックします。
10. [OK] をクリックします。 [Assign Permissions] ダイアログボックスに戻ります。ユーザーが左側に表示されます。
11. [Assign Permissions] ダイアログボックスの右側のボックスの一覧で、前に作成した役割を選択します。
12. [OK] をクリックします。

vSphereの仮想マシン

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [vSphere Virtual Machine] ページでは、Install Captureのために使用するvSphereの仮想マシンを選択します。

Virtual machine – 前のページで指定されたvSphereホストサーバーで使用できる仮想マシンが一覧表示されます。使用する仮想マシンを選択します。これはこのAppDNAクライアントから実行されるInstall Capture専用の仮想マシンである必要があります。

vSphereスナップショットの選択

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [vSphere Snapshot Selection] ページでは、使用するvSphere仮想マシンスナップショットを選択します。

Snapshot – Install Captureのための基本スナップショットとして使用する仮想マシンスナップショットを選択します。必要に応じて、このウィザードの使用中に仮想マシンに変更を加えることができます。このウィザードの後のページで、必要に応じて、仮想マシンに加えた変更を保存できるように新しいスナップショットを作成することができます。この新しいスナップショットを作成すると、ここで選択した、Install Captureの実行中に仮想マシンの基本状態として使用するスナップショットが置き換えられます。

Create – 仮想マシンにスナップショットがない場合は、このボタンをクリックして、仮想マシンの現在の状態に基づくスナップショットを作成します。

Do not display the VM console – このウィザードの使用中に仮想マシンに変更を加えることができるようにAppDNAで仮想マシンをコンソールに表示する場合は、このチェックボックスをオフ（デフォルト）にします。ウィザードで仮想マシンをコンソールに表示しない場合は、このチェックボックスをオンにしてください。

Test – クリックすると、AppDNAで仮想マシンを制御できることを確認できます。テストが成功すると、AppDNAは、仮想マシンを選択されたスナップショットに戻して起動し、選択されているオプションに応じて、その仮想マシンをコンソールに表示します。このボタンをクリックしない場合は、[Next] をクリックしたときにこれらの手順が実行されます。

このコンソールに仮想マシンが表示されます。コンソールウィンドウの上部にあるオプションは、次のように使用します。

- **Always on top** – ほかのすべてのウィンドウの前面にコンソールウィンドウを開いたままにするには、このチェックボックスをオン（デフォルト）にします。コンソールウィンドウの前面にほかのウィンドウを表示する場合は、このチェックボックスをオフにしてください。このオプションは、画面が狭い場合に便利です。
- **Reconnect** – 仮想マシンの再起動後に仮想マシンに接続するには、このボタンをクリックします。

「Ctrl+Alt+Del」のキーの組み合わせを仮想マシンに送信するには、Ctrl+Alt+Endキーを押します。

XenServerホストの詳細

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [XenServer Host Details] ページでは、Install Captureのために使用するXenServerホストサーバーへの接続に必要な詳細情報を入力します。

Hostname/IP Address – XenServerホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名（「182.31.32.28」または「server.domain.com」など）を入力します。

Username – XenServerのユーザー名を入力します。これがドメインアカウントである場合は、ドメインで修飾されたユーザー名（「domain\user」または「user@domain.com」など）を入力します。ただし、標準のドメインアカウントではなく、パスワードが期限切れにならないように設定されている専用のXenServerユーザーアカウントを使用することをお勧めします。

このユーザーアカウントは、XenServerで仮想マシンの高度な操作を実行できる権限を持っている必要があります。通常、これはユーザーアカウントがVMパワー管理者の役割を持つ必要があることを意味します。

Password – アカウントのパスワードを入力します。

重要：将来パスワードを変更した場合は、このウィザードをもう一度実行して新しいパスワードを入力する必要があります。

Test – クリックすると、AppDNAが指定されたXenServerホストサーバーに接続できることを確認できます。このボタンをクリックしない場合は、[Next] をクリックしたときにウィザードでこのチェックが実行されます。

XenServerの仮想マシン

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [XenServer Virtual Machine] ページでは、Install Captureのために使用するXenServerの仮想マシンを選択します。Install Captureを実行するAppDNAクライアントでは、専用の仮想マシンを使用する必要があります。

Virtual machine – 前のページで指定されたXenServerホストサーバーで使用できる仮想マシンが一覧表示されます。使用する仮想マシンを選択します。これはこのAppDNAクライアントから実行されるInstall Capture専用の仮想マシンである必要があります。

スナップショットの選択

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [Snapshot Selection] ページでは、使用するXenServerの仮想マシンスナップショットを選択します。

Snapshot – Install Captureのための基本スナップショットとして使用する仮想マシンスナップショットを選択します。必要に応じて、このウィザードの使用中に仮想マシンに変更を加えることができます。このウィザードの後のページで、必要に応じて、仮想マシンに加えた変更を保存できるように新しいスナップショットを作成することができます。この新しいスナップショットを作成すると、ここで選択した、Install Captureの実行中に仮想マシンの基本状態として使用するスナップショットが置き換えられます。

Create – 仮想マシンにスナップショットがない場合は、このボタンをクリックして、仮想マシンの現在の状態に基づくスナップショットを作成します。

Do not display the VM console – このウィザードの使用中に仮想マシンに変更を加えることができるようにAppDNAで仮想マシンをコンソールに表示する場合は、このチェックボックスをオフ（デフォルト）にします。ウィザードで仮想マシンをコンソールに表示しない場合は、このチェックボックスをオンにしてください。

Test – クリックすると、AppDNAで仮想マシンを制御できることを確認できます。テストが成功すると、AppDNAは、仮想マシンを選択されたスナップショットに戻して起動し、選択されているオプションに応じて、その仮想マシンをコンソールに表示します。このボタンをクリックしない場合は、[Next] をクリックしたときにこれらの手順が実行されます。

このコンソールに仮想マシンが表示されます。コンソールウィンドウの上部にあるオプションは、次のように使用します。

- **Fit to window** – コンソールウィンドウに適した大きさを仮想マシンを表示するには、このチェックボックスをオンにします。
- **Always on top** – ほかのすべてのウィンドウの前面にコンソールウィンドウを開いたままにするには、このチェックボックスをオン（デフォルト）にします。コンソールウィンドウの前面にほかのウィンドウを表示する場合は、このチェックボックスをオフにしてください。このオプションは、画面が狭い場合に便利です。
- **Ctrl-Alt-Delete** – 「Ctrl+Alt+Del」のキーの組み合わせを仮想マシンに送信するには、このボタンをクリックします（ほかにこのキーの組み合わせを仮想マシンに送信する方法はありません）。
- **Reconnect** – 仮想マシンの再起動後に仮想マシンに接続するには、このボタンをクリックします。

仮想マシンの接続

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [Virtual Machine Connection] ページで、AppDNAが仮想マシンと通信するために必要な接続の詳細を指定します。

Guest operating system IP address or machine name – ゲストオペレーティングシステムのIPアドレスまたはホスト名を入力します。ゲストオペレーティングシステムがドメインに接続している場合は、完全修飾ドメイン名を入力します（ここでは `mymachine.domain.net` のようなドメインサフィックスを含めます）。使用する仮想化技術に応じて、ウィザードによりホスト名の抽出と表示が試行されます。この試行が成功した場合は、表示されたホスト名を使用することをお勧めします。

AppDNAでは、Install Capture処理の間IPアドレスまたはホスト名を使用してゲストオペレーティングシステムとのネットワーク接続を作成します。IPアドレスを指定した後で変更する場合は、このウィザードを再度実行して新しい値を保存する必要があります（そうしないと、Install Captureの処理が失敗します）。したがって、できる限り完全修飾ドメイン名を使用するか、ゲストオペレーティングシステムに静的IPアドレスを構成することをお勧めします。

注：IPアドレスを見つける方法については、下記の「仮想マシンのIPアドレスを見つける方法」を参照してください。
Remote Admin TCP port – 仮想マシンでRemote Adminがリスンするポートです。デフォルトのポートは54593です。通常、これを変更する必要はありません。ただし、特定の条件下では、別のポートを使用する必要がある場合があります。たとえば、仮想マシンのファイアウォールでデフォルトのポートが許可できない場合です。Remote Adminがリスンするポートを変更する方法については、「[Remote Adminポートの変更](#)」を参照してください。

注：Remote Adminは、仮想マシンで発生する処理の間、仮想マシン内で動作するAppDNAエージェントです。Remote Adminにより、AppDNAと仮想マシンの間の通信がサポートされます。

Test – クリックすると、AppDNAで仮想マシン内のRemote Adminに接続できることを確認できます。

仮想マシンでコマンドプロンプトを開き、次のコマンドを入力します。

```
ipconfig
```

IPアドレスを含むTCP/IPネットワーク構成値が表示されます。IPv4アドレスとIPv6アドレスの両方が表示される場合は、IPv4アドレスを使用します。

これを行うには、AppDNAマシンでコマンドプロンプトを開き、次のコマンドを入力します。

```
ping
```

ここで、は、ゲストオペレーティングシステムのIPアドレス、マシン名、またはDNS名です。これがウィザードのページで入力したものと一致する必要があります。

AppDNAが仮想マシンと通信できる場合は、次のようなping応答が表示されます。

```
Reply from 192.168.50.21: bytes=32 time<1ms TTL=128
```

キャプチャ出力の場所

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [Capture Output Location] ページで、Install Captureの出力（MSIファイルやインストールのスクリーンショットなど）を保存する場所を指定します。出力を制御する方法は2つあり、選択したオプションによって出力場所の要件が決定されます。

Stream results (simple) – このオプションでは、キャプチャが完了した後、仮想マシンからホストマシンまたはネットワーク共有上のフォルダーに出力をストリーム配信します。仮想マシンはこのフォルダーにアクセスする必要がないので、このオプションは、[Copy results to network share] オプションよりもセットアップが簡単です。ただし、Install Captureの処理が長くなります。さらに、何らかの理由でキャプチャが失敗すると、失敗するまでのキャプチャ結果が失われます。したがってこのオプションは、（[オートクリッカー](#)を使用するなどして）キャプチャをまとめて無人で実行する計画の場合は推奨されません。

- **Store results in** – 仮想マシンからストリーム配信される出力ファイルを保存する場所を指定します。AppDNAにはこのフォルダーに対する読み取り/書き込みアクセス権限が必要ですが、仮想マシンからアクセスする必要はありません。

注：キャプチャ処理中に、仮想マシンのフォルダーに結果が一時的に保存されます。デフォルトでは、このフォルダーは C:\AppDNA ですが、このウィザードで仮想マシン構成の作成を完了した後、必要に応じて、[\[Virtual Machine Configuration\] ダイアログボックス](#)でフォルダーを変更できます。

Copy results to network share (faster) – このオプションでは、AppDNAと仮想マシンの両方に読み取りおよび書き込み権限があるホストマシンまたはネットワーク共有上のフォルダーに、仮想マシンから結果をコピーします。（[オートクリッカー](#)を使用するなどして）キャプチャをまとめて無人で実行する場合は、このオプションを使用してください。

- **Network share** – 仮想マシンによる出力ファイルのコピー先を指定します。このコピー先は、ホストマシンと仮想マシンの両方が読み取りおよび書き込み権限を持つ場所である必要があります。たとえば、c:\temp\appdnaなどのローカルパスは機能しません。通常は、\\server\share\pathの形式のUNCパスを使用します。ただし、AppDNAマシンと仮想マシンの両方で同じドライブ文字が同じ場所にマップされている場合は、マップされたネットワークドライブを使用できます。

Test – クリックして、AppDNAマシンと仮想マシンの両方が、指定された場所にアクセスできることを確認します。

VMware Workstationの仮想マシンの状態

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [VMware Workstation Virtual Machine State] ページでは、ウィザードのすべての手順を完了したときに仮想マシンをどの状態にしておくかを指定します。スナップショットを作成するいずれかのオプションを選択すると、そのオプションにより、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンをリセットする元の状態が制御されます。

使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Power off and take snapshot (recommended)** – このオプションを選択した場合は、ウィザードの最後のページで [Finish] をクリックすると、仮想マシンの電源がオフになり、その状態のスナップショットが作成されます。この新しいスナップショットにより、Install Captureのために使用するスナップショットとして前のページで選択したスナップショットが置き換えられます。また、このオプションを選択すると、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンを再起動します。たとえば、Install Captureを使用して5個のアプリケーションをインポートすると、AppDNAが仮想マシンを5回（各キャプチャの始めに1回ずつ）再起動します。次のオプション（スナップショットの作成前に仮想マシンを一時停止する）よりも時間がかかりますが、仮想マシンが各Install Capture処理の始めに確実にクリーンな状態になるため、このオプションを選択することをお勧めします。
- **Suspend and take snapshot** – このオプションを選択した場合は、ウィザードの最後のページで [Finish] をクリックすると、仮想マシンが一時停止し、その状態のスナップショットが作成されます。この新しいスナップショットにより、Install Captureのために使用するスナップショットとして前のページで選択したスナップショットが置き換えられます。また、このオプションを選択すると、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンを一時停止の状態から起動させます。通常は仮想マシンを電源オフの状態から再起動する場合よりも起動時間が短くなりますが、信頼性が低くなる場合があります。
- **Revert to snapshot** – このオプションを選択した場合は、ウィザードの最後のページで [Finish] をクリックすると、仮想マシンに加えたすべての変更が破棄され、仮想マシンが前のページで選択されたスナップショットに戻されます。たとえば、既存の構成を確認するためや出力場所を変更するためにウィザードを実行しているときに、このオプションを選択します。
- **Leave running, I will stop it myself** – このオプションを選択した場合は、ウィザードの最後のページで [Finish] をクリックしたときに仮想マシンが実行状態のまま維持されます。このため、Install Captureの実行を試みる前に、ユーザー自身で仮想マシンをシャットダウンする必要があります。また、このウィザードの使用中に仮想マシンに変更を加えており、それらの変更を保持してInstall Captureで使用する場合は、新しい状態のスナップショットを作成する必要があります。その後、このウィザードをもう一度実行して、[\[VMware Workstation VM Snapshot\]](#) ページで新しいスナップショットを選択してください。

Hyper-Vの仮想マシンの状態

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードのHyper-V用の [Virtual Machine State] ページでは、ウィザードのすべての手順を完了したときにHyper-V仮想マシンをどの状態にしておくかを指定します。スナップショットを作成するいずれかのオプションを選択すると、そのオプションにより、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンをリセットする元の状態が制御されます。

使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Power off the VM and take a snapshot (recommended)** – このオプションを選択した場合は、仮想マシンの電源がオフになり、その状態のスナップショットが作成されます。このオプションを選択すると、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンを再起動します。たとえば、Install Captureを使用して5個のアプリケーションをインポートすると、AppDNAが仮想マシンを5回（各キャプチャの始めに1回ずつ）再起動します。[Suspend the VM and take a snapshot] オプションよりも時間がかかりますが、仮想マシンが各Install Capture処理の始めに確実にクリーンな状態になるため、このオプションを選択することをお勧めします。
- **Revert to snapshot** – このオプションを選択した場合は、ウィザードによる作業中に仮想マシンに加えたすべての変更が破棄され、仮想マシンが既存のスナップショットに戻されます。たとえば、既存の構成を確認するためや出力場所を変更するためにウィザードを実行しているときに、このオプションを選択します。
- **Leave running, I will stop it myself** – このオプションを選択した場合は、仮想マシンが実行状態のまま維持されます。その後、Install Captureの実行を試みる前に、ユーザー自身で仮想マシンをシャットダウンする必要があります。
- **Suspend the VM and take a snapshot** – このオプションを選択した場合は、仮想マシンが一時停止し、その状態のスナップショットが作成されます。このオプションを選択すると、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンを一時停止の状態から起動させます。通常は仮想マシンを電源オフの状態から再起動する場合よりも起動時間が短くなりますが、信頼性が低くなることがあります。
- **Take a snapshot of the VM and leave it running** – このオプションを選択した場合は、仮想マシンのスナップショットが作成され、仮想マシンが実行状態のまま維持されます。その後、Install Captureの実行を試みる前に、ユーザー自身で仮想マシンをシャットダウンする必要があります。

vSphereの仮想マシンの状態

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードのvSphere用の [Virtual Machine State] ページでは、ウィザードのすべての手順を完了したときにvSphere仮想マシンをどの状態にしておくかを指定します。スナップショットを作成するいずれかのオプションを選択すると、そのオプションにより、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンをリセットする元の状態が制御されます。

使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Power off the VM and take a snapshot (recommended)** – このオプションを選択した場合は、仮想マシンの電源がオフになり、その状態のスナップショットが作成されます。このオプションを選択すると、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンを再起動します。たとえば、Install Captureを使用して5個のアプリケーションをインポートすると、AppDNAが仮想マシンを5回（各キャプチャの始めに1回ずつ）再起動します。[Suspend the VM and take a snapshot] オプションよりも時間がかかりますが、仮想マシンが各Install Capture処理の始めに確実にクリーンな状態になるため、このオプションを選択することをお勧めします。
- **Revert to snapshot** – このオプションを選択した場合は、ウィザードによる作業中に仮想マシンに加えたすべての変更が破棄され、仮想マシンが既存のスナップショットに戻されます。たとえば、既存の構成を確認するためや出力場所を変更するためにウィザードを実行しているときに、このオプションを選択します。
- **Leave running, I will stop it myself** – このオプションを選択した場合は、仮想マシンが実行状態のまま維持されます。その後、Install Captureの実行を試みる前に、ユーザー自身で仮想マシンをシャットダウンする必要があります。
- **Suspend the VM and take a snapshot** – このオプションを選択した場合は、仮想マシンが一時停止し、その状態のスナップショットが作成されます。このオプションを選択すると、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンを一時停止の状態から起動させます。通常は仮想マシンを電源オフの状態から再起動する場合よりも起動時間が短くなりますが、信頼性が低くなる場合があります。
- **Take a snapshot of the VM and leave it running** – このオプションを選択した場合は、仮想マシンのスナップショットが作成され、仮想マシンが実行状態のまま維持されます。その後、Install Captureの実行を試みる前に、ユーザー自身で仮想マシンをシャットダウンする必要があります。

XenServerの仮想マシンの状態

Oct 16, 2015

仮想マシン構成ウィザードの [Virtual Machine State] ページでは、ウィザードのすべての手順を完了したときにXenServer仮想マシンをどの状態にしておくかを指定します。スナップショットを作成するいずれかのオプションを選択すると、そのオプションにより、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンをリセットする元の状態が制御されます。

使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Power off and take snapshot (recommended)** – このオプションを選択した場合は、仮想マシンの電源がオフになり、その状態のスナップショットが作成されます。このオプションを選択すると、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンを再起動します。たとえば、Install Captureを使用して5個のアプリケーションをインポートすると、AppDNAが仮想マシンを5回（各キャプチャの始めに1回ずつ）再起動します。次のオプション（スナップショットの作成前に仮想マシンを一時停止する）よりも時間がかかりますが、仮想マシンが各Install Capture処理の始めに確実にクリーンな状態になるため、このオプションを選択することをお勧めします。
- **Suspend and take snapshot** – このオプションを選択した場合は、仮想マシンが一時停止し、その状態のスナップショットが作成されます。このオプションを選択すると、AppDNAが各Install Capture処理の始めに仮想マシンを一時停止の状態から起動させます。通常は仮想マシンを電源オフの状態から再起動する場合よりも起動時間が短くなりますが、信頼性が低くなる場合があります。
- **Revert to snapshot** – このオプションを選択した場合は、ウィザードによる作業中に仮想マシンに加えたすべての変更が破棄され、仮想マシンが既存のスナップショットに戻されます。たとえば、既存の構成を確認するためや出力場所を変更するためにウィザードを実行しているときに、このオプションを選択します。
- **Leave running, I will stop it myself** – このオプションを選択した場合は、仮想マシンが実行状態のまま維持されます。その後、Install Captureの実行を試みる前に、ユーザー自身で仮想マシンをシャットダウンする必要があります。

仮想マシン構成の概要

Oct 16, 2015

このページでは、仮想マシン構成ウィザードで選択した構成オプションおよび設定の概要について説明します。

概要を確認した後で、構成の調整が必要になることがあります。使用する仮想化技術に応じて、手順が異なります。

- [Back] ボタンが有効な場合は、それをクリックして関連ページに戻ることができます。変更を加えた後、各ページで [Next] をクリックしてこの概要画面まで戻り、構成を完了する必要があります。
- [Back] ボタンが無効な場合は、[Finish] をクリックしてウィザードを閉じます。それから [Save] をクリックして変更を保存し、[Settings] ダイアログボックスを閉じます。必要であれば、[Settings] ダイアログボックスを再度開いて仮想マシン構成を編集できます。

[Finish] をクリックしてウィザードを終了し、[Settings] ダイアログボックスの [Save] をクリックします。[Import Applications] 画面に移動すると、[Install Capture] タブの [Virtual Machines] ボックスの一覧に新しい仮想マシン構成が表示されていることが確認できます。

[VM Configuration] ダイアログボックス

Oct 16, 2015

[Virtual Machine Configuration] ダイアログボックスは、[Install Capture](#)またはForward Pathのタスクで使用する仮想マシン構成を編集するための上級ユーザー向けの機能です。[Configure Virtual Machine] ダイアログボックスを開くには、[\[Install Capture Settings\]](#) の [Advanced] をクリックします。

注：この領域について深い知識があるユーザー以外は、仮想マシン構成ウィザードを使用して仮想マシン構成を編集することをお勧めします。

[Configure Virtual Machine] ダイアログボックスには、次のような数多くのオプションがあります。

- 仮想マシンの設定
- Remote Admin
- 置き換え可能パラメーター
- オプションの構成
- プロバイダープラグイン（一部のプロバイダーに対してのみ）

次に、これらのオプションについてタブごとに分けて説明します。オプションは、最初のタブで選択するプロバイダーによって異なります。

[Virtual Machine Configuration] ダイアログボックスの [Virtual Machine Settings] タブを使用して、仮想マシン構成の基本設定を表示し定義します。

Name - 仮想マシン構成の名前です。構成一覧内で固有の名前にする必要があります。

Description - 構成の目的を特定するのに役立つ説明です。

Provider - この構成に使用されている仮想マシン技術が表示されます。このボックスの一覧のオプションは [Install Capture](#) に記載されている、サポートされる技術に対応しています。ここではプロバイダーを変更しないでください。プロバイダーを変更する場合は、そのプロバイダー用の新しい構成を通常の方法で作成することをお勧めします。

Output Location - Install Captureの出力ファイル（MSIファイル、インストールのスクリーンショットなど）が格納される場所です。このフォルダーの構成方法は、[Stream VM Output] チェックボックスがオンになっているかどうかによって異なります。

- [Stream VM Output] チェックボックスがオンになっている場合は、ホストマシンまたはネットワーク共有上のフォルダーです。仮想マシンはこのフォルダーへのアクセスを必要としませんが、AppDNAはこのフォルダーにアクセスする必要があります。
- [Stream VM Output] チェックボックスがオフになっている場合は、ホストマシンと仮想マシンの両方が読み書きアクセスできる場所である必要があります。この場所は、マップされたネットワークドライブでも、`\AppDNAMachine\AppDataOutput`のような完全なUNCパスでも構いません。

注：キャプチャ出力ファイルは、Windowsの最大パス長である260文字を超える可能性がある深いフォルダー構造を必要とすることがあります。この制限を克服するために、「`\\?\UNC\<server>\<share>`」という形式でUNCパスを指定できます。

Stream VM Output - キャプチャが完了した後にInstall Captureで、仮想マシンからホストマシンまたはネットワーク共有上のフォルダーに出力をストリーム配信で戻す場合は、このオプションを選択します。これは、仮想マシンとAppDNAの両方がアクセスできるフォルダーに出力を書き込むよりもセットアップが簡単です。ただし、速度が劣ります。Install Captureで、AppDNAと仮想マシンの両方が読み書きアクセスできる、ホストマシンまたはネットワーク共有上のフォルダーに仮想マ

シンから結果をコピーする場合は、このチェックボックスをオフにします。

VM Output Staging Location - [Stream VM Output] チェックボックスがオンになっている場合は、Install Captureがホストマシンまたはネットワーク共有上の [Output Location] フォルダーに出力をストリーム配信で戻す前に一時的に出力を格納する仮想マシン上のフォルダーを指定します。この設定では、\\?\UNC\の長いパス表記は使用できません。

VM Identifier (Name) - (VM Provider Plugin以外) 仮想マシンの作成時に付けられた固有の名前です。VMware Workstationの仮想マシンの場合はVMXファイルのフルパスで、たとえばC:\Virtual Machines\VVMXPSP3-01\VVMXPSP3-01.vmxです。

Action Timeout - (VM Provider Plugin以外) 検索、起動、スナップショットの復元など、仮想マシンの制御操作のタイムアウト期間を秒単位で指定します。これらの操作にかかる時間は、仮想化技術と仮想マシンイメージのサイズによって異なります。デフォルトは1,200秒です。

"Installation Needs Input" Timeout - インストール (またはほかの実行プロファイルコマンド) の完了をInstall Captureが待機する秒単位の期間です。この期間内にコマンドが完了しない場合は、入力が必要かどうかを知るために実行中の仮想マシンを確認する必要があることを示すメッセージが、AppDNAから表示されます。サイレントインストールコマンドでInstall Captureの処理を複数実行するとき、予想外に入力を待機する処理が発生するような状況で、このオプションが役立ちます。デフォルトは1,200秒です。

"Abort Installation" Timeout - アクティビティがないためにインストールを終了して次のインストールに移る前に、Install Captureが待機する秒単位の期間です。デフォルトは2,400秒 (40分) です。サイズの大きなアプリケーションではインストールにかなりの時間がかかることがあるため、意図的に長期間に設定されています。たとえば**オートクリッカー**を使用し、夜間にキャプチャをまとめて実行する場合は、このタイムアウト期間を短縮して、一部のキャプチャが失敗する場合にバッチ処理の進行を速めるとよいでしょう。ただし、これによりサイズの大きなアプリケーションのキャプチャが失敗する可能性があります。したがって、オートクリッカーを使用する場合は (たとえば) 期間を1,200秒に短縮して、手動でキャプチャを実行する前にデフォルト値に戻すとよいでしょう。

Base Snapshot Path - (VMware Workstationのみ) Install Captureで実行する各処理において仮想マシンの基本状態として使用する、仮想マシン内のスナップショットを定義します。VMware Workstationでは、スナップショットはツリー状に形成される場合があります。使用するスナップショットのパスはSnapshot1\InstallCaptureBaselineSnapshotのように指定します。

[Virtual Machine Configuration] ダイアログボックスの [Remote Admin] タブを使用して、AppDNAがRemote Adminと通信する方法を定義します。Remote Adminは仮想マシン内で動作するAppDNAエージェントです。

VM Guest Machine Name - 仮想マシンのIPアドレスまたはマシン名です。AppDNAではこれを使用して、ゲストオペレーティングシステムへのネットワーク接続を確立します。バックスラッシュ (\) は含めないでください。

VM Control using - AppDNAで仮想マシン内のRemote Adminとの接続に使用するプロトコルです。デフォルトはTCPです。名前付きパイププロトコルは廃止予定であり、前のバージョンのAppDNAで作成された構成に対してのみサポートされます。

Named Pipe Username - 名前付きパイププロトコルを使用する場合の、名前付きパイプのユーザー名です。ユーザーの完全修飾アカウント名を指定します。これは、ローカル管理者アカウントの場合はVM_MACHINE_NAME\USERNAME形式、仮想マシンにログオンできるドメインアカウントの場合はDOMAIN_NAME\USERNAME形式である必要があります。この値を空白のままにする場合は、仮想マシンにローカルセキュリティポリシーを設定して名前付きパイプの匿名アクセスを許可してください。

Named Pipe Password - 名前付きパイププロトコルを使用し、名前付きパイプのユーザーアカウントを上指定する場合

の、名前付きパイプのパスワードです。

TCP Port - Remote Adminがリッスンするポートです。デフォルトは54593です。Remote Admin (remoteadmin.exe) を tcp_port=パラメーター付きで実行すると、ポートを変更できます。ここで、は新しいポートです。Remote Adminがリッスンするポートの変更については、「[Remote Adminポートの変更](#)」を参照してください。

Troubleshoot Errors - Install Captureの実行時に特定のエラーが発生した場合にトラブルシューティングユーザーインターフェイスが表示されるようにするには、このチェックボックスをオンにします。このトラブルシューティングユーザーインターフェイスを使用して、Remote Adminへの接続やコマンドの実行などのトラブルシューティングの手順を仮想マシンで実行することができます。その後、「Finished」操作を実行すると、Install Captureが終了してトラブルシューティングインターフェイスが閉じ、次のInstall Capture (ある場合) に移ります。Remote Adminへの接続とInstall Captureコマンドの実行に関連するエラーが発生すると、トラブルシューティングインターフェイスが表示されます。デフォルトの動作を使用する場合は、このチェックボックスをオフにします。

[Virtual Machine Configuration] ダイアログボックスの [Replaceables] タブを使用して、この仮想マシン構成で実行される実行プロファイルで使用する置き換え可能パラメーターの値を定義します。ただし、ここで定義する置き換え可能パラメーターの値は、実行プロファイル自体または [Import Applications] 画面の [Quick Edit Parameter] ボックスで明示的に定義される置き換え可能パラメーターの値によって上書きされます。

置き換え可能パラメーターは、実行時に提供される値で置き換えられるプレースホルダーです。実行プロファイルに置き換え可能パラメーターを含めるときの構文は\$(replaceable_name)です。ここで、replaceable_nameは置き換え可能パラメーターの名前です。

AppToolsFolder置き換え可能パラメーターは、Citrix AppDNA VM構成ツールのMSIにより仮想マシンにインストールされるツールの場所を指定するために使用します。デフォルトでは、これらはC:\Program Files\Citrix\AppDNA\VM Configuration (64ビット仮想マシンの場合はC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\VM Configuration) にインストールされます。AppToolsFolder置き換え可能パラメーターのデフォルト値では、AppDNA VM構成ツールのMSIで作成される%APPDNAVMCONFIG%環境変数が使用されます。この変数にツールの実際のインストール場所が格納されています。

この仮想マシン構成の置き換え可能パラメーターの値を定義するには

- 一覧にこの仮想マシンのために値を変更する置き換え可能パラメーターがある場合は、それを選択して[Edit] をクリックします。 [Edit Text] ダイアログボックスが開きます。ここで、新しい値を入力したり貼り付けたりできます。
- 一覧に値を変更する置き換え可能パラメーターがない場合は、[New] をクリックします。 [Edit Replaceable] ダイアログボックスが開きます。ここで、新しい置き換え可能パラメーターと値を入力できます。

実行プロファイルで内部的に使用される置き換え可能パラメーターは多数存在します。これらの置き換え可能パラメーターの値は自動的に設定されるため、手動設定は不要です。これらの完全な一覧については、「[実行プロファイルの編集](#)」を参照してください。

[Virtual Machine Configuration] ダイアログボックスの [Optional Configuration] タブを使用して、仮想マシン構成のInstall Capture設定を表示し定義します。

VM Cleanup Action - Install Captureでキャプチャ処理を完了した後に、仮想マシンの状態をどのように変更するかを定義します。ここで選択するオプションにより、キャプチャの処理時間が影響を受けます。オプションは、 [Suspend] 、 [Leave Running] 、および [Power Off] です。ここで選択するオプションにかかわらず、各キャプチャ処理を実行する前に、仮想マシンはInstall Captureにより常に元の状態にリセットされることに注意してください。

[Virtual Machine Configuration] ダイアログボックスの [Provider Plugin] タブを使用して、XenServerプロバイダーやvSphereプロバイダーなどのプラグインに基づくプロバイダーの設定を表示し定義します。このタブは、プラグインベースのプロバイダーに対してのみ表示されます。

Provider Assembly Path - 仮想マシンプロバイダープラグインのアセンブリのパスです。

Provider Code Type - 仮想マシンプロバイダープラグインのアセンブリの、仮想マシン技術との対話を処理するクラスです。

Use Remoting - 仮想マシンプロバイダープラグインの中には、基盤になる技術でリモート処理をサポートしなくても、リモート処理をサポートするものがあります。プロバイダーにリモートプロバイダーシステムと通信するように指示するには、このチェックボックスをオンにします。リモートマシンのリスナーを実行し、リスンさせる必要があることに注意してください。

Remote Provider Machine Address - リモートプロバイダーシステムをホストするマシンのホスト名またはIPアドレスです。これは [Use Remoting] チェックボックスがオンの場合にのみ適用されます。

TCP Port - リモートプロバイダーシステムがリスンするTCPポートです。これは [Use Remoting] チェックボックスがオンの場合にのみ適用されます。

Configuration Settings - このセクションでは、必要なそのほかの設定を定義します。これらの設定は名前と値の組み合わせの形を取ります。

- 新しい構成設定を定義するには、[New] をクリックします。[Edit Value] ダイアログボックスが開きます。設定名とその値を入力して、[OK] をクリックします。
- 既存の構成設定を編集するには、一覧から設定を選択して [Edit] をクリックします。[Edit Value] ダイアログボックスが開きます。ここで、既存の値を編集できます。

Hyper-Vプラグインの設定は次のとおりです。

- hostname - Hyper-VホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名です。
- username - AppDNAがHyper-Vへのアクセスに使用するアカウントのユーザー名です。仮想マシン構成ウィザードでこのパスワードを入力した場合、パスワードは暗号化された形式で保存されます。ここでユーザー名を入力した場合、ユーザー名は暗号化されません。
- password - AppDNAがHyper-Vへのアクセスに使用するアカウントのパスワードです。仮想マシン構成ウィザードでこのパスワードを入力した場合、パスワードは暗号化された形式で保存されます。ここでパスワードを入力した場合、パスワードは暗号化されません。
- virtualmachine - Install Captureに使用されるHyper-V仮想マシンの名前です。
- snapshot - Install Captureに使用されるスナップショットの内部IDです。
- vmaddress - ゲストオペレーティングシステムのマシン名、DNS名、またはIPアドレスです。
- vmstate - 仮想マシン構成ウィザードの [Hyper-V Virtual Machine State] ページで選択したオプションです。

vSphereプラグインの設定は次のとおりです。

- hostname - vSphereホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名です。
- username - AppDNAがvSphereへのアクセスに使用するアカウントのユーザー名です。仮想マシン構成ウィザードでこのパスワードを入力した場合、パスワードは暗号化された形式で保存されます。ここでユーザー名を入力した場合、ユーザー名は暗号化されません。
- password - AppDNAがvSphereへのアクセスに使用するアカウントのパスワードです。仮想マシン構成ウィザードでこの

パスワードを入力した場合、パスワードは暗号化された形式で保存されます。ここでパスワードを入力した場合、パスワードは暗号化されません。

- virtualmachine – Install Captureに使用されるvSphere仮想マシンの名前です。
- snapshot – Install Captureに使用されるスナップショットの名前です。
- vmstate – 仮想マシン構成ウィザードの [vSphere Virtual Machine State] ページで選択したオプションです。

XenServerプラグインの設定は次のとおりです。

- hostname – XenServerホストサーバーのIPアドレスまたはDNS名です。
- username – AppDNAがXenServerへのアクセスに使用するアカウントのユーザー名です。[仮想マシン構成ウィザード](#)でこのパスワードを入力した場合、パスワードは暗号化された形式で保存されます。ここでユーザー名を入力した場合、ユーザー名は暗号化されません。
- password – AppDNAがXenServerへのアクセスに使用するアカウントのパスワードです。仮想マシン構成ウィザードでこのパスワードを入力した場合、パスワードは暗号化された形式で保存されます。ここでパスワードを入力した場合、パスワードは暗号化されません。
- virtualmachine – Install Captureに使用されるXenServer仮想マシンの名前です。
- vmstate – 仮想マシン構成ウィザードの [XenServer Virtual Machine State] ページで選択したオプションです。

Remote Adminポートの変更

Oct 16, 2015

Remote Adminは、Install Capture中に仮想マシン内で実行されるAppDNAエージェントです。Remote Adminは、Citrix AppDNA VM構成ツールのMSIをインストールするときに、仮想マシン内に自動的にインストールされます。MSIは、Remote Adminを仮想マシンの電源が投入されたときに自動的に起動し、ポート54593のAppDNAクライアントからの接続をリッスンするように構成します。

ポートは、仮想マシンのコマンドラインからRemoteAdmin.exeを起動して次のパラメーターを含めることによって変更できます。

`-tcp_port=port`

ここで、portは、新しいポートです。

これはRemote Adminを起動するたびに行う必要があります。この実際の意味は、Install Captureが各Install Captureの始めに仮想マシンを元の状態にリセットする、仮想マシンの状態により異なります。この状態は、Install Captureが使用するスナップショットを作成するときの仮想マシンの状態により決まります。この仕組みがわかるように、バックグラウンド情報をいくつか紹介します。

各Install Captureに対して、AppDNAは次の操作を行います。

1. 仮想マシンのプロバイダーに接続し、仮想マシンをその仮想マシンの構成で指定したスナップショットに戻します。スナップショットが作成されたときの仮想マシンの状態により、AppDNAが仮想マシンを元に戻す状態が制御されます。
2. Remote Adminを使用して仮想マシン内でキャプチャタスクを実行します。
3. 仮想マシンを一時停止します（またはシャットダウンする、または実行を続けます）。（一時停止がデフォルトのアクションです。これを変更するには、[\[Virtual Machine Configuration\] ダイアログボックス](#)の [\[VM Cleanup Action\]](#) オプションを使用します）

Remote Adminが起動する方法は、手順1でAppDNAが元の状態に戻したときの仮想マシンの状態によって決まります。

- **実行中** – ゲストオペレーティングシステムが実行中でユーザーがログオンしている場合には、Remote Adminは既に実行中で、再び起動はしません。
- **電源オフ** – 仮想マシンの電源がオフの場合、仮想マシンに電源が投入されるときに、Remote Adminは仮想マシンの `HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Run` のレジストリキーに格納されたコマンドを使用して起動します。

したがって、Remote Adminを異なるポートを使用するように構成する方法は、Install Captureのスナップショットが作成された時の仮想マシンの状態によって異なります。各オプションについての手順を以下に示します。

スナップショットの作成方法は、使用している仮想化技術によって異なります。ただし、すべての技術について、[仮想マシン構成ウィザード](#)の最終手順に一時停止または電源オフの状態のいずれかでスナップショットを作成するオプションが用意されています。そのため、ウィザードを実行するなかで仮想マシンで次の手順を実行できます。

仮想マシンを一時停止し、Install Captureが仮想マシンの状態を元に戻すスナップショットを作成する前に、次の手順に従います。

1. 仮想マシンでWindowsのタスクマネージャーを開きます。
2. タスクマネージャーの [\[アプリケーション\]](#) タブで、[\[RemoteAdmin\]](#) をクリックし、[\[End Task\]](#) をクリックします。

3. コマンドプロンプトを開き、以下のように入力します。

```
"location\RemoteAdmin.exe" -tcp_port=port
```

ここでlocationは、RemoteAdmin.exeの場所です。デフォルトで、この場所は32ビット版仮想マシンではC:\Program Files\Citrix\AppDNA\VM Configuration (64ビット版仮想マシンではC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\VM Configuration) となり、portは新しいポート番号となります。

これにより、Remote Adminを起動し、新しいポート番号を使うように構成されます。これで、仮想マシンを一時停止しスナップショットを作成できるようになります。

仮想マシンの電源をオフにしてInstall Captureが仮想マシンの状態を元に戻すスナップショットを作成する前に、次の手順に従います。

1. 仮想マシンで [スタート]、[実行] の順に選択します。

2. 「Regedit」と入力して [OK] をクリックします。

3. レジストリエディターで、次の場所を参照します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Run
```

4. 右側のペインでRemoteAdmin.exeをダブルクリックします。

5. [Edit String] ダイアログボックスで、既存の値の後に以下を追加します。

```
-tcp_port=port
```

ここで、portは、新しいポート番号です。(tcp_portの前にスペースが必要なことに注意してください。)

6. [OK] をクリックしてから、レジストリエディターを閉じます。

これにより、Remote Adminを起動したときに新しいポート番号を使うように、仮想マシンが構成されます。これで、仮想マシンを電源オフにしてスナップショットを作成できるようになります。

オペレーティングシステムのイメージ

Oct 16, 2015

AppDNAには、使用できるデフォルトのOSイメージのセットが用意されています。ただし、独自のイメージをAppDNAにインポートして、環境に応じた分析を行うこともできます。

1つのOSファミリ（Windows Server 2012やWindows 8など）の複数のイメージをインポートできます。たとえばラップトップ用に1つ、デスクトップ用に1つなど、OSに2つ以上の社内用標準ビルドがある場合に、複数のイメージを格納しておくも便利です。1つのOSに対して複数のOSイメージをAppDNAにインポートした場合は、レポートを表示するときに使用するイメージを選択できます。AppDNAでのOSイメージの使用方法の概要については、「[オペレーティングシステム](#)」を参照してください。

一般的に、OSイメージをインポートするには次の手順に従います。

1. [Import & Analyze]、[Operating Systems] の順に選択して、[Operating Systems] 画面を開きます。
[Operating Systems] 画面に、インポート済みのすべてのOSイメージが一覧表示されます。
2. 新しいOSをインポートするには、[Download Snapshot Manager] をクリックします。Snapshot Managerを使用して、クリーンな社内イメージまたはクリーンな仮想マシンに基づいてMSIを作成します。詳しくは、「[OSイメージのMSIの作成](#)」を参照してください。
3. Snapshot ManagerでMSIファイルを作成したら、[Import from MSI] をクリックします。詳しくは、「[OSイメージのインポート](#)」を参照してください。
4. OSイメージ間の関係を構成するには、[OS Image Relationships] をクリックします。詳しくは、「[OSイメージの関係の構成](#)」を参照してください。

各OSイメージを構成するときに、比較するほかのOSイメージとの関係を定義する必要があります。たとえば、Windows への移行の準備として、Windows 7とWindows XPのそれぞれに対するデスクトップとラップトップの社内用標準OSイメージをインポートするとします。この場合、Windows 7とWindows XPのデスクトップイメージ間の関係、およびWindows 7とWindows XPのラップトップイメージ間の関係をそれぞれ設定する必要があります。これは、それぞれのイメージをインポートするときに実行できます。また、すべてのイメージをインポートした後にそれらの関係をまとめて設定することもできます。

注：複数のOSイメージをインポートしたら、各レポートのデフォルトイメージを[Edit]、[Settings]、[OS Image Configuration] で定義できます。

OSイメージのMSIの作成

Oct 16, 2015

ここでは、使用するオペレーティングシステム (OS) イメージのスナップショットMSIを作成する方法について説明します。このスナップショットMSIをAppDNAにインポートします。

注 : Snapshot Managerでは、OSのインストール先ドライブが環境変数%SYSTEMDRIVE%により検出されます。

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Operating Systems] の順に選択します。
2. [Operating Systems] 画面のツールバーで、 [Download Snapshot Manager] をクリックします。
3. SnapshotManager.exeを適切な場所に保存します。
4. 必要であれば、キャプチャするオペレーティングシステムイメージを持つマシンにSnapshotManager.exeをコピーします。
5. Windowsエクスプローラーで、SnapshotManager.exeを右クリックして [管理者として実行] を選択します。
6. 出力ファイルの保存場所を選択し、 [OK] をクリックします。
コマンドプロンプトが開き、オペレーティングシステムイメージのMSIの作成が始まります。オペレーティングシステムとビルドのサイズに応じて、この処理には30分から約2時間かかります。
7. MSIの作成が完了すると、ダイアログボックスが開き、MSIスナップショットファイルの名前と場所が表示されます。
 [OK] をクリックしてダイアログボックスを閉じます。
8. 必要に応じて、AppDNAがインストールされたマシンに次のファイルをコピーします。
 - .msi
 - .msi.xml
 - .msi_predumper.xml
 - .msi_predumper_output.xml

これで、OSイメージをAppDNAにインポートする準備ができました。手順については、 [「オペレーティングシステムイメージのインポート」](#) を参照してください。

OSイメージのインポート

Oct 16, 2015

1. サイドバーから [Import & Analyze] 、 [Operating Systems] の順に選択します。
2. [Operating Systems] 画面のツールバーで、 [Import from MSI] をクリックし、以下のタスクを実行します。

- [オペレーティングシステムイメージの詳細情報](#)
- [イメージの関係](#)
- [オペレーティングシステムイメージのインポートの結果](#)

1. 次の詳細情報を入力します。

Location of MSI file – インポートするOSイメージのMSIを指定します。OSイメージのMSIは、Snapshot Managerで生成される3つのXMLファイルと同じフォルダーに格納されている必要があります。

.msi
.msi.xml
.msi_predumper.xml
.msi_predumper_output.xml

Create new image – AppDNAで新しいOSイメージを作成する場合に選択します（デフォルト）。このオプションを選択した後、名前と説明を入力します。

- **OS image name** – AppDNAでオペレーティングシステムイメージを識別できる名前を入力します。オペレーティングシステムファミリの名前など、重要なID情報を含めることをお勧めします。たとえば、「Windows 8.1 – standard laptop image」のような名前を使用します。
- **OS image description** – このオペレーティングシステムイメージの用途を示す追加の情報を入力します。

Overwrite existing image – AppDNAで既存のOSイメージを上書きする場合に選択します。このオプションを選択した後、上書きするOSイメージを選択します。このオプションは、インポートしたOSイメージに対してのみ使用できます。システムOSイメージ（AppDNAに組み込まれているOSイメージ）は上書きできません。

2. イメージ情報の入力完了したら、 [Next] をクリックして次の手順に進みます。

1. 左側の [Are you moving] で、次のいずれかのオプションを選択します。

To this operating system image – 新しいオペレーティングシステムイメージが移行先のオペレーティングシステム（Windows 8.1など）を表している場合は、このオプションを選択します。画面の右側に、使用可能な移行元のオペレーティングシステムイメージの一覧が表示されます。

From this operating system image – 新しいオペレーティングシステムイメージが移行元のオペレーティングシステムを表している場合は、このオプションを選択します。画面の右側に、使用可能な移行先のオペレーティングシステムイメージの一覧が表示されます。

2. 画面右側で、構成するOSイメージと比較するOSイメージを選択します。不要なOSイメージが選択されている場合は選択を解除します。

最適な結果が得られるように、実行する分析に関連するイメージだけを選択することをお勧めします。

ペアの一方のイメージをインポートすると、もう一方のイメージはまだインポートされていないため選択できなくなります。そのため、このセクションは未入力のままにして、後で [Operating Systems] 画面で構成します。

3. [Next] をクリックしてオペレーティングシステムイメージのインポートを開始します。

例

Windows XPからWindows 8.1に移行しようとしていて、Windows XPとWindows 8.1の両方のデスクトップイメージとラップトップイメージをインポートすると仮定します。

- Windows XPのラップトップイメージをインポートして構成するときは、[From this operating system image] を選択し、移行先イメージとしてWindows 8.1のラップトップイメージを選択します。
- Windows 8.1のラップトップイメージを構成するときは、[To this operating system image] を選択し、移行元イメージとしてWindows XPのラップトップイメージを選択します。

デスクトップイメージについても同じ手順を実行します。Windows 8.1レポート用の分析を実行すると、Windows XPのラップトップイメージとWindows 8.1のラップトップイメージの間の変更、およびWindows XPのデスクトップイメージとWindows 8.1のデスクトップイメージの間の変更がそれぞれ比較されます。レポートを表示するには、ラップトップイメージとデスクトップイメージのどちらのレポートを表示するかを選択します。

この例では、イメージが一对一で対応しているオペレーティングシステムイメージの関係を設定する方法について説明しています。しかし、これは必須ではありません。たとえば、1つの従来のオペレーティングシステムイメージと、4つのターゲットオペレーティングシステムイメージをインポートし、単一の従来のオペレーティングシステムイメージを使用して4つのターゲットオペレーティングシステムイメージのすべてを構成することもできます。

インポートが完了すると、結果が表示され、新しいオペレーティングシステムイメージを反映するために再分析が必要なレポートが示されます。

1. 分析をすぐに開始する場合は、[Analyze] をクリックします。
2. 分析を実行する前に別のオペレーティングシステムイメージをインポートする場合は、[Previous] をクリックして [Operating Systems] 画面に戻ります。その後、通常の方法で分析を実行できます。

OSイメージの関係の構成

Oct 16, 2015

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Operating Systems] の順に選択します。
2. [Operating Systems] 画面のOSイメージの一覧から、構成するOSイメージを選択します。
3. ツールバーの [OS Image Relationships] をクリックします。
4. 左側の [Are you moving] で、次のいずれかのオプションを選択します。

To this operating system image – 新しいオペレーティングシステムイメージが移行先のオペレーティングシステム (Windows 8.1など) を表している場合は、このオプションを選択します。画面の右側に、使用可能な移行元のオペレーティングシステムイメージの一覧が表示されます。

From this operating system image – 新しいオペレーティングシステムイメージが移行元のオペレーティングシステムを表している場合は、このオプションを選択します。画面の右側に、使用可能な移行先のオペレーティングシステムイメージの一覧が表示されます。

5. 画面右側で、構成するOSイメージと比較するOSイメージを選択します。不要なOSイメージが選択されている場合は選択を解除します。
最適な結果が得られるように、実行する分析に関連するイメージだけを選択することをお勧めします。
6. ツールバーの [Save] をクリックして変更を保存します。
変更がレポートに反映されるようにするには、構成への変更内容に応じて、アプリケーションを分析する必要がある場合があります。これが必要な場合、ツールバーの右側にある [Analyze] ボタンが有効になります。必要な場合には、[Analyze] をクリックしてアプリケーションを分析します。または、後で通常の方法でアプリケーションを分析できます。

Windows XPからWindows 8.1に移行しようとしていて、Windows XPとWindows 8.1の両方のデスクトップイメージとラップトップイメージをインポートすると仮定します。

- Windows XPのラップトップイメージをインポートして構成するときは、[From this operating system image] を選択し、移行先イメージとしてWindows 8.1のラップトップイメージを選択します。
- Windows 8.1のラップトップイメージを構成するときは、[To this operating system image] を選択し、移行元イメージとしてWindows XPのラップトップイメージを選択します。

デスクトップイメージについても同じ手順を実行します。Windows 8.1レポート用の分析を実行すると、Windows XPのラップトップイメージとWindows 8.1のラップトップイメージの間の変更、およびWindows XPのデスクトップイメージとWindows 8.1のデスクトップイメージの間の変更がそれぞれ比較されます。レポートを表示するには、ラップトップイメージとデスクトップイメージのどちらのレポートを表示するかを選択します。

この例では、イメージが一对一で対応しているオペレーティングシステムイメージの関係を設定する方法について説明しています。しかし、これは必須ではありません。たとえば、1つの従来のオペレーティングシステムイメージと、4つのターゲットオペレーティングシステムイメージをインポートし、単一の従来のオペレーティングシステムイメージを使用して4つのターゲットオペレーティングシステムイメージのすべてを構成することもできます。

OSイメージの削除

Oct 16, 2015

[Operating Systems] 画面でインポートしたOSイメージは削除できますが、AppDNAの組み込みのOSイメージ（システムイメージ）は削除できません。

お手持ちのライセンスに含まれるレポートに関連するオペレーティングシステムファミリーに対して1つしかオペレーティングシステムイメージがない場合は、そのイメージは削除しないでください。

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] 、 [Operating Systems] の順に選択します。
2. [Operating Systems] 画面のOSイメージの一覧から、削除するOSイメージを選択します。
3. ツールバーの [Delete Image] をクリックします。

このOSイメージが [OS Image Configuration Settings] でレポートのデフォルトイメージに設定されている場合、その設定は自動的にリセットされます。関連するOSファミリーのイメージがインポート済みである場合は、最新のイメージがデフォルトに設定されます。そのOSファミリーについてインポート済みのイメージがない場合は、システムイメージが使用されます。これを変更するには、 [Edit] 、 [Settings] 、 [OS Image Configuration] の順に選択します。

OSイメージの設定

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスには、AppDNAの全般的なオプションが含まれます。このダイアログボックスを開くには、メニューから [Edit]、[Settings] の順に選択します。

[OS Image Configuration] ページを使用して、レポートのデフォルトのOSイメージを指定します。このページには、1つまたは複数のOSファミリに属するOSイメージに対してアプリケーションDNAを分析するアルゴリズムを含むレポートが一覧表示されます。たとえば、Windows 8のレポートでは以前のOS (Windows XPなど) およびWindows 8に対してアプリケーションDNAが分析されます。

1つのOSファミリに複数のOSイメージを使用できる場合は、関連するレポートのデフォルトイメージを指定する必要があります。デフォルトイメージは、Effort Calculator、Overview Summaryレポートおよびレポートエクスポートウィザードで使用されます。また関連するレポートに対してデフォルトで選択されます。

各レポートについて、デフォルトとして使用するOSイメージを指定します。それから[Save] をクリックして変更を保存します。

このダイアログボックスのボックスの一覧で選択できるOSイメージは、レポートおよびその構成によって異なります。たとえば、従来のWindowsプラットフォームをWindows XPと指定してWindows 8レポートを構成したとします。このWindows 8レポートについては、[Prior OS Image] ボックスの一覧ではWindows XPの使用できるイメージを、[Target OS Image] ボックスの一覧ではWindows 8の使用できるイメージを選択できます。使用できるOSイメージが1つしかない場合は、選択する必要がありません。

「No OS algorithms active for this report」というメッセージが表示される場合は、OSイメージに対してアプリケーションDNAを分析するアルゴリズムが、このレポートでは ([Algorithm Groups] 画面などで) 無効に設定されていることを意味します。

注：

- カスタムレポートがサポートされるAppDNAエディションでは、このダイアログボックスにOSイメージ依存アルゴリズムを含んでいるカスタムレポートのエントリが自動的に追加されます。
- 無効になっているレポートは表示されません。
- 独自のOSイメージは、[Operating Systems] 画面で削除できます。レポートのデフォルトイメージに設定されているOSイメージを削除すると、そのOSファミリについて最後にインポートしたイメージがデフォルトイメージに設定されます。必要であれば、このダイアログボックスでこれを変更できます。

モジュール、レポート、およびアルゴリズム：

Oct 16, 2015

ここでは、分析およびその結果に影響する高度な構成を実行する方法について説明します。

クイックリンク：

- [モジュールの構成](#)
- [アルゴリズムグループの構成](#)
- [アルゴリズムの構成](#)
- [修復アクションの追加](#)
- [アルゴリズムのエクスポートおよびインポート](#)
- [カスタム設定のエクスポート](#)
- [Windowsデスクトップレポートのアルゴリズムの構成](#)

モジュールの構成

Oct 16, 2015

組織のニーズを満たすようにAppDNAを構成するには、モジュール構成ウィザードを使用します。各モジュールは、特定の状況に合わせたレポートのコレクションを提供します。たとえば、Desktop Compatibility Managerモジュールには、Windows 7とWindows 8.1/8のレポートが含まれています。レポートには、特定のプラットフォームまたは技術に対する互換性の問題がアプリケーションにないかどうかを示されます。

関与するアプリケーションの数によっては、分析に多くの時間とリソースが必要です。また、作成されたレポートデータはデータベースに格納されます。そこで、このウィザードでは、主なモジュールについて紹介し、組織が現在取り組んでいるプロジェクトと、いくつかの関連事項を設定します。その後、現在のプロジェクトに関係のあるレポートをアクティブ化してカスタマイズし、関係のないレポートとアルゴリズムをオフにします。これにより、分析が高速化され（つまり、使用している環境に関係のない問題がレポートで特定されなくなり）、関係のないデータがデータベースに格納されなくなります。

また、プロジェクトに合わせた「My Enterprise Selections」という名前のForward Pathシナリオもウィザードによって作成されます。これを使用して、作業中のプロジェクトに含まれる各アプリケーションのRAG状態（赤、黄色、および緑で表されます）を示すForward Pathレポートを実行できます。たとえば、Windows 8とWindows Server 2012 R2の移行およびApp-V仮想化のプロジェクトで作業していると指定します。するとForward Pathレポートに、Windows 8、Windows Server 2012 R2、およびApp-Vに対するアプリケーションのRAG状態を示す列が追加されます。このシナリオをテンプレートにして、独自のシナリオを作成できます。

このウィザードは、AppDNAのインストール後または新しいデータベースへの接続後に、管理者がAppDNAに初めてログオンしたときに自動的に実行されます。このウィザードにいつでも戻って選択内容を変更することができます。変更によって追加のレポートがアクティブ化された場合、結果を表示する前に、そのレポート用にアプリケーションを分析する必要があります。同様に、変更によって既にアクティブであるレポート内で追加のアルゴリズムがアクティブ化された場合、そのレポート用にアプリケーションを再分析する必要があります。

モジュール構成ウィザードを開くには

- メニューから、[Configure]、[Modules]、[Wizard]の順に選択します。

注：

- このウィザードで加えた変更は、AppDNAデータベース全体に影響し、したがってこのデータベースを使用するすべてのユーザーに影響します。
- このウィザードを実行した後、レポートの構成をさらに調整することができます。たとえば、使用している環境に関係のないオプション機能との互換性をテストするアルゴリズムをオフにすることができます。詳しくは、「[アルゴリズムの構成](#)」を参照してください。

このページでは、Windowsデスクトップ移行プロジェクト用にAppDNAを構成します。

My enterprise is working on a Windows desktop migration project – Windowsデスクトップ移行プロジェクトを計画または実施している場合は、このオプションを選択し、さらに次のオプションを選択します。

- **From** – 移行元のオペレーティングシステムを選択します（複数のオペレーティングシステムを選択できます）。このオペレーティングシステムを、従来のオペレーティングシステムと呼びます。
レポートアルゴリズムの中には、従来のオペレーティングシステムに存在し、対象のオペレーティングシステムには存在しない機能への依存性についてアプリケーションをテストするものがあります。この種のアルゴリズムのうち、ここで選んだWindowsの従来バージョンに関係のあるアルゴリズムはアクティブ化され、そのほかのアルゴリズムは非アクティブ

化されます。これらのアルゴリズムは、Obsolete componentsアルゴリズムグループに含まれています。

- **To** – 次の1つまたは複数を選択します。
 - **Windows 7** – Windows 7に移行する場合は、このオプションを選択します。これにより、Windows 7のレポートがアクティブ化されます。
 - **Windows 8/8.1** – Windows 8または8.1との互換性についてアプリケーションをテストする場合は、このオプションを選択します。これにより、Windows 8/8.1のレポートがアクティブ化されます。
- **We use English versions of Windows only** – 英語以外の言語バージョンのWindowsを使用する場合は、完全にローカライズされているか、複数言語ユーザーインターフェイス (Multilingual User Interface : MUI) であるかにかかわらず、このチェックボックスをオフにします (これらの用語について詳しくは、以下を参照してください)。

My enterprise is not working on a Windows desktop migration project at this time – Windowsデスクトップ移行に関する情報が不要である場合は、このオプションを選択します。

注：このページは、[Desktop compatibility] ページで [We use English versions of Windows only] チェックボックスをオフにした場合にのみ表示されます。

Microsoftでは、Windowsの各言語バージョンを処理するための2つのアプローチを用意しています。

- **Fully localized** – このアプローチでは、フォルダー、ファイル、およびオブジェクトの名前がNTFS (New Technology File System) レベルで翻訳され、組み込みのユーザーアカウントも翻訳されます。さらに、ユーザーインターフェイスのメニュー、ダイアログボックスなどの要素も完全に翻訳されます。
- **Multilingual user interface (MUI)** – このアプローチでは、英語バージョンまたはニュートラル言語バージョンのWindowsの上位に言語パックがインストールされます。これにより、完全に変換されたユーザーインターフェイスが提供されますが、フォルダー、ファイル、オブジェクト、または組み込みアカウント名は翻訳されません。

Windows 7とWindows 8のレポートには、フランス語およびドイツ語でローカライズされたバージョンのWindowsへの依存性についてアプリケーションをテストするアルゴリズムが含まれています。これらのレポートは、アプリケーションを英語またはそのほかの言語でローカライズされたバージョンで実行する場合や、完全ローカライズアプローチからMUIアプローチに移行する場合に問題となることがあります。

From – 移行前の言語処理アプローチを選択します。

To – 移行後の言語処理アプローチを選択します。

このセクションでの選択に基づいて、Globalization issuesアルゴリズムグループのアルゴリズムが構成されます。

このページでは、Windowsサーバー移行プロジェクト用にAppDNAを構成します。

My enterprise is working on a Windows server migration project – Windowsサーバー移行プロジェクトを計画または実施している場合は、このオプションを選択し、さらに次のオプションを選択します。

- **From** – 移行元のオペレーティングシステムを選択します (複数のオペレーティングシステムを選択できます)。レポートアルゴリズムの中には、従来のオペレーティングシステムに存在し、対象のオペレーティングシステムには存在しない機能についてアプリケーションをテストするものがあります。この種のアルゴリズムのうち、ここで選択したWindowsの従来バージョンに関係のあるアルゴリズムはアクティブ化され、そのほかのアルゴリズムは非アクティブ化されます。これらのアルゴリズムは、Obsolete componentsアルゴリズムグループに含まれています。
- **To** – 次の1つまたは複数を選択します。

- **Windows Server 2008 R2 – Windows Server 2008 R2に移行する場合は、このオプションを選択します。これにより、Windows Server 2008 R2のレポートがアクティブ化されます。**
- **Windows Server 2012/2012 R2 – Windows Server 2012レポートを使用してWindows 2012についてアプリケーションをテストする場合は、このオプションを選択します。これにより、Windows 2012のレポートがアクティブ化されます。**
- **Report for a Server Core build – Server Core展開についてアプリケーションをテストする場合は、このチェックボックスをオンにします。Server Coreは、機能が限定され、保守作業が少なく済む最小限の環境を提供します。このオプションでは、使用できないグラフィカル機能と対話するなどの理由により、Server Coreビルドで実行した場合に問題を発生させる可能性があるアプリケーションを検出するアルゴリズムがアクティブ化されます。**

My enterprise is not working on a Windows server migration project at this time – Windowsサーバー移行プロジェクトに関する情報が不要である場合は、このオプションを選択します。

注：このページは、仮想化機能（App-V互換性分析）のライセンスを保持している場合にのみ表示されます。このページでは、App-Vアプリケーション仮想化プロジェクト用にAppDNAを構成します。

My enterprise is working on an application virtualization project – アプリケーション仮想化プロジェクトを計画または実施している場合は、このオプションを選択します。さらに、アプリケーションのテストの対象となるApp-Vのバージョンを選択します。選択したApp-Vのバージョンに関係のないアルゴリズムはオフになります。

My enterprise is not working on an application virtualization project at this time – アプリケーション仮想化プロジェクトに関する情報が不要である場合は、このオプションを選択します。

注：このページは、前のページでアプリケーション仮想化技術を選択し、それ以前のページでデスクトッププラットフォームまたはサーバープラットフォームを選択していない場合にのみ表示されます。App-Vの評価の対象となるWindowsプラットフォームを選択します。

このページでは、Firefox、Internet Explorer、およびCitrix WorxWebのすべての組み合わせの互換性についてWebアプリケーションをテストするようにAppDNAを構成します。

My enterprise is working on adopting new Web browsers – Firefox、Internet Explorer、またはWorxWebとの互換性についてWebアプリケーションをテストする場合は、このオプションを選択します。さらに、Webアプリケーションのテスト対象となるブラウザを選択します。

注：Firefoxは標準に基づくWebブラウザであり、バージョン間の変化が小さい傾向にあるため、Firefoxのバージョンの指定を求めるメッセージが表示されることはありません。

My enterprise is not working on adopting new Web browsers at this time – Webアプリケーションをテストしない場合は、このオプションを選択します。

注：このページは、SBC機能のライセンスを保持している場合にのみ表示されます。

このページでは、データセンターでホストされるXenAppへの適応性についてアプリケーションをチェックするようにAppDNAを構成します。XenAppがデータセンターでホストされる場合、ユーザーのデバイスでアプリケーションが提供され、キー入力やマウス操作などのユーザー操作がデータセンター内のアプリケーションに中継されます。潜在的に、多数のユーザーが各アプリケーションを同時に使用できます。これにより、特定の課題が生じます。

重要：ほかのシステムからXenDesktop環境に移行する場合は、XenApp HostedレポートではなくXenDesktop導入ソリュー

ションを使用することをお勧めします。XenDesktop導入ソリューションでは、現在の環境に基づくXenDesktopとアプリケーションの互換性について、より完全な全体像が提供されます。XenApp Hostedレポートでは、あるサーバープラットフォーム上で既に動作しているアプリケーションがXenAppでも動作するかどうかのみが示されます。

My enterprise is working on a XenApp hosted project – XenAppホストプロジェクトを計画または実施している場合は、このオプションを選択します。さらに、アプリケーションのテストの対象となるXenAppのバージョンを選択します。

My enterprise is not working on a XenApp hosted project at this time – XenAppホストプロジェクトに関する情報が不要である場合は、このオプションを選択します。

[Configure] をクリックして変更を保存し、モジュールを構成します。

モジュールの構成

Oct 16, 2015

モジュールは、Windowsのクライアントまたはサーバーのような、特定のコンテキストに合わせたレポートのコレクションです。レポートは、Windows 8のような対象技術に関連するアルゴリズム群から構成されています。これらの対象技術に対して、アプリケーションDNAを評価します。アルゴリズムはアルゴリズムグループに編成されています。

AppDNAのモジュールを構成するには、次の手順に従います。

- メニューから、[Configure]、[Modules]、[Management]の順に選択します。

[Module Management] 画面には、レポートが一覧表示されます。各レポートのロゴが表示されます。これは、レポートを表示するときに関連技術を見分けるのに役立ちます。

- 表示されるモジュールを制御するには、ツールバー右側の [Filter Modules] ボックスの一覧でオプションを選択します。
- レポートの有効/無効を切り替えるには、[Enabled] チェックボックスを使用します。関係のないレポートを無効にすると、処理時間が短くなります。設定を変更したら、[Save] をクリックします。レポートを有効にした場合は、結果を表示する前にアプリケーションを分析する必要があります。
- レポートで使用されたアルゴリズムについての詳細を確認するには、[View Module] をクリックします。これにより、アルゴリズムのバージョン履歴を確認したり、アルゴリズムやそのグループの有効/無効を切り替えたり、カスタムRAGを設定したり、アルゴリズムの修復アクションをカスタマイズしたりできます。
- すべてのモジュールやカスタマイズの内容をXMLファイルとしてエクスポートするには、[Export] をクリックします。これはほかのAppDNAデータベースで使用するモジュールテンプレートを提供する場合に便利です。
- エクスポートしたモジュールテンプレートをインポートするには、[Import] をクリックします。

注：複数のクライアントが同じデータベースに接続する環境では、この画面で加える変更はすべてのユーザーに影響を与えません。

アルゴリズムグループの構成

Oct 16, 2015

[Algorithm Groups] 画面では、AppDNAレポートを構成するアルゴリズムグループとアルゴリズムの表示、アルゴリズムのバージョン履歴の表示、アルゴリズムとアルゴリズムグループの有効化または無効化、カスタムRAGの設定、特定のアルゴリズムの修復アクションの変更、および新しい修復アクションの追加を行います。

[Algorithm Groups] 画面には、ListビューとDetailビューの2つのビューがあります。ツールバーのオプションを使用して、2つのビューを切り替えます。Listビューには、アルゴリズムグループとその内部にネストされているアルゴリズムが一覧表示されます。ツールバーの [Expand/Collapse] をクリックして、アルゴリズムの表示/非表示を切り替えます。アルゴリズムが非表示のときは、グループ名の左側の [+] をクリックして特定のグループ内のアルゴリズムを表示できます。

この画面で変更を加えた後は、ツールバーの [Save] をクリックして変更を保存する必要があります。現在のレポートのすべてのアルゴリズムおよびアルゴリズムグループと、カスタムRAGおよびアルゴリズムの有効無効に関するカスタム設定のXML表現をダウンロードするには [Export] をクリックします。これはほかのAppDNA環境にレポートテンプレートを提供する場合に便利です。前にエクスポートしたテンプレートをロードするには [Import] をクリックします。

注：アルゴリズムまたはアルゴリズムグループを有効または無効にした後は、変更がレポートに反映されるようにアプリケーションを再分析する必要があります。カスタムRAGの変更、またはアクションのカスタマイズのみを実行する場合は、再分析は必須ではありません。

[Algorithm Groups] 画面を開くには、以下の手順に従います。

次のいずれかの操作を行います。

1. AppDNAのメニューで、 [Configure] 、 [Modules] 、 [Management] の順に選択します。
2. [Module Management] 画面で、表示またはカスタマイズするアルゴリズムを含むレポートを見つけ、レポートロゴの [View Module] をクリックします。

または：

- AppDNAメニューで、 [Configure] 、 [Modules] 、 [Module] 、 [Report Name] 順に選択します。ModuleとReport Nameで、アルゴリズムを表示またはカスタマイズするレポートを選択します。

各アルゴリズムにはカスタムRAGがあります。初期状態では、これはアルゴリズムに組み込まれている標準RAGと同じです。ただし、たとえば組織固有のニーズに応じて、黄色状態を赤に上げたり、緑に下げたりする必要がある場合があります。これは、 [Custom RAG] 列のドロップダウンリストを使用して行えます。

Algorithm	Description	RAG	Custom RAG	Action	Action Detail	Complexity	Action RAG
W7_DRV_001	Unsigned driver identified	G	G Green	No Remediation	No Remediation required	Easy	G
W7_DRV_002	Signed driver identified by	G	G Green	No Remediation	No Remediation required	Easy	G
W7_DRV_003	Display driver that	R	R Red	Redevelopment R	The application needs to be redevelop	Hard	R
W7_DRV_004	Drivers designed for legacy	A	A Amber	Additional Testin	Driver Compatibility Test Required.	Hard	A
W7_DRV_007	Kernel-mode print driver	R	R Red	Redevelopment R	The application needs to be redevelop	Hard	R
W7_DRV_008	Driver that depends on	A	A Amber	Additional Testin	Driver Component requires further test	Hard	A

各アルゴリズムについて、AppDNAにはデフォルトの修復アクションが用意されています。ただし、これは[Action] 列のボックスの一覧を使用して変更できます。各アクションには次の項目があります。

- アクション詳細には詳しい修復情報が表示されます。
- 作業の複雑度インジケータは修復を実行する難易度を示します。選択できる値は、[Easy]、[Medium]、および[Hard] です。
- アクションRAGは修復アクションを実行した後のアプリケーションのRAG状態を示します。

たとえば、赤色のカスタムRAGを持つアルゴリズムを考えてみます。特定された問題を修復アクションによって簡単に修整できる場合は、アクションRAGは緑です。ただし、唯一の修復オプションがアプリケーションの再開発または例外扱いである場合は、アクションRAGは赤です。したがって、アクションRAGによって、中度から軽度の社内作業で修復できるアプリケーションと、より複雑な開発または置き換えが必要なアプリケーションをすばやく識別できます。

上に説明したとおり、各アクションにはアクション詳細が定義されています。[Action Detail] 列のボックスの一覧を使用して、修復アクションを改良できます。アルゴリズムによって特定された問題に対して提案されるアクション詳細がどれなのかは、[Sug] 列のボックスの一覧に表示される灰色のチェックマークでわかります。これはほかのアクション詳細を選択しても変わりません。

提案されるデフォルトのアクションおよびアクション詳細がプロジェクトの正確なニーズと一致しない場合は、カスタム修復アクションを作成できます。詳しくは「[修復アクションの追加](#)」を参照してください。

アクションのカスタマイズを完了したら、ツールバーの[Save] をクリックして変更を保存します。

Windows 7のアルゴリズムであるOBS7_MISSING_001は、対象のOSイメージまたはポートフォリオ内のほかのいずれかのアプリケーションにより提供されていないファイルに依存するアプリケーションを特定します。結果として、Windows 7上ではそのようなアプリケーションは停止または正しく機能しない可能性があります。

運用環境において望ましい処理が何であるかに応じて、この問題に対処する解決策はいくつか存在します。このアルゴリズムの標準RAGは黄色で、デフォルトのアクションは不足しているファイルをアプリケーションと共にパッケージ化することです。アクションRAGは緑です。これは、このアクションを実行した後は問題が解決される可能性が高いことを示します。ただし、不足しているファイルをオペレーティングシステムビルドにインストールしたり、App-Vを使用してアプリケーションと共にファイルを展開したりすることで、この問題を解決することもできます。これらのアプローチを取る方が望ましい場合は、それに応じてデフォルトのアクションを変更することができます。これらのアクションのどれもが適切ではなく、アプリケーションを再開発するか交換するべきである場合は、アクションを「Redevelopment required」に変更してカスタムRAGを赤にすることができます。「Redevelopment required」のアクションRAGが赤である場合は、複雑な開発および/または交換が必要であることを示します。以下の表は、これらのアクションとそのアクション詳細、アクションRAG、および推奨されるRAG設定を示します。

操作	アクション詳細	カスタムRAG	アクションRAG
パッケージ	不足しているリソースの提供	黄	緑
Change OS	オペレーティングシステムへの再頒布可能ファイルの追加	黄	緑
Application virtualization	App-Vのようなアプリケーション仮想化技術を使用したアプリケーションの展開	黄	緑
Redevelopment required	この問題を解決するにはアプリケーションの再開発が必要	赤	赤

「[アルゴリズムの構成](#)」を参照してください。

アルゴリズムの構成

Oct 16, 2015

モジュール構成ウィザードによる初回構成により、アルゴリズムおよびアルゴリズムグループのグローバル設定が提供されます。ここでは、アルゴリズム、RAG状態、および修復アクションのカスタマイズについて説明します。

関係のないアルゴリズムおよびアルゴリズムグループを無効にすると、不要な処理が省かれ、レポート結果を実際のニーズに合わせた内容にすることができます。たとえば、一部のレポートではオプションの機能との互換性をテストします。これらのオプション機能を使用しない（または使用計画がない）場合は、関連アルゴリズムを無効にすると分析時間が短縮されます。

1. AppDNAのメニューで [Configure]、[Modules]、[Module]、[Report] の順に選択します（[Module] および [Report] で目的のレポートを選択します）。
2. [Algorithm Groups] 画面で、有効または無効にするアルゴリズムグループまたはアルゴリズムを見つけます。
3. [Enabled] チェックボックスをオンまたはオフにして、アルゴリズムグループまたはアルゴリズムを有効または無効にします。
4. ツールバーの [Save] をクリックして変更を保存します。
5. 変更内容をレポートに反映させるために、アプリケーションを再分析します。

アプリケーションの標準RAG状態は、レポートに組み込まれているアルゴリズムによって決定されます。ただし、たとえば組織固有のニーズに応じて、黄色状態を赤に上げたり、緑に下げたりする必要がある場合があります。デフォルトでは、カスタムRAGは標準RAGと同じです。

1. AppDNAのメニューで、[Configure]、[Modules]、[Module]、[Report] の順に選択します（[Module] および [Report] で設定するカスタムRAGがあるアルゴリズムを含むレポートを選択します）。
2. [Algorithm Groups] 画面で、ツールバーの [List View] をクリックします。
3. 設定するカスタムRAGを持つアルゴリズムを見つけます。
4. [Custom RAG] 列で新しい値を選択します。

Enabled	Algorithm Group	Description	RAG	Custom RAG	Action
<input checked="" type="checkbox"/>	Anomalous application aspects	The algorithms in this group detect unusual aspects of an application that...			
<input checked="" type="checkbox"/>	MAN7_001	A manifest for an	A	A Amber	Additional Testing
<input checked="" type="checkbox"/>	Best practice violations	The algorithms in this group d			

5. ツールバーの [Save] をクリックして変更を保存します。

RAGのカスタマイズが必要な場合があるように、たとえば追加のテストを必須にするなど、アルゴリズムの修復アクションのカスタマイズが必要なときもあります。

1. AppDNAメニューで、[Configure]、[Modules]、[Module]、[Report] の順に選択します（[Module] および [Report] で目的のレポートを選択します）。

- [Algorithm Groups] 画面で、ツールバーの [List View] をクリックします。
- カスタマイズする修復アクションを持つアルゴリズムを見つけます。
- [Action] 列のドロップダウンリストから、必要なアクションを選択します。


RAG	Custom RAG	Action	Action Detail	Complexity	Action	Manifestation
A	A Amber	Auto	Use the Automatic Fix provided by Ap	Easy	G	The installation of these registry
Sel						
		Action	+	Complexity	Ac	Description
		Undefined		Not defined	U	Not Defined
		Change Hardware		Hard	R	Change hardware
		Change Software		Medium	A	Change software
		Shim		Medium	G	Shim description
		Change OS		Medium	G	Change the Operating System Build
		✓ Auto		Easy	G	Auto description
		Redevelopment Required		Hard	R	The application needs to be redeveloped to solv
		Exception		Hard	R	Exception description

- アクションによっては、アクション詳細もカスタマイズする必要がある可能性があります。これを行うには、[Action Detail] 列のドロップダウンリストから必要なアクション詳細を選択します。
- ツールバーの [Save] をクリックして変更を保存します。

修復アクションを変更すると、アクションRAG（修復RAGとも呼ばれます）も自動的に変更されることがあることに注意してください。アクションRAGは、修復アクションを実行した後のアプリケーションのRAG状態を示します。

- AppDNAメニューで、[Configure]、[Modules]、[Module]、[Report] の順に選択します（[Module] および [Report] で目的のレポートを選択します）。
- [Algorithm Groups] 画面で、ツールバーの [List View] をクリックします。
- 表示するバージョン履歴を持つアルゴリズムを見つけます。
- [Log] 列のアイコンをクリックします。

Enabled	Algorithm Group	Description
<input checked="" type="checkbox"/>	Anomalous application aspects	The algorithms in this group detect unusual...

Enabled	Log	Algorithm	Description	RAG	Custom RAG
<input checked="" type="checkbox"/>		MAN7_001	A manifest for an	A	A Amber

[Algorithm Version History] にアルゴリズムのバージョン履歴が表示されます。AppDNAの最新のアップグレードによりインストールされたかどうか、および分析で使用済みであるかどうかも含まれます。

修復アクションの追加

Oct 16, 2015

アルゴリズムにはそれぞれ修復アクションが関連付けられており、アルゴリズムで特定された問題を解決するために必要な復の種類が定義されています。アルゴリズムに関連付けられたアクションは、[Algorithm Groups] 画面で変更できます。提案されるデフォルトのアクションおよびアクション詳細がプロジェクトの正確なニーズと一致しないこともありますが、その場合はカスタムの修復アクションを作成できます。

1. AppDNAのメニューで、[Configure]、[Modules]、[Module]、[Report]の順に選択します。ModuleとReportで、対象のレポートを選択します。
2. [Algorithm Groups] 画面で、ツールバーの[Change to List View]をクリックします。
3. 新しいアクションを追加するアルゴリズムを見つけ、[Action]列の下向き矢印をクリックします。

Custom RAG	Action	Action Detail	Complexity	Action	Manifestation
R Red	Redevelopment R	The application needs to be redevelop	Hard	R	Control Panel applets run with a
Sel	Action	+	Complexity	Ac	Description
	Undefined		Not defined	U	Not Defined
	Change Hardware		Hard	R	Change hardware
	Change Software		Medium	A	Change software
	Shim		Medium	G	Shim description
	Change OS		Medium	G	Change the Operating System Build
	Auto		Easy	G	Auto description
✓	Redevelopment Required		Hard	R	The application needs to be redeveloped to solv
	Exception		Hard	R	Exception description

4. ボックスの一覧内で、[Action]列見出しの右側の[+]をクリックします。
5. [Assign Actions to Algorithms] ダイアログボックスで、[Action Name]ボックスの右側の青い[+]をクリックします。
6. [Add Action] ダイアログボックスで、新しいアクションの名前と説明を入力し、アクションの作業の複雑度とアクションRAGを設定します。
名前は以下の規則に従っている必要があります。
 - 最初の文字は英字 (a~z、A~Z) である必要があります。
 - それ以降の文字には英字または数字 (0~9) を使用できます。
 - SQL Serverの予約語を名前として使用することはできません。これらの予約語の完全な一覧については、[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa238507\(v=sql.80\).aspx](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa238507(v=sql.80).aspx)を参照してください。
 - 名前にはスペースを使用でき、最大文字数は40文字です。
7. [OK] をクリックして、[Add Action] ダイアログボックスを閉じます。
8. 作成した新しいアクションを使用するには、アクション詳細を作成する必要があります。これを行うには、[Assign Actions to Algorithms] ダイアログボックスで、[Action Detail]の右側にある青い[+]をクリックします。
9. [Add Action Detail] ダイアログボックスで、詳細を入力して[OK]をクリックします。
前述の規則に従った名前を指定する必要があります。
10. [Assign Actions to Algorithms] ダイアログボックスのツリー表示で、新しいアクションを関連付けるモジュール、レポート、およびアルゴリズムの隣のチェックボックスをオンにします。
11. [OK] をクリックしてダイアログボックスを閉じます。
12. ツールバーの[Save]をクリックします。

アルゴリズムのエクスポートおよびインポート

Oct 16, 2015

[Algorithm Groups] 画面のエクスポート機能により、現在のレポートのすべてのアルゴリズムおよびアルゴリズムグループがエクスポートされます。この機能によるエクスポートには、カスタムRAGおよびアルゴリズムの有効無効に関するカスタム設定が含まれます。アクションに対するカスタム設定は含まれません。ただし、[Export customizations] 画面には、アクションのカスタム設定をエクスポートするオプションがあります。

現在のレポートのすべてのアルゴリズムおよびアルゴリズムグループのXMLテンプレートをエクスポートするには

1. AppDNAのメニューで、[Configure]、[Modules]、[Module]、[Report] の順に選択します。[Module] と [Report] で、アルゴリズムをエクスポートするレポートを選択します。
2. [Algorithm Groups] 画面のツールバーで、[Export] をクリックします。
3. [Save As] ダイアログボックスで、エクスポートファイルの名前と適切な場所を入力します。
4. [OK] をクリックします。

XMLテンプレートをインポートするには

1. AppDNAのメニューで、[Configure]、[Modules]、[Module]、[Report] の順に選択します。[Module] と [Report] で、アルゴリズムをインポートするレポートを選択します。
2. [Algorithm Groups] 画面のツールバーで、[Import] をクリックします。
3. [Open] ダイアログボックスで、前にエクスポートしたファイルに移動します。
4. [OK] をクリックします。

カスタム設定のエクスポート

Oct 16, 2015

[Action Administration] 画面を使用して、[Algorithm Groups] 画面で修復アクションおよびアクション詳細に加えたカスタム設定と、Effort Calculatorで定義した変数をエクスポートします。エクスポート内容は後でインポートできるXMLファイルとして格納されます。

注：このエクスポートでは、カスタムRAGおよびアルゴリズムの有効無効に関するカスタム設定はエクスポートされません。これらのカスタム設定は、[Algorithm Groups] 画面でエクスポートできます。詳しくは、「[アルゴリズムのエクスポートおよびインポート](#)」を参照してください。

アクション設定をエクスポートするには

1. AppDNAのメニューで、[Administration]、[Action Administration] の順に選択します。
2. [Action Administration] 画面で、エクスポートするアクションを含むレポートを選択します。
3. ツールバーの [Export Action Settings] をクリックします。
4. ファイルに名前を付けて、適切な場所に保存します。
5. [OK] をクリックします。

アクション設定をインポートするには

1. AppDNAのメニューで、[Administration]、[Action Administration] の順に選択します。
2. [Action Administration] 画面のツールバーで、[Import Action Settings] をクリックします。
3. 前にエクスポートしたファイルに移動します。
4. [OK] をクリックします。

標準の修復アクション

Oct 16, 2015

次の表は、AppDNAに組み込まれている標準の修復アクションの一覧です。各アクションにはアクション詳細が関連付けられています。アルゴリズムに関連付けられているアクションとアクション詳細を変更できます。また、「[修復アクションの追加](#)」で説明したように、独自のカスタムアクションとアクション詳細を追加することもできます。

操作	難易度	アクションRAG	説明
Additional testing required	高	黄	追加のテストが必要です。
追加のXenAppテストが必要です。	中	緑	追加のXenAppテストが必要です。
Application virtualization	低	緑	アプリケーション仮想化技術を使用して展開します。
App-V 4.6	低	緑	App-V 4.6を使用します。
App-V 5.0	低	緑	App-V 5.0を使用します。
App-V Management Console modifications	低	緑	App-V管理コンソールでの変更が必要です。
Auto	低	緑	自動修正を使用します。
Change GPO	低	緑	グループポリシーを変更します。
ハードウェアを変更します。	高	赤	ハードウェアを変更します。
Change OS	中	緑	オペレーティングシステムビルドを変更します。
ソフトウェアを変更します。	中	黄	ソフトウェアを変更します。
デスクトップの仮想化	低	緑	デスクトップ仮想化技術を使用して展開します。
OSDファイルを編集します。	低	緑	OSDファイルに編集が必要です。
例外	高	赤	修復は不可能です（アプリケーションの再開発か使用停止が必要な可能性があります）。

操作	難 易 度	ア ク シ ョ ン R A G	説 明
Firefox in-house redevelopment required		緑	この問題を解決するにはWebアプリケーションの再開発が必要です。
Firefox redevelopment required	高	赤	この問題を解決するにはWebアプリケーションの再開発が必要です。
Firefox remediations	低	緑	Webページを期待どおりに動作させるにはFirefoxの修復が必要です。
IE infrastructure changes	中	黄	環境インフラストラクチャの変更が必要です。
IE in-house redevelopment required	中	緑	この問題を解決するにはWebアプリケーションの再開発が必要です。
IE redevelopment required	高	赤	アプリケーションを再開発する必要があります。
IE remediations	低	緑	Webページを期待どおりに動作させるには修復が必要です。
No remediation required	低	緑	修復は不要です。
Redevelopment required	高	赤	問題を解決するにはアプリケーションの再開発が必要です。
Repackage	低	緑	問題を解決するにはアプリケーションを再パッケージ化するかMSIを編集する必要があります。
Sequence	低	緑	シーケンス処理の手順に従う必要があります。
Sequence	高	緑	シーケンス処理の手順に従う必要があります。
Sequence advanced	中	緑	詳細なシーケンス処理の手順に従う必要があります。
shim	中	緑	問題を解決するために、アプリケーションにshimが適用されます。
Undefined	未 定 義	Undefined	修復アクションが定義されていません。
Virtualization exception	高	赤	修復は不可能である可能性があります。
WorxWeb in-house redevelopment required	中	緑	この問題を解決するにはWebアプリケーションの再開発が必要です。
WorxWeb redevelopment required	中	緑	この問題を解決するにはWebアプリケーションの再開発が必要です。

操作 WorxWeb remediations	難 易 度	ア ク シ ョ ン R A G	説明 Webページを期待どおりに動作させるにはWorxWebの修復が必要です。
XenApp	低	緑	XenAppの手順に従う必要があります。

このセクションでは、各標準アクションで利用できるアクション詳細の一覧を示します。

Additional testing required

アクション詳細	説明
アプリケーションに機能テストが必要です。	アプリケーションに機能テストが必要です。
アプリケーションのセキュリティリスクを評価します。	アプリケーションのセキュリティリスクを評価します。
ドライバーの互換性テストが必要です。	ドライバーの互換性テストが必要です。
ドライバーコンポーネントに追加のテストが必要です。	ドライバーコンポーネントに追加のテストが必要です。
アプリケーションの発行者が信頼できることを検証します。	アプリケーションの発行者が信頼できることを検証します。

追加のXenAppテストが必要です。

アクション詳細	説明
追加のテストが必要である可能性があります。	追加のテストが必要である可能性があります。

Application virtualization

アクション詳細	説明
App-Vのようなアプリケーション仮想化技術を使用してアプリケーションを展開します。	App-Vのようなアプリケーション仮想化技術を使用してアプリケーションを展開します。

App-V 4.6

アクション詳細	説明
App-V 4.6を使用します。	App-V 4.6を使用します。

App-V 5.0

アクション詳細	説明
Microsoft prescriptive guidance for sequencing Office 2010	Office 2010アプリケーションをシーケンス処理するためのMicrosoftの規範的なガイダンスに従います。
App-V 5.0を使用します。	App-V 5.0を使用します。

App-v Management Console modifications

アクション詳細	説明
グローバルFTAを作成します。	グローバルFTAを作成します。
FTAプロバイダーにするアプリケーションを選択し、ほかのアプリケーションの動詞を変更します。	FTAプロバイダーにするアプリケーションを選択し、ほかのアプリケーションの動詞を変更します。

Auto

アクション詳細	説明
Use the automatic fix provided by AppDNA	アプリケーションにはAppDNAの提供する自動修正が必要です。

Change GPO

アクション詳細	説明
対応するグループポリシーを変更します。	対応するグループポリシーを変更します。

ハードウェアを変更します。

アクション詳細	説明
基礎になるハードウェアを置き換えます。	基礎になるハードウェアを置き換えます。

Change OS

アクション詳細	説明
信頼された一覧の証明書を追加します。	信頼された一覧の証明書を追加します。
オペレーティングシステムにサポートされないコンポーネントを追加します。	オペレーティングシステムにサポートされないコンポーネントを追加します。
オペレーティングシステムに再頒布可能パツ	オペレーティングシステムビルドがこの依存関係を含む必要があります

レジストリを追加します。 ビルド上のレジストリキーを変更します。	再配布可能なソフトウェアが使用できる可能性があります。 ビルド上のレジストリキーを変更します。
オペレーティングシステムにコアアプリケーションを展開します。	オペレーティングシステムにコアアプリケーションを展開します。
仮想化に不適切なアプリケーションをオペレーティングシステムに展開します。	仮想化に不適切なアプリケーションをオペレーティングシステムに展開します。
オペレーティングシステムでDep NX保護を無効にします。	オペレーティングシステムでDep NX保護を無効にします。
GPOを編集して、匿名RPCを許可し、ファイアウォール上のポート135を開放します。	GPOを編集して、匿名RPCを許可し、ファイアウォール上のポート135を開放します。
Edit registry to repair GINA chaining on Windows Server 2003	レジストリを編集してWindows Server 2003のGINAチェーンを修復し、Windows Server 2008以降には別のアクションを選択します。
Enable only IP v4	内蔵ネットワークアダプターのため、ビルドでIP v4のみを有効にします。
16ビットサブシステムを有効にします。	16ビットサブシステムを有効にします。
通信できるようにポートを開放します。	通信できるようにポートを開放します。
ローカルイントラネットゾーンでアクセス権を緩和します。	ローカルイントラネットゾーンでアクセス権を緩和します。
64ビット版オペレーティングシステムでアプリケーションを実行します。	64ビット版オペレーティングシステムでアプリケーションを実行します。
Run Interactive Service Detection Service	オペレーティングシステムビルドでInteractive Server Detection Serviceを有効にする必要があります。

ソフトウェアを変更します。

アクション詳細	説明
ベンダーソフトウェアを置き換えまたは更新します。	ベンダーソフトウェアを置き換えまたは更新します。

デスクトップの仮想化

アクション詳細	説明
Med-Vのようなデスクトップ仮想化技術を使用してアプリケーションを展開します。	Med-Vのようなデスクトップ仮想化技術を使用してアプリケーションを展開します。

OSDファイルを編集します。

アクション詳細	説明
FTAセクションを編集します。	FTAセクションを編集します。
有効化LOCAL_INTERACTION_ALLOWEDポリシーを有効化します。	有効化LOCAL_INTERACTION_ALLOWEDポリシーを有効化します。
アプリケーションを分割し、DSCを使用してパッケージ間依存関係を作成します。	アプリケーションを分割し、DSCを使用してパッケージ間依存関係を作成します。
DSCを使用してパッケージ間依存関係を作成します。	DSCを使用してパッケージ間依存関係を作成します。

例外

アクション詳細	説明
Remediation not possible	このアプリケーションに使用できる修復はありません。

Firefox in-house redevelopment required

アクション詳細	説明
出力がHTML解析ルールに依存する場合、XSLTのHTML解析に明示的にオプトインします。	出力がHTML解析ルールに依存する場合、XSLTのHTML解析に明示的にオプトインします。
標準化されたXSL名前空間に移行します。	標準化されたXSL名前空間に移行します。
Firefoxのテーブルオブジェクトモデルへの変更を調整するために、ページを再開発します。	Firefoxのテーブルオブジェクトモデルへの変更を調整するために、ページを再開発します。
必要な箇所での空白をトリミングするために、ページを再開発します。	必要な箇所での空白をトリミングするために、ページを再開発します。
従来のプロパティを使用しないように、サイトを再開発します。	従来のプロパティを使用しないように、サイトを再開発します。
Redevelop the site so that theevalメソッドが直接呼び出されるように、サイトを再開発します。	Redevelop the site so that theevalメソッドが直接呼び出されるように、サイトを再開発します。
メソッドを呼び出すキャッシュポインターを使用せずに、サイトを再開発します。	メソッドを呼び出すキャッシュポインターを使用せずに、サイトを再開発します。
標準化されたxmlスタイルシート処理命令を使用してXSLTをロードします。	標準化されたxmlスタイルシート処理命令を使用してXSLTをロードします。

Firefox redevelopment required

アクション詳細	説明
BASE要素をドキュメントのHEAD内に移動する必要があります。	BASE要素をドキュメントのHEAD内に移動する必要があります。
要素を作成し、setAttributeAPIを使用して属性を個別に追加するか、親内に要素を作成します。	要素を作成し、setAttributeAPIを使用して属性を個別に追加するか、次のAPIを使用して親要素内に要素を作成します。innerHTMLAPI
ページにこれらのフィルターが含まれる場合は、削除するか置き換えます。	ページにこれらのフィルターが含まれる場合は、削除するか置き換えます。
ネストされたOBJECTを移動して、最も外側のOBJECTになるようにします。	ネストされたOBJECTを移動して、最も外側のOBJECTになるようにします。
サポートされるDHTML動作を使用するようにページを再開発します。	サポートされるDHTML動作を使用するようにページを再開発します。
ドキュメントフラグメント経由でドキュメントAPIを使用しないように、ページを再開発します。	ドキュメントフラグメント経由でドキュメントAPIを使用しないように、ページを再開発します。
getElementsByTagNameを呼び出している間は完全なタグ名を使用するように、ページを再開発します。getElementsByTagName	getElementsByTagNameを呼び出している間は完全なタグ名を使用するように、ページを再開発します。getElementsByTagName
JavaScriptプロトコルでreturnステートメントを使用しないように、ページを再開発します。	JavaScriptプロトコルでreturnステートメントを使用しないように、ページを再開発します。
コンディショナルなコメントを使用しないように、サイトを再開発します。	コンディショナルなコメントを使用しないように、サイトを再開発します。
名前空間を使用しないように、サイトを再開発します。	名前空間を使用しないように、サイトを再開発します。
XMLデータアイランドを使用しないように、サイトを再開発します。	XMLデータアイランドを使用しないように、サイトを再開発します。
IFramesに固定の高さを使用してサイトを再開発します。	IFramesに固定の高さを使用してサイトを再開発します。
arguments.callerプロパティを使用せずにサイトを再開発します。	arguments.callerプロパティを使用せずにサイトを再開発します。
Remove references to external domains	外部ドメインに対する、スクリプトタグにsrc属性を使用する参照を削除します。
GopherおよびTelnetのリソースに対するURLパスを削除します。	GopherおよびTelnetのリソースに対するURLパスを削除します。

Remove XMB images and use alternative image format アクション詳細	XMB画像を削除し.pngのような代替画像フォーマットを使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。
Replace API call with compliant	切断された、またはサポートされないAPI呼び出しを、新しい、またはサポートされるAPI呼び出しに置き換える必要があります。
Replace CDF with the new RSS feed	CDFを新しいRSSフィードと置き換えるように、アプリケーションを再開発する必要があります。
FirefoxでサポートされないActiveXコンポーネントの機能を置き換えます。	FirefoxでサポートされないActiveXコンポーネントの機能を置き換えます。
必要な箇所について、ドキュメント上のウィンドウを置き換えます。	必要な箇所について、ドキュメント上のウィンドウを置き換えます。
代わりに要素をdocument.documentElementに追加するように、ページを修正します。	代わりに要素をdocument.documentElementに追加するように、ページを修正します。
The application needs to be redeveloped so that files are created on the web server and a clickable link is provided to users to	ファイルがWebサーバーに作成され、そのファイルをダウンロードするためのリンクがユーザーに提供されるように、アプリケーションを再開発する必要があります。
標準に準拠する命名規則を使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。	標準に準拠する命名規則を使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。
スタイルシートに正しいエクステンションを使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。	スタイルシートに正しいエクステンションを使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。

Firefox remediations

アクション詳細	説明
Firefoxで混在したコンテンツの表示を無効にします。	Firefoxで混在したコンテンツの表示を無効にします。
FirefoxでサポートされないCOMコンポーネントを使用しないでください。	FirefoxでサポートされないCOMコンポーネントを使用しないでください。
ビルドにコンポーネントを事前インストールします。	ビルドにコンポーネントを事前インストールします。
スタイルシートに正しいエクステンションを使用します。	スタイルシートに正しいエクステンションを使用します。
IE8 Ax GPOのクラスIDをホワイトリスト化します。	IE8 Ax GPOのクラスIDをホワイトリスト化します。

IE infrastructure changes

アクション詳細	説明

X-UA-CompatibleヘッダーをWebページ/IISヘッダーに追加して、強制的にInternet Explorer 7標準モードで実行します。	X-UA-CompatibleヘッダーをWebページ/IISヘッダーに追加して、強制的にInternet Explorer 7標準モードで実行します。
X-UA-CompatibleヘッダーをWebページ/IISヘッダーに追加して、強制的にInternet Explorer 8標準モードで実行します。	X-UA-CompatibleヘッダーをWebページ/IISヘッダーに追加して、強制的にInternet Explorer 8標準モードで実行します。
仮想化技術を使用して、Internet Explorer 6のネイティブモードでWebサイトを実行します。	仮想化技術を使用して、Internet Explorer 6のネイティブモードでWebサイトを実行します。
仮想化技術を使用して、Internet Explorer 7のネイティブモードでWebサイトを実行します。	仮想化技術を使用して、Internet Explorer 7のネイティブモードでWebサイトを実行します。
仮想化技術を使用して、Internet Explorer 8のネイティブモードでWebサイトを実行します。	仮想化技術を使用して、Internet Explorer 8のネイティブモードでWebサイトを実行します。
Webサーバーでカスタムヘッダーを使用して、IE8標準ドキュメント互換モードに設定します。	Webサーバーでカスタムヘッダーを使用して、IE8標準ドキュメント互換モードに設定します。
Webサーバーでカスタムヘッダーを使用して、IE9標準ドキュメント互換モードに設定します。	Webサーバーでカスタムヘッダーを使用して、IE9標準ドキュメント互換モードに設定します。
GPOを使用して、Internet Explorer 7の互換モードでWebページを実行します。	GPOを使用して、Internet Explorer 7の互換モードでWebページを実行します。

IE in-house redevelopment required

アクション詳細	説明
link要素上のtitle属性、またはスタイルシートを含むstyle要素上のtitle属性を変更します。	link要素上のtitle属性、またはスタイルシートを含むstyle要素上のtitle属性を変更します。
出力がHTML解析ルールに依存する場合、XSLTのHTML解析に明示的にオプトインします。	出力がHTML解析ルールに依存する場合、XSLTのHTML解析に明示的にオプトインします。
標準化されたXSL名前空間に移行します。	標準化されたXSL名前空間に移行します。
IE9のテーブルオブジェクトモデルへの変更を調整するために、ページを再開発します。	IE9のテーブルオブジェクトモデルへの変更を調整するために、ページを再開発します。
削除されたiframeを調整するために、ページを再開発します。	削除されたiframeを調整するために、ページを再開発します。
必要な箇所での空白をトリミングするために、ページを再開発します。	必要な箇所での空白をトリミングするために、ページを再開発します。
ユーザー定義のコンテンツ属性の値を取得するgetAttributeAPIを使用するために、ページを再開発します。	ユーザー定義のコンテンツ属性の値を取得するgetAttributeAPIを使用するために、ページを再開発します。

アクション詳細 従来のプロパティを使用しないように、サイトを再開発します。	説明 従来のプロパティを使用しないように、サイトを再開発します。
DXフィルターではなくCCS3、SVGなど広くサポートされた標準を使用するように、サイトを再開発します。	DXフィルターではなくCCS3、SVGなど広くサポートされた標準を使用するように、サイトを再開発します。
Redevelop the site so that theevalメソッドが直接呼び出されるように、サイトを再開発します。	Redevelop the site so that theevalメソッドが直接呼び出されるように、サイトを再開発します。
メソッドを呼び出すキャッシュポインターを使用せずに、サイトを再開発します。	メソッドを呼び出すキャッシュポインターを使用せずに、サイトを再開発します。
Webページに埋め込まれている管理用DLLおよびOCXを削除します。	Webページに埋め込まれている管理用DLLおよびOCXを削除します。
標準化されたxmlスタイルシート処理命令を使用してXSLTをロードします。	標準化されたxmlスタイルシート処理命令を使用してXSLTをロードします。

IE redevelopment required

アクション詳細	説明
BASE要素をドキュメントのHEAD内に移動する必要があります。	BASE要素をドキュメントのHEAD内に移動する必要があります。
Bypasswindow.closeプロンプトをバイパスするために、window.open("','_self')を次の関数に追加します。closeWinfunction	Bypasswindow.closeプロンプトをバイパスするために、window.open("','_self')を次の関数に追加します。closeWinfunction
ファイルタイプをイメージファイルからプレーンテキストに変更します。	ファイルタイプをイメージファイルからプレーンテキストに変更します。
COMコンポーネントの64ビットバージョンを作成します。	COMコンポーネントの64ビットバージョンを作成します。
要素を作成し、setAttributeAPIを使用して属性を個別に追加するか、親要素内に要素を作成します。	要素を作成し、setAttributeAPIを使用して属性を個別に追加するか、次のAPIを使用して親要素内に要素を作成します。innerHTMLAPI
ページにこれらのフィルターが含まれる場合は、削除するか置き換えます。	ページにこれらのフィルターが含まれる場合は、削除するか置き換えます。
ネストされたOBJECTを移動して、最も外側のOBJECTになるようにします。	ネストされたOBJECTを移動して、最も外側のOBJECTになるようにします。
サポートされるDHTML動作を使用するようにページを再開発します。	サポートされるDHTML動作を使用するようにページを再開発します。
ドキュメントフラグメント経由でドキュメントAPIを使用	ドキュメントフラグメント経由でドキュメントAPIを使用し

しないように、ページを再開発します。 タグの詳細	ないように、ページを再開発します。 説明
getElementsByTagNameを呼び出している間は完全なタグ名を使用するように、ページを再開発します。getElementsByTagName	getElementsByTagNameを呼び出している間は完全なタグ名を使用するように、ページを再開発します。getElementsByTagName
JavaScriptプロトコルでreturnステートメントを使用しないように、ページを再開発します。	JavaScriptプロトコルでreturnステートメントを使用しないように、ページを再開発します。
古いバージョンのサポートが必要で、バージョンコンディショナルなバインド追加を使用する場合に、手動バインドを削除するように、ページを再開発します。	古いバージョンのサポートが必要で、バージョンコンディショナルなバインド追加を使用する場合に、手動バインドを削除するように、ページを再開発します。
サイトを再開発して、Windowsのジャーナルフック関数をアクセス可能にするCOMコントロールを使用しないようにします。	サイトを再開発して、Windowsのジャーナルフック関数をアクセス可能にするCOMコントロールを使用しないようにします。
コンディショナルなコメントを使用しないように、サイトを再開発します。	コンディショナルなコメントを使用しないように、サイトを再開発します。
名前空間を使用しないように、サイトを再開発します。	名前空間を使用しないように、サイトを再開発します。
XMLデータアイランドを使用しないように、サイトを再開発します。	XMLデータアイランドを使用しないように、サイトを再開発します。
サイトを再開発して、保護された場所に書き込まないようにします。	サイトを再開発して、保護された場所に書き込まないようにします。
VMLの代わりにSVG、Raphael JavaScriptライブラリ、およびほかの広くサポートされる標準を使用するように、サイトを再開発します。	VMLの代わりにSVG、Raphael JavaScriptライブラリ、およびほかの広くサポートされる標準を使用するように、サイトを再開発します。
ネイティブなXMLとMSXMLオブジェクトを混在しないように、サイトを再開発します。	ネイティブなXMLとMSXMLオブジェクトを混在しないように、サイトを再開発します。
サイトを再開発して、DEPを認識するようにします。	サイトを再開発して、DEPを認識するようにします。
IFramesに固定の高さを使用してサイトを再開発します。	IFramesに固定の高さを使用してサイトを再開発します。
arguments.callerプロパティを使用せずにサイトを再開発します。	arguments.callerプロパティを使用せずにサイトを再開発します。
Remove direct animation with another technology	直接アニメーションをほかのサポートされている技術と置き換えるように、アプリケーションを再開発する必要があります。
Remove references to external domains	外部ドメインに対する、スクリプトタグにsrc属性を使用する参照を削除します。

GopherおよびTelnetのリソースに対するURLパスを削除します。 アクション詳細	GopherおよびTelnetのリソースに対するURLパスを削除します。 説明
Remove XMB images and use alternative image format	XMB画像を削除し.pngのような代替画像フォーマットを使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。
Replace API call with compliant	切断された、またはサポートされないAPI呼び出しを、新しい、またはサポートされるAPI呼び出しに置き換える必要があります。
Replace CDF with the new RSS feed	CDFを新しいRSSフィードと置き換えるように、アプリケーションを再開発する必要があります。
必要な箇所について、ドキュメント上のウィンドウを置き換えます。	必要な箇所について、ドキュメント上のウィンドウを置き換えます。
代わりに要素をdocument.documentElementに追加するように、ページを修正します。	代わりに要素をdocument.documentElementに追加するように、ページを修正します。
The application needs to be redeveloped so that files are created on the web server and a clickable link is provided to users to	ファイルがWebサーバーに作成され、そのファイルをダウンロードするためのリンクがユーザーに提供されるように、アプリケーションを再開発する必要があります。
属性の存在がチェックされるように、アプリケーションを再開発する必要があります。	属性の存在がチェックされるように、アプリケーションを再開発する必要があります。
標準に準拠する命名規則を使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。	標準に準拠する命名規則を使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。
スタイルシートに正しいエクステンションを使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。	スタイルシートに正しいエクステンションを使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。
スクリプトを実行する必要がある場合は、UTF-7以外の文字セットを使用します。	スクリプトを実行する必要がある場合は、UTF-7以外の文字セットを使用します。
Use the correct case and matching	正しいケースおよびマッチングを使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。

IE remediations

アクション詳細	説明
Add site to trusted zone	ActiveXインストーラーサービスで、ActiveXコントロールの承認されたインストールサイトまたは信頼済みゾーンのサイトに対するActiveXのインストールポリシーのどちらかを使用して、ポリシー設定を構成します。
Internet ExplorerでDEPを無効にします。	Internet ExplorerでDEPを無効にします。

IEで混在したコンテンツの表示を無効にします。 アクション詳細	IEで混在したコンテンツの表示を無効にします。 説明
レジストリを編集して、繰り返しと古いバージョンを削除します。	レジストリを編集して、繰り返しと古いバージョンを削除します。
ASP.NETサーバーにパッチを適用します。	ASP.NETサーバーにパッチを適用します。
ビルドにコンポーネントを事前インストールします。	ビルドにコンポーネントを事前インストールします。
Relax Internet security settings	セキュリティリスクが容認できる場合は、ActiveXのインターネットセキュリティ設定を緩和します。
スクリプトレットを有効にして、インターネットセキュリティ設定を緩和します。	スクリプトレットを有効にして、インターネットセキュリティ設定を緩和します。
ステータスバーの更新を有効にするために、インターネットセキュリティ設定を緩和します。	ステータスバーの更新を有効にするために、インターネットセキュリティ設定を緩和します。
Remove the kill bit	unkillレジストリキーを作成することによって、キルビットを削除します。
Set the Safe for Scripting and Safe for Initialization value	ActiveXコントロールのCLSIDを使用して、レジストリキーに安全なスクリプトおよび安全な初期化の値を設定します。
新機能についてユーザー研修を行います。	新機能についてユーザー研修を行います。
インターネットセキュリティ設定の、スクリプトを実行しても安全だとマークされているActiveXコントロールのスクリプトの実行のブロックを解除します。	インターネットセキュリティ設定の、スクリプトを実行しても安全だとマークされているActiveXコントロールのスクリプトの実行のブロックを解除します。
現在のJavaScriptフレームワークを最新のバージョンに更新します。	現在のJavaScriptフレームワークを最新のバージョンに更新します。
32ビット版のInternet Explorerを使用します。	32ビット版のInternet Explorerを使用します。
IE8 Ax GPOのクラスIDをホワイトリスト化します。	IE8 Ax GPOのクラスIDをホワイトリスト化します。

No remediation required

アクション詳細	説明
Install admin rights	インストールユーザーが管理者権限を持っていることを確認します。
修復は不要です。	修復は不要です。

Redevelopment required

アクション詳細	説明
この問題を解決するにはアプリケーションの再開発が必要	再開発のサブアクションの説明

Repackage

アクション詳細	説明
必要なカスタム設定を追加します。	必要なカスタム設定を追加します。
Change the default installation path	MST (Microsoft Transform) を使用してインストールパスを変更するか、手動で変更します。
Condition out the components	これらのリソースをインストールするコンポーネントを対象から除外します。
共有リソースのマージモジュールを作成します。	共有リソースのマージモジュールを作成します。
Disable DEP using MSI	MSIを使用してDEPを無効にします。
カスタムアクションを編集します。	カスタムアクションを編集します。
MSIを編集します。	MSIを編集します。
MSIによって呼び出されるスクリプトファイルを編集します。	MSIによって呼び出されるスクリプトファイルを編集します。
カスタムアクションを昇格します。	カスタムアクションを昇格します。
この必須コンポーネントをインストールします。	この必須コンポーネントをインストールします。
デスクトップに展開するためにWindowsインストーラーでアプリケーションをパッケージ化します。	デスクトップに展開するためにWindowsインストーラーでアプリケーションをパッケージ化します。
代用の技術を提供します。	代用の技術を提供します。
不足しているリソースの提供	不足しているリソースを提供するか、再配布可能なソフトウェアをインストールします。
Relax permissions on the local machine	たとえばLockPermissionを使用して、ローカルマシンのアクセス許可を緩和します。
ロックのアクセス権を削除します。	ロックのアクセス権を削除します。

アクション詳細	説明
この条件を削除します。	この条件を削除します。
セットアップファイルの名前をSetup.EXEに変更します。	セットアップファイルの名前をSetup.EXEに変更します。
再起動が行われないようにします。	再起動が行われないようにします。
コンポーネントGUIDを同期します。	コンポーネントGUIDを同期します。
MSIを変換してALLUSERSの値を変更します。	MSIを変換してALLUSERSの値を変更します。
Transform the MSI values	MSIの値を、新しい正しいパスに変換します。

Sequence (簡単な作業)

アクション詳細	説明
INIファイルにプレースホルダーを追加します。	INIファイルにプレースホルダーを追加します。
シーケンスに関係リンクを追加します。	シーケンスに関係リンクを追加します。
SFTファイルを圧縮します。	SFTファイルを圧縮します。
SequencerワークステーションにダミーODBCエントリを作成します。	SequencerワークステーションにダミーODBCエントリを作成します。
シーケンスに不足しているファイルを含めます。	シーケンスに不足しているファイルを含めます。
実行可能ファイルを修正するためにショートカットを手動で作成します。	実行可能ファイルを修正するためにショートカットを手動で作成します。
[スタート]メニューのスタートアップフォルダーにショートカットを公開します。	[スタート]メニューのスタートアップフォルダーにショートカットを公開します。
インストール関連のショートカットを解決してシーケンスから削除します。	インストール関連のショートカットを解決してシーケンスから削除します。
必須サービスと共にアプリケーションをシーケンス処理します。	必須サービスと共にアプリケーションをシーケンス処理します。
依存するアプリケーションと共にシーケンス処理します。	依存するアプリケーションと共にシーケンス処理します。
アプリケーションを分割します。	アプリケーションを分割します。

アクション詳細 Use Dynamic Suite Composition	説明 Dynamic Suite Compositionを使用して、アプリケーションをその依存関係に関連付けます。
--	--

Sequence (困難な作業)

アクション詳細	説明
Deploy the service separately from the App-V package	Dynamic Suite Compositionを使用して、アプリケーションをその依存関係に関連付けます。

Sequence advanced

アクション詳細	説明
環境変数の変更を構成します。	環境変数の変更を構成します。
アクティブセットアップを使用せずに、シーケンス内にインストールされているユーザー固有のデータを構成します。	アクティブセットアップを使用せずに、シーケンス内にインストールされているユーザー固有のデータを構成します。
追加の調査が必要です。実行できる場合はシーケンス処理します。	追加の調査が必要です。実行できる場合はシーケンス処理します。
Use Office Deployment Tool	Office展開ツールを使用してApp-Vパッケージを作成します。

shim

アクション詳細	説明
適用CorrectFilePathshim	アプリケーションにCorrectFilePathshimを適用する必要があります。
適用DisableNXshim	アプリケーションにDisableNXshimを適用する必要があります。
適用HideCursorshim	アプリケーションにHideCursorshimを適用する必要があります。
適用IgnoreMessageBoxshim	アプリケーションにIgnoreMessageBoxshimを適用する必要があります。
適用RunAsAdminshim	アプリケーションにHideCursorshimを適用する必要があります。
適用RunAsAdmin」または「RunAsInvokershim	本来管理用であるかどうかに応じて、アプリケーションに、付属の「RunAsAdmin」または「RunAsInvoker」 shimを適用する必要があります。
適用RunAsInvokershim	アプリケーションにRunAsInvokershimを適用する必要があります。

適用SessionShim	説明リケーションにSessionShimapplied
適用VirtualRegistryshim	アプリケーションにVirtualRegistryapplied
適用WRPDIIRegistershim	アプリケーションにWRPDIIRegisterShimを適用する必要があります。
適用WRPMitigationLayershim	アプリケーションにWRPMitigationShimを適用する必要があります。
適用WRPRegDeleteKeyshim	アプリケーションにWRPRegDeleteKeyshimを適用する必要があります。

Undefined

アクション詳細	説明
未定義	未定義

Virtualization exception

アクション詳細	説明
コンポーネントをオペレーティングシステムに分割する場合は修復が可能です。	コンポーネントをオペレーティングシステムに分割する場合は修復が可能です。
広範にテストすることによって修復できる可能性があります。	広範にテストすることによって修復できる可能性があります。

WorxWeb in-house redevelopment required

アクション詳細	説明
出力がHTML解析ルールに依存する場合、XSLTのHTML解析に明示的にオプトインします。	出力がHTML解析ルールに依存する場合、XSLTのHTML解析に明示的にオプトインします。
標準化されたXSL名前空間に移行します。	標準化されたXSL名前空間に移行します。
WorxWebのテーブルオブジェクトモデルへの変更を調整するために、ページを再開発します。	WorxWebのテーブルオブジェクトモデルへの変更を調整するために、ページを再開発します。
必要な箇所での空白をトリミングするために、ページを再開発します。	必要な箇所での空白をトリミングするために、ページを再開発します。
従来のプロパティを使用しないように、サイトを再開発します。	従来のプロパティを使用しないように、サイトを再開発します。

Redevelop the site so that theevalメソッドが直接呼び出されるように、サイトを再開発します。 アクション詳細	Redevelop the site so that theevalメソッドが直接呼び出されるように、サイトを再開発します。 説明
メソッドを呼び出すキャッシュポインターを使用せずに、サイトを再開発します。	メソッドを呼び出すキャッシュポインターを使用せずに、サイトを再開発します。
標準化されたxmlスタイルシート処理命令を使用してXSLTをロードします。	標準化されたxmlスタイルシート処理命令を使用してXSLTをロードします。

WorxWeb redevelopment required

アクション詳細	説明
BASE要素をドキュメントのHEAD内に移動する必要があります。	BASE要素をドキュメントのHEAD内に移動する必要があります。
要素を作成し、setAttributeAPIを使用して属性を個別に追加するか、親要素内に要素を作成します。	要素を作成し、setAttributeAPIを使用して属性を個別に追加するか、次のAPIを使用して親要素内に要素を作成します。innerHTMLAPI
ページにこれらのフィルターが含まれる場合は、削除するか置き換えます。	ページにこれらのフィルターが含まれる場合は、削除するか置き換えます。
ネストされたOBJECTを移動して、最も外側のOBJECTになるようにします。	ネストされたOBJECTを移動して、最も外側のOBJECTになるようにします。
サポートされるDHTML動作を使用するようにページを再開発します。	サポートされるDHTML動作を使用するようにページを再開発します。
ドキュメントフラグメント経由でドキュメントAPIを使用しないように、ページを再開発します。	ドキュメントフラグメント経由でドキュメントAPIを使用しないように、ページを再開発します。
getElementsByTagNameを呼び出している間は完全なタグ名を使用するように、ページを再開発します。getElementsByTagName	getElementsByTagNameを呼び出している間は完全なタグ名を使用するように、ページを再開発します。getElementsByTagName
JavaScriptプロトコルでreturnステートメントを使用しないように、ページを再開発します。	JavaScriptプロトコルでreturnステートメントを使用しないように、ページを再開発します。
コンディショナルなコメントを使用しないように、サイトを再開発します。	コンディショナルなコメントを使用しないように、サイトを再開発します。
名前空間を使用しないように、サイトを再開発します。	名前空間を使用しないように、サイトを再開発します。
XMLデータアイランドを使用しないように、サイトを再開発します。	XMLデータアイランドを使用しないように、サイトを再開発します。
VMLの代わりにSVG、Raphael JavaScriptライブラリ、およびほかの広くサポートされる標準を使用するように、サイトを再開発します。	VMLの代わりにSVG、Raphael JavaScriptライブラリ、およびほかの広くサポートされる標準を使用するように、サイトを再開発します。

アクション詳細	説明
IFramesに固定の高さを使用してサイトを再開発します。	IFramesに固定の高さを使用してサイトを再開発します。
arguments.callerプロパティを使用せずにサイトを再開発します。	arguments.callerプロパティを使用せずにサイトを再開発します。
Remove references to external domains	外部ドメインに対する、スクリプトタグにsrc属性を使用する参照を削除します。
GopherおよびTelnetのリソースに対するURLパスを削除します。	GopherおよびTelnetのリソースに対するURLパスを削除します。
Remove XMB images and use alternative image format	XMB画像を削除し.pngのような代替画像フォーマットを使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。
Replace API call with compliant	切断された、またはサポートされないAPI呼び出しを、新しい、またはサポートされるAPI呼び出しに置き換える必要があります。
Replace CDF with the new RSS feed	CDFを新しいRSSフィードと置き換えるように、アプリケーションを再開発する必要があります。
WorxWebでサポートされないActiveXコンポーネントの機能を置き換えます。	WorxWebでサポートされないActiveXコンポーネントの機能を置き換えます。
必要な箇所について、ドキュメント上のウィンドウを置き換えます。	必要な箇所について、ドキュメント上のウィンドウを置き換えます。
代わりに要素をdocument.documentElementに追加するように、ページを修正します。	代わりに要素をdocument.documentElementに追加するように、ページを修正します。
ファイルがWebサーバーに作成され、そのファイルをダウンロードするためのリンクがユーザーに提供されるように、アプリケーションを再開発する必要があります。	ファイルがWebサーバーに作成され、そのファイルをダウンロードするためのリンクがユーザーに提供されるように、アプリケーションを再開発する必要があります。
標準に準拠する命名規則を使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。	標準に準拠する命名規則を使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。
スタイルシートに正しいエクステンションを使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。	スタイルシートに正しいエクステンションを使用するように、アプリケーションを再開発する必要があります。
スクリプトを実行する必要がある場合は、UTF-7以外の文字セットを使用します。	スクリプトを実行する必要がある場合は、UTF-7以外の文字セットを使用します。

WorxWeb remediations

アクション詳細	説明
WorxWebで混在したコンテンツの表示を無効にします。	WorxWebで混在したコンテンツの表示を無効にします。

アクション詳細	説明
WorxWebでサポートされないCOMコンポーネントを使用しないでください。	WorxWebでサポートされないCOMコンポーネントを使用しないでください。
ビルドにコンポーネントを事前インストールします。	ビルドにコンポーネントを事前インストールします。
スタイルシートに正しいエクステンションを使用します。	スタイルシートに正しいエクステンションを使用します。
IE8 Ax GPOのクラスIDをホワイトリスト化します。	IE8 Ax GPOのクラスIDをホワイトリスト化します。

XenApp

アクション詳細	説明
サイロプランを開発します。	サイロプランを開発します。
公開アプリケーションの仮想IPアドレスを有効にします。	公開アプリケーションの仮想IPアドレスを有効にします。
Password Managerエージェントがシステムにインストールされた最後のGINAであることを確認します。	Password Managerエージェントがシステムにインストールされた最後のGINAであることを確認します。
ローカルマシンのレジストリキーに書き込まれるデータを分離/リダイレクトします。	ローカルマシンのレジストリキーに書き込まれるデータを分離/リダイレクトします。
印刷管理のためにユニバーサルプリンタードライバーを使用します。	印刷管理のためにユニバーサルプリンタードライバーを使用します。

Windowsデスクトップレポートのアルゴリズムの構成

Oct 16, 2015

Windows 8/8.1およびWindows 7レポートのアルゴリズムの基本的な構成は、[モジュール構成ウィザード](#)に入力する内容に応じて自動的に実行されます。このトピックでは、任意に設定できる詳細な構成について説明します。

質問	回答が「はい」の場合に推奨される構成
環境内にIPv6を展開していますか?	W8_NET_002またはW7_NET_002アルゴリズムのカスタムRAG状態を赤にし、デフォルトのアクションを「Redevelopment required」に設定します。
ヘルプはアプリケーションに不可欠だと考えますか?	W8_DEP_009またはW7_DEP_009アルゴリズムのカスタムRAG状態を黄色にし、デフォルトのアクションとアクション詳細の組み合わせを「Change OS: Install this pre-requisite」に設定します。
64ビット版のWindowsデスクトップに展開する予定ですか?	W8_DRV_001またはW7_DRV_001アルゴリズムのカスタムRAG状態を黄色にし、デフォルトのアクションが望ましい修復アプローチを反映するように変更します。
署名されていないドライバーを許可しないグループポリシーを適用していますか?	W8_DRV_001またはW7_DRV_001アルゴリズムのカスタムRAG状態を黄色にし、デフォルトのアクションが望ましい修復アプローチを反映するように変更します。
環境がロックダウンされていますか?	W8_BP_001またはW7_BP_001およびW8_BP_003またはW7_BP_003アルゴリズムのカスタムRAG状態を黄色にし、デフォルトのアクションが望ましい修復アプローチを反映するように変更します。
ファイアウォールでTCP/IPトラフィックをブロックしますか?	W8_WSK_00またはW7_WSK_00アルゴリズムのカスタムRAG状態を黄色にし、デフォルトのアクションが望ましい修復アプローチを反映するように変更します。
環境内で、マップされるドライブやUNCパスなどを変更する予定ですか?	Hard-coded pathsアルゴリズムグループのすべてのアルゴリズムのカスタムRAG状態を黄色にし、デフォルトのアクションが望ましい修復アプローチを反映するように構成します。
通常、Microsoft System Center Configuration Managerのようなツールを使用して、システムごとにアプリケーションを展開しますか?	Deployment issuesアルゴリズムグループのすべてのアルゴリズムのカスタムRAG状態を黄色にし、デフォルトのアクションが望ましい修復アプローチを反映するように構成します。
すべてが英語の環境で作業していても、Globalization issuesグループのアルゴリズムにより検出されるベストプラクティスに反する問題に関心がありますか?	Globalization issuesグループのすべてのアルゴリズムのカスタムRAG状態を黄色にし、デフォルトのアクションが望ましい修復アプローチを反映するように構成することを検討します。

質問 アプリケーションが古いバージョンである可能性のあるOfficeに依存関係を持つとき、警告を受け取りたいですか？

回答分「はい」の場合は推奨される構成の「Office dependencies」のアルゴリズムのカスタムRAG状態を黄色にし、デフォルトのアクションが望ましい修復アプローチを反映するように構成することを検討します。

アルゴリズムの構成方法については、「[アルゴリズムグループの構成](#)」および「[アルゴリズムの構成](#)」を参照してください。

カスタムレポート

Oct 16, 2015

「カスタムレポート」とは、独自に定義するレポートを指します。既存のアルゴリズムとアルゴリズムグループに基づいてカスタムレポートを作成したり、新しいレポートを作成したりできます。たとえば、64ビット版Windows Server 2012プラットフォームへの移行を準備する場合、Windows Server 2012用と64ビット用の別個のレポートではなく、1つにまとめられたレポートを作成できると便利です。この場合、Windows Server 2012および64ビットレポートの両方のアルゴリズムに基づいたカスタムレポートを作成できます。実際の環境に特化した知識に基づく新しいアルゴリズムを作成することもできます。

AppDNAでは、作成できるカスタムレポートの数、およびカスタムレポートに追加できるアルゴリズムグループの数に制限はありません。ただし、カスタムレポートを追加するたびに、データベースのサイズが増え、Overview Summaryレポートの列が増えます。これにより、最終的にはOverview Summaryレポートが読みづらくなるか、使用可能なディスクスペースを使い切ってしまう可能性があります。同様に、アルゴリズムグループを追加するたびに、Application Issuesレポートビューに列が追加され、Issues Viewの棒グラフの棒が増えます。追加するアルゴリズムグループが多すぎると、これらが読みづらくなる可能性があります。大量のアルゴリズムを追加した場合も、Application ActionsレポートビューとActions Viewは同じような影響を受ける可能性があります。

重要：1つのカスタムレポートでWebアプリケーションアルゴリズムとデスクトップアプリケーションアルゴリズムを混在させないようにし、デスクトップアプリケーションとWebアプリケーションのどちらが対象のカスタムレポートか明確にわか名前をカスタムレポートに付けることをお勧めします。

[Custom Reports Manager] 画面は柔軟性があり、Webのアルゴリズムとデスクトップのアルゴリズムをカスタムレポートに混在させることができます。同様に、カスタムレポートに対して分析できるアプリケーションにも制限はありません。つまり、デスクトップアプリケーションとWebアプリケーションの両方のアルゴリズムを使用して1つのカスタムレポートを作成することも可能です。ただし、使用するアルゴリズムによっては、それらを混在させても意味がありません。

AppDNAアルゴリズムの中には、オペレーティングシステム (OS) が提供する機能への依存性についてアプリケーションをテストするものがあります。この場合、AppDNAデータベースにロードされたOSイメージDNAが、これらのテストによって調査されます。たとえば、イメージで有効になっている機能が確認されます。これらのアルゴリズムはイメージ依存のアルゴリズムと呼ばれます。

イメージ依存のアルゴリズムをカスタムレポートに追加すると、カスタムレポートのエントリが[OSイメージの設定](#)に追加されます。これを使用して、カスタムレポート用のデフォルトのOSイメージを選択します。

注：複数のAppDNAレポートのイメージ依存のアルゴリズムを、同じカスタムレポートに追加することはできません。これを試みると、追加できないことを説明するメッセージが表示されます。

AppDNAによるOSイメージの使用法の概要については、「[オペレーティングシステム](#)」を参照してください。

AppDNAには、カスタムレポートの新しいアルゴリズムを作成するためのテンプレートが数多く用意されています。独自に定義する新しいアルゴリズムを作成するときは、アルゴリズム作成ウィザードの最後のページにあるボックスの一覧から、使用するテンプレートを選択します (次の「[カスタムレポートの作成](#)」を参照してください)。

各テンプレートは、アプリケーションで検出された場合にアルゴリズムをトリガーする問題を定義します。テンプレートに

義されているのは一般的な問題であり、ユーザーが特定の値を入力します。たとえば、一般的な問題がアプリケーションに特定のファイルが含まれること、またはアプリケーションが特定のパスにインストールされることである場合は、問題を引き起こす特定のファイルまたはパスをユーザーが入力します。

テンプレートにはサンプル値が含まれ、ユーザー特有の要件を満たすために編集できます。パーセント記号 (%) を、0個以上の文字と一致するワイルドカード文字として使用できます。使用できるテンプレートとサンプル値を、次の表に示します。

アプリケーションがアルゴリズムをトリガーする条件	サンプル値
特定のファイルがある	filetofind.ini
特定のパスにインストールされる	D:\SomePath%
特定のレジストリエントリが設定される	HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\MyApplication
特定の内容を含むINIファイルがある	FileContentMatchString
特定の内容を伴うカスタムアクションがインストーラーに含まれる	CustomActionMatchString
特定のファイルからAPIをインポートする	msvbvm%.dll

レジストリエントリのテンプレートを使用する場合は、キーと値の名前を検索できます。これを行うには、値の名前の前に2つのバックスラッシュ (\\) を付けます。たとえば、ポート値を伴うすべてのサービスを検索するには、HKEY_LOCAL_MACHINE%\services%\portを使用します。

上級ユーザーはSQLクエリを直接入力して、新しいカスタムレポートのアルゴリズムのロジックを定義できます。ただし、データベース構造は将来のバージョンのAppDNAで変更される可能性があるため、それらのクエリが将来のバージョンのAppDNAで動作することは保証されません。

[Custom Reports Manager] 画面を使用して、カスタムレポートを作成し管理します。

[Custom Reports Manager] 画面を開くには：

- AppDNAのメニューから [Configure] 、 [Custom Reports] の順に選択します。

[Custom Reports Manager] 画面は垂直に分割されています。

右側 - 既存のレポートのすべてを一覧表示するツリービューが表示されます。レポートを展開してレポートに含まれるアルゴリズムグループを表示したり、アルゴリズムグループを展開してグループに含まれるアルゴリズムを表示したりできます。ライセンスがないレポートは表示されません。

左側 - 作成済みのカスタムレポートも、ツリービューに表示されます。左側の項目を右クリックしてメニューを表示し、項目を追加、編集、コピー、および削除したり、プロパティを表示し変更したりできます。表示される右クリックメニューは、項目の種類によって異なります。たとえば、標準レポートからカスタムレポートにコピーしたアルゴリズムは、削除はできませんが編集はできません。左側が空白の場合は、カスタムレポートが作成されていないことを意味します。

画面右側の標準レポートから左側のカスタムレポートへ、アルゴリズムグループと個々のアルゴリズムをドラッグできます。これにより、カスタムレポートに効果的に項目をコピーできます。次の手順に従って、独自のアルゴリズムを作成することもできます。カスタムレポートまたはグループから独自のアルゴリズムをコピーして、ほかのカスタムレポートにコピーできます。これを行うには、画面左側で新しいアルゴリズムを見つけ、右クリックして [Copy to] を選択します。

ツールバーの [Search] ボタンを使用して、アルゴリズムまたはアルゴリズムグループの名前の全体または一部を指定し、画面右側の標準レポート内を検索できます。たとえば、名前に「driver」というテキストを含むアルゴリズムまたはアルゴリズムグループを検索できます。

カスタムレポートを作成した後、レポートビューに結果を表示する前に、カスタムレポートに対してアプリケーションを分析する必要があります。レポートの作成が終了した後、この画面で分析を開始できます。これを行うには、ツールバーの [Analyze] をクリックします。または、後で通常の方法で分析を実行することもできます。

カスタムレポート全体、またはカスタムレポート内の選択したアルゴリズムグループとアルゴリズムのXML表現をダウンロードできます。これを行うには、ツールバーの [Export] をクリックします。これはほかのAppDNA環境にカスタムレポートを提供する、またはバックアップを作成する場合に便利です。エクスポート済みのカスタムレポートをロードするには、ツールバーの [Import] をクリックします。既存のカスタムレポートにアルゴリズムグループをインポートするには、画面左側のツリーでカスタムレポートを右クリックして、[Import Groups] を選択します。アルゴリズムをグループにインポートするには、カスタムレポートアルゴリズムグループを右クリックして [Import Algorithms] を選択します。

概要

Oct 16, 2015

カスタムレポートはユーザー自身が定義するレポートです。既存のアルゴリズムとアルゴリズムグループに基づいてカスタムレポートを作成することも、まったく新しいレポートを作成することもできます。たとえば、64ビット版Windows 7プラットフォームへの移行を準備していて、Windows 7と64ビットに別個のレポートではなく、1つにまとめられたレポートが必要だとします。Windows 7および64ビットレポートの両方のアルゴリズムに基づくカスタムレポートを作成できます。実際の環境に特化した知識に基づく新しいアルゴリズムを作成することもできます。このトピックでは、「[カスタムレポート](#)」トピックを補足するものとして、カスタムレポートを作成するときの重要な考慮事項について説明します。

AppDNAでは、作成できるカスタムレポートの数、およびカスタムレポートに追加できるアルゴリズムグループの数に制限はありません。ただし、カスタムレポートを追加するたびに、データベースのサイズが増え、Overview Summaryレポートの列が増えます。これにより、最終的にはOverview Summaryレポートが読みづらくなるか、使用可能なディスクスペースを使い切ってしまう可能性があります。同様に、アルゴリズムグループを追加するたびに、Application Issuesレポートビューに列が追加され、Issues Viewの棒グラフの棒が増えます。追加するアルゴリズムグループが多すぎると、これらが読みづらくなる可能性があります。大量のアルゴリズムを追加した場合も、Application ActionsレポートビューとActions Viewは同じような影響を受ける可能性があります。

[Custom Reports Manager] 画面は柔軟性があり、Webのアルゴリズムとデスクトップのアルゴリズムをカスタムレポートに混在させることができます。同様に、カスタムレポートに対して分析できるアプリケーションにも制限はありません。これは、たとえばInternet ExplorerとWindows 7のレポートに含まれるアルゴリズムを混在させたカスタムレポートを作成できるということを意味します。そして、このカスタムレポートに対してデスクトップアプリケーションとWebアプリケーションの両方を分析できます。ただし、使用するアルゴリズムによっては、それらを混在させても意味がありません。

重要：したがって、1つのカスタムレポートでWebアプリケーションアルゴリズムとデスクトップアプリケーションアルゴリズムを混在させないようにし、デスクトップアプリケーションとWebアプリケーションのどちらが対象のカスタムレポートに明確にわかる名前をカスタムレポートに付けることをお勧めします。

AppDNAアルゴリズムの中には、オペレーティングシステム (OS) が提供する機能への依存性についてアプリケーションをテストするものがあります。この場合、AppDNAデータベースにロードされたOSイメージDNAが、これらのテストによって調査されます。たとえば、イメージで有効になっている機能が確認されます。これらのアルゴリズムはイメージ依存のアルゴリズムと呼ばれます。

イメージ依存のアルゴリズムをカスタムレポートに追加すると、カスタムレポートのエントリが[OSイメージの設定](#)に追加されます。これを使用して、カスタムレポート用のデフォルトのOSイメージを選択します。

注：複数のAppDNAレポートのイメージ依存のアルゴリズムを、同じカスタムレポートに追加することはできません。これを試みると、追加できないことを説明するメッセージが表示されます。

AppDNAによるOSイメージの使用法の概要については、「[オペレーティングシステム](#)」を参照してください。

AppDNAには、カスタムレポートの新しいアルゴリズムを作成するためのテンプレートが数多く用意されています。独自に定義する新しいアルゴリズムを作成するときは、アルゴリズム作成ウィザードの最後のページにあるボックスの一覧から、使用するテンプレートを選択します (次の「[カスタムレポートの作成](#)」を参照してください)。

各テンプレートは、アプリケーションで検出された場合にアルゴリズムをトリガーする問題を定義します。テンプレートに定義されているのは一般的な問題であり、ユーザーが特定の値を入力します。たとえば、一般的な問題がアプリケーションに特定のファイルが含まれること、またはアプリケーションが特定のパスにインストールされることである場合は、問題を引き起こす特定のファイルまたはパスをユーザーが入力します。

テンプレートにはサンプル値が含まれ、ユーザー特有の要件を満たすために編集できます。パーセント記号 (%) を、0個以上の文字と一致するワイルドカード文字として使用できます。使用できるテンプレートとサンプル値を、次の表に示します。

アプリケーションがアルゴリズムをトリガーする条件	サンプル値
特定のファイルがある	filetofind.ini
特定のパスにインストールされる	D:\SomePath%
特定のレジストリエントリが設定される	HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\MyApplication
特定の内容を含むINIファイルがある	FileContentMatchString
特定の内容を伴うカスタムアクションがインストーラーに含まれる	CustomActionMatchString
特定のファイルからAPIをインポートする	msvbvm%.dll

レジストリエントリのテンプレートを使用する場合は、キーと値の名前を検索できます。これを行うには、値の名前の前に2つのバックスラッシュ (\\) を付けます。たとえば、ポート値を伴うすべてのサービスを検索するには、HKEY_LOCAL_MACHINE%\services%\\portを使用します。

上級ユーザーはSQLクエリを直接入力して、新しいカスタムレポートのアルゴリズムのロジックを定義できます。ただし、データベース構造は将来のバージョンのAppDNAで変更される可能性があるため、それらのクエリが将来のバージョンのAppDNAで動作することは保証されません。

カスタムレポートの作成

Oct 16, 2015

カスタムレポートの名前と、アルゴリズムグループおよびアルゴリズムのIDは、次の規則に従っている必要があります。

- 最初の文字は英字 (a~z、A~Z) である必要があります。
- それ以降の文字には英字または数字 (0~9) を使用できます。
- 名前またはIDにSQL Serverの予約語を使用することはできません。これらの予約語の完全な一覧については、[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa238507\(v=sql.80\).aspx](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa238507(v=sql.80).aspx)を参照してください。
- 名前またはIDの最大文字数は40文字です。

さらに、以下を確認します。

- カスタムレポートの名前にはスペースを含めることができます。
- アルゴリズムまたはアルゴリズムグループのIDにはアンダースコア (_) を含めることができます。

1. AppDNAのメニューから [Configure] 、 [Custom Reports] の順に選択します。
2. [Custom Reports Manager] 画面のツールバーで、 [New] をクリックします。
3. [New Custom Report] ダイアログボックスで、新しいカスタムレポートの名前と説明を入力します。
名前は、前述したカスタムレポートの命名規則に従っている必要があります。カスタムレポートがデスクトップアプリケーションとWebアプリケーションのどちらを対象にしているのかわかるような名前にするをお勧めします。
4. [OK] をクリックします。
ダイアログボックスが閉じ、新しいカスタムレポートが画面の左側に追加されます。
5. 次の手順に従って、カスタムレポートのアルゴリズムグループとアルゴリズムを作成します。
6. ツールバーの [Save] をクリックして変更を保存します。

アルゴリズムグループを作成するには、カスタムレポートが存在する必要があります。

既存のアルゴリズムグループに基づいてアルゴリズムグループを作成するには

1. [Custom Reports Manager] 画面右側のツリー表示で、新しいアルゴリズムグループの基になるアルゴリズムグループを見つけます。
2. 画面左側のカスタムレポートにアルゴリズムグループをドラッグします。アルゴリズムグループとそのすべてのアルゴリズムがカスタムレポートに追加されます。
3. グループ名を変更するには、ツリー表示内のグループを右クリックして [Properties] を選択します。
4. [Properties] ダイアログボックスで、新しい名前を入力して [OK] をクリックします。
5. ツールバーの [Save] をクリックして変更を保存します。

独自に定義する新しいアルゴリズムグループを作成するには:

1. [Custom Reports Manager] 画面左側の新しいカスタムレポートを見つけます。
2. カスタムレポートを右クリックして [New Group] を選択します。
3. [New Custom Report Group] ダイアログボックスで、アルゴリズムグループの一意の識別子、名前、および説明を入力

します。IDは、前述したカスタムレポートの命名規則に従っている必要があります。

4. [OK] をクリックしてダイアログボックスを閉じます。
5. 次の手順に従って、アルゴリズムをグループに追加します。
6. ツールバーの [Save] をクリックして変更を保存します。

カスタムレポートにアルゴリズムを作成するには、アルゴリズムグループが存在する必要があります。

既存のアルゴリズムに基づいてカスタムレポートのアルゴリズムを作成するには

1. [Custom Reports Manager] 画面右側のツリー表示で、カスタムレポートのアルゴリズムグループに追加するアルゴリズムを見つけます。
2. 画面左側のカスタムレポートにある目的のアルゴリズムグループに、アルゴリズムをドラッグします。
3. ツールバーの [Save] をクリックして変更を保存します。

独自に定義する新しいアルゴリズムを作成するには:

1. [Custom Reports Manager] 画面左側で、新しいアルゴリズムを追加するアルゴリズムグループを見つけます。
2. アルゴリズムグループを右クリックして [New Algorithm] を選択します。
3. アルゴリズム作成ウィザードの最初のページで、アルゴリズムの一意の識別子と名前を入力します。
IDは、前述したカスタムレポートの命名規則に従っている必要があります。IDはXXX_nnnの形式で入力します。ここで、XXXは3文字のコードで、nnnは3桁の数字です。
4. [Next] をクリックして、ウィザードの次のページに移動します。
5. ウィザードの2番目のページの [Manifestation] ボックスにアルゴリズムのトリガー条件を、[Remediation] ボックスに問題の解決方法を入力します。入力後、[Next] をクリックします。
6. ウィザードの3番目のページで、このアルゴリズムをトリガーするアプリケーションに適用するRAG状態を選択します。赤はアプリケーションが機能しないこと、黄色はアプリケーションは機能する可能性があるが問題を伴うこと、緑はアプリケーションがユーザー承認テストの準備ができていないことを意味します。入力後、[Next] をクリックします。
7. ウィザードの4番目のページで、アルゴリズムにより特定される問題を修復するアクションとアクション詳細を選択します（ドロップダウンリストに適切なアクションとアクション詳細が表示されない場合は、最も近い選択肢を選択し、後で [Algorithm Groups] 画面で新しいアクションを追加します）。
8. [Next] をクリックします。
9. ウィザードの5番目のページで、アルゴリズムのロジックを定義します。これを行うには、次の2つの方法があります。
 - お勧めの方法は、ボックスの一覧から問題を説明するオプションを選択して、関連するテキストボックスに適切な値を入力する方法です。
 - 上級ユーザーはクエリを直接編集することを選択できます。[アルゴリズム用のSQLクエリの作成または編集] が開きます。
10. [Save] をクリックして変更を保存します。

カスタムレポートのインポートとエクスポート

Oct 16, 2015

カスタムレポート全体、またはカスタムレポート内の選択したアルゴリズムグループとアルゴリズムのXML表現をダウンロードできます。これはカスタムレポートをほかのAppDNA環境に提供したりバックアップを作成したりする場合に便利です。

カスタムレポート、または選択したアルゴリズムグループとアルゴリズムをエクスポートするには

1. AppDNAのメニューから [Configure] 、 [Custom Reports] の順に選択します。
2. [Custom Reports Manager] 画面で、ツールバーの [Export] をクリックします。
3. [Custom Reports Export] ダイアログボックスで、エクスポートする項目を選択します。
4. [Export] をクリックします。
5. [Save As] ダイアログボックスで、ファイルの名前と保存場所を入力します。
6. [OK] をクリックします。

カスタムレポートを新しいカスタムレポートとしてインポートするには

1. AppDNAのメニューから [Configure] 、 [Custom Reports] の順に選択します。
2. [Custom Reports Manager] 画面で、ツールバーの [Import] をクリックします。
3. 前にエクスポートしたファイルに移動します。
4. [OK] をクリックします。
5. インポートする項目を選択します。
6. [Import] をクリックします。

カスタムレポートにアルゴリズムグループをインポートするには

1. AppDNAのメニューから [Configure] 、 [Custom Reports] の順に選択します。
2. [Custom Reports Manager] 画面左側で、エクスポートしたアルゴリズムグループのインポート先のカスタムレポートを見つけます。
3. カスタムレポートを右クリックして [Import Groups] を選択します。
4. 前にエクスポートしたファイルに移動します。
5. [OK] をクリックします。
6. インポートする項目を選択します。
7. [Import] をクリックします。

カスタムレポートのアルゴリズムグループにアルゴリズムをインポートするには

1. AppDNAのメニューから [Configure] 、 [Custom Reports] の順に選択します。
2. [Custom Reports Manager] 画面左側で、エクスポートしたアルゴリズムのインポート先のアルゴリズムグループを見つけます。
3. アルゴリズムグループを右クリックして [Import Algorithms] を選択します。
4. 前にエクスポートしたファイルに移動します。
5. [OK] をクリックします。
6. インポートする項目を選択します。
7. [Import] をクリックします。

アルゴリズム用のSQLクエリの作成または編集

Oct 16, 2015

上級ユーザーは [Algorithm Implementation] ダイアログボックスを使用して、カスタムレポートのアルゴリズムのロジックを構成するSQLクエリを直接作成または編集できます。

[Algorithm Implementation] ダイアログボックスは水平に分割されています。

- **上部** - SQLクエリを作成し編集するテキスト編集ボックスです。
- **下部** - [Test SQL] をクリックすると、クエリの結果が表示されます。

独自に定義する新しいカスタムレポートのアルゴリズムを作成するときは、 [Algorithm Implementation] ダイアログボックスを開きます。

1. [Custom Reports Manager] 画面の左側で、新しいアルゴリズムを作成するアルゴリズムグループを見つけます。
2. アルゴリズムグループを右クリックして [New Algorithm] を選択します。
3. アルゴリズム作成ウィザードを通常の方法で実行します。
4. ウィザードの5番目のページで、 [Advanced] をクリックし、 [Go to] をクリックします。 [Algorithm Implementation] ダイアログボックスが開きます。

[Advanced] をクリックして作成したカスタムレポートアルゴリズムについては、次の手順に従って [Algorithm Implementation] ダイアログボックスを開くことができます。

1. [Custom Reports Manager] 画面左側のアルゴリズムを見つけます。
2. 右クリックして [Edit Implementation] を選択します。

注: Citrixが提供するアルゴリズムに基づくカスタムレポートアルゴリズムについては、 [Algorithm Implementation] ダイアログボックスを開くことはできません。

- SQLクエリは、アルゴリズムをトリガーするアプリケーションに関連するデータを返すselect権限ステートメントである必要があります。
- 結果セットの最初の列はアプリケーションIDである必要があります。
- You must include the(APP_IDS)タグを含める必要があります。このタグは、実行時に、現在選択されているアプリケーションの一覧に置き換えられます。通常、このタグWHERE句に含めま
- If you use theAS構文を使用してテーブルまたは列に別名を付ける場合は、別名を角かっこ ([]) または二重引用符 (") のどちらかで囲むかにかかわらず、標準識別子の規則に従う必要があります。たとえば、別名には空白またはアポストロフィ (') を含められません。標準識別子について詳しくは、 [http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa223962\(v=sql.80\).aspx](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa223962(v=sql.80).aspx) を参照してください。

総合的なselect権限ステートメントのドキュメントについては、 [http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa259187\(SQL.80\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa259187(SQL.80).aspx) を参照してください。

警告: データベースの構造はバージョン間で変更される可能性があるため、記述したクエリが将来のバージョンのAppDNAで動作することは保証できません。

新しいアルゴリズムを作成するときに [Algorithm Implementation] ダイアログボックスを開くと、ダイアログボックスの上部には次のようなサンプルクエリが表示されます。

```
1 SELECT mf.[application_id], mf.[long_filename], mf.[target_path], mf.[version], mf.[version_number], mf.[language] 2 FROM [dbo].[msi_file] mf 3 4 WHERE 5 ( 6 mf.[language] NOT LIKE '%1033%' 7 AND  
これにより、英語 (米国) 以外のファイルを含むすべてのアプリケーションが取得されます。
```

行1、2 - dbo.msi_file テーブルから名前付きの列を6つ選択します。このテーブルの別名をmfに設定します。

行3 - WHERE句により、次の条件を満たすデータに結果を制限するフィルターを定義します。

- **行6-12** - language列の値が英語 (米国) の言語コードと一致せず、空白、0、またはnullでもありません。
- **行15** - アプリケーションIDは、現在選択されているアプリケーションIDの一覧に含まれています。この一覧は、実行時(APP_IDS)タグを置き換えます。
- **行16** - 結果をアプリケーションIDで並べ替えます。

この例は開始点を提供するに過ぎず、手引きとして使用するよう意図されているものではありません。SQL Server Management Studioを使用して、AppDNAデータベース内のテーブルを参照できます。ただし、データベースの構造はバージョン間で変更される可能性があるため、記述したクエリが将来のバージョンのAppDNAで動作することは保証できません。

Forward Path

Oct 16, 2015

Forward Pathは、AppDNAに組み込まれている強力なビジネス決定エンジンです。Forward Pathを使用すると、異なる展開シナリオをモデル化し、その影響を比較できます。組織の決定を反映するシナリオを作成し、結果に基づいて異なる自動化タスクスクリプトを作成できます。たとえば、Windows 7への移行準備中にForward Pathシナリオを作成して、App-Vパッケージとして展開するのに適しているアプリケーション、デスクトップに展開する必要があるアプリケーション、再開発が必要なアプリケーションを判断できます。

タスクスクリプトをさまざまな成果に関連付けて、App-Vシーケンスの処理とMSIパッケージ化をInstall Captureで自動化できます。これには、「[Install Capture](#)」の説明に従って設定および構成された仮想マシンが必要です。

「Forward Pathシナリオ」とは、Forward Pathレポートのロジックを定義するスクリプトを指します。ロジックはレポート対象として選択される各アプリケーションに適用されます。レポートにはアプリケーション名、製造元、バージョン、およびインポート元のパスの列が含まれます。また、シナリオロジックにより、[Outcome] 列と、オプションで [Cost] 列、[RAG] 列、および [Description] 列、さらに最大で20個のカスタム列について値が提供されます。ロジックでカスタム列RAG値を指定する場合は、レポートを実行するとその列の結果の円グラフが自動的に生成されます。

注：モジュール構成ウィザードでは、プロジェクトに合わせた<My Enterprise Selections>という名前のシナリオが自動的に作成されます。モジュール構成ウィザードでオプションを変更すると、このシナリオが自動的に更新されます。My Enterprise Selectionsシナリオを直接編集することはできません。ただし、このシナリオを独自のシナリオのテンプレートとして使用できます。

通常Forward Pathのタスクは、Forward Pathレポート内のロジックに基づき、実稼働環境で使用できるApp-VパッケージおよびXenAppパッケージの作成を自動化するために使用します。ただしForward Pathのタスクは、ファイルのコピーやメールの送信など、そのほかの多くのタスクを実行するように構成できます。

「Forward Pathタスクスクリプト」とは、Forward Pathシナリオで生成される [Outcome] 列の値に対して実行するアクションを定義するスクリプトです。たとえば、アプリケーションの仮想化シナリオによってアプリケーションのRAG状態が%と判定された場合は、すぐにテストするために、タスクスクリプトによってApp-V Sequencerでそのアプリケーションが自動的にシーケンス処理され、シーケンスがテスト環境に公開されます。

選択したForward Pathシナリオに関連付けられたタスクスクリプトを実行するには、Forward Pathレポートビューアーの [Evaluate Tasks] をクリックします。

- アプリケーションの選択を変更するには、[Application List] 画面に移動します。
- AppDNAセッション中のアクティブなシナリオを変更するには、必要なシナリオをForward Pathレポートビューアーで選択します（アクティブなシナリオを永続的に変更するには、Forward Pathロジックエディターを使用します）。
- 選択したアプリケーションのタスクスクリプトを実行するには、[Start] をクリックします。
- 選択したアプリケーションのアクティブシナリオを評価するには、ツールバーの[Refresh] をクリックします。これにより、以下の情報が表示されます。
 - [MapUNCPathDriveLetter] 列。マップされたドライブ文字が入力されます（タスクスクリプトでApplicationDetails.MapUNCPathプロパティを使用しインストールディレクトリの<\\server\share>部分をドライブ文字にマップしている場合）。
 - [Install Command] 列。アプリケーションのインストールを起動するコマンドが表示されます。タスクスクリプトで上書きされなければ、アプリケーションがActive DirectoryまたはConfiguration Managerの管理対象アプリケーション

にリンクされている場合は、この列にはActive DirectoryまたはConfiguration Managerのインストールコマンドが表示されます。そうでない場合は、AppDNAにアプリケーションをインポートするときに使用された場所と方法に基づいて、コマンドが表示されます。

- [InstallWrkDir] 列。インストールコマンドにより使用される作業ディレクトリが表示されます。この列が空白の場合は、デフォルトの作業ディレクトリが使用されます。

Forward Pathスクリプトの作成と編集

Oct 16, 2015

Forward Pathシナリオおよびタスクスクリプトを作成したり編集したりするには、[Forward Path Logic Editor] を使用します。デフォルトでは、シナリオおよびタスクスクリプトはVisual Basic .NET 2.0 (VB .NET) で記述します。Visual Basic .NETの総合的なドキュメントについては、<http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/2x7h1hfk.aspx>を参照してください。


- スクリプト構造について詳しくは、「[Forward Pathの仕様](#)」を参照してください。
- 手順のチュートリアルについては、「[Forward Pathの例](#)」を参照してください。


Forward Pathロジックエディターを開くには、次の手順に従います。


- AppDNAのメニューで、[Configure]、[Forward Path] の順に選択します。


デフォルトでは、[Forward Path Logic Editor] 画面は3つの部分に分かれています。それらについて以下で個別に説明します。


画面上部のメインツールバーには次のオプションがあります。

 **New Scenario** - 新しいシナリオスクリプトを作成します。このボタンをクリックすると、新しいシナリオの名前と説明を入力できるダイアログボックスが開きます。[OK] をクリックすると基本シナリオが作成され、エディターウィンドウに開かれます。ここで、シナリオを編集できます。

 **New Task Script** - 新しいタスクスクリプトを作成し、シナリオの[Outcome] 列の特定の値と関連付けます。このボタンをクリックすると、[Forward Path Task Script] ダイアログボックスが開きます。ここには、エディターに開いているシナリオの[Outcome] 列に指定可能な値が一覧表示されます。タスクスクリプトに関連付ける値を選択して説明を入力し、[OK] をクリックします。詳しくは、この後の「[Forward Path Task Script] ダイアログボックス」を参照してください。


 **Test** - 単純なシナリオスクリプトをテストするために使用します。[Application List] 画面で現在選択されているアプリケーションに対してスクリプトが実行され、結果が[Output] タブに表示されます。ただし、この機能はグループ化のようなForward Pathの高度な機能の一部をサポートしません。より高度なシナリオについては、通常の方法でレポートビューアーに表示することによってテストする必要があります。


 **Export** - シナリオおよびタスクスクリプトをXMLファイルにエクスポートします。たとえば、バックアップを作成するために使用します。[Forward Path Scenario Export] ダイアログボックスが開き、エクスポートするスクリプトを選択できます。


 **Import** - 以前にエクスポートしたシナリオおよびタスクスクリプトのファイルをインポートします。


画面のメインセクションには次の2つのタブがあります。


[Editor] タブ - Forward Pathシナリオおよびタスクスクリプトを作成し編集するために使用します。ツールバーには次のオプションがあります。

 **Save** - エディターに開いているスクリプトに対する変更を保存します。

 **Properties** - 現在エディターに開いているスクリプトの名前と説明を表示し編集します。

 **Show and hide** - 画面下部のエラーおよび並列表示ビューアーの表示/非表示を切り替えます。

 **Separate window** - 別のウィンドウにエディターを開きます。

 **Task Script Help** - タスクスクリプトで使用できるAppDNA APIのドキュメントを表示します。

[Output] タブ - メインツールバーの [Test] をクリックすると、シナリオスクリプトの出力が表示されます。シナリオにアプリケーションをグループ化する高度な機能が含まれていたとしても、出力は追加の書式情報なしのフラットリストとして表示されます。より高度なシナリオについては、通常の方法でレポートビューアーに表示することによってテストする必要があります。

エクスプローラーには次の3つのタブがあります。

Scenarios - AppDNAに用意されているサンプルシナリオおよび使用できるそのほかのシナリオを一覧表示します。シナリオをクリックすると、そのシナリオがエディターに開きます。シナリオの説明が [Explorer] タブの下部に表示されます。太字で表示されるシナリオがアクティブなシナリオです。これは、Forward Pathレポートを表示するときに、このシナリオがデフォルトで選択されるということを意味します。シナリオをアクティブにするには、右クリックして [Set as Active] を選択します。

Task Scripts - AppDNAに用意されているサンプルタスクスクリプトおよび使用できるそのほかのタスクスクリプトを一覧表示します。タスクスクリプトをクリックすると、そのタスクスクリプトがエディターに開きます。タスクスクリプトはアクティブまたは非アクティブとして表示されます。アクティブとは、アクティブなシナリオに関連付けられているということを意味します。

Property Explorer - シナリオスクリプトで使用できるAppDNAプロパティを一覧表示します。ほとんどのプロパティ名はそのままで説明不要です。ただし、MOEプロパティはActive DirectoryおよびConfigMgrからインポートされたデータに関連し、RAGプロパティはカスタムRAGを表します。

エラー・並列表示ビューアーには2つのタブがあります。

Errors/Warnings - 現在のスクリプトで検出されたエラーまたは警告を表示します。

Side by Side Viewer - メインエディターで編集しているスクリプトと並列して、ほかのスクリプトを表示します。これを行うには、[Explorer] タブでシナリオまたはタスクスクリプトを右クリックして、[View side by side] を選択します。

[Forward Path Task Script] ダイアログボックスは、次のいずれかを実行すると開きます。

1. メインツールバーの [New Task Script] をクリックします。
2. [Scenario Explorer] タブでシナリオを右クリックして、[New Task Script] を選択します。

[Forward Path Task Script] ダイアログボックスのオプションは次のとおりです。

Associated Outcome - 現在エディターウィンドウに開いているシナリオによって [Outcome] 列に生成できる、指定可能な値を一覧表示します。

My outcome was not listed - [Associated Outcome] ボックスの一覧に含まれる指定可能な値の一覧を更新するには、このチェックボックスをオンにします。期待する値がそれでも表示されない場合は、シナリオスクリプトに対する変更を保持したかどうかと、正しいシナリオがエディターに開いているかどうかを確認してください。

Description - 詳しい説明を入力することをお勧めします。

Forward Pathの仕様

Oct 16, 2015

デフォルトでは、すべてのシナリオとタスクスクリプトはVisual Basic .NET 2.0 (VB .NET) としてコンパイルされます。Visual Basic .NETの総合的なドキュメントについては、<http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/2x7h1hfk.aspx>を参照してください。

タスクスクリプトはC# 2.0としてコンパイルすることを選択できます (シナリオは不可)。これを行うには、タスクスクリプトに次の文字列を付けて開始します。

Language CSharp

ただし、AppDNAのスクリプトエディターでは、Visual Basic .NETの構文しか強調表示できません。

シナリオおよびタスクスクリプトはメモリ内で.NETアセンブリにコンパイルされます。したがって、.NET Framework全体およびグローバルアセンブリキャッシュ内のそのほかのアセンブリをシナリオやタスクスクリプトで使用できます。たとえば、System.Collections.Generic名前空間で利用できるどのクラスも使用できます (この名前空間のドキュメントについては、[MSDNライブラリ](#)を参照してください)。

タスクスクリプトは自動的にAppDNA.AppTitide.Scriptingアセンブリを参照します。

アセンブリはLoadAssembly拡張構文を使用して指定できます。次に例を示します。

```
LoadAssembly System.Windows.Forms.dll
```

アセンブリがグローバルアセンブリキャッシュにない場合は、完全なパスを指定する必要があります。これは、名前空間でのimportの使用に影響を与えません。

言語がVB .NETである場合は、文字列に次の構文を使用できます。

```
<xxx>
```

ここで、xxxは文字列です。コンパイルの前に、パーサーによって文字列がVB .NET文字列リテラルに変換されます。これにより、標準のVB .NET構文で許容される以上の文字列を、スクリプト内の複数行にまたがって指定できます。

次に例を示します。

```
Dim s As String = ;'---Some vbscript Option Explicit Wscript.Echo "string"
```

前の内容は次のように変換されます。

```
Dim s As String = "" & Microsoft.VisualBasic.Constants.vbCRLF & ___ "'---Some vbscript" & Microsoft.VisualBasic.Constants.vbCRLF & _ " Option Explicit" & Microsoft.VisualBasic.Constants.vbCRLF & _
```

基本的なForward Pathシナリオスクリプトは、Forward Pathレポートの出力列を定義する関数から成り立ちます。次の例は、メインツールバーで[New Scenario] をクリックすると作成される基本シナリオです。

```
Public Function ForwardPath(ByVal currentApplication As Application) As Output ' TODO: Your new Forward Path Logic definition must be defined here.' For Help, please refer to the sample Forward Path Logic definition.
関数の署名は重要で、関数は少なくとも1つの出力列を定義するOutputオブジェクトを返す必要があります。タスクスクリプトをシナリオに関連付ける場合は、[Outcome] 出力列を定義する必要があります。
```

Applicationオブジェクトが関数に渡されることに注意してください。関数は現在選択されている各アプリケーションに対して実行され、関数に渡されるApplicationオブジェクトは現在処理されているアプリケーションを表します。

[Forward Path Logic Editor] 画面右側のプロパティエクスプローラーを使用して、ApplicationおよびOutputオブジェクトの構造を調べます (Outputオブジェクトは、プロパティエクスプローラーにForwardPathReportOutputとして表示されます)。

シナリオスクリプトに機能を追加することによって、グループ別にアプリケーションデータを集計してレポートレベルの合計を生成することができます。詳しくは、[グループ化Forward Pathレポート](#)を参照してください。

タスクスクリプトは次の形を取る必要があります。

```
Imports AppDNA.AppTitide.Scripting Public Class ScriptClass Public Function Start(controller As IActionController) As TaskStatusEnum ' Do stuff Start = TaskStatusEnum.Complete End Function End Class
名前、クラスにアクセスできること、および関数の署名が重要です。それ以外は、どのVB .NETコンストラクトも有効です。
```

ツールバーの [Task Script Help] をクリックすると、タスクスクリプトで使用できるAppDNA APIのドキュメントが表示されます。

Forward Pathの例

Oct 16, 2015

この例では、Forward Pathの単純なシナリオおよびタスクスクリプトの作成について説明します。

1. AppDNAのメニューで、[Configure]、[Forward Path]の順に選択します。
2. Forward Pathロジックエディターのツールバーで、[New Scenario]をクリックします。
3. [Forward Path Script Name] ダイアログボックスで、新しいシナリオの名前と説明を入力し、[OK]をクリックします。
新しいシナリオが作成され、エディターに開かれます。新しいシナリオスクリプトの内容は次のとおりです。

```
1 Public Function ForwardPath(ByVal currentApplication As Application) As Output 2 ' TODO: Your new Forward Path Logic definition must be defined here.3 ' Refer to the sample Forward Path scripts
```

4. 実用にはなりませんが、これは機能するシナリオスクリプトです。しくみを理解するため、[Editor] ツールバーの[Test]をクリックします。
[Application List] 画面で現在選択されているアプリケーションに対してシナリオが評価され、結果が[Output] タブに表示されます。

各アプリケーションの[Outcome]列の値が「Sample Outcome」であり、同様に、選択されているすべてのアプリケーションについて[RAG]列の値が「Green」で、[Cost]列の値が「100」であることに注意してください。これは、これらの列の値はスクリプトの行6-8にハードコードされているからです。

[Description] 列と [Customfield] 列が空白であることに注意してください。これは、シナリオにこれらの列の値が定義されていないからです。

5. [RAG] 列の値を変更して、Windows 7レポートに対するアプリケーションの実際のRAGを反映させます。シナリオスクリプトの行8を次のように変更します。

```
myForwardpathresult.RAG = currentApplication.Modules.Windows7.RAG
```


これにより、[RAG] 列の値がアプリケーションのWindows 7に対するRAG状態に設定されます（これは、Windows 7レポートに対してアプリケーションを分析済みであることを前提としています。このレポートを使用できない場合は、使用できるほかのレポートを選択してください。プロパティエクスプローラーを使用して、ほかのレポートの参照方法を確認します）。
6. [Test] をクリックして結果を表示します。
[RAG] 列の値に、実際のRAG値が反映されます。
7. 次に、[Outcome] 列の値がWindows 7に対するRAG状態を反映するようにします。これを行うには、次のように行6番ステートメントで置き換えます。

```
If (currentApplication.Modules.Windows7.RAG = RAG.Green) Then myForwardpathresult.Outcome = "OK for Windows 7" Else If (currentApplication.Modules.Windows7.RAG = RAG.Amber) Then myF
```


このステートメントにより、アプリケーションのWindows 7に対するRAG状態が緑であるかどうかテストされます。緑であれば、スクリプトによって[Outcome] 列に「OK for Windows 7」と書き込まれ、そうでなければ、Windows 7に対するRAG状態が黄色であるかどうかテストされます。黄色であれば、スクリプトによって [Outcome] 列に「Remediation required」と書き込まれ、そうでなければ、[Outcome] 列に「Redevelopment required」と書き込まれます。アプリケーションが分析済みでロックが解除されていることを前提として、RAG状態が緑でも黄色でもなければ、赤であるからです。
8. [Test] をクリックして結果を表示します。
[Outcome] 列の値に、Ifステートメントのロジックが反映されたことに注意してください。

これは、Forward Pathのしくみを紹介することを意図した、故意に些細な内容を持つ例です。より現実的な例を確認するには、シナリオエクスプローラーを使用してAppDNAに用意されているサンプルシナリオを参照し、プロパティエクスプローラーを使用してシナリオスクリプトで使用できるプロパティを調べます。

注：出力オブジェクトは、プロパティエクスプローラーでForwardPathReportOutputとして表示されます。
たとえば、次のようにOutput.Displayプロパティを使用して、レポートの標準列の幅と可視性を制御できます。

```
myForwardpathresult.Display.Application.Width = 250 myForwardpathresult.Display.Manufacturer.Width = 100 myForwardpathresult.Display.Version.Width = 50 myForwardpathresult.Display.SourcePath
```

同様に、Output.CustomField<name>.Displayプロパティを使用して、カスタムフィールド列の幅と可視性を制御できます。

```
myForwardpathresult.CustomField1.Display.Width = 50 myForwardpathresult.CustomField2.Display.Width = 100
```

これらのプロパティにより制御されるのは、レポート実行時の列の表示です。Forward Pathロジックエディターの[Output] タブの列は制御されません。

次に、シナリオスクリプトの例で作成した、[Outcome] 列の「Redevelopment required」という値に関連付けるタスクスクリプトを作成します。

1. 前の手順で作成したサンプルスクリプトをエディターに開きます。
2. メインツールバーの [New Task Script] をクリックします。
[Forward Path Task Script] ダイアログボックスが開きます。ここには、エディターに開いているシナリオの[Outcome] 列に指定可能な値が一覧表示されます。
3. ドロップダウンリストから [Redevelopment required] を選択し、説明を入力して [OK] をクリックします。
新しいタスクスクリプトが作成され、エディターに開かれます。新しいタスクスクリプトの内容は次のとおりです。

```
1 ' This sample script kicks off an Install Capture of the given file 2 ' as well as interacts with the gui 3 LoadAssembly System.Windows.Forms.dll 4 Imports AppDNA.AppTitlude.Scripting 6 Imports Sys
```


これはInstall Captureを起動する、内容が空のタスクスクリプトです。
4. Install Captureに関連する行 (行11-21) を、メールを送信するコードと置き換えます。ただし、まず次の行を行6の後に追加して、メールの送信に必要な名前空間をインポートします。

```
Imports System.Net.Mail Imports System.Net
```
5. 次に、Install Captureのコード (現在の行13-23) を次のコードと置き換えます。

```
' This informs the controller that it can abort if the user cancels controller.AbortOnCancel() Dim myClient As New SmtplibClient("") myClient.Credentials = New NetworkCredential("", "") Dim MainMessage
```


" MainMessage = MainMessage + "
" MainMessage = MainMessage + "Application needs redevelopment." MainMessage = MainMessage + "
" MainMessage = MainMessage + "Application Name:" + controller.Application.Name MainMessage = MainMessage + "
" MainMessage = MainMessage + "Source Path:" + controller.Application.SourcePath MainMessage = MainMessage + "
" MainMessage = MainMessage + "Goodbye." MainMessage = MainMessage + "
" MainMessage = MainMessage + "" MainMessage = MainMessage + "" Message.Body = MainMessage Message.IsBodyHtml = True Message.From = Address Message.To.Add(ToAddress) Message
6. ここで、、、および、およびを環境に適した値に置き換えます。
7. [Save] をクリックして変更を保存します。
8. 次に、タスクスクリプトを実行します。
 1. AppDNAのサイドバーから [Reports: Applications]、[Forward Path]の順に選択します。
 2. Forward Pathレポートビューアーで、前の手順で作成したForward Pathシナリオを選択します。

3. [Evaluate Tasks] をクリックします。
[Forward Path Task Sequencing] 画面が開き、Forward Pathシナリオで処理されたアプリケーションが一覧表示され、それらにタスクスクリプトが関連付けられているかどうかが表示されます。
 9. タスクスクリプトが関連付けられているアプリケーションを選択し、ツールバーの[Start] をクリックします。
これにより、そのアプリケーションに対してタスクスクリプトが実行されます。[Status] 列に、スクリプトが正常に実行されたかどうかが表示されます。エラーが発生した場合は、画面下部に表示されます。この例では、実際の環境に適切なメールパラメーターを入力しなければ（前の手順6.）、スクリプトが失敗します。
- さらに例を確認するには、タスクスクリプトエクスプローラーを使用して、AppDNAに用意されているサンプルタスクスクリプトを参照します。
 - タスクスクリプトからの実行プロファイルの実行については、[実行プロファイルの実行](#)を参照してください。

修復レポートビューへのリンク作成

Oct 16, 2015

ここでは、Forward Pathレポートを構成して、レポートに含まれる各アプリケーションの名前がそのアプリケーションの修復レポートビューに対するリンクとして機能するように設定する方法について説明します。単一のレポートまたは標準レポートの組み合わせの、修復レポートビューに対するリンクを作成できます（後者の場合、結合した修復レポートビューに対するリンクが作成されます）。

以下のForward Pathレポートの抜粋には、アプリケーション名がリンクとして表示されています。

#	Application	Manufacturer	Version
1	Analysts Notebook	i2	6.01
2	ActiveSync	Microsoft	3.7
3	BBC Ticker	BBC	1.0.1.7
4	Hardcopy Pro	Desksoft	2.21
5	Citrix ICA Client	Citrix Systems, Inc.	9.00

Forward Pathシナリオでのリンクを指定するために、RemediationModulesプロパティを出力オブジェクト（ForwardPathReportOutputオブジェクト）で使します。単一のレポートの修復レポートビューまたは結合した修復レポートビューに対するリンクを作成できます。たとえば、以下のようにしてWindows 7修復レポートビューに対するリンクを作成できます。

```
Dim myForwardpathresult As New Output() '... myForwardpathresult.RemediationModules.Add("Win7Module")
```

Windows 7およびApp-Vの結合した修復レポートビューに対するリンクを作成するには、以下のようにして行を追加します。

```
myForwardpathresult.RemediationModules.Add("VirtualisationRuleModule")
```

デフォルトで、リンクによってRemediation Issuesビューが開きます。Remediation Actionsビューを開くには、以下の行を追加します。

```
myForwardpathresult.RemediationView = RemediationView.Actions
```

注：RemediationModulesプロパティは、標準のNETListクラスのオブジェクトです（ドキュメントについては、[MSDNライブラリ](#)を参照）。

以下の表は、さまざまなAppDNAレポートを定義するIDの一覧です。リンクを正しく動作させるには、レポートのライセンスが有効で、そのレポートに対してアプリケーションを解析済みである必要があります。

指定するレポート：	使用するID：
Windows 7	Win7Module
Windows 8/8.1	Win8Module
Windows Server 2012/2012 R2	Win2012Module
Windows Server 2008 R2	Win2008R2Module
XenApp Hosted	XenAppRuleModule
App-V	VirtualisationRuleModule
Internet Explorer (IE)	IEModule
Firefox	FFModule
WorxWeb	WorxWebModule

単一のカスタムレポートの修復レポートビューにリンクすることができます。これを行うには、カスタムレポートのIDを知っている必要があります。通常、これは（スペースを除いた）カスタムレポートの名前と同じです。たとえば、デフォルトの名前「My New Custom Report」でカスタムレポートを作成するとします。このIDは通常はMyNewCustomReportです。MyNewCustomReport.ただし、例外があります。次に例を示します。

- カスタムレポートの名前を変更しても、IDは変わらないままです。
- 最初に作成したカスタムレポートの名前を変更してから、二番目に作成したレポートに最初のレポートの元の名前を付ける場合は、二番目のレポートのIDは最初のレポートのIDに_1を付加した文字列になります。_1appended.

注：結合したカスタム修復レポートビューに対するリンクは作成できません。

これは、修復レポートビューへのリンクが作成されるように、[Forward Pathの例](#)で作成したサンプルシナリオを拡張したものです。

```
Public Function ForwardPath(ByVal currentApplication _ As Application) As Output Dim myForwardpathresult As New Output() If (currentApplication.Modules.Windows7.RAG = RAG.Green) Then myFon
```


Forward PathシナリオでのEffort Calculator変数の使用

Oct 16, 2015

このトピックでは、Forward PathシナリオでのEffort Calculator変数の使用について紹介します。例を使用して、これらの機能の使用方法を紹介します。

Effort Calculatorでは、(AppDNAレポートにより表される)対象のプラットフォームに展開するための、アプリケーションポートフォリオの修復に関連する費用と作業を見積もります。計算には3に2つの種類の変数を使用します。

- **ユーザー定義の変数** - テスト要員、修復要員、およびプロジェクトマネージャーの1日あたりの費用、通常の稼働日の稼働時間、さまざまな複雑度(単純、標準、複雑)のアプリケーションの、修復アクションの難易度(容易、中度、困難)を考慮に入れた修復平均時間などの値を格納します。これらの変数は、[\[Effort Calculator\] 画面](#)でAppDNAレポートごとに個別に設定できます。
- **アプリケーションレベルの変数** - AppDNA解析に由来し、アプリケーションの持つファイルとレジストリエントリの数に基づくアプリケーションの複雑度と、選択したレポートにおいてアプリケーションの修復に必要なアクションの難易度を含みます。

Effort Calculatorではこの情報を使用して、エンタープライズアプリケーションポートフォリオを新しいプラットフォームに移行するための費用を見積もります。このリリースでは、たとえば、各アプリケーションの修復費用を見積もるために、これらの変数をForward Pathシナリオで使用できるようになりました。このトピックでは、その方法を比較的単純な例を挙げて説明します。AppDNAみ込みのサンプルシナリオには、より複雑で洗練されている例が含まれます。

Effort Calculator変数と使用方法について詳しくは、「[Effort Calculator](#)」を参照してください。

ユーザー定義のEffort Calculator変数にアクセスするには、EffortCalculatorSettingsオブジェクトを使用します。このオブジェクトはHostオブジェクトを使用して取得します。パスフレーズHostオブジェクトはシナリオスクリプト全体で暗黙的に使用できます。以下の抜粋ではWindows 7レポートのためにEffortCalculatorSettingsオブジェクトを取得しています。

```
Private Dim vars As EffortCalculatorSettings ' Get the Windows 7 Effort Calculator settings object.vars = Host.GetEffortCalculatorSettings("Win7Module")
```

Windows 7のEffort Calculator変数を取得するために、Windows 7の内部レポートIDを使用したことに注目してください。レポートIDの一覧については、[修復レポートビューへのリンク作成](#)を参照してください。

You can see all of the properties of theEffortCalculatorSettingsオブジェクトのすべてのプロパティが、[\[Forward Path Logic Editor\] 画面](#)の右側のプロパティエクスプローラーに表示されます。プロパティ名は、[\[Effort Calculator\] 画面](#)の変数に表示されるテキストと密接な関係があります。たとえば、AppStagingHoursプロパティは、[\[Effort Calculator\] 画面](#)のStaffing変数セクションのStaging time変数に対応しています。以下の例ではこの変数を使用します。

これらの変数の値をシナリオで使用するために、次のようにしてそのシナリオ内で設定できます。

```
vars.TesterStagerCostPerDay = 23
```

注：これによりEffort Calculatorで使用される変数が変更されたり上書きされたりすることはありません。

Forward Pathシナリオで2種類のEffort Calculator変数を使用してアプリケーションの修復費用の見積もりを計算する方法について、シナリオ例を使用して手順ごとに説明します。理解を容易にするため、段階的にシナリオを構築します。

これはシナリオ例によって作成される出力画面です。

#	Application	Manufacturer	Version	Outcome	RAG	Cost	Application Complexity	Action RAG	Action Complexity
1	Analysts_Notebook	i2	6.01	Remediate	R	\$5,000.00	Complex	A	Hard
2	iPassConnect	Sirocom	3.10	Redevelop	R	\$2,000.00	Medium	R	Hard
3	avast! Antivirus	Alwil	4.7	Remediate	R	\$1,400.00	Medium	G	Medium
4	Ixos	IXOS Software AG	5.0.0	Remediate	A	\$1,400.00	Medium	G	Medium
5	StyleWriter	Editor Software	3.90	Remediate	R	\$600.00	Simple	G	Medium
6	Hardcopy Pro	Desksoft	2.21	Stage UAT	G	\$200.00	Simple	G	--
7	BBC Ticker	BBC	1.0.1.7	Stage UAT	G	\$200.00	Simple	G	--

注：このトピックの例では、長い行を複数行に分割するためにアンダースコア () 表記を使用します。これにより、例のコードスニペットがPDF上で正しく表示されます。この表記について詳しくは、[MSDNライブラリ](#)を参照してください。

AppDNAには次のForward Pathシナリオ関数があります。Initialize()。この関数をシナリオに指定すると、処理の開始点で自動的に呼び出されます。これを使用して、後でシナリオ内で使用する変数を初期化します。For more information about theInitialize()関数について詳しくは、「[グループ化Forward Pathレポート](#)」を参照してください。

Before theInitialize()関数の前に、スクリプトの初めから終わりまで使用するいくつかの変数を宣言します。

```
' Declare variables for use throughout the script.Private Dim vars As EffortCalculatorSettings Private Dim testingPerHour As Decimal = 0 Private Dim remediationPerHour As Decimal = 0  
次にInitialize()関数を示します。
```

```
Public Overrides Sub Initialize() ' Get the Windows 7 Effort Calculator settings object.vars = Host.GetEffortCalculatorSettings("Win7Module") ' Calculate the testing and remediation cost per hour.testingPerHour = 1時間あたりのテストおよび修復費用を計算することに注目してください。1日あたりのテストまたは修復費用を表す変数の値を、通常の1日の稼働時間を表す変数の値で割ることによってこの処理を行います。
```

At the end of theInitialize()関数の最後に、[Cost] 列の値の並べ替え順序を降順に設定します。アプリケーションの修復とユーザー承認テスト (UAT) の準備のために算出した費用をこの列に表示します。

以下がメイン関数であるForwardPath()です。レポートの実行時に選択される各アプリケーションに対して、AppDNAによりこの関数が自動的に1回呼び出されます。例の後で内容を説明します。

```
Public Function ForwardPath(ByVal currentApplication _As Application) As Output Dim result As New Output() ' We will use three custom columns.result.CustomField1.Name = "Application Complexity"
```

この関数が3つのカスタム列 (CustomFieldn) の設定から始まることに注目してください。これらは、前の出力画面の右端の3つの列です。これらは以下のように使用します。

列	表示内容
CustomField1	アプリケーションの複雑度です。Forward Pathはこれを赤、黄、緑のRAGとして格納します。これらの値をスクリプト内でComplex、Medium、Simpleというテキストに変換します。
CustomField2	アプリケーションのアクションRAGです。この値はApplication.Modules.Windows7.ActionRAGプロパティを使用して取得します。
CustomField3	アプリケーションの修復アクションの難易度です。この列の値は後でスクリプト内で取得します。

[Cost] 列は自動的に通貨形式で表示されます。Forward Pathではデフォルトで、ユーザーのコンピューターの地域の設定に合わせた通貨記号が使用されます。国際的な環境では、レポートを表示するユーザーのデバイス設定に応じて、通貨記号が変化する可能性があるということを意味します (たとえば、フランスのユーザーにはユーロ記号、イギリスのユーザーにはポンド記号、アメリカのユーザーにはアメリカドル記号が表示される可能性があります)。そのため、この例ではユーザーの地域設定に関係なくアメリカドル記号が表示されるように、アメリカドル記号を指定します。これを行うには、Cultureプロパティを [Cost] 列で「en-US」に設定します。この設定値はアメリカ合衆国を示します。

この関数の本体はSelect Case文から構成されます。この文は、アプリケーションのWindows 7に関するRAG状態をテストし、その状態に応じて異なる処理を提供します。各値の制御方法を説明します。

- **緑のRAG** – アプリケーションをそのままUATにかけることができます。1時間あたりのテスト費用 (Initialize()で計算) に、アプリケーションのテストの準備にかかる時間数を表すEffort Calculator変数を掛けることによって、アプリケーションの準備費用を計算します。修復は不要なので、アクションの複雑度を「--」に設定します。また、別のSelect Case文を使用してアプリケーションの複雑度をテストし、使いにくい「RAG」値をテキストに変換します。
- **黄色のRAG** – アプリケーションの修復が必要です。修復費用を計算するためにGetCost()関数を呼び出します。すぐ後でこの処理について説明します。
- **赤のRAG** – まずアクションRAGをテストします。その状態が赤である場合は、アプリケーションは修復できず、再開または置き換えが必要であることを意味します。次にSelect Case文を使用して、緑のRAGについて行ったようにアプリケーションの複雑度をテストします。ただし、今回はアプリケーションの複雑度に基づいて、任意の置き換え費用を設定します。修復できるアプリケーション (アクションRAGが緑または黄色) については、GetCost()関数を呼び出して修復費用を計算します。
- **ほかのRAG値** – ほかのすべてのRAG値はCase Else文を使用して制御します。この文によって、解析前およびロックされている (ライセンスされていない) アプリケーションを制御します。

以下がGetCost()関数です。この関数をメイン関数内で呼び出して、修復できる黄色および赤のアプリケーションの修復費用を計算しました。例の後で内容を説明します。

Private Function GetCost(app As Application, _ cols As Output) As Decimal Dim remediationCost As Decimal = 0 Dim testingCost As Decimal = 0 ' 1.Using the triggered algorithms, get the algorithm with
以下の注は、前の例に含まれるコメントの番号に対応しています。

1.現在のアプリケーションのWindows 7 TriggeredRulesプロパティを使用します。TriggeredRulesproperty.このプロパティはTriggeredRuleオブジェクトのコレクションで、Windows 7のための解析中にアプリケーションによってトリガーされるすべてのアルゴリズムを表します。このコレクションから最も困難な修復アクションを持つアルゴリズムを取得します。それを使用してアプリケーションの修復費用を計算します。

2.CustomField3にアルゴリズムの修復アクションの難易度を表示します。CustomField3。

3次にSelect Case文を再度使用してアプリケーションの複雑度をテストします。複雑度に応じて異なる処理を提供します。複雑なアプリケーションの制御方法を説明します。

- 最初に、もう1つのSelect Case文を使用して、手順1で取得したアルゴリズムに関連付けられているアクションの難易度をテストします。次に、アクションの難易度別に修復費用を計算します。この計算は (Initialize()で計算した) 1時間あたりの修復費用に、対応するアクション難易度のアプリケーションの修復にかかる時間を表すEffort Calculator変数を掛けることによって行います。
- 次に、アクションRAGが黄色かどうかを確認します。黄色の場合は、アプリケーションの修復後に追加のテストが必要であることを意味するからです。アクションRAGが黄色の場合のテスト費用の計算は、(Initialize()で計算した) 1時間あたりのテスト費用に、複雑なアプリケーションのテストにかかる時間を表すEffort Calculator変数を掛けることによって行います。

複雑度が標準および単純のアプリケーションのコードは複雑なアプリケーションのコードと似ていますが、それぞれ、標準および単純のアプリケーションのEffort Calculator変数を毎回選択します。

4.最後に、計算した修復とテストの費用をアプリケーションのUAT準備費用に追加し、これを戻り値に設定します。

アプリケーションによってトリガーされるすべてのアルゴリズムに関連付けられたアクションを考慮に入れて修復費用を計算する例について、AppDNAに付属するサンプルシナリオを参照してください。

グループ化Forward Pathレポート

Oct 16, 2015

このトピックでは、アプリケーションのグループ化に使用できるForward Pathの高度な機能の概要について説明します。(特定のプラットフォームに対する展開の適切性など) スクリプトに定義するカテゴリ別、またはアプリケーションが属するAppDNAアプリケーショングループ別にアプリケーションをグループ化できます。アプリケーションの値をグループレベルで集計できます。たとえば、各グループの小計を作成し、レポートレベルで合計を作成します。これは、たとえば、アプリケーショングループが事業部門を表す場合、事業部門別にアプリケーションをグループ化し、各グループの小計を表示するForward Pathレポートを作成できるということを意味します。

以下の図は、Windows 7およびApp-VレポートのRAG状態に基づいてアプリケーションをグループ化する、Forward Pathレポートの抜粋です。グループごとに、そのグループ内のアプリケーションと共に修復費用が表示されます。各グループを展開して含まれるアプリケーションを表示できます。最上位の合計行にはレポート全体の合計が表示されます。

#	Group	Cost	Count	Link
	Total	\$982.00	5	
1	App-V	\$170.00	1	More information
2	Retire	\$713.00	1	More information
3	Windows 7	\$99.00	3	More information

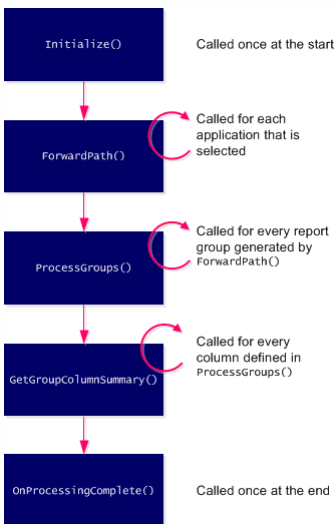
#	Application	Manufacturer	Version	Outcome	Size	Cost
1	Hardcopy Pro	Desksoft	2.21	Windows 7 OK	G	\$33.00
2	Citrix ICA Client	Citrix Systems, Inc.	9.00	Windows 7 OK	G	\$33.00
3	BBC Ticker	BBC	1.0.1.7	Windows 7 OK	G	\$33.00

このレポートを生成するForward Pathシナリオを、以下の例で構築します。例をできるだけシンプルにするために、各アプリケーションの修復費用はハードコードしたものを使用します。実環境では、アプリケーションの複雑度と必要な修復に基づいてこの値を計算することになるでしょう。この方法で費用を計算する例などについては、「[Forward PathシナリオでのEffort Calculator変数の使用](#)」を参照してください。

グループ化Forward Pathレポートのシナリオでは、一般的に、以下のForward Path標準関数を実装します。

- **Initialize()** - スクリプトの開始点で、AppDNAによりこの関数が自動的に1回呼び出されます。通常、この関数は変数を初期化します。
- **ForwardPath()** - これはすべてのForward Pathシナリオに実装が必要な標準関数です。レポートの実行時に選択される各アプリケーションに対して、AppDNAによりこの関数が1回呼び出されます。グループ化Forward Pathレポートでは、アプリケーションを分類するカテゴリ (レポートグループ) がこの関数によって作成されます。レポートグループはコード内のロジックによって、またアプリケーションが既に属している[アプリケーショングループ](#)に基づいて作成できます。
- **ProcessGroups()** - ForwardPath()関数により生成される各レポートグループに対して、AppDNAによりこの関数が1回呼び出されます。この関数は、グループレベルのレポート列とその値を定義します。
- **GetGroupColumnSummary()** - ProcessGroups()関数により定義される各列に対して、AppDNAによりこの関数が1回呼び出されます。通常、この関数はレポートレベルの合計を定義します。
- **OnProcessingComplete()** - これはオプションの関数で、ほかの処理がすべて完了するとAppDNAにより呼び出されます。この関数を使用して、レポートが表示される前の最終処理を実行できます。

以下の図は、レポート実行時にどのように関数が呼び出されるかを示しています。図の後で、高度な機能それぞれの仕様と、前の「概要」に示したレポートの作成例について説明します。



注: このトピックの例の一部では、長い行を複数行に分割するためにアンダースコア () 表記を使用します。これにより、例のコードスニペットがPDF上で正しく表示されます。この表記については、[MSDNライブラリ](#)を参照してください。

Initialize()

この関数をシナリオに指定すると、スクリプトの開始点で、AppDNAによりInitialize()関数が自動的に1回呼び出されます。パズフレーズInitialize()関数には以下のシグネチャが必要です。

```
Public Overrides Sub Initialize() ' Enter your code here.End Sub
```

この例ではInitialize()関数を使用して、アプリケーションをグループレベルで集計するための、アプリケーション値を格納する変数を初期化します。ただし、シナリオを通して使用する変数を最初に宣言する必要があります。これらの変数は複数の関数で使用するため、以下のようにスクリプトの開始点で (Initialize()関数の前に) 定義します。

```
' Declare a Dictionary variable to store the remediation ' costs for each application in the group.Private Dim costs As Dictionary(Of String, List(Of Integer)) _ = New Dictionary(Of String, List(Of Integer)) ' De
```

この例では、costsと呼ばれるDictionary変数を宣言しました。この.NETの標準クラスのドキュメントについては、[MSDNライブラリ](#)を参照してください。ディクショナリ変数はキーと値のコレク

ションを格納できます。この例で、キーは（レポートグループ名の格納に使用する）文字列で、値は（レポートグループに含まれるすべてのアプリケーションの修復費用の格納に使用する）整数のListです。Listクラスのドキュメントについては、[MSDNライブラリ](#)を参照してください。Listclass

ディクショナリと同様に、これから作成するレポートグループの名前を格納する、3つの文字列値を宣言しました。

これで、Initialize()関数を実装する準備ができました。Initialize()function次のようになります。

```
Public Overrides Sub Initialize() costs.Add(win7group, New List(Of Integer)) costs.Add(appvgroup, New List(Of Integer)) costs.Add(othergroup, New List(Of Integer)) End Sub
```

この例では、costsディクショナリ変数に対し、3つのレポートグループのそれぞれについて1つの項目を追加しました。レポートグループの名前を格納するために前に宣言した3つの文字列変数を使用して、項目キーを指定しました。

ForwardPath()

パスフレーズForwardPath()関数は、すべてのForward Pathシナリオに実装が必要な標準関数です。パスフレーズForwardPath()関数には以下のシグネチャが必要です。

```
Public Function ForwardPath(ByVal currentApplication As Application) As OutputEnd Function
```

この例では、アプリケーションを3つのレポートグループに分類します。Windows 7のRAG状態が緑のアプリケーションは「Windows 7」レポートグループへ、App-VのRAG状態が緑のアプリケーションは「App-V」レポートグループへ、残りのアプリケーションは「Retire」レポートグループへ追加します。各アプリケーションについて、ランダムなハードコードされた数字をディクショナリに追加します。これはアプリケーションの修復費用を表します。

```
Public Function ForwardPath(ByVal currentApplication _ As Application) As Output Dim result As New Output() ' Is the application green for Windows 7?If (currentApplication.Modules.Windows7.RAG = F
```

Windows 7およびApp-VレポートのRAG状態に基づき、アプリケーションを... Then ... Else文を使用して3つのレポートグループに分割したことに注目してください。レポートグループは、アプリケーションが属するアプリケーショングループに基づいて作成することもできます。このトピックの後の例で、その方法について説明します。

注：同じアプリケーションを複数のグループに追加することができます。これを行うと、レポートを実行したときにアプリケーションを追加した各グループ内にそのアプリケーションが表示され、その値が各グループの合計に集計されます。この結果、アプリケーションの値がレポートの合計に複数回追加される可能性があります。レポートによっては、誤解を招く可能性があります。アプリケーションを意図せずに複数のグループに追加しないようにするかどうかは、スクリプト作成者次第です。

ProcessGroups()

この関数をシナリオに指定すると、AppDNAがProcessGroups()関数をForwardPath()関数によって生成される各レポートグループで呼び出します。通常、ProcessGroups()関数を使用してForward Pathレポートにグループレベルで表示される列を定義します。

パスフレーズProcessGroups()関数には以下のシグネチャが必要です。

```
Public Overrides Sub ProcessGroup(group As _ ForwardPathReportGroup) ' Enter your code here.End Sub
```

Notice that theForwardPathReportGroupオブジェクトがこの関数に渡されることに注目してください。これは現在のレポートグループを表します。ここでは2つのプロパティがあります名前（グループの名前を保存する文字列）とCustomColumns（文字列のディクショナリ）です。Citrix Web Interface管理コンソールのCustomColumnsプロパティを使用して、グループレベルで表示される列の名前とその値を指定します。

例：

```
Public Overrides Sub ProcessGroup(group As _ ForwardPathReportGroup) ' 1. Define a report group column to show the total ' cost for the applications in the group and format it ' as currency.group.Column
```

3つの列を定義したことに注目してください。

1. これによりCost列が定義されます。この列に、各グループのアプリケーションの修復費用の合計が表示されます。費用合計を取得するために、List.Sum()メソッドを使用して、costsディクショナリ変数に格納されているグループのすべての費用値を集計します。パスフレーズListクラスにはほかの集計関数もあり、（たとえば）格納されているグループの値の平均、最小、または最大値を得ることができます。Listクラスのドキュメントについては、[MSDNライブラリ](#)を参照してください。Listクラス列の形式プロパティを(0-C)（値は通貨であることを指定）に設定したことに注目してください。また、Cultureプロパティの値をen-USに設定して、通貨記号がアメリカドルであることを指定しました。出力の書式設定について詳しくは、「[Forward Pathレポートの並べ替えと形式](#)」を参照してください。
2. これによりCount列が定義されます。この列に、各グループのアプリケーション数が表示されます。今回は、List.Count()メソッドを使用して、costsディクショナリ変数に格納されているグループの（アプリケーションを表す）項目数を取得します。
3. これによりLink列が定義されます。この列に、ハードコードされたハイパーリンクを定義するHTMLコードが含まれます。これはHTMLコードを列に含められることを示す、極端に単純化した例です。

注：グループ名を表示する列はAppDNAにより自動的に生成されます。これはGroup列と呼ばれます。

GetGroupColumnSummary()

この関数をシナリオに指定すると、AppDNAによりGetGroupColumnSummary()関数がProcessGroups()関数で定義した各列で自動的に呼び出され、「Group」列（グループ名を保存します）が自動的に生成されます。パスフレーズGetGroupColumnSummary()関数には以下のシグネチャが必要です。

```
Public Overrides Function GetGroupColumnSummary(groupColumnName _ As String) As String ' Enter your code here.End Function
```

列名が関数に文字列として渡され、関数が文字列を戻すことに注目してください。この文字列は、レポートの合計行の対応する列に挿入されるテキストです。

Citrix Web Interface管理コンソールのGetGroupColumnSummary()関数を使用して、レポートレベルの値を定義します。次に例を示します。

```
Public Overrides Function GetGroupColumnSummary(groupColumnName _ As String) As String If groupColumnName = "Group" Then ' Put the text "Total" in the automatically-generated "Group" colum
```

AppDNA calls this function once for each group column we defined in theProcessGroups()関数で定義した各グループ列および自動生成のGroup列に対して、AppDNAによりこの関数が1回呼び出されます。したがって、If ... Then ... Else文を使用して処理中の列がどれかをテストします。各列に対して実行する処理を以下に示します。

1. これは自動生成のGroup列です。この列については、単に「Total」というテキストを生成します。テキストがぐで囲んだことに注目してください。これは標準のHTMLタグで、テキストが太字でレンダリングされるべきであることを指定します。どの列でもHTMLコードを使用できます。
2. これはCost列です。レポートの合計を取得するために、作業変数を宣言します。次に、グローバルなcostsディクショナリ変数のすべての項目を反復処理し、その合計値を作業変数に追加して、その値を戻します。
戻り値は文字列です。費用の値を通貨として書式設定するためにString.Format()メソッドを使用し、アメリカドルの通貨記号を指定するためにCultureInfoクラスを使用しました。文字列のフォーマットについて詳しくは、[MSDNライブラリ](#)を参照してください。
3. Count列については、同様のテクニックを使用してレポートの合計値を生成しました。
4. Link列は空白のまま残りました。

これで、このトピックの冒頭のForward Pathレポートを生成するために使用したシナリオの、コードの最終部分に到達しました。このトピックの後で、アプリケーションが属しているAppDNAアプリケーショングループに基づいて、レポートグループを作成する方法について説明します。

OnProcessingComplete()

この関数をシナリオに指定すると、ほかの処理がすべて完了するとAppDNAにより `OnProcessingComplete()` が自動的に呼び出されます。この関数を使用して、レポートが表示される前の最終処理を行うことができます。

パスフレーズ `OnProcessingComplete()` 関数には以下のシグネチャが必要です。

```
Public Overrides Sub OnProcessingComplete() ' Enter your code here.End Sub
```

ここでは、アプリケーションが既に属している **アプリケーショングループ** に従ってアプリケーションをグループ化するように、シナリオを変更します。グループのメンバーではないアプリケーションがある場合は、「Ungrouped」のカテゴリに表示されます。

シナリオ内では `Application.Groups` プロパティを通じて、アプリケーションが属しているグループを見つけます。アプリケーションは複数のグループに属することができます。前に説明したように、すべてのグループをレポートに追加すると、アプリケーションがその属している各グループの下に表示されます。したがって、スクリプトの作成方法によっては、アプリケーションの修復費用がレポートの合計に複数回追加される可能性があります。

以下の関数にはそのしくみを説明する詳しいコメントがつけられています。

```
Public Function ForwardPath(ByVal currentApplication _ As Application) As Output Dim result As New Output() If (currentApplication.Modules.Windows7.RAG = RAG.Green) Then result.Outcome = "Win
```

グループ化レポートを、グループ化なしで表示したい場合があります。これを行うには、オペレータコンソールの `ForwardPathReportSettings.DisplayGroups` プロパティを使用します。このプロパティは、グループ制御のコードをシナリオに追加すると自動的に `True` に設定されます。ただし、レポート内のグループ表示を隠すように、シナリオ内で明示的に `False` に設定することができます。

パスフレーズ設定オブジェクト (`ForwardPathReportSettings` タイプ) は、このシナリオ全体で使用できます。通常、このプロパティは以下のように `Initialize()` 関数で設定します。

```
Settings.DisplayGroups = false
```

グループ化なしで再表示するには、この行をコメントアウトするだけで済みます。

Forward Pathレポートの並べ替えと形式

Oct 16, 2015

ここでは、Forward Pathレポートの並べ替え順序とアプリケーションデータの書式設定を制御する方法について説明します。

Forward Pathレポートのアプリケーション一覧を、任意の列のデータに基づいて並べ替えることができます。たとえばアプリケーションを、名前、製造元、RAG状態、またはほかの任意の列の値で並べ替えることができます。

通常、並べ替え順序は設定オブジェクトで設定します。このオブジェクトはこのシナリオ全体で使用できます。パスフレーズ設定オブジェクトはForwardPathReportSettingsの種類です。(Forward Pathロジックエディターの右側にある)プロパティエクスプローラーで、このオブジェクトのプロパティを確認できます。

通常、並べ替え順序はInitialize()関数で設定します。たとえば、以下のコードはアプリケーションを [RAG] 列の値で並べ替えます。

```
Public Overrides Sub Initialize() ' Sort the report on the RAG column.Settings.ApplicationSortBy = "Rag" End Sub
```

並べ替え順序はデフォルトで昇順 (小さい値から大きい値へ) です。RAG値の場合は、緑、黄、赤の順になります。逆の順 (赤、黄、緑の順) にするには、以下のような行を追加します。

```
Settings.ApplicationSortDescending = true
```

グループ化レポートでは、グループの並べ替え順序を以下のように設定できます。

```
Settings.GroupSortBy = "Cost"
```

これにより、デフォルトで [Cost] 列の値で昇順にグループが並べ替えられます。以下のようにして降順に変更できます。

```
Settings.GroupSortDescending = true
```

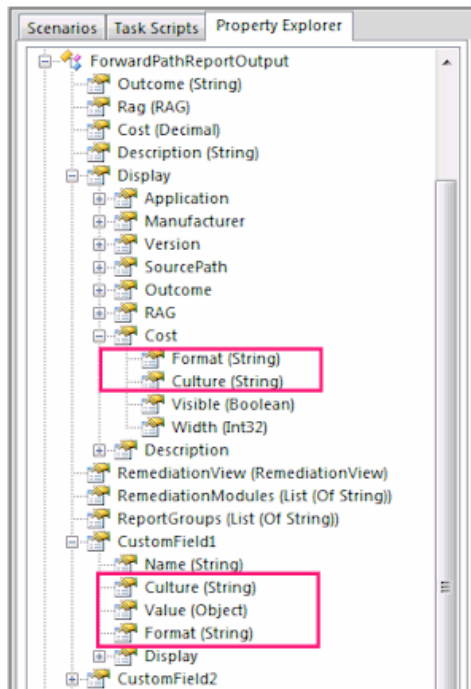
注：並べ替え規則は文化によって異なります。デフォルトでは、ユーザーの地域の設定により定義される規則が使用されません。ただし、この動作は以下のようにCultureプロパティで上書きできます。

以下のプロパティを使用して、レポート列の書式を設定できます。

- **Format** – データの書式設定を指定するために使用します。たとえば、数値をパーセント値または通貨として書式設定できます。標準の**複合書式設定**文字列で書式設定できます (インデックスが0である項目のみ使用できます)。後で例を使用して説明します。
- **Culture** – 通貨および10進値を書式設定するとき、デフォルトではユーザーの地域の通貨記号および小数点記号が使用されます。ただしこれは、国際的な環境で作業する場合、エンドユーザーのデバイスのロケータ設定にしたがって通貨記号が変化することを意味する可能性があります。該当するプールを指定するために、前述のsp-listコマンドを使用することができます。Cultureプロパティを使用して、たとえば、レポートを表示するデバイスの地域の設定に応じて通貨記号が変更されないように、デフォルトの動作を上書きできます。ISO 639の言語に関連付けられている2つの小文字のカルチャコードと、ISO 3166の国または地域に関連付けられている2つの大文字のサブカルチャコードを組み合わせて、カルチャを指定します。たとえばアメリカドル記号を使用するには、値をen-USに設定します。。後で例を使用してさらに説明します。

以下のプロパティエクスプローラーのスクリーンショットでは、標準の [Cost] 列および最初の [CustomField] 列のプロパティがハイライトされています。([Outcome] 、 [RAG] 、 [Cost] 、 および説明列などの) 標準列のプロパティが表示ノードの下に表示されることに注目してください。一方、 [CustomField] 列では、これらのプロパティ

は [CustomField] そのものの下にあります。



注：デフォルトでは [Cost] 列は通貨として書式設定されます。

標準の複合書式設定文字列で書式設定できます（インデックスが0である項目のみ使用できます）。たとえば以下のようにして、列をパーセンテージとして書式設定できます。

```
result.CustomField1.Format = "{0:P}"
```

これにより、出力では列に格納されている数値が100倍され、パーセンテージを表す文字列に変換されます。たとえば、イギリスでデフォルトのイギリスのカルチャ設定を使用してレポートを実行すると、0.05という値は「5.00%」と表示されます。

以下のようにして、列を通貨値として書式設定できます。

```
result.CustomField1.Format = "{0:C}"
```

これにより、小数点以下2桁までの数値と通貨記号が表示されます。通貨記号はデフォルトでユーザーの地域設定から取得されます。たとえば、イギリスの地域の設定を使用すれば「£75.00」となります。これを上書きするには、Cultureプロパティを使用します。

ISO 639の言語に関連付けられている2つの小文字のカルチャコードと、ISO 3166の国または地域に関連付けられている2つの大文字のサブカルチャコードを組み合わせて、カルチャを指定します。たとえば、アメリカ英語はen-USです。

たとえば、次のようにしてCultureプロパティを日本語に設定できます。

```
result.CustomField1.Culture = "ja-JP"
```

列が通貨である場合は、円記号が表示されます。

以下のようにしてカルチャをスペイン語に設定できます。

```
result.CustomField1.Culture = "es-ES"
```


外部データ

Oct 16, 2015

外部データとは、AppDNAの外部で生成されたアプリケーションの互換性および修復のデータを指します。

AppDNAでは、分析中にこの外部データを使用し、一致するアプリケーションを外部データソースから探します。分析中のアプリケーションに一致するアプリケーションレコードが外部データソースで見つかり、外部データソースに適用される信頼レベルに応じて、アプリケーションの標準RAG値が上書きされるか、オーバーレイまたはアイコンが標準RAGアイコンに追加されます。

注：外部データソースの情報はCitrix単独で検証されたものではないことに注意してください。

以下の項目を構成できます。

- どのように外部データをAppDNA内のアプリケーションにマッチさせるか。たとえば、大文字と小文字を区別するかどうかやスペースをどう処理するかなどです。
- データソースの信頼レベル。信頼レベルにより、外部データに影響を受けるアプリケーションのRAG状態の表示方法が制御されます。
- 外部データソースに関連付ける追加レポート。

現在、AppDNAには、次の2種類の外部データが用意されています。

レディネスリスト – MicrosoftからIT専門家に提供されるアプリケーションの互換性一覧に基づいています。この一覧で互換性があるとされているアプリケーションは、ソフトウェアの発行元またはMicrosoft Windowsロゴテストプログラムにより、対象のプラットフォームで正常に動作することが確認されています。AppDNAでは、AppDNA内のアプリケーションとこの一覧のアプリケーションを名前、製造元、およびバージョンで照合します。この照合では、デフォルトで大文字と小文字が区別されず、空白が無視されます。ただし、この設定は構成できます。レディネスリストに由来する外部データアイコンが示す内容は次のとおりです。

- 緑 – アプリケーションは、対象バージョンのWindowsと互換性があるとされています。
- 黄 – アプリケーションは、アップグレードしないと、対象バージョンのWindowsで動作しない可能性があります。
- 赤 – アプリケーションは、対象バージョンのWindowsと互換性がありません。

PCA (shim) データベース – オペレーティングシステムに組み込まれているプログラム互換性アシスタント (PCA) の一部である、Microsoftのシステムアプリケーション互換性データベースに基づいています。レディネスリストとは異なり、AppDNAはアプリケーションを名前、製造元、およびバージョンで照合しません。代わりに、アプリケーション内の実行可能 (.exe) ファイルとデータベースに登録されている実行可能ファイルを照合します。PCAデータベースに由来する外部データアイコンが示す内容は次のとおりです。

- 緑 – アプリケーションには、PCAが自動的にshimを適用する互換性の問題があります。修復レポートビューには、shimの名前が表示されます。
- 黄 – アプリケーションには、深刻とは見なされない互換性の問題があります。デフォルトでは、この問題によって、実行時にPCAによるソフトブロックメッセージが表示され、ユーザーエクスペリエンスが中断されます。
- 赤 – アプリケーションには、実行時にPCAによるブロック (ハードブロックメッセージと呼ばれます) を引き起こす深刻な互換性の問題があります。

データソース	適用製品
Microsoft Vistaアプリケーションのレディネスリスト	Windows Vista SP2、Windows Server 2008 SP2
Microsoft Vista shimデータベース	Windows Vista SP2、Windows Server 2008 SP2
Microsoft Windows 7アプリケーションのレディネスリスト	Windows 7 SP1、Windows Server 2008 R2 SP1
Microsoft Windows 7 shimデータベース	Windows 7 SP1、Windows Server 2008 R2 SP1
Microsoft Windows 8アプリケーションのレディネスリスト	Windows 8、Windows 8.1、Windows Server 2012、Windows Server 2012 R2
Microsoft Windows 8 shimデータベース	Windows 8、Windows 8.1、Windows Server 2012、Windows Server 2012 R2

1. AppDNAのメニューで、[Configure]、[External Data]の順に選択します。
注：この画面で設定を変更するには、管理者の役割を持つAppDNAユーザーとしてログオンする必要があります。
2. [External Data Administration] 画面の外部データソースの一覧で、構成するデータソースを選択します。
3. [Configuration] で、データソース内のアプリケーションとAppDNAポートフォリオ内のアプリケーションを照合するときに使用するオプションを選択します。
4. [Data Source Context] セクションで、外部データソースを適用するレポートを選択します。
5. [Data Source Trust Level] セクションで、このデータソースに適用する信頼レベルを選択します。
6. [Save] をクリックして変更を保存します。
7. 変更をアプリケーションポートフォリオに適用する場合は、メインツールバーの[Apply External Data] をクリックします。
これにより対象アプリケーション用の外部データの既存のジャーナルエントリが削除され、外部データの新しいジャーナルエントリが作成されます。アプリケーションを初めて分析するときに、外部データが自動的に適用されます。したがって、一般にこのツールを使用する必要があるのは、データソース構成または信頼レベルを明確に変更したときだけです。

AppDNAではジャーナルメカニズムを使用して外部データを制御します。外部データがアプリケーションポートフォリオに適用されるとき、一致するアプリケーションとレポートの組み合わせごとに、外部データの特別なジャーナルエントリが作成されます。必要であれば、[Journal] 画面で個々の外部データのジャーナルエントリを削除できます。




アプリケーションのRAG状態についてAppDNAのレポートビューで表示できるのは、ジャーナルメカニズムから得られるアイコン1つのみです。つまり、外部データのジャーナルエントリが作成された後で、そのエントリと同じアプリケーションとレポートの組み合わせに対して [Compatible]、[Known issues]、または [Incompatible] の手動のジャーナルエントリを追加した場合は、レポートビューでは、アプリケーションのRAG状態が手動のジャーナルエントリのアイコンによって上書きされて、外部データのジャーナルエントリのアイコンは表示されません（テストに関するメモを記録するなどの目的で、手動のジャーナルエントリを追加したいが、それによってアプリケーションのRAG状態が上書きされるのを避けたい場合は、[Unknown] ジャーナルエントリを使用します）。

アプリケーションの個別の外部データエントリを標準のジャーナルエントリに変換できます。これは、アプリケーションの RAG 状態が対応する互換性（ジャーナル）アイコンによって上書きされることを意味します。

1. 関連するレポートの [Application Issues] レポートビューまたは [Application Actions] レポートビューを開きます。
2. 外部データエントリがあるアプリケーションの名前をクリックします。
アプリケーションの修復レポートビューが開きます。
3. レポートビューの概要セクションにあるジャーナルエントリの一覧で、変換する外部データエントリを特定します。
4. 右側の列にある [Accept] をクリックします。

外部データソースの構成

Oct 16, 2015

1. AppDNAのメニューで、 [Configure] 、 [External Data] の順に選択します。
2. [External Data Administration] 画面の外部データソースの一覧で、構成するデータソースを選択します。
3. [Configuration] で、データソース内のアプリケーションとAppDNAポートフォリオ内のアプリケーションを照合するとき使用するオプションを選択します。
 - **Ignore Whitespace** - アプリケーションの照合時にAppDNAで余分な空白とタブ文字を無視する場合は、このチェックボックスをオンにします。これがデフォルトの設定です。アプリケーションの照合時に空白を意味のあるものとして扱うには、このチェックボックスをオフにします。
 - **Case Insensitive** - 大文字と小文字を区別しないでアプリケーションを照合するには、このチェックボックスをオンにします。これがデフォルトの設定です。大文字と小文字を区別してアプリケーションを照合するには、このチェックボックスをオフにします。
4. [Data Source Context] セクションで、外部データソースを適用するレポートを選択します。
5. [Data Source Trust Level] セクションで、このデータソースに適用する信頼レベルを選択します。
 -  **High Trust** - 外部データソースで提供される情報に基づくRAG状態で、一致するアプリケーションの元のRAG状態が上書きされます。たとえば、標準またはカスタムRAGが黄色で外部データソースに基づくRAGが緑の場合は、状態は緑になります。
 -  **Medium Trust** - これは、外部データに基づくRAG状態の表示のデフォルト設定です。一致するアプリケーションの元のRAG状態が保持され、外部データソースにより提供されるRAGは左上に重ねて表示されます。
 -  **Low Trust** - 一致するアプリケーションの元のRAG状態が保持され、外部データソースにより提供されるRAGは左上に小さなアイコンで表示されます。
6. メインツールバーで、 [Save] をクリックして変更を保存します。
7. 変更をアプリケーションポートフォリオに適用する場合は、メインツールバーの [Apply External Data] をクリックします。

ジャーナルエントリへの変換

Oct 16, 2015

アプリケーションの個別の外部データエントリを標準のジャーナルエントリに変換できます。これは、アプリケーションのRAG状態が対応する互換性（ジャーナル）アイコンによって上書きされることを意味します。

1. 関連するレポートの [Application Issues] レポートビューまたは [Application Actions] レポートビューを開きます。
2. 外部データエントリがあるアプリケーションの名前をクリックします。そのアプリケーションのRemediationレポートビューが表示されます。
3. レポートビューの概要セクションにあるジャーナルエントリの一覧で、変換する外部データエントリを特定します。
4. 右端の列で [Accept] をクリックします。

ライセンス

Oct 16, 2015

AppDNAはCitrixライセンスサーバーシステムと統合されました。新しいAppDNAライセンスはすべてwww.citrix.comで発行されます。Citrixライセンスサーバーシステムに精通している場合、ほかのCitrix製品のライセンスの使用法と比較して、AppDNAライセンスの使用法にはいくつか重要な違いがあることがわかります。

このトピックでは、AppDNAライセンスの主な特徴、ほかのCitrix製品のライセンスとの違い、およびAppDNAの以前のバージョンとの互換性の概要について説明します。その後で、詳細情報が記載されたトピックへのリンクを挙げます。

Citrix XenDesktopおよびXenAppのPlatinum製品版ライセンスにより、AppDNAのすべての機能へのアクセスが提供されます。Platinum評価版、デモ、非再販用のライセンスでは、アクティブ化はサポートされません。または、AppDNA StandardエディションまたはEnterpriseエディションとして、AppDNAのライセンスを単独で有効にすることができます。AppDNAのライセンスには以下の機能があります。

- 全エディション共通：
 - AppDNAのライセンスはAppDNAデータベースに適用されます。これは、複数のAppDNAデータベースがある場合、それぞれが個別にライセンスされることを意味します。
 - 購入済みライセンスについては、購入した上限までアプリケーションのロックは分析中に自動で解除されます。このとき、ライセンスが有効な機能に対してアプリケーションのロックが解除されます。たとえば、AppDNA Standardエディションを購入済みであるとして、デスクトップアプリケーションのロックが解除されるとき、デスクトップアプリケーションに適用されないWebApp Compatibility機能を除いて、Standardエディションに付属するレポートのすべてに対してアプリケーションのロックが解除されます。
 - 上限に達した後は、さらに数個（ライセンスされた上限の10%まで）のアプリケーションのロックを手動で解除できます。このような追加の割り当てのことを予備ライセンスと呼びます。
 - AppDNAライセンスは、AppDNAライセンスサーバーがインストールされているマシンに関連付けられます（これは通常、AppDNAサーバーがインストールされているマシンです）。AppDNAライセンスサーバーをあるマシンから別のマシンに移動する場合は、AppDNAデータベースのライセンスを移動する必要があります。
- XenDesktopまたはXenAppのPlatinumエディション：
 - AppDNAを既に購入している場合は、データベース上の既存のライセンスに加えてXenDesktopまたはXenAppのPlatinumライセンスをアクティブ化できます。
 - 初めてPlatinumライセンスをアクティブ化するときとAppDNAをアップグレードするときに、有効なSubscription Advantageアカウントがあるかどうかチェックされます。
- AppDNA StandardエディションおよびEnterpriseエディション：
 - AppDNA StandardエディションおよびEnterpriseエディションでは、Windowsクライアントやサーバーなど、さまざまな対象技術に対するレポートのライセンスが提供されます。EnterpriseエディションにはStandardエディションのすべての機能が含まれ、さらに、サーバーベースコンピューティング機能（XenAppホステッドアプリケーションの分析用）と、仮想化機能（App-Vの互換性分析用）が提供されます。ライセンスは、アプリケーションレポートおよび修復レポートを表示できるアプリケーションの数を制御します。
 - これらのエディションには試用ライセンスが組み込まれており、評価版ライセンスまたは製品版ライセンスを適用して使用できます。
 - AppDNAをインストールして使用し始めた後で、StandardからEnterpriseにアップグレードするか追加のライセンスを購入するなどして使用権をアップグレードすると、アプリケーションの数を増やすことができます。www.citrix.comから追加のライセンスをダウンロードしたら、AppDNA環境構成ウィザードでアクティブ化します。
 - 評価版のライセンスを持っている場合は、AppDNAの [Apply Licenses] 画面でレポートを表示するアプリケーションを

選択できます。このプロセスは、アプリケーションのロック解除と呼ばれます。代わりに、分析中にアプリケーションのロックを自動的に解除することもできます。

- AppDNAライセンスは、www.citrix.comおよびAppDNA環境構成ウィザードで管理します。
 - 使用可能な購入済みのAppDNAライセンスの数は、ユーザーの数ではなくアプリケーションの数に関連します。AppDNAのライセンスは、AppDNAを使用できるユーザーの数を制限しません。
 - AppDNAのライセンスは、内部的にはCitrixライセンスサーバーではなくAppDNAライセンスサーバーによって制御されます。つまり、Citrixライセンスサーバーコンポーネントを個別にインストールする必要はありません。
 - AppDNAライセンスファイルはCitrixライセンス管理コンソールにインポートできますが、AppDNAのライセンス処理は影響を受けません。同様に、AppDNAのライセンスファイルはライセンス管理コンソールでは管理しません。
 - AppDNA StandardエディションおよびEnterpriseエディション：AppDNAライセンスは、常にほかのCitrix製品のライセンスとは別にダウンロードします。
-
- AppDNA 6.0以前から最新リリースのAppDNAにアップグレードする場合、古いライセンスはデータベースのアップグレード時にCitrixライセンスサーブスキームで機能するように自動的にアップグレードされます。
 - AppDNA 6.0以前用に発行されたライセンスファイル（これらのファイルの拡張子は.clfです）を使用して、AppDNAを直接アクティブ化することはできません。有効な.clfライセンスファイルを持つユーザーは、必要に応じてwww.citrix.comにログインして、既存の使用権と一致する新しいCitrixライセンスをダウンロードできます。
 - www.citrix.comで発行されるAppDNAライセンスを使用する場合は、仮想マシンにAppDNAライセンスサーバーをインストールできます。ただし、www.citrix.com/tryitからダウンロードした評価版のAppDNAは、仮想マシンにインストールすることはできません。
 - 新規インストールの場合は、AppDNAライセンスサーバーはAppDNAサーバーと同じマシンにインストールされます。ただしAppDNAでは、AppDNAライセンスサーバーをAppDNAサーバーと異なるマシンにインストールする既存の構成がサポートされます。
 - www.citrix.comで発行されるライセンスは、AppDNA 6.0以前に対応していません。

検査

Oct 16, 2015

AppDNAのライセンスはAppDNA環境構成ウィザードで検査できます。このウィザードの [Inspect Licenses] ページに、データベースに適用されているライセンスに関する情報が表示されます。このページには2つのタブがあります。

Details – このタブには、上部に全般的なプロパティが表示され、下部にモジュールが表示されます。タブの上部に次のオプションが表示されます。

- **License ID** – これはAppDNAライセンスサーバーによりライセンスに割り当てられる内部IDです。
- **Client ID** – これはAppDNAライセンスサーバーによりデータベースに割り当てられる内部IDです。
- **Installation ID** – これはAppDNAライセンスサーバーによりAppDNAのインストールに割り当てられる内部IDです。
- **Subscription Advantage** – Citrix Subscription Advantageプログラムの有効期限が表示されます。このプログラムの契約の有効期間内であれば、AppDNAの最新リリースへのアップグレードを行うことができます。
- **Production Manager** – Install Captureおよびセルフプロビジョニングを、App-VまたはXenApp向けアプリケーションのパッケージ化に使用することができます。これを行うには、キャプチャを行うマシンへの追加ソフトウェア (AppDNAに付属していないソフトウェア) のインストールが必要になります。

それぞれのモジュールについて、次の情報が表示されます。

- **Module** – モジュールの名前。すべてのモジュールとそのレポートの名前の一覧については、この後の表を参照してください。各モジュールのレポートについて詳しくは、「[標準AppDNAレポート](#)」を参照してください。
- **Limit** – このモジュールのレポートのアプリケーションレポートビューおよび修復レポートビューを表示できるアプリケーションの数。

XenAppおよびXenDesktopのPlatinumライセンスでは、レポートを表示できるアプリケーションの数に制限はありません。ほかの製品版ライセンスでは (評価版を除く)、ライセンスされたアプリケーションの数を超えると、アプリケーションがロックされて、レポートが利用できなくなります。

- **Available** – 使用可能なアプリケーションライセンスの数。
- **Start** – ライセンスを有効にした日付。
- **End** – ライセンスの有効期限。この日付を過ぎるとレポートが表示されなくなります。

License files – データベースに適用されているライセンスファイルが表示されます。

モジュールとレポートの名前

モジュール	Reports
Desktop Compatibility Manager (DCM)	Windows 8/8.1 Windows 7 SP1
SBC Manager	XenApp Hosted
WebApp Compatibility Manager	Internet Explorer (IE) Firefox WorxWeb

Virtualization Manager モジュール	App-V Reports
Server Compatibility Manager	Windows Server 2012/2012 R2 Windows Server 2008 R2 SP1
Custom Reports	

ライセンスを検査するには:

1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、 [プログラム] 、 [Citrix AppDNA] 、 [Management Tools] 、 [Configure AppDNA] の順に選択します。
2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、 [Licensing] を選択し、 [Next] をクリックします。
3. [License Management] ページで、 [Inspect] を選択し、 [Next] をクリックします。
4. [Choose Database] ページで、ライセンスを検査するデータベースを選択し、 [Next] をクリックします。

アクティブ化

Oct 16, 2015

ライセンスのアクティブ化は、たとえば評価モードで実行した後で製品版ライセンスを購入したり、AppDNAをStandardエディションからEnterpriseエディションにアップグレードしたりした場合に、ライセンスファイルを特定のAppDNAデータベースに適用するプロセスです。たとえばレポートを表示できるアプリケーションの数を増やすために、ライセンス済みのデータベースに対して追加のライセンスファイルをアクティブ化できます。XenDesktopまたはXenAppのPlatinumライセンスで、AppDNAデータベースをアクティブ化することもできます。

ライセンスをアクティブ化するとき、ライセンスはAppDNAライセンスサーバーにインポートされ、特定のAppDNAデータベースに適用されます。

注：製品版ライセンスをアクティブ化すると、分析後もまだロックされているすべてのアプリケーションのロックを解除する十分なアプリケーションライセンスがある場合に、自動的にアプリケーションのロックが解除されます。空いているアプリケーションライセンスが十分でない場合には、後で [\[Apply Licenses\] 画面](#) でアプリケーションのロックを解除する必要があります。

ライセンスファイルをアクティブ化するには：

1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、[Citrix AppDNA]、[Management Tools]、[Configure AppDNA] の順に選択します。
2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、[Licensing] を選択します。
3. [License Management] ページで、[Activate] を選択します。
4. [Choose Database] ページで、ライセンスをアクティブ化するデータベースを選択します。
5. AppDNAの評価版または商用ライセンスをアクティブ化するには、[Activate now] をクリックします。
 1. [License server machine] の右側の [Copy] をクリックして、www.citrix.comに貼り付けるマシン名をクリップボードにコピーします。
 2. www.citrix.comにログオンし、ライセンスファイルを割り当ててダウンロードします (手順については、<http://support.citrix.com/article/CTX126167>を参照してください)。
重要：複数のCitrix製品を購入した場合は、AppDNAライセンスをほかのCitrix製品のライセンスとは別にダウンロードする必要があります。
 3. ライセンスファイルをダウンロードしたら、[License file] ボックスにその名前と場所を入力します。
6. XenDesktopまたはXenAppのPlatinumライセンスでAppDNAをアクティブ化するには、[Activate a XenDesktop or XenApp Platinum license] をクリックします。
 1. [Machine] ボックスに、XenDesktopまたはXenAppのライセンスサーバーがインストールされているマシンのホスト名またはIPアドレスを入力します。
 2. [Port] ボックスに、ライセンスサーバーのポートを入力します。デフォルトでは27000です。ただし、異なるポートが使用されることがあります。不明な場合は、XenDesktopまたはXenAppの管理者に問い合わせてください。
7. システムチェックが失敗する場合は、「[システムチェックの問題](#)」を参照してください。
8. [Next] をクリックして、ライセンスファイルをアクティブ化します。
アクティブ化が終了し、[\[Apply Licenses\] 画面](#) でアプリケーションのロックを解除する必要がある場合には、ウィザードによりメッセージが表示されます。

適用

Oct 16, 2015

[Apply Licenses] 画面を使用してアプリケーションのロックを解除すると、ライセンスに含まれるレポートのアプリケーションビューおよび修復ビューにアプリケーションを表示できます。これが必要かどうかは、所有しているライセンスの種類によって決まります。

- (評価版または試用版のライセンスではなく) 完全なAppDNAのライセンスを所有している場合には、購入したアプリケーションの上限までAppDNAが分析中に自動的にアプリケーションのロックを解除するので、多くの場合アプリケーションのロックを解除する必要はありません。上限に到達した後は、この画面でさらに数個のアプリケーション (購入済みの上限の10%まで) のロックを解除できます。このような追加の割り当てのことを予備ライセンスと呼びます。
- 評価版または試用版のライセンスを所有している場合には、AppDNAで分析中に自動的にアプリケーションのロックを解除するか、この画面で自分でロックを解除するかを選択できます。AppDNAを評価する場合、通常、ライセンスを所有しているアプリケーションよりも多くのアプリケーションをインポートして、EstateViewおよびEffort Calculatorを使用してアプリケーションポートフォリオの状態の概要を取得します。その後、数個のアプリケーションのロックを解除すると、AppDNAが提供できる個々のアプリケーションについての詳細情報の豊富さを確認できます。AppDNAの自動的な実行に任せるよりも、ロックを解除する必要があるアプリケーションを慎重に選択する方が有効である場合もあります。

[Apply Licenses] 画面を開くには：

- AppDNAのメニューで、[Manage]、[Licenses] の順に選択します。

[Apply Licenses] 画面にポートフォリオ内のアプリケーションが一覧表示され、使用中および未使用のライセンス数が表示されます。これらの各モジュールのレポートには列があり、これらの左側には [Licensing] 列があります。この列はそのモジュールに対してアプリケーションのロックが解除されているかどうかを示します。チェックボックスが空の場合はアプリケーションがロックされ、チェックマークがオンのときはアプリケーションのロックが解除されていることを示します。

ツールバーの [Show all] チェックボックスを使用して、すべてのモジュールのすべてのアプリケーションの表示と、ロックされているアプリケーションのみの表示 (デフォルト) を切り替えます。

AppDNAのライセンスの一般的な情報については、「[ライセンス](#)」を参照してください。

ロックの自動解除により、緑が50%、黄色が25%、赤が25%を目標に、RAG状態に基づいてアプリケーションポートフォリオの代表サンプルのロックが解除されます。

1. AppDNAのメニューで、[Manage]、[Licenses] の順に選択します。
2. [Apply Licenses] 画面のツールバーで、[Auto Unlock] をクリックします。

警告：Webアプリケーションの代わりにデスクトップアプリケーションのロックを解除しないように注意してください。

1. AppDNAのメニューで、[Manage]、[Licenses] の順に選択します。
2. [Apply Licenses] 画面のアプリケーション一覧からロックを解除するアプリケーションを見つけます。
3. ロックを解除する各アプリケーションに対して、表示するレポートを示す列のチェックボックスをオンにします。
4. ツールバーの [Manual Unlock] をクリックします。

移動

Oct 16, 2015

AppDNAライセンスは、AppDNAデータベースおよびAppDNAライセンスサーバーがインストールされているマシンに関連付けられます。AppDNAライセンスサーバーを別のマシンまたは環境に移動する必要がある場合は、次の手順に従って、すべてのAppDNAデータベースのライセンスを移動する必要があります。

AppDNAライセンスサーバーは、AppDNAサーバーを完全インストールすると自動的にインストールされます。そのため、インストール済みのAppDNAサーバーをあるマシンから別のマシンに移動する必要がある場合は、データベースのライセンスを移動する必要があります。AppDNAライセンスサーバーの移動は、通常、新しいマシンにAppDNAサーバーを完全インストールするのと同じくらい簡単です。必要に応じて、AppDNAライセンスサーバーのインストールプログラムを使用できます。ただし、可能な場合には、AppDNAライセンスサーバーをAppDNAサーバーマシンと同じマシンにインストールすることをお勧めします。

注：データベースを別のマシン上のSQL Serverに移動するだけであれば、つまりAppDNAライセンスサーバーの場所に変更がなければ、ライセンスの移動は不要です。

ライセンスを移動するには次の手順に従います。

1. **ライセンス移動トークンのエクスポート**– この手順では、データベースからライセンス移動トークンをエクスポートしてファイルに保存します。この手順の実行中に、新しいAppDNAライセンスサーバーマシンの名前を入力する必要があります。トークンをエクスポートすると、インポート手順を完了するまでデータベースはライセンスがない状態になります。
2. **ライセンス移動トークンのインポート**– この手順は、新しいマシンにAppDNAライセンスサーバーをセットアップした後に行います。この手順では、ライセンス移動トークンをインポートし（これにより、データベースのロックが解除されます）、新しいAppDNAライセンスサーバーに対してライセンスを再度アクティブ化します。

これら2つの手順は、AppDNAライセンスサーバーの移動の影響を受ける各AppDNAデータベースについて行う必要があります。以下では、これらの手順について個別に説明します。

1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、[Citrix AppDNA] 、 [Management Tools] 、 [Configure AppDNA] の順に選択します。
2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、[Licensing] を選択し、[Next] をクリックします。
3. [License Management] ページで、[Transfer] を選択し、[Next] をクリックします。
4. [Transfer License] ページで、ライセンスを移動するデータベースを選択します。
ライセンスを移動するデータベースがデータベースの一覧に表示されない場合は、[Cannot see the database in the list] をクリックして [Enter Database Details] ダイアログボックスを開きます。このダイアログボックスについては詳しくは、「[ライセンスの移動](#)」を参照してください。
5. [Export] をクリックして [Next] をクリックします。
6. エクスポートしたライセンストークンファイルの名前と場所を指定します。
7. 新しいAppDNAライセンスサーバーマシンの名前を指定します。
エクスポートしたライセンストークンはこのマシンに関連付けられます。これは正確に指定する必要があります。そうしないと、データベースが永久に使用できなくなります。AppDNAライセンスサーバーをインストールするマシンの名前がわからない場合は、エクスポートをキャンセルし、マシン名が確実にわかってからもう一度エクスポートを開始してください。
8. [Next] をクリックして、ライセンス移動トークンをエクスポートします。その後、新しいAppDNAライセンスサーバーの名前を正しく指定したかどうかを確認するメッセージが表示されます。

9. エクスポートが完了したら、[Finish] をクリックしてウィザードを終了します。

次にライセンス移動トークンをインポートする必要があります。また、次に説明するように、必要に応じてライセンスを再アクティブ化する必要があります。

この手順は、AppDNAライセンスサーバーを新しいマシンに移動した後に実行します。通常、これはAppDNAサーバーを新しいマシンに完全インストールすることによって行います。

注：必要に応じて、AppDNAライセンスサーバーのインストールプログラムを使用できます。ただし、可能な場合には、AppDNAライセンスサーバーをAppDNAサーバーマシンと同じマシンにインストールすることをお勧めします。

1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、[Citrix AppDNA]、[Management Tools]、[Configure AppDNA] の順に選択します。
2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、[Licensing] を選択し、[Next] をクリックします。
3. [License Management] ページで、[Transfer] を選択し、[Next] をクリックします。
4. [Transfer License] ページで、ライセンスを移動するデータベースを選択します。
ライセンスを移動するデータベースがデータベースの一覧に表示されない場合は、[Cannot see the database in the list] をクリックして [Enter Database Details] ダイアログボックスを開きます。このダイアログボックスについては、「[ライセンスの移動](#)」を参照してください。
5. [Import] をクリックして [Next] をクリックします。
6. エクスポートしたライセンストークンファイルの名前と場所を指定します。
7. 新しいAppDNAライセンスサーバーマシンの名前を指定します。これはエクスポート手順の手順7で指定した名前と同じである必要があります。
通常、デフォルトのポート番号である8079をそのまま使用できます。詳しくは、「[データベースのロックを解除するためのトークンのインポート](#)」を参照してください。

8. [Next] をクリックして、ライセンス移動トークンをインポートします。
9. <http://www.citrix.com>から発行されたAppDNAライセンスを使用している場合は、次に [Reallocate license file] ページが開きます。
 - **Activate now** – ライセンスを今すぐ再割り当てする場合は、このオプションを選択します。<http://www.citrix.com>にログオンし、新しいAppDNAライセンスサーバーマシンにライセンスを再割り当てして、新しいライセンスファイルをダウンロードする必要があります（手順について詳しくは、<http://support.citrix.com/article/CTX134678>を参照してください）。
これを行うときには、新しいライセンスサーバーをホストするマシンの名前を入力する必要があります。[Copy] をクリックしてこの名前をクリップボードにコピーし、www.citrix.comに貼り付けられるようにします。ライセンスの再割り当てとライセンスファイルのダウンロードが終わったら、ライセンスファイルの名前と場所を入力します。
 - **I'll do this later** – ライセンスファイルを後で再割り当てする場合は、このオプションを選択します。ライセンスを再割り当てするまで、一部のアプリケーションのレポートを表示できない場合があります。

注：データベースをXenDesktopまたはXenAppのPlatinumライセンスのみを使用してアクティブ化した場合は、このページは表示されません。

10. [Next] をクリックして操作を完了します。

通常は、「[既存のAppDNAデータベースの追加](#)」で説明するように、AppDNA Webサイトにデータベースを追加する必要があります。ただし、AppDNAライセンスサーバーのみを移動し、AppDNAサーバーを移動しなかった場合、この作業は必要ありません。

管理

Oct 16, 2015

ここでは、AppDNAインストールの管理および構成に使用できるさまざまな機能のドキュメントを提供します。

各トピックへのクイックリンク：

- [ユーザー](#)
- [役割](#)
- [タスクロック](#)
- [サイト](#)
- [データベース](#)
- [AppDNA Webサイト](#)
- [フィンガープリント](#)
- [AppDNA環境構成ウィザード](#)

ユーザー

Oct 16, 2015

AppDNAのユーザーアカウントを表示、作成、および変更し、統合ログオン対応のユーザーアカウントを構成できます。

クイックリンク：

- [統合ログオン](#)
- [ユーザーの手動追加](#)
- [Active Directoryからのユーザーのインポート](#)

統合ログオンは、AppDNAユーザーがそのWindowsユーザーアカウントの資格情報を使用して自動的にAppDNAにログオンできるようにする、オプションの機能です。つまり、ログオン画面が省略され、ユーザーはユーザー名とパスワードを入力する必要がありません。この機能を使用するには、AppDNAユーザーアカウントを次のように構成する必要があります。

- ユーザーの [AD Linked] チェックボックスをオンにする必要があります。
- AppDNAのログオン名はユーザーのドメイン修飾Windowsユーザー名である必要があります。たとえば、domain\usernameです。

統合ログオンが有効なアカウントは、手動でも、Active Directoryからのインポートでも作成できます。Active Directoryからインポートするユーザーアカウントには、自動的に統合ログオンがセットアップされます。ただし、インポートの後に [AD Linked] チェックボックスをオフにすれば、この設定を変更できます。次に、AppDNAによりユーザーの新しいパスワードが自動的に生成されます。必要に応じて、自動生成のパスワードを手動設定のパスワードに置き換えられます。

統合ログオンが有効なアカウントを持つユーザーは自動ログオンを無効にできます。たとえば、管理タスクを実行するために、一時的に管理者アカウントでログオンする必要がある場合です。これを行うには、[\[Login Settings\]](#) ページで [Enable Auto Integrated Login] チェックボックスをオフにします。

注：統合ログオンが有効なアカウントでAppDNA Webクライアントにログオンすることはできません。

統合ログオンに関するFAQ

統合ログオンにActive Directoryとの通信は必要ですか？

いいえ。唯一の要件は、統合ログオンが構成されているAppDNAユーザーアカウントと一致するWindowsドメインアカウントで、AppDNAを起動することです。

Windowsパスワードを変更したら、AppDNAユーザーアカウントも更新する必要がありますか？

いいえ。バックグラウンドでAppDNAによりパスワードの変更が制御されます。

既存のAppDNAユーザーアカウントについて統合ログオンを有効にできますか？

そのユーザーのログオン名がドメイン修飾Windowsユーザー名と一致する場合にのみ、有効にできます。通常、Active Directoryからユーザーアカウントをインポートした場合は、一致しているはずですが。ユーザーアカウントの [AD Linked] チェックボックスをオンにし、変更を保存するだけで、統合ログオンを有効にできます。AppDNAのログオン名が有効なドメイン修飾ユーザー名ではない場合は、ドメイン修飾Windowsユーザー名を使用して新しいユーザーアカウントをセットアップし、[AD Linked] チェックボックスをオンにする必要があります。手動で、またはActive Directoryからのインポートによりこれを行えます。

統合ログオン

Oct 16, 2015

統合ログオンは、AppDNAユーザーがそのWindowsユーザーアカウントの資格情報を使用して自動的にAppDNAにログオンできるようにする、オプションの機能です。つまり、ログオン画面が省略され、ユーザーはユーザー名とパスワードを入力する必要がありません。この機能を使用するには、AppDNAユーザーアカウントを次のように構成する必要があります。

- ユーザーの [AD Linked] チェックボックスをオンにする必要があります。
- AppDNAのログオン名はユーザーのドメイン修飾Windowsユーザー名である必要があります。たとえば、domain\usernameです。

統合ログオンが有効なアカウントは、手動でも、Active Directoryからのインポートでも作成できます。Active Directoryからインポートするユーザーアカウントには、自動的に統合ログオンがセットアップされます。ただし、インポートの後に [AD Linked] チェックボックスをオフにすれば、この設定を変更できます。次に、AppDNAによりユーザーの新しいパスワードが自動的に生成されます。必要に応じて、自動生成のパスワードを手動設定のパスワードに置き換えられます。

統合ログオンが有効なアカウントを持つユーザーは自動ログオンを無効にできます。たとえば、管理タスクを実行するために、一時的に管理者アカウントでログオンする必要がある場合です。これを行うには、[\[Login Settings\]](#) ページで [Enable Auto Integrated Login] チェックボックスをオフにします。

注：統合ログオンが有効なアカウントでAppDNA Webクライアントにログオンすることはできません。

統合ログオンにActive Directoryとの通信は必要ですか？

いいえ。唯一の要件は、統合ログオンが構成されているAppDNAユーザーアカウントと一致するWindowsドメインアカウントで、AppDNAを起動することです。

Windowsパスワードを変更したら、AppDNAユーザーアカウントも更新する必要がありますか？

いいえ。バックグラウンドでAppDNAによりパスワードの変更が制御されます。

既存のAppDNAユーザーアカウントについて統合ログオンを有効にできますか？

そのユーザーのログオン名がドメイン修飾Windowsユーザー名と一致する場合にのみ、有効にできます。通常、Active Directoryからユーザーアカウントをインポートした場合は、一致しているはずです。ユーザーアカウントの [AD Linked] チェックボックスをオンにし、変更を保存するだけで、統合ログオンを有効にできます。AppDNAのログオン名が有効なドメイン修飾ユーザー名ではない場合は、ドメイン修飾Windowsユーザー名を使用して新しいユーザーアカウントをセットアップし、[AD Linked] チェックボックスをオンにする必要があります。手動で、またはActive Directoryからのインポートによりこれを行えます。

ユーザーの追加

Apr 15, 2016

AppDNAユーザーアカウントを手動で追加するには:

1. AppDNAのメニューで、[Administration]、[Users]の順に選択します。
2. [User Management]画面のツールバーで、[Add]をクリックします。
3. [Login]ボックス、[Forename]ボックス、および[Surname]ボックスに入力します。
4. ユーザーに統合ログオンを構成するには、[AD Linked]チェックボックスをオンにして、[Login]ボックスにそのユーザーのドメイン修飾Windowsユーザー名が指定されていることを確認します。詳しくは、「[統合ログオン](#)」を参照してください。
5. [Password Action]ボックスの一覧でパスワードアクションを選択します（統合ログオンが有効なユーザーアカウントには当てはまりません）。
6. [Password]ボックスにユーザーのパスワードを入力します。[Generate Password]を選択した場合は、AppDNAにより自動的にパスワードが割り当てられます。
7. [Roles]ボックスの一覧でユーザーの役割を選択します。
8. ユーザーの詳細情報をさらに追加するには、[Details]をクリックします。すると、画面下部に[General]、[Address]、[Telephones]、[Organization]の各タブが開きます。
9. 詳細情報を入力したら、新しいユーザーを選択して[Save]をクリックします。

Active Directoryからのユーザーのインポート

Oct 16, 2015

Active Directoryからユーザーをインポートするには、AppDNAをActive Directoryドメインに接続し、そのドメイン内のユーザーアカウントに対して読み取りアクセスを持つ資格情報で実行する必要があります。

1. AppDNAのメニューで、[Administration]、[Users]の順に選択します。
2. [User Management]画面で、[Import from AD]をクリックします。[Active Directory Import]ダイアログボックスが開きます。
3. [Default Active Directory]が自動的に選択されます。このデフォルトドメインを使用するか、対象ドメインを識別するLDAPパスを入力します。
4. オプションで、組織単位、セキュリティグループ、ユーザー名、名、姓、またはカスタムフィールドでユーザーを制限するために、[Filter]セクションに条件を入力します。
5. [Import Users]をクリックして、選択したドメイン内の、フィルター条件に一致するすべてのユーザーをインポートします。フィルター条件を指定しない場合はすべてのユーザーがインポートされます。
次に、AppDNAによりActive Directory内で一致するユーザーが検索され、[User Management]画面内のユーザー一覧に追加されます。

新しいユーザーが自動的に選択され、それぞれの[AD Linked]チェックボックスがオンになります。これにより、ユーザーの統合ログオンが自動的に構成されます（「[統合ログオン](#)」を参照）。

6. ユーザーアカウントに統合ログオンを構成しない場合は、[AD Linked]チェックボックスをオフにします。次に、AppDNAによりユーザーの新しいパスワードが自動的に生成されます。必要に応じて、自動生成のパスワードを手動設定のパスワードに置き換えられます。
7. 新しいユーザーアカウントが選択されていることを確認し、[Save]をクリックします。

ログオン設定

Oct 16, 2015

[Settings] ダイアログボックスには、AppDNAの全般的なオプションが含まれます。このダイアログボックスを開くには、メニューから [Edit]、[Settings] の順に選択します。

Enable Auto Integrated Login - このチェックボックスをオンにすると、統合ログオン機能が有効になります。この機能では、Windowsユーザーアカウントの資格情報を使用してAppDNAに自動的にログオンできます。ただし、AppDNA管理者によりそのユーザーアカウントによる統合ログオンが構成済みである必要があります。統合ログオンを使用して自動的にログオンしないようにするには、このチェックボックスをオフにします。統合ログオンについて詳しくは、「[統合ログオン](#)」を参照してください。

注：統合ログオンが有効なアカウントでAppDNA Webクライアントにログオンすることはできません。

Clear Remembered Credentials - 格納されているログオン名とパスワードをクリアします。このダイアログボックスのほとんどの設定とは異なり、これは直ちに実行され、オプションを有効にするために [Save] をクリックする必要はありません。

[Save] をクリックして変更を保存します。

役割

Oct 16, 2015

各AppDNAユーザーには役割が割り当てられます。役割により、AppDNAでユーザーが実行できるタスクが制御されます。デフォルトで、AppDNAには特権が定義された次の役割が用意されています。この定義は変更できません。

- **Users** – アプリケーションを選択し、レポートを表示し、アプリケーショングループを作成できます。
- **Administrators** – Usersと同じ特権を持つほか、すべての管理機能を実行できます。

サードパーティのコンサルタント、セキュリティアナリスト、テストエンジニアなどのユーザーに対して、カスタムの役割を追加することが必要な場合があります。

役割を管理するには、次の操作を行います。

- AppDNAのメニューで、[Administration]、[Roles]の順に選択します。

[Role Management] 画面の上部に、既存の役割が表示されます。右側の[System Role]列のチェックマークは、組み込みの役割であることを示します。これらの役割は変更できません。

選択できるすべての特権が画面下部に一覧表示され、選択した役割に定義されている特権が示されます。システム定義でない役割については、チェックボックスをオンにして特権を有効にしたり、チェックボックスをオフにして特権を無効にしたりできます。[Save]をクリックして変更を保存します。

タスクロック

Oct 16, 2015

AppDNAでは、重要なタスクを使用不可にして、分析の実行中にほかのユーザーがデータを削除したり変更したりすることを防ぐことができます。通常、タスクの終了時にロックが解除されます。ただし、サーバーの再起動などの特定の状況では、この処理は起こりません。この場合、管理者が手作業でロックを解除する必要があります。

1. AppDNAのメニューで、[Administration]、[Tasks]の順に選択します。
[Tasks]画面には、同じAppDNA Webサイトに接続しているすべてのAppDNAクライアントによって処理中の、すべてのインポートと分析の状態が表示されます。
2. ツールバーで、[Release Locks]をクリックします。
警告：ツールバーの一番右側の[Refresh Report Data]をクリックすると、すべてのアプリケーション、すべてのアクティブなレポート、およびOSイメージの組み合わせのレポートデータが更新されます。この処理は、アプリケーションポートフォリオが大きい場合は特に、長時間かかる可能性があります。Citrix AppDNAのサポート部門の助言ある場合のみ、このボタンを使用してください。

サイト

Oct 16, 2015

サイトは名前付きのデータベースとAppDNA Webサイトを組み合わせたものです。指定したデータベースにAppDNAクライアントを接続するときに、このサイトが使用されます。

- 使用するサイトは、AppDNAにログオンするときに指定できます（統合ログオンまたは自動ログオンを使用しない場合）。
- ログオンした後は、AppDNA画面の左下にある [Switch Site] ポップアップリストでデータベースを切り替えることができます。
- 上記の2つの状況で表示されるデフォルトサイトを変更することもできます。

サイトを管理するには、以下の操作を行います。

- AppDNAのメニューで、[Administration]、[Sites] の順に選択します。

複数のデータベースを使用できるため、たとえばWebアプリケーションをデスクトップアプリケーションと分けてテストする場合に便利です。複数のデータベースを使用できるのは、同時に複数の顧客のアプリケーションポートフォリオをテストする必要があるシステムインテグレーターにとっても便利です。通常、各サイトで異なるデータベースを使用しますが、すべてのサイトで同じAppDNA Webサイトを使用します。すべてのサイトで同じAppDNA Webサイトを使用する場合は、新しいバージョンのAppDNAをインストールするとき、参照するすべてのデータベースをアップグレードする必要があります。

現在のAppDNAクライアントマシンとユーザーに対してサイトを追加および削除できます。

サイトを追加するには

1. [Manage Sites] 画面上部の [Retrieve Available Databases] をクリックします。
2. 新しいサイトを作成するためのデータベースをクリックして、[Add Selection to List] をクリックします。
このデータベースに基づいて新しいサイトが作成されます。
3. サイトの一覧で新しいサイトをクリックして、サイトの詳細および場所を入力してから[Save] をクリックします。

サイトを削除するには

- サイトの一覧でサイトを選択し、[Remove] をクリックしてから [Save] をクリックします。

サイトを削除しても関連付けられているデータベースは削除されません。

AppDNAはデフォルトのサイトに接続します。デフォルトサイトを変更するには、以下の操作を行います。

- サイトの一覧でサイトを選択し、[Set Default] をクリックしてから [Save] をクリックします。

サイトの名前や構成を複数のAppDNAクライアントマシンやユーザー間で標準化するために、サイトをエクスポートすることができます。これを行うには、[Manage Sites] ツールバーの [Export] をクリックします。ほかのAppDNAユーザーは、エクスポートされたファイルを自分のマシンにインポートします（[Manage Sites] ツールバーの [Import] をクリック）。

サイトをエクスポートすると、一覧のすべてのサイトの構成情報が1つのXMLファイルに格納されます。

サイトの追加

Oct 16, 2015

AppDNAが追加のサイトに接続するように、手動で構成できます。データベースが既に存在している必要があります。新しいデータベースの作成について詳しくは、「[AppDNAデータベースの作成](#)」を参照してください。

サイトを追加するには

1. AppDNAのメニューで、[Administration]、[Sites]の順に選択します。
2. [Manage Sites] 画面上部の [Retrieve Available Databases] をクリックします。
[Web Server Databases] ボックスに使用できるデータベースの一覧が事前設定されます。

データベースが一覧に表示されない場合は、インストールにそのデータベースを追加する必要がある場合があります（この実行方法について詳しくは「[既存のAppDNAデータベースの追加](#)」を参照してください）。

3. 新しいサイトの基礎にするデータベースをクリックして、[Add Selection to List] をクリックします。
このデータベースに基づいて新しいサイトが作成されます。
4. 左側のサイト一覧に含まれる新しいサイトをクリックします。
5. 右側のフィールドをクリックして詳細情報を入力します。
 - **Name** - サイトの一意の名前です。用途を反映するサイト名にすることをお勧めします。
 - **Description** - 追加の説明をここに入力します。
 - **AWS Path** - Webサイトファイルへのパスです。
 - **Database Identifier** - Machine\Instance:Databaseの形式で指定するデータベースIDです。ここで、MachineはSQL Serverをホストするマシンの名前です。名前付きのSQL Serverインスタンスを使用する場合、InstanceはSQL Serverインスタンスです（名前付きのインスタンスを使用していない場合、これとバックスラッシュ文字 (\) は省略します）。Databaseはデータベースの名前です。[Add Selection to List] をクリックして新しいサイトを作成した場合は、この値を変更する必要はありません。
 - **URL** - AppDNA WebサイトのURLです。
 - **Web server Type** - IISを入力します。
6. 完了したら、[Save] をクリックして変更を保存します。

「[サイトの編集と削除](#)」で説明しているように、1つのサイトをデフォルトサイトとして定義できます。

編集と削除

Oct 16, 2015

デフォルトサイトはAppDNAのログオン画面で自動的に選択された状態になりますが、必要であればログオン時に別のサイトを選択できます。ただし、統合された、つまり自動的なログオンを使用する場合は、ログオン画面が表示されません。ログオン画面上のサイトを変更するには、[\[Login Settings\]](#) ダイアログボックスで統合された、つまり自動的なログオンを無効にして、ログオン画面が開くようにする必要があります。または、AppDNAで作業中に、AppDNAメイン画面の左下にある [\[Switch Site\]](#) ポップアップリストでサイトを切り替えられます。

1. AppDNAのメニューで、[\[Administration\]](#)、[\[Sites\]](#) の順に選択します。
2. [\[Manage Sites\]](#) 画面の [\[AppDNA Client Site List\]](#) で、デフォルトサイトにするサイトを選択します。
3. [\[Site List\]](#) ツールバーの [\[Set Default\]](#) をクリックします。
4. メインツールバーの [\[Save\]](#) をクリックします。

1. AppDNAのメニューで、[\[Administration\]](#)、[\[Sites\]](#) の順に選択します。
2. [\[Manage Sites\]](#) 画面の [\[AppDNA Client Site List\]](#) で、名前を変更するサイトを選択します。
3. 画面右側の [\[Name\]](#) ボックスをクリックし、必要に応じてテキストを編集します。
4. メインツールバーの [\[Save\]](#) をクリックします。

1. AppDNAのメニューで、[\[Administration\]](#)、[\[Sites\]](#) の順に選択します。
2. [\[Manage Sites\]](#) 画面の [\[AppDNA Client Site List\]](#) で、削除するサイトを選択します。
3. [\[AppDNA Site List\]](#) ツールバーの [\[Remove\]](#) をクリックします。
4. メインツールバーの [\[Save\]](#) をクリックします。

接続できるサイトの一覧からサイトが削除されます。

注：サイトを削除しても関連付けられているデータベースは削除されません。

インポートとエクスポート

Oct 16, 2015

サイトの設定はエクスポートおよびインポートできます。これは、複数のAppDNAクライアントマシンとユーザーの間でサイト名と構成を標準化する場合などに役立ちます。1つのマシンでサイトをセットアップし、設定をエクスポートするだけで済みます。エクスポートしたファイルはほかのAppDNAユーザーに送信して、そのユーザーのマシンのAppDNAにインポートするように依頼します。

1. AppDNAのメニューで、[Administration]、[Sites]の順に選択します。
2. [Manage Sites] 画面のメインツールバーで、[Export] をクリックします。
3. [Save As] ダイアログボックスで、エクスポートファイルに区別しやすい名前を付けて、保存先を選択します。
4. [Save] をクリックします。

一覧に含まれるすべてのサイトの構成設定を格納する、XMLファイルがダウンロードされます。

1. AppDNAのメニューで、[Administration]、[Sites]の順に選択します。
2. [Manage Sites] 画面のメインツールバーで、[Import] をクリックします。
3. [Open] ダイアログボックスで、前にエクスポートしたサイトファイルを参照します。
4. [Open] をクリックします。

データベース

Oct 16, 2015

単一のAppDNA Webサイトで、複数のデータベースを扱うことができます。AppDNA内で、サイトを使用してデータベースを切り替えます。サイトは名前付きのデータベースとAppDNA Webサイトを組み合わせたものです。AppDNAにログオンするときに、使用するサイトを指定します。AppDNAではこのサイトを使用して、指定されたデータベースにAppDNAクライアントを接続します。ログオンした後は、AppDNAメイン画面の左下にある [Switch Site] ポップアップリストでデータベースを切り替えられます。

AppDNA環境構成ウィザードを使用してデータベースを追加すると、そのデータベースにAppDNAで接続するために使用できる新しいサイトが自動的に作成されます。このサイトの名前は、ウィザードの最後のページに表示されます。このサイト名を記録しておき、AppDNAにログオンするときに使用してデータベースに接続できるようにします。

同じAppDNA Webサイトに複数のAppDNAクライアントが接続されていて、すべてのクライアントで新しいデータベースにアクセスする場合は、各クライアントで新しいサイトを追加する必要があります。詳しくは、「[サイト](#)」を参照してください。

このセクションの以降のトピックでは、新規データベースの作成方法と、AppDNA環境に既存のデータベースを追加する方法について説明します。

AppDNAデータベースの作成

Oct 16, 2015

注：ウィザードでは、SQL Serverで設定されたデフォルトのデータベースファイルの場所に新しいデータベースを作成します。別の場所にデータベースファイルを格納するには、SQL Serverでデフォルトの場所を変更してから次の手順を実行します。

1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] 画面/メニューから、 [すべてのプログラム]、 [Citrix AppDNA]、 [Management Tools]、 [Configure AppDNA] の順に選択します。
2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、 [Reconfigure installation] を選択し、 [Next] をクリックします。
3. [Existing Configuration] ページで、 [Add database] をクリックし、 [Next] をクリックします。
4. [Database creation] ページで、次のように詳細情報を指定します。
 - **Server name** – Machine\Instanceの形式で入力します。ここで、MachineはSQL Serverのインストールをホストするマシンの名前です。Instanceは名前付きのSQL Serverインスタンスを使用する場合のインスタンスの名前です。名前付きのインスタンスを使用しない場合には、バックスラッシュ (\) を省略します。
 - **Database name** – 新しいデータベースの名前です。デフォルトはAppDNADBです。AppDNAで使用するための空のデータベースをデータベース管理者が作成した場合は、その名前をここに入力します。それ以外の場合は、SQL Serverインスタンスに存在しない名前を入力します。
 - **Database authentication** - データベースを作成するときにSQL Serverに接続するための資格情報を入力します。
 - **Windows authentication** - この種の認証では、ログオンに使用するWindowsユーザーアカウントをデータベース接続に使用します。ユーザーアカウントにはパスワードが必要です。
 - **SQL Server authentication** - ユーザー名とパスワードを入力します。
5. [Next] をクリックしてから、 [AppDNA web site credentials] ページで、作成されたデータベースに接続するときにAppDNA Webサイトが使用する資格情報を指定します。使用できるオプションは、次のとおりです。
 - **Configure a local service account for me** – このオプションでは、AppDNASvcAccountと呼ばれるWindowsユーザーアカウントがローカルマシンに構成されます。このアカウントが既存でない場合は、このウィザードによって作成され、期限切れにならないランダムなパスワードが生成されます。このオプションは、ローカルマシンにSQL Serverがインストールされていて、ログオンするユーザーにWindowsユーザーアカウントを作成する権限がある場合にのみ使用できます。
 - **Use these credentials** – 使用する資格情報を指定します。実稼働環境用システムでは、データベースの作成に使用したアカウントではなく、パスワードの有効期限がないAppDNA固有のサービスアカウントをお勧めします。
6. [License Database] ページでは、商用のAppDNAライセンスをアクティブ化するか、AppDNAを試用モードで最大30日間実行するかを選択できます。
 - **Activate now** – AppDNAの試用版または製品版ライセンスをアクティブするには、このオプションをクリックします。<http://www.citrix.com>にログオンし、ライセンスファイルを割り当ててダウンロードする必要があります（手順について詳しくは、<http://support.citrix.com/article/CTX134678>を参照してください）。これを行うときには、AppDNAライセンスサーバーをホストするマシンの名前を入力する必要があります。
 - **License server machine** – AppDNAライセンスサーバーマシンの名前が表示されます。これは、AppDNAサーバーと同じマシンです。 [Copy] をクリックしてこの名前をクリップボードにコピーし、www.citrix.comに貼り付けられるようにします。
 - **License file** – ライセンスファイルをダウンロードした後、ライセンスファイルの名前と場所をここに入力します。これは、www.citrix.comから発行されたライセンスである必要があります。必要に応じて、www.citrix.comにログオンし、既存の使用権と一致する新しいCitrixライセンスをダウンロードできます。

重要：AppDNAはほかのCitrix製品とライセンスの制御方法が異なります。したがって、複数のCitrix製品を購入した場合は、AppDNAライセンスをほかの製品のライセンスとは別にダウンロードする必要があります。

 - **Run in trial mode** – AppDNAを試用モードで最大30日間実行するには、このオプションを選択します。この場合、インポートしてEstateViewレポートビューおよびEffort Calculatorレポートビューを表示できるアプリケーションの数に制

限はありません。ただし、そのほかのレポートビューの結果は、最大で5つのアプリケーションについてのみ表示できません。

- **Activate a XenDesktop or XenApp Platinum license** – XenDesktopまたはXenAppのPlatinumライセンスでAppDNAをアクティブ化するには、このオプションをクリックします。
 - **Platinum license server machine** - XenDesktopまたはXenAppのライセンスサーバーがインストールされているマシンのホスト名またはIPアドレスを入力します。
 - **Port** – ライセンスサーバーのポートを入力します。デフォルトでは27000です。ただし、異なるポートが使用されることがあります。不明な場合は、XenDesktopまたはXenAppの管理者にお問い合わせください。

7. [Next] をクリックして [System Check] ページに進みます。チェックの内容およびトラブルシューティングの方法については、「[システムチェックの問題](#)」を参照してください。
8. [Configure] をクリックしてデータベースの作成を開始します。これには時間がかかります。処理が完了すると、概要ページが開きます。サイトの名前を記録します。AppDNAにログオンするときに必要となります。

注：サイトの名前は、AppDNAにログオンした後に変更することができます。詳しくは、「[サイト](#)」を参照してください。

既存のAppDNAデータベースの追加

Oct 16, 2015

ここでは、AppDNAのインストールに既存のデータベース（別のSQL Serverマシンにある古いデータベースなど）を追加する手順について説明します。ウィザードにより、必要に応じてデータベースが自動的にアップグレードされ、AppDNAでデータベースへの接続に使用できるサイトが作成されます。

1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] 画面/メニューから、[すべてのプログラム]、[Citrix AppDNA]、[Management Tools]、[Configure AppDNA] の順に選択します。
2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、[Reconfigure installation] を選択し、[Next] をクリックします。
3. [Existing Configuration] ページで、[Add existing database] をクリックし、[Next] をクリックします。
4. [Add Existing Database] ページで、次のように詳細情報を指定します。
 - **SQL Server instance** - <Machine>\<Instance>の形式で入力します。ここで、<Machine>はSQL Serverのインストールをホストするマシンの名前です。<Instance>は名前付きのSQL Serverインスタンスを使用する場合のインスタンスの名前です。名前付きのインスタンスを使用しない場合には、バックスラッシュ (\) を省略します。
 - **Authentication** - SQL Serverデータベースに接続するための資格情報を入力します。使用する認証方法にかかわらず、ユーザーに**bulkadmin**サーバーロールと**db_owner**データベースロールが必要です。
 - **Windows authentication** - この種の認証では、ログオンに使用するWindowsユーザーアカウントをデータベース接続に使用します。ユーザーアカウントのパスワードを設定する必要があります。
 - **SQL Server authentication** - 2つの追加のボックスがアクティブ化されます。それらのボックスでユーザー名とパスワードを入力します。
5. [Connect] をクリックします。[Database name] ボックスの一覧に、指定したSQL ServerインスタンスにあるAppDNAデータベースが表示されます。
6. 追加するデータベースを選択します。
7. [Next] をクリックして [System Check] ページに進みます。
8. [Next] をクリックして処理を開始します。必要に応じて、現在のバージョンのAppDNAにデータベースがアップグレードされます。
9. 処理が完了すると、確認のページが開きます。サイトの名前を記録します。このデータベースに接続するとき、[Logon] 画面の [Site] ボックスの一覧でこの名前を選択する必要があります。

AppDNAで新しいデータベースに接続するには、AppDNAにログオンするときに、手順9で記録した名前のサイトを選択します。

注：サイトの名前は、AppDNAにログオンした後に必要に応じて変更することができます。詳しくは、[サイト](#)を参照してください。

Webサイトの web.config ファイルを開きます。

Oct 16, 2015

AppDNA Webサイトでは、ローカルのイントラネットユーザーがAppDNA Webクライアントでアクセスしてレポートの結果を表示できます。

ユーザーアカウントのパスワードを変更した場合は、AppDNA Webサイトの資格情報も更新する必要があります。これを行うには、AppDNA構成ウィザードを開始して、[Reconfigure installation]、[Reconfigure system] の順に選択します。次に、データベースを選択して [AppDNA web site credentials] ページで資格情報を指定して、画面の指示に従ってウィザードを完了します。

注：必要な場合は、この手順によってIISが自動的にリセットされます。リセットが行われると、このサーバー上のIISでホストされているほかのすべてのWebサイトがしばらくの間利用できなくなります。

構成ウィザードの使用方法について詳しくは、「[サーバーインストールの構成](#)」を参照してください。

注：AppDNA Webサイトの名前を変更することは可能ですが、推奨はしません。

AppDNA Webサイトでは、デフォルトでポート8199が使用されます。デフォルトのポートが既に使用されている場合にのみポートを変更することをお勧めします。これを行うには、AppDNA構成ウィザードを開始して、[Reconfigure installation]、[Reconfigure system] の順に選択します。次に、Webサイトを選択して [Web site Configuration] ページで新しいポート番号を入力します。ポート範囲0~1023、または3500などの一般的なポートは使用しないでください。画面の指示に従ってウィザードを完了します。

Webサイトのポートを変更すると、構成ウィザードによりAppDNAサーバーサイト一覧 (XMLファイル) が更新されます。AppDNAクライアントがこのWebサイトに接続している場合は、更新されたサイト一覧ファイルを各クライアントマシンにコピーする必要があります。

注：クライアントマシン上のサイト一覧ファイルをバックアップしてから次の操作を行うことをお勧めします。

1. AppDNAサーバーマシンで、次のフォルダーに置かれたSiteList.xmlファイルをコピーします。
%ProgramData%\App-DNA\AppTitude
2. 各クライアントマシン上のAppDNAを終了します。
3. 手順1でコピーしたSiteList.xmlファイルを、すべてのクライアントマシンの次のフォルダーに貼り付けます。
%AppData%\App-DNA\AppTitude

Webサイト資格情報の変更

Oct 16, 2015

このトピックでは、AppDNA Webサイトがデータベースのアクセスに使用する資格情報を変更する方法について説明します。この変更は、ユーザーアカウントのパスワードが変わるときに実行する必要があります。

注：必要な場合は、この手順によってIISが自動的にリセットされます。リセットが行われると、このサーバー上のIISでホストされているほかのすべてのWebサイトがしばらくの間利用できなくなります。

1. 構成ウィザードを実行する前にAppDNAクライアントを停止します。

構成ウィザードを実行するとIISがリセットされます。IISがリセットされると、AppDNA Webサイトとデータベースの両方をホストするWebサーバーに接続している、実行中のAppDNAクライアント上のインポートおよび分析セッションが終了します。

2. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、 [プログラム]、 [Citrix AppDNA]、 [Management Tools]、 [Configure AppDNA] の順に選択します。

3. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、 [Reconfigure installation] を選択し、 [Next] をクリックします。

4. [Existing configuration] ページで、 [Reconfigure system] を選択し、 [Next] をクリックします。

5. [Edit configuration] ページで、 [Web site database credentials] を選択し、 [Next] をクリックします。

6. [Choose database] ページで、変更する資格情報があるデータベースを選択し、 [Next] をクリックします。

7. [AppDNA web site credentials] ページで、作成されたデータベースに接続するときにAppDNA Webサイトが使用する資格情報を指定します。使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Configure a local service account for me** – このオプションでは、AppDNASvcAccountと呼ばれるWindowsユーザーアカウントがローカルマシンに構成されます。このアカウントが既存でない場合は、このウィザードによって作成され、期限切れにならないランダムなパスワードが生成されます。このオプションは、ローカルマシンにSQL Serverがインストールされていて、ログオンするユーザーにWindowsユーザーアカウントを作成する権限がある場合にのみ使用できます。
- **Use these credentials** – 使用する資格情報を指定します。実稼働環境用システムでは、データベースの作成に使用したアカウントではなく、パスワードの有効期限がないAppDNA固有のサービスアカウントをお勧めします。

詳しくは、「[Webサイトの資格情報](#)」を参照してください。

8. [Next] をクリックして [System Check] ページに進みます。チェックの内容およびトラブルシューティングの方法については、「[システムチェックの問題](#)」を参照してください。

9. [Configure] をクリックして資格情報を変更します。

10. [Close] をクリックしてウィザードを終了します。

Webサイトの資格情報

Oct 15, 2014

AppDNA環境構成ウィザードの [AppDNA Web Site Credentials] ページで、データベースに接続するときにAppDNA Webサイトの内部で使用される資格情報を指定します。実稼働システムでは、パスワードが期限切れにならないAppDNA固有のサービスアカウントを使用することをお勧めします。

注：ここで言うAppDNA WebサイトはAppDNA製品の一部で、外部のWebサイトではありません。AppDNA Webサイトでは、ローカルのイントラネットユーザーがAppDNA Webクライアントでアクセスしてレポートの結果を表示できます。AppDNAソフトウェアをインストールする必要はありません。

Configure a local service account for me – (SQL Serverをローカルマシンにインストールし、ログオンするユーザーにWindowsユーザーアカウントを作成する権限がある場合にのみ使用できます) このオプションでは、ローカルマシンでAppDNASvcAccountというWindowsユーザーアカウントが自動的に構成されます。このアカウントが既存でない場合は、このウィザードによって作成され、期限切れにならないランダムなパスワードが生成されます。このオプションが使用でき、新しいAppDNAサーバーのインストールを構成しているか、または新しいデータベースを作成している場合は、このオプションがデフォルトです。

必要に応じて、ローカル管理者が [コントロールパネル]、[ユーザーアカウント] を使用して、生成したパスワードを後でリセットできます。ただし、パスワードをこの方法で変更した場合は、新しいパスワードを使用するようにWebサイトを再構成する必要があります。

Use these credentials – このオプションでは、データベースに接続するときにAppDNA Webサイトが内部で使用する資格情報を入力します。

- **Authentication type** – これにより、SQL Serverデータベースへの接続時にAppDNA Webサイトで使用される認証メカニズムが決まります。
 - **Windows authentication** – この種類の認証では、AppDNA Webサイトの実行に使用するユーザーアカウントを使用して、Webサイトからデータベースへの接続が行われます。AppDNA Webサイトを実行するアカウントの名前とパスワードを指定できます。実稼働環境用システムの場合、パスワードが失効しないサービスアカウントを使用することをお勧めします。試用モードの展開環境では、一般的にログイン済みのユーザーアカウントをそのまま使用できます。「[インストールの準備](#)」で説明しているように、このアカウントにはローカルの管理者特権を付与する必要があります。
 - **SQL Server authentication** – この種類の認証では、以下で入力する特定のSQL Serverログインの詳細情報を使用します。
- **User name** – [SQL Server authentication] を選択した場合、AppDNA WebサイトがSQL Serverへの接続に使用するユーザー名を入力します。Windows認証を使用する場合は、ドメイン修飾Windowsユーザー名 (domain\usernameなど) を指定してください。
- **Password** – ユーザー名を入力した場合は、アカウントのパスワードを入力する必要があります。ユーザーアカウントにパスワードがない場合は、操作を続ける前にアカウントのパスワードを設定する必要があります。

ポートの変更

Oct 16, 2015

デフォルトでは、IISベースのWebサイトの場合、AppDNA Webサイトではポート8199が使用されます。組み込みのパーソナルWebサーバー（PWS）を使用する場合は、ポート7199が使用されます。デフォルトのポートが既に使用されている場合にのみポートを変更することをお勧めします。

注：AppDNA Webサイトの名前を変更することは可能ですが、推奨はしません。

1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Citrix AppDNA]、[Management Tools]、[Configure AppDNA] の順に選択します。
2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、[Reconfigure installation] を選択し、[Next] をクリックします。
3. [Existing Configuration] ページで、[Reconfigure system] を選択し、[Next] をクリックします。
4. [Edit Configuration] ページで、[Web site] を選択し、[Next] をクリックします。
5. [Web site Configuration] ページで新しいポート番号を入力します。ポート範囲0~1023、または3500などの一般的なポートは使用しないでください。
6. [Next] をクリックして [System Check] ページに進みます。チェックが失敗する場合は、「[トラブルシューティング](#)」を参照してください。
7. [Configure] をクリックして、Webサイトの再構成を開始します。
8. [Close] をクリックしてウィザードを終了します。

AppDNA Webサイトに接続するAppDNAクライアントがある場合は、次の説明に従ってクライアントマシンを更新する必要があります。

AppDNAでは、[サイト](#)を使用してAppDNAクライアントとAppDNA Webサイトを接続します。内部では、サイトはXMLファイルで定義されます。Webサイトの名前またはポート、またはその両方を変更すると、AppDNAサーバー上のサイト一覧XMLファイルがウィザードで更新されます。これをクライアントマシンにコピーし、次の手順に従ってクライアントの一覧を更新できます。

注：サーバー上のファイルをコピーする前に、クライアント上のサイト一覧XMLファイルをバックアップすることをお勧めします。

1. AppDNAサーバーマシンで、次のフォルダーに置かれたSiteList.xmlファイルをコピーします。
%ProgramData%\App-DNA\AppData
2. クライアントマシンでAppDNAを終了します。
3. 手順1.でコピーしたSiteList.xmlファイルを、すべてのクライアントマシンの次のフォルダーに貼り付けます。
%AppData%\App-DNA\AppData

PWSからIISへのアップグレード

Oct 16, 2015

このトピックでは、組み込みのAppDNAパーソナルWebサーバー（PWS）からIISベースの完全な実稼働環境用Webサーバーにアップグレードするための手順について説明します。

1. AppDNAをアンインストールします。
2. IISをインストールして構成します。システム要件については、[AppDNA7.6のシステム要件](#)を参照してください。
3. 「[AppDNAのインストール](#)」の説明に従ってAppDNAをインストールします。
4. 「[サーバーインストールの構成](#)」の説明に従ってAppDNAを構成します。必ず [Production Web Server] オプションを選択してください。
5. 「[既存のAppDNAデータベースの追加](#)」の指示に従って既存のデータベースを新しいAppDNA Webサイトに追加します。

フィンガープリント

Oct 16, 2015

アプリケーションのフィンガープリントとは、アプリケーションの製品名、製造元、バージョン番号、およびファイルとレジストリエントリを組み合わせられたものです。AppDNAにデスクトップアプリケーションを初めてインポートすると、そのフィンガープリントが格納されます。AppDNAにそのアプリケーションを再インポートするとき、フィンガープリントが同じか変化が10%以下である場合は、同じアプリケーションであるとデフォルトでみなされます。レポートを表示できるアプリケーションの数はAppDNAのライセンスで制限されるため、これは重要です。

ポートフォリオからアプリケーションを削除しても、アプリケーションのフィンガープリントは削除されません。そのため、同じアプリケーションを再インポートした場合はAppDNAで認識され、フィンガープリントの変化が10%以下であれば同じアプリケーションであるとみなされます。削除時にロックが解除されていたアプリケーションは、再インポート時にもロックが解除された状態になり、同じライセンスが再利用されます。ただし、フィンガープリントが削除されている場合は、別のアプリケーションとみなされ、ロックを解除すると新しいライセンスが使用されます。

表示されるアプリケーションの詳細情報は、[Application List] の場合と同様に、[Edit] 列の鉛筆アイコンをクリックして編集することができます。[Manufacturer] 列の感嘆符 (!) は、アプリケーションの表示名、製造元、またはバージョンが変更されたことを示します。アプリケーションのフィンガープリント自体には影響しません。

デスクトップアプリケーションのフィンガープリントを表示して削除するには、次の操作を行います。

- AppDNAのメニューで、[Administration] 、 [Fingerprints] の順に選択します。

注：アプリケーションのフィンガープリントを削除すると、次回そのアプリケーションをインポートするときにAppDNAにより新しいアプリケーションであるとみなされます。

AppDNA環境構成ウィザード

Oct 16, 2015

AppDNAのインストールまたは新しいバージョンへのアップグレードの直後に、AppDNA環境構成ウィザードを使用してAppDNAの初期構成を行います。それ以降は、このウィザードを詳細な管理や構成タスクに使用します。通常は、これらのタスクはAppDNA Webサーバーをインストールしたマシンで実行する必要があります。

AppDNA環境構成ウィザードの最初のページのオプションは次のとおりです。

Configure new installation – (新しいインストールの場合のみ) AppDNAをインストールした直後は、このオプションを選択します。

- サーバーのインストールの場合、このオプションによりAppDNA WebサーバーとWebサイトが設定され、SQL Serverデータベースが作成され、ライセンスをアクティブ化するか、AppDNAを試用モードで30日間使用できるようになります。
- クライアントのインストールの場合、このオプションによりAppDNA Webサイトおよびデータベースへの接続が設定されます。

Reconfigure installation – (既存のインストールの場合のみ) このオプションは、既存のAppDNAインストールがあり、新しいまたは既存のデータベースを追加するか、AppDNAサーバーの構成を編集する場合に選択します。

Upgrade installation – (既存のインストールの場合のみ) このオプションによって、既存のAppDNAデータベースが新しいバージョンのAppDNAにアップグレードされます。新しいバージョンのAppDNAをインストールした場合は、このオプションを選択します。

重要：必要な場合は、ウィザードによってIISが自動的にリセットされます。したがって、ウィザードを開始する前に、AppDNAクライアントを停止してください。IISがリセットされると、このサーバー上のIISでホストされているほかのすべてのWebサイトがしばらくの間利用できなくなります。IISがリセットされると、AppDNA Webサイトとデータベースの両方をホストするWebサーバーに接続している、実行中のAppDNAクライアント上のインポートおよび分析セッションが終了します。

Licensing – AppDNAライセンスを検査する、新しいライセンスをアクティブ化する、またはライセンスを移動するには、このオプションを選択します。

AppDNA環境構成ウィザードは、AppDNAをインストールした後に自動的に開きます。後で開くには：

- [スタート]、[すべてのプログラム]、[Citrix AppDNA]、[管理ツール]、[Configure AppDNA] の順に選択します。

クライアントの構成

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [Configure Client] ページで、AppDNA Webサイトとの接続を構成します。

Web site URL – 接続するAppDNA WebサイトのURLを入力します。次のようにURLを指定します。

`http://<server>:<port>/<AppDNA>`

変数について次の表で説明します。

変数	説明
server	AppDNAサーバーのホスト名またはIPアドレスです。
port	AppDNA Webサイトのポート番号です。通常は8199です。
AppDNA	AppDNA Webサイトの名前です。通常はAppDNAです。

例：

`http://AppDNAserverMachine:8199/AppDNA`

ここに入力する値がわからない場合は、AppDNA管理者にお問い合わせください。

ウィザードにより、ここで指定するAppDNA Webサイトに接続されている各AppDNAデータベース用のサイトが作成されます。サイトは名前付きのデータベースとAppDNA Webサイトを組み合わせたものです。AppDNAにログオンするときに、使用するサイトを指定します。次に、AppDNAでそのサイトを使用して、指定したAppDNA WebサイトとデータベースにAppDNAクライアントを接続します。ログオンした後は、AppDNAメイン画面の左下にある [Switch Site] ポップアップリストでサイトを切り替えられます。

Webサーバー

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [Web Server] ページでは、IISに基づいてAppDNA Webサーバーを作成します。マシンにIISがインストールされ、構成済みであることを前提にしています。

重要：構成の一部としてIISがリセットされます。したがって、ウィザードを実行する前にAppDNAクライアントを停止してください。IISがリセットされると、このサーバー上のIISでホストされているほかのすべてのWebサイトがしばらくの間利用できなくなります。IISがリセットされると、AppDNA Webサイトとデータベースの両方をホストするWebサーバーに接続している、実行中のAppDNAクライアント上のインポートおよび分析セッションが終了します。

Webサイトの構成

Oct 16, 2015

[AppDNA環境構成ウィザード](#)の [Web Site Configuration] ページを使用して、AppDNA Webサイトの詳細を変更します。

使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Web site name** – AppDNA Webサイトの名前が表示されます。デフォルトではAppDNAです。この名前を変更することはできますが、Citrix AppDNAサポートから指示があった場合にのみ変更することをお勧めします。
- **Port** – AppDNA Webサイトのポートを入力します。デフォルトのポートは8199です。一般に使用されないポートであれば、別のポート番号に変更できます（0～1023の範囲内、または3500のポートなど）。デフォルトのポートが既に使用されている場合にのみポートを変更することをお勧めします。

重要： Webサイト名またはポート（またはその両方）を変更しても、AppDNAクライアントがインストールされている別のマシンで、Webサイトに対する参照情報の対応する項目が自動的に変更されるわけではありません。ウィザードで変更を行った後で、[Webサイト](#)の説明に従ってすべてのクライアントマシンを更新します。

データベースの作成

Oct 16, 2015

AppDNAではMicrosoft SQL Serverデータベースにデータを格納します。AppDNA環境構成ウィザードの [Database Creation] ページで、データベースを構成します。

注：このウィザードでは、SQL Serverで設定されたデータベースファイルのデフォルトの場所に新しいデータベースを作成します。別の場所にデータベースファイルを格納するには、SQL Serverでデフォルトの場所を変更してからウィザードを実行します。

Server name – Machine\Instanceの形式で入力します。ここで、MachineはSQL Serverのインストールをホストするマシンの名前です。Instanceは名前付きのSQL Serverインスタンスを使用する場合のインスタンスの名前です。名前付きのインスタンスを使用しない場合には、バックスラッシュ (\) を省略します。SQL Serverで標準以外のポートを使用する場合は、Machine,Portの形式で指定します。ここで、Portはカスタムポート番号です。

Database name – 新しいデータベースの名前です。AppDNAで使用するための空のデータベースをデータベース管理者が作成した場合は、その名前をここに入力します。それ以外の場合は、デフォルトの名前であるAppDNADBを受け入れるか、SQL Serverインスタンスに存在しない名前を入力します。

Database authentication – データベースを作成するときにSQL Serverに接続するための資格情報です。ユーザーアカウントにはsysadminサーバーロールが必要です。

- **Windows authentication** – この種の認証では、ログオンに使用するWindowsユーザーアカウントをSQL Server接続に使用します。この種の認証を使用する場合は、ログオンするユーザーはパスワードが設定されたWindowsユーザーアカウントを持っている必要があります。
- **SQL Server authentication** - SQL Serverへの接続と、データベースおよびデータベーステーブルの作成に使用するユーザー名とパスワードを入力します。

データベースの選択

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [Choose Database] ページで、使用するデータベースを選択します。

Database – ボックスの一覧から使用するデータベースを選択します。この一覧には、AppDNA Webサイトが参照するすべてのデータベースが表示されます。使用するデータベースがこの一覧に表示されない場合は、そのデータベースをAppDNA Webサイトに追加する必要があります。詳しくは「[既存のデータベースの追加](#)」を参照してください。

Backup (recommended) – (アップグレードのみ) データベースをアップグレードする前にウィザードにより自動的にバックアップを実行する場合には、このチェックボックスをオンにします (デフォルト)。SQL Serverで既にバックアップを実行している場合は、このチェックボックスをオフにします。

Error: The wizard cannot detect any AppDNA databases – ウィザードにこのメッセージが表示されたときに行う必要がある操作は、これまでにAppDNAを使用したことがあるかどうか、および既にAppDNAデータベースがあるかどうかに応じて異なります。

- 既に1つまたは複数のAppDNAデータベースがある場合は、[Close] をクリックしてウィザードを終了します。次にウィザードを再度実行して、データベースをWebサイトに追加します。手順については「[既存のデータベースの追加](#)」を参照してください。
- AppDNAデータベースがない場合は、[Close] をクリックしてウィザードを終了します。次にウィザードを再起動し、[Configure new installation] オプションを選択します。これで新しいデータベースが作成されます。

データベースへのライセンスの適用

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [License Database] ページでは、ライセンスをアクティブ化することも、AppDNAの試用モードでの実行を選択することもできます。AppDNAでは、ライセンスはデータベースに適用され、使用できる機能が制御されます。

Activate now – AppDNAの試用版または製品版ライセンスをアクティブ化するには、このオプションをクリックします。 www.citrix.comにログオンし、ライセンスファイルを割り当ててダウンロードします（手順について詳しくは、<http://support.citrix.com/article/CTX134678>を参照してください）。これを行うときには、AppDNAライセンスサーバーをホストするマシンの名前を入力する必要があります。

- **License server machine** – AppDNAライセンスサーバーマシンの名前が表示されます。[Copy] をクリックしてこの名前をクリップボードにコピーし、www.citrix.comに貼り付けられるようにします。AppDNAライセンスサーバーは別のマシンに配置することもできますが、通常はAppDNAサーバーと同じマシンにインストールします。別のマシン上にある場合は、下の [Advanced] をクリックし、そのマシンの名前を入力します。ここに表示されるマシン名がそれによって変更されます。
- **License file** – ライセンスファイルをダウンロードした後、ライセンスファイルの名前と場所をここに入力します。このライセンスファイルは、古いAppDNAライセンス (.clf) ファイルではなく、www.citrix.comから発行されたライセンスである必要があります。必要に応じて、www.citrix.comにログオンし、既存の使用権と一致する新しいCitrixライセンスをダウンロードできます。

重要：複数のCitrix製品を購入した場合は、AppDNAライセンスをほかの製品のライセンスとは別にダウンロードする必要があります。

Run in trial mode – (試用期間が過ぎている場合は選択できません) AppDNAを試用モードで最大30日間実行する場合は、このオプションを選択します。この場合、インポートしてEstateViewレポートビューおよびEffort Calculatorレポートビューを表示できるアプリケーションの数に制限はありません。ただし、そのほかのレポートビューの結果は、最大で5つのアプリケーションについてのみ表示できます。

Activate a XenDesktop or XenApp Platinum license – PlatinumライセンスでAppDNAをアクティブ化するには、このオプションをクリックします。

- **Platinum license server machine** - Citrixライセンスサーバーがインストールされているマシンのホスト名またはIPアドレスを入力します。
- **Port** – ライセンスサーバーのポートを入力します。デフォルトでは27000です。ただし、異なるポートが使用されることがあります。不明な場合は、XenDesktopまたはXenAppの管理者にお問い合わせください。

注：

- ライセンスをアクティブ化するときIISのリセットが必要になる場合があります。したがって、ライセンスをアクティブ化する前に、AppDNAクライアントを停止してください。IISがリセットされると、このサーバー上のIISでホストされているほかのすべてのWebサイトがしばらくの間利用できなくなります。IISがリセットされると、AppDNA Webサイトとデータベースの両方をホストするWebサーバーに接続している、実行中のAppDNAクライアント上のインポートおよび分析セッションが終了します。
- 製品版ライセンスがアクティブ化済みのデータベースでは、試用版ライセンスをアクティブ化することはできません。

AppDNAライセンスサーバーが別のマシンで実行されている場合、または別のポートを指定する必要がある場合

は、[Advanced] を使用します。

Server name or IP address – デフォルトはlocalhostです。AppDNAライセンスサーバーが別のマシンにインストールされている場合は、ホスト名またはIPアドレスを入力します。

Port – デフォルトでは、AppDNAライセンスサーバーはポート8079を使用します。

- これが新規インストールで、このポートが既に使用されている場合は、ほかのポートを使用するようにライセンスサーバーを再構成して、そのポート番号をここに入力します。詳しくは、「[ライセンスの問題](#)」を参照してください。
- AppDNAライセンスサーバーが別のポートを使用するように既に構成されている場合は、そのポート番号をここに入力します。

既存のデータベースの追加

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [Add Existing Database] ページで、AppDNA Webサイトに追加する既存のAppDNAデータベースを選択します。たとえば、この機能を使用して、別のSQL Serverマシンに置かれた古いデータベースをAppDNA Webサイトに追加できます。ウィザードにより、必要に応じてデータベースが自動的にアップグレードされ、AppDNAでデータベースへの接続に使用できるサイトが作成されます。

Server name – Machine\Instanceの形式で入力します。ここで、MachineはSQL Serverのインストールをホストするマシンの名前です。Instanceは名前付きのSQL Serverインスタンスを使用する場合のインスタンスの名前です。名前付きのインスタンスを使用しない場合には、バックスラッシュ (\) を省略します。SQL Serverで標準以外のポートを使用する場合は、Machine,Portの形式で指定します。ここで、Portはカスタムポート番号です。

Authentication – SQL Serverに接続するための資格情報を入力します。どの種類の認証方法を使用する場合も、bulkadminサーバーの役割とdb_ownerデータベースの役割が必要です。

- **Windows authentication** - この種の認証では、ログオンに使用するWindowsユーザーアカウントをデータベース接続に使用します。
- **SQL Server authentication** - 2つの追加のボックスが表示されます。
 - **User name** – SQL Serverへの接続に使用するユーザー名を入力します。
 - **Password** – SQL Serverへの接続に使用するパスワードを入力します。

Connect – クリックするとSQL Serverに接続します。指定したサーバー上のAppDNAデータベースの名前がウィザードの [Database] ボックスの一覧に表示されます。

Database – AppDNAのインストールに追加するデータベースの名前を選択します。必要に応じて、ウィザードでデータベースが自動的にアップグレードされます。

[Next] をクリックして次の手順に移ります。

[Add Existing Database] ページを開く手順については、「[既存のAppDNAデータベースの追加](#)」を参照してください。

既存の構成

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [Existing Configuration] ページで、構成が必要な既存の構成の部分を指定します。

使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Reconfigure system** – 別のポートを使用するようにWebサイトを再構成する、データベースに接続するためにAppDNA Webサイトで使用するユーザーアカウントの新しいパスワードを入力するなど、AppDNAサーバーの構成を編集する場合は、このオプションを選択します。 [Next] をクリックすると、 [\[Edit Configuration\] ページ](#)が表示されます。
- **Add database** – 新しいAppDNAデータベースおよびこのデータベースにAppDNA内部から接続するために使用するサイトを作成する場合は、このオプションを選択します。 [Next] をクリックすると、 [\[Database Creation\] ページ](#)が表示されます。
デスクトップアプリケーションとは別にWebアプリケーションをテストする場合は、複数のデータベースがあると便利です。複数のデータベースを使用できるのは、同時に複数の顧客のアプリケーションポートフォリオをテストする必要があるシステムインテグレーターにとっても便利です。詳しくは、「[データベース](#)」を参照してください。
- **Add existing database** – 既存のAppDNAデータベースをAppDNAのインストールに追加する場合は、このオプションを選択します。たとえば、このオプションを使用して、別のSQL Serverマシンに置かれた古いデータベースを、AppDNA Webサイトに追加することができます。ウィザードにより、必要に応じてデータベースが自動的にアップグレードされ、AppDNAでデータベースへの接続に使用できるサイトが作成されます。 [Next] をクリックすると、 [\[Add Existing Database\] ページ](#)が表示されます。

1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] ボタン、 [プログラム] メニューから、 [Citrix AppDNA] 、 [Management Tools] 、 [Configure AppDNA] の順に選択します。
2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、 [Reconfigure installation] を選択し、 [Next] をクリックします。

構成の編集

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [Edit Configuration] ページで、Webサイトで使用するデータベース資格情報を編集するかどうか、またはAppDNA Webサイトを再構成するかどうかを指定します。

使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Web site database credentials** – データベースに接続するときにAppDNA Webサイトで使用するSQL Serverログオン情報を変更する場合は、このオプションを選択します。たとえば、WebサイトのSQL Serverアカウントパスワードを変更する必要がある場合は、このオプションを選択します。 [Next] をクリックすると、 [\[Web Site Credentials\] ページ](#)が開きます。
- **Web site** – AppDNA Webサイトの名前またはポート、またはその両方を再構成する場合は、このオプションを選択します。 [Next] をクリックすると、 [\[Web Site Configuration\] ページ](#)が開きます。

1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] ボタン、 [プログラム] メニューから、 [Citrix AppDNA] 、 [Management Tools] 、 [Configure AppDNA] の順に選択します。
2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、 [Reconfigure installation] を選択し、 [Next] をクリックします。
3. [Existing Configuration] ページで [Reconfigure System] を選択し、 [Next] をクリックします。

ライセンス管理

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [License Management] ページには、いくつかのライセンス管理オプションが表示されま

注：AppDNAライセンスの概要については、「[ライセンス](#)」を参照してください。
このページのオプションは次のとおりです。

- **Activate** – 試用モードで実行した後に製品版ライセンスを購入した場合など、Citrixライセンスをアクティブ化するには、このオプションを選択します。ライセンスをアクティブ化するとき、ライセンスはAppDNAライセンスサーバーにインポートされ、特定のAppDNAデータベースに適用されます。ライセンス済みのデータベースで、追加のライセンスをアクティブ化することもできます。[Next] をクリックしてデータベースを選択し、ライセンスをダウンロードしてアクティブ化します。詳しくは、「[データベースへのライセンスの適用](#)」を参照してください。
 - **Inspect** – データベースに既に適用したライセンスを検査する場合は、このオプションを選択します。[Next] をクリックするとき、ライセンスを検査するデータベースを選択します。次に、[\[Inspect License\] ページ](#)が開きます。
 - **Transfer** – AppDNAライセンスは、AppDNAデータベースおよびAppDNAライセンスサーバーがインストールされているマシンに関連付けられます。AppDNAライセンスサーバーを別のマシンまたは環境に移動する必要がある場合は、このオプションを使用して、すべてのAppDNAデータベースのライセンスを移動する必要があります。[Next] をクリックすると、[\[Transfer License\] ページ](#)が開きます。
データベースを別のマシン上のSQL Serverに移動するだけであれば、つまりAppDNAライセンスサーバーの場所に変更がなければ、ライセンスの移動は不要です。
 - **Advanced** – AppDNAライセンスサーバーの状態を検査する場合は、このオプションを選択します。[Next] をクリックするとき、ライセンスサーバーの状態を検査するデータベースを選択します。次に、[\[Advanced Licensing\] ページ](#)が開きます。
1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] ボタン、[プログラム] メニューから、[Citrix AppDNA]、[Management Tools]、[Configure AppDNA] の順に選択します。
 2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、[Licensing] を選択し、[Next] をクリックします。

ライセンスの移動

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [Transfer License] ページは、AppDNAサーバーをあるマシンから別のマシンに移動するためなど、AppDNAデータベースのライセンスを移動する必要がある場合に使用します。ライセンス移動手順の概要と、この手続の実行が必要な状況については、「[ライセンスの移動](#)」を参照してください。

[Transfer License] ページには次のオプションがあります。

- **Database** – ライセンスを移動するデータベースを選択します。
ライセンスを移動するデータベースがデータベースの一覧に表示されない場合は、[Cannot see the database in the list] をクリックします。次に説明する [Enter Database Details] ダイアログボックスが開きます。
- **Export** – データベースから移動トークンをエクスポートするには、このオプションを選択します。[Next] をクリックすると、[\[Export Transfer Token\] ページ](#)が開きます。
このページに新しいAppDNAライセンスサーバーのマシン名を入力する必要があります。マシン名を正しく指定しないと移動プロセスを完了できないため、正しく指定する必要があります。トークンをエクスポートすると、インポート手順を完了するまでデータベースはライセンスがない状態になります。
- **Import** – データベースから移動トークンを既にエクスポートしており、AppDNAライセンスサーバーを新しいマシンに移動した場合は、このオプションを選択します。[Next] をクリックすると、[\[Import Transfer Token to Unlock Database\] ページ](#)が開きます。
このオプションでは、以前にエクスポートした移動トークンと、新しいライセンスサーバーの場所を指定します。これでデータベースのロックが解除されるため、レポートを表示できるようになります。このオプションの最後の手順では、www.citrix.comに移動して、ライセンスを新しいライセンスサーバーマシンに再割り当てし、AppDNA内部でアクティブにします。これで、関連するすべてのレポートを再び表示できるようになります。

[Enter Database Details] ダイアログボックスは、[Cannot see the database in the list] をクリックすると開きます。

使用できるオプションは、次のとおりです。

Server name – Machine\Instanceの形式で入力します。ここで、MachineはSQL Serverのインストールをホストするマシンの名前です。Instanceは名前付きのSQL Serverインスタンスを使用する場合のインスタンスの名前です。名前付きのインスタンスを使用しない場合には、バックスラッシュ (\) を省略します。SQL Serverで標準以外のポートを使用する場合は、Machine.Portの形式で指定します。ここで、Portはカスタムポート番号です。

Database name – SQL Serverのデータベースの名前です。

Authentication – SQL Serverに接続するための認証メカニズムを決定します。使用できるオプションは、次のとおりです。

- **Windows authentication** - この種の認証では、ログオンに使用するWindowsユーザーアカウントをデータベース接続に使用します。
- **SQL Server authentication** – 2つの追加のボックスが表示されます。
 - **User name** – SQL Serverに接続するときに使用するユーザー名を入力します。
 - **Password** – SQL Serverに接続するときに使用するパスワードを入力します。

[OK] をクリックしてダイアログボックスを閉じ、選択したデータベースを使用します。

1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] ボタン、 [プログラム] メニューから、 [Citrix AppDNA] 、 [Management Tools] 、 [Configure AppDNA] の順に選択します。
2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、 [Licensing] を選択し、 [Next] をクリックします。
3. [License Management] ページで [Transfer] を選択します。

移動トークンのエクスポート

Oct 16, 2015

[Export Transfer Token] ページは、AppDNA環境構成ウィザードのライセンス移動手順の一部です。このページで、データベースライセンストークンをファイルにエクスポートします。このトークンは、AppDNAライセンスサーバーを新しいマシンにインストールした後にデータベースにインポートして戻します。ライセンス移動手順の概要については、「[ライセンスの移動](#)」を参照してください。

使用できるオプションは、次のとおりです。

Transfer token file path – エクスポートしたライセンストークンファイルの名前と場所を指定します。

License server machine name – 新しいAppDNAライセンスサーバーマシンの名前を指定します。エクスポートしたライセンストークンはこのマシンに関連付けられます。これは正確に指定する必要があります。そうしないと、データベースが永続的に使用できなくなります。AppDNAライセンスサーバーをインストールするマシンの名前がまだわからない場合は、エクスポートをキャンセルし、マシン名が確実にわかってからもう一度エクスポートを開始してください。

[Next] をクリックして、ライセンス移動トークンをエクスポートします。その後、新しいAppDNAライセンスサーバーの名前を正しく指定したかどうかを確認するメッセージが表示されます。確認すると、[\[Export License\]](#) ページが開きます。

ライセンスのエクスポート

Oct 16, 2015

[Export License] ページは、AppDNA環境構成ウィザードのライセンス移動手順の一部です。このページで、前のページで指定したファイルにライセンス移動トークンがエクスポートされます。この操作でデータベースはロックされます。このプロセスの完了後、[Close] をクリックしてウィザードを終了します。

これでAppDNAライセンスサーバーを新しいマシンに移動する準備ができました。通常、これはAppDNAサーバーを新しいマシンにインストールすることによって行います。

データベースのロックを解除し、新しいAppDNAライセンスサーバーの場所でライセンスを再度アクティブ化するには、移動トークンをデータベースにインポートする必要があります。手順については、「[ライセンスの移動](#)」の「ライセンス移動トークンのインポート」を参照してください。

データベースのロックを解除するためのトークンのインポート

Oct 16, 2015

[Import Transfer Token to Unlock Database] ページは、AppDNA環境構成ウィザードの[ライセンス移動手順](#)の一部です。このページでは、以前にエクスポートしたデータベースライセンストークンをインポートします。

使用できるオプションは、次のとおりです。

Transfer token file path – エクスポートしたライセンストークンファイルの名前と場所を指定します。

Server name or IP address – 新しいAppDNAライセンスサーバーマシンの名前またはIPアドレスを指定します。これは、エクスポート手順で [License server machine name] ボックスに入力した値と同じであることが必要です。

Port – AppDNAライセンスサーバーのポートを入力します。デフォルトは8079で、通常は変更する必要はありません。

[Next] をクリックして、ライセンス移動トークンをインポートします。 [\[Reallocate License File\]](#) ページが開きます。

ライセンスファイルの再割り当て

Oct 16, 2015

[Reallocate License File] ページでは、ライセンス移動トークンをデータベースにインポートした後にCitrixライセンスファイルを再割り当てします。ライセンス構成に再割り当てが不要な場合は、このページは開きません。

重要： IISベースのWebサーバーを使用している場合は、ライセンスをアクティブ化するためにIISのリセットが必要になる可能性があります。したがって、ライセンスをアクティブ化する前に、AppDNAクライアントを停止してください。IISがリセットされると、このサーバー上のIISでホストされているほかのすべてのWebサイトがしばらくの間利用できなくなります。IISがリセットされると、AppDNA Webサイトとデータベースの両方をホストするWebサーバーに接続している、実行中のAppDNAクライアント上のインポートおよび分析セッションが終了します。

Activate now – ライセンスを今すぐ再割り当てするには、このオプションを選択します。www.citrix.comにログオンし、新しいAppDNAライセンスサーバーマシンにライセンスを再割り当てして、新しいライセンスファイルをダウンロードします（手順について詳しくは、<http://support.citrix.com/article/CTX134678>を参照してください）。これを行うには、新しいAppDNAライセンスサーバーをホストするマシンの名前を入力する必要があります。

- **License server machine name** – AppDNAライセンスサーバーマシンの名前が表示されます。[Copy] をクリックしてこの名前をクリップボードにコピーし、www.citrix.comに貼り付けられるようにします。
- **Location of license file** – Citrixライセンスファイルをダウンロードした後に、そのファイルの名前と場所を入力します。

重要： 複数のCitrix製品を購入した場合は、AppDNAライセンスをほかの製品のライセンスとは別にダウンロードする必要があります。

I'll do this later – ライセンスファイルを後で割り当てるには、このオプションを選択します。ライセンスを再割り当てするまでレポートを表示できない場合があります。

Inspect imported licenses – インポートしているライセンスの詳細を表示する場合は、このボタンをクリックします。この情報は、[\[Inspect Licenses\]](#) ページに表示される内容に対応しています。

ライセンスのインポート

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [Import License] ページは[ライセンス移動手順](#)の一部です。このページで、前のページで指定したライセンス移動トークンがインポートされ、今すぐに再アクティブ化するように選択した場合はライセンスが再アクティブ化されます。このプロセスの完了後、 [Close] をクリックしてウィザードを終了します。

次の手順

通常は、AppDNA Webサイトにデータベースを追加する必要があります。手順については [既存のAppDNAデータベースの追加](#) を参照してください。

注：AppDNAライセンスサーバーのみを移動し、AppDNAサーバーを移動しなかった場合、データベースのWebサイトへの追加は必要ありません。

ライセンスの詳細設定

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [Advanced Licensing] ページにはAppDNAライセンスサーバーの状態が表示されます。

Server machine name – AppDNAライセンスサーバーマシンの名前を指定します。

Port – AppDNAライセンスサーバーのポートを入力します。デフォルトは8079で、通常は変更する必要はありません。

Connect – クリックするとAppDNAライセンスサーバーに接続します。このページにAppDNAライセンスサーバーからの情報および個々のライセンスの一覧が表示されます。

特定のライセンスの詳細を表示するには、一覧でそのライセンスを選択し、ドロップダウンリストから[**View License**] を選択して [**Perform**] をクリックします。そのライセンスに関する詳細が表示されます。これは[[Inspect Licenses](#)] ページに表示される情報に対応しています。

[Advanced Licensing] ページを開くには

1. AppDNAサーバーマシンで、Windowsの [スタート] ボタン、 [プログラム] メニューから、 [Citrix AppDNA] 、 [Management Tools] 、 [Configure AppDNA] の順に選択します。
2. AppDNA環境構成ウィザードの最初のページで、 [Licensing] を選択し、 [Next] をクリックします。
3. [License Management] ページで、 [Advanced] を選択し、 [Next] をクリックします。
4. [Choose Database] ページでデータベースを選択し、 [Next] をクリックします。

構成の進行状況

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [Progress] ページには、構成タスクの進行状況が表示されます。タスクの所要時間は、構成の内容と、ローカルマシンで使用できるリソースによって異なります。AppDNAサーバーのインストールの新規構成や、新しいデータベースの作成は所要時間が長いタスクで、1時間以上かかることもあります。大規模なデータベースのアップグレードにも非常に長い時間がかかる可能性があります。

構成が完了した後、このウィザードには変更の概要が表示されます。たとえば、AppDNAサーバーのインストールを新規に構成すると、または新しいデータベースを作成すると、ウィザードには次の内容が表示されます。

- 新しいデータベースの名前
- データベースを作成するためにSQL Serverのインストールとの接続に使用した認証の種類
- AppDNAにログオンするときに使用してデータベースに接続できるサイトの名前
- 内部で使用するAppDNAのWindowsユーザーアカウントがウィザードにより作成された場合は、その名前が表示されます。ウィザードでは、このユーザーアカウント用にランダムなパスワードが作成されます。これは、後でローカル管理者が [コントロールパネル]、 [ユーザーアカウント] で変更できます。ただし、パスワードをこの方法で変更した場合は、新しいパスワードを使用するようにWebサイトを再構成する必要があります。

移行

Oct 16, 2015

このセクションのトピックでは、AppDNAを使用して、いくつかの一般的なアプリケーション移行シナリオに対応する手順について説明します。これらのトピックでは、どのようにして取りかかるか、そして、AppDNAの自動化されたアプリケーション互換性テスト、アプリケーションの展開成果のモデル化、アプリケーションの準備と修復、および仮想化処理などの、さまざまな機能を活用する方法について説明します。

各トピックへのクイックリンク：

- [Windowsデスクトップおよびサーバーアプリケーションの移行](#)
- [XenDesktop 7.0への移行](#)
- [WindowsアプリケーションのApp-V 5.0への移行](#)
- [Citrixストリーム配信アプリケーションのApp-V 5.0への移行](#)
- [インストールルーチンのないアプリケーションの移行](#)

Windowsデスクトップおよびサーバーアプリケーションの移行

Oct 16, 2015

Microsoft Windows XPは2014年4月8日、Microsoft Server 2003は2015年7月14日に延長サポートが終了します。Windows 8/7 (32/64ビット) またはWindows Server 2012/2008 R2への移行を検討してください。多くの組織でどこから手を付けるかに悩み、投資して移行に成功する代わりに、Microsoftに延長サポート費用を支払うことになるでしょう。

移行戦略をまだ策定していない、またはAppDNAを環境内に導入して移行を成功に導く方法を知りたい場合は、このトピックを参照することから始めます。Windows 8/7 (およびIE 9/10) またはWindows Server 2012/2008 R2へのアプリケーションの移行は、サポートされるハードウェアに関する判断よりはるかにうまくいきます。

移行手順

以下の手順に従って、AppDNAを使用して初めから終わりまで移行計画を進めます。これらの手順には、アプリケーションの移行についてのベストプラクティスと、移行時のAppDNAソフトウェアの使用法についての情報が含まれています。

<p>手順1 環境内で使用されるアプリケーションの検出</p>	<p>アプリケーションを検出します。移行計画において予期しない遅れを防ぐには、環境内で使用されているアプリケーションを検出する必要があります。</p> <p>Lakeside SysTrackのようなツールを使用して、それらのWindowsアプリケーションのインベントリと合理化を行います。毎四半期および/または年度末に、6週間から2か月かけて環境を監視することが重要です。これにより、業務に重大な影響を与える未管理のアプリケーションが特定されるだけでなく、依然として使用されているアプリケーションや、重複する機能を持つ類似したアプリケーションがないかどうかも確認できます。</p>
<p>手順2 AppDNAを使用したLakeside SysTrackデータベースとの統合 (オプション)</p>	<p>[Discover Applications] 画面を使用してAppDNAを構成し、Lakeside SysTrackと統合します。</p>
<p>手順3 検出されたアプリケーションの合理化</p>	<p>検出されたアプリケーションのデータが完成したら、AppDNAの [Discover Applications] 画面で検出されたアプリケーションの合理化を行います。この文脈において、合理化には、アプリケーションのインベントリの調査、維持するアプリケーションおよびAppDNAへインポートするアプリケーションの決定が含まれます。 [Discover Applications] 画面には、Lakeside SysTrackで追跡しているWindowsアプリケーションの未処理のインベントリが表示されます。</p> <p>注： [Discovered Applications] をクリックして、重複するアプリケーション、インストール、および使用状況の統計情報を参照します。</p>
<p>手順4 検出結果の追跡</p>	<p>最適なフォーマットで検出結果を追跡します。Excelのスプレッドシートを使用するか、Lakeside SysTrackを使用する場合はAppDNAソフトウェアと統合します。統合により以下のことが可能になります。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ● 合理化状態を検討から移行または廃棄に変更する。 ● 重複するアプリケーションをフィルターし、維持するバージョンを簡単に判断する。 ● インストールと使用状況の統計情報を確認する。 ● Microsoft Active Directory (AD) またはMicrosoft System Center Configuration Manager (Configuration Manager) を使用する場合は、検出されたアプリケーションと、対応する管理対象アプリケーションをリンクする。
<p>手順5 ADおよびConfiguration ManagerのデータのAppDNAへのインポート (オプション)</p>	<p>管理対象アプリケーションを、ADまたはConfiguration Managerを通じて展開したときに使用したインストールメディアを使用してインポートするには、まず、ADおよびConfigMgrデータのロードウィザードを使用してADおよびConfiguration ManagerのデータをAppDNAにロードします。</p> <p>データを直接または間接のどちらの方法でロードするかを決定します。ADおよびConfiguration Managerのデータを間接的にロードする場合は、AppDNAとは独立してADドメインコントローラー上またはConfiguration Managerサーバー上でデータを抽出できます。その結果、AppDNAユーザーが管理者にADまたはConfiguration Managerデータへのアクセス権を要求する必要も、ADドメインおよびConfiguration Managerの管理者がAppDNAをインストールする必要もありません。</p> <p>注：最上の結果を得るには、ADおよびConfiguration Managerのデータを両方ともインポートします。通常、ADは組織構造に関する豊富なデータを提供し、Configuration Managerは集中管理されているアプリケーションのデータを提供します。</p>
<p>手順6 レビューのためのアプリケーション検出情報の配布、およびアプリケーション一覧の合理化</p>	<p>アプリケーションの業務上の所有者と共にアプリケーションの検出結果を確認し、合理化の処理を行います。どのアプリケーションを維持し、統合し、破棄するかを決定する必要があります。</p> <p>最適な形式で決定を追跡します。単純なスプレッドシートまたはAppDNA内での追跡が考えられます。</p>
<p>手順7 管理対象外のアプリケーションのインストールソースファイルの検索</p>	<p>ADまたはConfiguration Managerを通じて管理されていないアプリケーションのインストールソースファイルを見つけます。これは、ほとんどの会社が想定するより常に長くかかり、移行計画に大きな影響を与える可能性があります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. AppDNAで提供されるテンプレートファイルを使用して、インポートするアプリケーションの一覧を定義します。 2. アプリケーションをバッチインポートするためのテンプレートをダウンロードするには： <ol style="list-style-type: none"> 1. サイドメニューバーから [Import]、[Applications] の順に選択します。 2. [Import Applications] 画面のツールバーの [Import from List] をクリックします。 <p>テンプレートのImport Listファイルはコンマ区切り値 (.csv) ファイルで、AppDNAにインポートするアプリケーションの一覧を定義するために使用します。</p>
<p>手順8 カスタムオペレーティングシステムのAppDNAへのイ</p>	<p>環境内で使用される、独自にカスタマイズしたオペレーティングシステムイメージをインポートします。AppDNAには、使用可能なデフォルトのオペレーティングシステムイメージの独自のセットが搭載されていますが、カスタマイズしたイメージをインポートすれ</p>

<p>レポート</p>	<p>ば、AppDNAでその実環境で使用するイメージをベースに分析を行い、より正確な結果を導くことができます。</p>
<p>手順9 重要度または事業単位に基づくアプリケーションのグループ化</p>	<p>重要度または事業単位に基づきアプリケーションをグループ化して、移行計画を組織内の最重要項目に的を絞ったものにします。また、ポートフォリオ内のそのほかの項目とは別に、簡単にグループ内のアプリケーションを確認し、報告できるようにします。</p> <p>AppDNAの [Manage Groups] 画面を使用して、アプリケーショングループの作成と管理、選択したグループ内のアプリケーションの分析、および選択したグループ内のアプリケーションのレポートの表示を行います。</p>
<p>手順10 管理対象外の (MSI、SFT、APPV) アプリケーションのAppDNAへのインポート</p>	<p>管理対象外のアプリケーションをインポートします。これは、最も重要なものまたは最初に展開を計画している事業単位のものから先に始めます。 [Import Applications] 画面を使用します。</p> <p>注：このプロセスでは、アプリケーションDNAと呼ぶ要素をAppDNAデータベースにインポートするのみです。特定のプラットフォームに対するアプリケーションの互換性をチェックするには、次の手順で発見的アルゴリズムのセットに対してデータを分析します。</p> <p>[Import Applications] 画面で以下のタブを使用します。</p> <p>Direct Import – Windowsインストーラー (MSI) またはApp-V (SFTまたはAPPV) パッケージでアプリケーションをインポートするために使用します。これは、アプリケーションDNAをデータベースにインポートする、最も時間がかからない方法です。</p> <p>Install Capture – Windowsインストーラー (MSI) またはApp-V (SFTまたはAPPV) パッケージがないアプリケーションをインポートするために使用します。Install Captureは、仮想マシンを使用してアプリケーションのインストールと構成の詳細をMSI内にキャプチャし、そのMSIをAppDNAにインポートします。</p> <p>ヒント：AppDNAでは、アプリケーションデータのインポートとデータの分析は2つの別のプロセスに分かれています。通常の業務時間内にアプリケーションをインポートし、ネットワークトラフィックが少ない夜間に分析を開始することをお勧めします。また、同時に複数の分析を実行することはできず、分析中にはレポートを生成できないことに注意してください。</p>
<p>手順11 管理対象外の (セットアップ実行可能ファイル、スクリプト、ファイルコピー) アプリケーションのAppDNAへのインポート</p>	<p>MSI、SFT、またはAPPVファイルを利用できない管理対象外のアプリケーションを、[Install Capture] タブを使用してインポートします。最も重要なものまたは最初に展開を計画している事業単位のものから先に始めます。Install Captureで仮想マシンにアプリケーションをインストールし、MSIファイルを作成します。このMSIファイルをAppDNAにインポートします。</p> <p>注：Install Captureでアプリケーションをインポートするには、その前に適切な仮想化技術にアクセスする必要があります。AppDNAクライアントと通信できる仮想マシンをセットアップおよび構成する必要があります。詳しくは、「Install Captureの構成」を参照してください。</p> <p>ヒント：Install Captureのインストール時にコンピューターの再起動が必要な場合は、[コンピューターを後で再起動します] などのオプションを選択します。Install Capture処理の実行時に仮想マシンを再起動するとInstall Captureが失敗します。</p>

<p>手順12 管理対象アプリケーションのAppDNAへのインポート</p>	<p>維持すると決定した管理対象アプリケーションをAppDNAにインポートします。ADまたはConfiguration Managerを通じて展開したときに使用したインストールメディアを使用して、アプリケーションをインポートします。アプリケーションの「DNA」をインポートした後で、Lakeside SysTrackで検出されたアプリケーションをインポートしたアプリケーションとリンクすることができます。</p> <p>注：適切なインストールを選択したこと、修復またはアンインストールのインストールを選択していないことを確認します。1つのパッケージに複数のインストールがある場合は、そのうちの1つのみ、なるべくなら展開済みのもの（[Users] 列または[Computers] 列の件数が0より大きいインストール）を選択したことを確認します。</p>
<p>手順13 管理対象アプリケーションのリンク</p>	<p>ADまたはConfiguration Managerのデータをインポートする前に、アプリケーションをAppDNAにインポート済みである場合は、 [Link Managed Applications] 画面を使用して、ADおよびConfiguration Managerで管理されるアプリケーションを、AppDNAにインポート済みのアプリケーションとリンクします。</p> <p>注：ADおよびConfiguration Managerのデータの構成において、これは重要な段階です。これにより、ADおよびConfiguration Managerのユーザー、コンピューター、グループ、および組織単位に対して展開されているアプリケーションの、RAG状態のレポートをAppDNAで作成できるようになります。 [Managed Applications] 画面および [Discover Applications] 画面でインポートした管理対象アプリケーションは、自動的にリンクされます。</p>
<p>手順14 プラットフォームに対するアプリケーションの互換性およびアプリケーション間の相互運用性のチェック</p>	<p>アプリケーションをインポートしたら、互換性をチェックするプラットフォームに対して アプリケーションを分析 します。この移行における重点は、Windows 8/7（32/64ビット）、Windows Server 2012/2008 R2、Internet Explorer、およびFirefoxとの互換性にあります。相互運用性ソリューションを使用して、アプリケーション間の競合を確認します。</p>
<p>手順15 レポートオプションの分析</p>	<p>分析の結果は、一連のレポートビューで示されます。レポートビューには、サイドバーの [Reports: Applications] セクションからアクセスできます。ここに、太字のモジュール名の後に続いてレポート名が表示されます。レポート名をクリックすると、レポートビューが表示されます。これらのオプションは、すべてのレポートで同じです。各レポートビューでは、結果に対する異なるビューが提供されます。</p> <p>レポートについて理解し、データをレビューするさまざまなレベルのチームに最適なフォーマットが何か判断します。</p> <p>選択したアプリケーションのレポートを表示するには：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. AppDNAのサイドバーから [Select] > [All Applications] の順に選択します。 2. [Application List] 画面で、レポートに含めるアプリケーションを選択します。 3. [Application List] の上のツールバーのドロップダウンリストから表示するレポートを選択して、 [View Report] をクリックします。 <p>または、AppDNAのサイドバーから [Reports: Applications] > [Module] > [Report] > [Report view] の順に選択します。ここで、Module、Report、およびReport viewによって、表示するレポートビューが特定されます。</p> <p>レポートビューとその対象読者について詳しくは、この表の後の「 —レポートビュー</p>

	<p>」を参照してください。</p>
<p>手順16 RAG/重要度に基づくアプリケーションの優先度の決定</p>	<p>RAG状態と業務ニーズの組み合わせに基づいて、アプリケーションの優先度を決定します。それに応じてアプリケーションをグループ化した場合は、グループフィルターを使用して同じグループに属するアプリケーションのレポートを表示して、まず最も重要なアプリケーションに的を絞り、各グループ内のRAG状態に基づいて優先度を決定できるようにします。</p> <p>目的のオペレーティングシステムのIssues Viewレポートを使用して、RAG状態によってアプリケーションの優先度を決定することをお勧めします。これは、このビューを使用して、必要な修復の種類、したがって、問題の修復に必要な開発者やパッケージ作成者などの専門家も判断できるためです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 赤 - 赤のアプリケーションには回避策がなく、破棄、置き換え、再開発、または従来のオペレーティングシステムを実行する仮想デスクトップ上でホストする必要があります。各アプリケーションのApplication Issuesレポートを確認します。アプリケーション名をクリックすると、詳細な修復レポートが開きます。アプリケーションの状態が赤と判断されても、問題があるのは実際の環境で使用されないコンポーネントである可能性があります。アプリケーション所有者と密に連携し、最適な行動指針を決定して進め方を計画します。移行期間中の置き換えおよび再開発が選択肢にならない場合は、従来のオペレーティングシステム上でアプリケーションをホストするなどの従来の代替策を検討します。 ● 黄色 - 黄色のアプリケーションには、shimの適用、オペレーティングシステムビルドの変更、再パッケージ化など、何らかの回避策が必要です。各アプリケーションのApplication Issuesレポートを確認します。アプリケーション名をクリックすると、詳細な修復レポートが開きます。 ● 緑 - 緑のアプリケーションは、ユーザー承認テストの準備ができています。アプリケーションを実稼働環境に展開する前に、アプリケーションの所有者が直ちにアプリケーションのテストを開始できるように準備します。アプリケーションに問題がある場合は、各アプリケーションのレポートに戻ってトリガー項目がないか確認します。ただし、RAGが緑のアプリケーションがアルゴリズムをトリガーすることはありますが、ハードコードされたパスなど、ベストプラクティスに反する項目に関連する場合はほとんどです。実際の環境の問題であり、アプリケーションをユーザー承認テストにかける前に対処する必要があることに気づいた場合は、アルゴリズムに関連するRAGを変更することができます。
<p>手順17 修復アクションの割り当て</p>	<p>特定のプラットフォームのレポートデータを確認し、Windows 8/7、Internet Explorer 10/9、およびWindows Server 2012/2008 R2に移行した場合に組織内のアプリケーションに発生する問題の種類を把握します。次に、アプリケーションに割り当てる修復の種類を判断します。</p> <p>これは、オペレーティングシステムビルドの変更と各アプリケーションの修正とで、どちらに費用効果があるのかを判断するのに役立ちます。たとえば、よくある問題にセッション0の分離があります。影響を受けるアプリケーションがどれか、またその数が簡単に把</p>

	握できるので、修復オプションについて適切な判断をすることができます。
手順18 アプリケーションの修復に必要な要員またはグループの決定	<p>アプリケーションの修復に必要な要員またはグループを決定します。Issues Viewレポートを使用して、アプリケーションの修復が必要かどうかを判断します。修復や置き換えは、社内開発者、パッケージ作成者、IT管理者（オペレーティングシステムビルドの変更などの問題）、または独立系ソフトウェア開発会社が行います。適切なチームまたは要員に、アプリケーションのRemediation Viewレポートを送付します。Remediation Viewを表示するには、Application Issues Viewを開いてアプリケーション名のリンクをクリックします。</p> <p>Remediation Viewレポートは、Word、PDF、HTML、またはMHT形式で送付できます。</p>
手順19 アプリケーションのユーザー承認テストの実施	アプリケーションのRAGが緑、または機能テストが必要な黄色である場合、または修復の後にテストを実施する準備ができたなら、アプリケーションをユーザー承認テストにかけます。ユーザー承認テストには上級ユーザーを参加させてください。
手順20 アプリケーションの展開	ユーザー承認テストが成功したら、アプリケーションを互換性のあるオペレーティングシステムに展開します。

レポートビュー

レポート	説明	使用者
Application Issues	検出された問題に関する、選択されたアプリケーションの状態の概要です。アプリケーション名をクリックして、アプリケーションの修復レポートビューにドリルダウンします。このビューでは問題の修正方法に関する詳細情報が提供されます。	IT管理者 開発者 パッケージ作成者 シーケンス作成者
Remediation View	特定のアプリケーションで検出された問題の詳細なビューです。問題および推奨される修復オプションの情報が提供されます。	IT管理者 開発者

レポート	説明	使用者 作成者
		シー ケ ン ス 作 成 者
Application Actions	選択されたアプリケーションの状態の概要で、問題の修正に必要なアクションの種類を提示します。アプリケーション名をクリックすると、アプリケーションの修復レポートビューにドリルダウンします。	IT管 理者 IT管 理部 門
Issues View	検出されたさまざまな問題の概要です。問題ごとに、影響を受けるアプリケーションの一覧を提示します。アプリケーション名をクリックすると、アプリケーションの修復レポートビューにドリルダウンします。	IT管 理者 IT管 理部 門
Actions View	検出された問題を修正するために実施する必要のあるさまざまな修復アクションの種類概要です。アクションの種類ごとに、影響を受けるアプリケーションの一覧を提示します。アプリケーション名をクリックすると、アプリケーションの修復レポートビューにドリルダウンします。	IT管 理者 IT管 理部 門

XenDesktop 7.0への移行

Oct 16, 2015

AppDNAアプリケーション移行ソフトウェアを使用すると、アプリケーションの互換性への対応およびアプリケーションの移行全般を自動化することによって、Citrix XenDesktopの移行に伴う時間を短縮し、費用とリスクを軽減することができます。AppDNAは、アプリケーションのテスト、修復、および仮想化プロセスを自動化することにより、XenDesktop、XenApp、およびMicrosoft App-Vのような仮想化技術の導入を加速します。さまざまなアプリケーションポートフォリオと多岐にわたる人員をサポートするための万能の答えはなく、対象のアプリケーションに最適なCitrixモデルを決定することは厄介な問題のように見えるかもしれません。

対象の人員に最適なCitrixモデルを決定するには、使用事例、展開モデル、およびXenDesktopの特長を理解する必要があります。まずCitrix Project Acceleratorを使用して、XenDesktopの展開を成功させる方法について情報を得ます。これには、アーキテクチャをカスタマイズする場合の推奨事項や、ハードウェア要件が含まれます。これで、AppDNAを活用してXenDesktopの移行を加速する準備が整います。

AppDNAはアプリケーション互換性テストの手動プロセスを自動化するだけでなく、アプリケーション展開成果の見込みをモデル化し、アプリケーションの準備および修復のプロセスを自動化することも可能にします。これにより、展開までの時間が短縮することができます。このトピックでは、AppDNAを構成および拡張し、次の表に示すCitrixの推奨技術スタックに基づいて見込まれる成果を対象として、互換性テストの結果と自動化を結び付ける方法について説明します。

表1. Citrixの推奨技術スタック

Citrixの推奨技術スタック	要件
XenDesktop 7.6または7.5をWindows Server 2012 R2/2012/2008 R2 SP1で実行	Windows Server 2012 R2/2012/2008 R2 SP1でのアプリケーションホスティングに適している。
	Microsoftのリモートデスクトップサービステクノロジー経由のアプリケーション配信に適している。
App-V 5.0をWindows Server 2012 R2/2012/2008 R2 SP1、またはWindows 8.1/8/7 (32/64ビット) で実行	アプリケーションの仮想化に適している。
	Windows Server 2012 R2/2012/2008 R2 SP1、またはWindows 8.1/8/7に適している。
XenApp 6.5 FP2をWindows Server 2008 R2で実行	Windows Server 2008 R2でのホスティングに適している。
	64ビット版プラットフォームに適している。
	Microsoftのリモートデスクトップサービステクノロジーを使用するアプリケーション配信に適している。
XenDesktop経由のVM Hosted AppをWindows 8/7 (32/64ビット) で実行	ベンダーのサポート状況から見て、Windows Server 2008 R2プラットフォームでのホスティングに適していない。
	Microsoftのリモートデスクトップサービステクノロジー経由の配信に適していない。

Citrixの推奨技術スタック	Windows 8/7デスクトッププラットフォームでのホスティングに適している。
	リソース要件が厳しい可能性のあるアプリケーション、および通常はシステムの分離が必要で、スタンドアロンで実行する必要がある、あまりアクセスされないアプリケーションに適している。
XenDesktop 7経由のWindows 8/7 (32/64ビット) 仮想デスクトップ	ベンダーのサポート状況から見て、Windows Server 2012またはWindows Server 2008 R2プラットフォームでのホスティングに適していない。
	Microsoftのリモートデスクトップサービステクノロジー経由の配信に適していない。
	Windows 7デスクトッププラットフォームでのホスティングに適している。
	リソース要件が厳しく、スタンドアロンで実行する必要がある、頻繁にアクセスされるアプリケーションを3つ以上所有するユーザーに適している。
	ベンダーのライセンス制限が必要な可能性があるアプリケーションに適している。

表2. Citrixの推奨技術スタック (従来のプラットフォーム)

Citrixの推奨技術スタック (従来)	要件
XenApp 5.0をWindows Server 2003で実行	ベンダーのサポート状況から見て、Windows Server 2008 R2プラットフォームでのホスティングに適していない。
	アプリケーションの制限事項から見て、64ビット版プラットフォームでのホスティングに適していない。
	Microsoftのリモートデスクトップサービステクノロジー経由の配信に適している。
XenDesktop 5経由のVM Hosted AppをWindows XPで実行	ベンダーのサポート状況から見て、Windows Server 2012、Windows Server 2008 R2、またはWindows 8/7プラットフォームでのホスティングに適していない。
	Microsoftのリモートデスクトップサービステクノロジー経由の配信に適していない。
	Windows XPデスクトッププラットフォームのみでのホスティングに適している。
	リソース要件が厳しい可能性のあるアプリケーション、および通常はシステムの分離が必要で、スタンドアロンで実行する必要がある、あまりアクセスされないアプリケーションに適している。

導入

アプリケーションに最適なCitrixモデルを決定するには、以下の手順に従います。

注：AppDNAを初めて使用する場合は、続行する前にXenDesktop 7導入ソリューションウィザードの使用を検討してください。このウィザードでは導入時の問題の概要が提示されるため、Citrix以外のシステムからXenDesktopに移行した後のアプリケーションの配信方法の計画に役立ちます。ウィザードで提供されるレポートを参照した後で、以下の手順に進んでください。

<p>手順1 インベントリと合理化によるアプリケーションの検出</p>	<p>移行計画において予期しない遅れを防ぐには、環境内で使用されているアプリケーションを検出する必要があります。アプリケーションの検出には、インベントリの実行とそのインベントリの合理化が伴います。これにより、移行するまたはインベントリから削除するアプリケーションと、確認が必要な重複するアプリケーションを判断します。</p> <p>インベントリと合理化を手動で実行すると、非常に時間がかかる可能性があります。インベントリと合理化の助けになるサードパーティ製の製品がいくつか存在します。</p> <p>毎四半期および/または年度末に、6週間から2か月かけて環境を監視することが重要です。これにより、業務に重大な影響を与える未管理のアプリケーションが特定されるだけでなく、依然として使用されているアプリケーションや、重複する機能を持つ類似したアプリケーションがないかどうか確認できます。</p>
<p>手順2 AppDNA環境の準備</p>	<p>このトピックの次のセクションで説明されているように、AppDNA環境をセットアップして構成します。これには、AppDNAのセットアップと、推奨されるソリューションで使用するAppDNA Forward Path機能およびAppDNA実行プロファイルスクリプトと共に使用するための、AppDNAの構成が含まれます。</p> <p>AppDNA Forward Path機能はAppDNAに組み込まれている強力なビジネス決定エンジンで、さまざまな展開シナリオとその影響をモデル化することができます。</p>
<p>手順3 ソースメディアの検索</p>	<p>MSIおよびApp-V (SFT、APPV) ファイルを直接インポートすることができます。</p> <p>MSIではないファイルにはAppDNA Install Capture機能が必要です。この機能では、仮想マシンを使用してアプリケーションをMSIにキャプチャします。</p> <p>AppDNAセルフプロビジョニングツールを使って、MSIではないファイルをキャプチャすることもできます。セルフプロビジョニングにより、AppDNAへのアクセス権を持たないアプリケーションの専門家がキャプチャ処理を実行できます。アプリケーションの専門家がインストールできるように、AppDNA管理者が制御情報を準備して公開します。キャプチャは、AppDNAとは別のマシン（仮想、物理、またはVDI）で行います。</p>
<p>手順4 Active Directoryおよび/またはConfiguration Managerのデータのインポート</p>	<p>管理対象アプリケーションを、Active Directory (AD) およびSystem Center Configuration Manager (Configuration Manager) を通じて展開したときに使用したインストールメディアを使用してインポートするには、まず、ADおよびConfigMgrデータのロードウィザードを使用してADおよびConfiguration ManagerのデータをAppDNAにロードします。</p> <p>データを直接または間接のどちらの方法でロードするかを決定します。ADおよびConfiguration Managerのデータを間接的にロードする場合は、AppDNAとは独立してADドメインコントローラー上またはConfiguration Managerサーバー上でデータを抽出できます。その結果、AppDNAユーザーが管理者にADまたはConfiguration Managerデータへのアクセス権を要求する必要も、ADドメインおよびConfiguration Managerの管理者が</p>

	<p>AppDNAをインストールする必要もありません。</p> <p>注：最上の結果を得るには、ADおよびConfiguration Managerのデータを両方ともインポートします。通常、ADは組織構造に関する豊富なデータを提供し、Configuration Managerは集中管理されているアプリケーションのデータを提供します。</p>
<p>手順5 AppDNAレポートの使用</p>	<p>意思決定の材料にするレポートについては、後の — 「XenDesktop 7移行レポート」 を参照してください。このセクションにはForward Pathスクリプトについても記載されています。これらのスクリプトを使用して、意思決定のプロセスをシンプルにできます。業務ニーズをモデル化し、ソリューションを提供し、App-V 5.0シーケンスやMSIなど、互換性のあるアプリケーションに対する望ましい出力を自動化することができます。</p>
<p>手順6 継続的なアプリケーション 評価の管理</p>	<p>新しいアプリケーションが環境内に投入され、新しいService Pack、パッチ、およびアップグレードによって環境が影響を受けるのにあわせて、アプリケーションおよびエンドユーザーに影響を与える変化を、AppDNAを使用して管理およびモデル化します。</p>

AppDNAの構成

以下の手順に従って、AppDNAにXenDesktop 7.0の移行パスソリューションを構成します。

<p>手順1 優先順位別のアプリケーションのグループ化</p>	<p>AppDNAグループを作成して、適宜にアプリケーションを組織します。優先順位別または事業単位別にグループ化できます。グループの作成とアプリケーションのインポートおよび分析が完了したら、グループを使用して、発生した問題の複雑度に基づいてグループ内の優先順位を判断することができます。</p>
<p>手順2 AppDNAエクステンションのリクエスト</p>	<p>AppDNA Extensions Podioサイト (https://citrix.podio.com/appdna-extensions) へのアクセスをリクエストします。このサイトへのアクセスをリクエストするには、appdnafedback@citrix.com宛てにメールを送信します。</p>
<p>手順3 Install Capture (MSIではないファイル用) および Forward Path自動化のための仮想マシンの作成</p>	<p>サポートされる技術に基づく仮想マシンを作成して、Install CaptureおよびForward Pathと共に使用します。仮想マシンのオペレーティングシステムはアプリケーションが動作するオペレーティングシステムと同じである必要があります。</p> <p>インストーラーがMSIではないアプリケーションのDNAをAppDNAデータベースにインポートする前に、インポート処理の一部として、Install Captureを使用してそのアプリケーションをインストールおよびキャプチャします。</p> <p>Forward Pathは、アプリケーションの成果の判定およびプロセスの自動化のために使用します。ここでプロセスとは、Microsoft App-V 4.6シーケンスからMicrosoft App-V 5.0シーケンスへの変換や、MSI/EXEのソースメディアを使用するMicrosoft App-V 5.0シーケンスの作成などです。仮想マシンのオペレーティングシステムは移行先のオペレーティングシステムと同じである必要があります。</p>
<p>手順4 MSIではないファイルの</p>	<p>AppDNA Install Captureのセットアップ要件の概要を確認します。概要の最後に、以下の各仮想化技術へのリンクがあります。仮想マシンの構成の詳細は、基礎になる仮想化技術</p>

<p>キャプチャおよびForward Path自動化のための仮想マシンの構成</p>	<p>に応じて異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● XenServer ● Hyper-V ● vSphere ● VMware Workstation <p>これらの仮想化技術のトピックには、共有出力フォルダーの作成方法が記載されています。App-V 4.6 to 5.0 Conversionプロファイルを使用する場合は、追加的なフォルダー構成が必要です。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ホストマシンに、仮想マシンからフルアクセスできるソースフォルダーを作成します。たとえば、「\\xxx.xxx.xx\AppDNA_Output\AppV_Convert\v5」です。このとき、フォルダー名にスペースを含めないでください。 2. このフォルダーに、アプリケーションごとにフォルダーを作成します。このフォルダーに、アプリケーションのOSDおよびSFTファイルを配置します。これが、実行プロファイルの [Replaceables] タブに定義するソースフォルダーになります (\\xxx.xxx.xx\AppDNA_Output\AppV_Convert\v5\appname)。
<p>手順5 仮想マシンへの必要なソフトウェアのインストール</p>	<p>Microsoft App-V 4.6シーケンスからMicrosoft App-V 5.0シーケンスへの変換およびMicrosoft App-V 5.0シーケンスの作成を自動化するために使用する仮想マシンに、以下のソフトウェアをインストールします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Microsoft App-V 5.0 ● PowerShell 3.0
<p>手順6 Forward Pathスクリプトおよび実行プロファイルのダウンロード</p>	<p>AppDNA Extensions Podioサイトから、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ページの上部にある [Extensions] をクリックします。 2. [[FP]XenDesktop Decision] をクリックします。 3. [Files] で、最新バージョンの[FP]XenDesktop Decision.xmlを右クリックして、[Save target as...] を選択して、ローカルコンピューターにファイルを保存します。
<p>手順7 Forward PathスクリプトのAppDNAへのインポート</p>	<p>ダウンロードしたForward PathスクリプトをAppDNAにインポートするには：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. AppDNAにログオンし、[Configure] > [Forward Path] の順に選択します。 2. [Forward Path Logic Editor] 画面で [Import] をクリックします。 3. ダウンロードしたForward Pathスクリプトを選択して [Open] をクリックします。 4. [Import] をクリックします。 5. ファイルが正常にインポートされたことを示すメッセージが表示されたら [OK] をクリックします。
<p>手順8 App-V 5.0 Sequencer実行プロファイルのAppDNAへのインポート</p>	<p>Microsoft App-V 5.0 Sequencer実行プロファイルスクリプトをAppDNAにインポートするには：</p> <p>注：App-V 5.0 Sequencer.xmlはデフォルトでC:\Program Files\Citrix\AppDNA\Client\Execution ProfilesまたはC:\Program Files</p>

- (x86)\Citrix\AppDNA\Client\Execution Profilesにインストールされます。
1. AppDNAにログオンし、[Edit]、[Settings]の順に選択します。
 2. [Settings] ダイアログボックスで、[Install Capture] をクリックします。
 3. [Execution Profile] タブをクリックします。
 4. ダイアログボックスの下部にある[Import] をクリックします。
 5. [Load Profiles] ダイアログボックスで、次の操作を実行します：
 1. Podioからダウンロードした実行プロファイルの場所を指定します。
 2. アクティブ化する実行プロファイルを選択して、[Open] をクリックします。
 6. [Execution Profiles] タブでインポートした実行プロファイルをクリックし、[Edit] をクリックし、[Replaceables] タブをクリックします。
 7. SourceFolder場所置き換え可能パラメーターを選択し、[Edit] をクリックし、ソースファイルへのパスを入力します。そして、[OK] をクリックします。
 8. TargetFolder場所置き換え可能パラメーターを選択し、[Edit] をクリックし、ターゲットフォルダーへのパスを入力します。そして、[OK] をクリックします。
 9. [Save] をクリックして変更を保存し、[Settings] ダイアログボックスを閉じます。

XenDesktop 7移行レポート

以下の表は、XenDesktop 7移行パスソリューションに必要なレポートを示します。これらのレポートにより、意思決定に役立つデータが提供されます。

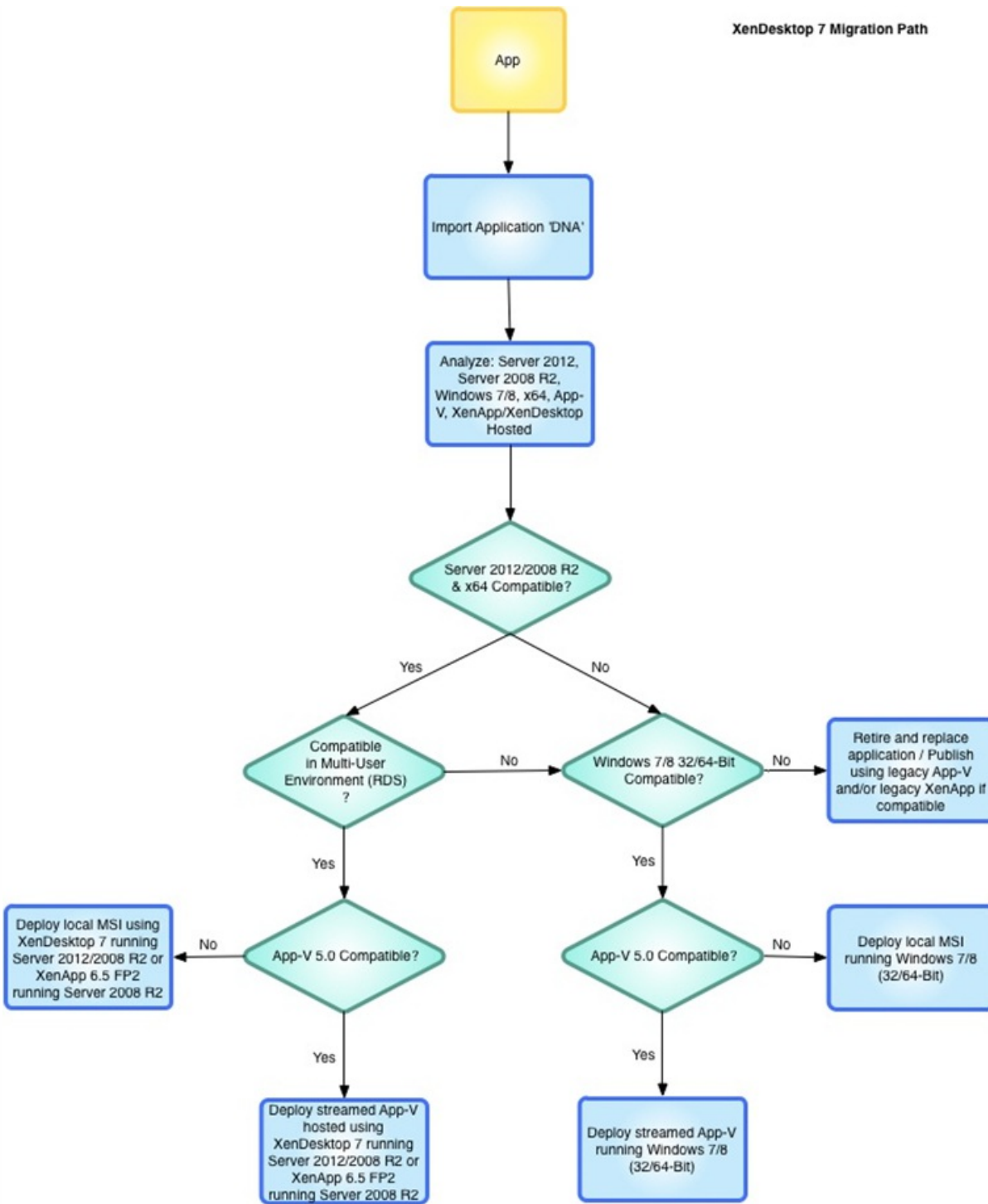
レポートにアクセスするには、サイドバーの[Reports: Applications] をクリックします。

Reports	説明
Forward Path	<p>組織の決定に基づくシナリオを反映し、結果に応じて自動化タスクスクリプトを実行するために使用されます。たとえば、Windows 7への移行準備中にForward Pathシナリオを作成して、App-Vパッケージとして展開するのに適しているアプリケーション、デスクトップに展開する必要があるアプリケーション、再開発が必要なアプリケーションを判断できます。Forward Pathスクリプトを実行した結果、以下の成果が提示される可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ストリーム配信するApp-Vを展開する。Windows Server 2012/Windows Server 2008 R2で動作するXenDesktop 7、またはWindows Server 2008 R2で動作するXenApp 6.5 FP2でホストする。 • ローカルにインストールするMSIアプリケーションを展開する。Windows Server 2012/Windows Server 2008 R2で動作するXenDesktop 7、またはWindows Server 2008 R2で動作するXenApp 6.5 FP2でホストする。 • ストリーム配信するApp-Vを展開する。Windows Server 2012で動作するXenDesktop 7でホストする。 • ローカルにインストールするMSIアプリケーションを展開する。Windows Server 2012で動作するXenDesktop 7でホストする。 • ストリーム配信するApp-Vを展開する。Windows Server 2008 R2で動作するXenDesktop 7、またはWindows Server 2008 R2で動作するXenApp 6.5 FP2でホストする。 • ローカルにインストールするMSIアプリケーションを展開する。Windows Server 2008 R2で動作するXenDesktop 7、またはWindows Server 2008 R2で動作するXenApp 6.5 FP2でホストする。 • Windows 7/8 (32/64ビット) のローカルにインストールするMSIアプリケーションを展開する。 • Windows 7/8 (32/64ビット) にストリーム配信するApp-Vを展開する。 • アプリケーションを破棄して置き換える/互換性がある場合は、従来のApp-Vおよび/または従来のXenAppを使用して公開する。

Reports	<p>注 Forward Pathスクリプトをさらにカスタマイズして、実際の環境とビジネス決定に合わせて調整することができます。</p> <p>App-Vによるストリーム配信が適切であるという成果が出た場合は、App-V 5.0のシーケンス処理を自動化するために、タスクスクリプトとしてApp-V 5.0 Sequencer実行プロファイルが割り当てられます。</p> <p>Forward Pathレポートにアクセスするには、[Reports: Applications]、[Forward Path] の順に選択します。XenDesktop 7 Decisionレポートを選択するには、[Change Scenario] をクリックし、ボックスの一覧をクリックします。</p>
Overview Summary	<p>すべてのアクティブなレポートにわたって、アプリケーションポートフォリオの状態に関するハイレベルなダッシュボードビューを提供します。選択した各アプリケーションについて、アクティブなレポートごとに全体的なRAG (赤、黄、緑) 状態が表示されます。アプリケーションに関連する行でRAGアイコンをクリックすると、そのアプリケーションの修復レポートビューにアクセスできます。選択したプラットフォームを使用してアプリケーションを動作させるために必要な、修復の詳細が表示されます。</p>
XenApp Hosted/TS	<p>デスクトップアプリケーションの、サーバーでホストされる共有環境への展開との適合性をテストします。</p>
App-V 5.0	<p>デスクトップアプリケーションの、Microsoft Application Virtualization (App-V) 4.5、4.6 SP1、5.0との適合性をテストします。</p>
Windows 8/7	<p>特定のオペレーティングシステムのレポートを直接表示することによって、対象のオペレーティングシステム上でのアプリケーションの互換性を判断します。特定の問題をドリルダウンして、自動修正プログラムをダウンロードし、アプリケーションの修復方法について詳細情報を入手します。</p>
Server 2008 R2/2012	<p>対象のオペレーティングシステム上でのアプリケーションの互換性を判断します。アプリケーション名をクリックすると修復に関する詳細情報に直接アクセスでき、アプリケーションの修復に必要な作業の詳細を理解することができます。</p>

XenDesktop 7の移行手順

このセクションでは、AppDNA環境をセットアップした後で、AppDNAを使用してXenDesktop 7に移行する場合の推奨手順の概要を説明します。以下のフローチャートは、XenDesktop 7の移行パスの概要を示します。



<p>手順1 アプリケーションDNAのインポート</p>	<p>MSI形式のアプリケーションの場合は、 [Import & Analyze] 、 [Applications] 、 [Direct Import] の順に選択します。</p> <p>MSIではない形式のアプリケーションの場合は、 [Import & Analyze] 、 [Applications] 、 [Install Capture] の順に選択します。</p>
<p>手順2 アプリケーションの分析</p>	<p>App-V、XenAppでのホスト、Windows 7/8、64ビット、Windows Server 2012、およびWindows Server 2008 R2に対してアプリケーションを分析します。相互運用性ソリューションを使用して、同じサーバー上でホストできるアプリケーションを判断します。</p>

<p>手順3 Forward Pathスクリプトの 実行 (XenApp Hosted)</p>	<p>Forward Pathスクリプト [FP] XenDesktop 7.0 Decision.xmlを実行して、XenAppでのホスト、Windows Server 2012、Windows Server 2008 R2、64ビット、Windows 7/8、およびApp-Vに対するアプリケーションの互換性をチェックします。このスクリプトでは、Citrixの推奨技術スタックに基づいて見込まれる成果も報告されます。</p> <p>Forward Pathレポートにアクセスするには、[Reports: Applications] > [Forward Path] の順に選択します。XenDesktop 7 Decisionレポートを選択するには、[Change Scenario] をクリックし、ボックスの一覧をクリックします。タスクスクリプトを実行するには、[Evaluate Tasks] をクリックします。</p>
<p>手順4 修復</p>	<p>Forward Pathレポートのデータを確認し、RAG状態に基づいてアプリケーションの優先順位を決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 緑 - 使用できる場合はタスクスクリプトを実行し、ユーザー承認テストに進みます。 ● 黄色 - 詳細な修復レポートを参照して問題を確認し、修復または機能テストが必要かどうかを判断します。 ● 赤 - 詳細な修復レポートを参照して問題のコンポーネントを修復できるか、修復する必要があるのか、そして実行すべきアクションを判断します。アクションとは、再開発、Windows 7/8へのローカルインストール、従来のプラットフォームへの展開、廃棄、および置き換えを指します。Overviewレポートで最適なプラットフォームを確認します。 <p>Forward Pathレポート内のアプリケーション名をクリックして、そのアプリケーションの詳細な修復データに直接アクセスします。</p>
<p>手順5 タスクスクリプトの実行</p>	<p>App-V 5.0シーケンスへの移行が適切なアプリケーションに対してタスクスクリプトを実行します。</p> <p>[Start] をクリックして自動タスクスクリプトを実行し、App-V 5.0シーケンスを作成します。</p>
<p>手順6 App-V 5.0と互換性のあるアプリケーションの出力のテスト</p>	<p>作成される出力ファイルを見つけ、機能テストを実行します。</p>
<p>手順7 ユーザー承認テストの実施</p>	<p>上級ユーザーも参加するユーザー承認テストをアプリケーションに対して実施します。</p> <p>Forward Pathスクリプトを使用してAppDNAの拡張可能な機能を利用し、App-V 5.0シーケンスを展開およびテストする準備ができたなら、ユーザー承認テストを実施するグループにメールを送信します。</p>
<p>手順8 既知のソリューションでは互換性がないアプリケーションに関する代替策の特</p>	<p>互換性がない（修復できない、または修復費用がかかりすぎる）アプリケーションについては、AppDNAを使用して、従来の展開オプションの方が費用効果があるかどうかを判断します。費用効果がない場合は、アプリケーションを破棄して置き換えることを検討します。</p>

定	Overview Summaryレポートで、アプリケーションに最適なプラットフォームをすばやく確認することができます。
---	---

互換性チェック

以下の表は、互換性チェックの結果に基づいて見込まれる成果を示します。

互換性チェックの結果	成果
App-V、Windows Server 2012/2008 R2 (64ビットを含む)、およびXenAppでのホスト (およびWindows 7/8) で動作する。	ストリーム配信するApp-Vを展開する。Windows Server 2012/2008 R2で動作するXenDesktop 7、またはWindows Server 2008 R2で動作するXenApp 6.5 FP2でホストする。
Windows Server 2012/2008 R2 (64ビットを含む)、およびXenAppでのホスト (およびおそらくWindows 7/8) で動作する。	ローカルにインストールするMSIアプリケーションを展開する。Windows Server 2012/2008 R2で動作するXenDesktop 7、またはWindows Server 2008 R2で動作するXenApp 6.5 FP2でホストする。
App-V、Windows Server 2012 (64ビットを含む)、およびXenAppでのホスト (およびおそらくWindows 7/8) で動作する。	ストリーム配信するApp-Vを展開する。Windows Server 2012で動作するXenDesktop 7でホストする。
Windows Server 2012 (64ビットを含む)、およびXenAppでのホスト (およびおそらくWindows 7/8) で動作する。	ローカルにインストールするMSIアプリケーションを展開する。Windows Server 2012で動作するXenDesktop 7でホストする。
App-V、Windows Server 2008 R2 (64ビットを含む)、およびXenAppでのホスト (およびおそらくWindows 7/8) で動作する。	ストリーム配信するApp-Vを展開する。Windows Server 2008 R2で動作するXenDesktop 7、またはWindows Server 2008 R2で動作するXenApp 6.5 FP2でホストする。
Windows Server 2008 R2 (64ビットを含む)、およびXenAppでのホストで動作する。	ローカルにインストールするMSIアプリケーションを展開する。Windows Server 2008 R2で動作するXenDesktop 7、またはWindows Server 2008 R2で動作するXenApp 6.5 FP2でホストする。
Windows 7/8 (32/64ビット) で動作する。	Windows 7/8 (32/64ビット) のローカルにインストールするMSIアプリケーションを展開する。
App-V、Windows 7/8 (32/64ビット) で動作する。	Windows 7/8 (32/64ビット) にストリーム配信するApp-Vを展開する。
Windows Server 2012/2008 R2で動作するが、マルチユーザー環境 (RDS) およびWindows 7/8 (32/64ビット) で動作しない。	アプリケーションを破棄して置き換える/互換性がある場合は、従来のApp-Vおよび/または従来のXenAppを使用して公開する。

Windows Server 2012/2008 R2、および 互換性チェックの結果 Windows 7/8 (32/64ビット) で動作しな い。	アプリケーションを破棄して置き換える/互換性がある場合は、従来の 成果 App-Vおよび/または従来のXenAppを使用して公開する。
---	---

WindowsアプリケーションのApp-V 5.0への移行

Oct 16, 2015

このトピックでは、AppDNAを使用してMicrosoft WindowsアプリケーションをMicrosoft App-V 5.0に、またはMicrosoft App-V 4.6を5.0に移行する手順について説明します。

導入

アプリケーションに最適なCitrixモデルを決定するには、以下の手順に従います。

手順1 アプリケーションの検出	移行計画において予期しない遅れを防ぐには、環境内で使用されているアプリケーションを検出する必要があります。環境内で使用されているアプリケーションをAppDNAの統合機能 (Lakeside Software SysTrack) で検出し、それらの管理対象アプリケーションをインポートします。このとき、 Active Directory (AD) または Microsoft System Center Configuration Manager (Configuration Manager) との統合を通じてそれらのアプリケーションを展開したときに使用したインストールメディアを使用します。
手順2 インベントリと合理化の実行	エンタープライズ内で使用されているWindowsアプリケーションのインベントリと合理化を行うには、Lakeside SysTrackのようなツールを使用します。毎四半期および/または年度末に、6週間から2か月かけて環境を監視することが重要です。これにより、業務に重大な影響を与える未管理のアプリケーションが特定されるだけでなく、依然として使用されているアプリケーションや、重複する機能を持つ類似したアプリケーションがないかどうかも確認できます。
手順3 AppDNA環境の準備	このトピックの次のセクションで説明されているように、AppDNA環境をセットアップして構成します。これには、AppDNAのセットアップと、推奨されるソリューションで使用するAppDNA Forward Path機能およびAppDNA実行プロファイルスクリプトと共に使用するための、AppDNAの構成が含まれます。 AppDNA Forward Path機能はAppDNAに組み込まれている強力なビジネス決定エンジンで、さまざまな展開シナリオとその影響をモデル化することができます。
手順4 ソースメディアの検索	MSIおよびApp-V (SFT、APPV) ファイルを直接インポートすることができます。 MSIではないファイルにはAppDNA Install Capture機能が必要です。この機能では、仮想マシンを使用してアプリケーションをMSIにキャプチャします。 AppDNAセルフプロビジョニングツールを使って、MSIではないファイルをキャプチャすることもできます。セルフプロビジョニングにより、AppDNAへのアクセス権を持たないアプリケーションの専門家がキャプチャ処理を実行できます。アプリケーションの専門家がインストールできるように、AppDNA管理者が制御情報を準備して公開します。キャプチャは、AppDNAとは別のマシン (仮想、物理、またはVDI) で行います。
手順5 ADおよび/または Configuration Manager	管理対象アプリケーションを、Active Directory (AD) およびSystem Center Configuration Manager (Configuration Manager) を通じて展開したときに使用したインストールメディアを使用してインポートするには、まず、 ADおよびConfigMgrデータの

データのインポート	<p>ロードウィザードを使用してADおよびConfiguration ManagerのデータをAppDNAにロードします。</p> <p>データを直接または間接のどちらの方法でロードするかを決定します。ADおよびConfiguration Managerのデータを間接的にロードする場合は、AppDNAとは独立してADドメインコントローラー上またはConfiguration Managerサーバー上でデータを抽出できます。その結果、AppDNAユーザーが管理者にADまたはConfiguration Managerデータへのアクセス権を要求する必要も、ADドメインおよびConfiguration Managerの管理者がAppDNAをインストールする必要もありません。</p> <p>注：最上の結果を得るには、ADおよびConfiguration Managerのデータを両方ともインポートします。通常、ADは組織構造に関する豊富なデータを提供し、Configuration Managerは集中管理されているアプリケーションのデータを提供します。</p>
手順6 適切なシナリオの選択	<p>Microsoft App-V 4.6を使用して既にシーケンス化されているWindowsアプリケーションについては、Microsoft App-V 4.6 to App-V 5.0 Decision Forward Pathスクリプトを使用するプロセスに従います。</p> <p>Citrix AppDNAに既にインポート済みのWindowsアプリケーションについては、Microsoft App-V 5.0 Decision Forward Pathスクリプトを使用するプロセスに従います。</p>
手順7 AppDNAレポートの使用	<p>意思決定の材料にするレポートについては、後の — 「WindowsアプリケーションのApp-V 5.0への移行レポート」 を参照してください。このセクションにはForward Pathスクリプトについても記載されています。これらのスクリプトを使用して、意思決定のプロセスをシンプルにできます。業務ニーズをモデル化し、ソリューションを提供し、App-V 5.0シーケンスやMSIなど、互換性のあるアプリケーションに対する望ましい出力を自動化することができます。</p>
手順8 継続的なアプリケーション 評価の管理	<p>新しいアプリケーションが環境内に投入され、新しいService Pack、パッチ、およびアップグレードによって環境が影響を受けるのにあわせて、アプリケーションおよびエンドユーザーに影響を与える変化を、AppDNAを使用して管理およびモデル化します。</p>

AppDNAの構成

WindowsアプリケーションをApp-V 5.0に移行するときは、AppDNAを以下の手順で構成します。

手順1 優先順位別のアプリケーションのグループ化	<p>AppDNAグループを作成して、適宜にアプリケーションを組織します。優先順位別または事業単位別にグループ化できます。グループの作成とアプリケーションのインポートおよび分析が完了したら、グループを使用して、発生した問題の複雑度に基づいてグループ内の優先順位を判断することができます。</p>
手順2 AppDNAスクリプトのリクエスト	<p>Citrixは、ダウンロード可能なForward Pathおよび実行プロファイルのスクリプトライブラリを提供しています（ただしサポート対象外です）。これらのスクリプトは、アプリケーションに関するビジネス決定をモデル化し、Microsoft App-V 5.0アプリケーションシーケンスやMSIなどのプロセスを自動化するためにカスタマイズされています。</p> <p>このソリューションでは、AppDNAに付属の実行プロファイルスクリプトおよびダウン</p>

	<p>ロード可能な以下のスクリプトを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [EP] Converter_App-V4.6_to_App-V5.0 • [FP] Microsoft App-V 4.6 to App-V 5.0 Decision • [FP] Microsoft App-V 5.0 Decision <p>スクリプトを入手するには、Podioアカウントをセットアップして、appdnafeedback@citrix.com宛てにAppDNA Extensions Podioサイトへのアクセスをリクエストします。</p>
<p>手順3 Install Capture (MSIではないファイル用) および Forward Path自動化のための仮想マシンの作成</p>	<p>サポートされる技術に基づく仮想マシンを作成して、Install CaptureおよびForward Pathと共に使用します。仮想マシンのオペレーティングシステムはアプリケーションが動作するオペレーティングシステムと同じである必要があります。</p> <p>インストーラーがMSIではないアプリケーションのDNAをAppDNAデータベースにインポートする前に、インポート処理の一部として、Install Captureを使用してそのアプリケーションをインストールおよびキャプチャします。</p> <p>Forward Pathは、アプリケーションの成果の判定およびプロセスの自動化のために使用します。ここでプロセスとは、Microsoft App-V 4.6シーケンスからMicrosoft App-V 5.0シーケンスへの変換や、MSI/EXEのソースメディアを使用するMicrosoft App-V 5.0シーケンスの作成などです。仮想マシンのオペレーティングシステムは移行先のオペレーティングシステムと同じである必要があります。</p>
<p>手順4 MSIではないファイルのキャプチャおよびForward Path自動化のための仮想マシンの構成</p>	<p>AppDNA Install Captureのセットアップ要件の概要を確認します。概要の最後に、以下の各仮想化技術へのリンクがあります。仮想マシンの構成の詳細は、基礎になる仮想化技術に応じて異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • XenServer • Hyper-V • Microsoft Virtual Server • vSphere • VMware Workstation • VMwareサーバー <p>これらの仮想化技術のトピックには、共有出力フォルダーの作成方法が記載されています。Microsoft App-V 4.6 to Microsoft App-V 5.0実行プロファイルを使用する場合は、追加的なフォルダー構成が必要です。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ホストマシンに、仮想マシンからフルアクセスできるソースフォルダーを作成します。たとえば、「\\xxx.xxx.xx\AppDNA_Output\AppV_Convert」です。このとき、フォルダー名にスペースを含めないでください。 2. このフォルダーに、アプリケーションごとにフォルダーを作成します。このフォルダーに、アプリケーションのOSDおよびSFTファイルを配置します。これが、実行プロファイルの [Replaceables] タブに定義するソースフォルダーになります (\\xxx.xxx.xx\AppDNA_Output\AppV_Convert) 。 3. さらに、ターゲットフォルダーになるサブフォルダーを作成します。たとえば、「\\xxx.xxx.xx\AppDNA_Output\AppV_Convert\v5」です。

<p>手順5 仮想マシンへの必要なソフトウェアのインストール</p>	<p>Microsoft App-V 4.6シーケンスからMicrosoft App-V 5.0シーケンスへの変換およびMicrosoft App-V 5.0シーケンスの作成を自動化するために使用する仮想マシンに、以下のソフトウェアをインストールします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Microsoft App-V 5.0 ● PowerShell 3.0
<p>手順6 Microsoft App-V 5.0 Sequencer実行プロファイルのAppDNAへのインポート</p>	<p>Microsoft App-V 5.0 Sequencer実行プロファイルスクリプトをAppDNAにインポートするには：</p> <p>注：App-V 5.0 Sequencer.xmlはデフォルトでC:\Program Files\Citrix\AppDNA\Client\Execution ProfilesまたはC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Client\Execution Profilesにインストールされます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. AppDNAにログオンし、[Edit]、[Settings]の順に選択します。 2. [Settings] ダイアログボックスで、[Install Capture] をクリックします。 3. [Execution Profile] タブをクリックします。 4. ダイアログボックスの下部にある[Import] をクリックします。 5. [Load Profiles] ダイアログボックスで、次の操作を実行します： <ol style="list-style-type: none"> 1. Podioからダウンロードした実行プロファイルファイルの場所を指定します。 2. アクティブ化する実行プロファイルを選択して、[Open] をクリックします。
<p>手順7 Forward Pathスクリプトおよび実行プロファイルのダウンロード</p>	<p>AppDNA Extensions Podioサイトから、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ページの上部にある[Extensions] をクリックします。 2. [[EP] Converter_App-V4.6_to_App-V5.0] をクリックします。 3. [Files] で、最新バージョンの[EP] Converter_App-V4.6_to_App-V5.0.xmlを右クリックして、[Save target as...] を選択して、ローカルコンピューターにファイルを保存します。 4. 拡張機能の一覧に戻り、[[FP] Microsoft App-V 5.0 Decision] をクリックします。 5. [Files] で、最新バージョンの[FP] Microsoft App-V 5.0 Decision.xmlを右クリックして、[Save target as...] を選択して、ローカルコンピューターにファイルを保存します。
<p>手順8 Microsoft App-V 4.6 to Microsoft App-V 5.0実行プロファイルのAppDNAへのインポート</p>	<p>PodioからダウンロードしたMicrosoft App-V 4.6 to App-V 5.0 Converter実行プロファイルスクリプトをCitrix AppDNAにインポートするには：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. AppDNAにログオンし、[Edit] > [Settings]の順に選択します。 2. [Settings] ダイアログボックスで、[Install Capture] をクリックします。 3. [Execution Profile] タブをクリックします。 4. ダイアログボックスの下部にある[Import] をクリックします。 5. [Load Profiles] ダイアログボックスで、次の操作を実行します： <ol style="list-style-type: none"> 1. Podioからダウンロードした実行プロファイルファイルの場所を指定します。 2. アクティブ化する実行プロファイルを選択して、[Open] をクリックします。 3. [Execution Profiles] タブでインポートした実行プロファイルをクリックし、[Edit] をクリックし、[Replaceables] タブをクリックします。

	<ol style="list-style-type: none"> 4. SourceFolder場所置き換え可能パラメーターを選択し、[Edit] をクリックし、「\\xxx.xxx.xx\AppDNA_Output\AppV_Convert」のようなソースファイルへのパスを入力します。そして、[OK] をクリックします。 5. TargetFolder場所置き換え可能パラメーターを選択し、[Edit] をクリックし、「\\xxx.xxx.xx\AppDNA_Output\AppV_Convert\v5」のようなターゲットフォルダーへのパスを入力します。そして、[OK] をクリックします。 6. [Save] をクリックして変更を保存し、[Settings] ダイアログボックスを閉じます。
<p>手順9 Forward PathスクリプトのAppDNAへのインポート</p>	<p>ダウンロードしたMicrosoft App-V 4.6 to App-V 5.0 Decisionおよび/またはMicrosoft App-V 5.0 Decision Forward PathスクリプトをAppDNAにインポートするには：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. AppDNAにログオンし、[Configure] > [Forward Path] の順に選択します。 2. [Forward Path Logic Editor] 画面で [Import] をクリックします。 3. ダウンロードしたForward Pathスクリプトを選択して [Open] をクリックします。 4. [Import] をクリックします。 5. ファイルが正常にインポートされたことを示すメッセージが表示されたら [OK] をクリックします。
<p>手順10 Forward Pathスクリプトの構成： Microsoft App-V 4.6 to App-V 5.0 Decision Microsoft App-V 5.0 Decision</p>	<p>これらのForward Pathスクリプトにより、Microsoft App-VおよびWindows 7に対するアプリケーションの互換性がチェックされます。64ビット版Windows 7および32ビット版Windows 7の両方でApp-Vシーケンスの作成/変換を自動化するオプションを考慮して、両方のForward Pathスクリプトに8つのタスクスクリプトが割り当てられています。</p> <p>お使いのAppDNA環境に合わせてスクリプトを構成するには：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. AppDNAにログオンし、[Configure] > [Forward Path] の順に選択します。 2. [Scenarios] タブで [Microsoft App-V 4.6 to App-V 5.0 Decision] または [Microsoft App-V 5.0 Decision] をクリックします。 3. [Editor] タブをクリックし、スクリプトを表示して編集します。 異なるオペレーティングシステムを参照するなど、環境のニーズを満たすようにスクリプトを編集することができます。 4. 参照するオペレーティングシステムを変更するには、ウィンドウ右側の [Property Explorer] タブを使用します。 [Applications] > [Modules] の順に展開し、オペレーティングシステムの一覧とその参照方法を表示します。Windows7への参照を望ましいオペレーティングシステムへの参照に置き換えます。
<p>手順11 タスクスクリプトの構成</p>	<p>ダウンロードしてインポートしたForward Pathスクリプトには8つのタスクスクリプトが割り当てられており、Microsoft App-V 5.0シーケンスの作成またはMicrosoft App-V 4.6シーケンスからMicrosoft App-V 5.0シーケンスへの変換を自動化することができます。処理の自動化に使用する実際のCitrix AppDNA仮想マシン名および実行プロファイルを参照するように、タスクスクリプトを構成する必要があります。</p> <p>Forward Pathタスクスクリプトを構成するには：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. [Scenarios] タブで、編集するForward Pathスクリプトのノードを展開します。

選択したタスクスクリプトの内容が [Editor] タブに表示されます。32ビット版および64ビット版の両方のWindows 7を対象に、Microsoft App-Vの処理を自動化できるタスクスクリプトがあります。使用予定のないスクリプトは削除できます。

- 21行目まで下にスクロールします。タスクスクリプトには、使用する実行プロファイルが、たとえば、Microsoft App-V 5.0 Decisionに対してApp-V 5.0 Sequencerが事前設定されています。

例：

```
ProductionManager.RunExecutionProfile(controller, "Execution Profile Name",  
replaceables, "Default VM Configuration")
```

これを以下のように変更します。

```
ProductionManager.RunExecutionProfile(controller, "App-V 5.0 Sequencer",  
replaceables, "Your VM Name as shown in Install Capture Settings")
```

- 仮想マシン名を確認するには、AppDNAメニューから [Edit] > [Settings] の順に選択します。左ペインで [Install Capture] を選択します。[Virtual Machine] タブの [Name] 列に表示される名前を使用します。
- [Save] をクリックして変更を保存します。
- 各タスクスクリプトについて繰り返します。

WindowsアプリケーションのApp-V 5.0への移行レポート

以下の表は、WindowsアプリケーションのApp-V 5.0への移行に必要なレポートを示します。これらのレポートにより、意思決定に役立つデータが提供されます。

レポートにアクセスするには、サイドバーの [Reports: Applications] をクリックします。

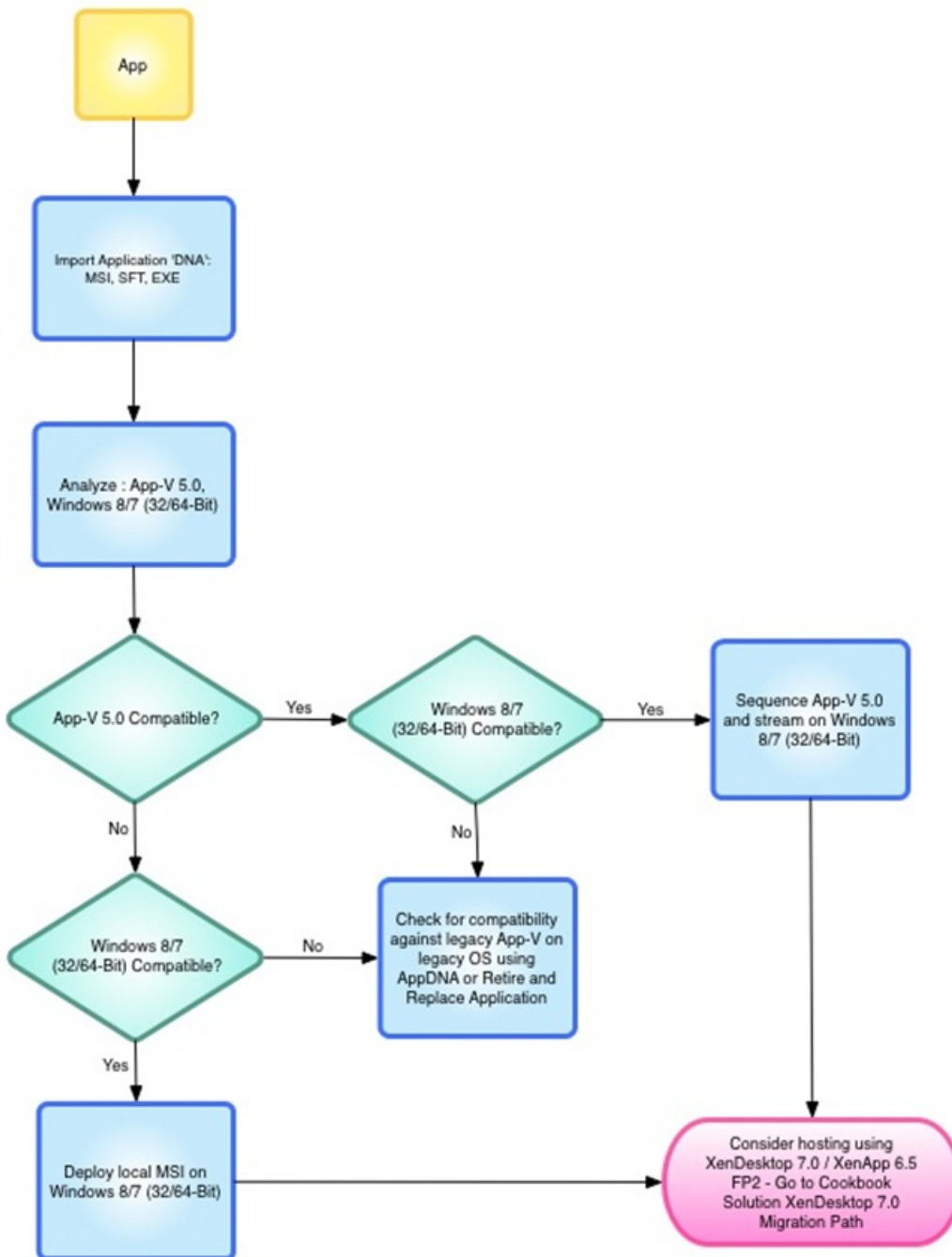
Reports	説明
Forward Path	<p>組織の決定に基づくシナリオを反映し、結果に応じて自動化タスクスクリプトを実行するために使用されます。Forward Pathスクリプトを実行した成果として、App-Vパッケージとして64ビット版Windows 7に展開する、プラットフォームを廃棄/置き換える、または代替プラットフォームを特定することが必要であると判明する可能性があります。</p> <p>Forward Pathレポートを使用して、組織の決定を反映し、結果に基づいてタスクスクリプトを実行します。このソリューションのために構成されているForward Pathレポートは以下の2つです。</p> <ul style="list-style-type: none">● Microsoft App-V 5.0 Decision - アプリケーションがMicrosoft App-V 5.0でのシーケンス化に適切であるかどうかを判定するために使用します。アプリケーションがMicrosoft App-V 5.0でのシーケンス化に適切である場合は、シーケンス処理を自動化するタスクスクリプトが提供されます。Microsoft App-Vによるストリーム配信が適切である、または可能であるという成果が出た場合は、Microsoft App-V 5.0のシーケンス処理を自動化するために、タスクスクリプトでApp-V 5.0 Sequencer実行プロファイルが参照されます。● Microsoft App-V 4.6 to App-V 5.0 Decision - Microsoft App-Vによるストリーム配信が適切である、または可能であるという成果が出た場合に、Microsoft App-V 4.6シーケンスをApp-V 5.0シーケンスに変換

Reports	<p>説明 するために使用します。</p> <p>Microsoft App-Vによるストリーム配信が適切である、または可能であるという成果が出た場合に、Microsoft App-V 4.6からApp-V 5.0へのシーケンス変換を自動化するために、タスクスクリプトで[EP] Converter_App-V4.6_to_App-V5.0が参照されます。</p> <p>Forward Pathレポートにアクセスするには、[Reports: Applications] > [Forward Path] の順にクリックします。[Change Scenario] をクリックし、ボックスの一覧からMicrosoft App-V 5.0 DecisionまたはMicrosoft App-V 4.6 to App-V 5.0 Decisionレポートを選択します。</p> <p>注：Forward Pathスクリプトをさらにカスタマイズして、実際の環境とビジネス決定に合わせて調整することができます。</p>
Overview Summary	<p>すべてのアクティブなレポートにわたって、アプリケーションポートフォリオの状態に関するハイレベルなダッシュボードビューを提供します。選択した各アプリケーションについて、アクティブなレポートごとに全体的なRAG（赤、黄、緑）状態が表示されます。アプリケーションに関連する行でRAGアイコンをクリックすると、そのアプリケーションの修復レポートビューにアクセスできます。選択したプラットフォームを使用してアプリケーションを動作させるために必要な、修復の詳細が表示されます。</p>
Microsoft App-V 5.0	<p>デスクトップアプリケーションの、Microsoft Application Virtualization (App-V) 4.5、4.6 SP1、5.0との適合性をテストします。</p>
Microsoft Windows 8/7	<p>特定のオペレーティングシステムのレポートを直接表示することによって、対象のオペレーティングシステム上でのアプリケーションの互換性を判断します。特定の問題をドリルダウンして、自動修正プログラムをダウンロードし、アプリケーションの修復方法について詳細情報を入手します。</p>

WindowsアプリケーションのApp-V 5.0への移行手順

このセクションでは、Microsoft WindowsアプリケーションをMicrosoft App-V 5.0に移行するための推奨プロセスについて詳しく説明します。このプロセスでは、App-V 5.0、Windows 8/7、Windows Server 2012/2008 R2、および64ビットに対するアプリケーションの互換性の評価を行います。このセクションでは、App-V 4.6シーケンスをApp-V 5.0シーケンスに変換する方法と、App-V 5.0シーケンスを作成する方法についても説明します。

このフローチャートは、移行および通常業務のプロセスに、AppDNAをどのように組み込むかを示します。



<p>手順1 アプリケーションDNAのインポート</p>	<p>MSI形式のアプリケーションの場合は、 [Import & Analyze] > [Applications] > [Direct Import] の順に選択します。</p> <p>MSIではない形式のアプリケーションの場合は、 [Import & Analyze] > [Applications] > [Install Capture] の順に選択します。</p>
<p>手順2 アプリケーションの分析</p>	<p>Microsoft Windows8/7、64ビット、およびApp-Vに対してアプリケーションを分析します。アプリケーションをMicrosoftサーバープラットフォームでホストする場合は、Windows Server 2012/2008 R2を含めます。</p>
<p>手順3</p>	<p>Forward PathスクリプトのMicrosoft App-V 4.6 to App-V 5.0 Decisionを実行して、</p>

Forward Pathスクリプトの実行	<p>Microsoft App-V 4.6を使用してシーケンス化したアプリケーションの、Microsoft Windows 8/7、64ビット、およびApp-V 5.0に対する互換性をチェックし、App-V 5.0への移行が適切である、または可能であるアプリケーションを確認します。</p> <p>Forward PathスクリプトのMicrosoft App-V 5.0 Decisionを実行して、アプリケーションの、Microsoft Windows 8/7およびApp-V 5.0に対する互換性をチェックし、App-V 5.0への移行が適切である、または可能であるアプリケーションを確認します。</p> <ol style="list-style-type: none"> Forward Pathレポートにアクセスするには、[Reports: Applications] > [Forward Path] の順に選択します。[Change Scenario] をクリックし、ボックスの一覧からMicrosoft App-V 4.6 to App-V 5.0 DecisionまたはMicrosoft App-V 5.0 Decisionレポートを選択します。 タスクスクリプトを実行するには、[Evaluate Tasks] をクリックします。
手順4 修復	<p>Forward Pathレポートのデータを確認し、RAG状態に基づいてアプリケーションの優先順位を決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 緑 - 使用できる場合はタスクスクリプトを実行し、ユーザー承認テストに進みます。 黄色 - 詳細な修復レポートを参照して問題を確認し、修復または機能テストが必要かどうかを判断します。使用できる場合はタスクスクリプトを実行し、ユーザー承認テストに進みます。 赤 - 詳細な修復レポートを参照して問題のコンポーネントを修復できるか、修復する必要があるのか、そして実行すべきアクションを判断します。アクションとは、再開発、Windows 7/8へのローカルインストール、従来のプラットフォームへの展開、または廃棄と置き換えを指します。Overviewレポートで最適なプラットフォームを確認します。 <p>注：Forward Pathレポート内のアプリケーション名をクリックして、そのアプリケーションの詳細な修復データに直接アクセスします。</p>
手順5 タスクスクリプトの実行	<p>App-V 5.0への移行が適切なアプリケーションに対してタスクスクリプトを実行します。適切な場合は [Automated Task Script] 列に「Yes」と表示されます。</p> <p>[Start] をクリックして自動タスクスクリプトを実行し、Microsoft App-V 4.6シーケンスをMicrosoft App-V 5.0シーケンスに変換するか、Microsoft App-V 5.0シーケンスを作成します。</p>
手順6 App-V 5.0と互換性のあるアプリケーションの出力のテスト	<p>作成される出力ファイルを見つけ、機能テストを実行します。</p>
手順7 ユーザー承認テストの実施	<p>上級ユーザーも参加するユーザー承認テストをアプリケーションに対して実施します。</p> <p>Forward Pathスクリプトを使用してAppDNAの拡張可能な機能を利用し、App-V 5.0シーケンスを展開およびテストする準備ができたなら、ユーザー承認テストを実施するグループにメールを送信します。</p>

手順8
既知のソリューションでは
互換性がないアプリケー
ションに関する代替策の特
定

互換性がない（修復できない、または修復費用がかかりすぎる）アプリケーションについては、AppDNAを使用して、従来の展開オプションの方が費用効果があるかどうかを判断します。費用効果がない場合は、アプリケーションを破棄して置き換えることを検討します。

Overview Summaryレポートで、アプリケーションに最適なプラットフォームをすばやく確認することができます。

Citrix ストリーム配信アプリケーションのApp-V 5.0への移行

Oct 16, 2015

Citrix XenAppおよびXenDesktopは、ユーザーデバイスへのアプリケーションのストリーム配信のために、Microsoft App-V 5.0を推奨技術としてサポートするようになりました。Citrixのアプリケーションストリーム配信技術を使用してプロファイル化したアプリケーションは、おそらく、App-V 5.0への移行が適切です。App-V 5.0を使用してアプリケーションを再シーケンス化する必要がありますが、AppDNAで自動的に実行できます。

このトピックでは、AppDNAを確実に最大限に活用するための手順について説明します。AppDNAソフトウェア環境の構築に必要な手順を説明し、環境の準備およびアプリケーションの移行に役立つ追加ドキュメントへのリンクを提供します。

移行が完了した後は、引き続きAppDNAを日常業務に使用して、環境に投入される新しいアプリケーションに最適なプラットフォームを判断することができます。これには、アプリケーションをストリーム配信およびホスティングすることが適切かどうか、XenDesktopまたはXenAppでサポートされるオペレーティングシステムまたは従来のオペレーティングシステムに対する互換性、アプリケーション間の相互運用性の判断と、Forward Pathを使用したビジネス決定のモデル化とプロセスの自動化が含まれます。

導入

AppDNAソフトウェアにインポートしてApp-V 5.0に移行するアプリケーションを判断するには、以下の手順に従います。

手順1 アプリケーションの検出	移行計画において予期しない遅れを防ぐには、環境内で使用されているアプリケーションを検出する必要があります。環境内で使用されているアプリケーションをAppDNAの統合機能 (Lakeside Software SysTrack) で検出し、それらの管理対象アプリケーションをインポートします。このとき、 Active Directory (AD) または Microsoft System Center Configuration Manager (Configuration Manager) との統合を通じてそれらのアプリケーションを展開したときに使用したインストールメディアを使用します。
手順2 インベントリと合理化の実行	エンタープライズ内で使用されているWindowsアプリケーションのインベントリと合理化を行うには、Lakeside SysTrackのようなツールを使用します。毎四半期および/または年度末に、6週間から2か月かけて環境を監視することが重要です。これにより、業務に重大な影響を与える未管理のアプリケーションが特定されるだけでなく、依然として使用されているアプリケーションや、重複する機能を持つ類似したアプリケーションがないのかも確認できます。
手順3 AppDNA環境の準備	このトピックの次のセクションで説明されているように、AppDNA環境をセットアップして構成します。これには、AppDNAのセットアップと、推奨されるソリューションで使用するAppDNA Forward Path機能およびAppDNA実行プロファイルスクリプトと共に使用するための、AppDNAの構成が含まれます。 AppDNA Forward Path機能はAppDNAに組み込まれている強力なビジネス決定エンジンで、さまざまな展開シナリオとその影響をモデル化することができます。
手順4	MSIおよびApp-V (SFT、APPV) ファイルを直接インポートすることができます。

<p>ソースメディアの検索</p>	<p>MSIではないファイルにはAppDNA Install Capture機能が必要です。この機能では、仮想マシンを使用してアプリケーションをMSIにキャプチャします。</p> <p>AppDNAセルフプロビジョニングツールを使って、MSIではないファイルをキャプチャすることもできます。セルフプロビジョニングにより、AppDNAへのアクセス権を持たないアプリケーションの専門家がキャプチャ処理を実行できます。アプリケーションの専門家がインストールできるように、AppDNA管理者が制御情報を準備して公開します。キャプチャは、AppDNAとは別のマシン（仮想、物理、またはVDI）で行います。</p>
<p>手順5 ADおよび/または Configuration Managerデータのインポート</p>	<p>管理対象アプリケーションを、Active Directory (AD) およびSystem Center Configuration Manager (Configuration Manager) を通じて展開したときに使用したインストールメディアを使用してインポートするには、まず、ADおよびConfigMgrデータのロードウィザードを使用してADおよびConfiguration ManagerのデータをAppDNAにロードします。</p> <p>データを直接または間接のどちらの方法でロードするかを決定します。ADおよびConfiguration Managerのデータを間接的にロードする場合は、AppDNAとは独立してADドメインコントローラー上またはConfiguration Managerサーバー上でデータを抽出できます。その結果、AppDNAユーザーが管理者にADまたはConfiguration Managerデータへのアクセス権を要求する必要も、ADドメインおよびConfiguration Managerの管理者がAppDNAをインストールする必要もありません。</p> <p>注：最上の結果を得るには、ADおよびConfiguration Managerのデータを両方ともインポートします。通常、ADは組織構造に関する豊富なデータを提供し、Configuration Managerは集中管理されているアプリケーションのデータを提供します。</p>
<p>手順6 AppDNAレポートの使用</p>	<p>意思決定の材料にするレポートについては、後の — 「ストリーム配信アプリケーションのApp-V 5.0への移行レポート」 を参照してください。このセクションにはForward Pathスクリプトについても記載されています。これらのスクリプトを使用して、意思決定のプロセスをシンプルにできます。業務ニーズをモデル化し、ソリューションを提供し、App-V 5.0シーケンスやMSIなど、互換性のあるアプリケーションに対する望ましい出力を自動化することができます。</p>
<p>手順7 継続的なアプリケーション 評価の管理</p>	<p>新しいアプリケーションが環境内に投入され、新しいService Pack、パッチ、およびアップグレードによって環境が影響を受けるのにあわせて、アプリケーションおよびエンドユーザーに影響を与える変化を、AppDNAを使用して管理およびモデル化します。</p>

AppDNAのセットアップおよび構成

以下の手順に従って、ストリーム配信アプリケーションをApp-V 5.0に移行するためにAppDNAをセットアップして構成します。

<p>手順1 優先順位別のアプリケーションのグループ化</p>	<p>AppDNAグループを作成して、適宜にアプリケーションを組織します。優先順位別または事業単位別にグループ化できます。グループの作成とアプリケーションのインポートおよび分析が完了したら、グループを使用して、発生した問題の複雑度に基づいてグループ内の優先順位を判断することができます。</p>
-------------------------------------	---

<p>手順2 AppDNAスクリプトのリクエスト</p>	<p>Citrixは、ダウンロード可能なForward Pathおよび実行プロファイルのスクリプトライブラリを提供しています（ただしサポート対象外です）。これらのスクリプトは、アプリケーションに関するビジネス決定をモデル化し、Microsoft App-V 5.0アプリケーションシーケンスやMSIなどのプロセスを自動化するためにカスタマイズされています。</p> <p>このソリューションでは、AppDNAに付属の実行プロファイルスクリプトおよびダウンロード可能な以下のスクリプトを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [EP] Converter_App-V4.6_to_App-V5.0 • [FP] Microsoft App-V 4.6 to App-V 5.0 Decision • [FP] Microsoft App-V 5.0 Decision <p>スクリプトを入手するには、Podioアカウントをセットアップして、appdnafeedback@citrix.com宛てにAppDNA Extensions Podioサイトへのアクセスをリクエストします。</p>
<p>手順3 Install Capture（MSIではないファイル用）およびForward Path自動化のための仮想マシンの作成</p>	<p>サポートされる技術に基づく仮想マシンを作成して、Install CaptureおよびForward Pathと共に使用します。仮想マシンのオペレーティングシステムはアプリケーションが動作するオペレーティングシステムと同じである必要があります。</p> <p>インストーラーがMSIではないアプリケーションのDNAをAppDNAデータベースにインポートする前に、インポート処理の一部として、Install Captureを使用してそのアプリケーションをインストールおよびキャプチャします。</p> <p>Forward Pathは、アプリケーションの成果の判定およびプロセスの自動化のために使用します。ここでプロセスとは、Microsoft App-V 4.6シーケンスからMicrosoft App-V 5.0シーケンスへの変換や、MSI/EXEのソースメディアを使用するMicrosoft App-V 5.0シーケンスの作成などです。仮想マシンのオペレーティングシステムは移行先のオペレーティングシステムと同じである必要があります。</p>
<p>手順4 MSIではないファイルのキャプチャおよびForward Path自動化のための仮想マシンの構成</p>	<p>AppDNA Install Captureのセットアップ要件の概要を確認します。概要の最後に、以下の各仮想化技術へのリンクがあります。仮想マシンの構成の詳細は、基礎になる仮想化技術に応じて異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • XenServer • Hyper-V • vSphere • VMware Workstation <p>これらの仮想化技術のトピックには、共有出力フォルダーの作成方法が記載されています。Microsoft App-V 4.6 to Microsoft App-V 5.0実行プロファイルを使用する場合は、追加的なフォルダー構成が必要です。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ホストマシンに、仮想マシンからフルアクセスできるソースフォルダーを作成します。たとえば、「\\xxx.xxx.xx\AppDNA_Output\AppV_Convert」です。このとき、フォルダー名にスペースを含めないでください。 2. このフォルダーに、アプリケーションごとにフォルダーを作成します。このフォルダーに、アプリケーションのOSDおよびSFTファイルを配置します。これが、実行プロファイルの [Replaceables] タブに定義するソースフォルダーになり

	<p>ます (\\xxx.xxx.xx\AppDNA_Output\AppV_Convert)。</p> <p>3. さらに、ターゲットフォルダーになるサブフォルダーを作成します。たとえば、「\\xxx.xxx.xx\AppDNA_Output\AppV_Convert\v5」です。</p>
<p>手順5 仮想マシンへの必要なソフトウェアのインストール</p>	<p>Microsoft App-V 4.6シーケンスからMicrosoft App-V 5.0シーケンスへの変換およびMicrosoft App-V 5.0シーケンスの作成を自動化するために使用する仮想マシンに、以下のソフトウェアをインストールします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Microsoft App-V 5.0 • PowerShell 3.0
<p>手順6 Microsoft App-V 5.0 Sequencer実行プロファイルのAppDNAへのインポート</p>	<p>Microsoft App-V 5.0 Sequencer実行プロファイルスクリプトをAppDNAにインポートするには：</p> <p>注：App-V 5.0 Sequencer.xmlはデフォルトでC:\Program Files\Citrix\AppDNA\Client\Execution ProfilesまたはC:\Program Files(x86)\Citrix\AppDNA\Client\Execution Profilesにインストールされます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. AppDNAにログオンし、[Edit]、[Settings]の順に選択します。 2. [Settings] ダイアログボックスで、[Install Capture] をクリックします。 3. [Execution Profile] タブをクリックします。 4. ダイアログボックスの下部にある[Import] をクリックします。 5. [Load Profiles] ダイアログボックスで、次の操作を実行します： <ol style="list-style-type: none"> 1. Podioからダウンロードした実行プロファイルファイルの場所を指定します。 2. アクティブ化する実行プロファイルを選択して、[Open] をクリックします。
<p>手順7 Forward Pathスクリプトおよび実行プロファイルのダウンロード</p>	<p>AppDNA Extensions Podioサイトから、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ページの上部にある[Extensions] をクリックします。 2. [[FP] Microsoft App-V 5.0 Decision] をクリックします。 3. [Files] で、最新バージョンの[FP] Microsoft App-V 5.0 Decision.xmlを右クリックして、[Save target as...] を選択して、ローカルコンピューターにファイルを保存します。
<p>手順8 Forward PathスクリプトのAppDNAへのインポート</p>	<p>ダウンロードしたMicrosoft App-V 5.0 Decision Forward PathスクリプトをAppDNAにインポートするには：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. AppDNAにログオンし、[Configure]、[Forward Path]の順に選択します。 2. [Forward Path Logic Editor] 画面で[Import] をクリックします。 3. ダウンロードしたForward Pathスクリプトを選択して[Open] をクリックします。 4. [Import] をクリックします。 5. ファイルが正常にインポートされたことを示すメッセージが表示されたら[OK] をクリックします。
<p>手順9 Microsoft App-V 5.0 Decision Forward Pathスクリプト</p>	<p>このForward Pathスクリプトにより、アプリケーションとMicrosoft App-Vおよび64ビット版Windows 7との互換性がチェックされます。64ビット版Windows 7および32ビット</p>

<p>リプトの構成</p>	<p>版Windows 7の両方でApp-Vシーケンスの作成/変換を自動化するオプションを考慮して、Forward Pathスクリプトに8つのタスクスクリプトが割り当てられています。</p> <p>お使いのAppDNA環境に合わせてスクリプトを構成するには：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. AppDNAにログオンし、[Configure]、[Forward Path]の順に選択します。 2. [Scenarios] タブで [Microsoft App-V 5.0 Decision] をクリックします。 3. [Editor] タブをクリックし、スクリプトを表示して編集します。 異なるオペレーティングシステムを参照するなど、環境のニーズを満たすようにスクリプトを編集することができます。 4. 参照するオペレーティングシステムを変更するには、ウィンドウ右側の[Property Explorer] タブを使用します。 [Applications]、[Modules]の順に展開し、オペレーティングシステムの一覧とその参照方法を表示します。Windows7への参照を望ましいオペレーティングシステムへの参照に置き換えます。
<p>手順10 タスクスクリプトの構成</p>	<p>ダウンロードしてインポートしたForward Pathスクリプトには8つのタスクスクリプトが割り当てられており、Microsoft App-V 5.0シーケンスの作成を自動化することができます。処理の自動化に使用する実際のAppDNA仮想マシン名および実行プロファイルを参照するように、タスクスクリプトを構成する必要があります。</p> <p>Forward Pathタスクスクリプトを構成するには：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. [Scenarios] タブで、編集するForward Pathスクリプトのノードを展開します。 選択したタスクスクリプトの内容が[Editor] タブに表示されます。32ビット版および64ビット版の両方のWindows 7を対象に、Microsoft App-Vの処理を自動化できるタスクスクリプトがあります。使用予定のないスクリプトは削除できます。 2. 21行目まで下にスクロールします。タスクスクリプトには、使用する実行プロファイルが、たとえば、Microsoft App-V 5.0 Decisionに対してApp-V 5.0 Sequencerが事前設定されています。 例： <pre>ProductionManager.RunExecutionProfile(controller, "Execution Profile Name", replaceables, "Default VM Configuration")</pre> これを以下のように変更します。 <pre>ProductionManager.RunExecutionProfile(controller, "App-V 5.0 Sequencer", replaceables, "Your VM Name as shown in Install Capture Settings")</pre> 3. 仮想マシン名を確認するには、AppDNAメニューから [Edit]、[Settings]の順に選択します。左ペインで [Install Capture] を選択します。[Virtual Machine] タブの [Name] 列に表示される名前を使用します。 4. [Save] をクリックして変更を保存します。 5. 各タスクスクリプトについて繰り返します。

ストリーム配信アプリケーションのApp-V 5.0への移行レポート

以下の表は、ストリーム配信アプリケーションのApp-V 5.0への移行に必要なレポートを示します。これらのレポートにより、意思決定に役立つデータが提供されます。

レポートにアクセスするには、サイドバーの[Reports: Applications] をクリックします。

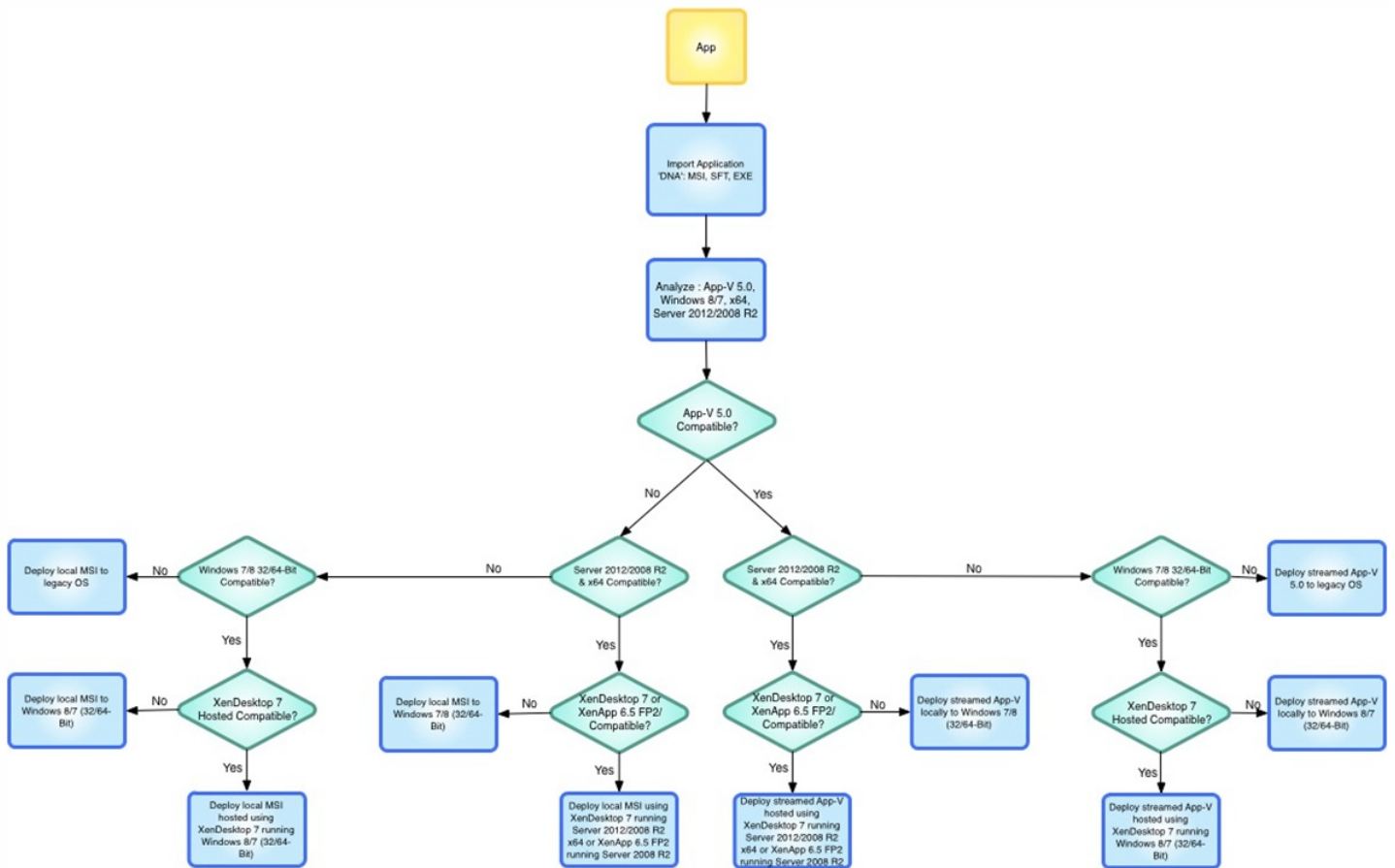
Reports	説明
Forward Path	<p>組織の決定に基づくシナリオを反映し、結果に応じて自動化タスクスクリプトを実行するために使用されます。Forward Pathスクリプトを実行した成果として、App-Vパッケージとして64ビット版Windows 7に展開する、プラットフォームを廃棄/置き換える、または代替プラットフォームを特定することが必要であると判明する可能性があります。</p> <p>Forward Pathレポートを使用して、組織の決定を反映し、結果に基づいてタスクスクリプトを実行します。このソリューションのために構成されているForward Pathレポートは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> Microsoft App-V 5.0 Decision - アプリケーションがMicrosoft App-V 5.0でのシーケンス化に適切であるかどうかを判定するために使用します。アプリケーションがMicrosoft App-V 5.0でのシーケンス化に適切である場合は、シーケンス処理を自動化するタスクスクリプトが提供されます。Microsoft App-Vによるストリーム配信が適切である、または可能であるという成果が出た場合は、Microsoft App-V 5.0のシーケンス処理を自動化するために、タスクスクリプトでApp-V 5.0 Sequencer実行プロファイルが参照されます。 <p>Forward Pathレポートにアクセスするには、[Reports: Applications]、[Forward Path] の順にクリックします。[Change Scenario] をクリックし、ボックスの一覧からMicrosoft App-V 5.0 Decisionレポートを選択します。</p> <p>注：Forward Pathスクリプトをさらにカスタマイズして、実際の環境とビジネス決定に合わせて調整することができます。</p>
Overview Summary	<p>すべてのアクティブなレポートにわたって、アプリケーションポートフォリオの状態に関するハイレベルなダッシュボードビューを提供します。選択した各アプリケーションについて、アクティブなレポートごとに全体的なRAG (赤、黄、緑) 状態が表示されます。アプリケーションに関連する行でRAGアイコンをクリックすると、そのアプリケーションの修復レポートビューにアクセスできます。選択したプラットフォームを使用してアプリケーションを動作させるために必要な、修復の詳細が表示されます。</p>
Microsoft App-V 5.0	<p>デスクトップアプリケーションの、Microsoft Application Virtualization (App-V) 4.5、4.6 SP1、5.0との適合性をテストします。</p>
Microsoft Windows 8/7	<p>特定のオペレーティングシステムのレポートを直接表示することによって、対象のオペレーティングシステム上でのアプリケーションの互換性を判断します。特定の問題をドリルダウンして、自動修正プログラムをダウンロードし、アプリケーションの修復方法について詳細情報を入手します。</p>

ストリーム配信アプリケーションのApp-V 5.0への移行手順

このセクションでは、ストリーム配信アプリケーションをMicrosoft App-V 5.0に移行するための推奨プロセスについて詳しく説明します。このプロセスでは、App-V 5.0、Windows 8/7、および64ビットに対するアプリケーションの互換性の評価を行います。また、AppDNA Forward Pathスクリプトを使用してApp-V 5.0シーケンスを自動的に作成する方法についても説明

します。

このフローチャートは、バックグラウンドでAppDNAが行う判断と、ユーザーの意思決定プロセスを示します。



<p>手順1 アプリケーションDNAのインポート</p>	<p>MSI形式のアプリケーションの場合は、 [Import & Analyze] 、 [Applications] 、 [Direct Import] の順に選択します。</p> <p>MSIではない形式のアプリケーションの場合は、 [Import & Analyze] 、 [Applications] 、 [Install Capture] の順に選択します。</p>
<p>手順2 アプリケーションの分析</p>	<p>Microsoft Windows 8/7およびApp-Vに対してアプリケーションを分析します。アプリケーションをMicrosoftサーバープラットフォームでホストする場合は、Windows Server 2012/2008 R2を含めます。</p>
<p>手順3 Forward Pathスクリプトの実行</p>	<p>Forward PathスクリプトのMicrosoft App-V 5.0を実行して、アプリケーションの、Microsoft Windows 8/7およびApp-V 5.0に対する互換性をチェックし、App-V 5.0への移行が適切である、または可能であるアプリケーションを確認します。</p> <ol style="list-style-type: none"> Forward Pathレポートにアクセスするには、 [Reports: Applications] 、 [Forward Path] の順に選択します。 [Change Scenario] をクリックし、ボックスの一覧からMicrosoft App-V 5.0レポートを選択します。 タスクスクリプトを実行するには、 [Evaluate Tasks] をクリックします。

<p>手順4 修復</p>	<p>Forward Pathレポートのデータを確認し、RAG状態に基づいてアプリケーションの優先順位を決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 緑 – 使用できる場合はタスクスクリプトを実行し、ユーザー承認テストに進みます。 ● 黄色 – 詳細な修復レポートを参照して問題を確認し、修復または機能テストが必要かどうかを判断します。使用できる場合はタスクスクリプトを実行し、ユーザー承認テストに進みます。 ● 赤 – 詳細な修復レポートを参照して問題のコンポーネントを修復できるか、修復する必要があるのか、そして実行すべきアクションを判断します。アクションとは、再開発、Windows 7/8へのローカルインストール、従来のプラットフォームへの展開、または廃棄と置き換えを指します。Overviewレポートで最適なプラットフォームを確認します。 <p>注：Forward Pathレポート内のアプリケーション名をクリックして、そのアプリケーションの詳細な修復データに直接アクセスします。</p>
<p>手順5 タスクスクリプトの実行</p>	<p>App-V 5.0シーケンスへの移行が適切なアプリケーションに対してタスクスクリプトを実行します。適切な場合は [Automated Task Script] 列に「Yes」と表示されます。</p> <p>[Start] をクリックして自動タスクスクリプトを実行し、Microsoft App-V 5.0シーケンスを作成します。</p>
<p>手順6 App-V 5.0と互換性のあるアプリケーションの出力のテスト</p>	<p>作成される出力ファイルを見つけ、機能テストを実行します。</p>
<p>手順7 ユーザー承認テストの実施</p>	<p>上級ユーザーも参加するユーザー承認テストをアプリケーションに対して実施します。</p> <p>Forward Pathスクリプトを使用してAppDNAの拡張可能な機能を利用し、App-V 5.0シーケンスを展開およびテストする準備ができたなら、ユーザー承認テストを実施するグループにメールを送信します。</p>
<p>手順8 既知のソリューションでは互換性がないアプリケーションに関する代替策の特定</p>	<p>互換性がない（修復できない、または修復費用がかかりすぎる）アプリケーションについては、AppDNAを使用して、従来の展開オプションの方が費用効果があるかどうかを判断します。費用効果がない場合は、アプリケーションを破棄して置き換えることを検討します。</p> <p>Overview Summaryレポートで、アプリケーションに最適なプラットフォームをすばやく確認することができます。</p>

インストーラルーチンのないアプリケーションの移行

Oct 16, 2015

単にファイルをコンピューター上のフォルダーにコピーし、おそらくレジストリキーを追加したりそのほかの手動変更をしただけで実行できるアプリケーションを移行する場合があります。AppDNAでは、アプリケーションの互換性への対応およびアプリケーションの移行全般を自動化することによって、オペレーティングシステムの移行と仮想化技術の導入に伴う時間を短縮し、費用とリスクを軽減することができます。

AppDNAは、インストーラルーチンのないアプリケーションがオペレーティングシステムまたは仮想化技術と互換性があるかどうかの判断に役立つだけでなく、アプリケーションソースをキャプチャし、オプションで、管理対象のアプリケーションライブラリに追加できる、使用可能なインストーラルーチンを作成することもできます。

AppDNAの外部で独自のインストーラーを簡単に作成できるとしても、AppDNAを使用すれば、アプリケーション管理のオーバーヘッド（費用、作業、要員）を削減することができます。アプリケーションソースを互換性チェックの実行に必要な形式に変換するために既にAppDNAでキャプチャ処理を行っているため、より難しい作業に専門技能を集中できるように、サードパーティ製のアプリケーションパッケージ化および仮想化ソフトウェアを使用してインストールできる出力を作成するのが合理的です。

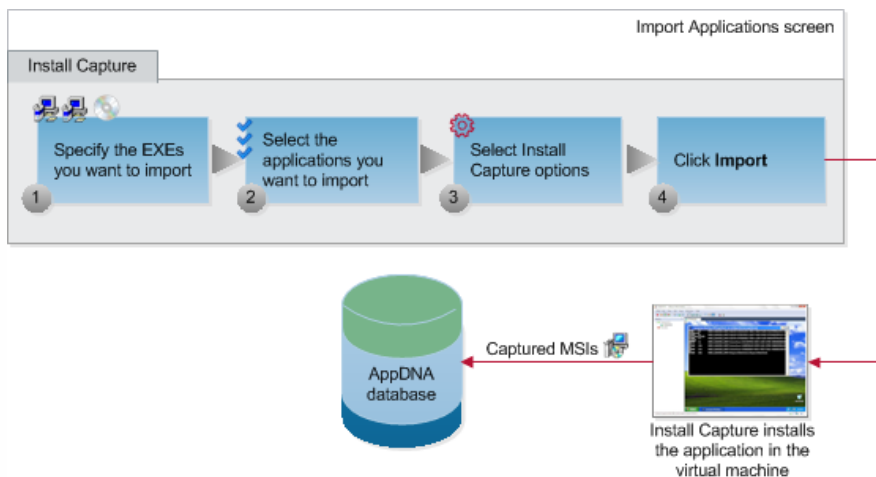
AppDNAでは、互換性分析と処理の自動化のためにアプリケーションDNAをインポートするため3つの方法でアプリケーションソースをキャプチャできます。使用するオプションは、望ましい出力と、インストール/構成の担当者（上級ユーザー、開発者、パッケージ/シーケンス作成者）に応じて異なります。以下の表に、各方法の使い方と使用例を示します。

AppDNAのキャプチャ機能	説明	使用例
Install Capture	<ul style="list-style-type: none">仮想マシン上のデスクトップアプリケーションを構成（ファイルのコピー、レジストリキーの作成、サービスの追加など）およびキャプチャします。この仮想マシンはAppDNAソフトウェアのインポート処理中に起動します。.exeファイルの起動をサポートしますが、セットアップ実行可能ファイルがない場合は、notepad.exeやcmd.exeなど、プレースホルダーの実行可能ファイルをInstall Capture機能で参照することができます。これにより、構成済みの仮想マシンをInstall Capture機能で起動してから、ファイルのコピー、レジストリキーの作成、サービスの追加などのためにユーザーがそのマシンを使用することができます。AppDNAにインポートできる.msiファイルを作成します。展開には使用できません。AppDNAソフトウェア環境内で、AppDNAサーバーまたはAppDNAクライアントが構成されたマシンから実行します。オプションで、アプリケーションを使用可能なインストーラーにパッケージ化したり、Microsoft App-Vを使用してシーケンス化したりできます。これらはAppDNAで自動化できることのほんの一部に過ぎません。AppDNAは、Install Capture処理の一部として作成される.msiを自動的にインポートします。	<ul style="list-style-type: none">ファイルセットをコピーするだけでは構成が完了せず、レジストリキーの作成、サービスの追加などが必要である。MSIが作成されたら、AppDNAソフトウェアに自動的にインポートしたい。使用可能な出力（パッケージやシーケンス）の作成を自動化したい。管理者がアプリケーションのキャプチャを担当する。
セルフブ	<ul style="list-style-type: none">仮想マシン上のデスクトップアプリケーションを構成（ファイルのコピー、	<ul style="list-style-type: none">ファイルセットをコピー

<p>AppDNA のキャプチャ 機能</p>	<p>説明</p> <p>レジストリキーの作成、サービスの追加など) およびキャプチャする、スタンドアロンのツールです。キャプチャしたアプリケーションは任意の種類(仮想、物理、またはVDI)のマシンを使用してAppDNAデータベースにインポートします。</p> <ul style="list-style-type: none"> • .exeファイルの起動をサポートしますが、セットアップ実行可能ファイルがない場合は、notepad.exeやcmd.exeなど、プレースホルダーの実行可能ファイルをセルフプロビジョニング機能で参照することができます。これにより、ファイルのコピー、レジストリキーの作成、サービスの追加などを行うための構成済みの仮想マシンをセルフプロビジョニングで起動できます。 • AppDNAソフトウェア環境からは独立して実行します。 • デフォルト設定では、AppDNAソフトウェアデータベースにインポートできる.msiを作成します。展開には使用できません。 • オプションで、アプリケーションを使用可能なインストーラーにパッケージ化したり、Microsoft App-Vを使用してシーケンス化したりできます。これらはAppDNAで自動化できることのほんの一部に過ぎません。 • 作成される出力を共有の場所に配置して、管理者がその.msiをAppDNAソフトウェアデータベースにインポートおよび分析し、アプリケーションの互換性を判定することができます。 	<p>使用例</p> <p>するだけでは構成が完了せず、レジストリキーの作成、サービスの追加などが必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> • AppDNAソフトウェア環境とは無関係に、上級ユーザー、開発者、パッケージ/シーケンス作成者に、独自に構成およびキャプチャを実行させたい。 • 使用可能な出力(パッケージやシーケンス)の作成を自動化したい。
<p>MSI変換 ツール</p>	<ul style="list-style-type: none"> • フォルダー内のアプリケーションソースのセットからMSIファイルを生成するための、代替メカニズムを提供するスタンドアロンのツールです。本来は、WebアプリケーションのソースファイルをMSIに変換することを目的としています。任意のファイルに使用できます。 • AppDNAソフトウェア環境からは独立して実行します。 • 作成される出力を共有の場所に配置して、管理者がその.msiをAppDNAソフトウェアデータベースにインポートおよび分析し、アプリケーションの互換性を判定することができます。 	<ul style="list-style-type: none"> • キャプチャ対象がファイルのみである。 • AppDNAソフトウェア環境の外部でキャプチャを実行したい。 • 使用可能な出力(パッケージおよびシーケンス)を作成する必要はない。AppDNAソフトウェア環境からは独立して実行します。

Install Captureの機能

このセクションでは、Install Captureを使用して、インストールルーチンがなく、手動構成が必要なアプリケーションをキャプチャする方法の一例について説明します。以下の図は、AppDNAで実行される処理を示します。

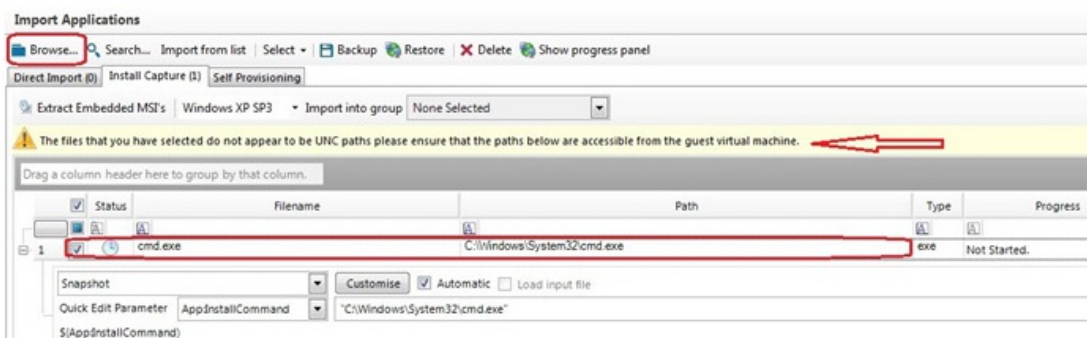


注：これらの手順では、既存のAppDNA環境に統合可能な**仮想マシンが構成済み**であることを想定しています。Install Captureを使用してアプリケーションをインポートするには：

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] > [Applications] の順に選択します。
2. [Install Capture] タブをクリックします。
3. [Install Capture] タブで、インポートする.exeファイルまたはそのほかのインストールファイルを選択します。
4. [Browse] をクリックしてプレースホルダーの実行可能ファイルを選択します。
仮想マシン上の指定パスに存在するものであれば、何でも使用できます。この例ではcmd.exeを使用します。

注：インストーラーチンがあるアプリケーションを選択する場合は、\\MyServer\MyApplications\MyApplication.exeのようなUNCパスを使用します。指定するパスに、仮想マシンからアクセスできる必要があります。アクセスできなければインポートは失敗します。

ファイルを選択すると、それらのファイルが画面に表示されます。以下の画面に示すように、ハードコードされているパスについて警告が表示されます。cmd.exeが仮想マシン上の同じ場所に存在するため、これは問題ありません。



この例では、SnapshotというAppDNAソフトウェアのデフォルトの実行プロファイルを使用します。ほかの処理の自動化に利用できるAppDNAソフトウェアのより高度な実行プロファイルについては、「[実行プロファイル](#)」を参照してください。

注：Citrixは、Citrix AppDNA Extensions Podioサイトからダウンロードできる、実行プロファイルのライブラリも提供しています（ただしサポート対象外です）。これらのエクステンションは、お客様が関心を持つ処理を自動化するためにカスタマイズされています。エクステンションを入手するには、Podioアカウントを作成して、appdnafeedback@citrix.com宛てにサイトへのアクセスをリクエストします。

Snapshot実行プロファイルは主に次の3つの段階から構成されます。

1. **Before snapshot** - 仮想マシンの状態を分析します。ファイルシステムとレジストリエントリのすべてが分析されます。
2. **Launch command** - MSIではないアプリケーションインストーラーを実行します。この例ではインストーラーがないため、cmd.exeを起動します。cmd.exeが開いている間に、ファイルを追加するなど、アプリケーションのためにキャプチャする必要がある任意の操作を実行できます。
3. **After snapshot** - インストーラーが完了したとき（この例ではcmd.exeウィンドウを閉じたとき）に、すべてのファイルシステムやレジストリエントリを含め、仮想マシンの状態を再度分析します。

Before snapshotとAfter snapshotにおける仮想マシンの状態の違いは、アプリケーションのインストールにより加えられた変更を表します。キャプチャ処理でこの情報を使用して、AppDNAデータベースにインポートする.msiファイルを作成します。その後で仮想マシンをインストール前の状態にリセットします。ツールバー右側の [Import] をクリックして、AppDNAデータベースにロードするためのアプリケーションDNAのキャプチャを開始します。

[Install Capture] タブでアプリケーションを選択して [Import] をクリックすると、[AppDNA Virtual Machine Remote Controls] ウィンドウが開きます。

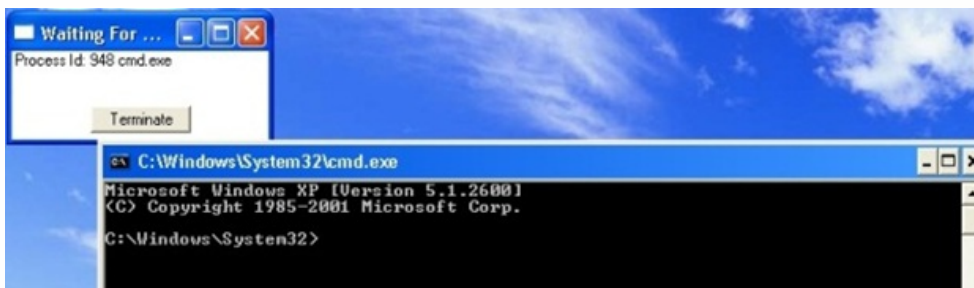
発生する処理は実行プロファイルによって制御されます。Snapshot実行プロファイルを使用する場合は、[実行プロファイル](#)「before snapshot」が仮想マシンで実行される最初のアクションです。



```

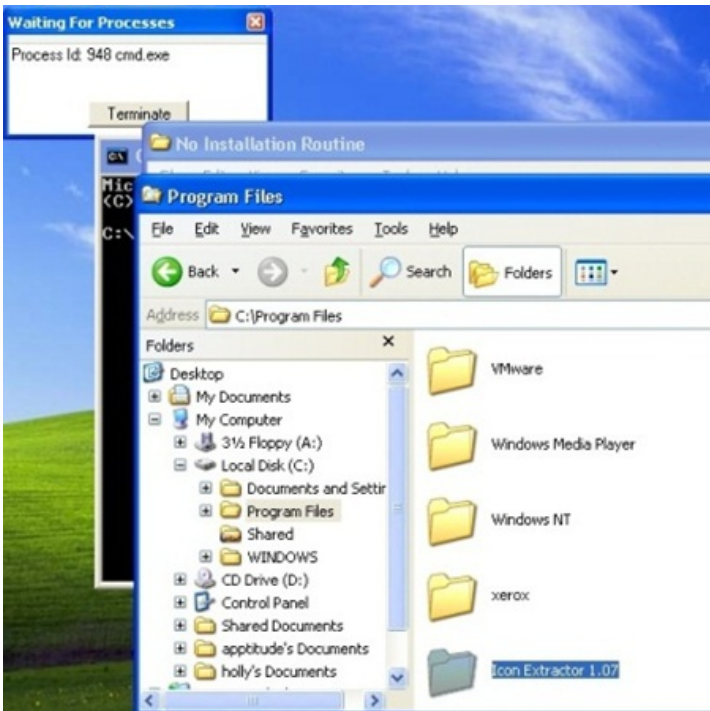
C:\Program Files\Citrix\AppDNA\VM Configuration>vssnapshot.exe
5000 0s HKEY_CLASSES_ROOT\CLSID\{2764BCE5-CC39-11D2-B639-00C04F79498E}\I
nprocServer32
10000 0s HKEY_CLASSES_ROOT\CLSID\{6FDDC324-4E03-4BFE-B185-3D77768DC92A}\C
hannelMasks
15000 1s HKEY_CLASSES_ROOT\CLSID\{C1ABB475-F198-39D5-BF8D-330BC7189661}\P
rogId
  
```

Before snapshotが完了するとインストールが実行されます。この例ではcmd.exeです。

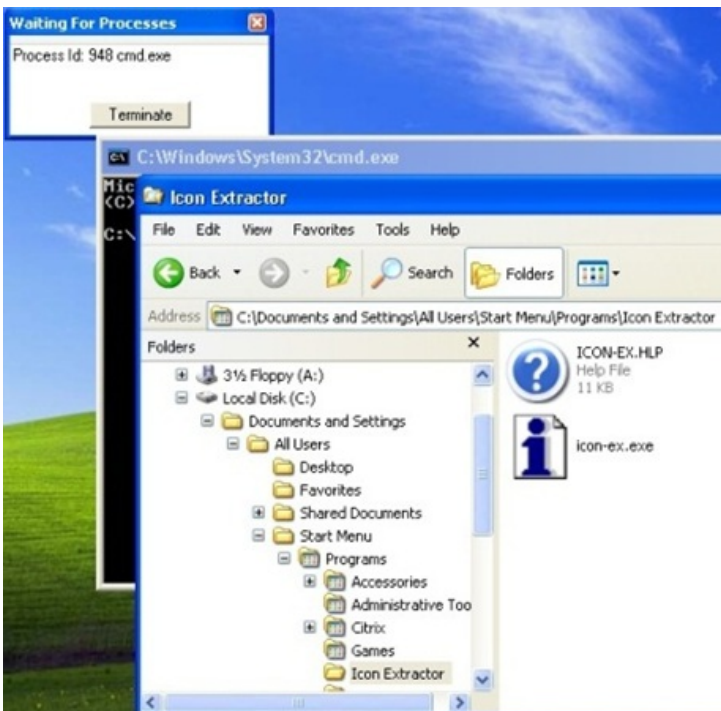


アプリケーションに必要なすべての構成変更を完了するまで、cmd.exeを開いたままにしておきます。cmd.exeがsetup.exeの代わりであることに留意してください。インストールが完了するとAppDNA実行プロファイルスクリプトが次の段階に移るので、コマンドプロンプトウィンドウを閉じます。

以下の画面は、Icon Extractor 1.07フォルダーをネットワーク共有からC:\Program Filesにコピーした結果を示します。フォルダーには必要なアプリケーションファイルが含まれています。



また、[スタート]メニューに必要なショートカットを追加します。このインストールルーチンのないアプリケーションには、ほかのファイルは不要です。もちろん、サービス、環境変数、ODBCエントリなどの作成が必要なアプリケーションがあるかもしれません。



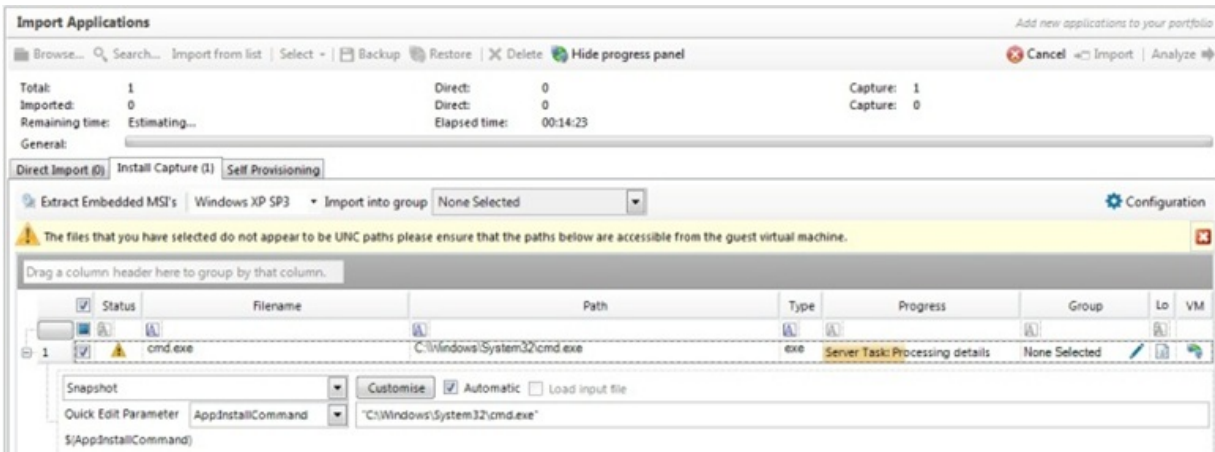
アプリケーションの構成が完了したら、コマンドプロンプトウィンドウを閉じます。After snapshotが開始されます (Snapshot実行プロファイルの使用を前提としています)。


```

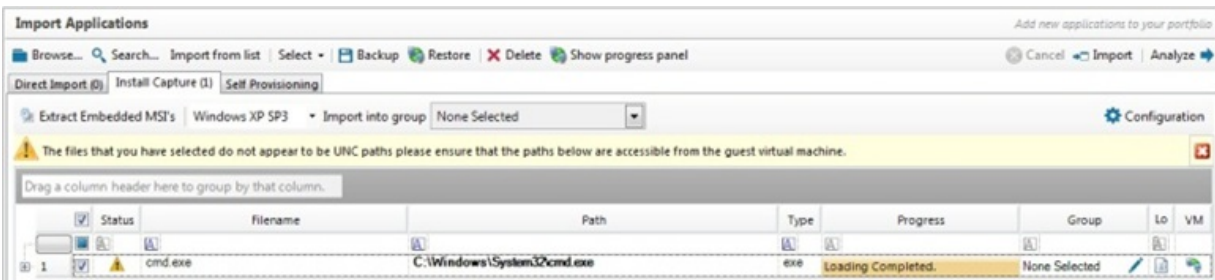
C:\Program Files\Citrix\AppDNA\VM Configuration\lossnapshot.exe
5000 0s HKEY_CLASSES_ROOT\CLSID\{2764BCE5-CC39-11D2-B639-00C04F79498E}\I
nprocServer32
10000 0s HKEY_CLASSES_ROOT\CLSID\{6FDDC324-4E03-4BFE-B185-3D77768DC92A}\C
hannelMasks
15000 1s HKEY_CLASSES_ROOT\CLSID\{C1ABB475-F198-39D5-BF8D-330BC7189661}\P
rogId
20000 2s HKEY_CLASSES_ROOT\COMSNAP.CPartitionContextMenu.1

```

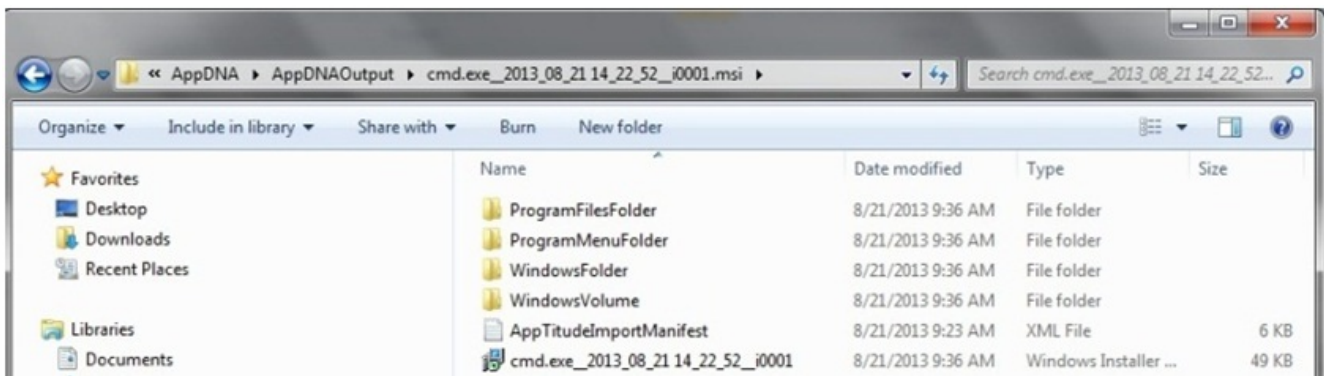
After snapshotが完了すると出力が指定のネットワーク共有にコピーされ、新しく作成されたMSIのデータベースへのロードが開始されます。インポートが完了すると [AppDNA Virtual Machine Remote Controls] ウィンドウが閉じ、 [Install Capture] タブにMSIインポート処理の進行状況が表示されます。



通常、進行状況バーは緑色で、インストーラーが成功の終了コードを戻したことを示します。この例ではインストーラーを使用しなかったため、AppDNAは0以外の終了コードを受け取ります。その結果、進行状況バーは黄色になります。警告を無視し、互換性をチェックするため、望ましいモジュールに対するアプリケーションの分析に進むことができます。これを行うには、 [Analyze] を今すぐか、後で分析するアプリケーションがそろったときにクリックします。

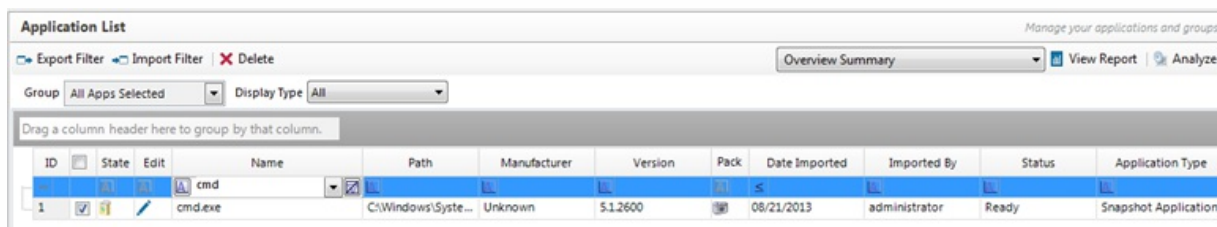


分析により、AppDNA構成設定に定義されている出力先に、cmd.exeを名前に含むフォルダーが作成されます。このフォルダーには、作成されたMSIと抽出されたソースファイルが含まれます。



すぐに分析しない場合は、サイドバーから [Select] > [All Applications] の順にクリックします。 [Application List] 画面をフィルターして、インポートしたばかりの項目のみを表示することができます。

この画面では、製品の実際の名前を反映するように名前を変更することができます。これを行うには、[Name] 列の左の鉛筆アイコンをクリックします。

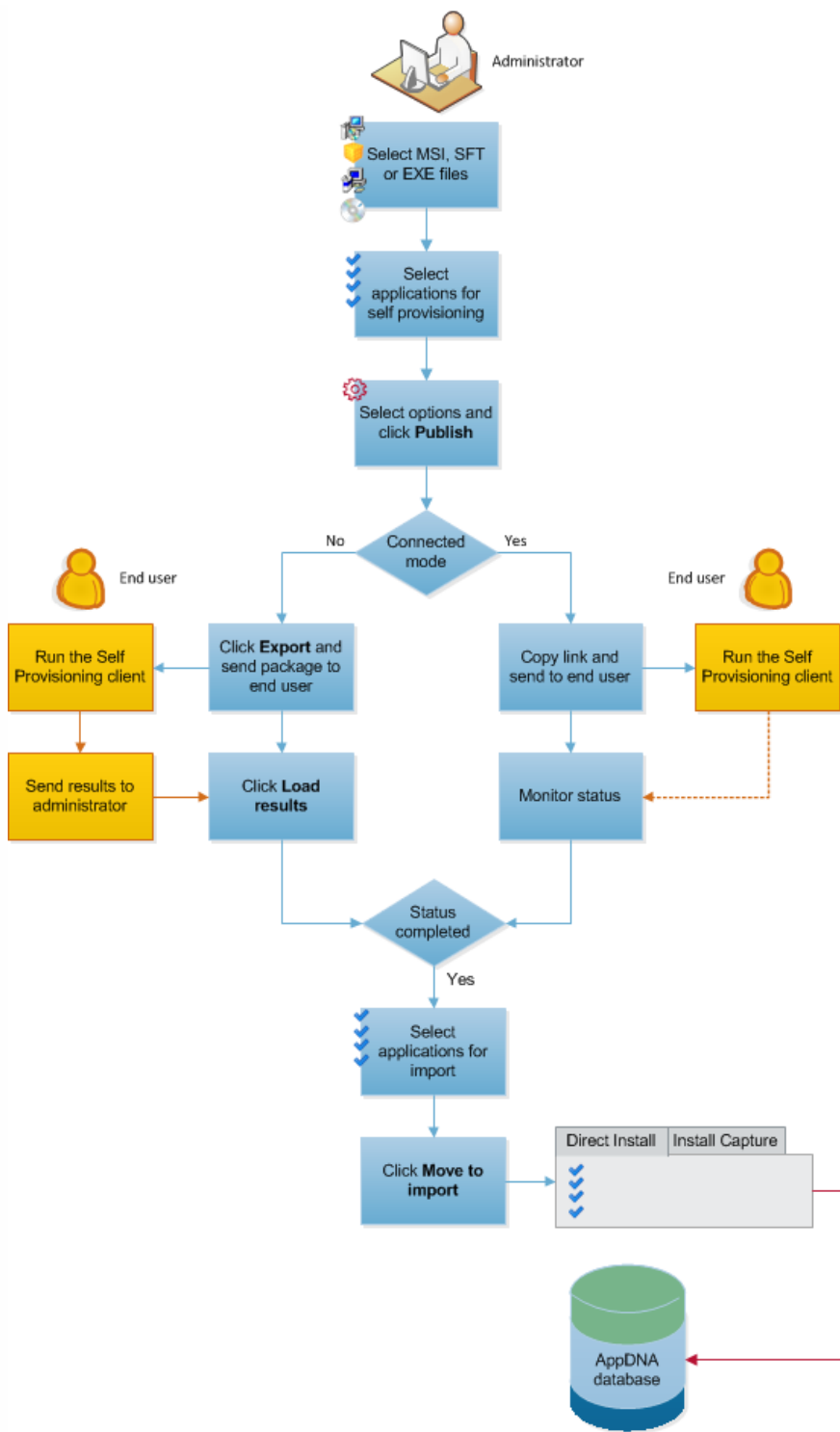


分析をする準備ができたなら、アプリケーションが選択されていることを確認して [Analyze] をクリックします。

セルフプロビジョニング機能

このセクションでは、スタンドアロンのセルフプロビジョニング機能を使用して、インストールルーチンがなく、手動構成が必要なアプリケーションをキャプチャする方法の一例について説明します。以下の図は、AppDNAで実行される処理を示します。

この例では非接続モードを使用します。このモードでは、セルフプロビジョニングクライアントとAppDNAクライアントは異なるネットワーク上にあり、同じネットワークファイル共有にアクセスできません。AppDNAによりクライアント指示ファイルと実行プロファイルがパッケージ化され、管理者がこのパッケージをエンドユーザーに送信します。次にエンドユーザーがセルフプロビジョニングクライアントの出力を、管理者に送信します。



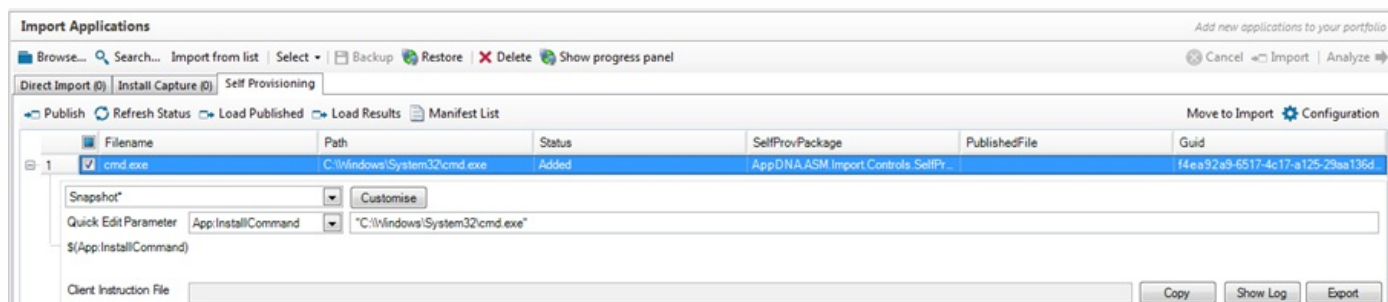
注：以下の手順は、AppDNAセルフプロビジョニングクライアントが構成済みであることを前提としています。

セルフプロビジョニングのためにアプリケーションを準備するには：

1. AppDNAのサイドバーから [Import & Analyze] > [Applications] の順に選択します。
2. [Self-Provisioning] タブをクリックします。
3. キャプチャするインストールファイルを選択します。Install Capture機能でのように、通常これは、UNCパスを使用して参照されるセットアップ実行可能ファイルです。
この例ではインストーलルーチンがないアプリケーションをキャプチャするので、

cmd.exe (C:\Windows\System32\cmd.exe) を使用するように手動で構成する必要があります。

ファイルを選択すると、それらのファイルが画面に表示されます。

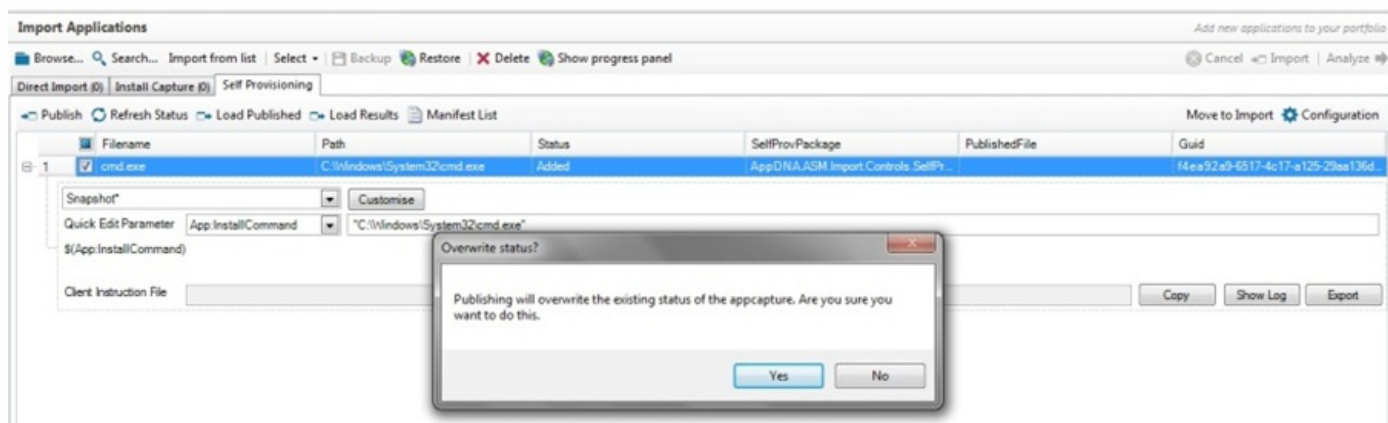


この例では、SnapshotというAppDNAソフトウェアのデフォルトの実行プロファイルを使用します。ほかの処理の自動化に使用できるAppDNAソフトウェアのより高度な実行プロファイルについては、「[実行プロファイル](#)」を参照してください。

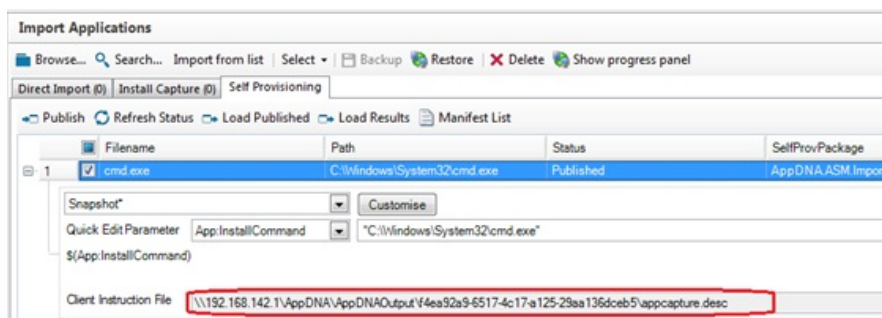
注：Citrixは、Citrix AppDNA Extensions Podioサイトからダウンロードできる、実行プロファイルのライブラリも提供しています（ただしサポート対象外です）。これらのエクステンションは、お客様が関心を持つ処理を自動化するためにカスタマイズされています。エクステンションを入手するには、Podioアカウントを作成して、appdnafedback@citrix.com宛てにサイトへのアクセスをリクエストします。

注：セルフプロビジョニング機能を使用するには、セルフプロビジョニング設定で出力パスを構成する必要があります。[Self-Provisioning] タブのツールバーの [Configuration] をクリックし、[\[Self-Provisioning Settings\]](#) ページを開きます。

4. 含めるアプリケーションを選択して [Publish] をクリックします。
選択したアプリケーションの既存の状態が上書きされるという警告が表示されます。



5. [Yes] をクリックして確定します。
選択した各アプリケーションのクライアント指示ファイルの詳細が画面に表示されます。



6. クライアント指示ファイルの右側の [Export] をクリックして、セルフプロビジョニングクライアントを実行するエンドユーザー（上級ユーザーまたは開発者）に送信するパッケージを作成します。[Export Self-Provisioning Package] ダイアログボックスが開きます。

- Input file from client perspective – アプリケーションのインストールパッケージの名前と場所をセルフプロビジョニングクライアントマシンに対して相対的に指定します。
- Folder where the capture results are to be stored – セルフプロビジョニングクライアントがアプリケーションキャプチャの出力を書き込むデフォルトの場所を指定します。エンドユーザーは、アプリケーションのキャプチャ中に別の場所を指定できます。これをセルフプロビジョニングクライアントマシンに対して相対的に指定したことを確認します。
- Exported package path – セルフプロビジョニングクライアントを実行するエンドユーザーに送信するパッケージの名前と場所を指定します。

次に、スタンドアロンのセルフプロビジョニングクライアントでセルフプロビジョニングを実行するユーザーに、エクスポートしたパッケージを送信します。

エンドユーザーは、AppDNA Install Capture機能の処理と同様のキャプチャ処理を実行します。

構成を実行するエンドユーザーはAppDNAセルフプロビジョニングクライアントをインストールする必要があります。以下のインストーラーが、AppDNAのインストールフォルダーのToolsサブフォルダーにあります。

Citrix AppDNA Self-Provisioning Client.msi

Citrix AppDNA VM Configuration.msi

作成したMSIは、[Import Applications] 画面の [Direct Import] タブを使用してAppDNAにインポートできます。詳しくは、「[直接インポート](#)」を参照してください。

MSI変換ツール

AppDNA MSI変換ツールはスタンドアロンのツールで、AppDNAの一部としてインストールされ、フォルダー内のアプリケーションのソースファイルセットからMSIファイルを生成する、代替策を提供します。MSI変換ツールの本来の目的は、WebアプリケーションのソースファイルをMSIに変換してWebアプリケーションの互換性をチェックすることですが、このオプションは任意のファイルに使用できます。

注：AppDNAスタンドアロンWebキャプチャツールをインストールするには、インストーラー（Citrix AppDNA Web Application Capture.msi）が必要です。これはAppDNAに付属しており、AppDNAのインストール時にAppDNAインストールフォルダーのToolsサブフォルダーにコピーされます。

ここでは、スタンドアロンのWebアプリケーションソースMSI変換ツールを使用して、アプリケーションのソースファイルを含むフォルダーからMSIを生成する手順について説明します。

1. Windowsの [スタート] ボタンをクリックし、[Citrix AppDNA] > [Web Application Source to MSI Converter] の順に選択します。
2. 必要であれば、ツールバーの [Configure] をクリックしてオプションを変更します。

これらのオプションおよび次の手順でのオプションについて詳しくは、[スタンドアロンのWebアプリケーションソースMSI変換ツール](#)を参照してください。

3. [Select]、[Search for Folders]、または [Import List] をクリックして、変換するWebアプリケーションのソースファイルを含むフォルダーを選択します。
選択したフォルダーがウィンドウに表示されます。
4. MSIを作成するフォルダーを選択します。
5. [Start] をクリックします。

MSI生成ツールの [Status] 列に、処理が成功したかどうかが表示されます。「Completed」は処理が正常終了したことを意味します。処理が失敗した場合は、[Refresh] をクリックしてログを表示します。ログには、問題のトラブルシューティングに使用できる情報が含まれています。

出力

スタンドアロンのWebアプリケーションソースMSI変換ツールの出力は、[Configuration] ダイアログボックスで指定したフォルダーに配置されます。各アプリケーションの出力は、フォルダー名、日付、およびタイムスタンプに由来する名前の個別のフォルダーに格納されます。

これで、[Import Applications] 画面の [Direct Import] タブを使用してAppDNAにMSIをインポートできます。詳しくは、「[直接インポート](#)」を参照してください。

SDK

Oct 16, 2015

ここでは、AppDNA SDK (Software Development Kit : ソフトウェア開発キット) について紹介し、使用できるデータとAppDNA SDKを使用した開発方法について説明します。SDKの使用について、例を挙げて説明します。これらのトピックは、SDKの使用に精通している上級管理者および開発者を対象としています。

このリリースでの新機能

AppDNA 7.6のSDKが拡張されて、次の機能が含まれるようになりました。

- **ガイド付きソリューション。** AppDNAソリューションの機能を独自のプロセスまたはユーザーインターフェイスに組み込むことができます。このリリースで利用できるソリューションの概要については、「[ソリューションの構成](#)」を参照してください。
- **アプリケーション依存関係マップ。** アプリケーションをスキャンして不足している依存関係がないかを調べたり、それらの依存関係とそのほかのアプリケーションおよびAppDNAでロードされるランタイムライブラリとの照合を試行したりすることができます。アプリケーション依存関係マップについて詳しくは、「[アプリケーションの依存関係](#)」を参照してください。

AppDNA SDKの用途

SDKを使用すれば、ユーザーが使い慣れたプロセスまたはユーザーインターフェイスや、シンプルなWebページからAppDNAを提供することができます。この方法では、AppDNAタスクが通常のワークフローにシームレスに組み込まれるので、ユーザーがAppDNAユーザーインターフェイスに慣れるために時間をかける必要がなくなります。

AppDNA SDKの使用方法について、以下の例で説明します。

AppDNAの結果を既存のアプリケーションに表示する

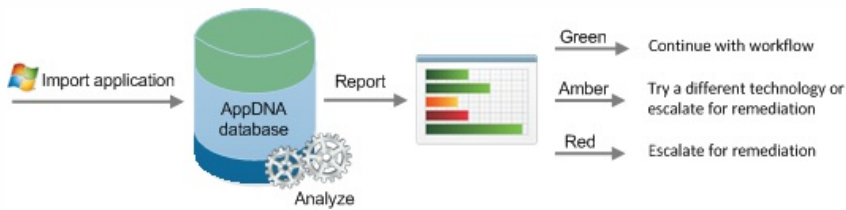
ユーザーが新しいアプリケーションをリクエストするためのアプリケーションが既に導入されている場合は、AppDNA SDKを使用して互換性のテスト結果を表示できます。必須ではありませんが、望ましいIT展開方法（オペレーティングシステムのバージョン、仮想または物理、App-Vを使用するかどうか）と新しいアプリケーションの互換性を示す画面を追加すると便利です。ユーザーは何が互換性の問題であるかを知る必要はありません。必要なのは、アプリケーションに互換性があるかどうかを知ることだけです。互換性があれば、テストを開始できます。互換性がなければ、アプリケーションのリクエストをITに報告することができます。この裏側では、既存のアプリケーション経由でリクエストされたアプリケーションをアップロードし、AppDNAのAPIを呼び出してアプリケーションをインポートおよび分析し、そのRAG結果をレポートする必要があります。典型的な例を以下に示します。



AppDNAの結果を使用して自動化ワークフローを誘導する

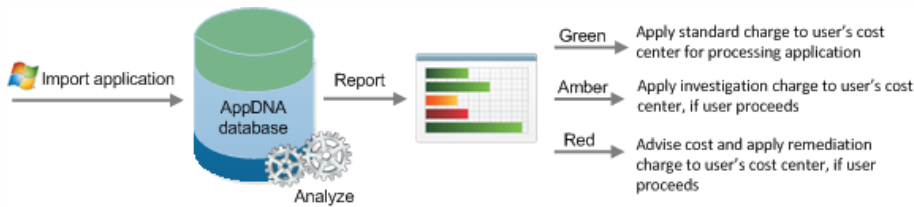
ワークフローまたはオーケストレーションソリューションによって、手動操作なしに、ワークフロー内のステップ間でアプリケーションを自動的に誘導する場合は、AppDNA SDKを使用して互換性のテスト段階を自動化することができます。ワークフローを適切な次のステップに誘導するため、特定の技術に対する互換性のテスト結果をワークフローソリューションに認識させる必要があります。AppDNA SDKを呼び出してアプリケーションをインポートおよび分析し、選択した技術に対するRAG結果をレポートできます。これにより、ワークフローを適切に機能させ、手動作業を省くことができます。このステップを

自動化すると、新しいアプリケーションを追加するプロセスで数日を節約し、ユーザーの待ち時間を短縮できる可能性があります。典型的なワークフローを以下に示します。



アプリケーション所有者向けのセルフサービスシステムを提供する

ユーザー自身に作業させることによって、IT部門はますますコストを削減し待ち時間を短縮するようになってきています。AppDNA SDKを使用して、新しいアプリケーションを社内環境に追加したいユーザーが、操作やレポートの解釈方法を学ばなくてもAppDNAの機能に簡単にアクセスできるようにすることができます。SDKを使用して、AppDNAを呼び出すシンプルなプログラムやWebページを提供できます。たとえば、Webページにユーザーのコストセンターを入力させ、ユーザーのマシからアプリケーションを直接アップロードさせます。このアプリケーションをAppDNAにインポートし、RAG結果をWebページに表示します。典型的なセルフサービスシステムを以下に示します。



SDKを使用する開発

Oct 16, 2015

このトピックでは、AppDNA SDKにアクセスして使用方法について説明します。

SDKから使用できるデータについて詳しくは、「[SDKで使用できるデータ](#)」を参照してください。

SDKの完全なリファレンスについては、<http://support.citrix.com/help/appdnasdk/7.0/>でクラスリファレンスのドキュメントを参照してください。

SDKを使用するサンプルソリューションは、<http://support.citrix.com/help/appdnasdk/7.6/SampleUserProjects.zip>からダウンロードできます。独自のスクリプトのベースとして使用できるコードサンプルについては、<http://www.citrix.com/go/citrix-developer/xenapp-xendesktop-developer-community/appdna.html>に移動して、[Exchange Forum] をクリックしてください。

SDKはAppDNAデスクトップクライアントと共にインストールされます。SDKは.NET Framework 4.0のアセンブリセットおよび関連ファイルとして利用できます。SDKを使用する.NETアプリケーションを開発する場合は、以下の作業が必要です。

- .NET プロジェクトを32ビットx86プロセスとして実行する。
- プロジェクトから**Citrix.SDK.AppDNA.dll**を参照する。このdllは、AppDNAのインストールされているシステムのClientフォルダーにあります。典型的な場所は、%ProgramFiles(x86)%\Citrix\AppDNA\Client\Citrix.SDK.AppDNA.dllです。

一度参照すると、Visual StudioによってこのSDK dllが依存するすべてのファイルがアプリケーションのビルド出力フォルダーにインポートされます。アプリケーションを配布する場合は、アプリケーションと共にこれらのファイルも配布する必要があります。Visual Studioによって自動的にインポートされない以下のファイルも含めます。

- bzip2.dll
- MsiContentExtractor.dll
- Mono.Cecil.dll
- MsiFileExtractor.exe
- PeDotNumper.exe
- PeDumper.exe

SDKにより公開されるすべての型がCitrix.SDK.AppDNA名前空間に含まれます。すべてのコードサンプルで、「using AppDNA = Citrix.SDK.AppDNA;」としてこの名前空間に「AppDNA」というエイリアスを作成します。

認証

SDKのWindows認証要件はAppDNAクライアントと同じです。つまり、SDKは標準ユーザーとして実行され、追加の権限は不要です。

AppDNAクライアントの場合とまったく同様に、Server.Connect関数に渡されるAppDNA資格情報によってSDKで許可される操作が決定されます。

手順の概要

ここでは、SDKを使用する場合に実行する主な手順の概要について説明します。データの入力元およびレポートデータの出力先にかかわらず、これらの手順は共通です。以下の手順でセットアップします。

1. **サーバーへの接続。** AppDNAサーバーに接続して、AppDNAデータの操作に使用できるServerオブジェクトを取得します。
2. **アプリケーションのインポート。** アプリケーションは、分析する前にAppDNAにインポートする必要があります。SDKに、さまざまなインポート方法および複数のアプリケーションをインポートする機能が提供されます。アプリケーション

属性を使用して、AppDNA内のアプリケーションにユーザー定義の値を割り当てることができます。

3. **アプリケーションの分析。**アプリケーションをインポートした後で、アプリケーションDNAを分析してレポートデータを生成します。SDKにより、分析するアプリケーションが単一か複数かに応じてさまざまな方法が提供されます。
4. **レポートデータの使用。**AppDNAの分析から生成されるレポートデータを取得します。SDKにより、さまざまなレポートビューをエクスポートしたり、特定のアプリケーションのデータのみを取得したりする機能が提供されます。

このセクションのほかのトピックで、これらの手順についてより詳しく説明します。

AppDNAサーバーへの接続

Oct 16, 2015

SDKによりAppDNAサーバーへのクライアント側のアクセスが提供されます。SDKを使用する第1段階は、サーバーへの接続を確立することです。AppDNAサーバーへの接続はServerオブジェクトに維持されます。ServerオブジェクトはServer.Connectを呼び出すことによって取得します。

Connectには次の2つのオーバーロードがあります。

1. 第1のオーバーロードは、サーバーおよびAppDNAをデフォルトでインストールした場合に作成されるデータベースに接続します。
`using AppDNA = Citrix.SDK.AppDNA; private void Connect(string username, string password) { //Connect to the default database on this machine.AppDNA.Server appdna = AppDNA.Server.Connect(`
2. 第2のオーバーロードは、特定のサーバーインスタンスおよび/またはデータベースに接続します。
`AppDNA.Server appdna = AppDNA.Server.Connect(new Uri("http://SomeServer/CustomAppDNASite"), "SomeServer\SQLServer:AppDNADB2", username, password);`

パラメーター	説明
URI	これはインターネットインフォメーションサービスでホストされるAppDNA Webサービスのアドレスです。
データベースID	データベースIDは、「[\]<データベース名>」の形式を取ります。AppDNAサーバーに構成されているデータベースIDを一覧表示するには、WebブラウザでサーバーのURLを開きます。

Serverオブジェクトを取得した後は、これを使用してAppDNAデータを操作できます。

アプリケーションのインポート

Oct 16, 2015

アプリケーションは、分析する前にAppDNAにインポートする必要があります。SDKでは直接インポートとInstall Captureの2種類のインポートを使用できます。

1. **直接インポート**。オプションで変換ファイルを伴う.msiファイルやApp-Vストリームなど、アプリケーションのソースメディアが直接インポートできる形式である場合は、この方法を使用します。
2. **Install Capture**。アプリケーションのソースメディアが従来の実行可能インストーラーである場合や、App-Vシーケンスの生成などファイルのインポート時に追加機能を実行したい場合は、この方法を使用します。

直接インポート

すべてのインポートが、Server.Applicationsプロパティにより戻されるオブジェクトを通じて実行されます。オーバーロードされた任意のImportメソッドを使用して、直接インポートを実行できます。インポートごとに、ログファイルを格納する出力フォルダーを指定する必要があります。

以下の例は、単一のmsiをインポートする方法を説明しています。

```
-command
```

コピー

```

using AppDNA = Citrix.SDK.AppDNA;

AppDNA.Server appdna;

// Connect the appdna variable to the server

//...

public AppDNA.Application Import(string msiSourceFile)

{

    //Create a folder for the log files and other output.

    string outputFolder = Environment.GetFolderPath(Environment.SpecialFolder.ApplicationData);

    outputFolder = Path.Combine(outputFolder, "AppDNASample");

    Directory.CreateDirectory(outputFolder);

    string logFile = null;

    AppDNA.Application app = appdna.Application.Import(msiSourceFile, outputFolder, out logFile);

    Console.WriteLine("Import log saved to " + logFile);

    return app;

}

```

ほかのオーバーロードでは、msiをインポートする前に適用する必要がある変換ファイルや、そのほかの構成情報を指定できます。

バッチインポート

複数のアプリケーションをインポートする場合は、Applicationオブジェクトを戻すImportのオーバーロードは便利ではありませんが効率的ではありません。AppDNA SDKではバッチインポートがサポートされ、複数のアプリケーションについてインポートの詳細を指定できます。Importオブジェクトが戻されることにより、SDKでバッチインポートの進行状況を監視し、インポートされたファイルごとに、結果として生じるApplicationオブジェクトを取得できます。

Importオブジェクトでは、結果およびそのほかの情報を取得するキーとして、Import関数に渡される各ImportSourceDetailsオブジェクトを使用します。

以下の例は、ソースファイルパスの列挙可能なコレクションに応じて、バッチインポートを実行する方法を説明しています。

Code

コピー

```
public Dictionary<string,AppDNA.Application> Import(IEnumerable<string> msiSourceFiles)

{

    //Create a folder for the log files and other output.

    string outputFolder = Environment.GetFolderPath(Environment.SpecialFolder.ApplicationData);

    outputFolder = Path.Combine(outputFolder, "AppDNASample");

    Directory.CreateDirectory(outputFolder);

    // Build a list of ImportSourceDetails

    var importDetails = new List<AppDNA.ImportSourceDetails>();

    foreach (var sourceFile in msiSourceFiles)

    {

        importDetails.Add(new AppDNA.ImportSourceDetails(sourceFile));

    }

    // Build a result object to hold the imported applications

    var result = new Dictionary<string, AppDNA.Application>();

    // Start the import and wait for completion

    using (var import = appdna.Application.Import(importDetails, outputFolder))

    {
```



```
import.WaitForCompletion();

//Enumerate through the ImportSourceDetails objects and use them as a key to get the results.

foreach (var detail in importDetails)

{

    string msg = string.Format("Import log for {0} saved to {1}", detail.SourceFilePath, import.GetLogFilePath(detail));

    Console.WriteLine(msg);

    AppDNA.Application app = null;

    try

    {

        app = import.GetApplication(detail);

    }

    catch (Exception error)

    {

        msg = string.Format("Failed to import {0} due to error: {1}", detail.SourceFilePath, error.Message);

        Console.WriteLine(msg);

    }

    if (app != null)

        result.Add(detail.SourceFilePath, app);

}

}
```

```
return result;
```

```
}
```

ApplicationImportConfigurationオブジェクトを取るImportメソッドのオーバーロードを使用して、さらにインポートを構成できます。ImportSourceDetailsクラスのほかのプロパティを使用することもできます。

Install Capture

Install Captureでは、仮想マシン構成と実行プロファイルを使用して仮想マシン内でコマンドのセットを実行し、AppDNAにインポートできるインストールを生成します。たとえば、従来のsetup.exeのスナップショットを作成して、インポートできるmsiを生成することができます。

Install Captureを使用する前に、AppDNAのGUIクライアントを使用して仮想マシン構成と実行プロファイルを構成します。Install Captureでは、前に示したバッチインポートと同じ方法を使用します。

```
-command
```

```
コピー
```

```
public Dictionary<string, AppDNA.Application> InstallCapture(IEnumerable<string> legacySetupFiles)
```

```
{
```

```
    //Create a folder for the log files and other output.
```

```
    string outputFolder = Environment.GetFolderPath(Environment.SpecialFolder.ApplicationData);
```

```
    outputFolder = Path.Combine(outputFolder, "AppDNASample");
```

```
    Directory.CreateDirectory(outputFolder);
```

```
    // Build a list of InstallCaptureSourceDetails
```

```
    var importDetails = new List<AppDNA.InstallCaptureSourceDetails>();
```

```
    foreach (var sourceFile in legacySetupFiles)
```

```
    {
```

```
        importDetails.Add(new AppDNA.InstallCaptureSourceDetails(sourceFile));
```

```
    }
```

```

// Build a result object to hold the imported applications

var result = new Dictionary<string, AppDNA.Application>();

// Start the install capture specifying the VMConfiguration and Execution Profile and wait for completion

using (var import = appdna.Application.InstallCapture(importDetails, "MyVMConfiguration", "Snapshot", outputFolder))

{

import.WaitForCompletion();

//Enumerate through the ImportSourceDetails objects and use them as a key to get the results.

foreach (var detail in importDetails)

{

string msg = string.Format("Import log for {0} saved to {1}", detail.SourceFilePath, import.GetLogFilePath(detail));

Console.WriteLine(msg);

AppDNA.Application app = null;

try

{

app = import.GetApplication(detail);

}

catch (Exception error)

{

msg = string.Format("Failed to import {0} due to error: {1}", detail.SourceFilePath, error.Message);

Console.WriteLine(msg);

```

```

    }

    if (app != null)

        result.Add(detail.SourceFilePath, app);

    }

}

return result;

}

```

InstallCaptureConfigurationオブジェクトを取るInstallCaptureメソッドのオーバーロードを使用して、さらにInstall Captureを構成できます。InstallCaptureSourceDetailsクラスのほかのプロパティを使用することもできます。

インポートの進行状況の表示

バッチインポートの実行時に任意のファイルのインポート状態を取得するには、Import.GetProcessingStateメソッドを使用します。これにより、そのファイルの現在のインポート状態の詳細を提供するオブジェクトが戻されます。INotifyPropertyChangedも実装されており、インポート状態が変化したときの通知を登録することができます。

SynchronizationContexts

ApplicationImportConfigurationクラスおよびInstallCaptureConfigurationクラスにより、SynchronizationContextプロパティが公開されます。これにより、登録済みのイベントを発生させるために使用されるスレッドが定義されます。たとえば、ProcessingState.PropertyChangedイベントを登録した場合です。

デフォルトでは、使用されるSynchronizationContextはApplicationImportConfigurationクラスおよびInstallCaptureConfigurationクラスが作成される時のSynchronizationContext.Currentの値です。バックグラウンドスレッドまたはコンソールアプリケーションでは通常これはnullですが、このプロパティは手動でnullに設定することもできます。nullのSynchronizationContextは、イベントが任意のThreadPoolスレッドで発生することを意味します。イベントハンドラーからGUIコンソールにアクセスするには、呼び出しをGUIスレッドに向けます。

WinFormsまたはWPFアプリケーションのGUIスレッドで、SynchronizationContextは適切なSynchronizationContextにデフォルト設定され、同じGUIスレッドでイベントが発生するため任意のGUIコントロールに直接アクセスできます。

Import.WaitForCompletion()メソッドは現在のスレッドのSynchronizationContextをブロックしませんが、たとえばGUIスレッドから呼び出されるGUIイベントに引き続き対応します。GUIイベントに対応せずに完了を待機するには、Thread.Sleep()呼び出しをループ内で使用して、Import.IsFinishedが完了するまで待機することができます。

アプリケーション属性の使用

Oct 16, 2015

アプリケーション属性を使用して、AppDNA内のアプリケーションにユーザー定義の値を割り当てます。これは、AppDNAを意思決定ツールとして使用する場合に役立ちます。たとえば、アプリケーションがその所有者およびメールアドレスを定義する属性を持つとします。アプリケーションのインポートと分析が終わったら、レポート値からメールを生成してアプリケーションの所有者に送信し、次の行動を指示することができます。

アプリケーション属性には2つの重要な要素があります。

1. **ApplicationAttributeDefinition**。これによりアプリケーションに割り当てられる値の種類が定義されます。名前、説明、そのほかのプロパティが含まれます。
2. 各アプリケーションに割り当てられる、属性定義の値。

したがって、アプリケーション属性はアプリケーションをApplicationAttributeDefinitionと、値と共にリンクします。

ApplicationAttributeDefinitionの作成

ServerApplicationAttributeDefinitionから戻されるオブジェクトを使用して、ApplicationAttributeDefinitionを作成します。次に例を示します。

```
using AppDNA = Citrix.SDK.AppDNA; AppDNA.Server appdna; appdna = login.AppDNAServer; AppDNA.ApplicationAttributeDefinition definition = appdna.ApplicationAttributeDefinition.CreateStringDe  
同様に、以下のように既存の定義を取得します。
```

```
definition = appdna.ApplicationAttributeDefinition.Get("ApplicationOwner");
```

値の設定と取得

Applicationオブジェクトを使用してApplicationAttributeDefinitionに値を割り当てます。次に例を示します。

```
AppDNA.ApplicationAttribute SetAttributeValue(AppDNA.Application app, AppDNA.ApplicationAttributeDefinition definition, string value) { return app.SetAttribute(definition.Identifier, value); }  
Applicationクラスのプロパティを使用して、そのアプリケーションに設定されているアプリケーション属性のコレクションを取得します。
```

注：Application.Attributesプロパティには、アプリケーションに値を設定するために使用される定義に対するアプリケーション属性オブジェクトのみが含まれます。未使用のオブジェクトは含まれません。

ApplicationAttributeから、値とApplicationAttributeDefinitionを取得できます。次に例を示します。

```
void PrintApplicationAttributes(AppDNA.Application app) { foreach (var attribute in app.Attributes) { string valueString = string.Empty; if (attribute.IsNotNull) valueString = ""; else { switch (attribute.Definition.D
```

アプリケーションの分析

Oct 16, 2015

アプリケーションのセットに対するアルゴリズム結果を取得するには、まず特定のReportConfigurationに対してアプリケーションを分析する必要があります。アプリケーションの分析は、ReportConfigurationオブジェクトまたはServer.ReportConfigurationが返すオブジェクトからトリガーされます。

単一のモジュールについては、ReportConfigurationオブジェクトのAnalyzeメソッドを使用します。次に例を示します。

```
using AppDNA = Citrix.SDK.AppDNA; AppDNA.Server appdna; //Connect appdna //... public void Analyze(string reportConfigIdentifier, IEnumerable applications) { var reportConfig = appdna.ReportConf  
複数のモジュールを分析するには、Server.ReportConfiguration.Analyzeメソッドを使用します。これはより効率的です。次に例を示します。
```

```
public void Analyze(IEnumerable applications) { var allReportConfigurations = appdna.ReportConfiguration.Get(); var enabledReportConfigurations = new List(); foreach (var config in allReportConfigurati  
注：例外が発生するため、無効なreportConfigurationを使用して分析しないでください。
```

進行状況の監視

Analyzeに対する呼び出しから返されるAnalysisオブジェクトを使用して、分析の進行状況と成功を監視します。Analysis.ProcessingStateによりINotifyPropertyChangedが実装されます。これにより、たとえば分析が進むにつれてGUIアプリケーションのコントロールを分析の詳細情報で更新することができます。

WaitForCompletionからの復帰からは、分析が成功したかどうか分かりません。処理結果を得るには、Analysis.ProcessingState.Stateプロパティを確認します。WaitForCompletionメソッドは分析の実行が終了するまで待機しますが、現在のスレッドのSynchronizationContextでイベントハンドラーが発生することを許可します。

現在のスレッドのSynchronizationContextを実行せずに完了を待機するには、一般的にはThread.Sleep(...)呼び出しをループ内で使用して、Analysis.IsFinishedがtrueを戻すまで待機します。

レポートデータの使用

Oct 16, 2015

ReportingConfigurationに対してアプリケーションを分析したら、ReportConfiguration.GetReportを使用してレポートデータを取得できます。

アプリケーションのレポートデータの取得

以下の例は、各reportConfigurationのレポートデータを取得する方法を示しています。各レポートにはすべてのアプリケーションのデータが含まれています。

```
AppDNA.Server appdna; //Connect appdna //... public void Report() { var allReportConfigs = appdna.ReportConfiguration.Get(); foreach (var reportConfig in allReportConfigs) { //Get a report for all applica  
Applicationオブジェクトからはそのアプリケーションのみのレポートを取得できますが、複数のアプリケーションのレポート情報を得るには、ReportConfiguration.GetReportを呼び出してアプリ  
ケーションのコレクションを渡します。これは、Application.GetReportを呼び出してアプリケーションのコレクションをループ処理するよりも効率的な方法です。
```

注：Reportオブジェクトではバックグラウンドスレッドを使用してデータをダウンロードします。これにより呼び出し元はアプリケーションデータをよりすばやく取得できますが、このスレッドを
クリーンアップするためにReportオブジェクトのDisposeメソッドを呼び出す必要があるということを示しています。これはusing文を使用すると最も適切に実行できます。

レポートビューのファイルへのエクスポート

Reportオブジェクトから、あらかじめ定義された特定のレポートビューをMHTファイルにエクスポートできます。次に例を示します。

```
report.Export( targetFilename, AppDNA.ReportType.EstateView, AppDNA.ReportExportFormat.MimeHtml, TimeSpan.FromMinutes(5) );  
エクスポートできるレポートビューについて詳しくは、ReportTypeの列挙型を参照してください。
```

一部のレポートビューでは、複数のReportConfigurationsから情報を集約することができます。これらをエクスポートするには、Server.Reportプロパティから戻されるオブジェクトを使用します。
に例を示します。

```
AppDNA.Server appdna; //Connect appdna //... appdna.Report.ExportApplicationRemediation(...);
```

詳細または集約レポートデータの取得

あらかじめ定義されたレポートビューのエクスポートに加え、Reportオブジェクトは、アプリケーションおよびアルゴリズムの各組み合わせに関する詳細情報と、ReportConfiguration内で有効な
すべてのアルゴリズムについての各アプリケーションの集約情報へのアクセスを提供します。

特定のアプリケーションの集約情報にアクセスするには、ByApplicationプロパティに格納されているオブジェクトを使用します。

```
public void Report(AppDNA.Application app) { var allReportConfigs = appdna.ReportConfiguration.Get(); foreach (var reportConfig in allReportConfigs) { //Get application's report for reportConfig using (va  
ByApplicationプロパティは、Applicationにより列挙またはインデックス付けできるコレクションを戻します。これにはReportedApplicationオブジェクトが含まれます。ReportedApplicationオブジ  
クトは、それが保有するレポートデータが対象とするApplicationオブジェクトへのアクセスを提供します。これにはReportオブジェクトのReportConfiguration内のすべての有効なアルゴリズムに  
する、そのアプリケーションの集約結果も含まれます。
```

アプリケーションとアルゴリズムの各組み合わせの詳細結果は、ByApplicationコレクションまたはそれと等価なByAlgorithmコレクションを使用して利用できます。ByAlgorithmコレクションには
ReportedAlgorithmオブジェクトが含まれます。次に例を示します。

```
AppDNA.ReportedAlgorithm algResult = report.ByAlgorithm["x32_001"];
```

- ReportedAlgorithmオブジェクトはResultsByApplicationプロパティを持ちます。これは、Applicationにより列挙またはインデックス付けできるコレクションを戻します。
- ReportedApplicationオブジェクトはResultsByAlgorithmプロパティを持ちます。これは、Algorithmにより列挙またはインデックス付けできるコレクションを戻します。

これらのコレクションの両方に、アプリケーションとアルゴリズムの特定の組み合わせの詳細情報を含むApplicationAlgorithmResultオブジェクトが含まれます。次に例を示します。

```
AppDNA.ApplicationAlgorithmResult appAndAlg = report.ByApplication[app].ResultsByAlgorithm["x32_001"]; AppDNA.ApplicationAlgorithmResult appAndAlg2 = report.ResultsByAlgorithm["x32_001"];E  
指定されたアルゴリズムとアプリケーションが同じであるため、appAndAlgとappAndAlg2の両方に同じオブジェクトが含まれます。
```

親のReportedApplication.RAGプロパティがUnanalyzedまたはLockedである場合は、ApplicationAlgorithmResultに有用なデータは含まれず、そのRAGプロパティはgreenになります。次に例を示し
ます。

```
foreach (var reportedApp in report.ByApplication) { if (reportedApp.OverallRag == AppDNA.ReportRag.Unanalyzed || reportedApp.OverallRag == AppDNA.ReportRag.Locked) { //No useful data.continue;  
アルゴリズムをトリガーしたアプリケーションの要素の詳細はResultsプロパティに含まれます。Triggeredプロパティがfalseである場合は、これはnullを戻します。そうでない場合はアルゴリズムに  
特有な列を持つDataTableを戻します。各列に、アルゴリズムをトリガーしたアプリケーションに特有な要素の対応データが含まれます。次に例を示します。
```

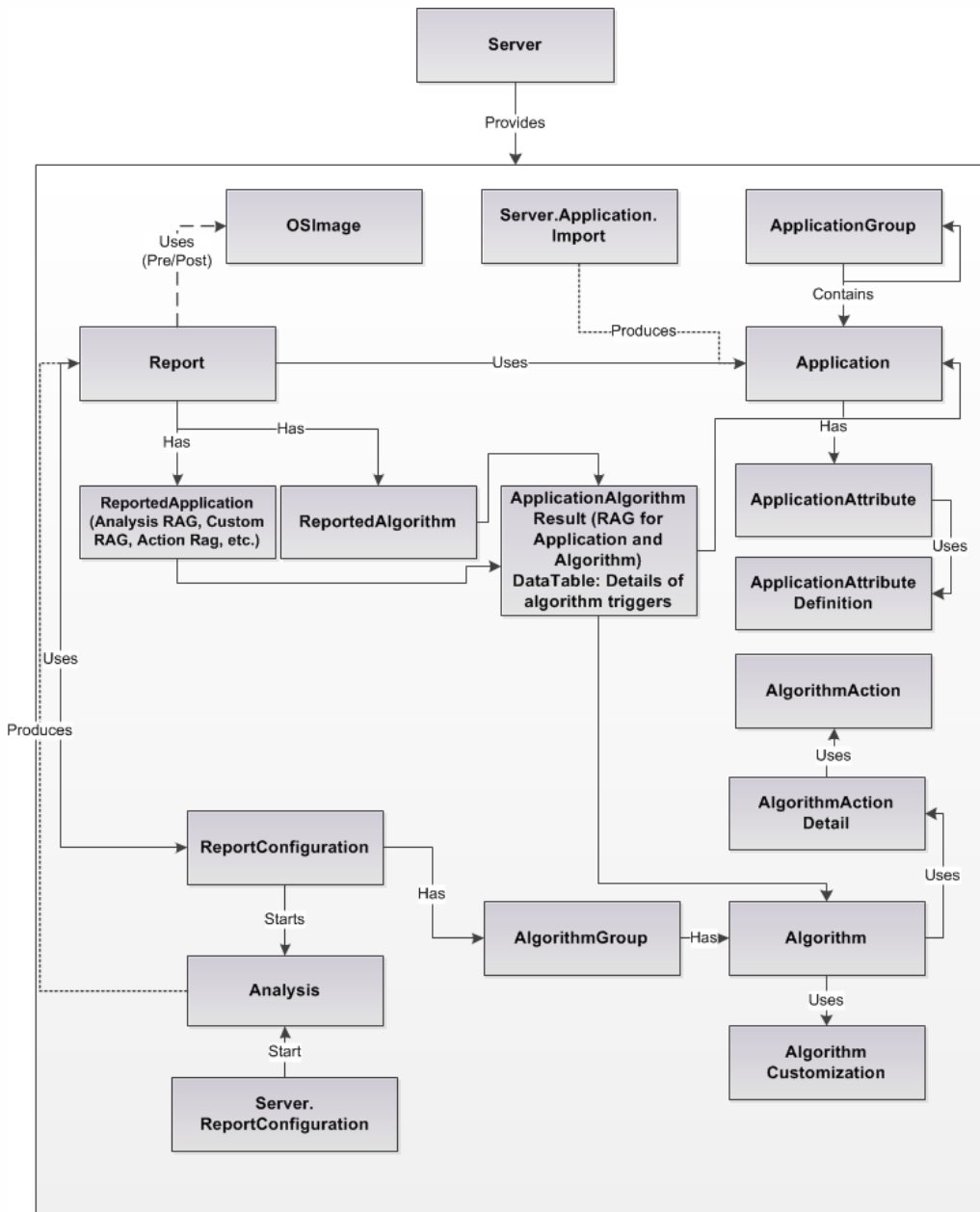
```
foreach (var algorithmResult in reportedApp.ResultsByAlgorithm) { if (algorithmResult.Triggered) { string msg = algorithmResult.Application.Name + " triggered " + algorithmResult.Algorithm.Name; Conso
```


SDKで使用できるデータ

Oct 16, 2015

このトピックでは、AppDNA SDKを使用してアクセスできるデータについて説明します。

以下の図に示すように、AppDNA SDKによってさまざまなデータ型が公開されます。



データのカテゴリ

以下のデータがSDKにより公開されます。

- Server - 特定のAppDNAインスタンス（データベース）に対する接続を表します。
- Application - インストールコマンドの結果を表します。分析してレポートを作成する対象です。
- ApplicationGroup - Applicationオブジェクトのコレクションです。ポートフォリオ内の残りのアプリケーションとは別に、グループ内のアプリケーションを簡単に確認したりレポートを作成したりできます。

- ApplicationAttributeDefinition - IDを含めた、属性の定義です。
- ApplicationAttribute - ApplicationとApplicationAttributeDefinitionに関連付けられている値です。
- OSImage - インポートしたり、レポート結果を条件付けするために使用したりできる、オペレーティングシステムイメージを表します。
- ReportConfiguration - アプリケーションを分析したりレポートを取得したりできる、レポートエンティティを表します。
- AlgorithmGroup - アルゴリズムのシステム定義のグループです。
- Algorithm - アプリケーションに適用できるロジックです。各アルゴリズムは、対象プラットフォームで問題が発生する可能性のあるアプリケーションを特定するように設計されています。この問題を持つと特定されるアプリケーションは、アルゴリズムをトリガーするといわれます。
- Report - ReportConfigurationに含まれるアルゴリズムに対するアプリケーションの分析結果を表します。

SDKの完全なリファレンスについては、<http://support.citrix.com/help/appdnasdk/7.0/>でクラスリファレンスのドキュメントを参照してください。SDKを使用するサンプルソリューションは、<http://support.citrix.com/help/appdnasdk/7.0/SampleUserProjects.zip>からもダウンロードできます。

既知の問題

Oct 16, 2015

このトピックでは、SDKに特有の既知の問題について説明します。SDKの使用を始める前に、この内容について注意深く精査してください。

トラブルシューティング

Oct 16, 2015

各トピックへのクイックリンク：

- [ログオンの問題](#)
- [ライセンスの問題](#)
- [インポートと分析の問題](#)
- [レポートの問題](#)

ログオンの問題

"要求はHTTPステータス503で失敗しました：サービスが使用できません"

AppDNA WebサイトがAppDNAデータベースに接続するときのパスワードが変更されたり使用期限が切れたりするとこのエラーが発生します。この問題の解決方法については[Webサイト](#)を参照してください。

「The operation has timed out」というエラーメッセージが表示されログオンできない

このエラーは、AppDNAサービスのいずれか、またはAppDNAが依存する別のサービスが停止していることが原因でときどき発生します。

IISのサービスの確認

1. 次の手順を実行して、IISマネージャーを開きます。Windowsの [スタート] 画面/メニューで [すべてのプログラム]、[アクセサリ]、[ファイル名を指定して実行] の順に選択し、「inetmgr」と入力して [OK] をクリックします。
2. IISサーバーが実行中かどうかを確認し、停止していた場合は開始します。これを行うには、ウィンドウ右側の [操作] パネルの [サーバーの管理] の下の [開始] をクリックします。サーバーが実行中の場合は、[開始] リンクが無効になります。
3. IISサーバーが実行中の場合は、AppDNAAppPoolが実行中かどうかを確認し、停止していた場合は開始します。これを行うには、IISマネージャーのウィンドウ左側のツリーを展開し、[アプリケーションプール] をクリックします。中央のパネルの [AppDNAAppPool] をクリックして、右側のパネルの [開始] をクリックします。AppDNAAppPoolが実行中の場合は、[開始] リンクが無効になります。
4. IISサーバーおよびAppDNAAppPoolが実行中の場合は、AppDNA Webサイトが実行中かどうかを確認し、停止していた場合は開始します。これを行うには、IISマネージャーのウィンドウ左側のツリービューで [サイト] ノードを展開してAppDNA Webサイトをクリックします（デフォルトの名前はAppDNAです）。右側のパネルの [開始] をクリックします。AppDNA Webサイトが実行中の場合は、[開始] リンクが無効になります。

IISのサービスのいずれかを再起動した場合は、AppDNAへのログオンを再度試行します。そうでなかった場合は、次の手順に従ってSQL Serverインスタンスのサービスが実行中かどうかを確認し、要に応じて開始します。

1. [コントロールパネル]、[管理ツール]、[サービス] の順に選択して、[Windowsサービス] ウィンドウを開きます。
2. サービスの一覧から、AppDNAデータベースに使用されているSQL Serverインスタンスを見つけます。
3. [状態] 列が空白の場合は、[開始] をクリックしてサービスを開始します。成功したら、[サービス] ウィンドウを閉じます。これで、AppDNAにログオンできるはずです。

要求はHTTPステータス407で失敗しました：プロキシ認証が必要です

LANにプロキシサーバーを使用するようにInternet Explorerが構成されている場合、このエラーが発生します。この問題は次のようにして回避できます。

1. Internet Explorerのメニューから、[ツール]、[インターネットオプション] の順に選択します。
2. [インターネットオプション] ダイアログボックスの [接続] タブで、[LANの設定] をクリックします。
3. [ローカルエリアネットワーク (LAN) の設定] ダイアログボックスの [プロキシサーバー] で、[ローカルアドレスにはプロキシサーバーを使用しない] チェックボックスをオンにします。
4. [OK] をクリックします。

ライセンスの問題

このセクションでは、AppDNAバナーが赤くなるような問題を含む、ライセンスの問題のトラブルシューティングに役立つ情報について説明します。この問題が発生した場合は[ダッシュボード](#)の [Module license summary] セクションに表示される説明メッセージを確認してください。これにより、通常は、AppDNAがAppDNAライセンスサーバーに接続できないために問題が発生しているのか、データベース自体のライセンスの問題であるのか明らかになります。以下では、これらの原因について個別に説明します。

ライセンスに問題があってバナーが赤くなっているAppDNAは、引き続き使用できますが機能が大幅に制限されます。アプリケーションをインポートできますが、それ以外のほとんどの機能はブロックされます。ライセンスの問題を解決すると、ブロックされた機能を再び使用できるようになります。

AppDNAがライセンスサーバーに接続できない

ライセンスサーバーに接続できないというメッセージがAppDNAに表示される場合は、AppDNAライセンスサーバーが実行されていない可能性があります。これを確認し、必要に応じて再起動する場合は、次の手順に従います。

1. [コントロールパネル]、[管理ツール]、[サービス] の順に選択して、[Windowsサービス] ウィンドウを開きます。
2. サービスの一覧から [AppDNA LicenseServer] を見つけます。
3. [状態] 列が空白の場合は、サービスが開始されていません。[開始] をクリックしてサービスを開始します。成功したら、[サービス] ウィンドウを閉じます。
4. AppDNAを再起動します。

AppDNAサーバーの移動後またはライセンスの移動後にデータベースのライセンスが破損する

AppDNAライセンスがアクティブ化されると、データベースおよびAppDNAライセンスサーバーが実行されているマシンの両方にライセンスが関連付けられます。データベースのライセンスとライセンスサーバーの場所の間のリンクが破損している場合は、問題が発生する可能性があります。リンクの破損は、AppDNAサーバーをあるマシンから別のマシンに移動した場合、またはライセンスを動かすための2段階の手順を開始したものの完了していない場合などに起こります。

- 別のマシン上にあるライセンスサーバーでデータベースを使用できるようにするには、古いマシン上のAppDNAライセンスサーバーから新しいマシンにライセンスを移動します。
- ライセンスの移動作業を実行中である場合、たとえば、ライセンストークンをエクスポートしたものの、まだ新しいライセンスサーバーの場所を使用してデータベースにインポートしていない場合は、作業を完了します。その後、データベースが再び使用できるようになります。

詳しくは、「[ライセンスの移動](#)」を参照してください。

注：通常、ライセンスサーバーはAppDNAサーバーと同じマシン上で実行されます。ただし、以前のバージョンのAppDNAからアップグレードした場合、これは当てはまらない可能性があります。
ライセンスサーバーのデフォルトポートを使用できない

デフォルトでは、AppDNAライセンスサーバーはポート8079を使用します。このポートを使用できない場合は、次の手順に従ってポートを変更します。

1. サーバー上のAppDNAおよびこのAppDNAに接続するすべてのクライアントを閉じます。
2. AppDNAライセンスサーバーのファイルを見つけます。
デフォルトの場所は、C:\Program Files[(x86)]\Citrix\AppDNA\License Serverです。
3. テキストエディターでremoting.configを開きます。
4. 次の行で、8079を別のポート番号に変更して、ファイルを保存します。
5. Windowsの [スタート] 画面/メニューから、[コントロールパネル]、[管理ツール]、[サービス]の順に選択します。
6. Windowsの [サービス] パネルで、サービスの一覧から [AppDNA license server] を探して選択し、ツールバーの [開始] または [再起動] をクリックして、AppDNAライセンスサーバーを再起動します。

インポートと分析の問題

「This transaction has completed and can no longer be used」というエラーメッセージが表示される

このエラーメッセージは、分析またはすべての種類のインポート中に発生する可能性があります。これは通常、拡張に必要なディスクスペースがデータベースにない場合に発生します。

1. Microsoft SQL Server Management Studioを開き、AppDNAデータベースをホストするSQL Serverインスタンスに接続します。
2. ディスクスペースの不足が問題なのかどうかを確認するため、SQL Serverのログを参照します。
これを行うには、左側のツリー表示で [管理]、[SQL Serverログ] を開きます。最近のログを表示して、ディスクスペースの不足を示すテキストを検索します。ディスクスペースが問題である場合は、次の手順に従います。
3. AppDNAデータベースのデータファイルとログファイルが拡張可能になっていることを確認します。
左側のツリー表示で [データベース] を開きます。AppDNAデータベースを右クリックして [プロパティ] を選択します。[データベースのプロパティ] ダイアログボックスが開きます。サイドバーの [ファイル] をクリックし、データファイルとログファイルの両方が少しずつ (たとえば10%単位) 拡張するように構成されていて、サイズの上限が設定されていないことを確認します。
4. データベースの復旧モデルを単純に設定します。
[データベースのプロパティ] ダイアログボックスでサイドバーの [オプション] をクリックし、[復旧モデル] が [単純] であることを確認します。
5. 使用できるディスクスペースを確認し、必要であれば不要データをクリーンアップしたりハードウェアをアップグレードしたりして、ディスクの空き領域を増やします。

App-Vパッケージ (.sftまたは.appv) のインポートが失敗する

sftまたは.appvパッケージをインポートすると、AppDNAは自動的に、元のディレクトリ構造を維持したまま内容を中間フォルダーに展開します。結果のファイルバスの合計文字数がWindowsの制限 (通常は256文字) を超えると、これは失敗します。その場合、インポートログファイルにはcreate_deep_dirというテキストが含まれます。

デフォルトでは、AppDNAは.sftおよび.appvファイルを [File settings] で指定されている一時フォルダーに展開します。ただし、 [Import and analyze settings] の [SFT intermediate folder] ボックスで、sftおよび.appvファイルに対して別の中間フォルダーを指定できます。

この問題を解決するには、[SFT intermediate folder] に非常に短いファイルバスを設定してください。AppDNAはこのフォルダーを自動的にクリアしません。必要な場合は、インポートが終了した後で、展開されたファイルを手動で削除できます。

インポートは成功するがアプリケーションに期待されるDNAが含まれていない

この問題は、アプリケーションをInstall Captureまたはセルフプロビジョニングによりインポートしたとき、インストールが失敗したにもかかわらず、成功時にゼロ、失敗時にゼロ以外を戻す規約(インストーラーが従わない場合)にとき発生します。この問題が発生すると、AppDNAではキャプチャが成功したとみなされ、キャプチャされたDNAがインポートされ、インポートが成功したと記録されます。ただし、実際には本当のアプリケーションDNAはまったくキャプチャされていません。この状況では、キャプチャされたDNAに含まれるのは、失敗したアプリケーションのインストール試行によって基礎となるオペレーティングシステムに加えられた軽微な変更です。

オートクリッカーによりキャプチャを実行した場合、ユーザーの入力が待機されるためインストールが失敗している可能性があります。したがって、オートクリッカーは使用せずにキャプチャ処理を再実行してください。これによりインストールおよびキャプチャが正常に完了する可能性があります。

または、成功時にゼロ終了コードを戻す規約にインストーラーが従わないことがわかっている場合は、そのアプリケーションの実行プロファイルに成功時の終了コードを指定することができます。この実行方法について詳しくは、「[実行プロファイルの編集](#)」を参照してください。

「404 : File Not Found」というエラーメッセージが表示されてオペレーティングシステムイメージのインポートが失敗する

オペレーティングシステムイメージのインポートに失敗して「404 : File Not Found」というエラーメッセージが表示される場合は、通常、IISで許可されるコンテンツ最大長のサイズ制限を超過していることを意味します。許可されるコンテンツ最大長を増やすには、「[AppDNAの最適化](#)」の「IISの最適化」の手順を参照してください。

レポートの問題

レポートビューの表示に時間がかかる

1ページあたりのレコード数が誤って非常に大きい値に設定されると、この問題が発生することがあります。ページの表示が非常に遅くて使用に堪えない場合は、レポートビューから移動し、次の手順に従って1ページあたりのレコード数を変更します。

1. AppDNAの [Edit] メニューで、[Settings] を選択します。
2. [Setting] ダイアログボックスのサイドバーで、[Reporting] をクリックします。
3. [Records per page] ボックスに、小さい値 (「200」など) を入力します。
4. [保存] をクリックします。

Webクライアントで1ページあたりのレコード数を変更するには：

- レポートビューのURLに次の記述を追加します。
&FRMKEY_PAGE_SIZE=<n>

nは、次の例で示すように、必須のデフォルトページサイズです。わかりやすいように、このURLは複数行で示してあります。実際には、URLは1行で入力する必要があります。

`http://appdna-machine:8199/appdna/Reporting/AssessmentReport.aspx?FRMKEY_TOKEN=1dd82045-b9a3-4840-af46-75e112bfcbb0 &FRMKEY_MODULE_ID=Win8Module &FRMKEY_CUSTOMI`

レポートビューにイメージが表示されない

この問題は、AppDNAをWindows 8にインストールした後でレポートを初めて表示すると発生します。この問題は、インターネットインフォメーションサービス (IIS) の構成が不完全であるために発生します。

この問題を解決するには：

1. AppDNAを閉じ、AppDNAクライアントを停止します。
2. AppDNAサーバーマシンで、すべての必要なIIS機能を有効にします。詳しくは、[AppDNA7.6のシステム要件](#)を参照してください。
3. `vm-create-from-template`コマンドを使用します。 `iisreset`コマンドを使用してIISをリセットします。

Effort Calculatorが読みづらい

コントロールパネルの [ディスプレイ] で [画面上の文字を読みやすくします] オプションを使用して画面上のテキストとほかの要素のサイズを大きくした場合 (たとえば125%)、Effort Calculatorのメイン画面が読みづらくなります。このオプションは、Windows 8ではデフォルトでオンになっていることがあります。

このオプションがオンになっていると、Effort Calculatorでテキストのサイズが大きくなります。これにより、テキストが切り捨てられたり、ほかの項目に重なったりして、読みづらくなります。か一部のレポートにも同じような影響があります。

解決するには、[コントロールパネル]、[ディスプレイ] の順に選択して表示サイズを100%にリセットします。

PDFエクスポートが失敗する

Adobe Readerをインストールした後、実際にAdobe Readerを実行する、つまりPDFファイルを開く前にPDFエクスポートを実行しようとすると、PDFエクスポートが失敗して「このアプリケーションは、ユーザーアカウント制御が無効になっている場合にはアクティブ化できません」というエラーが表示されます。これは、ユーザーがAdobe Readerライセンス契約を受け入れるまでAppDNA PDFエクスポートが機能しないためです。

この問題を解決するには、AppDNAを実行しているマシンでPDFファイルを開き、Adobe Readerライセンス契約を受け入れます。

PDFエクスポートの [Report Data] セクションの列が重なる

レポートに多数のアルゴリズムグループがある場合、PDFエクスポートの [Report Data] セクションの列が重なって読みづらくなることがあります。この問題を解決するには、[Reporting settings](#) の [Show counts in PDF exports] チェックボックスをオフにしてから、PDFエクスポートを再度実行します。

システムチェックの問題

Oct 16, 2015

AppDNA環境構成ウィザードの [System Check] ページでは、システムに対して多数のチェックが実行されます。実行されるチェックは、操作の内容と環境の構成によって異なります。

操作を続行する前に修正が必要な重大な問題がないかどうかをテストするチェックもあれば、場合によっては無視しても問題ない警告に相当するチェックもあります。失敗したチェックがあった場合は、問題を修正するためのオプションが提示されます。このセクションでは、このオプションを選択した場合に行われることと、自動修正を選択できない場合や自動修正が失敗した場合に自分で問題を修正する方法について説明します。

現在のマシンのチェック

空きディスクスペース- オペレーティングシステムがインストールされているドライブに、新しいインストールに最低限必要な容量があることをチェックします。この問題はウィザードで自動修正できません。必要に応じて、ディスクをクリーンアップしてディスクスペースを解放してください。

この問題は、十分なディスクスペースがあることがわかっている場合には無視して構いません。必要な空きディスクスペースが少ないアップグレードを行っている場合などです。

AppDNAライセンスサーバーが実行されている- AppDNAライセンスサーバーが実行されていることをチェックします。これは重大な問題です。自動修正オプションでは、AppDNAライセンスサーバーの起動が試行されます。

- 自動修正が失敗した場合は、手動でAppDNAライセンスサーバーを起動してください。
- デフォルトでは、AppDNAライセンスサーバーはポート 8079を使用します。このポートが既に使用されている場合は、別のポートを使用するように構成する必要があります。また、AppDNAライセンスサーバーが別のポートを使用するように構成されている場合は、[License Database] ページに戻り、正しいポート番号を入力する必要があります。
- AppDNAライセンスサーバーが別のマシンにある場合は、[License Database] ページでマシン名とポートを正しく入力したことを確認してください。また、そのマシンが実行されていることと、ネットワークケーブルが接続されていることを確認してください。ファイアウォールでアクセスが禁止されていないかどうかも確認してください。
- WindowsイベントビューアーでWindowsのイベントログを確認します
- 詳しくは、「[ライセンスの問題](#)」を参照してください。

SQL Serverのチェック

ロール- 新しいデータベースを作成する場合は、ユーザーアカウント (sysadminサーバーロールがあることをチェックします。そのほかのデータベース操作の場合は、bulkadminサーバーロールとdb_ownerデータベースロールがあることをチェックします。

これは重大な問題です。この問題はウィザードで自動修正できません。正しいロールが設定されていないと、通常はデータベース操作が失敗します。必要に応じて、ロールを割り当てるか、データベースの資格情報を入力したページに戻り、別のユーザーアカウントを入力してください。Windows認証を使用している場合は、[Cancel] をクリックしてウィザードを終了し、別のユーザーアカウントでやり直してください。

データベースの照合順序- データベースに対して定義されている照合順序がLatin1_General_CI_ASであることをチェックします。これは重大な問題です。この問題はウィザードで自動修正できません。

SQL Serverの照合順序- SQL Serverインスタンスに対して定義されている照合順序がLatin1_General_CI_ASであることをチェックします。これは重大な問題です。この問題はウィザードで自動修正できません。必要に応じて、[Cancel] をクリックしてウィザードを終了し、必要な照合順序を使用するようにSQL Serverインスタンスを構成してから、もう一度ウィザード

を実行してください。

バージョン – SQL Serverのバージョンがサポートされているバージョンであることをチェックします。これは重大な問題です。この問題はウィザードで自動修正できません。必要に応じて、[Cancel] をクリックしてウィザードを終了し、サポートされているバージョンのSQL Serverをインストールしてから、もう一度ウィザードを実行してください。

Internet Explorer (IE) のチェック

JavaScript – Internet ExplorerでJavaScriptが有効になっていることをチェックします。AppDNAレポートを表示するにはJavaScriptが必要なため、これは重大な問題です。

暗号化されていないフォーム – Internet Explorerで暗号化されていないフォームが有効になっていることをチェックします。AppDNAレポートを表示するには暗号化されていないフォームを有効にする必要があるため、これは重大な問題です。

IISのチェック

これらのチェックは、完全インストールを構成し、IIS Webサーバーを使用する場合にのみ実行されます。

HTTP基本機能 – IISでHTTP基本機能が有効になっていることをチェックします。これは重大な問題です。自動修正オプションでは、HTTP基本機能の有効化が試行されます。成功した場合は、続行する前にコンピューターを再起動する必要があります。

ASP.NET – ASP.NETが有効になっていることをチェックします。これは重大な問題です。

IISのパイプラインモード – IISのパイプラインモードが「クラシック」に設定されていることをチェックします。これは、重大な問題ではありません。パイプラインモードが「クラシック」に設定されていなくてもAppDNAは実行できます。ただし、これはパフォーマンスのために推奨される設定です。自動修正オプションでは、IISのパイプラインモードの「クラシック」への設定が試行されます。

アイドル状態のタイムアウト – アプリケーションプールのアイドル状態のタイムアウトが0に設定されていることをチェックします。これは、重大な問題ではありません。IISがこのように設定されていなくてもAppDNAは実行できます。ただし、これはパフォーマンスのために推奨される設定です。自動修正オプションでは、アプリケーションプールのアイドル状態のタイムアウトについて0への設定が試行されます。

ping – アプリケーションプールのpingが無効になっていることをチェックします。これは、重大な問題ではありません。アプリケーションプールのpingが有効になっていてもAppDNAは実行できます。ただし、パフォーマンスのためにpingを無効にすることをお勧めします。自動修正オプションでは、アプリケーションプールのpingの無効化が試行されます。

アプリケーションプールのリサイクル – アプリケーションプールのリサイクルが0に設定されていることをチェックします。これは、重大な問題ではありません。IISがこのように設定されていなくてもAppDNAは実行できます。ただし、これはパフォーマンスのために推奨される設定です。自動修正オプションでは、アプリケーションプールのリサイクルについて0への設定が試行されます。

マシン名 – マシン名がIISのドメイン名の要件を満たしていることをチェックします。

Webサイト接続ユーザーがローカルの管理者 – WebサイトのユーザーアカウントがローカルのAdministratorsグループのメンバーであることをチェックします。必要に応じて、[Web Site Credentials] ページに戻り、ローカルのAdministratorsグループのメンバーであるユーザーアカウントを入力してください。

Active DirectoryとConfiguration Managerの問題

Oct 16, 2015

Active DirectoryまたはConfiguration Managerの接続の詳細情報を入力するとき、またはその接続を使用してデータを抽出するときに、「Access is denied」エラーが発生する場合があります。

通常、このエラーは次のいずれかの理由で発生します。

- 「[オプション機能の要件](#)」で説明しているような、ユーザーアカウントに必要な権限がありません。
- Active DirectoryまたはConfiguration Managerへの接続を試みているコンピューターで、Distributed COM (DCOM) が有効になっていません。詳しくは、「[DCOMの有効/無効を切り替える](#)」を参照してください。

Configuration Managerによって展開された管理対象アプリケーションをインポートするときは、AppDNAがインストールファイルにアクセスできる必要があります。これは通常、UNCパスを使用して実現し、ファイルサーバー共有へのアクセスにActive Directoryのドメイン認証を通じて行われます。インポートが失敗しインポートログに次のようなメッセージが含まれる場合は、インストールファイルパスを調べ、AppDNAからアクセスできることを確認します。Install Captureによるインポートでは、Install Capture仮想マシンからもインストールファイルにアクセスできる必要があります。

Failed to load file: due to error

The system cannot open the device or file specified.

Failed to load file: due to error

Access is denied.

失敗は、必要なネットワーク共有に対するアクセス権を持たないWindowsユーザーアカウントでAppDNAを実行した結果である可能性があります。また、UNCパスではなくドライブ文字を使用してパスを指定した結果である可能性もあります。インポートを成功させるには、必要なドライブ文字を正しいネットワーク共有にマップする必要があります。Install Captureを使用するときは、仮想マシンでこれを行う必要があります。

Install Captureの問題

Oct 16, 2015

ここでは、Install Captureで発生する問題のトラブルシューティングのヒントについて説明します。

注：Install Captureの多くの問題は、[仮想マシン構成ウィザード](#)を再実行することで診断し、解決できます（多数のチェックを行い、問題が発生した場合には的を絞ったトラブルシューティング情報を提供します）。

Install Captureの [Troubleshoot Errors] チェックボックスをオンにすると、Install Captureの実行時に特定のエラーが発生した場合にトラブルシューティングユーザーインターフェイスが表示されます。このトラブルシューティングユーザーインターフェイスを使用して、Remote Adminへの接続やコマンドの実行などのトラブルシューティングの手順を仮想マシンで行うことができます。その後、"Finished"操作を実行すると、Install Captureが終了してトラブルシューティングインターフェイスが閉じ、次のInstall Capture（ある場合）に移ります。

Install Captureのトラブルシューティングを有効にするには

1. AppDNAのメニューで、[Edit]、[Settings] の順に選択します。
2. [Install Capture] をクリックします。
3. [Virtual Machines] タブで、使用する仮想マシン構成を選択し、[Advanced] をクリックします。
4. [Virtual Machine Configuration] ダイアログボックスで、[Troubleshoot Errors] チェックボックスをオンにして [OK] をクリックし、[Save] をクリックします。

仮想マシン構成のチェック

Oct 16, 2015

デフォルトでは、[Install Capture] タブでインポートするアプリケーションが選択されている場合に [Import Applications] 画面で [Import] をクリックすると、仮想マシン構成に関するさまざまなチェックが実行されます。

DCOMが有効になっていないと、仮想マシン構成のチェック中にHyper-Vサーバーに接続できず、以下のメッセージが表示されます。

The Hyper-V connection failed because Hyper-V does not exist on the specified server, or DCOM is not enabled.Full Error:
The RPC server is unavailable.[Exception from HRESULT: 0x800706BA]

DCOMを有効にするには、「[DCOMの有効/無効を切り替える](#)」を参照してください。また、ポート135が開放されていることを確認してください。

仮想マシンに古いバージョンのCitrix AppDNA VM構成ツールがインストールされていると、「Remote Adminエージェントへの接続」のチェックに失敗します。リンクをクリックして詳細なエラーメッセージを参照し、これが問題なのかどうかを確認してください。Citrix AppDNA VM構成ツールのアップグレード方法について詳しくは、「[AppDNAツールのアップグレード](#)」を参照してください。

AppDNAが仮想マシンを元の状態に戻したときに仮想マシンがユーザーによる操作を必要とする場合も、「Remote Adminエージェントへの接続」のチェックに失敗します。たとえば、仮想マシンの電源がオフのときに仮想マシンスナップショットを作成した（これは推奨される処理です）ものの、仮想マシンに自動ログオンを構成しなかった場合です。このような状態で「Remote Adminエージェントへの接続」のチェックが失敗するのは、Remote Adminが起動する前に仮想マシンがユーザーのログオンを待機するためです。しかし、AppDNAによってコンソールで仮想マシンが開かれることはないため、ユーザーはログオンできません。ユーザーがコンソールで仮想マシンを開いて自身でログオンする場合は、このシナリオによってInstall Captureの実行中に問題が発生することはありません。

ほかの理由によって「Remote Adminエージェントへの接続」のチェックに失敗する場合は、仮想マシン構成ウィザードを再度実行し、この後の説明に従って問題を診断してください。

仮想マシン構成ウィザードを使用して問題をトラブルシューティングすることをお勧めします。これを行うには、次の操作を行います。

1. AppDNAのメニューで、[Edit]、[Settings]の順に選択します。
2. [Settings] ダイアログボックスの左側で、[Install Capture] をクリックします。
3. [Install Capture] ページで、[Virtual Machines] タブをクリックします。
4. 仮想マシン構成の一覧から、使用している仮想マシン構成を選択して、[Edit] をクリックします。
これにより、[仮想マシン構成ウィザード](#)で仮想マシン構成が開きます。ウィザードの指示に従って処理を進めます。各ページで[Next] をクリックすると、ウィザードによってさまざまなチェックが実行され、問題が検出された場合はその情報が表示されます。
5. [Save] をクリックして変更を保存します。

以下の方法で、これらの自動チェックを永続的に無効にすることができます。

1. AppDNAのメニューで、 [Edit] 、 [Settings] の順に選択します。
2. [Settings] ダイアログボックスの左側で、 [Install Capture] をクリックします。
3. [Install Capture] ページで、 [Settings] タブをクリックします。
4. [Skip virtual machine system check] チェックボックスをオンにします。
5. [保存] をクリックします。

仮想マシンが起動しない

Oct 16, 2015

ここでは、Install Captureの実行時に仮想マシンが起動しない場合のトラブルシューティングのヒントを示します。

- XenServerの一般的なエラーについては、この後の「XenServerのエラー」を参照してください。
- AppDNAを管理者以外のユーザーで実行していてWindows 8のHyper-Vクライアントを使用する場合は、この問題が発生します。常に管理者ユーザーでAppDNAが実行されるように構成する手順については、後の「AppDNAを管理者として実行するための構成」を参照してください。
- vSphereまたはHyper-Vを使用する場合は、[Install Capture] タブの [VM] 列のアイコンをクリックします。「No such host is known」というエラーが表示されたら、後の「[リモートデスクトップ接続] ウィンドウが開かない場合 (vSphereまたはHyper-V)」を参照してください。
- 仮想化技術がインストール、構成、および実行されていて、「Install Capture」の手順に従って仮想マシンとAppDNAマシンがセットアップされていることを確認します。
- AppDNAの外部から仮想マシンを起動および停止して、仮想マシンが正しく動作していることを確認します。
- 仮想マシン構成がAppDNA内で正しくセットアップされていることを確認します。これを最も簡単に行うには、[Install Capture Settings] ページの [Virtual Machine] タブで構成を選択して [Edit] をクリックします。仮想マシン構成ウィザードが開き、確認が行われて、問題がある場合は有益なフィードバックが提供されます。特に次の点を確認します。
 - 仮想マシンのIPアドレス（またはDNS名かマシン名）が正しいことを確認します。仮想マシンのIPアドレスが変更されている場合は、ウィザードで更新する必要があります。
 - 仮想化技術が必要な場合は、サーバーにログオンするためのユーザー名とパスワードが正しいことを確認します。パスワードの有効期限が切れている場合は、ウィザードで新しいパスワードを入力する必要があります。
 - ウィザードのいずれかの手順で失敗する場合は、「トラブルシューティング」を参照してください。
- 「Install Capture」のサポートされている各技術の説明に従って、仮想マシンへの自動ログオンをセットアップします。

Unable to prepare the virtual machine for use. Could not authenticate session. Check your access credentials and try again.

このエラーは、Install CaptureでXenServerへのログオンに使用するユーザー名やパスワードが無効であることを示します。通常は、パスワードの有効期限が切れていることを示しています。ユーザー名とパスワードは、暗号化された形式で仮想マシン構成に格納されています。

このエラーを解決するには、[仮想マシン構成ウィザード](#)を使用して仮想マシン構成を編集し、新しいパスワードを入力します。変更を保存し、Install Captureを再度実行します。

AppDNA is unable to revert the virtual machine to the selected snapshot. This is because the user account provided for accessing XenServer is not authorized to perform the operation.

このエラーは、Install CaptureでXenServerへのログオンに使用するユーザーアカウントに、仮想マシンを元の状態に戻すために必要な権限がないことを示します。ユーザー名とパスワードは、暗号化された形式で仮想マシン構成に格納されています。

この問題を解決するには、XenServerのユーザーアカウントに必要な権限を割り当てます。通常は、「VMパワー管理者」の役割が必要です。

1. 必要であれば、AppDNAを閉じます。
2. WindowsエクスプローラーでAppDNAの主要実行可能ファイル (appTitude.exe) を見つけます。以下の表は、このファイ

ルのデフォルトの場所を示します。

マシンの種類	デフォルトの場所
32ビット	C:\Program Files\Citrix\AppDNA\Client
64ビット	C:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\Client

3. ファイルを右クリックして、[プロパティ] を選択します。
4. [互換性] タブをクリックします。
5. [特権レベルの] [管理者としてこのプログラムを実行する] チェックボックスをオンにします。
6. [OK] をクリックして変更を保存します。

vSphereまたはHyper-Vの仮想マシンを使用している場合は、AppDNAは [リモートデスクトップ接続] ウィンドウでその仮想マシンを開こうとします。AppDNAマシンがドメインに参加していても仮想マシンが参加していない、またはその逆など、特定の状況でこの処理が失敗します。この問題が発生した場合は、AppDNAマシンのhostsファイルにゲストオペレーティングシステムのアドレスを構成すると解決することがあります。hostsファイルはWindowsで使用されるローカルファイルで、ホスト名をIPアドレスにマップします。これにより、ネットワーク上のマシンを識別できます。

これらの手順が当てはまるかどうかを確認するには：

1. 未作業である場合は、 [Install Capture] タブでアプリケーションを見つけ、 [VM] 列のアイコンをクリックします。
2. [AppDNA virtual machine remote controls] ウィンドウに「No such host is known」というエラーが表示される場合は、仮想マシン構成でゲストオペレーティングシステムを識別するために使用されるIPアドレスまたはホスト名を使用して、AppDNAマシンから仮想マシンにpingコマンドを実行します。
3. pingコマンドが成功する場合は、以下の手順に従ってAppDNAマシンのhostsファイルにゲストオペレーティングシステムのアドレスを構成します。
4. pingコマンドが成功しない場合は、以下の手順は当てはまらない可能性があります。その代わりに、仮想マシン構成がAppDNA内で正しくセットアップされていることを確認します。これを最も簡単に行うには、 [\[Install Capture Settings\]](#) ページの [Virtual Machine] タブで構成を選択して [Edit] をクリックします。 [仮想マシン構成ウィザード](#) が開き、確認が行われて、問題がある場合は有益なフィードバックが提供されます。

AppDNAマシンのhostsファイルを構成するには

1. AppDNAマシンのhostsファイルを見つけます。通常、このファイルの名前は「hosts」で、場所はWindowsのバージョンによって異なります。通常、Windows 7ではC:\Windows\System32\drivers\etcにあります。
2. ファイルをメモ帳のようなテキストエディターで開きます。
3. ファイルに行を追加し、ゲストオペレーティングシステムのIPアドレスとホスト名をタブで区切って指定します。次に例を示します。
10.72.105.79 Win7HyperV
4. ファイルを保存します。

pingコマンドとゲストオペレーティングシステムのIPアドレスを見つける方法については、 [仮想マシンの接続](#) を参照してください。

Before snapshotの処理が実行されない

Oct 16, 2015

ここでは、Install Captureの実行時に"Before snapshot"の処理が実行されない場合のトラブルシューティングのヒントを示します。

注：Install Captureの多くの問題は、[仮想マシン構成ウィザード](#)を再実行することで診断し、解決できます（多数のチェックを行い、問題が発生した場合には的を絞ったトラブルシューティング情報を提供します）。

仮想マシンでWindowsのタスクマネージャーを開き、RemoteAdmin.exeが実行されているかどうかを確認します。

- RemoteAdmin.exeが実行されていない場合は、通例、AppDNA仮想マシン構成ツールのMSIをインストールする必要があります。仮想マシンの別のスナップショットを作成する必要がある可能性もあります。
- RemoteAdmin.exeが実行されている場合は、仮想マシン構成がRemote Adminのパスとして誤った場所を参照している可能性があります。仮想マシン上のRemote Adminの場所を確認します（デフォルトの場所はC:\Program Files\Citrix\AppDNA\VM Configuration、またはC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\VM Configuration（64ビット版の仮想マシンの場合）です）。次に、AppDNAが検索する場所を確認し、必要な場合は修正します。

AppDNAによるRemoteAdmin.exeの参照先の確認と修正：

1. AppDNAのメニューで、[Edit]、[Settings]の順に選択します。
2. [Settings] ダイアログボックスの左側で、[Install Capture] をクリックします。
3. [Virtual Machines] タブで、使用する仮想マシン構成を選択し、[Advanced] をクリックします。[\[Virtual Machine Configuration\] ダイアログボックス](#)が開きます。
4. [Replaceables] タブをクリックし、AppToolsFolder置き換え可能パラメーターの値が仮想マシン上のRemoteAdmin.exeの正しい場所と一致することを確認します。AppToolsFolder置き換え可能パラメーターのデフォルト値では、AppDNA VM構成ツールのMSIで作成される%APPDNAVMCONFIG%環境変数が使用されます。この変数にRemote Adminの実際のインストール場所が格納されています。
5. 必要に応じて、AppToolsFolder置き換え可能パラメーターの値を修正します。
6. [OK] をクリックして、[Save] をクリックします。

注：独自に作成した実行プロファイルや古い実行プロファイルでは、AppToolsFolder置き換え可能パラメーターを使用してRemote Adminの場所が指定されていない場合があります。その場合は、実行プロファイルを編集して正しい場所を指定する必要があります。詳しくは、「[実行プロファイルの編集](#)」を参照してください。

仮想マシンがまだ実行されている場合は終了します。Install Captureを再度実行します。この方法で問題が解決しない場合は、「[Remote Adminの接続のトラブルシューティング](#)」の手順に従ってください。

上記の方法でRemote Admin関連の問題を確認して修正した後も、依然としてBefore snapshotの処理が実行されないのに仮想マシンが起動する場合は、次の方法を試してください。

- [Edit] > [Settings] の順に選択して、仮想マシンに対して[Troubleshoot Errors] チェックボックスをオンにします。
- 仮想マシンのオペレーティングシステムが、スタートアップ時に自動的にログオンする設定になっていることを確認します。
- ホストと仮想マシンのIPアドレスが有効であることを確認します。
- AppDNAマシンから仮想マシンに、また仮想マシンからAppDNAマシンにpingで接続できることを確認します。
- UNCパス (\\xxx.xxx.xxx.xxx\) を使用して仮想マシンからAppDNAマシンを参照できることを確認します。

- ホストから仮想マシンを、また仮想マシンからホストを参照したときにログオンダイアログボックスが表示されず、パスワードが保存またはキャッシュされていることを確認します。

インストールが失敗する

Oct 16, 2015

ここでは、Install Captureの実行中にインストール手順が失敗する場合のトラブルシューティングのヒントを示します。たとえば、インストール中に仮想マシンが閉じてインポートが失敗する場合などが該当しますが、この原因としてはインストール時に予期しないエラーが発生したことが考えられます。

問題のトラブルシューティングを行うには、次の手順に従います。

1. AppDNAの外部で仮想マシンを起動します。
2. 仮想マシンからインストールパッケージの場所（[Import Applications] 画面で指定）を参照できることを確認します。
3. [Import Applications] 画面で指定されているUNCパスを使用して、仮想マシンから手動でインストールを起動します。

これにより、仮想マシンがファイルにアクセスできない、ファイルが見つからない、アクセス許可が正しくない、インストールファイルの場所がUNCパスで指定されていない、などの問題が明らかになるはずですが、マップされたドライブを使用する場合は、この後の「マップされたドライブに関する問題」を参照してください。

インストールの起動時にセキュリティの警告や入力ダイアログボックスが表示されないことを確認します。表示される場合は、その特定のインストーラーの特性に問題がある可能性があります。手動モードでキャプチャ処理を実行してみます。

問題を解決した後で、次の手順に従います。

1. 仮想マシンを停止します。
2. 必要であれば、[Import Applications] 画面の [Install Capture] タブで、インストールファイルのパスをUNCパスを使用して正しく指定します。
3. AppDNAを通じたインポートを再実行します。

引き続きインポートが失敗する場合は、次の作業を行います。

- [エラーのトラブルシューティングオプションの有効化](#)
- 問題が単一のアプリケーションのみで発生する場合は、手動モードでキャプチャ処理を実行します。

入力や出力の保存場所にマップされたドライブを使用する場合は、AppDNAマシンと仮想マシンの両方で同じドライブ文字が同じ場所にマップされていることを確認してください。

ゲストオペレーティングシステムがWindows 7やWindows 8などのユーザーアカウント制御（UAC）をサポートするオペレーティングシステムの場合、ユーザーアカウント制御が無効になっていないと、Install Captureの実行時に、net useコマンドを使用して作成されたマップ済みのドライブにRemote Adminからアクセスできないことがあります。これにより、Install Captureが失敗する可能性があります。

この問題が発生する場合は、net useではなく、Windowsエクスプローラーの[ネットワークドライブの割り当て]を使用してドライブを割り当て、[ログオン時に再接続する]チェックボックスをオンにします。通常はこの方法で解決できます。別の解決策については、<http://support.microsoft.com/kb/937624>を参照してください。

After snapshotの処理が実行されない

Oct 16, 2015

ここでは、Install Captureによるインストールが成功しても"After snapshot"が実行されない場合のトラブルシューティングのヒントを示します。

- [エラーのトラブルシューティングオプションの有効化](#)
- この問題がほかのアプリケーションにも影響を与えるのか、このアプリケーションのみに発生しているのかを確認します。
- 結果をコピーする場合は、仮想マシンから出力パスにアクセスして書き込みできること、およびユーザーの資格情報の入力が不要であることを確認します。
- 問題が引き続き発生する場合は、After snapshotコマンドをコマンドウィンドウで手動で実行して、ほかのエラーメッセージを確認します。

インポートが失敗する

Oct 16, 2015

ここでは、Install Captureによるインストールと"After snapshot"が成功してもMSIのインポートが失敗する場合のトラブルシューティングのヒントを示します。

- 直接インポートが正しく機能することを確認します。
- 一時ディレクトリとSQL Serverデータベースに使用できる領域があることを確認します。
- 出力場所に生成されたMSIを直接インポートでインポートできるかどうかを確認します。

注：After snapshotが完了したように見えたとしても、After snapshotの終わりで問題が発生する可能性があります。Install Capture処理が完了したことを確認するには、MSIおよび関連フォルダーが出力フォルダーにあるかどうかを確認します。

Remote Adminの接続

Oct 16, 2015

ここでは、Install Captureの実行中に仮想マシン上のRemote Adminへの接続に関する問題が発生した場合のトラブルシューティングのヒントを示します。通常、この問題が発生すると、"Before snapshot"の実行が失敗します。

注：Remote Adminは、仮想マシンで発生する処理（Install Captureなど）の間、仮想マシン内で動作するAppDNAエージェントです。Remote Adminにより、AppDNAと仮想マシン間の通信がサポートされます。

- 電源がオフの状態から仮想マシンが起動した場合は、起動が完了しているかどうかを確認します。コンソールに仮想マシンを表示すると、仮想マシンが起動した時間を簡単に確認できます。
- 仮想マシンでRemoteAdmin.exeが実行されているかどうかを確認します。これを行うには、仮想マシンでWindowsタスクマネージャーを開きます。
- Remote Adminが実行されている場合は、仮想マシンにインストールされたCitrix AppDNA VM構成ツールのバージョンと使用しているAppDNAのバージョンが一致することを確認します。仮想マシンのCitrix AppDNA VM構成のバージョンを確認するには、[コントロールパネル]、[プログラムと機能]の順に選択します。プログラムの一覧で[Citrix AppDNA VM Configuration]をクリックし、サポート情報を表示します。実行しているAppDNAのバージョンを確認するには、AppDNAのメニューから[Help]、[About]の順に選択します。
- Remote Adminが実行されていない場合、このウィザードの操作中にCitrix AppDNA VM構成ツールのMSIを仮想マシンにインストールしたのであれば、仮想マシンを再起動したかどうかを確認する必要があります。これが確認済みでRemote Adminが実行されていない場合は、Remote Adminを手動で起動する必要があります。これを行うには、仮想マシンのWindowsエクスプローラーでRemoteAdmin.exeを見つけてダブルクリックします。デフォルトでは、RemoteAdmin.exeは、C:\Program Files\Citrix\AppDNA\VM Configuration (64ビット仮想マシンの場合はC:\Program Files (x86)\Citrix\AppDNA\VM Configuration) にあります。次に、Windowsタスクマネージャーを使用して、RemoteAdminが実行されていることを確認します。
- Remote Adminが実行されていない場合は、通常、仮想マシンにCitrix AppDNA VM構成ツールのMSIをインストールする必要があります。
- Remote Adminが実行されている場合は、下記の「仮想マシンに対するpingの実行」で説明しているように、ここで入力したIPアドレスまたはホスト名を使用して、AppDNAマシンから仮想マシンに対してpingを実行できることを確認します。pingの実行が失敗する場合は、入力したIPアドレスまたはホスト名が正しいことを確認します。仮想マシンがドメインに接続している場合は、完全修飾ドメイン名を使用する必要があります。
- 仮想マシンまたはAppDNAクライアントマシンのファイアウォールでRemote AdminとのTCP通信が禁止されていないことを確認します。
- コンソールに仮想マシンを表示しないことを選択した場合は、ウィザードをキャンセルして再度実行してください。今回は、コンソールに仮想マシンを表示するオプションを使用します。

WindowsのTelnetコマンドを使用して、Remote AdminでTCP通信が可能かどうかを確認できます。仮想マシンを起動し、その仮想マシンではないほかのWindowsマシンからTelnetを使用して仮想マシンに接続します。

これを実行するには、コマンドプロンプトで次の構文を入力します。

```
telnet <ゲストオペレーティングシステムのNetBIOS名またはIPアドレス> <ポート>
```

次に例を示します。

```
telnet InstallCaptureOS 54593
```

コマンドコンソールが空白になった場合は、接続が確立していることを意味します。ここで、Ctrl+]キーを使用して直ちにコンソールを閉じる必要があります（そうしなければ、仮想マシンでRemote Adminを再起動するまで、AppDNAから接続でき

なくなります)。

注：Telnetがインストールされていない場合は、[コントロールパネル]、[プログラムと機能]の順に選択してインストールできます。[Windowsの機能の有効化または無効化]をクリックします。[Windowsの機能]ダイアログボックスが開きます。[Telnetクライアント]チェックボックスをオンにして[OK]をクリックします。

Telnetで「に接続中... ホストへ接続できませんでした。ポート：接続に失敗しました」のようなエラーが報告された場合は、Remote Adminが仮想マシンで実行中で、正しいポートでリッスンしていることを確認します。

これを行うには、仮想マシンのコマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。

`netstat -ab`

これらの条件を満たしている場合は、名前解決が正しく機能していることと、正しい名前またはIPアドレスが使用されていることを確認します。また、仮想マシンまたはAppDNAクライアントマシンのファイアウォールでRemote AdminとのTCP通信がブロックされていないことを確認します。

共有フォルダーへのアクセス

Oct 16, 2015

Install Captureの仮想マシンの初期設定で、入力ファイル（結果をコピーするオプションを使用している場合は出力ファイルも）が保存されている共有フォルダーに仮想マシンがアクセスできないことがあります。このような場合は、原因究明のため、次の手順に従って作業します。

注：この手順では、共有フォルダーがAppDNAマシン上にあることを前提とします。共有フォルダーが別のマシン上にある場合は（ネットワーク共有など）、それに従って手順を調整してください。

仮想マシンで仮想ネットワークアダプターが正しく動作していることを確認します。これを行うには、仮想マシンでコマンドプロンプトを開いて次のコマンドを入力します。

```
ping <仮想マシンのIPアドレス>
```

アダプターが正しく動作している場合は、次のようなping応答が表示されます。

```
Reply from 192.168.50.21: bytes=32 time<1ms TTL=128
```

ping応答が表示されない場合は、仮想マシンでの仮想マシンネットワークの構成手順を繰り返してください。

仮想ネットワークをテストするには、仮想マシンのコマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。

```
ping
```

仮想ネットワークが正しく動作している場合は、Virtual Serverホストからの次のようなping応答が表示されます。

```
Reply from 192.168.50.20: bytes=32 time<1ms TTL=128
```

ping応答が表示されない場合は、AppDNAマシンまたは仮想マシン上のファイアウォールでICMPトラフィックへのアクセスが制限されていないかどうかを確認し、制限されている場合は修正します。

仮想マシンからAppDNAマシンの共有フォルダーを参照できることをテストするには、仮想マシンのコマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。

```
net view \\  
\\
```

共有フォルダーが表示されるはずですが、そうでない場合は、仮想マシンまたはAppDNAマシン上のファイアウォールでSMB/CIFSトラフィックへのアクセスが制限されているか、仮想マシンにログオンしているユーザーに必要な特権がないことを意味します。必要であれば、問題を修正します。

仮想マシンのコマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。

```
dir \\  
\\<共有フォルダー>
```

共有フォルダー内のファイルの一覧が表示されるはずですが、そうでない場合は、仮想マシンまたはAppDNAマシン上のファイアウォールでSMB/CIFSトラフィックへのアクセスが制限されているか、仮想マシンにログオンしているユーザーに必要な特権がないことを意味します。必要であれば、問題を修正します。

仮想マシンから、AppDNAマシン上の共有フォルダーにアクセスできることを確認します。たとえば、Windowsの[スタート]、[ファイル名を指定して実行]の順に選択し、次のコマンドを実行します。

\\\\<共有フォルダー>

AppDNAマシン上の共有フォルダーが開いたら、仮想マシンからアクセスできると確認できたことになります。

Forward Pathスクリプト

Oct 16, 2015

このエラーは、Forward Pathスクリプトで渡されるファイルパスに仮想マシンからアクセスできないことを示します。通常、このパスは、次の置き換え可能パラメーターで指定します。`$(App:InstallWrkDir)`置き換え可能パラメーター

Active DirectoryまたはConfigMgrからインポートした管理対象アプリケーションに対してForward Pathを使用してInstall Captureタスクを実行すると、インストールメディアへのパスが無効になっている場合、インストールが開始されません。たとえば、別の場所からAppDNAに既にインポートしているアプリケーションに管理対象アプリケーションをリンクした場合などにこの状況が発生します。

これを解決するには、インストールに対するパスをタスクスクリプトで次のように再度マップします。

```
Dim ImportedSourcePath As String = controller.Application.SourcePath Dim WantedSourcePath As String = ImportedSourcePath.Replace ("\\Server\Share\Folder", "\\NewServer\NewShare\NewFolder")
```

用語集

Oct 16, 2015

アクションRAG

定義された修復アクションを実行した後の、アプリケーションのRAG (赤、黄、緑) 状態です。たとえば、標準RAGが黄色で修復オプションがある場合は、通常、アクションRAGは緑になります。ただし、標準RAGが赤で修復オプションがアプリケーションの再開のみである場合は、アクションRAGも赤になり、複雑な開発および/または置き換えが必要であることを示します。アクションRAGは、アクション後RAGまたは修復RAGとも呼ばれます。

Active Directory

Microsoftのディレクトリサービスで、ネットワーク管理、ネットワーク上のリソースに対するユーザーアクセスのセキュリティとシングルサインオン、アプリケーションデータに対するアクセスの標準化、アプリケーションの展開と更新、およびサーバー間のディレクトリ更新の同期を集中管理できます。すべての情報と展開設定が中央データベースに格納されます。

Action View

ポートフォリオ内のアプリケーションを修復するために必要なアクション内容の内訳が提供されるレポートビューです。

アルゴリズム

AppDNAではアルゴリズムを使用して、さまざまな対象プラットフォームおよび仮想化環境におけるアプリケーションの適合性、相互運用性、競合、およびパフォーマンスを検証します。アルゴリズムは固定規則に基づく手法よりも発見的であり、(Windows 7のような)対象の技術に関連するレポートにグループ化されています。各アルゴリズムは、対象プラットフォームで特定の問題を引き起こす可能性のあるアプリケーションを特定するように設計されています。この問題を持つと特定されるアプリケーションは、アルゴリズムをトリガーするといわれます。アルゴリズムは規則と呼ばれるときもあります。

アプリケーションDNA

ファイル、レジストリキー、およびファイルヘッダーから抽出されたテキストベースの情報などの、アプリケーションの構成要素に関するメタデータです。AppDNAではこの情報を使用して、対象のプラットフォームでのアプリケーションの動作を予測します。

アプリケーションレポートビュー

2つのバージョンがあるレポートビューで、レポートに含まれる各アプリケーションの詳細な修復レポートに、両方のバージョンからアクセスできます。Application Issuesでは、レポートに含まれるアプリケーションの標準およびカスタムのRAG状態の概要が提供され、各アプリケーションが各アルゴリズムグループのアルゴリズムをトリガーした回数が表示されます。Application Actionsでは、レポートに含まれるアプリケーションの標準およびアクション後のRAG状態と修復に必要なアクションの概要が提供されます。

クライアント指示ファイル

セルフプロビジョニングクライアントがキャプチャまたはパッケージ化タスクを実行するために使用する制御ファイルです。クライアント指示ファイルは、エンドユーザーが対象の人間が読める指示ではありません。

複雑度RAG

アプリケーションの複雑度を示すインジケータです。アプリケーションの持つファイルとレジストリエントリの数に基づきます。3つの複雑度レベル (単純、標準、複雑) のしきい値を [Reporting Settings] で設定できます。通常、アプリケーションの複雑度RAGは円で表されます。1つの円は単純なアプリケーション、2つの円は標準のアプリケーション、3つの円は複雑なアプリケーションを表します。

カスタムRAG

アプリケーションの標準RAG状態は、レポートに組み込まれているアルゴリズムによって決定されます。ただし、たとえば組織固有のニーズに応じて、黄色状態を赤に上げたり、緑に下げたりする必要がある場合があります。 [Algorithm Groups] 画面で、各アルゴリズムのカスタムRAGを設定できます。デフォルトでは、カスタムRAGは標準RAGと同じです。

Custom Report Manager

既存のアルゴリズムまたは独自に定義する新しいアルゴリズムに基づいて、新しいレポート、アルゴリズム、およびアルゴリ

ズームグループを作成できます。

直接インポート

.msi、.sft、または.appvファイルを使用できる場合に、WindowsアプリケーションをAppDNAにインポートする方法です。これは、アプリケーションDNAをデータベースにインポートする、最も時間がかからない方法です。

検出済みのアプリケーション

組織全体で、SysTrackによって使用状況を追跡しているアプリケーションです。検出済みのアプリケーションは、[Discover Applications] 画面に一覧表示されます。

Effort Calculator

アプリケーションのポートフォリオを新しいプラットフォームに移行するために必要な時間、費用、および作業を見積もります。

Estate View

対象の技術に対するアプリケーションポートフォリオの状態の概要を提供する、試用版ライセンスでのみ利用できるレポートビューです。

実行プロファイル

Install Captureの実行中に仮想マシンで実行されるタスクとリソースを制御します。デフォルトの実行プロファイルには3つの段階が定義されています。まず仮想マシンの（ファイルシステムとレジストリ全体を含めた）状態が分析され、次にアプリケーションがインストールされ、最後に仮想マシンの状態が再度分析されます。インストールの前後の仮想マシンの状態の違いは、アプリケーションのインストールにより加えられた変更を表します。実行プロファイルは、セルフプロビジョニングも同様の方法で使用されます。

外部データ

AppDNAの外部に由来する、互換性と修復に関するデータです。たとえば、MicrosoftはWindows 7で動作すると判明しているアプリケーションの情報と、プログラム互換性アシスタント（PCA）データベースを提供しています。

フィンガープリント

アプリケーションの製品名、製造元、バージョン番号、およびファイルとレジストリエントリの数を組み合わせたものです。AppDNAにWindowsアプリケーションを初めてインポートすると、そのフィンガープリントが格納されます。AppDNAにそのアプリケーションを再インポートするとき、フィンガープリントが同じか変化が10%以下である場合は、同じアプリケーションであるとデフォルトでみなされます。ただし、この動作は上書きできます。

Forward Path

さまざまな展開シナリオをモデル化してその影響を簡単に比較できるビジネス決定エンジンです。

グループ

AppDNA内のアプリケーションの論理的なコンテナです。グループはWindowsエクスプローラーのフォルダーと似ています。たとえばユーザーグループ、場所、またはアプリケーションの種類別に、アプリケーションポートフォリオを組み立てられます。ポートフォリオ内の残りのアプリケーションとは別に、グループ内のアプリケーションを簡単に確認したりレポートを作成したりできます。グループに全体的な1つのRAG状態は割り当てられず、レポートに個別の項目としては表示されません。

import

アプリケーションおよびOSイメージのDNAをAppDNAデータベースにロードする処理です。

Install Capture

.msi、.sft、または.appvファイルが使用できない場合に、WindowsアプリケーションをAppDNAにインポートする処理です。Install Captureで仮想マシンにアプリケーションをインストールし、MSIファイルを作成します。このMSIファイルをAppDNAにインポートします。通常、作成されるMSIはAppDNAにインポートするためにアプリケーションDNAを単にキャプチャしたものであり、アプリケーションの実際のインストールには不適切です。必要な追加ソフトウェアを使用して、App-VシーケンスまたはXenAppパッケージをキャプチャ処理で作成できます。

統合ログオン

AppDNAユーザーがそのWindowsユーザーアカウントの資格情報を使用して自動的にAppDNAにログオンできるようにする、

オプションの機能です。つまり、ログオン画面が省略され、ユーザーはユーザー名とパスワードを入力する必要がありません。

Issue View

レポート内の各アルゴリズムをトリガーしたアプリケーションの数の内訳を提供するレポートビューです。

管理対象アプリケーション

Active DirectoryまたはConfiguration Managerで展開されるアプリケーションです。

モジュール

Windowsクライアントまたはサーバーのような、特定の状況に合わせたレポートのコレクションです。レポートは、Windows 8やWindows Server 2012などの対象技術に関連するアルゴリズム群から構成されています。これらの対象技術に対して、アプリケーションDNAを評価します。アルゴリズムはアルゴリズムグループに編成されています。

MSIファイル

Windowsアプリケーションのインストールパッケージファイルです。MSIファイルには、アプリケーションのファイルとレジストリエントリに関するテキスト情報のリレーショナルデータベースが含まれています。MSIファイルの中にはアプリケーションのバイナリファイルを含むものもあり、それらのバイナリファイルは圧縮され別のCABファイルにパッケージ化されていることも、圧縮されずパッケージ化されていないこともあります。

MSTファイル

MSIファイルと共に使用してインストールパッケージを変換、つまり操作するためのファイルです。MSTファイルは、MSIではないインストールファイルには無関係です。

MST修正

AppDNAでMSTファイルを配布する方法です。MSTファイルには、問題を解決するためにMSIファイルのインストール時に適用する修整が含まれています。

Non-MSIファイル

Windowsアプリケーションの、MSIファイルの形式ではないインストールファイルです。通常、MSIではないファイルはEXE形式で、1つ以上のMSIファイルを含むものもあります。

RAG

アプリケーションの状態が赤、黄、緑のどれかであることを指します。緑は、（対処すべき問題が生じる可能性があっても）アプリケーションが対象のプラットフォームで現状のままで機能すると予想され、ユーザー承認テストの準備ができていることを意味します。黄色は、修復を実行できますが、アプリケーションが機能しない、または一部の機能が動作しない可能性があることを意味します。赤は、アプリケーションが機能しないことが予想される、または機能しないことが確実であることを意味します。一部のレポートビューではアクション後RAG（修復RAG）も提供されます。これは定義済みのすべての修復アクションを実行した後のRAG状態を示します。

修復レポートビュー

個々のアプリケーションの詳細な修復情報を提供するレポートビューです。当てはまる場合は、MST修復オプションも表示されます。Remediation IssuesとRemediation Actionsの2つのビューがあります。AppDNAの指向スパイダーでキャプチャされたWebアプリケーションには、追加のSite Mapビューがあります。

Remote Admin

仮想マシンで発生する処理（Install Captureなど）の間、仮想マシン内で動作するAppDNAエージェントです。Remote Adminにより、AppDNAと仮想マシンの間の通信がサポートされます。

置き換え可能パラメーター

実行プロファイル内のプレースホルダーで、実行時に提供される値により置き換えられます。

レポート

レポートには、特定のプラットフォームまたは技術に対する互換性の問題がアプリケーションにないかどうかを判定するためにAppDNAで実行される分析をまとめたアルゴリズムが組み込まれています。結果は、Application Issues、Application Actions、Issue View、Action View、詳細な修復レポートビューなど、さまざまなレポートビューで表示できます。試用版ライセンスでは、検証用の環境に役立つ概要ビューであるEstate Viewも提供されます。

シナリオ

Forward Pathレポートのロジックを定義するスクリプトです。ロジックはレポート対象として選択される各アプリケーションに適用されます。レポートにはアプリケーション名、製造元、バージョン、およびインポート元のパスの列が含まれます。また、シナリオロジックにより、[Outcome] 列と、オプションで [Cost] 列、[RAG] 列、および [Description] 列、さらに最大で20個のカスタム列について値が提供されます。ロジックでカスタム列にRAG値を指定する場合は、レポートを実行するとその列の結果の円グラフが自動的に生成されます。

セルフプロビジョニング

AppDNAにインポートするためにデスクトップアプリケーションをキャプチャするための代替メカニズムで、使用できる実行プロファイルに応じて、App-VまたはXenApp用にアプリケーションをパッケージ化します。キャプチャとパッケージ化は、AppDNAとは別のマシンで行います。マシンの種類は、仮想、物理、またはVDIのどれでも構いません。セルフプロビジョニングを使用して、エンドユーザーにアプリケーションのキャプチャとパッケージ化を委任できます。

SFTファイル

App-Vアプリケーションの最大かつ最も重要なファイルです。ファイルとレジストリエントリをはじめとする、アプリケーションのすべての資産が含まれます。App-V 5.0では、.sftファイルはもうありません。.appvパッケージに置き換えられました。

shim

一般的なコンピューター用語で、従来のアプリケーションが依存する機能が廃止された後で、アプリケーションを動作させることができる実行可能コードの小さなファイルを指します。shimは永久的な解決策ではなく、廃止された機能を使用しないバージョンにアプリケーションを更新するまでの、一時的な解決策として意図されるものです。

サイト

名前付きのデータベースとAppDNA Webサイトを組み合わせたものです。AppDNAにログオンするときに、使用するサイトを指定します。次に、AppDNAでそのサイトを使用して、指定したAppDNA WebサイトとデータベースにAppDNAクライアントを接続します。ログオンした後は、AppDNAメイン画面の左下にある [Switch Site] ポップアップリストでサイト（およびデータベース）を切り替えられます。複数のデータベースを使用できるため、たとえばWebアプリケーションをデスクトップアプリケーションと分けてテストする場合に便利です。複数のデータベースを使用できるのは、同時に複数の顧客のアプリケーションポートフォリオをテストする必要があるシステムインテグレーターにとっても便利です。

スパイダー

Webページを自動的にクロールし、リンク先にアクセスし、アクセスしたすべてのページのコピーを作成するプログラムです。

標準RAG

レポートに組み込まれているアルゴリズムによって判定される、アプリケーションのRAG（赤、黄、緑）状態です。

System Center Configuration Manager

大きなグループのWindowsベースのコンピューターシステムを管理するための、Microsoftのシステム管理ツールです。Configuration Managerにより、リモート制御、パッチ管理、ソフトウェアの配布、オペレーティングシステムの展開、ネットワークアクセス保護、およびハードウェアとソフトウェアのインベントリが提供されます。Active Directoryのように、すべての情報と展開設定が中央データベースに格納されます。

SysTrack

Lakeside SoftwareのITビジネスインテリジェンス製品群です。SysTrackには、エンタープライズ内のアプリケーションの使用状況を監査し追跡する機能が搭載されています。AppDNAではこの追跡結果を [Discover Applications] 画面で使用します。

タスクスクリプト

Forward Pathシナリオで生成される [Outcome] 列の値に対して実行するアクションを定義するスクリプトです。たとえば、アプリケーションの仮想化シナリオによってアプリケーションのRAG状態が緑と判定された場合は、すぐにテストするために、タスクスクリプトによってApp-V Sequencerでそのアプリケーションが自動的にシーケンス処理され、シーケンスがテスト環境に公開されます。

仮想マシン構成

Install Captureを起動し、仮想マシンと通信し、生成出力を取得できる構成設定のコレクションです。複数の仮想マシン構成を作成して異なる要件に対応できます。Install Captureを起動するときに、使用する構成を1つ選択します。